



大正元年十二月廿三日印刷
大正元年十二月廿六日發行

有朋堂文庫
水鏡、大鏡、増鏡（非賣品）

編輯兼發行者　三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者　平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

（岡山製本）

増鏡索引終

シ

サ

キ

ク

ケ

増鏡索引

（語句は凡て發音に從つて五十音順に排列し其假名遣に拘泥せず）

ア

イ、ヰ

ウ

大鏡索引 終

ワ

○和歌、詩

リ

レ

ロ

ム

モ

ス

セ

シ

サ

キ

イ、井

ウ

エ、ヱ

大鏡索引

（語句は凡て發音に從つて五十音順に排列し其假名遣に拘泥せず）

ア

水鏡索引終

ハ

ヒ

フ

セ

ソ

タ

水鏡索引

（語句は凡て發音に從つて五十音順に排列し其假名遣に拘泥せず）

ア

イ、井

父の大納言―宣房

もとより塵を云々―元より出家の心あるにあらず

法親王―護良親王

どふ。十三日大塔法親王都に入り給ふ。この月比に御ぐし生して、えもいはず淸らなる男になり給へり。唐の赤地の錦の御鎧直垂といふもの奉りて、御馬にて渡り給へば、御供にゆゝしげなる武士どもうち圍みて、帝の御供なりしにもほと／＼劣るまじかめり。速に將軍の宣旨をかうぶり給ひぬ。流されし人々ほどなく競ひ上るさま、枯れにし木草の春にあへる心地す。その中に季房宰相入道のみぞ、預なりけるものゝ情なき心ばへやありけん、東のひしめきのまぎれに失ひてければ、兄の中納言藤房は、歸り上れるにつけても、父の大納言母の尼上など歎き盡きせず、胸あかぬ心地してけり。四條中納言隆資といふも頭おろしたりし、また髮おふしぬ。もとより塵を出づるにはあらず、敵の爲に身を隱さんとて、假初に剃りしばかりなれば、今はた更に眉をひらく時になりて、男になれらん、何の憚かあらんとぞ、おなじ心なるどちいひあはせける。天台座主にていませし法親王だにかくおはしませば、まいてとぞ。誰にかありけん、その比聞きし。

　墨染の色をもかへつ月くさのうつればかはる花のころもに

増鏡　終

條道平の一家親族

うちつけ目ーふと見たる感情

議定ー論功行賞などの評議

るも、たとしへなく、今も御供の武士ども、ありしよりはなほ、幾重ともなくうち圍み奉れるは、いとむくつけきさまなれど、此度はうとましくも見えず、頼しくてめでたき御守護かな、と覺ゆるも、うちつけ目なるべし。世のならひ時につけてうつる心なれば、さぞあるらし。先陣は二條富小路の内裏に著かせ給ひぬれど、後陣の兵は猶東寺の門まで續きひかへたりしとぞ聞えしは、まことにやありけん。正成も仕うまつれり。かの名和又太郎は伯耆守になりて、それも衞府のものどもにうち交りたる、珍らしくさまかはりて搖り滿ちたる世の氣色、かくもありけるを、などあさましくは歎かせ奉りけるにか、とめでたきにつけても猶前の世のみゆかし。車などたち續きたるさま、ありし御くだりにはこよなく勝れり。物見ける人の中に、

　昔だにしづむうらみをおきの海に波たちかへる今ぞかしこき

昔の事など思ひ合するにやありけん。金剛山なりし東の武士どもも、さながら頭を垂れて參りきほふさま、漢のはじめもかくやと見えたり。禮成門院も又中宮と聞えさす。六日の夜やがて内裏へ入らせ給ふ。いにし年御ぐしおろしにき。御惱なほおこたらねば、いつしか五壇の御修法はじめらる。八日より議定行はせ給ふ。昔の人々殘りなく參りつ

そこら―數多
えさらぬ者―去るに去られぬ者
重祚―再び帝位に卽かせたまふ事
氏長者―一族の長
このひとつあたり―二

勢十萬餘騎、高時入道の一族、附き隨ふものそこら滿ちひろごりて、鎌倉始まりし賴朝の世、時政より今に至るまで多くの年月をつめり。僅なる新田などいふ國人に、たやすくいかでかは亡さるべきと覺えしに、程なく十五日に敵既に鎌倉に近づくよし聞えて、家々を毀ち騷ぎのゝしる。世の既に滅するにやと覺えしとぞ、人はかたり侍りし。四郎左近大夫入道軍にうち負けけるにや、隨ふ武士ども殘りなく新田が方へ附きぬれば、えさらぬ者どもばかり五六百騎にて、十六日の夜に入りて鎌倉へ引き歸る。僅に中一日にてかくなりぬる事夢かとぞ覺えし。かくて日々の軍にうち負けければ、同じき二十二日、高時以下腹切りてうせにけり。さて都には伯耆よりの還御とて、世の中ひしめく。まづ東寺へ入らせ給ひて事ども定めらる。二條の前の大臣召しありて參り給へり。此度內裏へ入らせ給ふべき儀、重祚などにてあるべけれども、璽の箱を御身にそへられたれば、只遠き行幸の還御の儀式にてあるべきよし定めらる。關白を置かるまじければ、二條の大臣氏長者を宣下せられて、都の事管領あるべきよし承る。天の下只この御計なるべしとて、このひとつあたり喜びあへり。六月六日東寺より常の行幸のさまにて、內裏へぞ入らせ給ひける。めでたしとも言の葉なし。去年の春いみじかりしはや、と思ひ出づ

き人―別當自身をいふ

一院―後伏見上皇

歸り入らせ給ふ御門―後醍醐天皇

にや、待ちうけて矢を放ち給ふ。又京よりも追手かゝるなど聞えければ、六波羅の北といひし仲時、内、春宮兩院具し奉り、番馬といふ所の山のうちに入れ奉りぬ。手のものどもも猶殘りて隨ひつきけれども、戰ひもかなはずやありけん、遂にこの山にて腹切りにけり。おなじき南時益と云ひしは、これまでも參らず、守山の邊にて失せにけりとぞ聞えし。あやなくいみじきことのさまなり。御所々々の御供には、俊實大納言、經顯中納言、賴定中納言、資名大納言、資明宰相、隆蔭などぞ殘りさぶらひける。俊實、資名、賴定などは、やがて其處にて髻切りてけり。一院は、歸り入らせたまふ御門に、御文をたてまつり給ひて、面々に御出家あるべしなどまで申されけれども、思ひも寄らぬよしをかたく申されけるとかや。伯耆の御所へは人々まゐりつどふ。上達部殿上人數しらず。さるほどに東にもかねて心しけるにや、高氏のすゑの一族なる、新田小四郎義貞といふものの、今の高氏の子、四になりけるを大將軍にして、武藏國より軍をおこしてけり。この比の東の將軍は、守邦親王にておはします。御後見仕うまつる高時入道、貞顯入道、城介入道圓明、長崎入道圓基などいふものども驚き騷ぎて、高時入道、弟に四郎左近大夫泰家といひし、今は入道したるをぞ大將に下しける。五月十四日鎌倉を立ちて向ふ。その

しろく—著しく

道の程のわりなさに—道中非常に危險なるが故に

細やかに若

て、人に扶けられつゝ出でさせ給ふ。上達部大臣たち、袴のそばとりて、冠などの落ちゆくも知らず、空をあゆむ心地して、あるは河原を西へ東へ樣々散々になりたまふ。兩六波羅東をさして、東へと心がけて落ちければ、御幸もおなじさまになる。西園寺大納言公宗は北山へおはしにけり。右衞門督經顯、左兵衞督隆蔭、資明宰相などは御幸の御供に參る。按察大納言資名は足をそこなひて、東山わたりに留まりぬなど言ひしは、いかゞありけん。內大臣殿は御子の別當通冬を伴ひ給ひて、八日のあけぼのの未だ暗き程に、我が御家の三條坊門萬里小路におはしまし著きたるに、歩み入り給ふ程も心もとなくて、北方門へ走り出でて、平に歸りおはしたる、と思ふうれしさに、急ぎて見れば、大臣は御直衣に指貫ひきあげ給へれば、しるく見え給ふ。別當は、道の程のわりなさに、折烏帽子に布直垂といふ物うち著て、細やかに若き人の、御前どもに紛れたれば、頓にも見えず。火などもわざと無ければ、暗きほどの黑白わかれぬに、はやういかにもなり給へるにや、と心地まどひて、北方はいかに〳〵、と聲もわなゝきて聞えける、いと理にいみじう哀れなり。さて御幸は近江國におはします程に、伊吹といふ邊にて、なにがしの宮とかや法師にていましけるが、先帝の御心よせにて、かやうの方もほの心え侍りける

釋の居る處

來し方行くさきくれて—前後不覺にて

いとまがまがし—甚だ忌々しく不祥の事なり

ど、まして一人さかしきもおはしまさず、絲竹のしらべをのみ聞し召しならひたる御心どもに、めづらかに疎ましければ、たゞあきれ給へり。武士ども半は、金剛山へむかひたれば、さならぬ殘り都にあるかぎりは戰をなす。今をかぎりの軍なれば、手をつくしてのゝしる程まねびやらん方なし。雨の脚よりも繁く走りちがふ、矢にあたりて目の前に死をうくるもの數を知らず。一日一夜いりもみどよみ明かす。兩六波羅のころてなく防ぎつれど、遂に陣の中破られて、今はかくと見えたり。日比さぶらひ籠り給へる上達部殿上人なども、今日と思ひ設けたらんだに、君のおはしまさん限りはいかでか罷出も散らん、ましてかねてよりかく構へけるをも知しめさで、昨日かとよ當代の宣旨を賜りしものゝ、かくうらがへりぬれば、誰か思ひ寄らん、すべて上下となく、一つに立ち込みてあわて惑ひたり。日暮し、八幡、山崎、竹田、宇治、勢多、深草、法性寺など燃えあがる煙ども、四方の空にみち〳〵て、日の光も見えず、墨を磨りたるやうにて暮れぬ。こゝにも火かゝりていとあさましければ、いみじう固めたりつる後の陣を辛うじて破りて、それより免れて出でさせ給ふ、御心地ども夢路を辿るやうなり。内のうへも、いとあやしき御姿にことさらやつし奉る、いとまが〳〵し。兩院も御手を取かはすと云ふばかりに

梵天の宮―三十三天の中宮にて帝

も暮れぬ。卯月の十日餘、又東よりものゝふ多く上る中に、一昨年笠置へも向ひたりし治部大輔源高氏のぼれり。院にも頼もしく聞しめして、かの伯耆の船上へ向ふべきよし院宣たまはせけり。東を立ちし時も後めたく二心あるまじきよし、愚ならず誓言文を書きてけれども、底の心やいかゞあらん、とかく聞ゆるすぢもありけり。この高氏は、古への頼義朝臣の名殘なりければ、もとの根ざしはやんごとなき武士なれど、承久よりこのかた頭さし出す源氏もなくて、埋れ過しながら、類ひろく勢四方にみちて、國々に心よせのもの多かれば、かやうに國の危き折をえて、思ひたつ道もやあらんなど、下にささめくもしるく、伯耆國へ向ふべしといひなして、まづ西山大原わたりに一とまりして、五月七日ほの〴〵と明くる程より、大宮の木戸どもを押開きて、二條よりしも、七條の大路を東ざまに、七手に別れて旗をさし續けて、六波羅をさして雲霞の如くたなびき入るに、更におもてをむかふるものなし。この治部大輔はやうより先帝の勅を承りてければ、さかさまに都を亡ぼさんとするなりけり。鬨つくるとかやいふ聲は、雷の落ちかゝる樣に、地の底もひゞき、梵天の宮の中も聞き驚き給ふらん、と思ふばかり、動みあひたるさま、來しかた行くさきくれて、物覺ゆる人もなし。御門、春宮、院のうへ、宮たちな

―恐しく厭はしく
京―六波羅
きびは―幼稚
後めたがりて―不安心に思ひて
臂も折りぬべき―白氏文集に「新豐折臂翁」の詩あり兵役を免れんが爲に自ら臂を折りたる者の述懷の樣に作れり

しにけり。京にも東にも、驚き騷ぐさま思ひやるべし。正成が城の圍みに、そこらの武士どもかしこに集ひをるに、かゝる事さへ添ひにたれば、いよ〳〵東よりも上り集ふめり。

三月にもなりぬ。十日あまりのほど、俄に世の中いみじうのゝしる。何ぞと聞けば、播磨國より赤松なにがし入道圓心とかやいふもの、先帝の勅に從ひて攻め來るなりとて、都の中あわてまどふ。例の六波羅へ行幸なり、兩院も御幸とて上下たち騷ぐ。馬車走りちがひ、武士どものうち込みのゝしりたるさま、いと恐し。されど六波羅の軍強くて、その夜は彼の者ども引き返しぬとて、少し靜まれるやうなれど、かやうにいひ立ちぬれば、猶心ゆるびなきにや、そのまゝ院も帝もおはしませば、春宮も、離れ給へるよろしからぬ事とて、二十六日六波羅へ行啓なる。内大臣御車にまゐりたまふ。傅は久我右大臣にいますれど、大かたの儀式ばかりにて、よろづこの内大臣殿御後見仕り給へば、いまだきびはなる御程を後めたがりて、宿直にもやがて候ひ給ふ。御修法のために法親王たちも候はせ給へり。こゝもかしこも軍とのみ聞えて日數經るに、院よりの仰せとて、上達部殿上人までも、ほど〳〵に隨ひてつはものを召せば、弓ひく道もおぼ〳〵しき若侍などをさへぞ奉りける。げに臂も折りぬべき世の中なり。かやうにいひしろふ程に三月

るべき時の到れるにや、御垣守にさぶらふ兵どもも、御氣色をほの心えて靡き仕うまつらん、と思ふ心つきにければ、さるべき限り語らひ合せて、同じ月の二十四日の曙に、いみじくたばかりて隱ろへ率てまつる。いとあやしげなる蜑の釣船のさまに見せて、夜深き空の暗きまぎれにおし出だす。折しも霧いみじうふりて、行くさきも見えず、いかさまならんと危けれど、御心を靜めて念じ給ふに、思ふ方の風さへ吹きすゝみて、その日の申時に出雲國に著かせ給ひぬ。こゝにてぞ人々心地しづめける。同じ二十五日伯耆國稻津浦といふ所へ遷らせたまへり。この國に名和又太郎長年といひて、あやしき民なれどいと猛に富めるが、類ひろく心もさか〱しく、むね〱しきものあり。彼がもとへ宣旨を遣したるに、いと忝しと思ひて、とり敢へず五百餘騎の勢にて御迎に參れり。又の日、賀茂社といふ所にたち入らせたまふ。都の御社思し出でられていと頼もし。それより船上寺といふ所へおはしまさせて、九重の宮になずらふ。これよりぞ國々のつはものどもに、御敵を亡すべきよしの宣旨遣はされ、比叡の山へものほせられけり。かくて隱岐には、出でさせ給ひにし晝つ方より騒ぎあひて、隱岐の前の守追ひて參るよし聞ゆれば、いとむくつけく思されつれど、こゝにもその心していみじう戰ひければ、引き返

かのしほぢが云々―源氏物語明石巻に見えたる事

類ひろく―一族も多く

むね〱しき―重立ちたる

むくつけく

第二十　月草の花

○この巻は元弘三年後醍醐天皇隠岐をのがれさせ給ひて京師に還幸あらせらるるまで

さめざらましを―「思ひつゝぬればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを」小町

かの島には、春來ても猶浦風冴えて浪荒く、渚の氷も解けがたき世のけしきに、いとゞ思し結ぼるる事つきせず、かすかに心細き御住居に、年さへ隔りぬるよとあさましう思さる。候ふ人々もしばしこそあれ、いみじく屈じにたり。今年は正慶二年といふ、閏二月あり。後の二月の初めつ方より、とりわきて密教の祕法を試みさせ給へば、夜も大殿ごもらぬ日數へて、さすがにいたう困じ給ひにけり。心ならずまどろませ給へる曉方、夢現ともわかぬ程に、後宇多院、ありしながらの御面影さやかに見え給ひて、聞え知らせ給ふこと多かりけり。うち驚きて夢なりけりと思すほど、いはん方なく名殘かなし。御涙もせきあへず、さめざらましを、とおほすもかひなし。源氏の大將須磨浦にて父御門見奉りけん、夢の心地し給ふも、いとあはれに賴もしう、いよ〳〵御心強さまさりて、かのしほぢが御むかへのやうなる釣船も、たより出で來なんや、と待たるゝ心地し給ふに、大塔宮よりも海人のたよりにつけて聞え給ふ事絶えず。都にも猶世の中しづまりかねたるさまに聞ゆれば、よろづに思し慰めて、關守のうち寢るひまをのみ窺ひ給ふに、しか

后がね—皇后の候補者

の人いひ騷ぐめりしに、その子この比院執權にて資名といふ、また大納言になりぬ。めでたく度をさへ重ねぬる、いといみじかめり。さきの御代にも定房一品し、宣房大納言になされなどせしをば、かうさまにぞ人思ひいふめりし。内には女御もいまだ候ひ給はぬに、西園寺の故内大臣殿の姫君、廣義門院の御傍に、今御方とかや聞えてかしづかれ給ふを、參らせ奉り給へれば、これや后がねと世人もまだきにめでたく思へれど、いかなるにか御おぼえいとあざやかならぬぞ口惜しき。三條前大納言公秀の女、三條とてさぶらはるゝ御腹にぞ、宮々あまた出でものし給ひぬる。つひの儲君にてこそおはしますめれ。

舞姫の事始まる、大嘗會につきてなり

高御座の行幸—天皇式場の玉座に卽き給ふ行幸

さりぬべき隈々には云云—然るべきかくれ處を索めたまひてよく出沒し給ひて

臣兼季も太政大臣になりて、清暑堂の神樂に、琵琶仕うまつりなど聞えて、よろづめでたくあらまほしくて年も暮れぬ。まことやこの卯月の比より、年の名かはりしぞかし、正慶とぞいふなる。大塔法親王楠木正成などは猶同じ心にて、世を傾けん謀をのみめぐらすべし。正成は、金剛山千早といふ所にいかめしき城をこしらへて、えもいはず猛きものども多く籠り居たり。さて大塔宮の令旨とて、國々の兵をかたらひければ、世に恨ある者など、こゝかしこに隱ろへばみてをるかぎりはあつまり集ひけり。宮は熊野にもおはしましけるが、大峯を傳ひて吉野にも高野にもおはしまし通ひつゝ、さりぬべき隈々には、よく紛れものし給ひて、たけき御ありさまをのみ顯し給へば、いとかしこき大將軍にていますべしとて、附き隨ひ聞ゆるもの、いと多くなり行きければ、六波羅にも東にも、いと安からぬ事ともてさわぎて、まづかの千早を攻め崩すべしと云へば、つはものなど上り重なると聞ゆ。正成は聖德太子の御墓の前を軍のそのにして、出で合ひ驅けひき。寄せつ返しつ潮のみちひく如くにて、年はたゞ暮れに暮れ果てぬれば、春になりて事どもあるべしなどいひしろふも、いとむづかしう心ゆるびなき世のありさまなり。さても日野大納言俊光といひしは、文保の比始めて大納言になりにしを、いみじき事に時

いかばかりの道ならば―家傳の筆道の左程に尊き道ならばこそ都に歸りもせめ斯迄名殘を惜ませ給ふを見棄奉りて憂き故郷に歸るべきにあらず

後夜―夜半より二時まで

御行―佛前の御勤

五節はじまる―五節の

ふなる事はいかゞあらんとすらん。さもあらばいとこそ羨しからめ、とうち仰せられて、火をつく〴〵とながめさせ給へる御まみの、忍ぶとすれどいたうしぐれさせ給へるを見奉るに、中將も心强からずいと悲し。いかばかりの道ならば、かゝる御有樣を見おき聞えながら、うきふる里にはいで歸らんと思ふも、え聞えやらず。後夜の御行にさながらおはしませば、汐風いと高う吹きくるに、霰の音さへ堪へ難く聞えて、いみじう寒き夜の氷をうち叩きて閼伽奉るも、山寺の小法師ばらなどの心地ぞするや。少將この中將など樒折りて參れるも、何時ならひてかと哀に御覽ぜらる。今一度いかで世を御心にまかするわざもがな、と人の心のけぢめわかるゝにつけても、深う思しまさる事のみ數しらず。都には十月二十五日御禊の行幸なり。女御代には、大炊御門大納言冬信の女出さると聞ゆ。十一月十一日より五節はじまる。前の御代には談天門院の御忌月にてとまりにしかば、さう〴〵しかりしに、珍らしくて若き上人どもなど心ことに思へり。隱岐の御門の御乳母なりし吉田一品定房も當代に仕へて、五節など奉る心のうちぞ哀におしはからるゝ。宣房大納言も、さるべき雜務のことなどには出で仕へけり。春宮大夫は内大臣になりて、大嘗會の時も高御座の行幸に、前行とかやいふ事などつとめたまふ。右大

浦ごく船の—須磨のあまの浦こぐ船の楫をたえよるべなき身ぞ悲しかりける（小町）ねび給ひたれど—年たけ給ひたれど

御精進にて、朝夕勤め行はせたまふ。法のしるしをも試がてら、とかつは思すなるべし。自ら護摩なども焚かせ給ふに、いと頼もしき御事夢にも現にも多くなんありける。つれづれに思さるゝ折々は、廊めく所に立ち出でさせ給ひて、遙に浦のかたを御覽じやるに、あまの釣船ほのかに見えて、秋の木の葉の浮べる心地するも、あはれにいづくをさしてかと思さる。

心ざすかたをとはばや浪のうへにうきてただよふあまの釣船

浦こぐ船の楫を絶え、とうち誦じて、御涙のこぼるゝを何となく紛はし給へる、いふよしなく心深げなり。ねび給ひにたれど、なまめかしうをかしき御さまなれば、所につけてはましてやんごとなきあたらしさを、自らいと忝しと思さる。京には十月になりて、御禊大嘗會などのいそぎに、天下物さわがしう、内藏寮、内匠寮、うち殿、染殿、何くれの道々につけて、かしがましうひゞきあひたるも、片つ方は涙の催しなり。悠紀主基の御屏風の歌、人々に召さる。書くべきものゝなければ、かしこへ參れる行房中將をや召しかへされましなどさゝめき給ふを、まだきに傳へ聞しめしければ、宵の間のしづかなるに、御前にことに人もなく、この朝臣ばかりさぶらひて、昔今の御物語の序に、都にい

四大—地水火風、肉體のこと
五蘊—色受想行識、蘊は積聚の義、此の五の者積聚して人身と成る

たち入りぬる。萬里小路中納言藤房は、常陸國につかはさる。父の大納言母おもとなど、老の末に引き別るゝ心地ども、いへばさらなり。身にかへて求めまほしう思へどかひなし。弟の季房宰相も頭おろしたりしかど、猶下野國へ流さる。平宰相成輔は東へと聞えしかど、それも駿河國とかやにてぞ失はれける。又元亨亂のはじめに流されし資朝中納言をも、未だ佐渡島に沈みつるを、此程のついでにかしこにて失ふべきよし、あづかりの武士に仰せければ、この由を知らせけるに、思ひ設けたるよしいひて、都にとゞめける子の許に、哀なる文かきてあづけけり。既に斬られけるときの頌とぞ聞き侍りし。

四大本無主。五蘊本來空。將頭傾白刃。但如鑽夏風。

いと哀にぞ侍りける。俊基も同じやうにぞ聞えし。かくのみ皆樣々に罪にあたり、遠き世界にはなち捨てらるゝ、各思ひ歎けども筆にも及び難し。大塔尊雲法親王ばかりは、虎の口を遁れたる御さまにて、こゝかしこさすらへおはしますも安き空なく、いかで過しはつべき御身ならん、と心苦しく見えたり。隱岐の小島には月日經るまゝに、いと忍びがたう思さるゝ事のみぞ數添ひける。いかばかりの怠にてかゝるうきめを見るらん、と前の世のみつらく思し知らるゝにも、いかでその罪をも報いてんと思して、打ちたえて

すゞしき方―極樂淨土

かの事―斬らるゝ事

さてもあづまの云々―鎌倉幕府の末路や如何ならむ

くの島守となれらんもあぢきなく、たれも千年の松ならぬ世に、なか〳〵心づくしこそまさらめ。遂に遁るまじき道は、とてもかくてもおなじ事、そのきはの心亂れなくだにあらば、すゞしき方にも赴きなん、とおもふ心は心として、都の方も戀しうあはれにさすがなる事ぞ多かりける。よろづにつけて事の氣色を見るに、行末(ゆくすゑ)遠くはあるまじかめり、とさとりぬ。あづかりがほのめかしくも、情ありて思ひ知らすれば、同じうはと思ひて、又の日頭おろさんとなん思ふ、といへば、いとあはれなる事にこそ、東の聞(きこえ)やいかゞ、と思ひ給ふれど、なんでふことかは、とてゆるしつ。かくいふは六月(みなつき)の十九日なり。かの事は今日なめり、と氣色見知りぬ。思ひまうけながらも、猶ためしなかりける報いのほど、いかゞ淺くはおぼえん。

　消えかゝる露の命のはては見つさてもあづまの末ぞゆかしき

猶(なほ)も思(おも)ふ心(こゝろ)のあるなめり、と憎き口つきなりかし。その日の暮つかた、終にそこにて失(うしな)はれにけり。今はのきはもさこそ心の中はありけめど、いたく人わろうもなく、あるべき事ども思へるさまになん見えける。内侍の待ち聞く心地いかばかりかはありけん。やがてさまかへて近江國(あふみのくに)高島といふわたりに、昔のゆかりの人々、尊(たふと)く行ひて住む寺にぞ

御身一つにしも云々—外に同罪の人も多き由なり

まほならねど云々—表向には言はねど斬り奉るべき由をほのめかすなり

御心—具行の

何事も云々—後醍醐天皇の御器量の勝れ給へるをいふ

佐々木佐渡判官入道、伴ひてぞ下りける。逢坂の關にて、

かへるべき時しなければこれやこの行くをかぎりの逢坂の關

柏原といふ所に暫しやすらひて、あづかりの入道、まづ東へ人を遣したる返事待つなるべし。その程物語などなさけ〳〵しう、うちいひかはして、何事もしかるべき前世の報いに侍るべし。御身一つにしもあらぬ身なれば、ましてかひなきわざにこそ。かくたけき家に生れて、弓矢とるわざにかゝづらひ侍るのみ、うきものに侍りけれ、などまほならねどほのめかすに、心えはてられぬ。隱岐の御送りをも仕りしものなれば、御道すがらの事など語り出でて、忝ういみじうも侍りしかな。まして朝夕近う仕う奉りなれ給ひけん御心ども、さながらなん推し量り聞えさせ侍りき。何事も昔に及びめでたうおはしましゝ御事にて、世下り時衰へぬる末には、あまりたる御ありさまにや、かくもおはしますらんとさへせめては、思ひたまへよらるゝ、など大方の世につけてもげにと覺ゆるふしぶし加へて、のどやかにて、御酒など所につけてことそぎあらく〳〵しけれど、さる方にしなしてよきほどにて、くだしつる東よりの使歸り來たるけしき著けれど、ことさらにいひ出づる事もなし。いかならんと胸うち潰れて覺ゆるも、且はいと心弱しかし。いづ

人わろし—外聞わろし

なべてにやは—御門を始め奉りて人々も遠く遷されなど實にあさましき世の中につけて我が身の上をも一とほりならず歎き悲み居たりとなり

ものにもがなや—前に見えたり

今はとて命をかぎる別れ路はのちの世ならでいつをたのまん

源中納言具行も、おなじ比東へ率て行く。あまたの中にとりわきて重かるべく聞ゆるは、さまことなる罪にあたるべきにやあらん。内にさぶらひし勾當内侍は、經朝の三位の女なりき。早うより御門むつましく思しめして、姫宮など取出奉りしを、その後この中納言、いまだ下臈なりし時よりゆるし給はせて、この年比二つなきものに思ひかはして過しつるに、かくさま〴〵につけてあさましき世をなべてにやは。日にそへて歎き沈みながらも、同じ都にありと聞く程は、吹きかふ風のたよりにも、さすが言問ふ慰めもありつるを、遂にさるべき事とは、人のうへを見聞くにつけても思ひまうけながら、猶今はと聞く心地たとへんかたなし。この春君の都別れ給ひしに、そこら盡きぬと思ひし涙も、げに殘りありけり、と今一しほ身も流れ出でぬべく覺ゆ。中納言はものにもがなや、とくやしうはしたなき事のみぞ、底にはちゞに碎くめれど、めゝしう人に見えじと思ひかへしつゝ、つれなく作りて思ひ入りぬるさまなり。去年の冬の比あまた聞えし歌の中に、

存命へて身はいたづらに初霜の置く方知らぬ世にもふるかな

今ははや如何になりぬる憂身ぞと同じ世にだに問ふ人もなし

ゆり難きにや—赦免なりがたきにや

うへ—師賢の妻

はるくろ方なく—憂のはらし様なく

し。本院、新院、廣義門院、一品宮も忍びて入らせ給ふなどぞ聞えし。御車寄には、菊亭右大臣の御子實尹中納言參りたまへり。殿上人もよき家の君達ども色ゆりたる限り、いと淸らに好ましう出でたち仕れり。御隨身なども花を折れるさまなり。出車にいろ〳〵の藤、つゝじ、卯花、撫子、燕子花など、さま〴〵の袖口こぼれ出でたる、いと艶になまめかし。祭など過ぎて、世の中のどやかになりぬる程に、先帝の御供なりし上達部ども罪重きかぎり、遠き國々へ遣しけり。洞院按察大納言公敏、頭おろして忍び過されつるも、なほゆり難きにや、小山判官秀朝とかやいふ者、具して下野國へと聞ゆ。花山院大納言師賢は、千葉介貞胤うしろみにて下總國へ下る。五月十日餘に都出でられけり。思ひかけざりしありさまども、いみじともさらなり。

　別るともなにか嘆かん君すまで憂きふる里となれるみやこを

北方は、花山院入道右大臣家定の御女なり。その御腹にも、又異腹にも君達あまたおはすれど、それまでは流されず。上のいみじう思ひ歎き給へるさま、哀に悲しけれど、今は限の對面だにも許されねば、はるくる方なく口惜しう、よろづに思ひめぐらされて、いと人わろし。

院の御氣色たまはられけれど—後伏見院に爲定の御勘當をゆるされむことを乞ひ奉りしうけばりたる—專任の

この兄の爲定中納言も、前の御代にはおぼえはなやかにて、いと時めきしにひきかへ、しめやかにつれ〴〵と籠り居たれば、祖父の大納言爲世、度々院の御氣色たまはられけれど、いと不用なれば心もとなう思ひわびて、春宮大夫通顯の君して重ねて奏しける。

和歌の浦に八十あまりの夜の鶴の子を思ふ聲のなどか聞えぬ

大夫はうけばりたる傳奏などにてはいませざりけれど、この大納言歌の弟子にてさり難きうへ、事のさまも故あるわざなれば、直衣のふところに、引き入れて參り給へりけるに、院の上のどやかに出で居させ給ひて、世の御物語など仰せらる。折よくて思ひ歎くさまなど懇に語り申して、ありつる文ひき出でつゝ御氣色とり給ふ。大方いとなごやかにおはします君の、まいて何ばかり罪ある人ならねば、勘じ思すまではなけれど、いささかも武家よりとり申さぬことを、御心にまかせ給はぬに、かく滯るなるべし。いと不便にこそ、と宣はせて、やがて御かへし、

雲の上に聞えざらめや和歌の浦においぬる鶴の子をおもふ聲

今年は祭の御幸あるべければ、めづらしさに、人々常よりも物見車心づかひして、かねてより棧敷などもいみじう造れり。使どもも、いかで人に勝らんと互にいどみかはすべ

八になり給ふ―恒良親王。

宮の宣旨―冷泉中納言爲定の妹、事は春の別れの卷に見えたり

なま女房―上臈といふ程の身分ならぬ女房

もとの御後見をば改めて、西園寺大納言公宗の家にぞ渡し奉る。八になり給ふぞ御兄ならんかし。北山におはするほど、夕暮の空いと心すごう山風荒らかに吹きて、常よりも物悲しく覺されければ、

庭松緣老イテ秋風冷シ　園竹葉繁テ白雪埋ム

つくぐ\とながめくらして入相の鐘のおとにも君ぞ戀ひしき

幼き御心にもはかなくうちひそみ給へるいと哀なり。こゝもかしこも盡きせず思し歎くさま、いはずとも皆推し量るべし。宮の宣旨もいたう時めきて三位してき。その御腹の若宮は、花山院大納言師賢の御乳母にて、ことの外にかしづかれ給ひしも、この比はひき忍びておはします。母君も世のうさに堪へずさまかへて、心深くうち行ひつゝ、涙ばかりを友にて明し暮らすに、伯母の北方さへうせたりと聞きて、時々いひかはしけるなま女房のもとより、程經て後なりければ、

うきに亦重ぬる夢を聞きながらおどろかさでも歎き來しかな

かへし、宣旨三位殿、

うきに亦重なる夢を聞きながらおどろかさではなど歎きけん

人笑へ―人の笑ひぐさ、御産の事にて世間の笑ひ草となりし事時雨の巻に見えたり御修法の壇も其時のなり

りて、待賢門院のほとりに御車立てゝ見奉らせ給ふ。よろづあるべきさまにとゝのほりてめでたし。まことや中宮は、そのまゝに御ぐしもたぐる時もなく、沈み給へる御ありさまいと理に、遠き御別の悲さにうち添へて、御胸の安きまもなく思しこがる。后の位もとゞめられ給ひて、院號のさだめなど、人のうへのやうにほのかに聞し召すも、うれしからぬ世なり。禮成門院とかや申すなり。年月は御身の人笑へなるさまにて、天下の騒がれたりしをこそ思し歎き、御門も苦しきことにおぼし宣はせけるに、今はなか〳〵そのすぢの事はかけても思さず。さま〴〵なりし御修法の壇どもも、あとかたなく毀ち果てゝかきさましぬ。ひたすらに只かゝる世の憂さをのみおぼし惑ふに、日比經れど御遊なども絶えて御覽じいれねば、そこはかとなくいとゞ損はれまさりて、長らふべくも見え給はず。隱岐よりは偶の御消息などの通ふばかりにて、覺束なくいぶせき事多く積りゆくも、いつを逢ふせの限ともなく、定なき世にやがてかくてやとぢめんとすらん、と互にいみじう思さる。かしこに參り給へる内侍三位の御腹にも、御子たち數多おはします。何れもいまだいはけなき御程にはあれど、物思し知りていみじう戀ひ聞え給ひつゝ、をり〳〵は忍びてうち泣きなどし給ふ。稚うものし給へば、遠き國までは遷し奉らねど、

後鳥羽院の舊跡

受領—國司
目代—國司の代官

葛城の王—橘諸兄、陸奥國に下りし時待遇の疎なるを怒りしに釆女歌を詠みて怒を釋きし事萬葉集にあり

るを御覽ずるにも、御身の上はさしおかれて、まづかの古への事思し出づ。かゝる所に世をつくし給ひけん御心のうち、いかばかりなりけん、と哀に辱く思さるゝにも、今はた更にかく流浪ぬるも、何により思ひたちし事ぞ、かの御心の末やはたし遂ぐると思ひし故なり。苫の下にもあはれと思さるらんかし、と萬にかき集め盡きせずなん。海面よりは少し入りたる國分寺といふ寺を、よろしき樣にとり拂ひて、おはしまし所に定む。今はさはかくてあるべき御身ぞかし、と思ししづまる程、猶夢の心地していはん方なし。そこら參りし武士共も罷出れば、かいしめりのどやかになりぬる、いとゞ心細し。昔こそ受領どもも任のほどその國をしたゝめ行ひしか、この比は只名ばかりにて、何處にも守護といふものの、目代よりはおぞましきを据ゑたれば、武家のまびきにてのみ、おほやけざまの事はよろづ疎略にぞしける。葛城王を陸奥國へ遣したりけんも、かくやとあはれなり。中務の御子も土佐におはしまし著きて、御送りの武士にたまはせける。

　思ひきやうらめしかりし武士のなごりを今日は慕ふべしとは

かやうの類あまた聞えしかど、何かはさのみ、皆人もゆかしからず思さるらんとてなん。都には三月二十二日御即位の行幸なれば、世の中めでたくのゝしる。本院新院一つに奉

昔後鳥羽院―承久亂後隱岐遷幸の途ここにての御製「都人誰踏みそめて通ひけむ向ひの道のなつかしき哉」

さもこそは云々―今日は衣更の日に非ずやそれに心付かざりしは我が月日を忘るゝにも程こそあれ

昔の御跡―

みか月の中山にて、昔後鳥羽院の仰せられけん事、思し出づるさへ、げにうかりけるためしなり。

傳へきく昔がたりぞ憂かりけるその名ふりぬるみかつきの森

御道なかばになりぬれば、御送の者共上下、都出でしよりも猶花やかに今めかしうさうぞきかへたり。大方はあやしうさまことなる御幸なれど、道すがらの御まうけ、國々に心づかひしたる氣色などは、かうざまの御ありきとは見えず、いとやんごとなくなん。さはいへど今まで國のあるじにて、世をもいみじう治めさせ給へりける名殘にやあらん、いとねんごろにのみ仕うまつれり。古への御幸どもにはかやうはあらざりけりとぞ、古き事知れる人々いひ侍りける。四月一日の比、百敷の宮の中思し出でられて、

さもこそは月日もしらぬ我ならめ衣更せし今日にやはあらぬ

出雲國八杉の津といふところより御船にたてまつる。大船二十四艘、小船どもは、數知らず續きたり。遙におし出すほど、今一かすみ心細うあはれにて、誠に二千里の外の心地するも今さらめきたり。かの島におはしましつきぬ。昔の御跡はそれとばかりのしるしだになく、人の住處もまれに、おのづから蜑の鹽やく里ばかり遙にて、いとあはれな

つゞらをり―曲折したる坂路

久米のさら山―美作國久米南條郡に在り古來歌に名高き處なれば御製に「聞き置きし」と仰せられしなり

色も香もかはらぬしもぞうかりける都の外のはなのこずゑは

又小山五郎とかやいふ武士に、同じ花を遣るとて、少將

うき旅と思ひは果てじひと枝の花のなさけのかかるをりにはかくてなほおはしませば、來し方はそこはかとなく霞みわたりて、あはれに遠くも來にけるかな、と日數に添へて、都のいとゞ隔たりはつるも心細う思さる。ほのかに咲き初むと見えし花の梢さへ、日數も山も重るにそへて移ろひまさりつゝ、上り下るつゞらをりに、いと白く散り積りて、むら消えたる雪の心地す。

花の春また見んことの難きかなおなじ道をばゆきかへるとも

いと難しとは思すものから、猶さりとも平かにだにあらば、おのづから御本意遂ぐるやうもありなんなど、御心もて慰め思すもはかなし。久米のさら山といふ所越えさせたまふとて、

聞き置きし久米のさら山越えゆかん道とは兼て思ひやはせし

逢坂といふは、東路ならでもありけりと聞しめして、

立ちかへり越えゆく關と思はばやみやこにきゝしあふ坂の山

船なしぞ思ふ（人麿）

いへばえに｜口には言はれねど

いほりにたける｜山がつの庵にたけるしばしばもこととひこなむ戀ふる里人（源氏須磨卷）又里人の庵にたける椎柴の烟吹きおろす山おろしの風（後鳥羽院）

じ道少しちがひたれど、この川の東、野口といふ所まで參り給へるよし奏せさせ給へば、いとあはれに相見まほしう思さるれど、御送のつはものども免し聞えねば、空しく通らせ給ふ、御心のうち、堪へがたく亂れまさるべし。さらなる事なれど、かばかりのことだに御心に任せずなりぬる世の中、いへばえに、つらく恨めしからぬ人なし。十七日美作國におはしまし著きぬ。御心地惱しくて、この國に二三日休らはせ給ふほど、假初の御やどりなればもの深からで、候ふかぎりの武士ども、おのづからけ近く見奉るを、あはれにめでたしと思ひ聞ゆ。君も思し續くる事ありて、

あはれとは汝も見るらん我が民を思ふこゝろは今もかはらず

おはしますに續きたる軒のつまより煙の立ち來れば、いほりにたける、とうち誦せさせ給へるも艶なり。

よそにのみおもひぞやりし思ひきや民の竈をかくて見んとは

二十一日雲清寺といふ所にて、いとおもしろき花を折りて、忠顯少將奏しける。

かはらぬをかたみとなして咲く花の都は猶もしのばれぞする

御かへし、

覽じ渡さる。源氏の大將の、なく音にまがふ、と宣ひけん浦浪、今もげに御袖にかゝる心地するも、さま〴〵御涙のもよほしなり。播磨國へ著かせ給ひて、鹽屋、垂水といふ所をかしきを問はせたまへば、さなんと奏するに、名を聞くよりからき道にこそ、と宣はせて、さしのぞかせ給へる御さまかたち、舊りがたくなまめかし。け近きかぎりは、あはれにめでたうもと思ひ聞ゆべし。大くら谷といふ所少し過ぐる程にぞ、人麿の塚は有りける。明石浦を過ぎさせ給ふに、島隱れ行く船ども、ほのかに見えてあはれなり。

水の泡とありてうき世を渡る身のうらやましきはあまの釣船

野中の清水、ふたみの浦、高砂松など、名ある所々御覽じわたさるゝも、かゝらぬ御幸ならばをかしうもありぬべけれど、萬かきくらす御亂心地に、御目とまらぬも、我ながら痛う屈じにけるかなと思さる。いと高き山の峯に花面白く咲き續きて、白雲を分け行く心地するも艶なるに、都の事數々思し出でらる。

花はなほうき世もわかずさきてけり都も今やさかりなるらん

あと見ゆる道のしをりのさくら花この山人のなさけをぞ知る

十二日に加古川の宿といふ所におはします程に、妙法院宮讃岐へわたらせ給ふとて、同

闕ふきこゆる―旅人は袂すゞしくなりにけり闕吹きこゆるすまの秋風（行平）

なく音にまがふ―こひわびてなく音にまがふ浦波は思ふかたより風や吹くらむ（源氏須磨卷）

島がくれゆく―ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隱れゆく

時信―佐々木判官時信

ふるき御幸―後嵯峨院の大宮院と共に天王寺住吉などに詣でさせ給へる事烟の末々の巻に見えたり

人やりの道―甚憂き遠謫の途中ながら同じ泊に居給ふは嬉し

ましていかさまなるわざをして御覽ぜさせん、と主時信經營し騷ぐ。宮既にたゝせ給ふとて、瓶にさしたる花を折らせ給ひて、

花はなほ留るあるじにかたらへよわれこそ旅にたち別るとも

同じ日やがて妙法院の座主尊澄法親王も、讃岐國へおはします。先帝は今日津國昆陽野の宿といふ所に著かせ給ひて、夕づく夜ほのかにをかしきを詠めおはします。

いのちあればこやの軒端の月も見つまたいかならん行末の空

こやより出でさせたまひて、武庫川、神崎、難波、住吉など過ぎさせ給ふとて、御心のうちに思す筋あるべし。廣田宮のわたりにても、御輿とゞめて拜み奉らせ給ふ。葦屋里、雀の森、布引瀧など御覽じやらるゝも、ふるき御幸どもおぼし出でらる。生田森をば訪はで過ぎさせたまひぬめり。湊川の宿に著かせ給へるに、中務宮は昆陽野の宿におはしますほど、間近く聞き奉らせ給ふもいみじう哀にかなし。宮、

いとせめてうき人やりの道ながらおなじとまりと聞くぞ嬉しき

福原の島より宮は御船にたてまつる。御門は和田岬刈藻川をうちわたして、須磨關にかからせ給ふ。かの行平中納言關ふきこゆる、といひけんは、浦より遠方なるべし。哀に御

日比は…あへるかし——平常はとても近付き奉り得ぬ賤民までも詮方無げに今日の別を悲めり

なども、さこそはありけめなれど、傳にのみ聞きて見ねば知らず。これを始めたる心地ぞする。日比は何の御匂にもふれず、數ならぬ人、及ばぬ身迄も今日の御別のあはれさなべておき所無げにぞ惑ひあへるかし。君も御簾少しかきやりて、このもかのも御覽じわたしつゝ、御目とまらぬ草木もあるまじかめり。岩木ならねば、武士の鎧の袖どももしほとけにぞ見ゆる。都の梢をかくるゝまで御覽じおくるも猶夢かと覺ゆ。鳥羽殿におはしまし著きて、御よそひあらため、破子などまゐらせけれど、氣色ばかりにてまかづ。これより御輿にたてまつれば、留るべき御前どもの、空しき御車を泣く〳〵遣りかへるとて、くれまどひたる氣色いと堪へ難げなり。かくて君は遙に赴かせ給ふ。淀のわたりにて、昔八幡の行幸ありし時、橋わたしの使なりし佐々木の佐渡判官といふもの、今は入道して、今日の御おくり仕れるに、その世の事思し出でられて、いと忍びがたさに給はせける。

しるべする道こそあらずなりぬとも淀のわたりは忘れしもせじ

又の日は中務の御子、土佐國へおはします。御供には爲明中將參る。日比かくあやしき御やどりにものし給ふを、辱く思ひ聞えつるに、遙なる世界にさへいでおはしませば、

障子—からかみ

おさへらる—しばし停めらる

壺裝束—市女笠に薄衣著たる婦人の裝

人々の祿にこそは賜はせしを、今日は御旅衣にたちかふるも、あはれに定なき世のならひ、今さら心うし。御車に奉るとて、日比おはしましつる傍の障子にかきつけさせたまふ。

いさ知らずなほ憂き方の又もあらば此宿とても忍ばれやせん

御供には内侍三位殿、大納言小宰相など、をのこには行房中將、忠顯少將ばかりつかまつる。おのがじし都の名殘どもいひ盡しがたし。六波羅よりの御おくりの武士、さならでも名あるつはものども、千葉介貞胤を始めとして、おぼえ異なる限り十人選びて奉る、いろ〳〵の綾錦の水干直垂などいふもの、さま〴〵に織りつくし染めつくして、いみじう淸らを好みとゝのへたれば、かくてしも世に珍しき見物なり。六波羅より七條を西へ、大宮を南へ折れて、東寺の門前に御車おさへらる、とばかり御念誦あるべし。物見車所せきほどなり。よろしき女房も壺裝束などして、歩の者どももうちまじれり。さらでも老いたるも、尼法師あやしき山賤まで立ちこみたるさま、竹の林に異ならず。各目押しのごひ鼻すゝりあへるけしきども、實にうき世のきはめは今に盡しつる心地ぞする。崇德院の讃岐におはしましけん程のありさま、後鳥羽院の隱岐に遷らせ給ひけん時

となり白氏文集新樂府に「上陽白髮人」あり註に天寶五載已後楊貴妃專レ寵、後宮人無二復進幸一矣、六宮有二美色一者、輒置二別所一、上陽是其一也、

人やりならず―心がらなる

かの承久のためしにとや、東よりの御使には、長井右馬助高冬といふものなるべし。これは頼朝の大將の時より、鎌倉におもき武士にて、いまだ若けれども、かゝる大事にも上せけるとぞ申しける。遂に隱岐國へ遷し奉るべしとて、三月のはじめの七日都を出でさせたまふ。今はと聞しめす御心惑ひども、いへばさらなり。所々の歎き近う仕りし人人の心地ども、おき所なく悲し。御門も限りなく御心惱むべし。いとかうじも人に見えじ、とかつは思し鎭むれど、あやにくにすゝみ出づる御涙を、もてかくしつゝおはします。古りにし事を思し出づるにも、立ちかへりまた世をやすく思さん事のいとかたければ、よろづ今をとぢめにこそ、と思しめぐらすに、人やりならず口惜しき契加りける、前の世のみぞ盡せず恨めしき。

つひにかく沈みはつべき報あらば上なき身とはなに生れけん

卯の時ばかりに出でさせ給ふ。網代の御車に、御前どもなどは、故院の御世より仕う奉りなれにし者ども、ある限り參れり。御車寄に、西園寺中納言公重さぶらひ給ふ。うへは御冠に世のつねの御直衣、指貫、白綾の御衣一襲奉れり。去年の今日は北山にて花の宴せさせ給ひしも、あはれに思し出でられて、その日の事かきつらね戀しくおぼさる。

〇この卷は元弘二年三月後醍醐天皇の隱岐に遷幸したまふ御道中のことども光嚴帝の大嘗會の儀式等の事を悉しく記せり

上陽人の云云―異樣の例なれど春日に空しく閉ぢ籠らせ給ふ樣思ひよそへらる

第十九　久米のさら山

元弘二年の春にもなりぬ。新しき御代の年の始めには、思ひなしさへ花やかなり。上も若う清らにおはしませば、よろづめでたく、百敷の内何事も變らず。さるべき公事のをりをり、さらでも院内同じ陣の中なれば、一つに立ちこみたる馬車、隙なく賑しけれど見し世の人は一人も交はず。參り罷出る顏のみぞかはれる。先帝はいまだ六波羅におはします。二月の比空の氣色のどやかにかすみわたりて、ゆるらかに吹く春風に、軒の梅なつかしく香り來て、鶯の聲うらゝかなるも、うれはしき御心地には、もの憂かる音にのみ聞し召しなさる。ことやうなれど、かの上陽人の宮の中思ひよそへらる。永き日影もいとゞ暮し難き御慰にとや、聞え給ひけん、中宮より御琵琶奉らせ給ふついでに、いささかなる物のはしに、

思ひやれちりのみつもる四の絃にはらひもあへずかゝる涙を

げにと思召しやるにいと悲しくて、玉水の流るゝやうになん。御かへし、

かきたてし音をたちはてて君戀ふる涙の玉の緒とぞなりける

ねど、いとしるく掲焉なるもあぢきなし。かくて年も暮れぬ。

一御族のみ
―持明院流のみ皇位を繼ぎて兩統更立の事なくなるべきかと思ふ内に

松が浦島に
―素性法師
音にきく松が浦島今日ぞ見るうべ心あるあまもすみけり

へおはしまいて、世の政事聞しめせば、後宇多院の昔思ひ出でられて哀れなり。いつしか十月十二日綸旨下されて、前の御代の人々大中納言宰相すべて十人、宣房、公明、藤房具行、隆資、實世、實治、季房、隆重、忠顯、司やめらるゝよし聞ゆるも、昨日までの時の花と見えし人々、つかの間の夢かとあはれなり。かゝるにつけては、一御族のみ今はわく方なく定り給ふべきか、と世の人も思ひ聞ゆる程に、龜山院の御流の絕ゆべきには非ずとにや、先坊の一宮を太子に立てまつる。御乳母の雅藤宰相の法性寺の家に渡らせ給へるを、土御門高倉の先坊の御跡へ入れ奉りて、十一月八日坊に定まり給ふ。今は思ひの絕えぬる心地しつるに、いとめでたし。松が浦島に年經給ひぬる入道の宮も、御親の心地にておはしますべければ、太上天皇になずらへて、崇明門院ときこゆ。よろづ斧の柄朽ちにし昔を改めたる宮のうちなり。ありし後己がさま〴〵罷出散りにし、古女房上達部殿上人など、世の中屈じいたくて、此處彼處に籠り居たりしも、いつしかと參り集ふさま、谷の鶯の春待ちつけたる心地して、いと賴もしげなり。傳には久我右大臣長通、大夫に中院大納言通顯なり給ふ。なべて世に年比うづもれたりし人々、いつしかと司位さま〴〵に思ふまゝなる氣色ども、目の前にうつりかはる世の有樣、今さらなら

けしかるもの—狐狸などの怪しきもの

さるべき御事…つるに—當然の事とはいひながら今日明日かくならむとは思はれざりしに

人わろし—人前はづかし

つらせ給はんほど、この御子達もおのがちり〴〵になり給ふべしなど聞えけり。春宮は世をつゝしみて、六波羅に渡らせ給ふ。先帝は敵のために、同じ御やどり葦垣ばかりを隔てにておはしませば、主なき院の中いとさびしくて、衞士のたく火も影だに見えず。内にはいつしか、けしかるものなど住みつきて、或時は紅の袴長やかに踏み垂れて、火ともしたる女、見るまゝに丈は軒と等しくなりて、後にはかき消ち失するもあり。又いみじう光を放ちて、髮を前に亂しかけたる童なども見えけり。鬼殿などはかくや有りけんとおそろし。人住まで年經あれぬる所などにこそ、かゝる事も自らありけれ。僅に一月二月の中にかゝるべきにはあらぬを、此彼いと怪しきわざなるべし。さて例の東より御使上れり。代々のためしとかやとて、秋田城介高景、二階堂出羽の入道道雲とか云ふものぞ參れる。西園寺大納言公宗にことのよし申して、春宮御位につきたまふ。さるべき御事といひながら、今日明日とは見えざりつるに、いとめでたし。さて六波羅よりこの度は世の常の行啓の儀式にて、持明院殿へ入らせ給ふ。兩院もひきつくろひたる御幸のよしなり。ひしめきたちぬる世の音なひを聞しめす先帝の御心地、たとしへなくねたく人わろし。もとの內裏へ新帝うつらせ給ふ。上達部殘りなく仕う奉らる。院も常磐井殿

ことわりすぎて降る—当然の分量にも過ぎて多く降る

まだなれぬ板屋の軒のむら時雨おとを聞くにも濡るる袖かな

中務宮は、正成がもとにおはしましつれど、御門のかくならせたまひぬれば、今はかひなしとて、それも都へ入らせ給ひて、佐々木判官時信といふ者の家にわたり給ひぬ。つれづれと物思しみだるゝより外の事なし。

世のうさを空にも知るや神無月ことわりすぎてふる時雨かな

この御子は、藤大納言爲世の孫にてものしたまへば、かの家に常は住み給ひし程に、大納言末の女大納言典侍と聞ゆるに御覽じつきて、その御腹に姫宮など出で來たまへり。又中宮の御匣殿は、宮の御兄の右大臣公顯と聞こえし御女なり。その御腹にも男御子などおはします。思ふまゝなる世をも待ち出で給はゞ、と誰も行末頼もしく思ひ聞えつるに、かく思ひの外にあさましき事の出できぬるを、深う思ひなげく人々數知らず。御匣殿は失せ給ひしかば、この比はたゞこの典侍の君をのみ、またなきものに思しかはしつるに、吹きかふ風も間近き程にはおはすれど、御對面は思ひもよらず。覺束なさの慰むばかりなる御消息などだに、通ふ事もかなはぬ御ありさまを、哀にいぶせく思し結ぼほれたり。一つ御腹の座主の法親王も、長井のたかひろとかやいふ者あづかり奉りぬ。御門遠くう

その世の…何事かはと—當時の人人は皆何の心配も無かりしならんと

幸あるべきよし奏すれば、御心にもあらで引されおはします程に、心憂しといふもなのめなり。具行、藤房、忠顯少將など、やがておのが手の者どもに隨へさせつ。大納言入道御馬のりしに走り後れて、此處彼處の岩蔭木のもとに休みつゝ、とかくためらふ程に、それも見つけられて捕られぬ。君をば宇治へ入れ奉りて、まづ事のよし六波羅へきこゆる程、一二日御逗留あり。かくいふは九月三十日なれば、空のけしきさへ時雨がちに、涙催しがほなり。平等院の紅葉御覽じやらるゝも、かゝらぬ行幸ならばとあいなし。後冷泉院かとよ、こゝに行幸し給ひて、三四日おはしましける。その世の人の心地、上下何事かはと羨しくあはれに思さる。十月三日都へ入らせ給ふも思ひしにかはりて、いとすさまじげなる武士ども、衞府のすけの心地して、御輿近くうち圍みたり。鳳輦にはあらぬ、網代輿のあやしきにぞたてまつれる。六波羅の北なる檜皮屋には、もとより兩院春宮おはしませば、南の板屋のいとあやしきに、御しつらひなどしておはしまさするもいとほしう忝し。間近きほどによろづ聞しめし、御覽じふること〴〵につけても、いかでか御心動かぬやうはあらん、口惜う思しみだる。ならはぬ御宿に、時雨の音さへはしたなくて、

逆木―荊棘の枝などをさかさまに立てゝ垣となしたるもの

案内聞えたる―捕へ奉りたる

ぐ。もとよりいと嶮しき山のつゞらをりを、えもいはず、木戸、逆木、石弓などいふ事どもしたゝめらる。さりともたやすくは破れじと頼ませ給へるに、後の山より御かたきくづれ參りて、木戸ども燒き拂ひ、おはしますあたり近く既に煙もかゝりければ、今はいかゞせんにて、あやしき御姿にやつれて辿り出でさせ給ふ。座主の法親王御手をひき奉り給へるも、いとはかなげなる御有様なり。中務の御子大塔宮などは、かねてよりここを出でさせ給ひて、楠木か館におはしましけり。行幸も其方ざまにやと思し心ざして、藤房、具行兩中納言、師賢大納言入道手を取りかはして、焔の中を免れ出づる程の心地ども、夢とだに思ひも分かずいとあさまし。少し延びさせ給ひてぞ、御馬尋ね出でて君ばかり奉りぬれど、ならはぬ山路に御心地も損はれて、誠に危く見えさせ給へば、たかまの山といふわたりに、しばし御心地をためらふ所に、山城國の民にて、深栖五郎入道とかいふもの參りかゝりて、案内聞えたるしもいとめざましう口惜し。上達部思ひやる方なくて、只目を見かはして、いかさまにせんとあきれたるに、東より上れる大將軍にて、陸奥國守貞直といふもの大勢にて參れり。今はたゞともかくものたまはすべきやう無ければ、遂にかひなくて、敵のために御身を任せぬるさまなり。やがて宇治に行

ものしきやうなれど―厭ふべきやうなれども

木丸殿には…なし―笠置の行在所には諸國の武士參り集ふとはいへども重だちたるものはなし

事のみ聞ゆれば、猶これも危しとて、六波羅の北に代々の將軍の御料とて造り置ける、檜皮屋一つあるに、兩院春宮參らせ給ふ。大方はいとものしきやうなれど、よろしき時こそあれ、かばかりの際には何の儀式も無かるべし。笠置殿には、大和、河內、伊賀、伊勢などより、兵ども參りつどふ中に、事のはじめより賴み思されたりし、楠木兵衞正成といふものあり。心猛くすくよかなるものにて、河內國に己が館のあたりを嚴しくしたゝめて、このおはします所若し危からん折は、行幸をもなし聞えんなど用意しけり。東のえびすどもも、やう〳〵攻め上るよし聞ゆ。もとより京にある武士どもも、我先にときほひ參る。木丸殿にはさこそいへ、むね〳〵しきものなし、いかになり行くべきにか、といともの心細く思しみだる。我が御心もての御事なれば、かこつかたなけれど、故鄕の空もあはれに思し出でらる。秋も深くなり行くまゝに、山の木の葉のうちしぐれ、谷の嵐のおとづるゝも、敵のきほふかと肝を消す、御住居いつしか御身をかへたる心地し給ふもあぢきなし。

　うかりける身を秋風にさそはれて思はぬ山のもみぢをぞ見る

既に東の武士ども、雲霞の勢をたなびかし上るよし聞ゆれば、笠置にもいみじう思し騷

いろはれど
―關渉せざれども
私の後見―内々の後見
内管領

思ふことなくてぞ見ましほの〴〵と有明の月の志賀のうら波

その後辛うじてぞ笠置へはたどり參られける。かやうの事どもも〔一〕例のはや馬にて東へ告げやりぬ。只今の將軍は、昔式部卿久明親王とて、下り給へりし將軍の御子なり。守邦親王とぞ聞ゆる。相摸守高時といふは病によりて、いまだ若けれど、一とせ入道して、今は世の大事どもいろはねど、鎌倉のぬしにてはあめり。心ばへなども如何にぞや、現なくて、朝夕好むこととては、犬くひ田樂などをぞ愛しける。これは最勝園寺入道貞時といひしが子なれば、承久の義時より八代にあたれり。この比私の後見には、長崎入道圓基とかやいふものあり、世の中の大小事、只皆この圓基が心の儘なれば、都の大事かばかりになりぬるをも、かの入道のみぞとりもちておきて計ひける。重き武士ども多くのぼすべしと聞ゆ。大かた京も鎌倉も騷ぎのゝしるさまけしからず。承久の昔もかくや、と今更に思ひ遣らる。持明院殿には春宮おはしませば、思の外にめでたかるべき事なれど、今日明日はいまだ軍のまぎれにて何の沙汰もなし。御宿直の者のうべ〳〵しきも無くて、離れおはしますもあぶなき心地すればにや、せめても六波羅近くとて、六條殿へ本院、新院、春宮、引き續きて遷らせたまひぬれど、日にそへて天の下騷ぎ、恐しき

志賀の浦―近江滋賀郡琵琶湖のほとり

きたがへ南ざまへおはしましぬれば、そのよし衆徒に聞かれなば悪しかりぬべし。又とまれかくまれ、實のおはしまし所を、左右なく武家へ知らせじの謀にやありけん、花山院の大納言師賢を山へ遣はして、忍びて御門のおはしますよしにもてないて、かの兩法親王事行ひたまひつゝ、六波羅の兵どもの圍をも防がせたまふ。その日は大納言も大塔の前座主の宮も、うるはしき武士姿にいでたゝせ給ふ。卯花をどしの鎧に鍬形の兜奉りて、大矢負ひておはする。妙法院宮は、生絹の御衣の下に萌黄の御腹巻とかや著たまへり。大納言はからの香染のうすものの狩衣に、掲焉に赤き腹巻をすかして、さすがに蒔繪の細太刀をぞ佩き給ひける。六波羅より帝こゝにおはしますと心得て、武士ども多く參り圍む。山法師も戰ひなどして、海東とかやいふ兵討たれにけり。事の始に東うせぬるめでたしなどぞいふめる。かゝれども御門笠置におはしますよし、程なく聞えぬれば、謀られ奉りにけりとて、山の衆徒も少々心がはりしぬ。宮々も逃げ出で給ひて、笠置へぞまうで給ひける。大納言は都へまぎれおはすとて、夜ぶかく志賀の浦を過ぎ給ふに、有明の月くまなく澄み渡りて、寄せかへる浪の音もさびしきに、松吹く風の身に沁みたるさへ、とりあつめ心細し。

曹司―部屋
ひすまし―樋清し厠などを掃除する女
目もあやなり―目まぐるし
心と皆かけち行き云云―自ら跡を晦ましたるを以て

曹司々々より、ひすましめく女の童など、我先にと走り出で、調度ども運び騷ぎくづれ出づる氣色ども、いとあさましく目もあやなり。錦の几帳の内にいつかれまし〳〵つる后の宮も、何の儀式もなく忍びてあわて出でさせ給ひぬれば、あたり〳〵かき拂ひ、時の間にいとあさましく、御簾几帳等踏みしだひき落して火の影もせず。此處も彼處も暗がりて、うちあれたる心地す。今朝まで九重の深き宮の中に出入つかへつる男女ひとり留らず、えもいはぬ武士どもうち散り、荒々しげなるけはひに、續松高くさゝげて、細殿渡殿何くれ目陰さして、あさりたる氣色、けうとくあさまし。世は憂きものにこそと時の間に、げに心あらん人は、やがて修行の門出にもなりぬべくぞ覺えぬる。中宮は忍びて野宮殿の傍におはしまし著きにける。宣房大納言の二郎季房の宰相ばかり、御宿直に侍ふ。二十五日の曙に武士どもみち〳〵て、御門の親しく召し使ひし人々の家々へ、押し入り〳〵とりもて行くさま、獄卒とかやの顯れたるか、といと恐ろし、萬里小路大納言宣房、侍從中納言公明、別當實世、平宰相成輔、一度に皆六波羅へゐて行きぬ。かやうの事を見るに、いとゞ肝心も失せて、おのづからとり殘されたる人も、心と皆かきけち行き隱るゝ程に、主なき宿のみぞ多かる。坂本には行幸を待ち聞え給ひけるに、引

闇のうつゝ―古今集に「うば玉のやみのうつつはさやかなる夢にいくらもまさらざりけり」

務宮も、御馬にて追ひて參りたまふ。九條わたりまで御車にて、それより御門もかりの御衣にやつれさせ給ひて、御馬にたてまつるほど、こはいかにしつる事ぞ、と夢の心地して思さる。御供に按察大納言公俊、萬里小路中納言藤房、源中納言具行、四條中納言隆資など參れり。いづれも怪しき姿にまぎらはして、暗き道をたどりおはする程、げに闇のうつゝの心地して、我にもあらぬさまなり。丑三つばかりに木幡山過ぎさせ給ふ。いとむくつけし。木津といふわたりに御馬とめて、東南院の僧正の許へ御消息遣はす。それより御輿を參らせたるに奉りて、奈良へおはしまし著きぬ。こゝに中一日ありて、廿七日和束の鷲峯山へ行幸ありけれども、其處もさるべくや無かりけん、笠置寺といふ山寺へ入らせ給ひぬ。所のさまたやすく人の通ひぬべきやうもなく、宜しかるべしとて、木丸殿のかまへを始めらる。これよりぞ人々すこし心地とり鎭めて、近き國々の兵ども召しに遣はす。さて都には二十四日の夜、六波羅より常陸守時知馳せ參りて、百敷の中をあさりさわぐ。その程人の曹司などに、おのづから落ち殘りたる女房の心地いはんかたなし。おはします殿を見れば、近き御厨子御調度どもなにくれ、硯などもさながらうち散りて、只今までおはしましける跡と見えながら、宮人などだにひとりもなし。女房の

雑務の日—人民の雑訴などをきこしめさるゝ日

ゐて渡らせ給ふ—三種神器を携へて出で給ふ

二條院の昔—平治亂に經宗惟方等二條天皇を幽閉より救出し奉りし事

るは、今の座主にてものし給へば、かた〴〵比叡の山の衆徒も、御門の御軍に加はるべきよし奏しけり。つゝむとすれど、事廣くなりにければ、武家にも早う洩れ聞えて、さにこそあなれと用意す。まづ九重を嚴くかため申すべしなど定めたり。かくいふは元弘元年八月二十四日なり。雑務の日なれば記錄所におはしまして、人の爭ひ憂ふる事どもを行ひ暮させ給ひて、人々もまかで、君も本殿にしばしうち休ませ給へるに、今宵既に武士どもきほひ參るべし、と忍びて奏する人ありければ、とりあへず雲の上を出でさせ給ふ。中宮の御方へ渡らせ給ひても、しめやかにもあらず、いとあわたゞし。かねて思し設けぬにはあらねども、事のさかさまなるやうになりぬれば萬うき〳〵と我も人もあきれ居たり。内侍所、神璽、寶劍ばかりをぞ、忍びてゐて渡らせ給ふ。上はなよらかなる御直衣奉り、北の對よりやつれたる女車のさまにて、忍び出でさせ給ふ。かの二條院の昔もかくやと思ひ出でらる。日比の御用意には、まづ六波羅を攻められんまぎれに、山へ行幸ありて、彼處へつはものどもを召して、山の衆徒をも相具し、君の御かためとせらるべし、と定められければ、かの法親王達も其御心して、坂本に待ち聞え給ひけれど、今はかやうに事違ひぬればあいなしとて、俄に道を變へて奈良の京へぞ赴かせ給ふ。中

このあらまし—鎌倉征伐の計書

はやりか—氣ばやきをいふ

とりまで武士どもうち込みのゝしれば、こは何事と聞きわくまでもなし。いとものの騒がしく肝つぶれて、ある限り惑ひあへり。うへも物覺え給はぬ御ありさまにて大殿ごもれるに、かゝるよし奏すれば、いみじう思さる。遂に又の日六波羅へ遣したれば、東へゐて下りぬ。上は御惱おこたらせ給ひて、いとゞ安からず思す事まされり。日比も御心にかけさせ給へる事なれば、速にこのあらまし遂げてん、とひたぶるに思し立ちて、忍びてこゝかしこにその用意すべし。后宮の御腹の一品内親王御占にあはせたまひて、去年の冬比より御潔齋ありつる、今日明日齋宮に居給ふ。八月二十日まづ河原へ出でさせ給ひて、やがて野宮に入らせたまふ。その程の事どもいみじう淸らなり。この御いそぎ過ぎぬれば、まづ六波羅を御勘事あるべしとて、かねてより宣旨に隨へりしつはものどもを、しのびて召す。源中納言具行とりもちて事行ひけり。昔龜山院に御子など產み奉りて候ひし女房、この比は后の宮の御方にて、民部卿三位と聞ゆる御腹に、當代の御子も出でものし給へりし。山の前座主にて、今は大塔二品法親王尊雲と聞ゆる、いかでならはせ給ひけるにか、弓ひく道にもたけく、大かた御本性はやりかにおはして、このことをもおなじ御心におきて宣ふ。又中務親王ひとつ御腹に、妙法院の法親王尊澄と聞ゆ

代々の行幸の云々ー上の句は「宿からば花も心にとまるかな」この上句は忘れたれば後に見出して語らんとなり

にやありけん、といとえんなり。物の音ども調りて、いみじうめでたし。その後歌どもめさる。花を結びて文臺にせられたるは、保安のためしとぞいふめりし。春宮大夫公宗序かかれけり。

海内艾安之世、城北花開之春、我君促宸臨於此處、調樂懸於厥中、重課六義之言葉、屢賞數柯之濃花、叅梢凝出雲之昔雲再懸、滿庭省廻雪之昨雪猶殘、雖少風情愁瀝露詠、其詞曰、

時をえて行幸かひある庭の面に花もさかりの色やひさしき

御製、代々の行幸のあとと思へば、この上わすれ侍る。後にも見出してぞ、中務のみこ、

代々を經てたえじとぞ思ふこの宿の花に行幸のあとを重ねて

誰も〱このすぢにのみ惑はれて、花のみゆきの外は珍しきふしも無ければ、さのみも記しがたし。よろづ飽かず名殘多かれど、さのみはにて九日に還らせ給ひぬ。その夏の比御門例ならずおはしまして、御藥の事など聞ゆ。いと重くのみならせ給ふとて、世の中あわてたるさまなり。時しもあれや、かの一年とられたりし俊基を、又いかに聞ゆる事の出で來たるにか、搦めとらんとしければ、内へ逃げて參るを、おひ騷ぎて、陣のほ

女藏人—禁中に在りて朝夕下﨟の女房の所役をつとむるもの

いみじうつくして—いみじく手を盡して舞ひをはりて退出せしなり

うけたまはらまほしくこそ侍れといふ。御簾のうちにも、大納言二位殿琵琶、播磨内侍箏、女藏人高砂といふも琴彈くとぞきこえし、まことにやありけん。中務宮も參りたまへり。兵仗たまはり給ひて、御直衣に太刀はき給へり。御隨身どもいと淸らに裝束きて、所えたるさまなり。萬歳樂より納蘇利まで、十五帖手をつくしたる、いと見所おほし。青海波を氣色ばかりにて止みぬるぞ、飽かぬ心地しける。暮れかゝるほど、花の木の間に夕日花やかにうつろひて、山の鳥も聲惜まぬ程に、陵王の輝きて出でたるは、えもいはずおもしろし。其程うへも御引直衣にて、倚子に著かせ給ひて、御笛吹かせ給ふ。常より殊に雲ゐをひゞかすさまなり。宰相中將顯家、陵王の入あやをいみじうつくして罷出るを召し返して、前關白殿御衣とりてかづけ給ふ。紅梅のうはぎ二藍の衣なり。左の肩にかけて、いさゝか一曲舞うてまかでぬ。右大臣太鼓打ち給ふ。その後源中納言具行採桑老を舞ふ。これも紅の打ちたるかづけ給ふ。又の日は無量光院の前の花の木蔭に、上達部立ち續き給ふ、廂に倚子たててうへはおはします。御遊はじまる。拍子に治部卿まゐる。うへも櫻人うたはせ給ふ。御聲いと若く花やかにめでたし。去年の秋の比かとよ、資親中納言にこの曲はうけさせ給ひて、賞に正二位ゆるさせ給ひしも、今日のため

色ゆりなどして―禁色（深紫深紅）を聴されなどして

見給へれば―見奉られば

りなどして、この平野の行幸の舞人にまゐる。土御門大納言顯實の子に、通房の中將、堀川大納言の子、具雅の中將など、皆よき君達舞人にさゝれて、いづれもきよらに美しう出でたちて仕う奉られたり。その外はくだ〳〵しければ、例の止めつ。かやうのめでたきまぎれにて過ぎもて行く。又の年の春三月の始つかた、花御覽じに北山に行幸なる。常よりも殊におもしろかるべきたびなれば、かの殿にも心づかひし給ふ。まづ中宮行啓、またの日行幸。前右大臣兼季まゐりたまひて、樂所のことなどおきてのたまふ。康保の花の宴のためしなど聞えしにや、北殿の棧敷にてうち〳〵試樂めきて、家房朝臣舞はせらる。御簾の内に大納言二位殿、播磨内侍など琴かき合せて、いとおもしろし。六日の辰の時に事始まる。寢殿の階の間に御しとね參りて、内のうへおはします。第二の間は后宮、その次に永福門院、昭訓門院も渡らせ給ひけるにや。階の東に二條前殿道平、堀河大納言具親、春宮大夫公宗、侍従中納言公明、御子左中納言爲定、中宮權大夫公泰など候はる。右大臣兼季琵琶、春宮權大夫冬信笛、源中納言具行笙、治部卿篳篥、琴は室町宰相公春、琵琶は園宰相基氏など聞えしにや。その日の事見たまへねば定にはなし。稚きわらはべなどの、しどけなく語りしまゝなり。この中に御覽じたる人もおはすらん、

警策—物ごとにすぐれたるをいふ
議定—政事上の商議
我世—我が生涯

　　のどかなる雲ゐの花の色にこそよろづ代經べき春は見えけれ
帥御子世長、
　　もゝしきの御垣の櫻咲きにけりよろづ代までの春のかざしに
つぎ〳〵おほかれどもむつかし。三月の比春日社に行幸し給ふ。例のいみじき見物なれば、棧敷どもえもいはず挑みつくしたり。その後日吉社には參らせたまひき。今年も人多く俄やみして死ぬる中に、帥の御子重くなやませ給ひて、いとあへなくうせたまひぬ。内のうへおぼし歎く事おろそかならず。一の御子よりも御才などもいと賢くよろづ警策に物し給へれば、今より記錄所へも御供に出でさせ給ふ。議定などいふ事にも參り給ふべし、と聞えつるに、いとあさまし。御めのとの源大納言親房、わが世盡きぬる心地して、とりあへず頭おろしぬ。この人のかく世を捨てぬるを、親王の御事にうち添へて、かたがたいみじく御門も口惜くおぼし歎く。世にもいとあたらしく惜みあへり。おなじ年の冬の比、平野、北野兩社に一度に行幸なり。勸修寺の殿原、昔より近衞司などにはならぬ事にてありつれど、内の御めのと吉田大納言定房、過ぎにし比從一位して、いと珍らしくめでたければ、今は上﨟と等しきにや。稚き子の宗房といふも少將になさる。色ゆ

昔の弘徽殿の女御云々―承香殿の女御の誤なるべし事は榮花物語浦浦の別れの巻に見えたり

しはぶきやみ―咳の病

中殿―清涼殿

の女御の、太秦にてありけんやうにて止みき。をりふし賀茂祭の比にて、春宮の使も止まりなどして、さやうのをり〳〵、人の口さがなさ、せめても先坊の御かたざまの事を、貶しめざまにいひなやましゝ人々も、この比ぞ、又かく勝るためしもありけり、とはしたなく思ひあはせける。さのみやは、さてしもおはしますべきならねば、内へ還り入らせ給ふにも、いとあさましう珍らかなる事を思し歎くべし。御修法どももありしばかりこそなけれど、猶少しづつは絶えず、いつを限にかと見えたり。その比の左大臣實泰もうせたまひぬ。世の中いみじく歎きあへり。かくて元徳元年にもなりぬ。今年はいかなるにか、しはぶきやみはやりて、人多くうせ給ふ中に、伏見院の御母玄輝門院、前坊の御母代の永嘉門院、近衛大北政所などやんごとなき限り、うち續きかくれたまひぬれば、こゝかしこに御法事しげくていと哀なり。かやうの事どもにて、今年もまた暮れぬ。明くる春の比、内には中殿にて和歌の披講あり。序は源大納言親房かかれけり。かねてよりいみじうかかせ給へば、人々心づかひすべし。題は花契萬春とぞ聞えし。御製

とき知らぬ花も常磐の色に咲けわがここのへはよろづ代の春

中務卿尊良親王、

さるべき程もうち過ぎ—御産のあるべき時も過ぎ

二親うち具したる選ばれしかど—兩親打揃ひ乳母に選び置かれしかど

ゆく〱と—滞なく

まの法ども行はせらる。六月ばかりいみじう暑き程に、壇ども軒をきしりて、護摩の煙みち〱たるさま、いとおどろ〱しきまでけぶたし。社々の神馬は更にもいはず、醫師陰陽師巫覡ども、立ちさわぎ世のひゞくさま、めでたくゆゝしきにも、もし皇子にておはしまさゞらんをり、いかにと思ふだに胸つぶるゝに、いかなる御事にか、怪しうさるべき程もうち過ぎゆけば、猶しばしはさこそあれなど、待ち聞ゆれど、更につれなくて、十七八、二十、卅、月にも餘らせ給ふまで、ともかくもおはしまさねば、今はそらごとのやうにぞなりぬる。大かた上下の人の心地あさましともいふべき際ならず。御產屋の儀式、あるべき事どもなど、こちたきまで催し置かれ、よろしき家の子ども、二親うち具したる選ばれしかど、許多の月比には、あるは服になり、そのぬしも病して頭おろしなど、すべて萬事あいなく珍かなればいはん方なし。前坊の始つかた、中院の内大臣通重の御女まゐりたまひて、十八月にて若宮うまれ給へりしかど、やがて御子も母御息所もうせ給ひにしかば、いみじうあさましき事にいひさわぎし程に、又その後このとまり給へる入道の宮參り給へりしも、十七月ばかりにや、たゞならずおはしまして、既に御氣色ありとて、宮の中たちさわぐ程に、たゞゆく〱と水のみ出でさせ給ひて、昔の弘徽殿

○この巻は後醍醐天皇の嘉曆元年より元弘元年の終まで
竹の園生…給ふ—皇子は多けれども后腹なるは只一品親王のみ、竹の園生は漢の梁王竹を園中に植ゑたる故事に起り秋の宮は後漢の長秋宮の故事によれる稱

第十八　むら時雨

竹の園生は茂けれど、秋の宮の御腹には只一品内親王ばかりものし給ふを、いと飽かず思ほしわたるに、この比珍らしき御惱のよし聞ゆれば、いとめでたくあらまほしき御事なるべきにや、と上もいみじくおぼされて、かねてより御修法どもこちたく始めらる。ましてその程近くならせ給ひぬれば、式部卿宮の常磐井殿へ出でさせたまひて、うへも二三日隔てず通ひおはします。陣の内なれば、上達部殿上人、夜晝となく袴のそばとりて參りちがふ。御兄の兼季大臣も絕えず候ひたまふ。いみじき世のさわぎなり。故入道殿今しばしおはせましかば、と思出づる人々多かり。山、三井寺、山科寺、仁和寺、すべて大法祕法、祭祓數をつくしてのゝしるさま、いと賴もし。七佛藥師の法は、靑蓮院二品法親王慈道勤めさせ給ふ。金剛童子は常住院の遍昌僧正、如意輪法は道意僧正、五壇の御修法の中壇は座主の法親王行はせ給ふ。如法佛眼は昭訓門院の御志にて慈勝僧正承り行ふ。一字金輪は淨經僧正、如法尊勝は桓守僧正、愛染王は賢助僧正、六字法は聖尋僧正、准胝法は達智門院の御沙汰にて、信耀僧正つとめらる。その外猶本坊にて、さまざ

故宮の御一めぐりの事ども、永嘉門院には營ませ給ふも哀つきせず。鷹司の大殿もうせ給ひぬ。この比の世には、いと重くやんごとなくものし給へるに、いとあたらし。北政所は、中院の内大臣通重の御同胞なり。それもさまかはり給ひぬ。近比よき人々多くうせ給ひぬるこそ、いとくちをしけれ。

内々云々―世良親王は未だ御元服なけれども内々にて袍を著給ひて御門の御供に出でさせ給へるなり

くて今年も暮れぬれば、嘉暦も二年になりぬ。一の宮御かうぶりして中務卿尊良親王ときこゆ。去年より内に御とのゐ所して渡らせ給ふ。正月の十六日の節會に、めづらしく出で給ふ。御門も、徳治の比帥にて、七日の節に出でさせ給へりし例思し出づるにや。大方ふるくは皆さこそありけれど、近比はいたくかやうには無かりつるを、御子たち御冠の後は、いづれも昔おぼえて、さるべきをり〳〵出で仕へさせ給ふめり。今日の節會は、常よりことにひきつくろはるゝなるべし。みこは蘇芳のうへのきぬ奉れり。左大臣冬教、右大臣經忠、内大臣基嗣、右大將公賢、權大納言顯定、藤中納言實任、別當光經、三條中納言實忠、左衞門督公泰、權中納言藤房。宰相には惟繼、親賢、爲定、冬信、國資等參れり。二の宮は、西園寺宰相中將實俊の女の御腹なり。帥の御子世良親王ときこゆ。昭慶門院とりわき養ひ奉らせ給ふ。この宮は御めのと源大納言親房なり。それも内々うへの御衣にて、御門南殿へ出でさせたまへば、御供に侍はせたまふ。又常磐井式部卿宮は、龜山院の御子なれど、當代といと懇なる御中にて、この御子たちと同じやうに、常はうちつれ御宿直などせさせ給ふ。今日も御參りありて、御子たち歩み續かせ給へる、いとおもしろし。若き女房など、心づかひことなる比ならんかし。二月なれば、やう〳〵

けやけく—きは立ちて甚しと
世のおとなひ—立太子につきての世間の騷ぎ
入道の宮—褋子内親王
女院—永嘉門院

この爲定のはらから、中宮に宣旨にて候ふも、うへ例の時めかし給ひて、若宮出でものし給へり。その宮の御めのとは師賢大納言うけたまはりて、いみじうかしづきたてまつらる。又宮の内侍の御腹にも、次々いと數多おはします。一の御子は藤大納言の御腹、吉田大納言定房の家に渡らせ給ふ。二の御子にもいときら〳〵しうて、源大納言親房の御預なり。かくさま〴〵におはしますを、この度いかで坊に、と思しつれど、かねてよりもよほし仰せられし事なれば、東より人參りて、本院の一宮を定め申しつゝ、いとけやけく聞召せど、いかゞはせんにて、七月二十四日に立太子の節會行はる。陣の座より引きわたして、持明院殿に人々まゐる。院の殿上にて祿など賜はる。常の事なれど俄にいとめでたし。八月になりて、陽德門院の土御門東洞院殿へ行啓はじめあり。先坊の宮は鷹司なれば、間近き程に世のおとなひ聞しめす、入道の宮、女院などの御心のうち、今さらにいとかなし。本院新院ひとつ御車に奉りて、さきだちて入らせたまふ。行啓は東洞院おもての棟門に御車とゞめて、中門まで筵道を敷きて歩み入らせ給ふ。御びんづら結ひて、いときびはに美くしげなり。十四ばかりにやおはしますらん。宮づかさども院の殿上人など多く仕うまつれり。花開けたる心地どもすべし。哀なる世のならひなりかし。か

大夫は云々
―中宮大夫
師賢はもと
より爲定と
親しき友人
にて

もろともに聞かましものを郭公まくらならべしむかしなりせば

まことや例のさきに聞ゆべき事を、時たがへ侍りにけり。兵衛督爲定、故中納言のあとうけて撰びつる撰集の事、正中二年十二月の比、まづ四季を奏するよし聞えし殘り、この程世に弘まれるいとおもしろし。御門ことの外にめでさせ給ひて、續後拾遺とぞいふなる。中宮大夫師賢うけたまはりて、この度の集のいみじきよし、さま〴〵仰せ遣したるに、御かへしに、爲定、

今ぞ知る拾ひし玉の數かずに身を照らすべきひかりありとは

御かへし、内の御製、

かず〳〵に集むる玉のくもらねばこれもわが世の光とぞなる

この大夫はもとより中よきどちにて、常に消息など遣はすに、かく世にほめらるゝをいとしと思ひて、兵衛督のもとへいひやる。

和歌の浦の波も昔にかへりぬと人よりさきに聞くぞうれしき

かへし、

和歌の浦や昔にかへる浪ぞとも通ふこゝろにまづぞ聞くらん

さまかはりてけり―出家せりなごやか―柔和大かたの世にも云々―朝廷にも用ゐられずさし放たれてなり

ならん事をのみ待ち聞えつゝ、踐祚の御使の都に參らん、と同じやうに上らんとて、いまだ彼處にものせられつるに、かくあやなき事の出で來ぬれば、いみじともさらなり。三月三十日やがてかしこにて頭おろす、心の中さこそはと悲し。

おほかたの春の別れの外にまた我世つきぬる今日のくれかな

都にも前大納言經繼、四條三位隆久、山井少將敎季、五辻少將ながとし、公風少將、左衛門佐俊顯など皆かしらおろしぬ。女房には御息所の御方、對君、帥君、兵衛督、内侍君など、すべて男女三十餘人さまかはりてけり。やんごとなき君の御時も、かくばかりの事はいとあり難きを、佛などの現れ給ひて、殊更に迷ひ深き衆生を導き給ふかとまで見えたり。御本性のいとなごやかにおはしましゝかば、近う仕うまつる限りの人は、年比の御名殘を思ふもいと忍び難きうへ、大かたの世にもさしはなたれて、身を益なきものに思ひ棄つるたぐひなど、さま〴〵につけて厭ひ背くなるべし。若宮三所、姫宮などもおはしましけり。御息所の御腹にはあらねど、何れをも今は昔の御かたみ、とあはれに見奉らせ給ふ。四月の末つかた、夏木立心よげに茂りわたれるも、羨ましくながめさせ給ふ。曉がた郭公の鳴きわたるも、いかに知りてか、と御涙のもよほしなり。

も聞かさせ給ひて、いづ方へも御供にゐておはしましてよ、と聲も惜まず泣き入り給へるさま、いと哀なり。すべて宮の内どよみ悲ぶさま、いはん方なし。永嘉門院は御子もおはしまさねば、年月この宮を故院聞えつけさせ給ひしかば、今もひとつ院におはします。御息所にも、やがて故院の姫宮を、女院の御傍にかしづき聞え給ひしをあはせ奉り給へれば、又なきさまに思しかはして過させ給へるなど、いみじう沈み入り給へり。さてあるべきならねば、常の行啓のさまにて、先帝のおはしましゝ北白川殿へぞ入れ奉らせ給ひぬる。土用の程にて、しばし彼處におはしますさへいと悲し。院號などの沙汰もあるべくこそ。されどおはしましゝ時に、その事はよしなかるべく仰せられ置きしかば、内よりも聞し召し過しけり。晝御座の裝飾とりこぼち、火たき屋などかき拂ふほど、猶うつゝとも覺えず。堀川の女御の見えしおもひの、など宣ひけんは、この世ながら御心とのおん別れなれば、羨ましくさへ覺ゆ。さしあたりての哀はさし置きて、先帝の御位ながらうせ給へりしだにあるを、又かく半なるやうにてあさましければ、世の人の思はん事も心うく、一方ならぬ歎に添へたるうれへいはん方なし。大方我身をかぎりはてぬると思ふ人のみ多かりき。有忠中納言先坊の御使にて東に下りにし、いつしかと思ふさま

又なきさまに云々―邦良親王禖子内親王との御中のいと睦しかりしをいふ

見えしおもひの―小一條院の女御「雲ゐまで立ちのぼるべき煙かと見えしおもひの外にもあるかな」

うべ〳〵しき人―篤實なる人

けざやかにいひなす―明白に辯解す

いとあさましくならせ給ひぬ―薨去し給へり

より仕へ來て、年もたけたるうへ、この比は天下にいさぎよくうべ〳〵しき人に思はれたる比なれば、この事更に御門の知しめさぬよしなど、けざやかにいひなすに、荒きえびすどもの心にも、いと忝き事、となごみて無異なるべく奏しけり。この御使の賞にや、宣房大納言になされぬ。いといみじき幸なり。親は三位ばかりにて入道してき。子どもなどさへ、いと淸げに數多あめり。されば朝廷は知しめされぬにても、かの人々は遁るべきかたなしとて、別當は佐渡國へ流されぬ。俊基はいかにして遁れぬるにか、都へ還りぬれど、ありしやうには出でつかへず籠り居たるよしなり。かやうにて事なく鎭まりぬれば、いとめでたけれど、うへの御心の中は猶安からず、いかならん時とのみ思しわたるべし。月日程なく遷り行きて、嘉暦元年になりぬ。三月の始つ方より、春宮例ならずおはしまして、日々に重らせ給ふ。さま〴〵の御修法どもはじめ、御祈なにやかやと、伊勢にも御使奉らせ給へど、かひなくて、三月二十日遂にいとあさましくならせたまひぬ。宮の内火を消ちたる心地して惑ひあへり。御乳母の對君といふ人、夜晝御傍去らず候ひ馴れたるに、いみじき心まどひ誠にをさめ難げなり。かぎりと見え給ふ御顏にさしよりて、かく殘りなき身を御覽じ棄てては、えおはしましやらじ。今一度御聲なりと

柹の衣ー柹色卽ち代赭色の濃き

あやゐ笠ー今のあみ笠の深からぬにて藺を編みて作りたるもの

所へ六波羅よりおし寄せて搦め捕るなりけり。顯れぬとや思ひけん、彼のものどもはやがて腹切りつ。又別當資朝、藏人内記俊基、同じやうに武家へ捕られて、嚴しく尋ね問ひまもりさわぐ。事の起りは帝世を亂り給はんとて、かの武士どもを召したるなりとぞいひあつかふめる。さてその宣旨なしたる人々とて、この二人をも東へ下していましむべしとぞ聞ゆる。いかさまなることの出で來べきにか、といと恐ろしくむづかし。故院おはしましゝ程は、世も長閑にめでたかりしを、いつしかかやうのことも出で來ぬるよと、人の口やすからざるべし。正應にも淺原といひしさわぎは、後嵯峨院の御處分を、東よりひき違へし御恨とこそは聞えしか。今もその御憤の名殘なるべし。過ぎにし比資朝も山伏のまねびして、柹の衣に綾藺笠といふもの著て、あづまの方へ忍びて下れりしは、少しは怪しかりし事なり。早うかゝる事どもにつけて、あなたざまにも宣旨を受くるものゝありけるなめり。俊基も紀伊國へ湯浴みに下るなどいひなして、田舍ありきしたりしも、今ぞ皆人思ひ合はせける。さるまゝにはいひ知らず聞ゆる事どもあれば、まだきにいと口をしう思されて、このことを先穩しく止めんとおほせば、かの正應にありしやうなる誓の御消息を遣はさる。宣房中納言御使にてあづまへ下る。大かたふるき御世

とりわき子にしてー特に我が子として愛するなり

もてあつかへどーうはさしたれど

はんかたなし。春宮より屢とぶらはせ給ふ御消息のついでに、

おくれゐる鶴の心もいかばかりさきだつ和歌のうらみなるらん

御かへし、大納言爲世、

おもへただ和歌の浦にはおくれゐて老いたる鶴の歎くこゝろを

世に歌よむと思しき人の哀がり歎かぬはなし。せめて勅撰の事撰び終るまでなどかはとぞ、人々の歎きはいとほしげなり。故爲道の中將の二郎爲定といふを、故中納言とりわき子にして何事もいひつけしかば、撰歌の事もうけ繼ぎて、沙汰すべきなどぞ聞ゆる。大納言は、末の子爲冬の少將といふをいたくらうたがりて、このまぎれに引きや越さまし、と思へる氣色ありとて、爲定もうらみ歎きて、山伏すがたに出で立ちて、修行に出でうせぬるなどいひさたすれば、人々いとほしう哀れになどもてあつかへど、さすがもとめ出だして、もとのやうにおだしく定まりぬとなん。そのころなが月ばかりまだしのゝめの程に、世の中いみじく騒ぎのゝしる。なに事にかと聞けば、美濃國の兵にて土岐十郎とかや、また多治見藏人などいふものども忍びのぼりて、四條わたりに立ちやどりたる事ありて、人に隱れて居りけるを、早う又告げ知らするものありければ、俄にその

一昨年ばかり—元亨三年

に、女院宮たちの御心のうちども、朝霧よりもはれまなし。十五夜の月さへかき曇れるに、故院の御位の御時に、宰相典侍とて候ひしは、雅有の宰相の女なり。その世のふるき友なれば、おなじ心ならんと思しやるも、むつましくて、萬秋門院よりのたまひ遣はす。

あふぎみし月もかくるる秋なればことわりしれと曇る空かな

いと哀に悲しと見奉りて、御かへし、宰相典侍、

ひかりなき世はことわりの秋の月なみだ添へてや猶曇るらん

永嘉門院西花門院など、いづれも思し歎く人々多かり。春宮もいと戀しく哀とのみ思ひ聞え給ふまゝには、御法事をぞ、まめやかに勤めさせ給ひける。大覺寺にては、性圓法親王とりもちて行はせ給ふ。御門、春宮の御法事は、龜山殿の大多勝院にて勤めらる。あはれあはれと言ひつゞも、過ぎ易き月日のみうつりかはりて年もかへりぬ。一昨年ばかりより、又重ねて撰集の事仰せられしを、爲世の大納言二度になりぬればにや、爲藤中納言に讓りしを、幾程なくかの中納言惱みてうせぬ。いといとほしう哀なり。故爲道朝臣のうせにし、只年月ふれど絶えぬ恨なるに、又かくとり重ねたる歎き、大納言の心の中い

うち聲づくりて云々―春宮のせきばらひして法皇の御側近く參り給へるなり

とに出で給ふべきならねば、只大かたにつけて、世にあるべき事ども、又この比すこし世に恨あるやうなる人々の、我が御心には哀と思さるゝなど數多あるをぞ、御心の儘なる世にもなりなん時は、必ず御用意あるべくなど聞え給ひける。中御門大納言經繼、六條中納言有忠、右衞門督教定、左衞門佐俊顯など聞えし人々のことにやありけん。さてその夜はとまり給へるもしろしめさで、夜うち更けて少し驚かせ給ひて、春宮はいつかへり給ひぬるぞと宣ふに、うち聲づくりて近く參り給へれば、いまだおはしましけるな、とて、いとらうたし、と思されたる御氣色あはれなり。大方のけしき院の內のかい濕りたるありさまなど、よろづ思しめぐらすに、いと悲しき事多かれば、宮うち泣き給ひぬ。心細ういみじとのみ思さるゝに、正中元年六月二十五日終にかくれさせ給ひぬ。御年五十八にぞならせ給ひける、後宇多院と申すなるべし。御門又御服奉る。旦暮念比に孝じ奉り給ふさま、いとかたじけなし。御女の皇后宮ときこえし、今は達智門院と申すも、まいて一所をのみ賴み聞えさせ給へるに、心細ういみじと思し歎く事限なし。昔の內侍のかんの君近比院號ありて、萬秋門院と聞ゆるも、故院の御かげにてのみ過し給へれば、より所なく哀げなり。御四十九日は八月十日餘の程なれば、世の氣色なにとなく哀おほかる

第十七　春のわかれ

○此の巻は後醍醐天皇の正中元年より嘉暦二年までの事を記せり
柏夾して―冠の纓を縮れて白木をもて挾む

四月の末つ方より、法皇御悩重くならせ給へば、天下の騒ぎ思ひやるべし。御門もいみじく思し歎き、御修法どもいとこちたく、また〳〵始め加へさせ給へど、験なくて日々に重らせ給へば、夜晝となく、いかに〳〵ととぶらひ奉らせ給ふ。若き上達部などは、直衣に柏夾して、夜中曉となく、遙けき嵯峨野を寮の御馬にて馳せありきたまふめり。今はむげに頼みなきよし聞ゆれば、大覺寺殿へ行幸ありし事思し出づ。萬の事ども聞えさせ給ふ。上の一つ御腹の二品法親王性圓と聞ゆるを、いとかなしきものに思ひ聞えさせ給ひて、この大覺寺に、そこらの御莊御牧など寄せたまふ。法のあるじとしておはしますべく思しおきてけり。さやうの事など見給へざらんあと、後めたからぬさまなどぞ聞えさせ給ひける。その後御孫の春宮行啓あり。世を知しめさん時の御心づかひなど、今すこしこまやかに聞えしらせ給ふ。宮は先帝の御かはりにも、いかで心のかぎり仕う奉らん、とあらましおぼされつるに、飽かず口惜うて、いたうしほたれさせたまふ。御門の御ならひ、うはべはいとよけれども、まめやかならぬをいと心苦しと思さるれど、こ

たかりし。時過ぎてその後は、成定といふ諸大夫いみじかりき。この比は又隠岐守頼基といふもの、童なりし程よりいたくまとはし給ひて、昨日今日までの御召人なれば、御ぐしおろすにもやがて御供仕うまつりけり。病重らせ給ふ程も、夜晝御傍はなたずつかせ給ふ。既に限りになり給へる時、この入道も御後に候ふに、よりかゝりながら、きと御覽じ返して、哀もろともに出で行く道ならば、うれしかりなんと宣ひもはてぬに、御息とまりぬ。右大臣殿も御前に候はせ給ふ。かくいみじき御氣色にてはて給ひぬるを、心うしとおぼされけり。さてその後かの頼基入道も病づきて、あと枕も知らずまどひながら、常は人にかしこまるけしきにて、衣引きかけなどしつゝ、やがて參り侍る參り侍る、とひとりごちつゝほどなくうせぬ。粟田の關白のかくれたまひにし後、夢見ずと歎きしものの心地ぞする。故殿のさばかり思されたりしかば、とりたるなめりとぞ、いみじがりあへりし。

あと枕もしらず云々—前後も知らずもがき苦むさまなり
取りたるなめり—迎へ取りたるなるべし

大臣の節會行はる。左大將經忠右大臣にならせ給ふ。內大臣冬教左にうつり給へば、右大將實衡內大臣になさる。又の日やがて右大臣殿大饗行ひ給へば、尊者には內大臣參り給ふ。近衞殿此比は御惱がちにてのみ臥したまへれど、今日の御悅に、めづらしく出でゐさせ給へり。法皇は今は大覺寺殿にのみおはしませば、大炊御門の式部卿親王の御家を內大臣殿申しうけて、おなじ日大饗したまふ。尊者には右大臣、やがてわが御家の大饗終つるまゝに、ひき連れてわたり給へり。主人も客人も大將かね給へば、隨身どもえならず經營して、かたみにけしきとりかはしたる、いとおもしろし。あるじのおとゞ琵琶、右衞門督兼高篳篥、隆資朝臣笙、室町三位中將公春琴、敎宗朝臣笛、有賴宰相拍子とりて遊びくらし給ふ。御前の物どもなど、常の作法にことをそへてこまかに淸らなり。その後いく程なく右大臣殿の御父君前關白殿家平、御惱重くなり給ひて御髮おろす。俄の事なれば、殿の內の人々いみじう思ひ騷ぐ。大方若くてぞ、すこし女にもむつまじくおはしまして、この右大臣殿なども出でき給ひける。中比よりは男をのみ御傍に臥せ給ひて法師の兒のやうに語らひ給ひつゝ、ひとわたりづついと花やかに時めかしたまふことけしからざりき。左兵衞督忠朝といふ人も限りなく御おぼえにて、七八年がほどいとめで

花の色かさなりなどまで―花の色あひ瓣の重なりたるなどまで細密にして美し

神館―賀茂の齋館、神事潔齋の神官の參籠する處

ゆしく誠に花をおるとはこれにや、とめでたうおもしろかりし。左大將殿の隨身は、赤地の錦の色も紋も目なれぬさまに好もしきを、情なきまでさながらだみて、ませに山吹を白がねにてうちものにして、ひしと著けたり。花の色かさなりなどまで、こまかに美くし。露を水晶の玉にておきたる、朝日に輝きて、すべていみじうぞ見ゆる。西園寺の隨身もおなじ錦なれど、松を結びて鶴のまろを白と黄とにうちて附けたる、山吹よりはにほひなくぞ見ゆ。さま〴〵の神寶神馬幣帛など、夜もすがらのゝしりあかして、又の日の暮つかた歸らせ給ひぬ。おなじ四月十七日、賀茂社に行幸なる。上達部なども多くはさきにおなじ。衣がへの下襲ども、けぢめなく涼しげなり。別當の下部此度は十二人、かちんに雉の尾を白ううち違へて付けたる、これも揭焉にこのましげなり。明くる日は祭なれば、神館のかた、うち續き花やかにおもしろし。今日の使は德大寺中將公淸なり。春宮大夫公賢の聟にておはすればにや、左大臣の大炊御門富小路御家よりぞ出で立たれける。人がらといひ萬めでたく見ゆ。萠黃の下がさね御家の紋の木爪を、色々に織りたりしにや、近比のつかひには似ず、いといみじくきらめきたまへり。中宮の使は亮藤房なり。この比時に遇ひたるものなれば、いと淸げに劣らぬさまなり。その二十七日に任

家のやう―家風

はしり下部―撿非違使の下吏

いたく過したる―通冬よりは甚しく老いたる

聞えめと、飽かぬ事なく見え給ふ。土御門中納言顯實、花ざくらの下がさねなりき。花山院中納言經定などぞ、上臈の若き上達部にて、如何にも珍らしからんと世人も思へりしかど、家のやうとかや何とかやとて、たゞいつものまゝなり。公泰宰相中將劍璽の役つとめらる。櫻萌黄のうへの袴、樺櫻の下がさね、山吹の浮織物のきぬ、紅の打たるひとへを重ねられたり。白くまろく肥えたる人の眉いと太くて、緌のはづれあな淸げ、とたのもしくぞ見えられし。頭亮藤房樺櫻の下がさね、蘇芳の浮織物のきぬ、弟の職事季房も山吹の下がさね、紅のきぬ、衞府のすけどもは、うちこみたれば見もわかず。別當左兵衞督資明、はしり下部とかやいふもの八人。太刀は皆しろがね延べたるにやと見ゆるに、鶴の丸を黄に磨きたる、好ましう淸げなり。舞人にもよき家の子どもを擇びとゝのへられたり。左に中院の前大納言通顯の子通冬少將、まだいとちひさきに、童などもおなじ程なるをこのみとゝのへて、いと淸らにいみじうしたてて、秦の久俊といふ御隨身をぞ具せられたる。右に久我少將通宣いたく過したる程にて、ひげがちにねびたまへるかたちして、小きに立ち竝ばれたる、いとたとしへなくぞ見えし。それよりつぎづぎは、むつかしさに忘れぬ。大將の隨身どもこそ、昔の事はげには見ねば知らず。いとゆ

しろし。蘇合、萬秋樂、のこる手なく幾返となくつくされたり。明けがたは身に泌むばかり若き人々めであへり。さらでだに秋の初風はげにそゞろ寒きならひを、ことわりにや、御遊はてゝ文臺召さる。この度は和歌の披講なれば、その道の人々、藤大納言爲世、子ども孫ども引きつれてさぶらへば、うへの御製、

　笛竹のこゑも雲ゐに聞ゆらしこよひたむくる秋のしらべは

順ながるめりしかど、いづれも只天の川かさゝぎの橋より外は、めづらしきふしは聞えず、まこと實敎大納言なりしにや、

　おなじくは空までおくれ薫物のにほひをさそふ庭の秋かぜ

げにえならぬ名香の香どもぞ、めでたくかうばしかりし。花も紅葉も散りはてゝ、雪つもる日數の程無さに、又年かはりて正中元年といふ。三月の二十日あまり、石淸水社に行幸したまふ。上達部殿上人いみじき淸らを盡せり。關白殿は御車なり。右大將松がさねの下がさね、鶴のまるをおる。蘇芳のかたもんのきぬ、左大將櫻萌黄の二重織物の御下襲、櫻に蝶を色々におる。花山吹の上の袴、紅のうちたる御衣、人よりことにめでたく見え給ふ。御かたちもにほひやかにけだかきさまして、誠に一の人とはかゝるこそは

五經―毛詩尚書禮記周易左傳

久しかるべきは云々―易の繫辭に可久則賢人德

なる板―踏めば鳴る故にいふ清涼殿の孫庇の南なる落板敷より長橋を經て紫宸殿の西北階に至る處に在り

權中納言和琴、左宰相中將笙、右衞門督笛、右宰相中將篳篥、拍子はれいの左大臣、すゑは冬定なりしにや。うへの御琵琶の音いひ知らずめでたし。右大將は何にかあらん、心とけてもかきたてられざりき。御遊はてゝのち文臺めさる。藏人內記俊基人々の文をとりあつめて、一度に文臺の上に置く。披講の終る程に、短夜もほの〴〵と明けはてぬ。御製を左大臣かへす〴〵誦じて、うるはしく朗詠にし給ふ。聲いと美くし。折ふし郭公の一聲なのりすてて過ぎたるは、いみじくえんなり。かやうのまことしき事は、かねて人々も心づかひすれば過なかるべし。時に臨みて俄にかたき題をたまはせて、內々詩をつくらせ歌をよませて、賢愚なると御覽じわくに、いとからい事おほく心ゆるびなき世なり。その七月七日乞巧奠、いつの年よりも御心留めて、かねてより人々に歌ども召され、物の音ども試みさせ給ふ。その夜は例の玄象彈かせたまふ。人々の所作ありし作文にかはらず。笛篳篥など殿上人ども、なる板のほどに候ひて仕うまつる。中宮も上の御局にまう上らせたまふ。御簾の內にも琵琶あまたありき。播磨守永定の女、今は左大臣の北方にて、三位殿といふも箏彈かれけり。宮の御方の播磨內侍も、おなじく琴彈きけるとかや。琵琶は權大納言の三位殿、いみじき上手におはすれば、めでたうおも

に參りつどふ。今は一すぢに御行にのみ御心入れ給へるに、いとうるさく思せば、その夏の比、定房大納言あづまへ遣さる。御門に天の下のことゆづり申さんの御消息なるべし。大方はいとあさましうなりはてたる世にこそあめれ。かばかりの事は父帝の御心に、いとやすく任せぬべきものを、と目ざましけれど、昨日今日始りたるにもあらず、承久よりこなたは斯くのみなりもて來にければなめり。内に近く候ふ上達部などのなま腹ぎたなき、わが思ふ事の滯りなどする、猶法皇をうれはしげに思ひ奉りて、この事いかで東より免し申すわざもがな、と祈りなどをさへぞしける。かくて大納言程なく歸りのぼりぬ。御心のまゝなるべく奏したりとて、院の文殿議定所にうつされ、評定衆などせう〳〵かはるもあり。さて世をしたゝめさせ給ふ事、いとかしこう明らかにおはしませば、昔に恥ずいとめでたし。御才もいとはしたなうものしたまへば、萬の事くもりなかめり。三史五經の御論議などもひまなし。みな月の比中殿の作文せさせたまふ。題は式部大輔藤範奉る。久しかるべきは賢人の徳とかや聞えしにや、女のまねぶべき事ならねば漏しつ。上達部殿上人三十餘人參れり。關白殿ばかり直衣にて、御几帳の後に候はせ給ふ。うへは御引直衣御琵琶ひかせ給ふ。右大將琵琶、春宮大夫箏、權大納言笙、

御行―佛道の御修行

くもりなかめり―暗からぬ樣也

三史―史記前漢書後漢書

の―「たえはつる契をひとり忘れぬもうきも我身の心なりけり」こいま―こいま夏引いはねなど皆雜仕の名

衛中宮内侍、後に准后と聞えにき。しりに、夏引、いはねを、三の車に少將内侍、尾張内侍、しりに青柳今參など聞ゆ。上達部御前に著きてのち御臺參る。役送は宰相中將公泰、陪膳は右大將兼季、その程舞人ひざまづく。地下の舞は目なれたる事なれど、をりからにや、今日は殊におもゝち足踏もめでたく見ゆ。院の御おぼえにて、壽王といふ人、松殿のなにがしとかやが子なり。落蹲など舞ふと聞きしかど、夜もふけ雪もことにかきくらして、何のあやめも見えざりき。その後御前の御あそび始まる。頭大夫冬方御箱の蓋に御笛入れて持ちて參る。關白とりて御前に參らせ給ふ。右大將も笛、中宮大夫琵琶、大宮大納言笙、春宮大夫琴、右宰相中將和琴、光忠宰相篳篥、兼高も吹きしにや。拍子は左大臣、すゑ冬忠の宰相なり。更けゆくまゝに上の御笛の音すみのぼりて、いみじくさえたり。左大臣の安名尊伊勢海のかぎりなくめでたく聞ゆ。ことども果てぬれば御贈物參る。錦の袋に入れたる御笛、箱の蓋にすゑらる。左大臣とりつぎて關白に奉る。御前に御覽ぜさせて、冬方を召して給はす。次に唐の赤地の錦の袋に、御琵琶入れてまゐる。その後御馬殿上人口をとりて、御前に引き出でたり。ほの〴〵と明くる程にぞ歸らせ給ひぬる。法皇はやゝもすれば、大覺寺殿にのみ籠らせおはします。人々世中のことども奏し

もなし。洲崎にたてる鶴のけしきも、千代をこめたる霞の洞は、誠に仙人の宮もかくやと見えたり。京極おもての棟門に御輿をおさへて、院司事のよしをそうす。亂聲の後中門に御輿をよす。中門の下よりいづる遣水に、ちひさく渡されたる反橋の左右に、兩大將ひざまづく。劍璽は權亮宰相中將公泰つとめられしにや。關白公卿の座の妻戸の御簾をもたげて、入れ奉らせ給ふ。とばかりありて寢殿の母屋の御簾皆あげわたして、法皇出でさせ給へり。香染の御衣、おなじ色の御袈裟なり。御袈裟の箱御側におかる。内のうへ公卿座より勾欄を經たまふ。御供に關白さぶらひ給ふ。階の間より出でたまひて、廂に御座奉りたれば、御拜したまふほど、西東の中門の廊に上達部多くうちかさなりて、見やり奉る中に、うちの御乳母の吉田の前大納言定房、まみいたう時雨たるぞ哀に見ゆる。そのかみのことなど思ひ出づるに、めでたき喜の涙ならんかし。御拜をはりぬれば、又もとの道を經給ひて、公卿座に入らせたまひぬ。法皇も内に入りたまひて、しばしありて左右の樂屋の調子とゝのほりて後、又御門入らせ給ふ。法皇もおなじ間の内に御茵ばかりにておはします。末のひさしに、内より參れる女房ども候ふ。一の車に小大納言君、うきも我身の、と詠みし人の妹なり。帥典侍さぬき、こいまとかや。二の左に新兵

も—源順、「水の上に照る月なみを數ふればこよひぞ秋のもなかなりける」

景陽の鐘—支那南北朝時代に景陽樓上におかれし鐘、御製を講じたる時にたまたま曉を告ぐる鐘の音聞えて一入か面白りし也

て、左右の講師隆資爲冬乘せらる。御みきなど參るさまも、うるはしきことよりは艷になまめかし。人々の歌いたくけしきばみて、とみにも奉らず。いと心もとなく、照る月なみも曇なき池の鏡に、いはねどしるき秋のもなかは、げにいと異なる空の氣色に、月も傾きぬ。明方近うなりにけり。うへの御製、

　鐘の音も傾く月にかこたれて惜しと思ふ夜はこよひなりけり

と講じあげたるほど、景陽の鐘も響を添へたる折柄いみじうなん。いづれもけしうはあらぬ歌ども多く聞えしかど、御製の鐘の音にまされるは無かりしにや。かくて今年もまた暮れぬ。明くる春正月三日朝覲の行幸あり。法皇は御弟の式部卿のみこの御家、大炊御門京極といふにぞおはします。內裏は二條萬里小路なれば、陣の中にて大臣以下かちより仕うまつらる。關白內經、太政大臣通雄、左大臣實泰、左大將兼季、右大將冬敎、中宮大夫實衡。中納言には具親、公敏、爲藤、顯實、經定。宰相には實任、冬定、公明、光忠。中將は公泰、資朝。殿上人は、頭中將爲定、修理大夫冬方を始めて、殘るはすくなし。この院も池のすまひ山の木立、もとよりよしあるさまなるに、時ならぬ花の木梢をさへつくり添へられたれば、春の盛に變らず咲きこぼれたるに、雪さへいみじく降りて、殘る常磐木

撰者の事なれば、多くはかの集にかはらざるべし。爲藤中納言、父よりはすこし思ふ所加へたる主にて、今少しこの度は心にくきさまなりなどぞ、時の人々沙汰しける。院にも内にも朝政のひま〳〵には、御歌合のみ繁う聞えし中に、元亨元年八月十五夜かとよ、常よりことに月おもしろかりしに、上萩の戸に出でさせ給ひて、異なる御遊などもあらまほしげなる夜なれど、春日の御榊うつし殿におはします比にて、絲竹のしらべはをり惡しければ、例の只内々御歌合あるべしとて、侍從の中納言爲藤召されて、俄に題奉る。殿上に候ふかぎり、左右同じ程の歌よみを擇らせ給ふ。左は内の上、春宮大夫公賢、左衛門督公敏、侍從中納言爲藤、中宮權大夫師賢、宰相惟繼、昭訓門院の春日、右は藤大納言爲世、富小路大納言實教、洞院中納言季雄、公脩、宰相實任、少將内侍、忠定朝臣、爲冬、忠守などいふ醫師も、この道のすきものなりとて召し加へらる。衛士のたく火も月の名だてにやとて、安福殿へ渡らせたまふ。忠定中將、晝の御座の御佩刀をとりて參る。殿上のかみの戸を出でさせ給ひて、無名門より右近の陣の前を過ぎさせ給へば、遣水に月の映れるいとおもしろし。安福殿の釣殿に障子たてて、東面におはします。上達部は簀子の勾欄に脊中おしあてつゝ殿上人は庭に候ひあへるもいと艶なり。池の御船さしよせ

―紀伊和歌浦に在り祭神衣通姫和歌三神の一

うつし殿―假殿春日の神木を假殿に遷したるなり

衛士のたく火も云々―禁中警衛兵士のたく火も月影の妨と厭ひて安福殿に入らせ給ふ也

名たて―名折れ

照る月なみ

うきにまぎれぬ云々ー按察使顯朝の歌「かくばかり思ひ絶えにし年月のうきにまぎれず人の戀ひしき」

正身は云々ー君の寵遇以前に倍すれども本人は忝しとも思はず尙好色の念歇まざりしが如し

玉津島の社

給はせければ、思ひかはしてすまれし程に、かしこにてうせにき。御門の御母女院十一月うせ給ひにしかば、内のうへ御服奉る。天下ひとつに染めわたして、葦簾垂とかいとまがまがしきものども懸け渡したるも、哀に甚くぞ見ゆる。五節もとまりぬ。若き人々などさうざうしく思へり。當代も亦敷島の道もてなさせ給へば、いつしかと勅撰の事仰せらる。前藤大納言爲世承る。玉葉のねたかりしふしも、今ぞ胸あきぬらんかし。この大納言の女權大納言の君とて、坊の御時かぎりなく思されたりし御腹に、一の御子、女三のみこ、法親王などあまたものし給ふ。かの大納言の君は早うかくれにしかば、この比三位おくらせ給ふ。贈從三位爲子とて、集にもやさしき歌多く侍るべし。さて大納言は人々に歌すゝめて、玉津島の社に詣でられけり。大臣上達部より始めて、歌よむと思へるかぎり、この大納言の風を傳へたるは漏るゝもなし。子ども孫どもなど、勢ことにひびきてくだる。まづ住吉へ詣で逍遙しつゝのゝしりて、九月にぞ玉津島へまうでける。歌どもの中に、大納言爲世、

今ぞしる昔にかへるわが道のまことを神もまもりけるとは

かくて元應二年四月十九日勅撰は奏せられけり。續千載といふなり。新後撰集とおなじ

時めく—君寵を得てさかゆる
いとめざましく—具親の所爲を
げに須磨の浦にも云々—流罪にもせむとまで思されたりとなり源氏物語の源氏の君を須磨流謫の事によりて書けり

むかし見し秋のみやまの月かげを思ひいでてや思ひやるらん

御門のおなじ御腹の前齋宮も皇后宮にたゝせ給ふ。御母准后も院號ありて、談天門院とぞ聞ゆめる。萬花やかにめでたき事ども繁うきこゆ。内には萬里小路大納言入道師重といひしが女、大納言典侍とていみじう時めく人あるを、堀川春宮權大夫具親の君、いと忍びて見そめられけるにや、かの女かき消ち失せぬとて、もとめ尋ねさせたまふ。一二日こそあれ、程なくその人と現はれぬれば、うへいとめざましくにくし、とおぼす。やんごとなき際にはあらねど、御覺の時なれば、きびしく咎めさせ給ひて、げに須磨の浦へも遣さまほしきまで思されけれども、さすがにて、官職皆留めていみじう勘ぜさせ給へば、かしこまりて、岩倉の山庄にこもりゐぬ。花の盛におもしろきをながめて、

うきことも花にはしばしわすられて春の心ぞむかしなりける

典侍の君は歸り參れるを、つらしと思すものから、うきにまぎれぬ戀しさとや、いよいよらうたがらせ給ふを、さしもあかず正身は、なほ好き心ぞ絶えずありけんかし。

絶えはつる契をひとりわすれぬもうきもわが身の心なりけり

とてひとりごたれける。末ざまには公泰大納言、未若うおはせしころ、御心とゆるして

き事―隔てがましき事

齢の末に―老年餘命幾何もなき時に當りて、實兼時に七十一歲

におもほしかはしたる、いとありがたうめでたし。本院は、廣義門院の御腹の一の御子を、この度の坊にや、と思されしかど、ひき過ぎぬれば、いと遙けかるべき世にこそ、とさう〴〵しく思さるべし。御歌合のついでなりしにや、

いろいろに都は春のときにあへどわが住む山は花もひらけず

大覺寺殿には、ひきかへ馬車の立ちこみたるを御覽じて、法皇よませ給ひける。

我れすめばさびしくもなし山里もあさまつりごと怠らずして

今のうへは、早うより西園寺の入道おとゞ實兼の末の御女、兼季大納言のひとつ御腹にものし給ふを、忍びて御覽じつゝ、わく方なき御思ひ、年に添へてやんごとなうおはしつれば、いつしか女御の宣旨など聞ゆ。程もなくやがて八月に后だちあれば、入道殿も齢の末に、いとかしこくめでたしとおぼさるべし。北山に罷出給へる比行幸あり。八月十五日の夜、名をえたる月も殊に光をそへたる、所がらをりからおもしろく、めでたき事ども花やかなるに、御姉の永福門院より、今の后の御方へ御消息聞え給ふ。

こよひしもくもゐの月もひかり添ふ秋のみ山を思ひこそやれ

御かへしは、麻呂聞えん、と宣はせて、内のうへ、

いとむくつけし―甚だおそろしく厭はし

御子のよしにて―御養子にて

そば〳〵し

いと珍らかにあさまし。さて拍子俄にこと人承る。大事どもはてゝ後尋ね沙汰ある程に、紙屋川三位顯香といふものゝ、この拍子をいどみて、我こそつとむべけれ、とおもひければ、かゝる事をせさせけり。道にすける程はやさしけれども、いとむくつけし。さてかの三位は流されぬ。かくて今年は暮れぬ。まことや此度の東宮には、後二條院の一の御子定まり給ひぬれば、御門坊におはしましゝ時のまゝに、冷泉萬里小路殿寢殿にうつり住ませ給へるに、二月の比軒の梅盛にをかしき夕ばえを御覽じて、内に奉らせ給ふ。かの花につけて、

なれにける花はこゝろやうつすらん同じ軒端の春に逢へども

御かへしは南殿の櫻にさしかへ給ふ。

花はげに思ひ出づらん春をへてあかぬ色香にそめしこゝろを

おりゐの御門は、御兄の本院とひとつ持明院殿にすませ給ふ。もとより御子のよしにておはしませば、まいて一つ院の内にて、いさゝかも隔なく聞えさせ給ふ。いと思ふ樣なる御ありさまなり。さるべき御中といへども、昔も今も御腹など變りぬるはいかにぞや、そば〳〵しき事もうちまじり、くせある習ひにこそあるを、この院の御間まめやか

〇此卷は後醍醐天皇の文保二年より正中元年までの事を記せり

第十六　秋のみ山

文保二年二月二十六日、御門おりゐさせ給ふ。春宮は既に三十にみたせ給へば、待遠なりつるに、めでたく思さるべし。法皇都に出でさせ給ひて世中しろしめさる。龜山殿はさる事にて、近比は大覺寺のほとりに御堂たてゝ籠りおはしましつゝ、いよ〳〵密教の深き心ばへをのみ勤め學ばせ給へば、おのづからも京に出させ給ふ事なく、又參りかよふ人も稀なるやうにて、神さびたりつるを、引きかへ事繁き世に、行も懈怠し給へば、むつかしく思さる。三月二十九日御卽位なり。行幸の當日に左大將内經、花山院右大將定行列を爭ひて、隨身どもわゝしくのゝしれば、御輿をおさへて、職事奏し下しなどすめり。左大將の御父君は、内實のおとゞと聞えし。嘉元の比俄にかくれたまひしにかば、攝籙もしあへ給はざりしにより、今はたゞ人にてこそいますべければとて、かく爭ふとぞ聞えし。十月二十七日大嘗會、淸暑堂の御神樂の拍子のために、綾小路宰相有時といふ人、大内へ參り侍るとて、車よりおるゝ程に、いとすくよかなる田舍侍めくもの、太刀を拔きて走り寄るまゝに、あやなく擊ちてけり。さばかり立ちこみたる人のなかにて、

す。二條富小路の昔の院のあとに、あづまより造りて奉る內裏、この比御わたましありしなど、いと〳〵おもしろかりき。近き事は人皆御覽ぜしかば、なか〳〵にて止めつ。

人々もさと時雨わたり|此御製を拜してさぶらふ人にはかに涙の時雨に袖をぬらしたりとなり

御門は御輕服にて云々|花園院は伏見院には御孫分なれば重服に非ず隨つて朝臣皆黑服を著せず

ながら月や木の葉もいまだつれなきにしぐれぬ袖の色や變らん

また、

わが身こそあらずなるとも秋の暮をしむ心はいつもかはらじ

人々もさと時雨わたり、袖の上、今日をかぎりの秋の名殘よりも忍びがたし。大納言爲子、

ひとすぢに暮れゆく秋を惜まばやあらぬ名殘を思ひそへずて

又誰にか、

いかにしたひいかに惜まん年々の秋にはまさる秋のなごりを

十月十五日、伏見殿へ御幸。かぎりの旅と思せば、えもいはず引きつくろはる。庇の御車なり。上達部殿上人數しらず仕うまつりたまふ。世の政事なども新院にゆづり奉らせ給ひしかば、心靜にのみ思されて、伏見殿がちにのみぞおはしましゝ程に、そこはかとなく、御惱月日經て、文保元年九月三日かくれさせ給ひにき。伏見院と申しき。御母玄輝門院、永福門院などの御歎思ひやるべし。帝は御輕服の儀なれば、天下も色變らず。この院、姫君あまたおはしましゝかど、院號は章義門院、延明門院ばかりにておはしま

今だに云々—おくれながらもせめては今なりとも撰集を行はむと急ぎたまへるなり

國母の御心地にて、萬めでたかりき。院のうへさばかり和歌の道に御名たかくいみじくおはしませば、いかばかりかと思されしかども、正應に撰者どものこと故煩どもありて、撰集も無かりしかば、いとゞ口をしう思されて、

わが世には集めぬ和歌のうら千鳥空しき名をやあとに殘さん

など詠ませおはしましたりしを、今だにと急ぎたゝせたまひて、爲兼大納言承りて、萬葉より此方の歌ども集められき。正和元年三月二十八日奏せらる。玉葉集とぞいふなる。この爲兼大納言は、爲氏大納言の弟に、爲教右兵衞督といひしが子なり、かぎりなき院の御おぼえの人にて、かく撰者にもさだまりにけり。そねむ人々多かりしかど、さはらんやは。この院のうへ好みよませ給ふ御歌のすがたは、前藤大納言爲世の心地には變りてなんありける。御手もいとめでたく、昔の行成大納言にもさり給へる、など時の人申しけり。やさしうも强うもかかせおはしましけるとかや。正和も二とせになりぬ。今年御本意遂げなんと思さる。九月の暮つかた賀茂に忍びて御籠の程、をかしきさまの事ども侍りけり。近く候ふ女房どももうちしほたれつゝ、晦がたの空のけしき、いとものの哀なるに、御製、

十月…せられたり—大の月なるを小に改めて其三十日を十一月朔日とすべき由宣下せられたり

後宴—御元服の後に宴會を行はれて群臣に祿を給ふ儀

は、いつしかめでたき事どものみ聞ゆる、大覺寺殿には遊義門院の御事にうちそへて、御涙のひる世なくおぼさるべし。師のみこの御事をあづまへ宣ひ遣したる、相違なしとて、九月十九日立太子の節會ありて坊に居給ひぬ。今は世をとぢむる心地しつる人々少し慰みぬべし。その年十月大なりつるを、保元の例とかやとて、十一月朔日に宣下せられたり。あたらしき御代にあたりて、月日さへ改まりにけり。十一月十二日御即位攝政は後昭念院殿冬平、今日御悦申しありて、やがて行幸に參りたまふ。あるべきかぎりのことども、ふるきにかはらでめでたく過ぎゆく。延慶二年十月二十一日御禊、おなじ二十四日大嘗會、應長元年正月三日御年十五にて御冠したまふ。御諱富仁と聞ゆ。ひきいれ關白殿、理髮家平つかうまつり給ふ。南殿の儀式はてゝ、御よそひ改めて更に出でさせ給ふ。清涼殿にて御あそび始まる。攝政殿琴、右大將公顯琵琶、土御門大納言冬時笙、和琴大炊御門中納言冬氏、笛西園寺中納言兼季、別當季衡笙の笛吹き給ひけり。篳篥公守朝臣、拍子有時、めでたくさま〴〵おもしろくて明けぬ。五日には後宴とて、いますこしなつかしうおもしろき事どもありき。この御門をば新院の御子になし奉らせ給ひてしかば、朝覲の行幸の御拜なども、この御前にてぞありける。廣義門院もおなじく

踐祚―春宮の皇位を繼ぎ給ふこと

師愛染、いろ〱の祕法ども、諸社の奉幣神馬、何かとのゝしり騷ぎつれど、むげに不覺にならせ給ひて、二十三日御氣色かはるとて、世のひゞきいはん方なく、馬車走りちがひ、所もなきまで人々は參り込みたれど、いとかひなく、二十五日子時ばかりにはてさせ給ひぬ。火の消えぬるさまにて、かきくれたる雲の上のけしき、いはずともおしはかられなん。まことや中宮は、德大寺の公孝太政大臣の御女ぞかし。珍しくかの御家にかゝる事のいたくなかりつるに、御覺もめでたくて候ひたまへるに、あさましともいはん方なし。二十八日に罷出給ふ。先帝の御わざのさたあり。院號ありて後二條院とぞ聞ゆる。堀川右大將具守御車寄せらる。心のうちいかばかりかおはしけん。大將になり給へるも、この御門の西華門院むつましうも仕う奉り給へるに、いとほしき御事なり。御素服を著給はざりしをぞ、思はずなる事に世の人もいひさたしける。内侍のかんの君もさまかはり給ふ。中宮も院號ありて、長樂門院と聞ゆ。よろづ哀なる事のみ書き盡しがたし。春宮は正親町殿へ行啓なりて、劍璽わたさる。八月二十五日踐祚なり。十二にぞならせ給ふ。夢のうちの心地しつゝも程なく過ぎうつる。御日數さへはてぬれば、盡せぬあはれさむる世なけれど、人々もおのが散々になる程、今一しほ堪へがたげなり。持明院殿に

加行―御灌頂を受けたまふ前數日の間其の儀につきて功を加へ勤行あらせらるる事

露霜かさなりて、程なく德治二年にもなりぬ。遊義門院そこはかとなく御惱と聞えしかば、院のおぼしさわぐ事限なく、萬に御祈、祓とのゝしりしかど、かひなき御事にていとあさましく敢なし、院もそれゆゑ御ぐしおろして、一向に聖にぞならせ給ひぬる。その程さまぐの哀思ひやるべし。悲しき事ども多かりしかど、皆もらしつ。明くる年の春八幡の御幸の御歸りざまに、東寺に三七日おはしまして、御灌頂御加行とぞ聞ゆる。仁和寺の禪助僧正を御師範にて、かの寛平の昔をや思すらん、密宗をぞ學せさせ給ひける。六月には龜山殿にて御如法經かかせ給ふ。御髮おろし給ひて後は、大方女房は仕うまつらず。男番におりて御臺なども參らせ、萬に仕うまつる。いつも御持齋にておはします。いとありがたき善智識にてぞ、故女院はおはしける。嵯峨の今林殿にて、御法事など日日に怠らずせさせ給ふ。この今林は、北山の准后のおはせし跡なり。遊義門院の御ぐしにて梵字縫はせ給へり。かの御手の裏に、法華經一字三禮にかかせ給ひて、攝取院にて供養せらる。大覺寺の僧正御導師なり。故女院の御骨も、今林に法華堂建てられて置き奉らせ給へれば、月ごとの二十四日には必ず御幸あり。思し入りたる程いみじかりき。かくて、八月の初めつかたより、内の上例ならずおはしますとて、さまぐの御修法五壇藥

○この巻は徳治二年遊義門院の崩御より文保元年伏見天皇崩御の事までを記せり

挑み顔なる御方々―互に寵を爭ふ人々

内侍のかんの君―内侍の長官尙侍

第十五　うら千鳥

院のうへは御位におはせし程は、なか〳〵さるべき女御更衣も候ひ給はざりしかど、おりさせ給ひて後は、御心のまゝにいとよく紛れさせたまふ程に、この程は挑顔なる御方方數添ひ給ひぬれど、猶遊義門院の御志にたちならびたまふ人はをさ〳〵なし。中務宮の御女も、おしなべたらぬさまにもてなし聞え給ふ。勝れたる御覺にはあらねど、御姉宮の故院にわたらせ給ひしよりは、いと重々しうおぼしかしづきて、後には院號ありて、永嘉門院と申し侍りし御事なり。又一條攝政殿の姫君、當代堀川大臣の家に渡らせたまひし比、上臈に十六にて參り給ひて、初めつ方は基俊大納言疎からぬ御中にておはせしかば、かの大納言東下の後、院に參りたまひし程に、ことの外にめでたくて、内侍のかみになり給へる、昔覺えておもしろし。加階し給へりし朝、院より、

そのかみに賴めしことの違はねばなべて昔の世にやかへらん

御かへし、内侍のかんの君頊子とぞきこゆめりし。

契り來し心のすゑは知らねどもこのひとことや變らざるらん

たし—御譲の荘園等多し

しゝ程に、川ばた殿の女院（にようゐん）など人は申し侍りし。かの所は臨川寺（りんせんじ）とぞいふめる。都にも土御門室町にありし院、いづれもこの比は寺になりて侍るめりとぞ。めでたくこそあはれなれ。

けはひあはれなる夜―何となくあはれに悲しき夜

あかれ給ふ―わかれ給ふ

御處分などもいとこち

光忠朝臣

　世の中の歎のいろを知らねばや去年にかはらぬ蔦のもみぢ葉

これらをとり集めて、北殿の内親王の御方へ奉らせ給へれば、

　さすがなほいろは木の葉にのこりける形見もかなし秋の別路

雨うち灑ぎてけはひあはれなる夜、いたう更けて帥宮例の北殿へ參り給へれば、姬君も御殿ごもりぬ。候ふ人も皆靜まりぬるにや、格子など敲かせ給へど、あくる人もなければ、空しく歸らせ給ふとて、かきてさしはさませ給ふ。

　おのづから眺めやすらんとばかりにあくがれ來つる有明の月

御かへし、またの日

　いたづらに待つ宵すぎしむらさめはおもひぞたえし有明の月

月日程なくうつりぬれば、院も宮もおの〳〵ちり〴〵にあかれ給ふほど、今少し物悲しさ勝る御心のうちどもは盡きせねど、世のならひなればさのみしもはいかゞ、昭慶門院はあまたの宮たちの御中に勝れてかなしきものに思ひ聞えさせ給ひしかば御處分などもいとこちたし。大井河に向ひて、離れたる院のあるをぞ奉らせ給へれば、そこにおはしま

御殿油―御燈火
御覧じさしたる―見かけたる

四方はみな涙のいろにそめてけり空にはぬれぬ秋のもみぢ葉

あはれに見奉らせ給ひつゝ、名殘もいみじくながめられて、勾欄におしかゝりたまへる、夕ばえの御かたちいとめでたし。ありつる紅葉を、西園寺大納言公顯の宿直所へ遣はす。

雨と降るなみだの色やこれならん袖より外にそむるもみぢ葉

女院の御兄なれば、しめやかなる御山住の、心苦しさにさぶらひたまふなりけり。御返事、

いくしほか涙の色のそめつらん今日をかぎりの秋のもみぢ葉

時雨はしたなく風荒らかに吹きて暮れぬれば、宮は内に入り給ひて、御殿油近くめして、晝御覧じさしたる御經など讀み給ふほどに、若殿上人どもうち連れて、此方の御宿直にまゐれり。晝の蔦の葉の散りぼひたるを、人々見るに、宮それにおの〳〵歌かきて、と宣へば、中將爲藤朝臣、

もみぢ葉に泣く音はたえず空蟬のからくれなゐも涙とや見ん

淸忠朝臣、

山姫のなみだの色もこのころはわきてやそむる蔦のもみぢ葉

准后—三宮に准じて俸祿を賜はる人

きて、准后など聞えつるも思ひ歎き給ふべし。昭訓門院やがて御ぐしおろしたまふ。法皇は五十七にぞならせ給ひける。御骨も、この院に法花堂をたてゝ納め給へば、龜山院とぞ申すべかめる。禪林寺殿をば、おはしましゝ時より禪院になされき。南禪院といふはこれなめり。院の二のみこの御母、忠繼の宰相の女、今は准后と聞ゆる御腹におはします。この比帥宮と聞ゆるを、法皇とりわき御傍さらずならはし奉り給ひて、いみじうらうたがり聞えさせ給ひしかば、人より殊に思し歎くべし。比さへ時雨がちなる空のけしきに、山の木葉も涙あらそふ心地していとかなし。所がらしもいとゞあはれを添へたり、川浪の響、戸無瀬の瀧の音までも、とり集めたる御心の中どもなり。御日數のほどは、帥宮ひとつ御腹の内親王なども、この院におはします程、徒然なるまゝに、はかなし事など聞えかはして、花紅葉につけても睦しくなれ聞え給ふべし。帥宮の御子は、大多勝院に西の廂にわたらせ給ふ。御前の松の木に這ひかゝれる蔦の紅葉の、いたう染め焦したるを採りて、九月三十日の夕つかた、昭訓門院の御方へ奉らせたまふ。

　明日よりのしぐれも待たで染めてけり袖の涙やつたのもみぢ葉

木葉よりも脆き御涙は、ましていとゞせきかね給へりし。御かへし、

院も御供に引きさがりて—後宇多院も御供の人々より一段さがりて後より送り奉り給へり
茶毘—梵語焚焼の意卽ち火葬の火
素服—喪服

氏、爲藤、國房、經世、泰忠、光忠、皆狩衣の袖をしぼりしぼり參る氣色さへ、あはれを添へたり。院も御供にひきさがりて參り給ふ。花山院權大納言、西園寺中納言、土御門大納言御子親實少將、御太刀持ちて御供せられたり。よそほしかりつる御ありさまもいとほどなく、只ときの間の煙にてのぼり給ひぬれば、誰も〳〵夢の心地して、ほの〴〵と明けゆく程に、おの〳〵罷出給ふ。三條大納言入道公貫、萬里小路大納言師重などは、とりわき御志深くて御茶毘のはつるまで、墨染の袖を顔におし當てつゝ候ひ給ふ。かねてより山道造られて、木草伐り拂ひなどせられつれど、露けさぞ分けん方なき、涙の雨の添ふなるべし。內よりの御使に、はじめ長親朝臣、雅行、有忠朝臣など、三度まゐる。ふるき例なるべし。同二十八日、院の上御素服たてまつる。おはします殿には、黑き糸にて編みたる簾をかけける。淺黃べりの御座に、うへの御衣黑く、うへの御袴、裏柑子色、御下襲もくろし、おなじひへぎ、淺黃の御檜扇、御臺まゐるも皆黑き御調度どもなり。この御序に御方々も御素服たてまつる。人數、昭訓門院、昭慶門院、近衞殿の北政所關白殿の北政所、良助法親王、覺雲、順助、慈道、性惠、行仁、性融法親王たち、上達部もお山の御供したまふ人々みな漏れず。院の二の御子の御母も近比は法皇召しとりて、いと時め

よとともの—よと共に流れてぞゆく涙川冬も氷らぬみなわなりけり（古今）

水の白浪に—春の立歸りたる爲に、新古今に、降りつもる高れのみ雪とけにけり清瀧川の水の白浪

せ給ふ。いろ〳〵に御修法や何くれ御祈ども、こちたくせさせ給へるも驗なくて、九月十五日のあけぼのに終にかくれさせ給ひぬ。去年今年の世のさがなさ、打續きたる人々の御歎どもいはん方なし。世を背かせ給ひにし初つかたは、いときは猛う聖だちて、女房など御前にだに參らぬ事なりしかど、後にはありしより猶たはれさせ給ひし程に、永福門院の御さしつぎの姫君、はや御さかりも過ぐる程なりしを、この法皇に參らせ奉らせ給へりしが、かひ〴〵しく水の白浪に若やがせ給ひて、やがて院號ありしかば、昭訓門院ときこえつる。その御腹に一昨年ばかり若宮生れ給へるを、限なくかなしきものに思されつるに、今すこしだに見奉らせ給はずなりぬるを、いみじう思されけり。さてしもあらぬ習なれば、同じ十七日に御わざの事せさせたまふ。ことわりといひながら、いといかめしう人々仕う奉り給ふ。網代庇の御車、前右大臣殿寄せさせたまふ。烏帽子直衣、袴、きばにて參りたまふ。院のうへも庭におりさせ給ふ。法親王たち三人、山の座主、聖護院、十樂院、法親王などは藁沓をぞ奉る。上の山まで御供せさせ給ふ。上達部には前右大臣公衡、西園寺大納言公顯、萬里小路大納言師重、源中納言有房、三條前中納言實躬、宗氏の二位、重經の二位、爲雅の宰相、經守、爲行、親氏などなり。殿上人には賴俊朝臣、忠

床子―床几尻をかくるもの
うちとよみあひたる―泣き騷ぎあひたる
心をさむる人―心をとり直しこらふる人
御日數のほどは―御中陰（七七四十九日）の間

一つにおはしましつれば、急ぎて外へ行啓なりぬ。御修法の壇どもこぼ〳〵と毀ちて、くづれ出づる法師原のけしきまで、今を限りととぢめはつる世のありさま、いと悲し。宵過ぐるほどに、六波羅の貞顯、憲時二人、御とぶらひに參れり。京極おもての門の前に、床子にしり掛けてさぶらふ。隨ふものども左右に竝居たるさま、いとよそほしげなり。又の日夜に入りて、深草殿へゐてわたし奉る。御車さし寄せて御棺乘せ奉る程うちとよみあひたる、いとことわりに心をさむる人もなし。院の御前宮たちなど、藁沓とかやいふもの奉りて、門まで御送つかまつらせ給ひて、頓にもえのぼらせ給はず、御直衣の袖をおしあてゝ、遙に程經てぞ御車にたてまつりて、伏見殿への御おくりもせさせ給ひける。院のうちゆゝしきまで泣きあへり。後深草院とぞきこゆめる。御日數のほどは伏見殿に宮たち遊義門院などおはします。秋さへ深くなり行くまゝに、よとともの御涙ひる間なく思しまどふ。遊義門院、

物をのみ思ひ寢覺めにつく〴〵と見るも悲しきともし火の色

春著てし霞のころも乾さぬ間にこころもくるるあきぎりの空

年かへりぬれば、嘉元も三年になりぬ。萬里小路殿の法皇また御惱とて、龜山殿へ遷ら

かなしきもの—かはゆきもの

御腹にてものし給ふ。いと珍しくやんごとなし。されどうけばりたるさまにはおはせぬぞ、心もとなかめる。又の年は乾元元年六月十六日、龜山殿へ行幸あり。法皇いと珍しくうつくしと見奉らせ給ふ。曉歸らせ給ひぬるのち、法皇より内に聞えさせ給ふ。

したはるる名殘に堪ず月を見れば雲の上にぞかげはなりぬる

御かへし、内のうへ、

君はよし千歳のよはひ保てればあひ見んことの數も知られず

一院は忠繼の宰相の女の、中納言典侍殿といふ腹にも、男女御子たちあまたものし給ふ中に、勝れ給へる内親王を、いとかなしきものにかしづき聞えさせ給ふ。この御代にもまた、爲世の大納言うけたまはりて撰集あり。新後撰集ときこゆ。嘉元元年披露せらる。かくて又の年春の比より、東二條院御惱日々におもり給ひて、今はと見えさせ給へば、伏見殿へ出でさせ給ひて、遂にうせさせ給ひぬ。七十に餘らせ給へば、ことわりの御事なり。法皇もその御なげきの後、をさ〳〵物聞しめさずなどありしをはじめにて、うち續き心よからず御瘧病など聞ゆる程に、七月十六日二條富小路殿にてかくれさせ給ひぬ。六十二にぞならせ給ひける。いとあはれに悲しき事ども、いへばさらなり。御孫の春宮も

大納言入道顯定の云々｜顯定失望の極出家したる事おりゐる雲の巻に見えたり定實太政大臣になりて父の面を起したるはゆゝしき事なりとなり

うつろひかはる世の中かなとあぢきなし。土御門の前の內大臣定實、六月に太政大臣になりたまふ、いとめでたし。故大納言入道顯定の本意なかりし、御おもておこし給へるいとゆゝし。院の御覺えの人なるうへ、才もかしこくおはすれば、世に用ゐられ給へり。御子の大納言雅房、中納言親定とて、いづれも才ある人にておはしき。持明院殿には世の中すさまじく思されて、伏見殿に籠りおはしますべく宣へれど、二の御子坊に定まり給へば、又めでたくてなだらかにておはしますべし。先に聞えつる御母女院の御はらからの姫君、顯親門院と聞えし御腹なり。八月十五日まづ親王になし奉らせ給ひて、同二十四日に春宮に立ち給ひぬ。かくて新帝は十七になり給へば、いと盛りに美しう、御心ばへもあてに氣高うすみたるさまして、しめやかにおはします。三月二十四日御卽位、この行幸の時花山院三位中將家定、御劍の役をつとめ給ふとて、さかさまに內侍に渡されけるを、今出川の大臣御覽じ咎めて、出仕とゞめらるべきよし申されしかど、鷹司の大殿、なか〳〵沙汰がましくてあしかりなん、たゞ音なくてこそ、と申し留め給へりしこそなさけ深く侍りしか。後に思へば實にあさましきことのしるしにや侍りけん。十月二十八日御禊、この度の女御代にも、堀川の大臣の姫君いで給へり。今のうへも源氏の

御しめのおり給へる――神前のしめ縄の墜ちたるは

中宮の御腹には大かた宮ものし給はねば、この御門をぞ御子にし奉らせ給ひける。譲位の後は中宮もおりさせ給ひて、永福門院と聞ゆめり。皇后宮もこの比は遊義門院と申すなり。法皇の御傍におはしましつるを、中院いかなるたよりにか、ほのかに見奉らせたまひて、いと忍び難く思されければ、とかくたばかりて盗み奉らせ給ひて、冷泉萬里小路殿におはします。またなく思ひ聞えさせ給へる事かぎりなし。正安二年正月三日御門御元服したまふ。今年十三にならせ給へば、御行末遙なる程なり。又の年正月の比内侍所の御しめのおり給へるは、いかなるべき事にかなど、忍びてさゝめく程こそあれ、東よりの御使のぼるとて、世の中さわぎて、禪林寺殿御世を見奉り給ふ世にとや、正月二十一日春宮御位に卽かせ給ひぬ。おりゐの御門御年十四にて、太上天皇の尊號あり。いと幼稚にいたはしき御事なるべし。僅に三年にておりさせ給へれば、何事のはえもなし。この春は春日社に御幸などあるべしとて、世の中まだきよりおもしろき事にいひあへりつるも、かい濕りていとさうぐ〵し。さてこの君を新院と申せば、父の院をば中院ときこゆ。中御門の御父は一院と申す。法皇もこのころは一所におはしますなめり。一院世の政事きこしめせば、天下の人又おしかへし一方になびきたる程も、さも目の前に

おしなべてのきはならず優れて大事に

側にかしづき聞え給ひしならひにや、おしなへてのうへ宮仕の樣よりは、思ひあがれる氣色なり。今一所の御曹司も近き程なれば、そなたざまに歩みおはして、いと心靜ならねど、この君をばおしなべてのきはならず思すめり。この御腹に御子達あまたおはしましき。かくめぐらせ給ふ程に、いたく更けてぞ中宮昇らせ給ふ。この御代にもいみじき行幸どもゆゝしきこと多かりしかど、年のつもりに何事定ならず、月日などおぼろに侍ればなかなか聞えず。程なく明け暮れて永仁も六年になりぬ。七月二十二日春宮に御位讓りており給ひぬ。霜月になりて、五節の比去年を思し出でて、そのをりに關白にておはせし兼忠のおとゞに、櫛つかはすとて、新院、

少女子がさすや小櫛のそのかみをともに馴れにし時ぞ忘れぬ

御かへし、歡喜園前攝政殿、

いとど又去年の今宵ぞ忍ばるるつげの小櫛を見るにつけても

堀川の具守の大臣の女の御腹に、前の新院の若宮生れ給へりし。六月二十七日御元服し給ひて、八月十日春宮に立ち給ひぬ。御諱邦治と聞ゆ。これも内よりは御年三勝り給へり。今の御門は十一になり給ふ。御諱胤仁ときこゆ。あてになまめかしうおはします。

にぞよろづ言ひつけゝる。扨も上り給ひにし前大將殿は、嵯峨のほとりに御ぐしおろし、いと幽にさびしくてぞおはしける。かくて年かはりぬ。その年二月の比一院御髪おろし給ふ。年月の御本意なれど、躊躇過し給ひけるに、禪林寺殿去年の秋思し立ちにしに、いとゞ驚かされ給ひぬるにやありけん、二月十一日龜山殿にて御いむ事うけさせ給ふ。四十八にぞならせ給ふ。御法名素實と申すなり。む月の一日節會などはてゝ夕つ方、内のうへ皇后宮の御方へ渡らせ給へれば、宮は濃き紅梅の十二の御衣に同じ色の御ひとへ紅のうちたる萌黄の御上著、葡萄染の御小袿、花山吹の御唐衣、からの薄物の御裳、けしきばかりひきかけて、御ぐしぞ少しうすらぎ給へれど、いとなよびかに美しげにて、常よりも殊に匂加はりて見え給ふ。御前に、御匣殿、花山院内大臣師繼の女、二藍の七に紅のひとへ、紅梅のうはぎ、赤色の唐衣、地摺の裳、髪うるはしく上げて候ひ給ふ。簪樣體、これもけしうはあらず見ゆ。新しき年の御悅など少し聞え給ひて、例のたゞならぬ御事どもうちさゞめきがちにて、これより公守大納言女の曹司さしのぞかせたまへば、いとさゝやかにて、衣がちにて、花櫻のあはひにほはしきに、山吹の上著の裳ひきかけて寄り臥し給へる、あてにらうたし。こまやかにうち語らひ聞え給ふ、玄輝門院の御

七寶―佛教にいふ金、銀、瑠璃、頗梨、珊瑚、瑪瑙、硨磲、

いむ事うけさせ給ふ―佛の戒を受け給ふ

例のたゞならぬ御事―御懷姙

きくのとれんじの御輿―詳ならず菊の外樫子の輿歟

椀飯―饗應

帝釋の宮殿―梵天帝釋の居る莊嚴美麗なる宮殿

や。皇子は十月三日御元服したまひて、久明親王ときこゆ。おなじき十日の日、院よりやがて六波羅の北方、さき〴〵も宮のわたりたまひし所へおはして、それよりぞ東に赴かせ給ふ。おなじき二十五日鎌倉へ著かせ給ふにも、御關むかへとて、ゆゝしき武士どもうちつれて參る。宮はきくのとれんじの御輿に御簾あげて、御覽じ習はぬえびすどものうち圍み奉れる、たのもしく見給ふ。しのぶをみだれ織りたる萠黄の御狩衣、紅の御衣、濃き紫の指貫奉りて、いと細やかになまめかし。いひぬまの判官木賊草の狩衣、青毛の馬に金のかなものゝ鞍置きて、隨兵いかめしく召し具して、御輿のきはにうちたり。都にたとへば、行幸にしかるべき大臣などの仕うまつり給へるによそへぬべし。三日が程は椀飯といふ事、又馬御覽何くれといかめしき事ども、鎌倉中の經營なり。宮の中のかざり御調度などは更にもいはず、帝釋の宮殿もかくや、と七寶を集めて磨きたるさま、目もかゞやく心地す。いとあらまほしき御有樣なるべし。關の東を都のほかとて、貶むべくもあらざりけり。都におはしますなま宮たちの、より所なくたゞよはしげなるにはこよなく勝りて、めでたく賑はゝしく見えたり。時宗朝臣といひしも又頭おろして、法光寺の入道とて、いとたうとく行ひて世にもいろはず。太郎貞時の相摸守といふ

逆に寄せて―流罪人の輿は逆に向けて舁ぎ行くが例なり

御疊紙の音―はなをかむ音

よせ重く―後楯のおもおもしきは此上もなし

まつる男女、いと心細く思ひ歎く。たとへば御位などのかはる氣色に異ならず。さて上らせ給ふありさま、いとあやしげなる網代の御輿を、逆に寄せて乘せ奉るも、げにいとまが〳〵しき事のさまなり。うちまかせては都へ御上りこそ、いとおもしろくもめでたかるべきわざなれど、かく怪しきは珍かなり。御母御息所は、近衛大殿と聞えし御女なり。父親王の將軍にておはしましゝ時の御息所なり。先に聞えつる禪林寺殿の宮の御方も、同じ腹なるべし。文永三年より今年まで二十四年、將軍にて天下のかためといつかれ給へれば、日の本の兵をしたがへてぞおはしましつるに、今日は彼等に覆されてかくいとあさましき御有樣にてのぼり給ふ、いといとほしうあはれなり。道すがらも思し亂るゝにや、御疊紙の音しげう漏れ聞ゆるに、たけきものゝふも涙落しけり。さてこのかはりには、一院の御子、御母は三條内大臣の御むすめ、御匣殿とて候ひ給ひし御腹なり。當代の御兄弟にて、今少しよせ重くやんごとなき御有樣なれは、只夢幻の心地ぞする。もとの將軍おはせし宮をば、造り改めていみじうみがきなす。つはものゝ勝れたる七人、御むかへに上る中に、いひぬまの判官といふもの、前の將軍ののぼり給ひし道もまが〳〵しければ、あとをも越えじとて、足柄山をよぎて上るなどぞあまりなる事に

○この巻は正慶二年より嘉元三年亀山帝崩御までの事を記せり
都の放生會—石清水八幡宮の放生會、社頭にて魚鳥を放つ

第十四　つげの小櫛

さても岩清水の流をわけて、關の東にも若宮ときこゆる社おはしますに、八月十五日都の放生會をまねびて行ふ。そのありさま誠にめでたし。將軍も詣で給ふ。位ある兵諸國の受領どもなど、いろ〳〵の狩衣、思ひ〳〵の衣重ねて出立ちたり。赤橋といふ所に、將軍御車とゞめて下り給ふ。上達部は袍なるもあり、殿上人などいと多く仕うまつれり。この將軍は中務宮の御子なり。このころ權中納言にて右大將かね給へれば、御隨身ども花を折らせてさうぞきあへるさま、都めきておもしろし。法會のありさまも本社にかはらず、舞樂、田樂、師子がしら、流鏑馬など、さま〴〵所にしつけたる事どもおもしろし。十六日にも猶かやうの事なり。棧敷どもいかめしく造り竝べて、いろ〳〵の幔幕などひき續けて、將軍の御棧敷の前には、相摸守をはじめ、そこらの武士ども竝居たるけしき、さまかはりて好ましううけばりたり。心地よげに、所につけては又なく見えたり。その後いくほどなく、鎌倉より騷がしき事出で來て、皆人膽をつぶしさゞめくといふ程こそあれ、將軍都へ流され給ふとぞ聞ゆる。めづらしき言の葉なりかし。近く仕う

ろし、とて頭を揮るもさすがをかし。

放出—離れ座敷

物いひさがなき罪—惡口する罪遁れがたし

位山のぼりはてても峯に生ふる松にこゝろをなほのこすかな

さてつひに内大臣までのぼられき。さて元應の比かとよ、百首歌奉りし中に、

あつめこし窓の螢のひかりもて思ひしよりも身をてらすかな

と詠まれ侍りき。有房と聞えしが、若くての世の事なるべし。新陽明門院も、禪林寺殿のしもの放出に、つれ〴〵としておはします程に、松殿の宰相中將兼嗣いかゞしたりけん、常に參り給ひしほどに、はてにはその宰相中將の御子に、世を遁れたる人ありき。その御房に思しうつりて、限なく思したりしほどに、御子をさへ生み給ひき。その姫君は、初は富小路の中納言季雄の北方にておはせしが、のちには歡喜園の攝政と聞え給ひし末の御子に、基教三位中將と聞えしうへになりて、うせたまふまでおはしき。故女院いとほしくし給ひしかば、御處分などいと〳〵猛にありき。さのみかゝる御事どもをさへ聞ゆるこそ、物いひさがなき罪さり所なけれど、よしや昔もさる事ありけり、と此比の人の御ありさまも、おのづから輕き事あらば、思ひ聽さるゝ例にもなりてんものぞと思へば、遠き人の御事は、今は何の苦しからんぞとて、少しづつ申すなり、とうち笑ふもはしたなし。いづら此比は誰かあしくおはする、と問へは、いな〳〵それはそらおそ

語らひとられけるなめり—媒介に頼まれたるならん

この世一つ云々—前世の宿縁なる事もおしはからる

夢の直路を、打ち驚かす鐘の聲鳥の音も、人やりならぬ心盡にえ出でやらず、

　おきわかれ行く空もなきみち芝の露よりさきに我や消なまし

出でがてにやすらひたる面影も、何の御目とまる節もなし。さばかりいみじかりし院の御目うつりに、こよなの契の程やと思し知らるゝもつらければ、答もし給はず、あさましうも心憂くも、さま〴〵思し亂るゝに、御心地もまめやかに損はれぬべし。按察使君といふ人語らひとられけるなめり。忍びて御消息繁う聞ゆるをも、いとうたて心づきなう思されながら、さてしも果てぬならひにや、いと又哀なる事さへものし給ひけり。かかるにつけても、この世一つにはあらざりける御契の程、淺からずおしはからる。中將も夜と共にあくがれまさりて、夢の通路足も休めずなりゆく。この御氣色もやうやう著きほどになり給へば、空恐しとて、忍びて御乳母だつ人の家など云ひなして、白川わたりかごやかにをかしき所用意して、出でわたし奉りつゝ、猶自らはさすがに世のつゝましければ、忍びつゝぞ御宿直しける。そこにてこそ御子も生み給ひけれ。この中將才かしこくて、末の世にはことの外にもてなされて、まづ一品してしばしおはせし比、御百首の歌に、

そぼち―濡れしほれて

うちふくだめたる―指貫の裾をくくらずしてふくらしたるさま

ゆくりなき―思ひがけぬ

だに人のけはひも聞えず、哀なる程の御有様にて、墨を磨りたらんやうなる空の氣色のうとましげなるを、詠めさせ給ひなどするに、例の中將そぼち參りて、侍めく者一二人弓などもたせて、御宿直仕うまつらせ侍るべし、なにがしも侍のかたに侍らん、など申すにぞ、いさゝかたのもしくて人々慰め給ふ。おはします母屋にあたれる廂の勾欄におしかかりて、香染のなよらかなる狩衣に、薄色の指貫うちふくだめたるけしきにて、しめじめと物語しつゝ、いたう更け行くまでつく〴〵と候ひ給へば、御簾の中にも心づかひして、はかなきいらへなど聞ゆ。曉がたになりぬれば、御几帳ひきよせて御殿ごもりぬる傍に、いと馴れがほに添ひ臥す男あり、夢かやとおぼして御覽じあげたれば、年月思ひ聞えつるさま、おほけなくあるまじき事と思ひかへさひ、こゝら忍ぶるに餘りぬるほど、只少し、かくて胸をだにやすめ侍らんばかりなど、いみじげに聞ゆるは、はやうありつる中將なりけり。いとうたて心憂のわざやと思すに、御涙もこぼれぬ。近き手あたり御もてなしのなよびかさなど、まして思ひ靜むべうも無ければ、いといとほしうゆくりなき事とは思ひながら、殘りなうなりぬる、身の憂の限なうもあるかな、と前の世も怨めしう言ふがひなき事を思し續けて、よゝと泣き給ふ樣いよ〳〵らうたし。見るとしもなき

一院の…定めなし—後深草院は世を恨みて出家を企てながら遂げられず龜山院は未練なく御出家あり世中の事は定めなきものなり

聞えしはさもおはしまさで、かくすがやかにせさせ給ひぬる、いと定めなし。暫は禪僧にならせ給ふとて、綟衫の御衣に掛絡といふ袈裟かけさせ給へり。四十一にぞものし給ひける。御法名金剛覺と申すなり。新陽明門院をはじめ奉りて、いろ〳〵の御召人ども、廊の御方、讃岐二位殿など、さびしき院に殘りて、或はさまかへ、或は里へ罷出などさま〴〵散々になる程いと心細し、中務宮の御女は、もとよりいとあざやかならぬ御おぼえなりしかば、世を捨てさせ給ふきはとても、とりわきたる御名殘もなかるべし。禪林寺のうへの院の、人離れたる方にすゑ聞えさせたまへれば、事にふれていと寂しく心細き御ありさまなるを、おのづから言問ひ聞ゆる人もなし。源氏の末の君に中將ばかりなる人、院に親しく仕うまつりなれて、家もやがて其わたりにあれば程近きまゝに、折々この宮の御宿直など、心にかけて仕奉るを、候ふ人々もいとありがたくもと思ふ。宮の御方はこの比いみじき御盛のほどにて、まほに美しうおはしますを、あたらしう見奉りはやす人のなきことと思ひあへり。七月ばかり風あらゝかに吹き、電けしからず閃きて神鳴りさわぐ、常よりもおそろしき夜、はか〴〵しき人もなければ、上下いとあわたゞしく心細う思し惑ふ、法皇は龜山殿に過ぎにし比よりおはしませば、近きあたりに

さてなだらかにも…來ん—若しこの事の處分を猶豫し給はば今後一層恐るべき事變の生ぜんも測り難し

たはりて、鯰尾とかやいふ刀のありけるを、この中將日比持たれたりけるにて、かの淺原自害したるなどいふ事ども出できて、中院も知ろしめしたるなどいふ聞えありて、心うくいみじきやうにいひあつかふ、いとあさまし。中宮の御兄權大納言公衡、一院の御前にて、このことは猶禪林寺殿の御心合せたるなるべし。後嵯峨院の御處分を引きたがへ、東よりかく當代をもすゑ奉り、世をしろしめさする事を心よからず思すによりて、世を傾け給はんの御本意なり。さてなだらかにもおはしまさば、まさる事や出でまうで來ん。院をまづ六波羅に遷し奉らるべきにこそなど、かの承久の例も引き出でつべく申し給へば、いといとほしうあさましと思して、いかでかさまではあらん、實ならぬ事をも人はよく言ひなすものなりかし。故院のなき御影にも思さん事こそいみじけれ、と涙ぐみてのたまふを、心弱くおはしますかな、と見奉り給ひて、猶内よりの仰などきびしき事ども聞ゆれば、中院も思し驚く。いとあわたゞしきやうになりぬれば、如何はせんにて、しろしめさぬよし誓ひたる御消息など、東へ遣されて後ぞことしづまりにける。

さて九月の初つかた、中院は御ぐしおろさせ給ふ、いとあはれなる事ども多かるべし。禪林寺殿にて、やがて御如法經などかかせ給ふ。一院の世の中恨み思されし時、既にと

八郎―名は爲頼
大床子―清涼殿の日の御座に在り脚の高さ二尺

ぐ。その程の心の中どもいはん方なし。この男をば淺原のなにがしとかいひけり。辛くして夜のおとゞへ尋ね參りたれども、大かた人もなし。中宮の御方の侍の長景政といふもの名のり參りて、いみじく戰ひ防ぎければ、疵かうぶりなどしてひしめく。かゝる程に、二條京極の篝屋備後守とかや、五十餘騎にて馳せ參りて鬨をつくるに、合する聲僅に聞えければ、心やすくて内にまゐる。御殿どもの格子ひきかなぐりて亂れ入るに、かなはじと思ひて、夜の御殿の御衾のうへにて淺原自害しぬ。太郎なりける男は、南殿の御帳の内にて自害しぬ。弟の八郎といひて十九になりけるは、大床子の縁の下に臥して、寄るものの足をきり〳〵しけれども、さすが數多して搦めんとすれば、かなはで自害すとて、腸をば皆繰り出して、手にぞ持たりける。そのまゝながら、いづれをも六波羅へかき續けて出しけり。ほの〴〵と明くる程に、内、春宮、御車にて忍びて歸らせ給ひて、晝つ方ぞ又更に春日殿へなる。大方雲の上穢れぬればいかゞにて、中宮の日の御座へ腰輿よせて、兵衞の陣より出でさせ給ふ。春宮は絲毛の御車にて、又常磐井殿へわたらせ給ふ。中宮も春日殿へ行啓なる。世の中ゆすり騷ぐさま言の葉もなし。この事次第に六波羅にて尋ね沙汰するほどに、三條の宰相中將實盛も召し捕られぬ。三條の家につ

ひきよぎぬろ—引たがへたる

り。中宮の御子にぞなし奉らせ給ひける。おなじうは誠にておはせましかばとぞ、大将殿などおぼしけんかし。おりゐの御門も御子あまたおはしませば、坊になど思しけるをひきよぎぬる、いと本意なし。十月二十五日、一院の御所にて眞魚きこしめす、いとめでたき事どものゝしり、過ぎもてゆく、同じき三年三月四日五日の比、紫宸殿の獅子狛犬中よりわれたる、驚き思して御占あるに、血流るべしとかや申しければ、いかなる事のあるべきにか、と誰もく思しさわぐに、その九日の夜右衛門の陣より、おそろしげなる武士三四人馬に乘りながら、九重の中へ馳せ入りて、上に昇りて、女孺が局の口に立ちて、やゝといふにものを見あげたれば、丈高くおそろしげなる男の、赤地の錦の鎧直垂に緋威の鎧著て、只赤鬼などのやうなる面つきにて、帝はいづくに御よるぞ、と問ふ。夜のおとゞに、と答ふれば、いづくぞ、と又問ふ。南殿より東北の隅、と敎ふれば、南ざまへ歩みゆく間に、女孺内より參りて、權大內言典侍殿、新內侍殿などに語る。うへは中宮の御方に渡らせ給ひければ、對の屋へ忍びて逃げさせ給ひて、春日殿へ女房のやうにて、いと怪しきさまを造りて入らせ給ふ。內侍劒璽を取りて出づ。女孺は玄象鈴鹿とりて逃げけり。春宮をば、中宮の御方の按察殿抱き參らせて、常磐井殿へ徒歩にて逃

つひの…見ゆ―終に官位を極むべき事勿論なれど今かく大納言にて御女の中宮になり給へろは此上なき君寵と思はる

すがやかに后妃の位に定り給ふ事、かぎりなき御世のおぼえとめでたく見ゆ。大宮院、本院、東二條院皆わたりおはしまして、見奉り給ふさへぞやんごとなき。今日は紅のはり一重襲、ひへぎ、をみなへしの上著、二藍の唐衣、薄色の裳、すべて二十人おなじ色のよそひなり。この外威儀の女房八人、白き張一重襲、濃きひへぎ、同じ袴、女郎花の衣にてさぶらふ。何れとなくかたちども淸げにめやすし。その年の十一月八日ぞ、后の宮の御父右大將になり給ひぬる。おなじき二十五日正二位し給ふ。この程は大嘗會五節などのゝしる。さきの御世には引きかへて、中宮、皇后宮、院たちあかれ〳〵多くおはしませば、殿上人ども推參の所おほく、頭痛きまでめぐりありく。その年の十二月に御門の御母三位殿院號あり。朝に准后の宣旨ありて、同じき日の夕に玄輝門院と申す、めでたくいみじかりき。年かへりて正應も二年になりぬ。よろづめでたき事ども多くて、三月二十三日鳥羽殿へ朝覲の行幸なる。本院はかねてより鳥羽殿におはしまして、池の水草かき拂ひ、いみじうみがかれて、例のこと〴〵しき唐の御船浮べられて、二十四日に舞樂ありき。二十六日にぞ歸らせ給ひける。扨も去年の三月三日かとよ、常氏の宰相の女の御腹に、若宮出來させ給へりしを、太子に立て奉らせ給ふ、いとかしこき御宿世な

どを調理する御臺所なるべし

櫑子―酒器なれどもここは菓子を盛りたるなり

得選―御厨子所の女官

ひきうつし―老の波の巻に見えたり

御上著、朽葉の御小袿みな二重織物、綾の織物、すゞしの御袴、御紋竹涌をおる。うへは御引直衣、すゞしの御袴、櫑子まゐる。御陪膳は一條殿、今日よりはうちとけたる心地にて、女房どもいろ〳〵の一重襲、唐衣さま〴〵めづらしき色どもをつくして、すゞしの袴に著かへたる、今すこし見所そひて、なつかしきさまなり。得選櫑子をもてまゐる、次第に取次ぎてまゐらす。かねの御ごき、しろがねの片口の御銚子、一條殿御陪膳その後女御殿も御銚子にて注けさせたまふ事侍りけり。今宵二位殿今出川へまかで給ひて、輦の宣旨ゆりたまふ。御おくりには御子の公衡中納言、御甥の通重の左衛門督など、殿上人ども數多なり。縫殿の陣より出で給ふけしき、いとよそほし。まことや御入内の夜の御使、勾當内侍まゐれりし、祿にうはぎ唐衣を賜る。御消息の御使にまゐれりしうへ人も、女の裝束かづきながら歸りまゐりて、殿上口におとしすつ。主殿司ぞ取るならひなりける。後朝の御使には公貫中將なりし。公衡の中納言對面して勸盃の後、これも女の裝束かづけらる。かくて八月二十日后に立ちたまふ。かねてより今出川の御家へ罷出給ひて、節會の儀式ひきうつし待ちとり給ふさまいとめでたく、今さらならぬ事なれど、父の殿も、つひの御位はさこそなれど、只今さしあたりては未淺くおはするに、

釜殿—御湯などを掌る極めて卑き宮人なり

下大所—供御の御物な

と二人の御中に抱きて寢給ふと聞えし。さき〴〵もさる事にてこそは侍りけめ。八日御所あらはしとて、うへ渡らせ給へば、袖口ども心ことにてわざとなく押出さる。今日はおの〳〵紅のひとへがさね、青朽葉のうはぎ、二藍の唐衣なり。大納言殿も侍はせたまふ。うへも御臺參る。二位殿御陪膳。女御のは一條殿つかまつり給ふ。女御の君は蘇芳のはり、一重がさね、紅のひへぎ、青朽葉のうはぎ、赤色のから衣、二重おりもの、からのうすものゝ御裳、濃きあやの御袴、御ぐしいと麗しくて、盛にねびとゝのほりたまへる、いと見所多くめでたし。御供に參り給へる人々、右大臣、內大臣、大納言、左大將、花山院中納言、權大夫、殿上人どもあまた、こゝかしこのうちはし渡殿などに、けしきばみつゝ群れ居たるも、艷なる心地すべし。上達部の勸盃はてゝ後、內の御方の御乳母をはじめて、內侍女官ども、なかへ殿まで祿賜る。十日の夕方下大所の御覽あり。臺盤所の北の御壺へ參る。同じそばの間にて、內の御方御覽ぜらる。やがて東面より女御も御覽ず。二位殿、一條殿、二條殿をはじめて、上﨟だつ人々數多侍ひ給ふ。御簾の外にも上達部數多さぶらはる。いとはれ〴〵し。十四日又うちの上入らせ給ひて、こなたにて始めて御酒きこしめせば、南表へ出でさせ給ふ。女御蘇芳の御ひとへがさね、萩のたて青の

手車の宣旨ー輦車手に乘りて禁中に入ることを許さるゝ宣旨なり

御草鞋をば云々ー當時の婚禮の慣例にて聟なる人のはきたる沓を舅姑たる人懷きて臥すなり

雲の上に千代をめぐらん初とて今日の日影もかくや久しき

紅の薄樣に、同じ薄樣をもて包まれたゝめり。關白殿包むやう知らず、とかや宣ひけるとて、花山に心得たると聞かせ給ひければ、遣して包ませられたるとぞ承りし、と語るに、又この具したる女、いつぞやは、御使實敎の中將とこそは語りたまひしかといふ、女御のよそひは、蘇芳のはり一重がさね、濃き裏のひへぎ、濃き蘇芳の御うはぎ、赤色の御唐衣、濃き御袴、地摺の御裳奉る。女房のよそひおしなべて皆蘇芳の張一重がさね、紅のひへぎ、濃き袴、蘇芳のうはぎ、青朽葉の唐衣、薄色の裳、三重だすき、上下同じさまなり。參り給ひぬれば、藏人左衞門權佐俊光うけたまはりて、手車の宣旨あり。殿上人參りて御車ひき入れ、御兄の中納言公衡別當かね給へり。うへの御甥の左衞門督通重、御兄に準らふるよし聞ゆれば、御屛風、御几帳立てらる。日の御座へ御車よせらる。御襖二位殿まゐらせ給ふ。御臺參りて、やがて夜の御殿へまう上り給ふ。この御襖は、京極院のめでたかりし例とかや聞えて、公守の大納言沙汰し申されけるとかや承りしは、實にや侍りけん。三日の夜の餅も、やがてかの大納言沙汰し申さる。内のうへの、夜のおとゞへ召して入らせ給へる御草鞋をば、二位殿とりて出でさせ給ひて、大納言殿

御こしゆはせたまひて―御裳の腰を結びたまひて

本所の家司―御里方なる實兼の家事を掌る役人

臣の女なり。さぶらふ人々も、おしなべたらぬ限選りとゝのへ、いみじう淸らに、と思し急ぐ。よろづ人の心も、昨日に今日はまさりのみ行くめれば、いや珍らに好しうめでたし。大かた大宮院の御まゐりの例を思しなずらふべし。院の御子にこれも又なり給ふとて、東二條院御こしゆはせ給ひて、時なりぬれば、唐廂の御車にたてまつりて、上達部十人、殿上人十餘人、本所の前驅二十人、つい松ともして御車の左右に侍ふ。出車十輛、一の左に母北方の御妹一條殿、右に二條殿。實顯の宰相中將の女大納言、子にし給ふとぞ聞えし。二車、左は久我大納言雅忠の女、三條とつき給ふを、いと辛い事に歎き給へど、皆人先だちてつき給へれば　あきたるまゝとぞ慰められたまひける。右に近衞殿、源大納言雅家の女なり。三の左には大納言君、室町宰相中將公重のむすめ、右に新大納言、おなじ三位兼行とかやの女、四の左には宰相君、坊門三位基輔の女、右は治部卿兼倫の三位の女なり。それより下は例のむつかしくてなん。多くは本所の家司何くれが女どもなるべし。わらは下仕、御雜仕、はしたものに至る迄、髮かたちめやすく、親うち具し、少しもかたほなるなく整へられたり。その暮つかた、頭中將爲兼朝臣御消息もてまゐれり。內のうへ自ら遊ばしけり。

○この卷は正應元年伏見天皇御卽位より三年までの事を記せり

さばかり…ざらん—東二條院の如くに中宮に立て給はむとまでは思召さゞるべし

第十三　今日のひかげ

正應元年三月十五日官廳にて御卽位あり。このほどは香園院の左のおとゞ關白にておはしき。その後近衞殿また九條左大臣殿、その後また近衞殿かへりなりたまひき。なほ後に歡喜園院などいとしげうかはり給ふ。おりゐの御門を今は新院と聞ゆれば、太上天皇三人世におはします比なり。いと珍しく侍るにや。御門の御母三位し給ふ。その御同胞の姫君御傍に侍ひ給ふを、上いと忍びたる御むつびあるべし。東二條院の御ためしにやなどさゞめく人もあれど、さばかりうけばりてはえしもやおはせざらん。三位殿御兄の公守大納言の姫君も、稚くよりかしづきて候ひ給ふ。それもよそならぬ御契なるべし。この君をぞ父の殿も、いとうるはしき御さまにても參らせまほしう思しつれど、西園寺大納言の姫君いつしか參りたまへば、きしろふべきにもあらず。その年六月二日入内あり。その夜まづ御裳著し給ふ。さきの御代にもあらましは聞えしかど、如何なるにかさもおはせざりしに、何時しかかうもありけるは、猶おぼす心ありけるなめり、とうちつけにひが〳〵しう言ひなす人も侍りけり。この姫君の母北方は、三條坊門通成の内の大

すさめぬ――珍重せぬ

にもすさめぬ人にておはしけり。

檜扇—檜の薄板を骨としてつくれる扇

のどめたるさま—落ちつき給へる御性質

すくよか—剛健

過ぎ行くほどに、弘安も十年になりぬ。この御門位に卽かせ給ひて、十三年ばかりになりぬらん、本院待遠に思さるらん、といとほしく推し量り奉るにや、例の東より奏する事あるべし。新院の御方ざまには、心細う聞召しなやむべし。去年の春御乳母の按察の二位殿うせにしかば、一めぐりの佛事に龜山殿へおはしまして、いかめしう八講行はせたまふ日、雪いたう降りければ、九條三位隆博檜扇のつまをゝりて、

跡とめて問はるる御代の光をや雪のうちにもおもひ出づらん

女房の中に聞えたるを、院御覽じて返しに宣ふ。

なき人のかさねし罪も消えねとて雪のうちにも跡をとふかな

よろづ飽かず思さるゝ程なれど、その年の十月におりゐさせ給ふ。もとの上は二十一にぞならせ給ひける。御本性もいと麗しくのどめたるさまにおぼして、すくよかに御才も賢うめでたうおはしませば、御政事なども、やう〳〵譲りや聞えましなど思されつるに、いとあへなく移ろひぬる世を、すげなく新院は思さるべし。春宮位に卽き給ひぬれば、天下本院におしうつりぬ。世の中おしわかれて、人の心どもゝかゝる際にぞあらはれける。今の御門も、故山階の大臣の御孫にてわたらせ給へば、かの殿ばらのみぞ、いづ方

慧果―唐の青龍寺の僧弘法大師の師

三衣―法衣

ゆくすゑ遠ききみが御代とて

春宮大夫、

昔にもなほ立ちこゆる御調物

具顯中將、

くもらぬかげも神のまに〳〵

春宮、

九十になほも重ぬる老のみな

本院、

たちゐ苦しき世のならひかな

暮れはつるほどに、釣殿へ御船寄せておりさせ給ひぬ。春宮こよひ歸らせ給へば、御贈物に和琴一つ奉らせ給ふ。まことや准后にも、慧果和尙の三衣、紺地の錦に裹みて、銀の箱に入れて參らせらる、何れも大宮院の御沙汰なり。掃部寮火繁うともして、うち群れつゝ居たるさまも、なまめかしうみやびやかなり。此處彼處には、この御賀の事ども書きつけしるす人のみぞ多かめれば、片はしだに、いと頑ならんとあさまし。何となく

羅綺重衣—朗詠に羅綺之爲ニ重衣ー、妬ニ無情於機婦ー、

山復山—朗詠に山復山何工、削ニ成青岩之形ー、

二千里の外の心理白氏文集に三五夜中新月色二千里外故人心

聲たすけ給ふほど、そゞろ寒きまで艶なり。歸らせ給ひても、又昨日の花のかげにて鞠御覽ぜられつゝ、それよりやがて御船に奉りておし出でたれば、遙なる海面に漕ぎ離れたらん心地していとをかし。小き船に上達部乘りて、橋に著けられたり。ありつる妙音堂の調子をうつされて、ありつる同じ人々仕うまつる。春宮亦御琵琶、箏の琴は右衞門督といふ女房、御船に參れるに彈かせらる。船の中のしらべはいと艶なり。蘇合の五帖輪臺、青海波、竹林樂、越殿樂など、幾返ともなくおもしろし。兼行山復山、などうち誦じたるに、變態繽紛たり、と兩院あそばしたるに、水の底もあやしきまで、身の毛だちぬべく聞ゆ。中島に御船さしとめて見れば、舊苔年ふりたる松の枝さしかはせる岩のたたずまひいとくらがりたるに、池の水皆心のどかに見えて、名もしらぬ小鳥ども亂れ飛ぶけしき、何となくをかし。遠きさかひに望める心地するに、めぐれる山の瀧つ岩根、遙に霞みて見渡さるゝほど、仙人の洞もかくやとぞおぼゆる。二千里の外の心地こそすれなど宣ひて、新院、

雲の浪けぶりの浪をわけてけり

誰にかあらん女房の中より、

御括りあげて―指貫の括り緒をひきくゝりて上げて結び給へるなり

花上苑明なり―朗詠「花明ニ上苑一輕軒馳ニ九陌之塵一、猿叫ニ空山一、斜月瑩ニ千岩之路一、

おのけぢめわかるべし。爲兼紫革、爲道は藍しらぢなりけり。爲兼とは爲氏の大納言の弟、兵衛督爲教といひしが子なり。爲道は大納言の孫爲世の太郎なり。はなれぬなかにていといたく挑みかはしたり。内の上は白骨の御扇左の御手に持たせたまひて、花のいみじく面白き木蔭に立ち休らひ給へる御かたち、いとゆゝしきまで淸らに見え給ふ。飽かず名殘おほく思さるれど、春の司召御燈などいふ事どもあれば、行幸は今宵歸らせたまふ。御贈物に御本まゐる。明くる日午時ばかり、寢殿より西園寺まで莚道しきて、兩院御烏帽子直衣、春宮御くゝりあげて堂々拜ませ給ふ。左衞門督新院の御佩刀持たまへり、權亮親定春宮の御佩刀もたれたり。妙音堂に御まゐりあるに、遲き櫻一木綻び初めて、今日の御幸を待ち顏なり。佛の御前にかりそめの御ましながら、皆渡らせたまふ。庇に上達部つきて、御遊の具召す。笛花山院大納言、笙左衞門督、篳篥兼行、春宮は御琵琶、太夫箏、太鼓具顯、鞨鼓範藤、盤渉調にしらべとゝのへて、採桑老、蘇合、白柱、千秋樂などいみじうおもしろし。うるはしき事よりもなか〳〵艶なり。兼行、花上苑明なり、と打ち出したるに、いとゞ物の音もてはやされて、えもいはず聞ゆ。具顯、範藤など羅綺重衣、と二返ばかりいへるに、情なき事を機婦にねたみ、と本院加へ給へば、新院御

百數と—一本百色、共に通じがたし百年の誤なるべし

いと念なき事—甚だ心なき事

めやすくもてつけたり—見苦しからぬやうに裝ひたり

上鞠云々—蹴鞠の時の上鞠の役を新院親らつとめたまへるなり

代々のあとになほ立ちのぼる老の波よりけん年は今日の爲かも

その後東向のまりのかゝりある方へ渡らせ給ふ。御方々の女房いろ〳〵の衣、昨日には引きかへて、めづらしき袖口を思ひ〳〵に押し出でたり。紫の匂ひ、山吹、青にほひの薄紅梅、櫻萠黄などは、女院の御あかれ、内の御方は典侍より下、皆松重白格子、裏山吹、院の御方えび染に白筋、樺櫻青すぢ、春宮の女房うへ紫かうし、柳など、さま〳〵にめもあやなるきよらを盡されたり。同じ文も色も變らず、心々に變りていみじうぞ侍りける。後嵯峨院、蓮花王院御幸ありし時、兩貫首おなじやうに、藤の下重山吹のうへの袴なりしをば、いと念なき事に世の人のいひ侍りしにや。御方々の女房ども八十餘人おしこみて候はるゝ、何れともなく目移りして、いみじうかたちも氣色もめやすくもてつけたり。後鳥羽院建仁のためしとて、新院御上鞠三足ばかりたゞせ給ひて落されぬ。内のうへ御直衣紺地の御袴、はじめは御草鞋を奉りけれど、後には御沓片足がはりの御襪、藍白地竹、紫白地桐の紋、紫革の御結緒なり。春宮御直衣紫の御指貫同色革の御襪、新院織物の御直衣、御指貫、紋なき紫の御襪、關白殿紋なきふすべ革、内の大臣紫革に菊を縫ひたり、藤大納言爲氏無紋のふすべ革、その外いろ〳〵錦皮、藍皮、藍白地、おの

かうぶり賜はり給ふ—官位を叙せらる

道々の師—音樂の師

壺おひて—矢を盛る胡簶を負ひて

内宴—正月二十一日に行はるゝ内内の節會、文人等詩を作り御前にて披講す

つ。御方々かうぶり賜はり給ふ。道々の師ども加階給はる。その後和歌の披講はじまる。爲道朝臣もとほしの袍に壺おひて、弓に懐紙をとり具して、上達部の座のまへを通りて、信輔階の間より入りて文臺の上におく。その外の殿上人どもの歌は一つにとり集めて、一度に文臺におく。文臺の東に圓座をしきて、春宮披講のほど渡らせ給ふ。内宴などいふことにぞかくはありける、と古き例もおもしろくこそ。上達部みないろ〳〵の衣をいだす。右大將魚綾の山吹の衣著たまへり。笏に歌をもち具し給ふ。内のうへの御歌は、殿ぞかき給ひける。

　行く末をなほ永き世と契るかなやよひにうつるけふの春日に

新院の御製は内大臣かきたまふ。

　百敷といまや鳴くらんうぐひすもこゝのかへりの君が春へて

春宮のは、左大將にかかせらる。

　かぎりなきよはひはいまだ九十なほ千世遠き春にもあるかな

製に應ず、と上文字載せられたるも、内宴のためしとかや。次々例の多けれど、むつかしくて洩しつ。春宮大夫こそいとうけばりて、めでたく侍りしか。

富樓那—釋迦の十弟子の中にて說教の最も巧なりしもの

尊者は德行智慧のすぐれたるものの稱

巡方の帶—束帶の時の石帶

宿德に云々—沈著にして威嚴ある御容姿

宿德にもの〳〵しき御さまかたち、あな淸げ、今ぞ盛に見え給ふ。春宮は色濃き御直衣、浮線綾の御指貫、紅のうちたる袙を奉れり。とり〴〵にめでたく淸らにおはします。御かたちども、いづれとなく、あな美し、とうち見奉る人の心地さへそぞろに笑まし。御大宮院などは、まして何事をかは思さるらん、とおしはかられ給ふ。彼方此方の御隨身ども近く候ひつるを、院出でさせ給ひぬれば、退きて御階の西に並み居たる、裝束ども、いろ〳〵の花をつけ、高麗、唐土の綾錦、金銀をのべたるさま、いとあまりうたてある程にぞ見ゆる。今日は内、春宮、兩院御膳まゐる。陪膳花山院大納言、役送四條宰相、三條宰相中將、本院の陪膳大炊御門大納言信嗣、新院のは春宮大夫などつとめらる。その後御遊はじまる。内のうへ御笛柯亭といふものとかや、御筥に入れたるを忠世持ちて參れるを、關白とりて御前に奉らる。春宮御琵琶、宮權亮親定持ちて參りたるを、大夫御前に置かる。上達部の笛の箱別にあり。笛兵部卿、花山院大納言、笙源大納言、左衛門督、篳篥兼行朝臣、琵琶春宮大夫、琴洞院左大將、三位中將、和琴大炊御門大納言、拍子德大寺中納言、末拍子實冬、皆人々直衣にいろ〳〵の衣を出す。例の安名尊、席田、鳥破急、律、青柳、萬歲樂、三臺急、御遊はてぬれば、殿上の五位ども參りて管絃の具をわか

青柳の絲に玉貫く―古今集「あさ緑絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か」

二のもの舞人の上首―を一のもの、次班を二のものといふ

仕うまつる時、右の大臣座を立ちて賞仰せらるれば、承りて拜し奉るほどいと艶なり。久助、正秋などいふ者どもも賞うけたまはりて、笛を持ちながら起き伏し拜するさまもつき〱しう故ありて見ゆ。講讃のことばめでたういみじ。今の世には、富樓那尊者の如く言はるるものなれば、心留めて人々聞き給ふに、涙とどめ難き事どもを言ひつづく。高座果てて後、樂人酒胡子を奏す。その程に僧の祿を給ふ。頭中將公敦より初めて、思ひ思ひの姿にて祿をとる。あるは闕腋に平胡籙、縫腋の袍に革緒の劍など、思ひ思ひなり。俊定、經繼などは巡方の帶をさしたり。衆僧罷出る程に、廻忽長慶子奏して、樂人、舞人も退きぬる後、大宮院准后の御臺まゐる。陪膳權中納言、役送實時、實冬、實躬、信輔、俊光など仕うまつる。かくて又の日は三月の一日なり。寢殿のよそひ昨日のまゝなり、舞臺、樂屋ばかりを取り除けて、母屋の四方に壁代をかく。兩院内の上の御簾の役、關白さぶらひ給ふ。春宮のは傳遲くまゐり給へば、大夫實兼つとめ給ふ。内のうへ今日は例の御直衣、紅の打ちたる綿厚き御衣、織物の御指貫、いとめでたき御にほひなり。本院かた織物の薄色の御指貫、すこし薄らかなる御直衣、新院雲に鶴の浮織物の御直衣、おなじ御指貫、紅の今すこし色かはれるを奉れり。あらまほしきほどにねびととのほり

おはしますらんと—遊義門院が御目尻たゞならず云々—御心ありげなる御目づかひにて
鷄婁—鷄婁鼓、樂器

西に四條前權大納言、春宮權大夫、權中納言、四條宰相隆保、右衛門督爲世など祗候せられたり。内の上御引直衣、生絹の御袴、本院御烏帽子直衣、青鈍の御指貫、新院御直衣、綾の指貫、春宮櫻の御直衣、霰に窠の紋、紫の御指貫、いひ知らずなまめかしう見え給ふ。今日は皆御簾の中におはします。大宮女院白き綾の三御衣、東二條院唐織物の柳櫻の八つ、紅梅のひねりあはせの御ひとへ、かばざくらの御小袿奉れり。姫宮紅のにほひの十、紅梅の御小袿、萠黄の御ひとへ、赤色の御唐衣、生絹の御袴奉れる、常よりもことに美しうぞ見え給ふ。おはしますらんと思ほす間のほとりに、内の上常に御目尻たゞならず御心遣して、御目とゞめ給ふ。樂人、舞人、鳥向樂を奏す。鷄婁を先立てゝ亂聲左右桙を振る。その後一越調の調子を吹きて、樂人舞人、衆僧集會の時に向ひて安樂鹽を吹く。衆僧左右に分れて參る。階の間よりのぼりて座に著く。講師法印憲實、讀師僧正守助、導師高座に上りぬれば、堂童子花籠を分つ。杖取りの使公敦朝臣、杖を退けて舞を奏するほど、氣色ばかりうち灑たる春の雨、青柳の絲に玉貫くかと見えたり。一の舞久助といふもの、すこしねびて、いとよし〳〵しう面もち足踏かみさびておもしろし。萬歲樂、賀殿、陵王、右地久、延喜樂、納曾利、久忠二のものにて、勅錄の手といふ事

傳―御守役

事なりぬるにや―支度調ひたるにや

ます。二十九日の夜まづ行幸あり。雅樂司樂を奏す。院司左衛門督公衡事のよし申してのち、中門に寄せらる。その後春宮行啓、中門よりおりさせ給ふ。傳の大臣二條御車に參り給へり。その日になりぬれば、寢殿の東おもての母屋廂まで取りはらひて、釋迦如來の繪像掛けたてまつる。道場の飾り、眞の淨土の莊嚴もかくこそ、とめでたく淸らを盡されたり。御經の筥二合、金泥の壽命經九十巻法華經入れらる。名香柳の織物に藤を縫ひたるにて包みて、御經の机によせかく。御簾の内に、西の一間に繧繝二帖唐錦の茵しきて、内の上の御座とす。おなじ御座の北に、大文の高麗一帖敷きて春宮渡らせ給ふ。西の庇にこれも屛風をそへて繧繝二帖錦の茵に准后居給へり。同じ庇に東二條院わたらせ給ふ。はる〴〵と纐纈の几帳の帷子を出して、色々の袖口ども、御方々けぢめわかれて押出でたる程、龍田姫もかゝる錦の色はいかでかは、といみじう好ましげなり。事なりぬるにや、兩院、御門、春宮、大宮院、東二條院、今出川院、春宮大夫などうち續く。誦經の鐘の響も、耳驚く許所せく聞ゆ。衆僧集會の鐘うちて後、上達部御前の座に著く。階より東に關白、左大臣、内大臣、花山院大納言、源大納言、大炊御門大納言、右大將通基、春宮大夫、左大將公守、三條中納言、花山院中納言家敎、左衞門督公衡など候ひたまふ。階より

三千寵愛在二一身一

さかさまの御歎—親が子におくれたる嘆き

たゞ人—攝關に對してたゞの公卿をいふ

への基經の大臣の御女、延喜の御代の大后宮、朱雀、村上二代の國母にておはせしも、始め出來給ひて、殊に悲うしたましひ前坊に後れ聞え給ひて、御命の中はたえぬ御歎つきせざりき。九條の大臣師輔の御女、天暦の后にておはせし、冷泉、圓融、兩代の御母なりしかど、めでたき御代をも見奉り給はず、御門にも先だち給ひて亡せ給ひにき。御堂の御女上東門院、後一條、後朱雀の御母にて、御孫後冷泉、後三條まで見奉り給ひしかども、皆先立たせ給ひしかば、さかさまの御歎絶ゆる世なく、御命あまり長くて、なかなか人目を恥づる思ひ深くおはしましき。これも皆一の人にて、世の親となり給へりしだに、様をかへて、さま〴〵の御身のうれへはありき。たゞ人には大納言公實の御女こそ待賢門院とて、崇德院、後白河の御母にておはせしかど、それも後白河の御世をば御覽ぜず。讃岐院の御末もおはしまさず。されば今の様にたゞ人の御身にて三代國の重といつかれ、兩院とこしなへに仰ぎ捧げ奉らせ給へば、さきの世もいかばかりの功德おはしまし、この世にも春日大明神をはじめ、萬の神明佛陀の擁護厚くものし給ふにこそ、ありがたくぞ推し量られたまふ。かくて御賀は二月三十日ごろなり。本院、新院、東二條院、遊義門院みな豫てより北山に渡らせ給ふ。新陽明門院も、新院のひとつ御車にておはし

御宿世―前世の御果報

三千の寵愛云々―長恨歌に後宮佳麗三千人、

しこく御才など勝れさせ給へれば、なべて世の人もめでたき事に思ひ聞ゆ。はか〴〵しき女御后なども候ひ給はで、いと徒然なるに、新陽明門院の御方に、堀川大納言の御女、東の御方とてさぶらひ給ふを、忍び〳〵御覽じける程に、弘安八年二月ばかり若宮出でものし給へり。いとやんごとなき御宿世なるべし。今年北山の准后九十にみち給へば、御賀の事大宮院思し急ぐ。世の大事にて、天下かしかましく響き合ひたり。かくのよしるは、安元の御賀に青海波舞ひたりし、隆房大納言の孫なめり。鷲尾大納言隆衡の女ぞかし。大宮院東二條院の御母なれば、兩院の御祖母太政大臣の北方にて、天下みなこのにほひならぬ人はなし。いとやんごとなかりける御さいはひなり。昔御堂殿の北方、鷹司殿と聞えしにも劣り給はず。大方この大宮院の御宿世、いとありがたくおはします。すべて古へより今まで、后國母多く過ぎたまひぬれど、かくばかりとり集めいみじき例は、未だ聞き及び侍らず。御位のはじめより撰ばれ參りたまひて、爭ひきしろふ人もなく、三千の寵愛一人にをさめ給ふ。兩院うち續き出ものし給へりし、何も平かに、思の如く二代の國母にて、今は既に御孫の位をさへ見給ふまで、聊も御心にあはず、思し結ぼるる一節もなく、めでたくおはします樣、來し方も類なく、行末にも稀にやあらん。古

腰輿―手にて舁く輿
柏ばさみ―冠の纓をたわめたゝみて白木の挾木にて留む

にこそ。さて爲氏大納言、伊勢の勅使にて上る道より申しおくりける。

勅としていのるしるしの神風に寄せくる浪ぞかつくだけつる

かくてしづまりぬれば、京にも東にも、御心どもおちゐてめでたさ限なし、かの異國の御門心憂しと思して、湯水をも召さず、我いかにもして、この度日本の帝王に生れて、かの國を亡す身とならん、とぞちかひて、死に給ひけるとぞ聞き侍りし、まことにやありけん。同じ六年正月六日、日吉社の訴訟勅裁なしとて、御輿は都へ入らせ給ふ。六波羅の武士ども、けしきばかり防ぎ奉りけれど、まめやかには神にむかひ奉りて、弓射るものもなければ、紫宸殿、清涼殿などにふり棄て參らせて、山法師はのぼりぬ。御門は急ぎ對屋に出でさせ給ひて、腰輿にて近衞殿へ行幸なる。殿上人ども柏ばさみして仕うまつりけり。七日の節會もまほには行はれず。それより三條坊門、萬里小路通成の大臣の家へ行幸なりて、しばし内裏になりし時、富小路おもての四足はたてられ侍りき。かゝりし程に、この家に石清水の若宮を祝ひまゐらせたる社おはしますに、狐おほく侍りけるを、瀧口のなにがしとかや過ちたりける御咎にて、よろづ煩はしくかう〴〵しき事どもありければ、萬里小路殿へ歸らせ給ひにき。この御門はねび給ふまゝに、いとか

故院の御代にも云々―後嵯峨天皇の文永五年蒙古始めて使を遣したる時の事

春宮は京に渡らせたまひて、東の武士ども上り候ふべしなど沙汰ありて、山々寺々御祈かずしらず。伊勢の勅使に經任大納言まゐる。新院も八幡へ御幸なりて、西大寺の長老召されて、眞讀の大般若供養せらる。太神宮へ御願に我御代にしもかゝる亂出できて、誠にこの日本のそこなはるべくは、御命を召すべきよし、御手づから書かせたまひけるを、大宮院いとあさましきことなり、と猶諫め聞えさせ給ふぞ、ことわりにあはれなる。東にもいひ知らぬ祈どもこちたくのゝしる。故院の御代にも御賀の試樂の比かゝる事ありしかど、程なくこそ靜まりにしを、この度はいとにが〳〵しう、牒狀とかや持ちて參れる人などありて、煩しう聞ゆれば、上下思ひまどふ事かぎりなし。されども七月一日おびたゞしき大風吹きて、異國の船六萬艘、兵乘りて筑紫へよりたる、皆吹き破られぬれば、あるは水に沈み、おのづから殘れるも、なく〳〵本國へ歸りにけり。石淸水の社にて、大般若供養說法いみじかりける刻限に、晴れたる空に黑雲一むら俄に見えてたなびく。かの雲の中より、白き羽にてはぎたる鏑矢の大なる、西をさして飛び出でて、鳴る音夥しかりければ、彼處には大風の吹き來ると兵の耳には聞えて、浪荒くたち、海の上あさましくなりて、皆沈みにけるとぞ。猶吾國に神のおはします事、あらたに侍りける

時しもや云云—時もあるべきに今日の御行裝拜觀の車の下簾を切らるゝは情なし

本—標本

ひとつの御腹とかや、御母代にて添ひ奉り給ふ。又三條の內大臣公親の御女、內の上の御乳母なりしも、めでたき御肖物とて、御車に二人乗りたまふ。女院は院のうへひとつ御車に、菊の網代のひさしにたてまつる。宮の御車にやりつゞけて、よそほしくめでたき御事なり。そのころ儉約行はるとかや聞えし程にて、下簾みじかくなされ、小金物拔かれけり。物見車どものも、召次よりて切りなどしけるをぞ、時しもやかゝるめでたき御事のをりふしなど、呟やく人もありけるとかや。この宮も親王の宣旨ありて、いとめでたく聞えしほどに、明くる年九月又かくれさせ給ひにし、いと口をしかりし御事なり。弘安も四年になりぬ。夏比後嵯峨院の姬宮かくれさせたまひぬ。後の堀川院の御女にて、神仙門院と聞えし女院の御腹なれば、故院もいとおろかならずかしづき奉らせ給ひけり。御かたちも類無く美うおはしまして、人の國より女の本をたづねんには、この宮の似給をやらんなどぞ、父の帝も仰せられける。御乳母隆行の家におはしましける程に、御乳母子隆康忍びて參りける故に、あさましき御事さへ出できて、これも御產流しにて、にうせさせ給ひにけりとぞ聞えし。その比蒙古おこるとかやいひて、世の中さわぎ立ちぬ。いろ〳〵さま〴〵に恐しう聞ゆれば、本院、新院はあづまへ御下りあるべし、內、

たましひある云々―此の集に入りたる歌は何れも精神みちたる樣子には見えざれど優美には見ゆとの意なり

めやすき事に、なべて世の人も思ひ申しけり。或時は御小弓射させ給ひて、御負わざには院の内に侍かぎりの女房を見せさせ給へ、と新院のたまひければ、童の鞠蹴たる由をつくりなして、女房どもに水干著せて出されたる事も侍りけり。新院の御賭物には、龜山殿にて五節のまねに、舞姫童下仕までを舞姫になされけり。上達部直衣に衣出して、露臺の亂舞御前のめし、北の陣推參まで盡くされ侍るとぞ承りし。この御代にもまた勅撰の沙汰、をとゝしばかりより侍りし、爲氏大納言えらばれつる、このしはすにぞ奏せられける。續拾遺集と聞ゆ。魂あるさまにはいたく侍らざめれど、艶には見ゆると時の人々申し侍りけり。續古今のひきうつし、おぼろけの事はたちならび難くぞ侍るべき。かくて年もかはりぬ。その比新陽明門院、又たゞならずおはしますと聞えし、五月ばかり御けしきあれば、めづらしう思す。内々殿にてせさせ給ふに、天下の人々まゐり集ふ。前の度生れさせ給へる若宮はかくれさせ給ひにしを、新院本意なしと思されけるに、又かくものし給へば、めでたう思ふさまなる御事もあらば、と今より思しかしづくに、いとかひぐ〵しう若宮生れさせ給へれば、限なく思さる。八月御子の御行始とて、萬里小路殿に渡らせ給ふ。唐廂の御車に、後嵯峨院の更衣腹の姫宮、聖護院の法親王の

檜破子―檜の曲物食物を入ろ

松風の巻云云―「野にとまりぬ公達小鳥しるしばかりひきつけさせたる荻の枝などつとにして參れり」

はせて、いろ〳〵の狩衣すがた、菊紅葉こき交ぜてうち群れたる、見所多かるべし。野山の景色色づき渡るに、伏見山田面につゞく宇治の川浪、遙々と見わたされたるほど、いと艶なるを、若き人々などは身にしむばかり思へり。鷹司殿の大殿も參りたまふべしと聞えけるを、御物忌とてとまり給へれば、五葉の枝につけて奏せられける。

伏見山いくよろづ代も枝そへてさかえん松のすゑぞひさしき

御かへし、

さかゆべきほどぞひさしき伏見山おひ添ふ松の枝をつらねて

又の日は伏見の津に出でさせ給ひて鵜船御覽じ、白拍子御船に召入れて歌うたはせなどせさせ給ふ。二三日おはしませば、兩院の家司ども、我劣らじといかめしき事ども調じて參らせあへる中に、楊梅の二位兼行、檜破子どもの心ばせありて仕う奉れるに、雲雀といふ小鳥を荻の枝につけたり。源氏の松風の巻を思へるにやありけん。爲兼朝臣を召して、本院、かれはいかゞ見る、と仰らるれば、いと心え侍らず、とぞ申しける。誠に定家中納言入道がかきてはべる源氏の本には、荻とは見え侍らぬとぞうけたまはりし。かやうに御中いとよくて、はかなき御遊わざなども、いどましきさまに聞えかはし給ふを、

日毎に参り給ふ。御壺分たせ給ひて、前栽合ありしにも、をかしう珍らしき事ども多かりき。なにがしの朝臣の、槇の島の景色を造りて侍りけるを、平大納言經親いまだ下臈にて兵衛佐などいひける程にや、その宇治川の橋を盗みて、我つくろひたる方に渡して侍りける、いと恐しく心かしこくぞ侍りける。例の五月の供花、やがてうち續きければ、女院たち宮々など、夜の御時に閼伽奉らせ給へば、御堂のかをり名香の香も、外には多くまさりて、いと浸み深うなまめかしうおもしろし。大方いづれも年に二度は、昔よりの事にて、いみじう經營し給へば、世の人のなびき仕う奉るさま限なし。日に二たび院の出で居させ給ふに、關白大臣以下、やんごとなき人々絶えずさぶらひたまふ。大中納言二位三位、非參議、四位五位などはましてかずしらず。すべて前の司、道々の人なども參る事なれば、時ならぬ院の御前ともなく、いみじう花やかにおもしろう尊し。昔の後二條關白師道と聞えしは、讓位の帝の御門に車の立つべき事なし、と譏りたまひけるに、今の世を見給はゞ、と思ひ出でらる。九月の供花には、新院さへわたりものし給へば、いよ〳〵女房の袖口心ことに用意加へ給ふ。御花はつれば、兩院ひとつ御車にて伏見殿へ御幸なる。秋山の景色御覽ぜさせんとなりけり。上達部殿上人かなたこなたおしあ

壺—中庭

五月の供花—佛前に花を供ふる儀にて五月九月兩度行はる

閼伽—梵語佛に供ふる水

柳筥—柳の細枝を編みて造れる筥

同じひさげ—銀にて作れる提器酒を入れ又薯蕷粥柿ひたしなどを入る

給ふ。兩院、春宮立たせ給ふ。半過ぐる程に、客人の院のぼり給ひて、御襪などなほさるゝほどに、女房別當君、また上﨟だつ久我太政大臣の孫とかや、樺櫻の七紅のうちきぬ、やまぶきの袍、赤色の唐衣、生絹の袴にて、銀の御杯柳筥にすゑて、同じひさげにて柿ひたしまゐらすれば、はかなき御戲など宣ふ。暮れかゝる程風少しうち吹きて、花もみだりがはしく散り紛ふに、御鞠數多く上る。人々の心地いと艶なり。故ある木陰に立ちやすらひ給へる院の御かたち、いと淸らにめでたし。春宮もいと若う美しげにて、濃き紫の浮織物の御指貫、なよびかに氣色ばかり引き上げ給へれば、花のいと白く散りかゝりて、紋のやうに見えたるもをかし。御覽じあげて一枝おし折りたまへるほど、繪にかかまほしき夕ばえどもなり。その後も御みきなど、らうがはしき迄きこしめしさうどきつゝ、夜更けて歸らせ給ふ。六條殿の長講堂も燒けにしを造られて、その比御わたましし給ふ。四月の始つかたなり。院のうへ庇の御車にて、上達部、殿上人、御隨身、えもいはず淸なり。女院の御車に姫宮もたてまつる。出車あまた皆白きあはせの五衣、濃き袴同じひとへにて、三日過ぎてぞいろ〱の衣ども、藤、躑躅、撫子など著かへられける。しばしこの院に渡らせ給へば、人々絕えず參り集ふ。西園寺の殿原なども

さう〴〵しき―さびしき
すが〳〵と―直ちに
鞠のかゝり―蹴鞠の遊びなす庭

なか女御更衣も候ひ給はず、いとさう〴〵しき雲の上なり。西園寺女御參り給ふべし、と聞えながら、いかなるにかすが〳〵とも思し立たぬは、思ふ心おはするなめり、とぞ世の人もさゝめきける。新院の御位の時、參り給へりし西園寺の中宮は、院號ありて今出川院ときこゆなり。かの御おぼえなどのいと口をしかりしより、この院の御方ざまをつらく思ひ聞えたまふなめりなとぞ、いひなす人も侍りけるとぞ。三月の末つかた、持明院殿の花ざかりに、新院わたり給ふ。鞠のかゝり御覽ぜんとなりければ、御前の花は梢も庭も盛なるに、よその櫻をさへ召して散し添へられたり。いと深う積りたる花の白雪、跡つけがたう見ゆ。上達部殿上人いと多く參りあつまり、御隨身北面の下﨟など、いみじうきらめきて候ひ合へり。わざとならぬ袖口どもおし出されて、心ことに引き繕はる。寢殿の母屋に御座對座に設けられたるを、新院入らせ給ひて、故院の御時定めおかれし上は更にやはとて、長押の下へひきさげさせ給ふ程に、本院出でたまひて、朱雀院の行幸には、あるじの座をこそなほされ侍りけるに、今日の御幸には御座をおろさるゝ、いとことやうに侍り、など聞え給ふほど、いと面白し。うべ〳〵しき御物語は少しにて、花の興にうつりぬ。御土器などよきほどの後、春宮おはしまして、かゞりの下に皆立ち出で

て一疎んじ
給ひて
いといとほ
しき云々一
經平は未だ
小兒なり年
長の家平を
除くべきに
あらず

の太郎君、中將ばかりにてものし給ふをも、よくせずはおし除けつべうもてなし奉り給ひけるを、新院聞かせ給ひて、いといとほしき事なり。これはいまだ兒なり。ちとおとなしうなり給へるをば、いかでか引き違ふるやうはあらん、とのたまはせて、その大臣は、遂に御家もたもたせたまはざりしなり。また北白川殿の女院に、大納言君とて候ひし人の曹司に、下野といひしものは、田樂とかやいふ事する怪しの法師の、名をば玄駒といふが女なりき。かの女院は新院の御母代にて、常に御幸もなりしかば、自から御覽じ初けるにや、ことのほかに時めきいでて、この院に召しわたされて、花山院太政大臣の御子になされ、郞御方とぞ附けさせ給ふ。その御腹にも宮生れ給ひぬ。大宮女院に讃岐とてさぶらひしは、西園寺の御家の者、景房といひしが女なりしを、いみじう思いて、これも召しとりて、西園寺大臣の御子になして、二品の加階たまはる。若宮生れ給ひにき。帥中納言爲經の女の帥典侍殿といひしが御腹にも、あまた生れ給ふ。九條殿の北政所、又梨本青蓮院法親王など、大納言典侍の御腹、照慶門院は中納言典侍、十樂院慈道法親王は帥典侍殿の腹、かやうにすべて多くものし給ふ。昔の嵯峨天皇こそ八十餘人まで御子持ち給へりける、と承り傳へたるにも、ほと〳〵劣り給ふまじかめり。内にはなか

いみじう思ひの外に云云―隱したりしを遂に見つけられて契りしをあさましと歎きたまふなり
かの草枕よりは云々―齋宮の内親王の事草枕の巻
らうがはしき―亂がはしき
すさめ給ひ

にや、いと盛に美しげにて切にかくれ奉り給ふを、新院あながちに御心にかけて、うかゞひ聞え給ふほどに、この御惱のころ如何ありけん、いみじう思の外にあさましとおぼし歎く。かの草枕よりはまことしう苦々しき御事にて、姫宮まで出でさせ給ひにき。限なく人目をつゝむ事なれば、あやしう誰が御腹といことふもなくて、院の御乳母の按察二位、里にわたし奉り給へり。稚き御心にもいかゞ心得給ひけん、宮の御母君をば誰とか申す、と人の問ひ聞ゆれば、いはぬ事とのみぞ、いらへさせ給ひける。御心のあくがるるまゝに、御覽じ過す人なく、亂りがはしきまでたはれさせ給ふ程に、腹々の宮達數しらず出で來給ふ。大方十三の御年より、宮は出で來初めさせ給ひしが、年々に多くのみなり給へば、いとらうがはしきまでぞ有るべき。皇后宮の御雜仕にて貫川といひし、御靈とかや聞ゆる社の神子にてぞありける。先にも聞えしやうに、位の御程に度々召されて、姫宮うまれ給へりしを、それも御乳母の按察二位殿の里に、かの五條院の御腹のと二所、同じ御かしづきぐさにておはせし程に、近衞殿へ參らせ給へれば、殿はもとおはせし北政所をもすさめ給ひて、この宮を類なく思ひ聞えさせたまふ程に、かひぐヽしく若君出で來たまへるをも、いみじうかしづきいたはり給ひて、前の北政所の御腹

召次―院中に侍候して時を奏する役

いとしもなくて―思ひし如くにはあらずして

房二なくきよらにしたてゝ、十二人まゐる。東の御方も院の御車にて、殿上人、北面、召次など、いと美々しうて參り給へり。御門、春宮いづれもいと美しき御有樣なめり。新院は盡きせず、皇后宮のおはしまさましかばとのみしほたれがちに、思し忘るゝ世なき御心や、慰、とこれかれ參らすれど、をさ〳〵準へなるもなし。新陽明門院も、初は御覺えあるやうなりしかど、次第に離々なる御事にて、御獨寢がちなり。故皇后宮の御はらからの中の君も、御面かげや通ひたらん、となつかしさに、忍びてねんごろに宣ひしかば、參らせ奉り給へれど、いとしもなくて、姬宮一所ばかりとり出で給へりしまゝにてやみにき。姬宮をば、大宮院の御傍にぞかしづき聞え給ふ。かくて弘安元年になりぬ。十月許また二條內裏に火いで來て、いみじうあさまし。萬里小路殿は、ありし火の後又造られて、今年の八月に御移轉ありて、新院住ませ給へれど、內裏燒けぬれば、此院また內裏になりぬ。うちつゞき火のしげさ、いとおそろし。其後大宮院いと久しくなやませ給へば、本院も新院も常にわたり給ひて、夜などもおはしませば、異御腹の法親王姬宮たちなども、絕えず御訪問にまうでさせ給ふ。なかに故院の位の御時、勾當內侍といひしが腹に、出でものし給へりし姬宮、後には五條院と聞えし。いまだ宮の御程なりし

○此巻は建治三年より弘安十年後宇多院御譲位までの事を記せり
屯食―下人にたまふ握飯

第十二　老のなみ

建治三年正月三日、内の上御冠したまふ。十一にぞならせ給ふらんかし。御諱世仁と聞ゆ。引入れは關白太政大臣殿、理髪頭中將基顯、御總角、大炊御門大納言信嗣君仕う奉られけり。御遊はじまる。琵琶玄象、今出川大納言、和琴、鈴鹿信嗣大納言、箏の琴殿の大納言の君にておはせしなめり。屯食祿などの事常のごとし。二十二日朝覲行幸、龜山殿へなりしかば、上達部殿上人例のいろ〳〵のえり下襲、織物、打物めでたくゆゝしかりき。御前の大井川に、龍頭鷁首浮べらる。夜に入りて鵜飼どもめして、篝火ともして乘せらる。御前の御遊地下の舞など、樣々の面白き事ども、例の事なればうるさくて、さのみもえかかず。同三月廿六日石淸水社へ行幸、四月十九日賀茂社へ行幸。何れもめでたかりき。人々さだめて記おき給へらん、と讓りてとめ侍りぬ。春宮の御元服八月と聞えしを、奈良の興福寺の火の事により、延びて十二月十九日にぞせさせ給ひける。十六日にまづ内裏へ行啓なる。淸涼殿の東の廂に、倚子を立てらる。御門も倚子につかせ給ふ。ひきいれは左大臣、理髪春宮權太夫つとめらる。御諱凞仁と申しき。持明院殿より、女

新陽明門院とぞ聞ゆめる。建治二年の冬の比、近衛殿にて若宮生れさせ給ひにしかば、めでたくきら〳〵しうて、三夜、五夜、七夜、九夜など、いまめかしく聞えて、御子もやがて親王の宣下などありき。

衛の大殿の姫君、女御にまゐり給ひにしぞかし。女御と聞えつるを、この程院號あり。

あるやうあらん―子細あらん

さりげなくてあれ―何げなくして居れ

その御程の事―御産などの事

ひにける。大納言はこの宮をさして、かく參りたまひけるに、例ならず男の車よりおる氣色見えければ、あるやうあらんと思して、御隨身一人そのわたりに、さりげなくてをあれとて、留めて歸り給ひにけり。男君は、いと思の外に心おごらぬ御旅寝なれど、人の御氣色を見たまふも、ありつる大納言の車など思し合せて、いかにもこの宮にやうあるなめり、と心えたまふに、いとすき〴〵しきわざなり。よしなしと思せば、更さで出で給ひにけり。殘し置き給へりし隨身、このやう能く見てければ、しか〴〵と聞えけるに、いと心うしとおぼえて、日比もかゝるにこそはありけめ。いとをこがましう、かの大臣の心の中もいかにぞや、と數々に思し亂れて、かき絶え久しく音づれ給はぬをも、この宮には、かう殘なく見顯されけんとも知ろしめさねば、あやしながら過ぎもて行くほどに、たゞならぬ御氣色にさへ惱み給ふをも、大納言殿は一筋にも思されねば、いと心やましう思ひ聞え給ひけるぞ、わりなき。されどもさすが思し分く事やありけん、その御程の事共も、いとねんごろに訪ひ聞えさせ給ひけり。異御腹の姫宮をさへ御子になどし給ふ。御處分もありけるとぞ。幾程もなくて、弘安七年二月十五日に宮かくれさせ給ひにしをも、大納言殿いみじう歎き給ひけるとかや。まことや、新院には、一とせ近

思ふには忍ぶる事ぞまけにける逢ふにしかへばさもあらばあれ

え給へれば、御母代の人などもいかゞはせんにて、やう〳〵頼みかはし給へば、ある夕方、内より罷出ん序に、また必ず參り來ん、と頼めきこえ給へりければ、その心して誰も待ち給ふ程に、二條師忠大臣、いと忍びてありき給ふ道に、かの大納言扈從など數多して、いときら〳〵しげにて行き遇ひ給へれば、むつかしと思して、この齋宮の御門あきたりけるに、女宮の御もとなれば、こと〴〵しかるべき事もなし、と思して、しばし、かの大納言の車やり過してんに、出でんよと思して、門の下にやり寄せて、おとゞ烏帽子直衣のなよらかなるにており給ひぬ。内には大納言の參り給へる、と思して、例は忍びたる事なれば、門の内へ車を引き入れて、對のつまより下りて參り給ふに、門より下り給ひぬ。怪しとは思ひながら、たそがれ時のたど〳〵しきほど、何のあやめも見えわかで、妻戸を外して人の氣色見ゆれば、何となく訝しき心地し給ひて、中門の廊に上り給へれば、例の馴れたる事にて、をかしきほどの童女房歩み出でて、氣色ばかりを聞ゆるを、大臣は、覺えなきものから、をかしと思して、尻につきて入り給ふ程に、宮も何心なくうちむかひ聞え給へるに、大臣もこはいかに、とは思せど、何くれとつき〴〵しう、日比の志ありつるよし聞えなし給ひて、いとあさましう一方ならぬ御思ひ加はり給

がめやいづらこよろぎの磯の浪わけ沖に出でにけり

まくろ習ひまでは云々
—伊勢物語

なる龜岡に、鶴こそ群れ居て遊ぶなれ、とうたひ給ふ。その後院きこしめす。善勝寺せれうの里をいだす。人々聲くはへなどして、らうがはしき程になりぬ。かくていたう更けぬれば、女院も我が御方に入らせ給ひぬ。斯てそのまゝのおましながら、かりそめなる樣にてよりふし給へば、人々もすこし退きて、苦しかりつるなごりに、ほどなく寢いりぬ。あすは宮も御かへり、と聞ゆれば、今宵ばかりの草枕なほむすばまほしき御心の鎭めがたくて、いとさゝやかにおはする人の御衣など、さる心して、なよらかなるを紛らはしすべしつゝ、忍びやかにふるまひ給へば、驚く人もなし。何やかやとなつかしう語ひ聞え給ふに、なびくとはなけれども、たゞいみじう大どかに、やはらかなる御さまして、思しほれたる御氣色を、よそなりつる程の御心まどひまではなけれど、らうたくいとほし、と思ひ聞え給ひけり。ながき夜なれど更けにしかばにや、程なう明けぬる夢の名殘は、いと飽かぬ心地しながらきぬ〴〵になり給ふほど、女宮も心苦しげにぞ見え給ひける。その後もをり〳〵は聞えうごかし給へど、さしはへてあるべき御事ならねば、いと間遠にのみなん。まくる習まではあらずやおはしましけん、あさましとのみ盡せず思し渡るに、西園寺大納言忍びて參り給ひけるを、人柄もまめ〳〵しく、いと懇に思ひ聞

あまりあいなう云々｜別々にては興味なければ勿體無けれど昔皇子にまし〳〵し時に準じて隔なく御盃賜はりたし

そぼれがち｜戲れがち

こゆるぎの磯ならぬ御かさな云々｜酒の外の御肴もあるべし賜はれ古今集の意玉だれのを

參らせたり。三めぐりばかりは各別にまゐる。其後あまりあいなう侍れば、忝けれど、昔ざまに思しなずらへ。免させたまひてんや、と御氣色とりたまへば、女院の御土器を齋宮まゐる。その後院きこしめす。御几帳ばかりを隔てゝ、長押の下へ西園寺大納言實兼、善勝寺大納言隆顯召さる。簀子にながすけ、爲方、兼行、すけゆきなど候ふ。あまた度流れ下りて、人々そぼれがちなり。故院の御事の後は、かやうの事もかき絶えて侍りつるに、今宵はめづらしくなん、心解けてあそばせ給へ、などうち亂れ聞え給へば、女房召して御箏ども搔き合せらる。院の御前に、御琵琶西園寺もひき給ふ。兼行篳篥、神樂うたひなどして、こと〴〵しからぬしも面白し。こたみは先齋宮の御前に、院みづから御銚子をとりて聞え給ふに、宮いと苦しう思されて、頓にもえ動き給はねば、女院この御土器のいと心もとなく見え侍るめるに、こゆるぎの磯ならぬ御さかなやあるべからん、と宣へば、賣炭の翁は哀なり。おのが衣は薄けれど、といふ今樣をうたはせ給ふ御聲、いと面白し。宮きこしめして後、女院御盃をとり給ふとて、天子には父母なし、と申すなれど、十善の床をふみ給ふも、いやしき身の宮仕なりき。一こと報い給ふべうや、と宣へば、さうなる御ことなりや、と人々目をくはせつゝしのびてつきじろふ。御前の池

り馴るゝを召しよせて、馴々しきまでは思ひよらず、只少し氣近きほどにて、思ふ心の片端を聞えん、かくをりよき事もいと難かるべし、と切にまめだちて宣へば、いかがたばかりけん、夢現ともなく近づき聞えさせたまへれば、いと心うしと思せど、あえかに消えまどひなどはし給はず。らうたくなよ〳〵として哀なる御けはひなり。鳥もしばしば驚かすに、心あわただしう、さすがに人の御名のいとほしければ、夜ふかく紛れ出で給ひぬ。日たくるほどに大殿籠りおきて、御文奉り給ふ。うはべは只大方なるやうにて、習はぬ御旅寢も、いかになどやうに、すくよかに見せて、中にちひさく、

夢とだにさだかにもなき假ぶしの草のまくらに露ぞこぼるる

いとつれなき御氣色の聞えんかたなさにとぞあめる。なやましとて御覽じもいれず。しひて聞えんもうたてあれば、なだらかにもて隱して、おこたらせ給へ、など聞え知らすべし。さて御方々御臺などまゐりて、晝つ方また御對面どもあり。宮はいとはづかしうわりなく思されて、いかで見え奉らんずらん、と思しやすらへど、女院などの御氣色のいとなつかしきに、聞え返さひ給ふべきやうもなければ、たゞ大どかにておはす。今日は院の御經營にて、善勝寺大納言隆顯ひわりごやうのもの、いろ〳〵にいと淸らに調じて

あえかに—かよわく

うはべは云云—表面は普通の御消息のやうに書き給ひて

御臺などまゐりて—御食事ありて

花といはゞ―花にたとへていはゞ

さしはへて云々―わざわざ齋宮に言はんも聞え惡かるべし

に葡萄染の御小袿なり。御髪いとめでたき盛にて、二十に一つ二つあまり給ふらん、と見ゆ。花といはゞ霞の間のかば櫻も、なほ匂劣りぬべく、いひ知らずあてに美しう、邊も薫る御さまして、珍かに見えさせ給ふ。院は、われもかう亂れ織りたる枯野の御狩衣、薄色の御衣、紫苑色の御指貫、なつかしき程なるをいたくたきしめて、えならず薫りみちてわたり給へり。上臈だつ女房、紫のにほひ五に、裳ばかり引きかけて、宮の御車にまゐり給へり。神代の御物語などよき程にて、故院のいまはの比の御事など、あはれになつかしく聞え給へば、御いらへもつゝましげなるものから、いぶせからぬ程に、ほのかに物うちのたまへる御さまなども、いとらうたげなり。をかしきさまなる御酒、御果物、强飯などにて今宵ははてぬ。院も我御方に歸りて、うち休ませ給へれど、まどろまれ給はず。ありつる御面影心にかゝりて、覺え給ふぞいとわりなき。さしはへて聞えんも、人聞きよろしかるまじ、いかゞはせんと思しみだる。御兄弟といへど、年月よそにて生ひ立ち給へれば、うと〳〵しくならひ給へるまゝに、つゝましき御思も薄くやありけん、猶ひたぶるにいぶせくて止みなんはあかず口惜し、と思す。けしからぬ御本性なりや。某の大納言の女、御身近く召しつかふ人、かの齋宮にもさるべきゆかりありて、睦しく參

新院は云々―亀山院は關東の計らひに御不満なるべけれど表には御中よく見えたまふ

いとらうたく云々―後嵯峨院の鍾愛したまひし事をいふ

うちかはり、世をしろしめしゝ例などをも思ひや出でけん、御二流にて位にもおはしまさなん、と思ひ申しけり。新院は御心ゆくとしもなくやありけめど、大方の人めには御中いと善くなりて、御消息も常に通ひ、上達部なども彼方此方參り仕うまつれば、大宮院もめやすく思さるべし。まことや文永のはじめつ方くだり給ひし齋宮は、後嵯峨院の更衣ばらの宮ぞかし。院崩れさせ給ひて後、御服にており給へれど、猶御暇許りざりければ、三年まで伊勢におはしましゝが、この秋の末つかた御のぼりにて、仁和寺に衣笠といふ所にすみ給ふ。月花門院の御次には、いとらうたく思ひきこえ給へりし昔の御心掟を、あはれに思し出でて、大宮院いと懇にとぶらひ奉り給ふ。龜山殿におはします。十月ばかり齋宮をも渡し奉り給はんとて、本院にも入らせ給ふべきよし御消息あれば、めづらしくて御幸あり。その夜は女院の御前にて、むかし今の御物語など、のどやかに聞え給ふ。又の日夕つけて衣笠殿へ御むかひに、忍びたるさまにて、殿上人一二人、御車ふたつばかり奉らせ給ふ。寢殿の南面に、御茵ども引きつくろひて御對面あり。とばかりして院の御方へ御消息聞え給へれば、やがてわたり給ふ。女房に御佩刀持たせて、御簾の中に入りたまふ。女院は香のうすにほひの御衣、香染などたてまつれば、齋宮紅梅のにほひ

あなかま—さわがし

かりかは、とは思ひながら、言ひ合せてその文をもちて、東へ行きて、云々と敎へしままにいひて見れば、入道殿の御消息なりけり。あなかま〱とて、永く愁なきやうに計らひつ。佛神のあらはれたまへるかとて、みな額をつきて悅びけり。かやうの事すべて數しらずありしほどに、國々も心づかひをのみしけり。最明寺入道とぞいひける。その子なればにや、今の時宗朝臣もいとめでたきものにて、本院のかく世をおぼし捨てんずる、いとかたじけなく哀なる御事なり。故院の御掟は樣こそあらめなれど、そこらの御このかみにて、させる御過誤もおはしまさゞらん、いかでかは忽ちに名殘なくはものし給ふべき、いとたいぐ〱しきわざなりとて、新院へも奏し、彼方此方なだめ申して、東の御方の若宮を坊に立て奉りぬ。十月五日節會行はれていとめでたし。かゝれば少し御心慰めて、この際は、强ひて背かせ給ふべき御道心にもあらねば、思し止まりぬ。これぞあるべきこと、とあいなう世人も思ひいふべし。御門よりは今二ばかりの御兄なり。儲の君御年まされる例、遠き昔はさておきぬ。近比は三條院、小一條院、高倉院などやおはしましけん。高倉院の御末ぞ、今もかく榮えさせおはしませば、かしこきためしなめり。いにしへの天智天皇と天武天皇とは、おなじ御腹の御兄弟なり。その御末暫はうちかはり

あなぐり—検索し
うれへ—訴訟

尊號をもかへし奉らせ給へば、兵仗をも止めんとて、御隨身どもめして、祿かづけ暇たまはするほど、いと心細しと思ひあへり。大方のありさまうち思ひめぐらすも、いと忍びがたき事多くて、内外の人々袖どもうるひわたる。院もいと哀なる御氣色にて、心づよからず。今年三十三にぞおはします。故院の四十九にて御髪おろし給ひしをだに、さこそは誰も〳〵惜み聞えしか。東の御方も、おくれ聞えじと御心づかひし給ふ。さならぬ女房上達部の中にも、とりわき睦じう仕つる人三四人ばかり、御供つかまつるべき用意すめれば、ほど〳〵につけて、私も物心細う思ひ歎く家々あるべし。かゝる事ども東にも聞え驚きて、例の陣のさだめなどやうに、此彼あまた武士ども、よりあひよりあひ評定しけり。この比はありし時頼朝臣の子時宗相摸守といふぞ、世の中計らふ主なりける。故時頼朝臣は、康元元年に頭おろして後、忍びて諸國を修行しあるきけり。それも國々の有樣人のうれへなど、委しくあなぐり、見聞かん謀にてありける。あやしの宿に立ち寄りては、その家主がありさまを問ひ聞き、ことわりある愁などの埋もれたるを聞きひらきては、我はあやしき身なれ。昔よろしき主をもち奉りし、未世にやおはする、と消息奉らん、もて參出て聞え給へ、などいへば、なでう事なき修行者の、何ば

懺法—法華懺法、後嵯峨院の御滅罪のために懺悔の文を讀ませらるる也

廻立殿—悠紀の神事後行水あり裝束を改めたまふ處

葉御車、萠黄の御狩衣、山吹の二御衣、紅の御ひとへ、薄色の織物の御指貫たてまつる。本院は、故院の御第三年の事思し入りて、睦月の末つ方より、六條殿の長講堂にて哀にたふとく行はせたまふ。御指の血をいだして、御手づから法華經など書かせ給ふ。衆僧も十餘人がほど召しおきて、懺法などよませらる。御おきての思はずなりしつらさをも、おぼし知らぬにはあらねど、それもさるべきにこそはあらめ、といよ〳〵御心をいたして懇に孝じ申させ給ふさま、いとあはれなり。新院もいかめしう、御佛事嵯峨殿にて行はる。三月廿六日は、御卽位めでたくて過ぎもてゆく。十月廿二日御禊なり。十九日又官廳へ行幸あり。女御代花山院より出ださる。糸毛の車、寢殿の階の間に左大臣殿、大納言よせらる。皆紅の五衣、おなじきひとへ、車の尻よりいださる。十一月十九日また官廳へ行幸、二十日より五節はじまるべく聞えしを、蒙古起るとてとまりぬ。廿二日大嘗會、廻立殿の行幸節會ばかり行はれて、淸暑堂の御神樂もなし。新院は世をしろしめす事かはらねば、萬御心のまゝに、日比ゆかしくおぼしめされし所々、いつしか御事しげう花やかにて過させ給ふ。いとあらまほしげなり。本院は猶いとあやしかりける御身の宿世を、人の思ふらん事もすさまじう思しむすぼほれて、世を背かんのまうけにて、

○此卷は文永十一年より建治二年までの事をしるせり
禁色仰せらる—裝束にる、禁色を許さる、禁は上るゝなり古は深紅深紫中古以來は地紋ある帛地

第十一　草まくら

文永十一年正月二十六日、春宮に位讓り申させ給ふ。二十五日夜まづ内侍所、劍璽ひき具して、押小路殿へ行幸なりて、又の日殊更に二條内裏へわたされけり。九條攝政殿まゐり給ひて、藏人召して禁色仰せらる。上は八にならせ給へば、いと小く美しげにて、鬢頰ゆひて、御引直衣、うち御衣、はりばかま奉れる御氣色、おとな〳〵しうめでたくおはするを、花山院内大臣扶持し申さるゝを、故皇后宮の御兄公守君などは、哀に見給ひつゝ、故大臣宮などのおはせましかば、と思し出づ。殿上に人々多く參り集り給ひて、御膳まゐる。その後上達部の拜あり。女房は朝餉より末まで、内大臣公親の女をはじめにて、三十餘人並み居たり。何れとなく取々に淸げなり。二十八日よりぞ内侍所の御拜始められける。かくて、新院、二月七日御幸はじめさせ給ふ。大宮院のおはします中御門京極實俊の中將の家へなる。御直衣、唐庇の御車、上達部、殿上人殘なく、うへの衣にて仕うまつらる。同じ十日、やがて菊の網代庇の御車たてまつり始む。この度は御烏帽子直衣、院へまゐりたまふ。同二十日布衣の御幸はじめ、北白川殿へ入らせたまふ。八

られて、御移轉の夜こそ、やがて火出で來て燒けにし事もあれば、これより重き大事も有るべかりけるに、世かはりたらんは如何はせん。かくて今年も暮れぬ。上は愈世の中のあわたゞしう思されて、おりゐなんの御心遣すめり。位におはしましては、十五年ばかりにやなりぬらん。未三十にも遙に足らぬ程の御齢なれば、今ぞさかりに若う淸らなる御程なめる。

塗籠—壁にて圍みたる室御衣其他御調度などを納む

つといだかれ給ひて、上の御手を捉へ、萬に慰め聞えさせ給ふ。御氣色の哀に忝なさを、稚き御心に思し知るにや、いとおとなしく念じ給ふ。かくて後程なくおこたらせ給ひぬれば、めでたく御心落居給ひぬ。大方今年は地震繁くふり、世の中騷がしきやうなれば、謹み思されて、十月十五日より、圓滿院の二品親王内に待ひ給ひて、尊星王の御修法勤め給ふに、二十日の宵二對より火出で來たり、あさましともいはん方なし。上下立ち騷ぎのゝしる樣思ひ遣るべし。大宮院も内におはしましける比にて急ぎ出でさせ給ふ。御車の棟木にも、すでに火燃えつきけるを、又さしよせて春宮奉らせけり。その夜しも勾當内侍里へ出でたりければ、塗籠の鍵をさへ求め失ひて、いみじき大事なりけるを、上聞し召して、荒らかに踏ませ給ひたりければ、さばかり強き戸の轉びて開きたりけるぞ恐しき。さなくばいとゆゝしきことどもぞあるべかりける。故院の御處分の入りたる御小唐櫃、何くれの御寶こと故なく取出されぬ。それだにもあまり騷ぎて、御勘文、御産衣などの入りたるものは燒けにけり。上は腰輿にて押小路殿へ行幸なりぬ。法親王は、修法の強き故にかゝる事はあるなり、とぞ宣はせける。この四月に御移轉ありつるに、幾程なうかゝるは、實にいみじきわざなれど、昔も三條院位の御時とかよ、大内造り立て

さてしもやはなればー御遺詔とはいへ餘りの事にて其儘にあるべきならねば
よたけうーこと〴〵しく
虎子ー便器
をさ〳〵ー大方少しも

れけり。故院の御果も過ぎさせ給へば、世の中色改りて花やかに、人々の御歎の色も薄らぎ行くしも、哀なる習なりかし。其夏東宮例にもおはしまさで日比經れば、内の上御胸つぶれて、御修法や何やと騷がせ給ふ。和氣、丹波の藥師 氏成 春成 ども、夜晝候ひて、御藥の事色々につかうまつれど、たゞ同じ樣にのみおはす。いかなるべき御事にか、といと淺ましうて、上も、つと此御方に渡らせ給ひて見奉らせ給ふに、御目の中おほかた御身の色なども、特の外に黃に見えければ、いと怪しうて御虎子を召寄せて御覽ぜらる。紙を浸して見せらるゝに、いみじう濃く出でたる黃皮の色なり。いとあさましく、などかばかりの事を知り聞えざらんとて、御氣色あしければ、藥師共いたう畏り色を失ふ。かばかりになりては、御灸なくてはまが〳〵しき御事いで來べし、と各驚き騷ぐ。いまだ例なきことは如何あるべき、と定めかねらる。位にてはたゞ一度例ありけり。春宮にては未ださる例なかりければ、いかゞはせんとて、思し定む。七にならせ給へば、さらでだに心苦しき御程なるに、まめやかにいみじ、とおぼす。藥師と大夫君一人召し入れて、又人も參らず。御門の御前にて五所ぞせさせ奉らせ給ひける。御乳母共いと悲しと思ひて、訝しうすれど、をさ〳〵ゆるさせ給はず。宮いとあつくむつかしう思せど、大夫に

祇園神輿たがひ―祇園神輿のわたる時皇居その程近き所なる時はそを避けて他に行幸なることをいふ

うちつけ事―思ひがけぬ事

張の熱田社などをぞ御處分ありける。いづれの年なりしにか、新院、六條殿に渡らせ給ひし比、祇園の神輿たがひの行幸ありしとき、御對面の樣を故院へ尋ね申されたりしにも、我と等しかるべき御事なれば、朝覲に擬へらるべし、と申されけり。一つ腹の御兄にてもおはします。旁ことわりなるべき世を、思の外にもとおもふ人々も多かるべし。いでや位におはしますに就きて、さしあたりの御政事などはことわりなり。新院にも若宮おはしませば、行末の一節はなどかは、など言ひしろふ。かゝればいつしか院方、内方と人の心々も引きわかるゝ樣に、うちつけ事ども出できたり。御ひとりおはしまさぬあとは、いみじきものにぞありける。朝の御守護とて、田村將軍より傳はり參りける御佩刀などをも、かの御氣色のしか御座しましけるにや、御かくれの後、やがて内裏へ奉らせ給ひにしかば、それなどをぞ、女院のうらめしき御事には、院も思ひ聞えさせ給ひける。さてしもやはなれば、このよしをも關東へぞ宣ひ遣しける。内には花山院太政大臣の後院の別當になされて、世の中自らしたゝめさせ給ふ。もとよりいと花やかに今めかしき所おはする君にて、萬かど〳〵しうなん。皇后宮崩れさせ給ひにし後は、盡せぬ御歎さめがたうて、所狹き御有樣もまたなう、いかで本意をも遂げてばや、など思さ

をふの浦梨—ならでの序詞古今集に「おふの浦に、かた枝さしおほひたる梨のなりもならずも、寐てかたらはん」麻生の伊勢浦は

じ心なる友に覺えければ、いと哀にて、悲しき事も語りあはせん、と日暮侍ち居たるに、遂に見えず。あやしと思ふに、はやその夜頭おろしてけり。齢も盛に、今も皇后宮の御兄、春宮の御伯父なれば、世覺劣るべくもあらず、思ひなしも賴もしくほこりかなるべき身にて、かく捨て果つる程いみじく哀なれば、皆人いとほしう悲しき事にいひ扱ふめり。經任中納言にはこよなき心ばへにや。父大臣も、院の御事をつきせず歎き給ふに打ち添へて、いみじと思す。公宗中納言もかひなき物思の積にや、はかなくなり給ひぬ。又この中納言さへかくものし給ひぬるを、樣々につけて心細く思すに、いく程なく皇后宮さへまたうせ給ひぬ。いよ〳〵臥し沈みておはする程に、いと弱うなりまさり給ふ。春宮の御代をもえ持ち出づまじきなめり、と哀に心細う思しつゞけて、

　はかなくもをふの浦梨君が代にならでと身をも賴みけるかな

歎に堪へず遂にうせたまひけり。物思には實に命も盡くるわざなりけり。哀に悲しといひつゝも、とまらぬ月日なれば、故院の御日數も程なう過ぎ給ひぬ。世の中は新院かくておはしませば、法皇の御代に引きうつして、さぞあらん、と世の人もおもひ聞えけるに、當代の御ひとつ系統にてあるべきさまの御掟なりけり。長講堂領、また播磨國尾

限ある道云云―我を跡に殘して死なれたるを悲しみしなり

靡きつかうまつれる樣、來し方も例なき程なり。二十三日御初七日に、大宮院御髮おろさる、其程いみじく悲しき事多かり。天の下おしなべて黑み渡りぬ。萬しめやかに哀なる世の氣色に、心あるも心なきも淚催さぬはなし。院、内の御歎さる事にて、朝夕睦しく仕う奉りし人々の思ひ沈み合へる樣、ことわりにも過ぎたり。その中に經任中納言は、人よりことに御覺ありき。年も若からねば、定めて頭おろしなん、と皆人思へるに、なよらかなる狩衣にて、御骨の御壺持ちまゐらせて參れるを、思のほかにも、と見る人思へり。權中納言公雄と聞ゆるは、皇后宮の御兄なり。早うより故院いみじくらうたがらせ給ひて、夜晝御傍去らず候ひて、明暮つかうまつらせ給ひしかば、限ある道にも後らかし給へることを、若きほどにやる方なく悲し、と思ひ入り給へり。西對の前なる紅梅のいと美しきを折りて、具氏宰相中將、かの中納言に消息きこゆ。

　梅のはな春は春にもあらぬ世をいつと知りてか咲き匂ふらん

かへし、

　心あらばころもうき世の梅の花をり忘れずばにほはざらまし

夜さり對面に何事も聞えん、といへるを、この中將も、故院の御いとほしみの人にて、同

へる程を、猶いぶせがらせ給ふに、正月も立ちぬ。如何樣におはしますべきにか、と誰も誰も思しまどふ事限なし。かねてよりかやうの爲と思しおきてける壽量院へ、二月七日わたり給ふ。こゝへはおぼろけの人は參らず。南松院の僧正、淨金剛院の長老覺道上人などのみ、御前にて法の道ならでは宣ふ事もなし。六波羅北南御訪問に參れり。西園寺大納言實兼、例の奏し給ふ。十一日行幸あり。中一日わたらせ給へば、泣く〳〵萬の事を聞えおかせ給ふ。新院も御對面あり。御門は御本性いと花やかに賢く、御才なども昔に恥ぢず、何事も整ほりてめでたくおはします。世を治めさせ給はん事も、後めたからず思せば、聞え給ふすぢことなるべし。十七日の朝より御氣色かはるとて、善智識召さる。經海僧正、往生院の聖などまゐりて、ゆゝしき事ども聞え知らすべし。遂に其日の酉の時に、御年五十三にて崩れさせ給ひぬ。後嵯峨院とぞ申すめる。今年は文永九年なり。院中暮れ塞りて、闇にまよふ心地すべし。十八日に藥草院に送り奉り給ふ。仁和寺の御室、圓滿院、聖護院、菩提院、青蓮院、皆御供つかまつらせ給ふ。內より頭中將御使にまゐる。三十年が程世を認めさせ給ひつるに、少しの誤なく思すまゝにて、新院、御門、春宮動きなく、又外樣に別るべき事もなければ、思しおく可き一節もなし。なき御跡まで人の

—侍臣にもあれ女房にもあれ上下の區別なく

御氣色かはる—御危篤

外樣に別るべき事もなければ—皇位の他の御系統に遷らせたまふべき事なければ

せんじもの —煎じ物卽ち煎藥

男女房云々

に、平かにおはするを喜びにて、いかゞはせんと思し慰む。人々の祿など常のごとし。法皇もなか〳〵いたはしく、やんごとなき事に思して、いみじくもてはやし奉らせ給ふ。いでやと口惜しくおもへる人々多かり。かゝるにしも實雄大臣の御宿世あらはれて、片つ方には心おちゐ給ふも世のならひなれば、ことわりなるべし。五夜七夜など、殊に花やかなる事どもにて過ぎもてゆく。その比ほひより、法皇時々御惱あり。世の大事なれば、御修法ども嚴しく始る。何くれと騷ぎあひたれど、怠らせ給はで年もかへりぬ。正月のはじめも院の內かい濕りて、いみじく物思ひ歎きあへり。十七日龜山殿へ御幸なる。これや限と上下心細し。法皇も御輿なり。兩女院は例のひとつ御車にたてまつる。尻に御匣殿さぶらひ給ふ。道にて參るべき御せんじものを、胤成、師成といふ藥師共、御前にてしたゝめて、銀の水瓶に入れて、たかよしの中納言承りて、北面の信友といふに持たせたりけるを、內野の程に參らせん、とて召したるに、この瓶に露ほどもなし。いと珍かなるわざなり。さるほどの大事のものを、あしく持ちてうちこぼすやうは如何でかあらん。法皇もいとゞ御臆病そひて心細く思されけり。新院は大井川の方におはしまして、隙なく男女房上下となく、今のほど如何にいかにと聞えさせ給ふ。御使の行きか

金剛樹―木欒子の類
黑方―薫物の名
男女房―男房女房の略
男房は藏人
定業云々―大般若經の文句定業亦能轉、正法盡者、若廷六月住とあり
けんじやくわんぎ―七佛經の文句なり見者歡喜と書けり

ば、仁和寺の御室の如法愛染の大阿闍梨にて候ひ給ふを、御枕上に近く入れ奉らせ給ひて、いと弱う見え侍るはいかなるべきにか、と院も添ひおはしまして、あつかひ聞え給ふさま疎ならねば、哀と見奉りたまひて、さりとも怪しうはおはしまさじ。定業の亦能轉菩薩の誓なり。今更妄語あらじとて、御心を致して念じたまふに、驗者の僧正も一祕密とて、念珠おし揉みたる程、實にたのもしく聞ゆ。御誦經のもの共はこび出で、女房の衣などこちたきまでおし出せば、奉行とりて、殿上人北面の上下あかれ〳〵に別ち遣す。そこらの上達部は、階の間の左右に著きて、皇子誕生をまつ氣色なり。陰陽師、巫女立ちこみて、千度の御祓勤む。御隨身北面の下﨟などは、神馬をぞ引くめる。院拜したまひて、二十一社に奉らせ給ふ。凡て上下内外のゝしり滿ちたるに、御氣色たゞ弱りに弱らせ給へば、今一しほ心まどひして、さとしぐれわたる袖の上もいとゆゝし。院もかきくらし悲しく思されて、御心のうちには、石清水の方を念じ給ひつゝ、御手をとらへて泣き給ふに、候ふ限の人皆え心强からず。いみじき願共を立てさせ給ふ驗にや、七佛の阿闍梨まゐりて、けんじやくわんぎ、とうちあげたる程に、辛うじて生れ給ひぬ。何といふ事も聞えぬは姬宮なりけり、といと口惜しけれど、無下になき人と見え給へる

山は不盡の嶺―「時知らぬ山はふじのねいつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ」伊勢物語の歌

いざ言問はん―「名にし負はゞいざ言問はん都鳥わが思ふ人はありやなしやと」とある伊勢物語の歌

ろとぞ聞えし。かねの地盤にしろがねの伏籠に薫物くゆらかして、山は不盡の嶺いつとなく、とまた銀の船に麝香の臍にて簑きたる男つくりて、いざこと問はん都鳥、など樣樣いとなまめかしくをかしくせられけり。わざとことぐ〜しき樣にはあらざりけり。此度は新院よりこそ、仙人のまねをして、煩惱はくひにのる、さかづきは花にのる、とかやはやして、法皇の御迎にまゐる。上達部のおとなび給へるなどは、少し輕々にや見えけん、とおしはからる。この度は源氏物語の意にやありけん、唐めいたる箱に金剛樹の珠數入れて、五葉の枝につけたり。また齋院よりの黑方、梅のちり過ぎたる枝に附けなど、これもいとさゝやかなる事どもになんありける。男女房亂りがはしく強ひかはして、御箏どもめし、拍子打ちならしなどして明けぬ。かやうの事にのみ心やりて、明し暮させ給ふ程に、又の年の秋になりぬ。東二條院日比たゞにも御座しまさゞりつるが、其御氣色ありとて世の中騷ぐ。院の内にてせさせ給へば、いよ〜人參り集ふ。大法祕法殘なく行はる。七佛藥師、五壇の御修法、普賢延命金剛童子、如法愛染など、すべて數知らず。御驗者には、常住院僧正まゐり給ふ。八月二十日宵の事なり。既にかと見えさせ給ひつゝも、二日三日になりぬれば、あるかぎり物覺ゆる人もなし。いと苦しげにし給へ

五の巻—法華經の第五巻
思ひの津に云々—思ひの津に船のよれかし星のまぎれにおしてまゐらうとやれことう」とある歌をうたひてはやしたるなり

せさせ給ふ。御八講、名たかく才勝れてかしこき僧どもを召しけり。世の中の人殘なく仕へ奉る。新院かねてより渡り給へり。さるべき御事とは申しながら、何につけても御心ばへの美しくなつかしう御座しまして、院の覺たるすぢの事は、必ず同じ御心に仕うまつり、聊もいでや、とうち思さるゝ一節もなくものし給ふを、法皇もいと美しう忝し、と思されたり。第二日の夜に入りて行幸もなる。五の巻の日の御捧物どもまゐりつどふ。樣々まねび盡し難し。内の御捧物は、紙屋紙にかねを包みて、柳筥にすゑて頭辨ぞ持たる。次に新院女院たち、宮々御かた〴〵、皆そなたざまの宮司、殿上人など持續きたり。關白大臣など座につき給ふ。大中納言、參議、四位、五位などは、自の捧物を持ちてわたる。各心々にいどみ盡して、樣々をかしき中に、兵部卿隆親は糸鞋をはきて、鳩杖をつきて出でたり。この杖をやがて捧物にもなしけり。銀にて直打にして、さきは金にて鳩をすゑたりけり。結願の日は、舞樂など甚く面白くて過ぎぬ。又の年正月に、忍びて新院と御方わかちの事し給ふ。初は法皇御負なれば、御勝むかひに上達部皆五節の眞似をして、色々の衣厚褄にて、思の津に船のよれかし、とはやしてまゐる。新院ひき繕ひて渡り給ふ。御酒幾返となくきこしめさる。一番づつの御引出物、伊勢物語のこと

今日の袂云云—後嵯峨天皇の御出家を悲み奉れる歌なれど前後の句詳ならず

『止觀の談義』—天台宗の教義を講談すること

うちしぐれて、木の葉さそふ嵐もをり知り顏に、物悲しう涙あらそふ心地し給ふ人々多かるべし。中務御子、今日の袂さぞしぐるらん、と宣ひし御返、中將、

袖ぬらす今日をいつかと思ふにもしぐれてつらき神無月かな

やがてその夜御ぐしおろし給ひぬ。御戒師には、青蓮院法親王まゐり給ふ。その比やがて御逆修はじめさせ給へば、その程女院、いろ〳〵の御捧物ども奉り給ふ。今はいよ〳〵法の道をのみもてなさせ給ひつゝ、或時は止觀の談義、或時は眞言の深き沙汰、淨土の宗旨などをも尋ねさせ給ひつゝ、萬に御心通ひ暗からずものし給へば、何事も前世よりかしこくおはしましける程顯れて、今行末も實にたのもしくめでたき御有樣なり。かくて今年も暮れぬ。又の年三月朔日、月花門院俄にかくれさせ給ひぬ。法皇も女院も限なく思ひ聞えさせ給ひつるに、いとあさまし。さるはまことにやあらん。又人たがへにや、とかく聞ゆる御事どもぞ、いと口惜しき。四辻彦仁中將忍びて參り給ひけるを、基顯中將かの御眞似をして、また參り加はりける程に、あさましき御事さへありて、それ故かくれさせ給へる、など耳語く人も侍りけり。猶さまではあらじ、と思ひ給へれど、いかがありけん。法皇は、又文永七年神無月の比、御手づからかかせ給へる法華經一部供養

御本意—御出家の御素志

判ぜさせられける—歌合の歌の優劣を判するなり。身をせめ云々は院の御製に對する判の詞なり

馬あげさせられけり—走馬を獻ぜられたるなり

の先立ち給ひし歎に沈みてのみ物し給へど、かゝる世の氣色をかしこく見給はぬよ、と思し慰む。中宮は御服の後も參り給はず。萬ひきかへ物うらめしげなる世の中なり。一院は、御本意遂げん事をやう〱思す。その年の九月十三夜、白川殿にて月御覽ずるに、上達部、殿上人例の多く參り集ふ。御歌合ありしかば、內の女房ども召されて、色々の引物、源氏五十四帖の心樣々の風流にして、上達部殿上人までも分ち給はす。院の御製、

我のみや影もかはらんあすか川おなじ淵瀨に月はすむとも

かねてより袖もしぐれて墨染のゆふべ色ます峯のもみぢ葉

この御歌にてぞ、御本意の事おぼし定めけり、と皆人袖をしぼりて聲もかはりけり。哀にこそ。民部卿入道爲家判ぜさせられけるにも、身をせめ心を碎きて、かきやる方も侍らず、とかや奏しけり。斯て神無月の五日龜山殿へ御幸なる。今日をかぎりの御旅なれば、心ことにとゝのへさせ給ふ。新院も例のおはします。大宮、東二條、ひとつ御車にておなじく渡らせ給ふ。大宮女院は白菊の御衣、東二條院は青紅葉の八、菊の御袿奉る。まづ北野、平野の社へ御參あれば、御隨身ども花ををりつくし、今日を限と樣あしきまで裝束きあへり。兩社にて馬あげさせられけり。神もいかに名殘多く見給ひけん。空さへ

うち衣はやりつき—やりつきの四字誤あるべし

父大臣の事に云々—父の喪に當りて服中なれば舞人とならずとなり

樣々盡したり。基俊少將、この度は、櫻萌黄の五重の狩衣、紅の匂の五衣、うちきぬはやりつき山吹のにほひ、うき織物の三重ひとへ、紫の綾の指貫、中にすぐれてけうらに見え給へり。この座は、多くろくたいの衣を著たり。萬歳樂を吹きて樂人舞人まゐる。池の汀に桙をたつ。春鶯囀、古鳥蘇、後參、輪臺、青海波、落蹲などあり。日ぐらし面白くののしりて歸らせ給ふ程に、赤地の錦の袋に御琵琶入れて奉らせ給ふ。刑部卿君御簾の内より出さる。右大將とりて、院の御前に氣色ばみ給ふ。胡飲酒舞は、實俊中將とかねては聞えしを、父大臣の事にとゞまりにしかば、近衞前關白殿の御子三位中將ときこゆる、いまだ童にて舞ひ給ふ。別してこの試樂よりさきなりしにや、内々白川殿にて試みありしに、父の殿も御簾の内にて見給ふ。若君いとうつくしう舞ひ給へば、院めでさせ給ひて、舞の師たゞもち祿たまはりなどしけり。かやうに聞ゆる程に、蒙古軍といふ事おこりて、御賀とゞまりぬ。人々口をしく本意なし、と思す事限なし。何事もうちさましたるやうにて、御修法や何や、と公家武家たゞこの騷なり。されども程なく鎭まりて、いとめでたし。かくて今上若宮、六月二十六日親王の宣旨ありて、おなじき八月二十五日坊に居給ひぬ。かく花やかなるにつけても、入道殿はあさましく思さる。故大臣

はひわたるほど―距離の極近きをいふ

きはにて―解しがたし誤脫あるべし

二重うち―うちはうらの誤なるべし

貼りて持ちたる用意氣色、いみじくもてつけてめでたく見え侍りけり。笛もちみち、たかやす、笙は公明、宗實、篳篥は兼行、太鼓敎藤、鞨鼓はあきなり、三の鼓は敎賴、左萬歲樂、右地久、陵王、輪臺、靑海波、太平樂、入綾、實冬いみじく舞ひすまされたり。右落蹲、左春鶯囀、右古鳥蘇、後參、賀殿の入綾實冬舞ひたまひしにや、暮れかゝる程にて、何のあやめも見えずなりにき。御方々宮達あかれ給ひぬ。同じ二月十七日に、又新院富小路殿にて舞御覽、その朝大宮院まづ忍びて渡らせ給ふ。一院の御幸は日たけてなる。冷泉殿より只はひわたる程なれば、樂人、舞人今日の裝束にて、上達部など皆步みつづく。廂の御車にて御隨身十二人、花ををり錦をたち重ねて、聲々御前花やかにおひののしりて近く候ひつる。二なく面白し。新院は御烏帽子、直衣、御袴きはにて、中門にて待ち聞えさせ給ひつるほど、いと艶にめでたし。御車中門に寄せて、關白殿御佩刀とりて、御匣殿に傳へたまふ。二重織物の萠黃の御几帳のかたびらを出されて、色々の平紋の絹ども、物具はなくておしいださる。今日は正親町院も、御堂の角の間より御覽ぜらる。大臣上達部ありしにかはらず、猶參り加はる人は多けれど、洩れたるはなし。實冬、今日は花田うら山吹の狩衣、二重うち萠黃など、思ひ〳〵心々に、先には皆ひきかへて、

ろくたい―浮紋ある織物

珍らしくうつくしく見ゆ。花山院少將たゞするは、櫻のむすび狩衣、白き絲にて水をひまなく結びたる上に、梅柳をそれもむすびてつけたる、なまめかしく艶なり。赤地の錦の表著、金の文をおく。紅の二ぎぬ同じひとへ紫の指貫、これも柳櫻を刺繡に、いろいろの絲にてしたり。中宮權亮少將公重、唐おりものの櫻萌黃の狩衣、紅のうちぎぬ、紫のにほひの三ぎぬ、紅のひとへ指貫、例の紫に櫻をしろく縫ひたり。堀川少將基俊、唐織物、うら山吹、三重狩衣、柳だすきを青く織れる中に、櫻をいろ〳〵におれり。萌黃のうちぎぬ、櫻をだみつけにして、輪違を細く金の文にして、いろ〳〵の玉をつく。にほひつゝじの三つ衣、紅の三重の單、これもはくちらす。二條中將經俊これもからおりものの櫻萌黃、紅の衣おなじひとへなり。皇后宮權亮中將實守、これもおなじ色のかば櫻の三つ衣、紅梅の三重のひとへ、馬頭隆よし、ろくたいの赤色の狩衣、玉のくゝりを入れ、青き魚綾のうはぎ、紅梅の三つ衣、同じ二重のひとへ、薄色の指貫。少將實繼松がさねの狩衣、紅の打絹、紫の二つ衣、これも色々の縫物おきものなど、いと細になまめかしくしなしたり。陵王の童に、四條大納言の子、裝束常のまゝなれど、紫のろくたいの半尻かねもん、赤地の錦の狩衣、青き魚綾の袴、笏木のみな彫り骨、紅の紙に

並べるたいふ

中門の廊―東の對西の對より釣殿涼殿などに通ふ廊

透渡殿―殿より殿へ通ふ廊

だみかへして―おしかへし〳〵彩りて

衣なり。東のすみの一間は、大宮院、月花門院の女房ども參り集ふ。西の二間に新准后さぶらひ給ふ。御前の簀子に關白殿を初めて、右大臣、內大臣、兵部卿隆親、二條大納言良教、源大納言通成、花山院大納言師繼、右大將道雅、權大納言基具、一條中納言公藤、花山院中納言長雅、左衛門督道頼、中宮權大夫隆顯、大炊御門中納言信嗣、前源宰相有資、衣笠宰相中將經平、左大辨宰相經俊、新宰相中將具氏、別當公孝、堀川三位中將具守、富小路三位中將公雄、皆御階の東につき給ふ。西の第二の間より又前左大臣實雄、二條大納言經輔、前源大納言雅家、中宮大夫雅忠、藤大納言爲氏、皇后宮大夫定實、四條大納言隆行、帥中納言經任、この外の上達部西東の中門の廊。それより下ざま透渡殿打橋などまで著き餘れり。直衣にいろ〳〵の衣かさね給へり。時なりて舞人ども參る。實冬中將唐織物のさくらの狩衣、紫の濃き淡き、黄にて梅を織れり。赤地の錦の袍、紅のにほひの三衣、同じひとへ纐の薄色の指貫、人よりは少しねびたりしも、あなきよげと見えたり。大炊御門中將冬輔といひしにや、裝束さきのに變らず。狩衣は平織物なり。花山院中將家長、魚綾の山吹の狩衣、柳櫻を刺繡にしたり。紅のうちぎぬを輝くばかりだみかへして、萌黄のにほひの三ぎぬ、紅の三重のひとへ、浮織物の紫の指貫に、櫻をぬひものにしたる、

○此卷は龜山天皇の文永五年より同十一年御讓位までの事を記せり

隙ゆく駒—年月のはやく過ぐるをいふ漢書魏豹傳に人生一世間、如二白駒過一レ隙

口ども云—女房たちの多く居

第十　あすか川

隙ゆく駒の足にまかせて、文永も五年になりぬ。正月二十日本院のおはします冨小路殿にて、今上の若宮御五十日きこしめす。いみじうきよらを盡さるべし。今年正月に閏あり。後の二十日餘の程に、冷泉院にて舞御覽あり。明けん年一院五十に滿たせ給ふべければ、御賀あるべしとて、今より世のいそぎにきこゆ。樂所始の儀式は、内裏にてぞありける。試樂二十三日と聞えしを、雨降りて明くる日、つとめて人々參りつどふ。新院はかねてよりわたらせ給へり。寢殿の御階の間に、一院の御座設けたり。その西によりて新院の御座を設く。東は大宮院、東二條院、みな白御袴に二つ御衣奉れり。聖護院法親王、圓滿院僧正などまゐり給ふ。土御門の中務宮も參り給ふ。上達部、殿上人あまた御供したまへり。仁和寺御室、梶井法親王なども、すべて殘りなく集ひたまふ。月花門院、花山院、准后などは、大宮院のおはします御座に、御几帳おしのけて渡らせ給ふ。寢殿の第四の間に、袖口ども心ことにて押し出さる。大納言二位殿、南の御方など、やんごとなき上臈は、院のおはします御簾の中にひきさがりて候ひ給ふ。いづれも白き袴に二つ

ての事ども云々―例の初夜より以下の産養及び御湯殿の事などはすべて省きて申さずとなり

りぬ。二十二にぞなりたまふ。いとめでたきぞうなり。閒屋殿の御太郎君ぞかし。御悦申に兩院より御馬ひかる。大宮院琴、東二條院は御笛など、賜物共いつものことなるべし。西谷殿とも申し、深心院の關白とも申しき。

情おくれいちはやく云云—情愛うすく心鋭く

外法—邪神

例の夜を經

く響きのよしりつれど、それも詮なくて十月十二日失せ給ひぬ。入道殿をはじめ、思し歎く人々かず知らず、中宮も御服にて出でたまひぬ。北方は、德大寺太政大臣の御女なれど、この御腹には更に御子もなし。中宮をも少納言とて、召し使ふ女房の生み聞えたれど、北方の御子になして、男公達も腹々に數多おはすれど、いづれをも北方の御子になされけり。この大臣入道殿よりは少し情おくれ、いちはやくなどおはしければ、心の底にはさのみ歎く人もなかりけるとかや。御葬送の夜、御棺に入れ給へる御頭を、人の盗み取りけるぞ、珍らかなる。御顔の下短にて、半程に御目のおはしましければ、外法とかやまつるに、かゝる生首の入る事にて、某の聖とかや、東山の邊なりける人とりてけるとて、後に沙汰がましく聞えき。中宮の御事などを深く思さるめりしかば、いとほしくあたらしき事にぞ、世の人も思ひ申しける。ありし事を思し出でつゝ、誰も哀に悲しくて、女院の御方々もそれをのみ宣はせけり。十二月一日比、皇后宮また御産とて、天の下騷ぐに、えもいはぬ玉の男御子生れ給ひぬ。大臣北方の御心のうち思ひ遣るべし。今ぞ夜の明けぬる心地し給ふ。院も急ぎ御幸ありて、もてはやし奉らせ給ふ。内より御佩刀まゐる。例の夜を經ての事ども、さながらとゞめつ。近衞左大臣殿へその比攝籙渡

ちぬ男なり｜相應の器量のある男なり

明堂殿｜典藥寮の寶物なる明堂圖といふものを納めおく所

憂心の底になん侍る、と申したまへば、人々、何事にかと覺束なくおぼす。左の大臣實雄は、中宮の御事かく宣ふを、いでやと耳にとまりて打ち思さるらんかし。一院何事にか、とのたまふに、暫ありて入道相國に、如何にもさきだちぬべき心地なんし侍る。恨の至りて恨めしきは、さかりにて親にさき立つ怨、悲の至りて悲しきは、老いて子に後るゝには過ぎず、とこそ澄明におくれたる願文にもかきて侍りしか、など申し給ひて、うちしほたれたまへば、皆いとあはれに聞きおぼす。入道殿はまして墨染の御袖ぬらし給ひける、ことわりなりかし。又その比大風吹きて、人々の家々損はれ失する事數知らぬ中に、明堂殿もまろびぬ。この内には木にて人形を造りて、宮殿を金にて作りて入れたる寶あり。眼をあてゝは見ぬものなり。自も誤りて見つる人は、目のつぶれけるぞ恐しき。陰陽寮の守護神の社もまろびぬ。山の文殊樓、稻荷の中宮なども吹き損ひて、すべて來し方行く末も例ありがたき風なり。西國の方には、人の家をさながら吹きあぐれば、内なる人は塵のやうに落ちて、死に失せなどしけるぞ珍らかなる。餘にかく夥しき風なれば、御占行はれけるにも、重き人の御つゝしみ輕からぬなど奏しけり。果してその比西園寺太政大臣なやましくし給ふとて、山々寺々、修法、讀經、祭、祓など、喧まし

ぬ。その同じ比安嘉門院、丹後の天の橋立御覽じにとておはします。それより但馬の城崎の溫泉めしに下らせたまふ。爲家大納言光成三位など御供つかうまつらる。この女院の御ありさまぞ、又いといみじう來しかた行く末の例にもなりぬべく、萬の事御心のままに好ましくものし給ひける。童舞、白拍子、田樂などいふ事このませ給ひて、古の郁芳門院にもやゝ勝りてぞおはします。侍ふ人々も常に打ちとけず、衣の色鮮かにはな〴〵と今めかしき院の內なり。又安養壽院といひて、山の峰なる御堂には、常に立て籠らせ給ひて、

御觀法—悟道の御修行

御觀法などあるには、人の參る事もたやすくなし。鳴子をかけて引かせ給ひてぞ、おのづから人をも召しける。又その比にや、秋の雨日來降りていと所狹かりしに、たまたま雲間見えて、空の氣色物凄き程に、一院、新院、大宮院、東二條院など、皆ひとつ御方におはします。御前に太政大臣公相、常磐井入道殿實氏も候ひ給ふ。前の左大臣實雄、久我大納言雅忠など、疎からぬ人々ばかりにて大御酒まゐる。數多くだり流れて、上下少しうち亂れ給へるに、太政大臣本院の御盃を賜り給ひて、持ちながらとばかり休らひて、公相官位ともに極め侍りぬ、中宮さておはしませば、もし皇子降誕もあらば、家門の榮花衰ふべからず、

怪しうは侍

實兼も怪しうは侍らぬ男なり。後めたくも思ひ侍らぬに、一の

祭主—伊勢の祭官の長にて中臣氏の世職なり

けどほき御有樣—近づき難き御有樣

すくよか—滯りなき意

がたく承りしか。今年五月雨常よりも晴間なくて、伊勢の宮河も岸を浸して、齋宮の御參も御船なり。祭主も別の船にて御供仕うまつる。道すがら歌うたひ、糸竹の調などして、面白くあそび暮す。御下の後四とせになりぬ。古き例にまかせて、准后の宣旨まゐる。御使に中院少將爲定朝臣下りて、事のよし申す。殿上に召して裳、唐衣、祿たまふ。舞踏して後、都の物語など、さるべき大人だつ人々に少し聞えかはす。艶なる心地して、凡の宮ばらならば、はかなし事なども聞えぬべけれど、かう〴〵しくけどほき御有樣なれば、すくよかにてまかでぬ。その年九月の比左大臣の日野山莊へ、一院、新院、大宮院御幸あり。世になき淸らを盡さる。銀金の御皿ども、螺鈿の御臺、打敷、めなれぬ程の事共なり。院の御分、御小直衣、皆具、夜御衾、白御太刀、御馬二疋、唐綾、魚綾などにて、二階つくられて、御草子箱御硯は、世々を經て重き寶の石なり。管絃の御厨子、樂器、いろいろの綾錦などにて造りて置かる。女院の御方、新院の御分なども同じやうなり。大納言二位殿にも、裝束まもりの筥まで、いとなまめかしう淸らなる物どもぞ有りける。上達部、殿上人にも馬牛ひかる。銀の籠を五くませて松茸入れらる。山へ皆入らせおはしまして御覽の後、御土器幾返となくきこし召せば、人々も醉ひ亂れ、さま〴〵にて過ぎ

傳供—供物を手に手に傳へ供ふること

又なき御めしうど—無双の寵妾大納言二位殿

横川—比叡山延暦寺なる三塔の一

筆もおよび難し。上達部左右につき給ふ。左大臣基平、内大臣家經、大納言は良教、資季、通成、師繼、通雅、中納言は公藤、長雅、通教、經俊、宰相は時繼、資平、宗雅、雅言、具氏など侍はる。盤渉調の調子を吹きて、天童二人玉幡を捧げて、傳供ども次第に奉るほど、鳥向樂を吹き出だしけり。中島に樂屋はかざられたれば、橋の上を樂人列ねて參る程、院の上も出でさせ給ひて、傳供に立ち加はらせおはします御狀、いと忝くめでたし。關白殿、太政大臣、左大臣、内大臣、皆傳供に從はせ給ふ。宗明樂、秋風樂を奏して、繰り返したる程面白き事、身の毛たつばかりなり。御前の御遊には、笙は公藤、通頼、房名、宗雅。笛は長雅、師親、相保。篳篥は實成朝臣、光顯。御琵琶は新院、今出川中納言實兼、富小路三位公成、箏は大納言の二位殿、院の上、この比又なき御めしうど、故入道相國の御むすめとぞ聞えし。又刑部卿少納言新兵衞、男には良教大納言などぞひかれける。勝れたる上手どもの手を盡し給ひけんは、彌勒菩薩もいかばかり笑をふくみ給ひけん。御經一部は北野の社へ御奉納、今一部と三部經は、八幡へ御幸ありて籠め奉らせ給ふ。女院のかかせおはしましたるは、横川にぞ籠められける。かく同じ御心に、佛法の御營もやんごとなくのみおはしますこそ、聖武天皇、光明皇后の御例にや、とあり

野の眞葛霜とけて過ぎにし秋にかへる露かな」

功濁―劫濁の假文字爭亂などの起りて世の末なるをいふ

淨土の三部經―觀無量壽經無量壽經阿彌陀經

きかぎりを擇びめす。大殿にも西八條にて、故東山殿の御ために八講行はせ給ふ。關白殿も光明峰寺にて、結縁灌頂とり行はる。鷹司殿には昔の御北方の十三年の法事とて、大宮殿にていかめしき事ども營ませ給ふ。中に繪像の阿彌陀、余五將軍の臨終佛なりけるを、惠心の僧都傳へられたりけるを持たせ給ひて、供養し給ふ。常の佛の御様にはかはり給ひて、化佛の御光などめでたくおはしましけり。こゝも彼所も尊き事のみ耳にみちて、功濁とはいひ難し。安嘉門院も御法事行はる。男も法師もいとまなく、あかれ〳〵まゐり仕うまつらる。佛法の盛とぞ見えたる。そのころ殿の大將、内大臣になり給ひぬ。節會果つるまゝに大饗行はる。尊者には新大納言爲氏參られけり。御遊など例の事ども面白くなん。今出川中納言實兼も琵琶ひき給ふ。春の曙の艶なるに、物の音もてはやさるべし。其比また、東二條院熊野へ御參めでたかりし事共も、餘になればさのみはにて漏しつ。斯て四月二十三日より院の上は、又龜山殿にて御如法經あそばす。女院も書かせおはしましけり。五月二十三日、十種供養の御經二部、淨土の三部經も書かせ給へり。齋會の御有様は、いつよりも猶いみじ。時なりて寢殿の御裝飾、淨土の莊厳もかばかりにこそと見えて、玉幡、瑠璃天蓋、天に光をかゞやかし、金銀のかざり地を照せるさま

枯野の眞葛云々—續古今集に「日かげさす枯

上の代に、かの御子の三になり給ふ若君達、近衞殿の姫君の御腹ぞかし。七月二十七日に將軍の宣旨かうぶらせ給ひて、やがて四品し給ふ。經任中納言を御使にて東へ下されなどして、苦しからぬ御事になりぬとて、十月ばかりに、故承明門院の御跡、土御門萬里小路殿へ御うつろひありて後ぞ、院の上御母准后なども參りはじめて御對面あり。さるべき人々も參り仕うまつりなどして、世の御有樣にはなりにけれど、建長四年に御年十一にて御下ありし後、今迄十五年が程にぎはゝしく、いみじうもて崇められさせ給ひて、ゆゝしかりつる御住居にひきかへて、もの淋しく心細うなど思さるゝ折々もありけるにや、

　虎とのみもてなされしは昔にていまはねずみのあな憂世の中

又雪のいみじう降りたる朝、右近馬場の方御覽じにおはしまして、よませ給ひける。

　なほたのむ北野の雪の朝ぼらけあとなきことに埋もるる身は

など聞えき。大方この御子の歌の聖にておはします事、皆人の口に侍るべし。枯野の眞葛霜とけてなども、人每にめでのゝしる御歌なるべし。又の年二月には、龜山殿の淨金剛院にて、十五日涅槃の儀式をうつし行はせ給ふ。それより五日の御八講に、人々才賢

平絹—今の羽二重

京の南六波羅—南は兩の誤なるべし時茂は北方の探題時輔は南方の探題

白殿御車にて參り給ふ。先女院の御車、東の廂の北の妻戸へ左右大臣よせらる。院司の大納言通成事のよしを奏せられて、樂屋の亂聲など常の如し。御寺の儀式ありし法勝寺にかはらず。御導師は聖基僧正、御方々の引出物どもいとゆゝしう、法師ばらの長と等しき程に積み重ねたり。萬歳樂地久などめで仰せらる。人々の祿、關白殿には織物の袿一重、藏人頭とりてたてまつる。大臣には綾の袿、納言は平絹なり。御門、新院御對面の儀式など、定めて男の記錄に侍らんかし。御願文の淸書は經朝三位、料紙は紫の色紙、額はかの建て始められし長寛に、教長かきたりけるが燒けざりければ、この度もそれをぞ用ゐられける。かくて少し人々の心のどかにうち靜まりて思さるゝに、東に何事にか煩しきこと出で來にたりとて、將軍七月八日俄なる樣にて御上ありけり。かねては始めて御上あらん時の儀式など、二なくめでたかるべきよしをのみ聞きしに、おもひかけぬ程に、いと怪しき御ありさまにて御上あり。御下の折、六波羅の北方に建てられたりし檜皮屋におちつかせおはしましぬ。この比東に世の中おきて計らふ主は、相摸守時宗と左京權大夫政村朝臣なり。時宗といふは、時頼朝臣の嫡子。政村とは、ありし義時の四郎なり。京の南六波羅は、陸奥守時茂、式部大輔時輔とぞ聞ゆる。中務の御子の御

○此巻は文永三年より四年までの事を記し前篇山のもみぢ葉の巻と重複せるところあり

人だまひ―副車

念なし―氣がきかぬ

第九　北野の雪

文永も三年になりぬ。四月に蓮華王院の供養に御幸あり。一院は赤色のうへの御衣、新院はあを色の御袍たてまつれり。女院の御車に平准后もまゐり給ふ。人だまひ三輛は綿入れる五衣なり。御車の尻に仕うまつられたる。上臈だつ人のにや、あはせの五衣藤のうはぎ袖口出ださる。御幸には、上達部は皇后宮太夫師繼を上首にて十人、殿上人十二人、御隨身ども藤山吹を著けたり。居飼、御廐舍人迄世になくきらめきたり。常の見物に過ぎたるべし。行幸は、當日の午の時ばかりなるに、諸司百官殘るなし。左右大臣薄色蘇芳などなり。右大將通雅花橘の下襲、中納言公藤同じ色、左大將家經蘇芳の下襲、萌黄の上の袴、侍従中納言爲氏、權中納言通基、左衛門督道頼、衣笠宰相中將經平、是等は皆蘇芳の下襲、萌黄の表袴なり。別當高定、宰相中將通持、三位中將實兼、右衛門督師親、殿上人には頭中將具氏、忠秀、この人々は松重の下襲、藤の表袴、同じ色なる、念なしとぞ沙汰ありける。具氏は花橘の下襲を著給へりし、と申す人も侍りしは、何れか實なりけん。近衞將曹二十四人、とり〴〵いろ〳〵に織り盡したるめでたかりけり。關

院も大宮院も、きはことにもて囃しかしづき奉らせ給ふ。これも中宮の御爲いとほしからぬにはあらねど、如何でかさのみはあらん、と西園寺ざまにぞ一方ならず思しすむぼほれ、すさましう聞き給ひける。

その御氣色
―御姙娠の
樣子

御胸あきて
―欝悶はれ
て

のし給ひしかど、やがてうせ給へるを、御門を初め奉りて、誰も〳〵思し歎きつるに、今年又その御氣色あれば、いかゞと思し騷ぎ、山々寺々に御祈こちたくのゝしる、此度だに實に又うちはづしては如何さまにせん、と大臣、母北方も安きいも寢給はず、思し惑ふ事限なし。程近くなり給ひぬとて、土御門殿の承明門院の御跡へ移らせ給ふ。世の中ひゞきて、天下の人たかきもくだれるも、司ある程のは參りこみて犇き立つに、殿の内の人々は、況して心も心ならず周章し。大臣、限なき願共を立て給ひ、賀茂の社にも、御調度共の中に勝れて御寶と思さるゝ御手箱に、后宮自ら書かせ給へる願文いれて、神殿に籠められけり。それには、たとひ御末まではなくとも、皇子一人とかや侍りける、とぞ承りし。まことにや侍りけん。かくいふは、文永四年十二月一日なり。例の御物怪ども顯れて、叫びとよむさまいと恐し。されども御祈の驗にやえも言はずめでたき、玉の男御子生れ給ひぬ。その程の式いはずとも推し量るべし。上も限なき御志にそへて、いよいよ思すさまに嬉し、と聞し召す。大臣も今ぞ御胸明きて心落ちゐ給ひける。新院の若宮もこの殿の御孫ながら、それは東二條院の御心のうちおし量られ、大方もまたうけばり、やんごとなき方にはあらねば、萬聞し召し消つ樣なりつれど、この今宮をば、本

澄明に云々―後江相公爲亡息澄明四十九日願文に弟子朝綱敬白悲之又悲、莫レ悲ニ於老後レ子、恨而更恨、莫レ恨ニ先レ親

宮院、東二條院も、御几帳ばかり隔てゝおはします。御前に太政大臣、常磐井入道、さきの左大臣、久我大納言など、疎からぬ人々許にて御神酒まゐる。數多くだりながれて、上下すこしうち亂れたまへるに、太政大臣、本院の御盃たまはりて持ちながら、とばかりやすらひて、公相官位ともに極め侍りぬ。中宮さておはしませば、若し皇子降誕もあらば、家門の榮花いよ／＼衰ふべからず、實兼もけしうは侍らぬ男なり。後めたくも思ひ侍らぬを、一の憂心の底になん侍る、と申し給へば、人々何事にかと覺束なく思す。左大臣は、中宮の御事かく宣ふを、いでやと耳とまりて、心の中やすげなし。一院はいかなる憂にか、と宣ふに、いかにも入道相國にさき立ちぬべき心地なんし侍る。恨の至りて恨めしきは、さかりにて親に先だつ恨、悲の切に悲しきは、老いて子に後るゝ悲には過ぎず、などこそ澄明に後れたる願文にも書きて侍りしか、など聞えて打しほたれ給へば、皆いと哀と思さる。入道殿はまいて、墨染の御袖絞るばかりに見え給ふ。さてその後幾程なく惱み給ふよし聞ゆれば、さしもやはと覺えしに、いとあやなくうせ給ひぬ。冷泉太政大臣と申し侍りし事なり。入道殿の御心の中さこそはおはしけめ。中宮も御服にて罷出給ひぬ。皇后宮は日にそへて、御覺めでたくなり給ひぬ。姫宮、若宮など出でも

虎とのみ云云—東方朔のことばに用レ之則爲レ虎、不レ用則爲レ鼠

跡なき云々—菅公の寃罪によりて筑紫に流されたる事を思ひよせたり

たりし檜皮屋一あり。そこにぞ初は渡らせ給ふ。いとしめやかに引替へたる御有樣を、年月の習にさうぐ〜しう、物心細う思されけるにや。

虎とのみもちゐられしは昔にていまはねずみのあな憂世の中

院にも東の聞えをつゝませ給ひて、やがては御對面もなく、いと心苦しく思ひ聞えさせ給ひけり。經任大納言未だ下臈なりし程、御使に下されて、何事か仰せられなどして後ぞ、苦しからぬ事になりて、宮も土御門殿、承明門院の御跡へ入らせ給ひけり。院へも常に御まゐりなどありて、人々も仕うまつる。御遊などもし給ふ。雪のいみじう降りたる朝ぼらけに、右近馬場の方御覽じにおはして、御心のうちに、

なほたのむ北野の雪の朝ぼらけあとなきことに埋もるる身は

世を亂らんなど思ひよりける武士の、この御子の御歌勝れて詠ませ給ふにより、夜晝いとむつましく仕う奉りけるほどに、おのづから同じ心なるものなど多くなりて、宮の御氣色あるやうに言ひなしけるとにや。左樣の事どもの響によりかくはおはしますを、思し歎き給ふなるにこそ。口比長雨ふりて少し晴間みゆる程、空の氣色しめやかなるに、二條富小路殿に本院、新院ひとつに渡らせ給ふ比、ことぐ〜しからぬ程の御遊ありけり。大

なくて散りぬるおく山の紅葉は夜のにしきなりけり」

艶なる事のつま—花やかにおもしろき事の取合せ

またの年以下次の北野の雪の篇と事實重複し文章もまた大同小異なり

事のつまにもしつべし。若き人々は身に泌むばかり思へり。うち亂れたるさまに、各御土器ども數多たび下る。明けゆく空も名殘おほかるべし。まことや此年ごろ前内大臣、爲家大納言、入道侍從二位行家、光俊辨入道など承りて、撰歌の沙汰ありつる。只今日明日ひろまるべし、と聞ゆる、面白うめでたし。かの元久の例とて、一院みづからみがかせ給へば、心ことに光そひたる玉どもにぞ侍るべき。年月にそへては、いよ〳〵外さまに分くる方なく、榮えのみまさらせ給ふ御有樣のいみじきに、この集の序にも、大和島根はこれ我が世なり。春風に德を仰がんと願ひ、和歌の浦もまた我が國なり。秋の月に道をあきらめん、とかや書かせ給へりける。實にぞめでたきや。金葉集ならでは、御子の御名の現はれぬも侍らねど、此度は、かの東の中務宮の御なのりぞ書かれ給はざりける、いとやんごとなし。新古今の時ありしかばにや、竟宴といふ事行はせ給ふ。面白かりき。この集をば續古今と申すなり。またの年東に心よからぬ事いで來て、中務の御子都へ上らせ給ふ。何となくあわたゞしきやうなり。御後見は、なほ時賴朝臣なれば、例のいと心賢うしたゝめ直してければ、聞えし程の恐しき事などは無けれど、宮は御子の惟康親王に將軍を讓りて、文永三年七月八日上らせ給ひぬ。御下の折、六波羅に建て

かずたて—勝負の數をかぞふる道具

夜の錦云々—古今集、「見る人も

始つ方攝政にていませしが、又この一とせばかり歸りならせ給へり。前の關白殿は、院の御方にさぶらはせ給ふ。その外すぐれたる限、右は關白殿、今出川太政大臣、皇后宮の御父の左大臣殿より下、皆この道の上手どもなり。左は大殿よりかずたてつくりて、風流の洲濱沈にて造れる上に、銀の船二つにいろ〳〵の色紙を書き重ねて積まれたり。數も沈にて造りて船に入れらる。左右の讀師、一度に御前に參りて讀み上ぐ。左、具氏中將、右、行家なり。山紅葉、本院の御製、

外よりは時雨もいかが染めざらん我が植ゑて見る山のもみぢ葉

終に左御勝の數まさりぬ。披講果てゝ夜更け行くほどに、御遊はじまる。笛花山院中納言、茂通中將、笙は公顯中將にておはせしにや。篳篥忠輔中將、琵琶は太政大臣、具氏中將も彈き給ひけるとぞ。御簾の內にも御箏ども搔き合せらる。東の御方と聞えしは、新院の若宮の御母君にや。刑部卿の君もひかれけり。樂のひま〳〵に、太政大臣、土御門大納言通茂など朗詠したまふ。忠輔、公顯、聲加へたる程面白し。川浪も更け行くまゝに凄う、月は氷をしける心地するに、嵐の山の紅葉夜の錦とは誰か言ひけん。吹き下す松風にたぐひて、御前の簀子にて御酒まゐる、土器の中などに散りかゝる、わざと艶なる

御返しを云云—例の尼の自注の詞

る御贈物共、いとさまぐ〜なる中に、延喜の御手本を、鶯の居たる梅の造枝につけて奉らせ給ふとて、院のうへ、後嵯峨、

　梅が枝に代々のむかしの春かけて變らず來居るうぐひすの聲

御返を忘れたるこそ、老の積りうたて口惜しけれ。其年にや、五月の比本院、龜山殿にて如法經書かせ給ふ。いとありがたくめでたき御事ならんかし。後白河院こそ、斯る御事はせさせ給ひけれ。それも御髪おろして後の事なり。いとかく思したゝせたまへる、いみじき御願なるべし。さるは數多度侍りしぞかし。男は花山院中納言一人さぶらひ給ひける。やごとなき顯密の學士共を召しけり。昔上東門院も行はせ給ひたりし例にや、大宮院同じく書かせおはします、とぞ承りし。十種供養果てて後は、淨金剛院へ御自納めさせ給へば、關白、大臣、上達部歩みつゞきて、御供仕うまつられけるも、さまぐ〜めづらしく面白くなん。その年九月十三夜、龜山殿の棧敷殿にて御歌合せさせ給ふ。かやうの事は、白河殿にても鳥羽殿にても、いと繁かりしかど、いかでかさのみはにて皆漏しぬ。この度は心ことにみがかせ給ふ。右は關白殿にて歌ども撰り整へらる。左は院の御前にて御覽ぜられける。このほど殿と申すは、圓明寺殿の御事なり。新院の御位の

の人は面白くはえある事にし給ひけれど、今の世の人の御心共はあまりすくよかにて、みやびをかはす事のおはせぬなるべし。これも后に立ち給へば、もとの中宮は上りて皇后宮とぞ聞え給ふ。今の后は遊にのみ心入れ給ひて、しめやかにも見え奉らせ給はねば、御覺おとりざまに聞ゆるを、思はずなる事に世の人もいひ沙汰しけり。父大臣も心やましく思せど、さりともねびゆき給はゞ、と只今はうらみ所なく思しのどめ給ふ。かくて弘長三年二月の比、大方の世の景色もうらゝかに霞み渡るに、春風溫く吹きて、龜山殿の御前の櫻綻びそむる氣色、常よりもことなれば、行幸あるべく思しおきつ。關白この三年ばかり又かへりなり給へば、御隨身ども花を折りて、行幸よりも先に參りまうけ給ふ。その外の上達部も例のきら〱しき限殘るは少し。新院も兩女院も渡らせたまふ。御前の汀に船ども浮べて、をかしきさまなる童、四位の若きほど乘せて、花の木かげより漕ぎ出でたるほど、二なく面白し。舞樂さま〲曲など手をつくされけり。御遊の後、人人歌奉る。花契㆓遐年㆒といふ題なりしにや。内の上の御製、

尋ね來てあかぬ心にまかせなば千とせや花のかげにすごさん

かやうの方までも、いとめでたくおはします、とぞ古き人々申すめりし。かへらせ給へ

心の闇―人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかなとある後撰集の歌の意

めやすき程―見にくき事なく御つり合よき程

心は心として―うはべの心はそれとして喜びもすれども胸くるしきは忍びがたく思ふなり

ましてかく類なき御有樣どもなめれば、世に知らぬ心の闇に惑ひ給ふもことわりなるべし。十月二十二日參り給ふ儀式、これもいとめでたし。出車十輛、一の車の左は大宮殿、二位中將基輔の女とぞ聞えし。二の左は、春日三位中將實平の女、右は新大納言、この新大納言は、爲家の大納言の女とかや聞えしにや。それより下は、くだ〳〵しければむづかし。御雜仕、青柳、梅枝、高砂、貫川と言ひし。この貫川を帝忍びて、御覽じて姫宮一所いでものし給ひき。その姫宮は、すゑに近衞關白の北政所になりたまひにき。萬の事よりも女御の御さまかたちの、めでたくおはしませば、上も思しつきにたり。女御は十六にぞなり給ふ。御門は十二の御年なれど、いとおとなしくおよすげ給へれば、めやすき程なりけり。かの下くゆる心地にもいと嬉しきものから、心は心として胸のみ苦しきさまなれば、忍び果つべき心地し給はぬぞ、遂にいかになり給はん、といとほしき程もなく、后立ありしかば、大臣心ゆきて思さるゝ事限なし。西園寺の女御もさし續きて參り給ふを、いかさまならん、と御胸潰れて思せどさしもあらず。これも九にぞなり給ひける。冷泉のおとゞの御女なり。大宮院の御子にし給ふとぞ聞えし。いづれも離れぬ御中に、いどみきしろひ給ふ程、聞きにくき事もあるべし。宮仕のならひ斯るこそ、昔

われかの氣色―茫然自失するばかりの有樣

しめやかに―物靜かに

搔合の程―箏をかいひきて笛の音にあはせるなり

つけても、われかの氣色にてのみ惚れ過し給ふを、大臣は又いかさまにか、と苦しう思す。初秋風氣色だちて艶なる夕暮に、大臣渡り給ひて見給へば、姫君薄色に女郎花などひき重ねて、几帳に少しはづれて居給へる樣かたち、常よりもいふよしなく、あてににほひ充ちてらうたく見え給ふ。御髪いとこちたく、五重の扇とかやを廣げたらん樣して、少し色なる方にぞ見え給へど、すぢこまやかに額より裾まで紛ふすぢなく美し。たゞ人には實に惜しかりぬべき人がらにぞおはする。几帳押しやりて、わざとなく拍子うち鳴らして、御箏ひかせ奉り給ふ。折しも中納言まゐり給へり。こち、と宣へば、うち畏まりて、御簾の内に候ひ給ふ。さまかたち、この君しもぞ又いとめでたく飽くまでしめやかに、心の底ゆかしう、そゞろに心遣せらるゝ樣にて、細かになまめかしうすみたるさまして、あてに美し。いとゞもて鎭めて騒ぐ御胸を念じつゝ、用意を加へ給へり。笛少し吹きなどし給へば、雲るに澄み上りていと面白し。御箏の音のほのかにらうたげなる、搔合の程、中々聞きもとめられず、涙うきぬべきを、つれなくもてなし給ふ。撫子の露もさながらきらめきたる小袿に、御髪はこぼれかゝりて、少し傾きかゝり給へる側目、まめやかに光を放つとはかゝるをや、と見え給ふ。宜きをだに、人の親は如何は見なす。

○此卷は正元元年龜山天皇の卽位より文永四年御宇多天皇御降誕までの事を記せり

右大臣―實

第八　山のもみぢ葉

正元元年十一月二十六日、讓位の儀式常の如し。十二月二十八日御卽位、萬めでたくあるべき限にて年もかへりぬ。おりゐの御門は、十二月二日太上天皇の尊號ありて、新院と聞ゆ。本院と常はひとつに渡らせ給ひて、御遊しげう心やりて、なか〳〵いと長閑かに、めやすき御有樣に思しなぐさむ樣なり、中宮も、院號の後は東二條院と聞ゆ。二條富小路にぞ渡らせ給ふ。太政大臣も入道し給ひぬ。常磐井とて大炊御門京極にぞ、折々すみ給ふ。この入道殿の御弟に、その比右大臣と聞ゆる、姬君あまた持ち給へる中に、勝れたるをらうたきものに思しかしづく。今上の女御代に出で給ふべきを、やがて其序、文應元年入內あるべく思しおきてたり。院にも御氣色たまはり給ふ。入道殿の御孫の姬君も參り給ふべき聞えはあれど、さしもやは、とおし立ち給ふ。いと猛き御心なるべし。この姬君の御兄あまたものし給ふ中の兄にて、中納言公宗と聞ゆる、いかなる御心か有りけん、下焚く烟に薫りわび給ふぞいとほしかりける。さるはいとあるまじき事、と思ひ放つにしも、隨はぬ心の苦しさを、おきふし葦の根なきがちにて、御いそぎの近づくに

がせ給はむとする時更衣なりし伊勢の御が「わかるれど相も思はぬもゝしきを見ざらんことの何が悲しき」とよみて弘徽殿の壁に書きつけたる事をいふ

今はとておりゐる雲のしぐるれば心のうちぞかきくらしける

云—院の御製と其の意の似かよひたるをいふ

世の中に云云—後嵯峨院の春宮を御位に卽かしめ給はんとの思し召しあることほのかに洩れ聞ゆるよしなり

相も思はぬ云々—宇多天皇位を卽

や。

いろいろに榮えてにほへ櫻花わがきみきみの千世のかざしに

末まで多かりしかど、例のさのみはにて止めつ。いかめしう響きて歸らせ給ひぬる、またのあした、無量光院の花のもとにて、大臣、昨日の名殘思し出づるもいみじうて、

この春ぞこころの色はひらけぬる六十あまりの花は見しかど

その年の八月二十八日、春宮十一にて御元服し給ふ。御諱恒仁と聞ゆ。世の中にやうやうほのめき聞ゆる事あれば、御門はあかず心細う思されて、夜居の間の靜なる御物語の序に、内侍所の御拜の數を數へられければ、五千七十四日なりけるを承りて、辨内侍、

千代といへば五重ねて七十にあまる日かずをかみはわすれじ

かくて十一月十六日おり居させ給ふ夜、空の氣色さへ哀に、雨うち濺ぎて物悲しく見えければ、伊勢御が、相も思はぬもゝしきを、と言ひけん古事さへ、今の心地して心細く覺ゆ。上も思し設け給へれど、劍璽の出でさせ給ふ程、常の行幸に御身を離れざりつる習、十三年の御名殘引き分かるゝは、なほいと哀に忍びがたき御氣色を、かなしと見奉りて、辨内侍、

三つ四つと重りつゞきたるをいふ古今集に「この殿はうべも富みけりさき草の三つ葉四つ葉に殿造りせり」とあるによる
えだちのたまふ―御供養の事に御骨折になること
歌さへぞ云

とめでたし。正元元年三月五日西園寺の花ざかりに、大宮院一切經供養せさせ給ふ。年比思し掟てけるをもいたく知しめさぬに、女の御願にていとかしこくありがたき御事なれば、院も同じ御心にえだちのたまふ。樂屋のものども地下も殿上もなべてならぬを擇りとゝのへらる。その日になりて行幸あり。春宮も同じく行啓なる。大臣、上達部皆袍にて、左右に別れて御階の間の高欄につき給ふ。法會の儀式、いみじさめでたき事どもまねびがたし。又の日御前の御遊始まる。御門御琵琶、春宮御笛、まだいとちひさき御程に鬢面結ひて、御容貌まほに美しげにて、吹きたて給へる音の雲ゐをひゞかして、あまり恐しき程なれば、天つ少女もかくや、と覺えて、太政大臣こといみもえし給はず、目おし拭ひつゝためらひかね給へるを、ことわりに老いしらへる大臣、上達部など、皆御袖ども濕ひ渡りぬ。女院の御心の中、ましておき所なく思さるらんかし。前の世にいかばかり功德の御身にて、かく思すさまにめでたき御榮を見給ふらん、と思ひやり聞ゆるもゆゝしきまでぞ侍りし。御遊はてゝ後文臺めさる。院の御製、

　いろいろに袖を連ねて咲きにけり花もわが世も今さかりかも

あたりを拂ひて、きはなくめでたく聞えけるに、主の大臣歌さへぞかけあひて侍りしに

山城國葛野郡に在り

わりご—樏子、食物を入るゝ器、俗に破子と書けり

橘大后—嵯峨天皇の皇后橘嘉智子

三葉四葉に—屋の棟の

心かな、とぞ宣はせける。かくのみ所々に御幸繁う御心ゆく事隙なくて、いさゝかも思し結ぼるゝ事もなく、めでたき御有樣なれば、仕うまつる人々までも、思ふ事なき世なり。吉田院にても、つねは御歌合などし給ふ。鳥羽殿にはいと久しくおはします折のみあり。春の比行幸ありしには、御門も御鞠に立たせ給へり。二條關白あげ鞠したまひき。内の女房など召して、池の御船に乘せて物の音ども吹き合せ、樣々の風流のわりご引出物など、こちたき事共も繁かりき。又嵯峨の龜山の麓、大井河の北の岸にあたりて、ゆゆしき院をぞ造らせ給へる。小倉山の梢戸無瀨の瀧も、さながら御墻の中に見えて、態と繕はぬ前栽も、自ら風情を加へたる所がら、いみじき繪師といふも筆及びがたし。寢殿のならびに西北に當りて、西に藥草院、東に如來壽量院などいふもあり。橘大后の昔建てられたりし檀林寺といひし。今は破壞して礎ばかりになりたれば、その跡に淨金剛院といふ御堂を建てさせ給へるに、道覺上人を長老になされて、淨土宗を置かる。天王寺の金堂うつさせ給ひて、多寶院とかや建てられたる。川に望みて棧敷殿造らる。大多勝院と聞ゆるは、寢殿のつゞき御持佛すゑ奉らせ給へり。かやうの引き離れたるみちは、廊、渡殿。輪橋、などを遙かにして、凡ていかめしう三葉四葉に磨き建てられたる、い

櫻のからの綺の紋—櫻色の舶來の綺（がんはた）の羽二重の如くにて紋あるもの

除目—任官の儀春は地方官の任命ありて縣召除目といひ秋は京官の任命ありて司召除目といふ

桂の葉室—

かゝる色もありけり、と珍しく驚かるゝ程になん。銀金を延べ、二重三重の織物、縫物、唐倭の綾錦、紅梅の直衣、櫻のからの綺の紋裾濃、浮線綾、いろ〳〵さま〴〵なりし袍、狩衣、思ひ〳〵のきぬを出せり。いかなる龍田姫の錦も、かゝる類はありがたくこそ見え侍りけれ。互に語らふ人はあらざりけめど、同じ紋も色も侍らざりけるぞ不思議なる。餘に染め盡して、某の中將とかや、紺村濃の指貫をさへぞ著たりける。それしも珍らかにて、賤しくも見え侍らざりけるとかや。院の御さまかたち事がらは、いとゞ光を添へてめでたく見え給ふ。後土御門内大臣定通の御子顯定大納言大將のぞみ給ひしを、院もさりぬべく仰せられければ、除目の夜、殿の内の者共も心づかひして侍るを、心もとなく思ひ合へるに引きたがへて、先に聞えつる公基大臣にておはせしやらん、なりたまへりしかば、うらみに堪へず、頭おろして、此高野に籠り居給へるを、いとほしくあへなし、と思されければ、今日の御幸の序に、かの室を尋ねさせたまひて、御對面あるべく仰せられ遣したるに、昨日までおはしけるが、夜の間にかの庵をかきはらひ、跡もなくしなして、いと清げに白き砂子ばかりを、殊更に散したりと見えて、人もなし。我身は桂の葉室の山荘へ逃げ上り給ひにけり。その由奏すれば、今更に見えじとなり。いとからい

こゝなるは大宮院姞子をいふ

昔の御名殘―後鳥羽院の御后にて今に生存へたまへる人といふ義

藤波のかげさしならぶ三笠山ひとに越えたる木ずゑとぞみる

かへし、おとゞ、

思ひやれ三笠の山のふぢの花さきならべつつ見つるこころを

かゝる御家のさかえを、自もやんごとなし、と思し續けてよみ給ひける。

はるさめは四方の草木をわかねども繁き恵はわが身なりけり

正嘉元年の春の比より、承明門院御惱重らせ給へば、院もいみじう驚かせ給ひて、御修法なにかと聞えつれど、遂に七月五日御年八十七にてかくれさせ給ひぬ。ことわりの御年の程なれど、昔の御名殘と哀にいとほしう、いたつき奉らせ給へるに、あへなくて、御法事など懇におきて宣はする、いとめでたき御身なりかし。明くる年八月七日二の御子坊に居たまひぬ。御年十なり。萬定まりぬる世の中めでたく、心のどかに思さるべし。その又の年正嘉三年三月二十日なりしにや、高野御幸こそ、又來し方行く末も例あらじ、と見ゆるまで、世のいとなみ天の下の騒には侍りしか。關白殿、左右大臣、内大臣、左右の大將、撿非違使の別當をはじめて、殘るは少し。馬鞍、隨身、舎人、雜色。童の髪かたち丈姿まで、かたほなる無く擇り整へ、心を盡したる裝ども、數々は筆にも及び難し。

紅のうち―砧にて打ちてつやを出したる紅の絹

八四方―詳ならず

餅の使―結婚後三日目に三夜の餅とて奉る使

こしざし―絹の巻きたるものにて腰にさすもの

國母―天皇の御母卽ち皇太后の稱

御かへし、太政大臣きこえ給ふ。

朝日かげあらはれそむる雲の上にゆくすゑとほき契をぞしる

をんなの裝束細長そへて被けたまふ。今日はじめて、内の上女御の御方に渡らせたまふ。御供に關白殿、右大臣、内大臣、四條大納言、權大納言、家教、通成、左大將などおしなべたらぬ人々參り給ふ。餅の使頭中將隆顯つかうまつる。太政大臣夜殿よりとり入れ給ふ。御心の中のいはひいかばかりか、と推量らる。人々の祿紅梅のにほひ、萠黃のうはぎ、葡萄染の唐衣、袿、細長、こしざしなど、品々に隨ひて差別あるべし。かくて今年は暮れぬ。正月いつしか后に立ち給ふ。たゞ人の御女の、かく后國母にて立ちつゞき候ひ給へる、例稀にやあらん、大臣の御榮なめり。御子二人大臣にておはす。公相、公基とて、大將にも左右に竝びておはせしぞかし。これも例いと數多は聞えぬ事なるべし。我が御身太政大臣にて、二人の大將を引き具して最勝講なりしかとよ、參り給へりし御いきほひのめでたさは、珍らかなる程にぞ侍りし。后、國母の御親、御門の御祖父にて、誠にその器量に足りぬ、と見え給へり。昔後鳥羽院に候ひし、下野君は、さる世の古き人にて、大臣に聞えける。

院の御子に云々―女御を後嵯峨上皇の御猶子とし給へるをいふ

御門きびはなる云々―御門は未だ御幼稚にましませば女御も侮らせ給ふべきことなるを却つて帝より恥かしげもなく物語などしたまふよしなり

ほしげなり。院の御子にさへしたてまつらせたまへれば、愈いつかれ給ふさま言はん方なし。待賢門院の、白河院の御子とて、鳥羽院にまゐり給へりし例にや、とぞ心當にはおぼえ侍りし。御門のひとつ御腹の姫君、この比皇后宮とて、その御方の内侍ぞ御使に參る。まうのぼり給ふ程も、女御はいと恥かしく似氣なき事に思したれ、頓にはえ動かれ給はぬを、人々そゝのかし申し給ふ。御太刀一條殿、御几帳按察使殿、御火取中納言持たれたり。上は十四になり給ふに、女御は二十五にぞおはしける。御門きびはなる御程を、なか〳〵侮らはしき方に思ひなし聞え給ひぬべかりつるに、いとざれてつゝましげならず聞えかゝり給ふを、准后は美しと見奉らせ給ふ。御衾は紅のうち八四方なるに、上にはうはざしの組あり、絲の色など淸らにめでたし。例の事なれば、准后たてまつりたまふ。太政大臣も、三日がほどは候ひ給ふ。上達部に勸盃あり。二十三日また御消息まゐる。御使頭中將通世、此度も殿かかせたまふめり。このごろ殿と聞ゆるは、太政大臣のおとゞ岡屋殿の御兄ぞかし。後には稱念院と申しけり。御手勝れてめでたく書かせ給ひしよ。鷹司殿の御家のはじめなるべし。

朝日かげ今日よりしるき雲の上の空にぞ千世の色も見えける

この後に前の「鳥羽院も近比いたくあれて」の文入るべし

○此巻は後深草天皇の康元元年より御譲位までの事を記せり

すゞし給へる云々―女御の御年の御門より過ぎたる意

第七　おりゐる雲

春過ぎ夏たけ年さり年來れば、康元元年にもなりにけり。太政大臣の、第二の御女女御にまゐり給ふ。女院の御はらからなれば、過ぐし給へる程なれど、かゝる例は數多侍るべし。十二月十七日豐明の比なれば、內わたり花やかなるに、いとゞうち添て今めかしうめでたく、その日御消息を聞え給ふ。

夕暮にまつぞひさしき千歳まで變らぬいろの今日のためしを

關白かゝせ給ひけり。紅のにほひの箔もなき、八重に重ねたるを結びて包まれたり。時なりぬとて人々參上りあつまる。女御君裏濃き蘇芳七、濃き一重、蘇芳のうはぎ、赤色の唐衣、濃き袴奉れり。准后そひて參り給ふ。皆紅のは萌黃のうはぎ、あか色の唐衣著たまふ。出車十輛皆二人づつ乘るべし。一の車、左に一條殿、右に二條殿、二の左按察君、右に中納言君、三の左に民部卿殿、右別當殿、その次々くだ〳〵しければ止めつ。御童、下仕、御はした、御雜仕、御樋洗など言ふものまで、かたちよきを選りとゝのへられたる、いみじう見所有るべし。御兄の殿ばら、右大臣、內大臣まゐりたまふ、限なくよそ

某の姫君—鳥羽院皇女光清法印女

法輪、太秦—二つとも名高き寺なり太秦は廣隆寺といひ又蜂岡寺ともいふ秦河勝建立す

辻風さへ吹き交り〳〵、ほのほの飛ぶこと鳥のごとし。又の朝まで燃えけり。その晝方さきの火燃えつきて後、又雙林寺といふわたりに、火出で來て某の姫君の御もと、古き昔の跡みな烟になりぬ。その火消えて後又夕つかた、岡崎わたりに火出で來て、攝政殿の御もと少々燒けけり。又承明門院の近き程にも火出で來て、人々參り集ふ。中御門より二條まで火出できて、十八町燒けぬ。すべて二十三日よりつごもりに及ぶまで、日をへ時をへて、あるは一日に二三度、二むら三むらにわけて燃え上る。斯る程に都は既に三分の二燒けぬ　いと〳〵珍かなりし事なり。たゞ事にあらずとて、院の御前に陰陽師七人召して、御占行はる。重き御つゝしみ、と申せば、御修法どもはじめ、山々にも御いのり仕う奉るべきよし、殊更に仰せらる。院の上の御ありさまの萬にめでたくおはしますを思ふには、何の御つゝしみも何でふ事かあらん、とぞ覺え侍る。位おりさせ給ひにし後は年を經て、春の中に必ずまづ石淸水に七日御籠り、その中に五部の大乘經供養せさせ給ふ。御下向の後は、やがて賀茂に御幸、平野、北野なども定れる御事なり。寺には嵯峨の淸凉寺、法輪、太秦などに御幸ありて、寺司に賞行はれ、法師ばらに物被け、凡て神を敬ひ佛を尊びさせ給ふ事、來方も行末も例あらじ、とぞ世の人申し合ひける。

色も香もかさねてにほへ梅の花ここのへになる宿のしるしに

とて、かの梅に結び附けさせらる。御返、辨内侍うけたまはり申すべし、と聞き侍りしを、なのめなりといふ事にて、大臣今出川より申されけるとかや、それも忘れ侍りぬるこそ口惜しけれ。老はかくうきものにぞ侍るぞや。世の中とかく騒がしとて年號かはる。三月十八日建長になりぬれど、猶火災しづまらで、二十三日また〳〵姉小路室町、唐橋大納言雅親の家のそばより、火いできて百餘町やけたり。夥しともいふ方なし。寛元四年の六月にも、恐しき火侍りしかど、この度は猶それよりも越えたり。かの雅親大納言の家ばかり、四方はみな燒けたるに、殘れるいと〳〵不思議なり、とぞ見る人毎にあざみける。曉より出できたる火、夜に入るまで消えず。未の時ばかりに蓮華王院の御堂に燃え著きければ、俄に院も御幸なる、御道すがらも、さながら烟をわけさせ給ふ。いと珍らかにあさまし。攝政殿も御車にまゐり給へり。三十三間の御堂の千體の千手、一時に焰にたぐひ給へは、不動堂、北斗堂も殘らず、寶藏鎭守ばかりぞ辛うじてうち消ちにける。後白河院のさばかり御志深う思ほしたちて、長寛二年供養ありし後はやんごとなき御寺なりつるに、淺ましなどいふも愚かなり。又今熊野の鐘樓僧坊など多く燒けぬ。

あざみける―驚きあきるる意

鎭守―其土地を鎭護する

まり居るをいふ

かたぶき申す—不審に思へるなり

顯證—あらはなること

納言實雄の參りたまへりける車に召し移りて、春日富小路に、公相大納言のおはする家に行幸なる。その程にぞ攝政殿をはじめ、前太政大臣、左大臣、内大臣より下のこりなく、人々まゐり集ひ給ふ。院も御車ひき出でて見奉らせ給ふ。かゝるほどに閑院殿より、春日は方はゞかりありとて、院のおはします萬里小路殿へ引き返して行幸あり。夜明けはてゝ後、また前太政大臣の冷泉富小路へ行幸なりて、しばし内裏になりぬ。内の燒くることは、これを初にもあらず。世上りての事はさしおきぬ。天德四年村上のさばかりめでたかりし御代より、この方既に二十餘度になりぬるにや。聖の御代にしもかゝる事は侍りしかど、承元に燒けにし後は、久しくこの四十四年は無かりつるに、去年の冬御釜燒け損じて、又かくうち續きぬるを、いとあさましう思す。何よりも御門の御車に奉りて出させ給へるを、いたく例なき事とかやとて、人々かたぶき申す。院も驚きおぼされて、古き事ども廣く尋ねられなどすべし。院も内もはひ渡るほどのちかさなれば、御宿直の人々など、日比よりも參り集ひて、御旅の雲ゐなれど、なか〳〵いと顯證なり。北對のつまなる紅梅の、いと面白く咲きたるが、院の御前より御覽じやらるゝ程なれば、雅家宰相中將して、いと艶になよびたる薄樣に書かせ給ひて、院の上、

御魚味云々—所謂眞菜始小兒生れて二十ヶ月或は二十五六ヶ月の後にて其儀あり

法親王がね—法親王になりたまふにかれて定

にならせ給ふは、公宗中將といひし人の女の御腹なり。圓滿院法親王の御弟子にならせ給ふべしとて、正月二十八日にその御用意あり。承明門院よりわたりたまふ。院の網代びさしの御車にて、上達部は車、具實大納言を上首にて六人、殿上人十六人、馬にていろ〲に、いとよそほしうめでたくておはしましぬ。その夜やがて御髮おろして、御法名圓助と聞ゆ。いと美しげさ、佛などの心地して哀に見え給ふ。院の宮達の御中には御兄にてものし給へど、御外戚の弱きは、今も昔もかゝるこそいといとほしきわざなりけれ。御匣殿の御腹の若宮も三にならせ給へる。承明門院にて御魚味きこしめしなどすべし。これも法親王がねにてこそはものし給はめ。數多の御中に、この御子は御かたちすぐれ給へれば、院もいとらうたく思ひ聞えさせ給ひけり。かくいふ程に二月一日の夜、常よりも九重の宮の內人少にて、大方夜も靜なるに、子時ばかりに、閑院殿の二條表の對より火出で來て、棟もえ落つる程にぞ、始めて見つけたる、淺ましとも斜なる。何のたどりもなく只あわて騷ぎ、我も人もうつし心なければ、公直中將の御宿直に候ひけるが、車の陣なるを召して、皇后宮の御方へよす。內の上をば御匣殿抱き奉らせ給ひて、宮もたてまつる。劍璽ばかり取り具して、門を急ぎ出でさせたまふ。とばかりありて、權大

貞應—堀川天皇の年號

內の小朝拜—清涼殿の東庭にて殿上人朝拜の禮を行ふこと

御母代—御母となりて後見奉るもの

とのちまでさま〴〵院の御前に仰せられて、攝政殿にたづね申され、さたがましく侍りけるを、貞應元年の例など出で來て、故野宮左大臣、今の內大臣の御親の、右大臣にて退きたる列に立たれたりけるを、その時の記錄など見給はざりけるにやとて、內大臣の御ふるまひ心得ず、とぞ沙汰ありける。院の拜禮果てゝ、內の小朝拜節會などに、皆人人困じ給へるに、又大宮院の拜禮めでたくぞ侍りける。四日は承明門院へ御幸はじめ、院の御樣のつきせずめでたく見えさせ給ふを、厭く世なういみじと見奉らせ給ふ。浮織物の薄色の御指貫、紅の御衣たてまつれり。上達部、殿上人、直衣、袍衣思ひ〴〵なり。攝政殿もまゐり給ふ。夜に入りて歸らせ給ひぬれば、やがて〳〵又大宮院內へ御幸はじめ、これも上達部、殿上人ありつる限のこりなし。網代びさしに奉る。皇后宮の御方の東向へ御車寄せて、宮御對面いとめでたし。上はまだいといはけなき御程にて、かくいつくしき萬乘の主にそなはり給へる御有樣を、女院もいとやんごとなく悲しと見奉り給ふ。皇后宮と聞ゆるは、これも院の御兄にて、位におはしましゝ時も、御母代など聞えさせ給ひしを、この御門幼く渡らせ給へば、今はいとゞまして內にのみおはしまして、去年の八月より皇后宮ときこゆる。後には仙華門院と聞えし御事なるべし。院の若宮十三

御文始―始めて御註孝經をよみ給ふ儀

をなほさるべしかとも、色々に定めかねられたり。入道太政大臣なども、古きを直さるべし、と申さるるとぞ聞えける。其比宰相三位の若宮御書始とて、人々參り集ひたまふ。七にならせ給ふべし。關白殿をはじめ、大臣、上達部殘りなし。十二月十五日なり。文章博士、序奉らる。管絃具めされて、人々例のごと吹きあはせ給ふ。その後文臺召して詩の披講ありき。勸盃の儀式、何事も保延の例とぞ承りし。かくて年明けぬれば、寳治も三年になりぬ。春たちかへる朝の空の光は、思ひなしさへいみじきを、院中の氣色誠にめでたし。攝政殿にも拜禮行はる。院の御前は更にもいはず、大宮院にもあり。まづ冷泉院萬里小路殿といふは、鷲尾大納言、鷹司の家ぞかし。この比院のおはしませば、拜禮に人々まゐり給ふ。攝政殿、左大臣、右大臣、内大臣。大納言には、公相、實雄、顯定、道良。中納言に、爲常、良教、資季、冬忠、實藤、公光、道成、定嗣。宰相に通行、師繼、顯朝、殿上人は兩貫首を初、數知らず、常の年々に越えて、此春は參りこみ給へり。人々立ち並み給へる時、左大臣は攝政の御子なれば、引き退きてたちたまへり。右もまたその同じ列に立たれたるに、内大臣進み出で給へり。それにつぎて、大納言も同じ列なり。良教、公充、師繼、顯朝、また退きて立ちたれば、出入して屛風に似たり。この事見にくし、

れどへたでて見ゆるをちの白浪」

みづのとの祭—毎月癸の吉日を擇び陰陽寮にてする祭

に、左大臣殿従一位したまふ。殿の家司季頼四品ゆるさせ給ふ、いとこよなし。寛治には良經正四位下、保元に月輪殿從下四品をぞし給ひける。今の御ありさまは、かのふるき例にも越えたり。いとめでたく面白し。還御の當日に、女房の裝束皆具いろ〳〵にいと淸らなる十具、各ひらづつみに長櫃にて、大納言二位の曹司に贈らる。又宰相三位のもとへも別に遣されけり。建久には夏なりしかば、ひとへがさね二十具ありけるを思し出でけるにや、さま〴〵ゆゝしき事どもにて過ぎぬ。この御留守のほどに、二條油小路に火出できて、閑院殿の築垣の中なれば、內膳屋燒けて、神代より傳はれる御釜も燒けそこなはれけるをぞ、いとあさましき事には申し侍りし。かの釜、昔は三つありけるを、二つをば平野、一つをば忌火、一つをば庭火、と申しけるを、圓融院の御代、永觀の比二つは失せにけり。今一つ殘りたるに、かゝる事の出で來ぬるは、いと宜しからぬわざなりとて、神祇官に尋ねられ、古き事ども考へらる。平野といひけるを陰陽寮にするゐて、みづのとの祭といふ事に用ゐけれど、中比よりかの祭は絕えぬ。忌火と言ふにては、六月十二日の御神事の御膳をば調じける。庭火にて常の御膳をば仕うまつる。かゝればいと怠々しき事にて、始は鑄物師に仰せらるべきか、とも申す。古きを損はれたる所ばかり

狩襖—表は布裏は絹をつけたる狩衣隨身舍人など著用す

優婆塞の宮云々—源氏物語椎本の巻に見えたる優婆塞の宮の宰相中將に送れる歌「山風にかすみ吹きとく聲はあ

たす、川の左右の岸に篝白くたかせて、鵜飼ども召す。院の御前よりはじめて、御臺ども參る。しろがねの錦の打敷など、いと清らに設けられたり。陪膳權大納言公相、役送は殿上人なり。上達部には御臺四本、殿上人には二なり。女房の中にも、いろ〳〵さまざまの風流の果衝重など、よしあるさまに、なまめかしうしなしてもて續きたる、細に美し。院のうへ梅壺の放出に入らせ給ふ。攝政殿左大臣、皆御供に候ひ給ふ。又の日の暮つ方、また御船にて槇島、梅島、橘小島など御覽ぜらる。御遊はじまる。船のうちに樂器ども設けられたれば、吹き立てたるものゝ音世に知らず、所がらはましておもしろう聞ゆるに、水の底にも耳とむるものや、と漫さむきほどなり。かの優婆塞宮の、隔てゝ見ゆる、と宣ひけん、遠の白浪も艶なる音をそへたるは、よろづをりからにや。十三日還御の日ぞ御贈物ども奉りたまふ。御手本、和琴、御馬二疋まゐらせらる。院よりも主人の大臣に御馬奉り給ふ。院の御隨身どもけはひことにて、本堂の前の庭に引き出でたれば、衞門佐親朝、親嗣ふたりうけとる。殿おりたまひて拜したまふ。その後、賞おこなはる。左大臣一品したまふべきよし、院のうへ自宣はすれば、また立ち出でて直衣を奉りながら拜舞したまふ。萬御心ゆく限遊びのゝしらせ給ひて、歸らせたまふまゝ

舍人の下に在りて馬をあつかふもの

人だまひ―副車女房などの乘る料

御船さし―御船を漕ぐ人

權大納言緋紺の狩衣、紅のきぬ、白きひとへにて、えも言はぬさまして仕うまつり給ふ。撿非違使北面などまで、思ひ〳〵にいかで珍らし樣にと好みたるは、ゆゝしき見物にぞ侍りし。衞府上達部は、狩衣の隨身に弓胡簶を持たせたり。人だまひ二輛、一の車にいろいろの紅葉を濃く薄く、いかなる龍田姫か、かゝる色を染め出でけんと珍らかなり。二の車は菊を出されたるも、なべての色ならんやは。そのほか院御乳母、大納言二位殿、いとよそほしげにて、諸大夫さぶらひ、淸げなる召し具して參り給ふ。宰相三位殿と聞ゆるは、かの若宮の御母兵衞內侍殿といひし。この比は三位したまへり。今一きはめでたくゆゝしげにて、北面の下臈三人、諸大夫二人、心ことに引き繕ひたるさまなり。建久に後鳥羽院宇治御幸の時、修明門院そのころ二條の君とて、參り給へりし例をまねばるゝ、とぞ聞えける。又大納言典侍とは、藤大納言爲家の女、それも別にひき下りて、いたく用意とにて參らる。宇治川の東の岸に御舟まうけられたれば、御車より奉りうつるほど、夕つ方になりぬ。御船さし、いろ〳〵の狩襖にて、八人づつさま〴〵なり。基具の中將院の御佩刀持たる、顯朝御榻まゐらす。平等院の釣殿に御船よせて下りさせ給ふ。本堂にて御誦經あり、御導師まかでて後、阿彌陀堂、御經藏、懺法堂まで、悉く御覽じわ

○此卷は後嵯峨院宇治御幸より建長七年京師諸所燒亡まで

ひはだ—檜色の狩衣

むすび狩衣—絲にて種種の模樣を結びつけたる狩衣

居飼—御廐

第六　烟のすゑ〴〵

寶治二年十一月二十日比、もみぢ御覽じがてら宇治にみゆきし給ふ。上達部、殿上人おもひ思ひいろ〳〵の狩衣、菊紅葉の濃き薄き、縫物、織物、あや錦、かねてより世のいとなみなり。二十一日の朝ぼらけに出でさせ給ふ。御烏帽子直衣、薄色の浮織物の御指貫、網代ひさしの御車に奉る。先殿上人下臈より前行す。中將爲氏浮線綾の狩衣、右馬頭房名、基具、菊のから織物、内藏頭隆行、顯方、白菊の狩衣、皇后宮權亮道世、右中辨時繼、薄青のかた織物、紫のきぬ、前兵衞佐邦經赤色の狩衣、衞門佐親嗣二藍の狩衣、成敏ひはだ、作氏、左兵衞佐親朝はむすび狩衣に菊を置物にして、紫裾濃の指貫菊を縫ひたり。上達部は、堀川大納言具實直衣、皇后宮太夫隆親なほし、花山院の大納言定雅、權大納言實雄、花田織物の狩衣、かれ野のきぬ、土御門の大納言、左衞門督薄襖、衞門督かれ野のおり物のかりぎぬ、別當定嗣直衣、雜色に野劍を持たせたり。皇后宮の權大夫萠黄の浮線綾のかりぎぬ、浮織物の指貫、紅の衣、土御門宰相中將香の織物の狩衣、御隨身、居飼、御廐舍人まで、いかにせんと色々を盡す。院の御車の後に、

桟敷―見物の座に構ふる假座

し。池にはうるはしくからのよそひしたる御船二艘漕ぎよせて、御遊さまぐ〜の事ども、めでたくのゝしりて歸らせたまふ。響のゆゝしさを、女院も御心ゆきてきこしめす。その比ほひ熊野御幸侍りしにも、よき上達部あまた仕うまつらる。都出でさせ給ふ日、例の桟敷など心ことに挑みかはすべし。車は立てぬ事なりしかど、大宮院ばかりそれも出車はなくて、只一輛にて見奉り給ひしこそ、やんごとなさも面白く侍りけれ。辨内侍、

をりかざす梛の葉風のかしこさにひとりみちある小車のあと

御幸、熊野本宮に著かせ給ひて、それより新宮の川船に奉りてさし渡すほど、川の面所狹きまで續きたるも、御覽じなれぬさまなれば、院のうへ、

熊野川せぎりにわたす杉船のへなみにそでの濡れにけるかな

その後も又程なく御幸ありしかば、女院も參り給ひけり。皆人しろしめしたらん事、なかなかにこそ。

誠に公云々ー無上なる帝位を除きてはこの將軍職にまさることは他にあらじ

朝覲の行幸ー天皇の上皇並に母后の宮に行幸せらるゝ事

いろ〳〵の菊紅葉の云云ー裝束のさま

て今下り給へるをもて、崇め奉るさまいはん方なし。宮の中に繕ひ、御設の事など限あれば、善見天の殊妙の莊嚴もかくやとぞ覺えける。かやうにて今年は暮れぬ。明くる年は建長五年なり。正月十三日御門御冠し給ふ。御年十一、御いみな久仁と申す。いとあてにおはしませど、あまり小かにて、又御腰などの怪しく渡らせ給ふぞ口惜かりける。いわけなかりし御程は、猶いとあさましうおはしましけるを、閑院の内裡燒けける紛より、麗しく立たせ給ひたりければ、内の燒けたるあさましさは何ならず、この御腰の癒りたる喜びをのみぞ上下思しける。院の上鳥羽殿におはします比、神無月の十日比朝覲行幸したまふ。世にある限の上達部、殿上人つかうまつる。いろ〳〵の菊紅葉をこきまぜて、いみじう面白し。女院もおはしませば拜し奉り給ふを、太政大臣見奉り給ふに喜の涙ぞ人わろきほどなる。

ためしなき我身よいかに年たけてかかる御幸に今日仕へつる

實に大方の世につけてだに、めでたくあらまほしき事どもを、我が御末と見給ふ大臣の心地、いかばかりなりけん。こし方も例なきまで、高麗、唐土の綾錦をたち重ねたり。太政大臣ばかりぞねび給へれば、裏表白き綾の下襲を著給へるしも、いとめでたくなまめか

忍び／＼云云―內々御寵愛ありしうちに

かしこに候ふとも云々―鎌倉に下りて奉公すとも相應の官位を給ふことは決して障りあるべからずとなり

腹に二宮さへさし續きひかり出で給へれば、いよ／＼今は思ひ絶えぬる御契のほどを、私物に、いとあはれと思ひ聞えさせ給ふ。源氏にやなし奉らましなど思すに、猶飽かねば、たゞ御子にて東の主になし聞えてんと思して、建長四年正月八日、院の御前にて御冠し給ふ。御門の御元服にも殆劣らず、內藏寮何くれ淸らを盡し給ふ。やがて三品の加階たまはり給ふ。御年十一なるべし。中務卿宗尊親王と申すめり。おなじ二月十九日都を出で給ふ。その日將軍の宣旨蒙り給ふ。かゝる例はいまだ侍らぬにや、上下珍しくおもしろき事にいひ騷ぐべし。御迎に東の武士ども數多上り、六波羅よりも名あるもの十人御送に下る。上達部、殿上人女房など數多まゐるも、院中の奉公にひとしかるべし。かしこに候ふとも、限あらんつかさかうぶりなどはさはり有るまじ、とぞ仰せられける。何事も只人がらによると見えたり。きはことによそほしげなり。誠に公となり給はずは、これよりまさること何事かあらん、とにぎはゝしくはなやかさは、並ぶ方なし。院の上も、忍びて粟田口のほとりに御車立てゝ御覽じ送りけるこそ、哀に忝く侍れ。きびはに美しげにて遙々とおはしますを、御母の內侍は、あはれに忝し、と思ひ聞ゆべし。かゝればもとの將軍賴嗣三位中將は、その四月に都へ上り給ひぬ。いとほしげにぞ見え給ひける。さ

しらぬまの—知らぬ間沼

神は嬉し—延久五年住吉行幸の時の御製「住吉の神もうれしと思ふらんむなしき船をさゝで來つれば」

とゞめて、何とまれ言へかし、と宣ふを、人々もおよすげて見奉るを、辨内侍、

あやめ草そこしらぬまの長き根を深きといふやよもぎふの露

とありつる。使はや歸りければ、藏人を召して、殿上より遣しけり、御返、公親、

あやめ草そこしらぬまの長き根をふかき心にいかがくらべん

又その比、天王寺に院の詣でさせ給ふついでに、住吉へも御幸あり。神は嬉し、と後三條院仰せられけん例、思ひ出でられ侍りき。大宮院も御まゐりなれば、出車どもいろいろの袖口ども、春秋の花紅葉を一度に並べて見る心地して、いと美しく目も耀くばかり挑みつくされたり。上達部若き殿上人などは、例の狩襖末濃の袴など、めづらしき姿どもを心々にうち交ぜたり、釣殿の簀子に人々侍ひてあまた聞えしかど、さのみはいかでか。太政大臣、

今日や又さらに千とせを契るらんむかしに歸るすみよしの松

さても院の第一の御子は、右中辨平棟範のぬしの女、四條院に兵衞内侍とて侍ひしが、劍璽につきて渡り參れりしを、忍び〳〵御覽じける程に、その御腹に出でものし給へりしかど、當代生れさせ給ひにし後は、押し消たれておはしますに、又建長元年、后

當てしむる戲

御かぶとの花―紙冑の上に種々の花をかたどり或は紙人形をすゑなどして童子の弄ぶもの

日を暮し給へば、侍ふ人々も打解けにくゝ心づかひすめり。節會臨時祭何くれの公事共を、女房にまねばせて御覽ずれば、太政大臣興じ申し給ひて、殊更小き笏など造らせて、あまた奉り給へば、上も喜び思す。入道太政大臣の御女、大納言三位殿といふを關白になさる。按察典侍隆衡の女、大納言典侍、中納言典侍、勾當内侍、辨内侍、少將内侍、かやうの人々皆男の官にあてゝ、その役をつとむ。いと辛い事とて、侘び合へるもをかし。中納言典侍を、權大納言實雄君になさるゝに、韈はく事いかにも叶ふまじとて、曹司に下るゝに、上もいみじう笑はせ給ふ。辨内侍葦の葉にかきて、かの局にさし置かせける。

つの國の葦の下ねのいかなれば浪にしをれてみだれがほなる

かへし、

つの國のあしの下ねの亂れわびこころも浪にうきてふるかな

五月五日、所々より御かぶとの花、藥玉などいろ／＼に多くまゐれり。朝餉にて、人々これかれ引きまさぐりなどするに、三條大納言公親の奉れる、根に露おきたる蓬の中に、ふかきといふ文字を結びたる、絲のさまもなよびかに、いと艷ありて見ゆるを、上も御目

し、いかにせんともてはやし申さる。川に臨める家なれば、秋深き月のさかりなどは殊に艶ありて、門田の稻の風に靡くけしき、妻訪ふ鹿の聲、衣うつ砧の音、峰の秋風、野邊の松蟲、とり集あはれ添ひたる所のさまに、鵜飼などおろさせて、篝火どもともしたる川の面、いと珍しうをかし、と御覽ず。日比おはしまして、人々に十首歌召されしついでに、院の御製、

川船のさしていづくかわがならぬ旅とはいはじやどと定めん

と講じ上げたるほど、主の大臣いみじう興じ給ふ。この家の面目今日に侍る、とぞ宣はする。實にさる事と聞く人皆誇らしくなん。おりゐ給へる太上天皇など聞ゆるは、思ひやりこそをとなびさたすぎ給へる心地すれど、いまだ三十にだに滿たせ給はねば、萬若う愛敬づきめでたくおはするに、時のおとなにて重々しかるべき太政大臣さへ、何わざをせん、と御心にかなふべき御事をのみ思ひまはしつゝ、いかで珍しからん、ともて騷ぎ聞え給へば、いみじう映々しき比なり。御門まして稚くおはしませば、はかなき御遊わざより外のいとなみなし。攝政殿さへ若くものしたまへば、夜晝侍ひ給ひて、女房の中にまじりつゝ、亂碁、貝おほひ、毛毬、扁つきなどやうの事どもを、思ひ〳〵にしつゝ

龍頭鷁首―いづれも樂人の乘る船龍頭鷁首は舳先の飾

さたすぎ―盛過ぎたること

亂碁―指につけて碁石を多く得るを勝とする遊戯なる由嬉遊笑覽に見えたれど定かならず

扁つき―詩句などの字旁のみを見させて扁を

の九江

「鳥羽院も近比はいたう荒れて」以下第六烟の末々の篇末にあるべきが攙入せるものの如し今姑く舊に依る

三五累聖―聖代を累ぬること十五代、白河院より後嵯峨院まで實は十七代

かしてかへらせ給ふ。

鳥羽院も近比はいたう荒れて、池も水草がちに埋れたりつるを、いみじう修理し磨かせ給ひて、はじめて御幸なりし時、池邊松といふ事講ぜられしに、太政大臣序を書き給へりき。

夫鳥羽仙洞三五累聖、離宮一百餘載とかや。また御身のいみじき事には、蓬の髪霜寒くて七代に傳へたり、と侍りしこそめでたけれ。

　いはひおく始めと今日を松が枝の千年のかげにすめる池みづ

院の御製、

　影うつす松にも千世のいろみえて今日すみそむるやどの池水

大納言典侍と聞えしは、爲家民部卿の女なりしにや。

　色かへぬときはの松のかげそへて千代に八千代にすめる池水

ずんながるめりしかど、例のうるさければなん。御前の御遊はじまるほど、反橋のもとに龍頭鷁首寄せて、いとおもしろく吹き合せたり。かやうのこと常の御遊いと繁かりき。

また太政大臣の津國吹田の山庄にも、いと屢おはしまさせて　さま〴〵の御遊數を盡

木がくれたりし―未だ帝位に卽き給はざりし

水の底も―水底の龍の都にても

九の江―所謂蜀江の錦をさらす蜀

中宮も位去り給ひて、大宮女院とぞきこゆる。安らかに常は一つ御車などにて、たゞ人のやうにはなやかなる事どものみ隙なく、萬あらまほしき御有様なり。院のうへ石清水社に詣でさせ給ひて、日比おはしませば、世の人殘なく仕うまつれり。さるべき事とはいひながら、なほ甚じう御心にも一年の事思し出でられて、ことに畏まり聞えさせ給ふべし。御歌數多あそばして、寶殿にこめさせ給ひし中に、

　石清水木がくれたりしいにしへをおもひ出づればすむ心かな

寶治の比、神無月二十日餘なりしにや、紅葉御覽に宇治にみゆきし給ふ。上達部、殿上人、思ひ〳〵いろ〳〵の狩衣、菊、紅葉の濃きうすき縫物、織物、綾錦、すべて世になききよらを盡しさわぐ。いみじき見物なり。殿上人の船に樂器を設けたり。橘小島に御船さしとめて、物の音ども吹きたてたるほど、水の底も耳たてぬべく、そゞろ寒きほどなるに、折知りがほに空さへうちしぐれて、まきの山風荒ましきに、木葉どものいろ〳〵散りまがふ氣色、いひ知らず面白し。女房の船にいろ〳〵の袖口わざとなくこぼれ出でたる、夕日に輝きあひて、錦を洗ふ九の江かと見えたり。平等院に中一日わたらせ給ひて、さま〴〵のおもしろき事ども數知らず、網代に氷魚のよるも、さながらのゝしり明

女工所―大嘗會を行ふ時臨時に設くる司

御あるじ―御饗應

朽はつる老木にさけるはな櫻身によそへても今日はかざさん

御かへしを忘れたるこそ口惜しけれ。かくて御即位御禊も過ぎぬ。大嘗會の比信實朝臣といひし歌よみの女の少將内侍、大内の女工所にさぶらふに、雪いみじう、日比降りて、いかめしう積りたる曉、太政大臣のたまひ遣しける。

九重のおほうち山の如何ならんかぎりも知らずつもる雪かな

御かへし、少將内侍、

九重の内野の雪にあとつけてはるかに千代のみちを見るかな

後嵯峨院の上は、いつしか所々に御幸繁う御遊などめでたく、今めかしきさまにこのませたまふ。西園寺にはじめて御幸なかりしさまこそ、いと珍らかなる見物にて侍りしか。太政大臣御あるじ申されし樣、いかめしかりき。いはずとも思ひやるべし。御贈物に代代の御手本奉らるとて、大臣、

つたへきく聖の代々の跡をみてふるきをうつす道ならはなん

御返事、御製、

知らざりし昔に今やかへりなんかしこき代々のあと習ひなば

恨みてしぶしぶに云々—弟に引き越されたるを恨みてぐつぐついひたれども詮なし

ふ。この御門もまた四にぞならせたまふ。めでたき御例どもなれば、行末も推し量られたまふ。光明峯寺殿御三郎君、左大臣實經大臣、御年二十四にて攝政したまふ、いとめでたし。御兄の福光園院殿、もと關白にておはしつる、恨みてしぶ〳〵におはしけれど力なし。御兄弟三人まで攝籙したまへるためし、古くは謙德公、忠義公、東三條大入道殿。その又御子ども中關白殿、粟田殿、法成寺入道殿、これふた度なり。近くは法性寺殿の御子ども、六條殿、松殿、月輪殿、是ぞやがて今の峰殿の御祖父よ。かやうの事いとたま〳〵あれど、粟田殿も宣旨蒙り給へりしばかりにて、七日にてうせ給ひにしかば、天下執行し給ふに及ばず。松殿の御子師家大臣夢のやうにて、しかも一代にてやみ給ひにき。いづれも御末まではおはせざりしに、この三所の御後のみ今に絶えず、御流久しき藤なみにて立ち榮え給へるこそ、たぐひなきやんごとなさなめれ、末の世にもありがたくや侍らん。今の攝政殿をば、後には圓明寺殿とぞ聞ゆめりし。一條殿の御家のはじめなり。攝政にて二年許おはしき。女院の御父も太政大臣になり給ひて、牛車ゆり給ふ。さるべき事と言ひながら、いとめでたし。其比北山の花ざかりに院に奏し給ふ。その花につけて、

傳法—灌頂して佛法を傳授すること
鈍色一具—鈍色は薄鼠色の僧服、一具はひとそろひ

いたす氣色やんごとなく見ゆ。關白左大將殿などの御隨身ども、えもいはずきらめきて、階の下にたてあかし白くして竝み居たる氣色、めでたく面白し。傳法のさまは人見ぬことなればしらず。教授は良惠僧正つとめられけり。かくて事果てぬれば、後朝の儀式なほいみじ。法親王の御布施かづけもの五かさね、御法服一具、鈍色一具、包物は絹十疋、錦一づつみ、關白殿取りて奉りたまふ。次々の衆僧には、大中納言ほど〱に隨ふべし。導師の布施、久安仁安など、又、建暦寛喜などの度は、別當とりたりけれども、今日はその人參らねば、忠高中納言とりけり。殿上人は二十餘人まゐる。萬の事人柄と見えて、いとめでたし。かやうの事どもにて今年も暮れぬ。又の年寛元二年東大納言賴經君、一とせ二歲にて下りたまひし峰殿の御子ぞかし。惱み給ふよし聞えしが、御子の六になり給ふに讓りて、都へ御かへりと聞ゆ。若君はその日やがて將軍の宣旨下され、少將になりたまふ、賴嗣となのりたまふ。泰時朝臣も一昨年入道して、孫の時賴朝臣に世をば讓りにしかば、此比は天の下の御後見は、この相摸守時賴朝臣つかうまつる。いみじう賢きものなれば、めでたき聞えのみありて、つはものも靡きしたがひ、大方世も靜に治りすましたり。かくて寬元も四年になりぬ。正月二十八日春宮に御位をゆづり申させたま

華族—攝家に次げる家柄
下臈—位卑く家筋の下賤なるもの諸大夫などのたぐひ
たてあかし—松明

資平朝臣、信通など、われ劣らじと華族も下臈も、心ばかりは挑み盡したり。申の時に先づ下宮に行幸、暮れ果てゝ上社に詣でさせたまふ。賞行はれなどして、還御はあけ方にぞなりにける。霜いと白きにたてあかし鮮明にて、舞人の袖飜る程もいと面白くぞ侍りける。この行幸過ぎぬれば、天の下のさわぎ、少しのどまりぬべきにや、と見えつるに、あくる日また仁和寺御室、觀音寺にて灌頂し給ふとて、世の中のゝしるさま、いとけしからぬまで響きあひたり。この御室をば代々親王こそ傳へ給ふめれど、峯殿世を御心に任せたりし比より渡り給ひて、母うへの西園寺入道殿の御女に、准后をさへ讓り給ふとか聞えて、いとゆゝしき御人がらなれば、受法の儀式までぞ世に珍らかなりける。入道殿下まづ渡り給ひて、佛母院におはす。關白殿は、おん兄なればましておはします。右大臣殿、左大將心ことにて參りたまふ。時なりて、大阿闍梨二品法親王輿にてわたり給ふ。喜多院の南門より、上達部、殿上人歩み續きてそこら參り集ふ。吉田中納言爲經、二條中納言忠高、侍從宰相。藤宰相、左宰相中將、左大辨、新宰相みな列をひき、受者も砌におりたち給へる、いと若う美しうて、地藏菩薩に似給へるを、入道殿いと悲しと見奉りたまふ。紫の袈裟に香爐持ちてわたり給へば、もとより並び立てる上達部、皆禮を

左右大将の番長—左右近衛府の隨身の長

かた舞—東遊の事肩ぬぐことあるによりていふ

ふ。いろ〳〵の綾錦目も耀くばかり立ちかさねたり。左右の大將番長、また心も詞もおよばず、いどみつくしたり。左大將のは馬にて前行、右大將のは張綱にて、移の馬をひかせけるとぞ。左大將は、紅梅の二重織物の半臂下襲萌黄の織物のうへの袴、右大將は、うら山吹の半臂下襲。左衞門督は、梅がさねのうき織物の半臂下襲、浮紋の表袴、殿上人は、花山院中將道雅君ばかりぞ、萌黄の表袴、裏山吹の半臂下襲きたまへりける。その外はことなるも見えず。御社にてのかた舞は、例の上達部も立たれけり。笛二位中納言、拍子左衞門督など勤められけり。かず〳〵めでたくて、またの日午時ばかりにぞ歸らせ給ひける。同じ五日やがて賀茂社に行幸したまふ。關白殿、今日も御馬なり。上達部、殿上人さきにいたく變らず。別當通成いみじうきらめかれたり。假粧じ給へるをぞ、若き人なれども、撿非違使別當白きもの附くる事やある、など古き人うちさゞめきけるとかや。春宮大夫馬副八人具したまひけり。權大納言實雄、土御門大納言顯定、權中納言公親、同顯親、左衞門督實藤など、いづれも淸らにめでたし。殿上人、中將には實久朝臣、爲氏、實春、經定、顯義、基雅、通雅、通定、定平、實直、諸繼、雅繼、輔通、雅家、雅忠。少將には隆兼、公直、季實、爲教、忠繼、資時、顯方、維繼、公爲、

御幸―上皇法皇のみゆき

うてさし出で給へりし嬉しさを思ひ出づれば、見奉るごとに涙ぐまれて、忝う覺え給ふとぞ。年たくるまで常は大臣人にも宣ひける。中比はさのみしもおはせざりし御家の、近くよりはことの外に世にも重く、やんごとなうものし給ひつるに、この后宮まゐり給ひ、春宮生れさせ給ひなどして、いよ〳〵榮えまさり給ふ。行末おしはかられていとめでたし。父の入道殿さへ御命長くて、かゝる御末ども見給ふも、さこそは御心ゆくらめ、とおしはかるもしるく、その年の十月七日かとよ、都を立ちて熊野に詣で給ふ。作法のゆゝしさ、昔のふるき御代の御幸どもにも、やゝ立ち勝るほどにぞ侍りし。御子孫ひき具し給ふ。大納言に實雄、公相、公基、前藤大納言とありしは爲家の事にや。坊門前大納言も追從に、京出は扈從せられたり。大宮中納言、左宰相中將、右兵衞督、殿上人は三十餘人はべりけり。いといみじかりし事共なり。かくておなじき十一月十一日は、土御門の院の御十三年とて、おほやけより御法事行はるゝもいとめでたし。大原にて御八講あるべければ、承明門院もかねてより渡らせたまふ。上達部、殿上人參り集ふさまもこよなし。十二月一日は石清水社に行幸あり。當代には始めたる度なれば、萬清らを盡さる。文治建久の例をまねばる。關白殿御馬にて仕うまつりたまふ。瀧口十二人馬副に具し給

陪膳—御給仕役
役送—御膳部の運び役
後七月—閏七月
屯食—結飯
折櫃のもの—折櫃に入れたる菓子類折櫃は今の折

沙汰あり。后腹の御子程こそおはせねど、これも、御門わたくしものに、いといとほしう思す事なれば、御氣色にしたがひて、上達部、殿上人いみじう參り集ふ。關白殿まゐり給ひてくゝめ奉りたまふ。陪膳は通成三位中將、役送は家定朝臣仕りける。人々勸盃の饗などはなし。建久に土御門院の御五十日きこしめしける例とぞ。かくて中宮の若宮は、その二十八日に親王の宣旨あり。さて七月二十八日に、中宮も今宮も内に參り給ふ。例の事なれば、彼方此方の供奉、上達部殿上人數を盡して、ふるき例もいと稀なるほどにぞ聞えける。宮は御輿、御子は靑糸毛の御車、近衞大將、撿非違使別當を始めて、ゆゝしき人々仕うまつらる。こよなき見物にてぞ侍りける。後七月二日、内にて皇子の御五十日きこしめす。内藏寮より事ども調じて參る。御膳の物屯食折櫃のもの、何くれ心ことなり。時なりて、上こなたに渡らせたまふ。おん供に關白殿、堀河大納言、大夫、左大將、關白殿の御子の三位中將まゐり給ふ。上くゝめ奉らせ給ふ樣、いと〳〵めでたし。同事のやうなれば、細には書かず。かくて八月十日、すがやかに太子にたち給ひぬ。おとど御心おち居て、すずしくめでたう思す。ことわりなり。大方彼のいみじかりし世の響に、女御子にておはせましかば、いかにしほ〳〵と口惜しからまし。いときら〳〵し

南殿—紫宸殿

いとゞ繁うさへ云々—しほ頻繁に御對面あらせらるゝなり

て嚴し。關白殿、右大臣、右大將、大納言定雅、公相、公基、實雄、中納言には例の人人、顯親、實藤、公持、資季、公光、經光、定嗣、三位中將、殿上人頭中將より始めて殘るは少し。勅使藏人侍從宗基、目錄持ちて參れり。大夫對面し給ひて、白き御衣かづけ給ふ。本宮の者どもにも、内より祿たまふ。内膳司參りて、うるはしき作法にて、南殿より御膳まゐる樣、日比のには似ずけだかうめでたし。其後御遊はじまる。人々の所作、さのみは珍しげなくて止めつ。九夜は、承明門院よりの御沙汰なれば、それもいかめしき事どもありしかど、うるさくてなん。こゝらの年比思し結れつる女院の御心の中、名殘なく胸あきて、めでたく思さるゝ事限なし。閑院殿修理せらる程とて、十五日に御門承明門院へ行幸なれば、いとゞ繁うさへ見奉らせ給ふに、御心ゆく事多く、實にいみじき老の御榮なりかし。覺子内親王とて御傍におはしましつる御孫、是も土御門院の姫宮さへ、この二十六日かとよ、院になし奉らせたまへり。正親町院ときこゆ。上の同じ御腹におはすれば、萬定通大臣事行ひたまふ。院號のさだめはべるまゝに、陣より上達部皆引き連れて、承明門院へまゐる。大臣は、御簾の中にて女房の事どもなど、忍びやかにおきて宣ひけり。その夜また兵衞内侍御腹の若宮、御五十日儀式この院にて

産湯の間弓の弦をうち鳴す役

白き袖口ども云々—女房の居並びたる樣御產には人々白衣を著す

昭王—新撰朗詠集に「隆周昭王穆王曆數永、吾君又曆數永、本朝之延曆延喜胤子多、吾君亦胤子多とある句なり

門權佐資定、大外記師光など、寢殿の南面の庭に立ちて、孝經の天子の章をぞよむ。上達部簀子に侍ひ給ふ。朝の御湯はてゝ皆罷出て後、また夕御湯殿の儀式さきのまゝにて果てぬる後、寢殿の南東の間に白き袖口ども押し出ださる。白晝の五尺の屛風立て渡して、上達部よりすべて、饗どもすゑ渡す。公卿の座に人々二行につき餘る程なり。右大將實基、大夫公相、公基、實雄、以上大納言、中納言に、左衞門督顯親、權大夫實藤、公持、侍從宰相資季、別當公光、左大辨宰相經光。新宰相定嗣、右兵衞督有資、新宰相中將通行など著きたり。その座の末に紫べりの疊に、殿上人中將實直朝臣を始めて、數知らず參れり。御前のものども殿上四位はこぶ。兒御子の御衣の案二脚、階隱間に舁き立つ。御土器二めぐりの後、大夫公相、朗詠嘉辰令月、と宣へば、有資聲加へらる。又昭王と押し重ねて出さる。御聲々宿德にあらまほしうめでたし。かやうにて明けぬ。十四日に五夜の儀式さきの如し。こよひは御遊あり。實基の大將殿拍子とり給ふ。笙宗基、笛二位中納言良教、篳篥兼教朝臣、琵琶大夫公相、箏のこと權大夫實藤、和琴有資、末の拍子も同じ人なりしにや。安名尊、鳥破、席田、伊勢海、萬歲樂、三臺急例の事なり。かず〳〵めでたし。十六日七夜の御產養、内よりの御沙汰なれば、今すこし儀式ことに

未のくだり云々―未の下刻（今の午後三時頃）に既に御誕生ありたり

今日ひついで云々―今日は日次よからずとて御産のよしを奏せざるなり

つるうち―鳴弦とて御

え給ふとて、坊定り給はぬほどなり。たとひ平かにおはしますとも、若し女宮ならば、とまが／＼しきあらましは、かねて思ふだに胸つぶれて口惜し。且は我御身と宿世見ゆべき際ぞかし、と思して、大臣もいみじう念じ給ふに、未のくだり既に事なりぬ。まづ何にかと心騷ぐに、宮の御兄公相大納言、皇子御誕生ぞや、といと高らかにのたまふを、聞く人々の心地夜の明けたらんやうなり。父大臣、まことかと宣ふまゝに、よろこびの御淚ぞおちぬる。哀なる御氣色と見奉る人もことといみしあへず。公相、公基、實雄、大納言三人、權大夫實藤、大宮中納言公持、皆御ゆかりの殿ばら袍衣にて候ひたまふ。御修法どもやがて結願すべしとて、僧ども法師輩までしたり顏に汗おし拭ひつゝ、急がしげにありくさへぞめでたき。月次の御神事なる上、今日ひついで心やましき事とかやにて、わざと奏し給はねど、御驗者櫻井宮僧正をはじめ奉りて、つぎ／＼みな祿給ふ。法親王には、宮の御衣大夫とりて奉り給ふ。宇治のさきの僧正には公基大納言、房意法印には權大夫公持かづけ給ふ。御馬は各本坊に送られけり。又の日。月次の祭果てて御佩刀まゐる。勅使、隆良なりき。十二日三夜儀式、大宮の御沙汰にていとめでたし。やがて御湯殿の事あれば、つるうち五位十人、六位十人ならび立つ。御ふみの博士光兼朝臣、右衞

寮の御馬―左右馬寮に飼ひおける御馬

おろかなるやはある―粗略にする者あらんや

の奉幣勅使立てらる。日比の御祈にうちそへ、世のなかゆすり騒ぐ。六日より七佛藥師五壇の御修法などはじまる。中壇は、櫻井宮つとめさせ給ふ。今出川大臣におはしませば、御家の殿ばら絶えず候ひ給ふ。十日の曙よりその御氣色あれば、殿の内たち騒ぐ。白き御よそひに改めて、母屋に移らせ給ふ。天下のゝしりたちて、馬車走りちがふさまいとこちたし。内よりも御使ひまなし。寮御馬にて、雨の脚よりもしげく走りきほふ。さらでだにいと暑き比を、汗に押し浸したる人々のけしきいとわりなし。后宮いと苦しげにし給ひて、日たけゆくに、いろ〳〵の御物怪どもなのり出でて、いみじうかしがましし。大臣、北方いかさまにと御心惑ひて思し歎くさま、哀に悲し。かやうのきざみは、高きも下れるもおろかなるやはある。なべて皆かくこそはあれど、實にさしあたりたる世の景色をとり具して、いみじう思さるべし。内の御乳母大納言二位殿、おとな〳〵しき内侍のすけなど、さるべき限まゐり給へり。今日もなほ心もとなくて暮れぬれば、いと恐しう思す。伊勢の奉幣使など立てらる。諸社の神馬、所々の御誦經の使、四位五位數をつくして鞭をあぐるさま、いはずとも推し量るべし。大臣とりわき春日の社へ拜して、御馬、宮の御衣など奉らる。内には更衣腹に若宮二所おはしませど、この御事を待ち聞

檳榔毛―牛車の屋根を蒲葵の葉にて葺きたるもの親王大臣以下公卿の乘る車

五巻の日―最勝王經の第五巻目を講ずる日にて卽ち中の日

行はる。關白をはじめ、上達部、殿上人殘なく參り給ふ。左右大將の車陣に立つるとて、爭ひのゝしりていみじう恐し。右は上首左は下﨟にておはしければ、御前ども互にひしめきてあさましかりけり。されども相對ひて立てゝ後ぞ靜まりにける。又の日は、久我前内大臣鳥羽の御家にて八講し給ふとて、上達部多くかしこにつどひ給ふ。大臣はさらにもいはず、堀川大納言、御子の通忠大納言殿、土御門大納言、通成三位中將、通行宰相中將など、すべて一門の人々檳榔毛にておはして、おほく高欄につきたまふ。ほどほど内の御八講にも劣らず見えたり。殿上人はましてしらず。雅通のおとゞの書き置き給へるものに、公務の日なりとも、暇を申してこの八講にあふべし、とかや侍るなるに、誠にかゝる公事の折ふしも、猶さし合せておはし集ふ。いとやんごとなきわざなめり。猶末の代にはいかゞあらん、といぶかし。二十八日は、うちの最勝講五巻の日にて、又人々かずを盡して參りたまふ。二十九日には法性寺の淨光明院にて、普賢寺殿の御忌日の法事あり。この御堂の莊嚴のめでたさ限なし。まことの淨土おもひやらるゝさまなり。此處も彼處も、この程は尊き事のみ多くて、耳ぞ多くほしかりける。まことや、去年より、中宮は、いつしか只ならずおはします。六月になりてその程近ければ、十三社

たゞならず
おはする—
御懷姙

かやとて、來迎のけしき、彌陀如來、二十五の菩薩虛空に現じ給へる御姿も侍るめり。北の寢殿にぞ大臣は住み給ふ。廻れる山の常磐木どもいとふりたるに、なつかしき程の若木の櫻など植ゑ渡すとて、大臣うそぶき給ひけり。

山櫻みねにも尾にもうゑ置かん見ぬ世のはるを人やしのぶと

かの法成寺をのみこそ、いみじきためしに世繼もいひためれど、これは猶山の景氣さへおもしろく、都はなれて眺望そひたれば、言はん方なくめでたし。峯殿の御舅東の將軍の御祖父にて、よろづ世の中御心の儘に、飽かぬ事なくゆゝしくなんおはしける。今の右大臣をさく〳〵劣り給はず。世のおもしにていとやんごとなく御座するに、女御さへ御覺めでたく、いつしかたゞならずおはする、と聞ゆる。奥ゆかしき御程なるべし。京にはさま〴〵めでたき事のみ多かるに、かの佐渡島には御惱と聞えし。程なく九月十二日かくれさせ給ひぬ。世の中の改りしきざみ、若やなど思しよる事どもありしも、空しう隔りのみはてぬる世を、いと心細う聞し召しけるに、そこはかとなく御惱など重るやうにて失せ給ひにける、とぞ聞えし。四十六にぞならせ給ひける。いと哀なる世の中なるべし。かくて年かはりぬれば、寛元元年ときこゆ。五月二十六日より、最勝講始めて

〇此卷は仁治三年より後嵯峨院熊野御幸まで

源氏の中將云々—光源氏瘧を病みてまじなひに北山の某寺に籠りし事源氏物語若紫の卷に見ゆ

伯三位—神祇伯正三位白川顯廣王の子

第五　内野の雪

今后の御父は、先にも聞えつる右大臣實氏大臣。その父、故公經太政大臣、そのかみ夢見たまへることありて、源氏中將瘧病まじなひ給ひし北山のほとりに、世に知らずゆゆしき御堂を建てゝ、名をば西園寺といふめり。この所は伯三位資仲の領なりしを、尾張國松枝といふ庄にかへ給ひてけり。もとは田畑など多くて、ひたぶるに田舍めきたりしを、更にうちかへし崩して、艷なる園につくりなし、山のたゝずまひ木深く、池の心ゆたかにわたつ海をたゝへ、峰よりおつる瀧のひゞきも、げに涙催しぬべく心ばせ深き所のさまなり。本堂は西園寺、本尊の如來は誠にたへなる御姿、生身もかくやといつくしう顯され給へり。又せんみやく院は藥師。功德藏院は地藏菩薩にておはす。池のほとりに妙音堂、瀧のもとには不動尊。この不動は津國より、生身の明王、蓑笠うち奉りてさし歩みておはしたりき。その蓑笠は、寶藏にこめて三十三年に一度出さる、とぞ承る。石橋の上には五大堂。成就心院といふは、愛染王の座、冷さぬ祕法とり行はせらる。供僧も紅梅の衣、袈裟珠數の絲まで同色にて侍るめり。又法水院、化水院、無量光院と

無品親王—位階なき親王

づきて、めでたくものし給へば、御覺えいとかひぐ〱しく、よろづうちあひ思ふさまなる世のけしき、飽かぬ事なし。おなじ年八月九日后に立ち給ふ。其程のめでたさ言へば更なり。源大納言の家に、無品親王とて、怪しう心細げなりし程には、戯にも思ひより聞えたまはざりけん、とめでたきにつけても、人の口やすからず、さはとかく聞ゆべし。

餘執—死後に殘る執念

石崎—備中國下道村に在り

果してかくなんとぞ見えける。まことに其餘執の通りけるしるしにや、御庄どももよりけんとぞ覺え侍る。さて仁治三年三月十八日御卽位。萬あるべきかぎりめでたくて過ぎもて行く。嘉禎三年よりは、をかのやの大臣攝政にておはせしかば、そのまゝに今の御代のはじめも關白と聞えつれど、三月二十五日左の大臣にわたりぬ。この殿も、光明峯寺殿の御二郎君なり。神無月になりぬれば、御禊とて、世の中ひしめき立つも、思ひよりし事かはとめでたし。大嘗會の悠紀方の御屛風、三神山、菅宰相爲長つかうまつられける。

いにしへに名をのみ聞きて求めけん三神の山はこれぞその山

主基方、風俗歌、經光中納言に召されたり。

すゑとほき千世のかげこそ久しけれまだふた葉なる石崎の松

當代かくめでたくおはしませば、通宗宰相も、左大臣從一位を贈られ給ふ。御女も后の位を贈り申されし。いとめでたしや。まことや、この比右大臣と聞ゆるは、實氏大臣よ。其御女十八になり給ふを、女御に立て奉り給ふ。六月三日入内の儀式ありさま、二なく淸らを盡されたり。母北方は、四條大納言隆衡の女なり。女御の君いとさゝやかに愛敬

四つぢ殿―修明門院の御所

引き入れ―御元服の時の加冠の役

出でて對面し給ふ。義景は、切戸の側に畏りてぞ侍りける。阿波院の御子御位に、と申して出でぬ。院の中の人々、かみしも夢の心地して物にぞ當り惑ひける。仁治三年正月十九日の事なり。世の人の心地みな驚きあわてゝ、おしかへし此方に參りつどふ馬車の、響き騒ぐ世のおとなひを、四つぢ殿にはあさましうなか〳〵もの思し増るべし。又の日やがて御元服せさせ給ふ。引き入に左大臣參りたまふ。理髪、頭辨定嗣仕うまつりけり。御諱邦仁、御年二十三。その夜やがて冷泉萬里小路殿へ移らせ給ひて、閑院殿より劍璽など渡さる。踐祚の儀式いとめづらし。その後こそ閑院殿には、追號の定御わざの事などありけれ。二十五日に、東山の泉涌寺とかやいふ邊にをさめ奉る。四條の院と申すなるべし。やがてかの寺に御庄など寄せて、今に御菩提を祈り申し侍るも、前の世のゆゑありけるにや。この御門、いまだものなどはか〴〵しく宣はぬほどの御齢なりける時、誰とかや、前の世はいかなる人にてかおはしましけん、と只何となく聞えたりけるに、かの泉涌寺の開山のひじりの名をぞ、たしかに仰せられたりける。又人の夢にも、この御門かくれさせ給ひて後、かの上人われ速に成佛すべかりしを、よしなき妄念をおこして、いま一度人界の生をうけて、帝王の位にいたりて、かへりて我が帝を助けん、と思ひしに、

いへば、何事ならんと驚きながら、使召し寄せて聞くに、いとあさまし。さりとてあるべきならねば、その席よりやがて神事はじめて、若宮社にて鬮をぞとりける。その程都にはいと浮びたる事ども、心のひき〳〵いひしろふ。佐渡院宮たちにや、など聞えければ、修明門院にも御心ときめきして、内々その御用意などし給ふ。承明門院ももしやなど、さま〳〵御いのりし給ふ。東の使都に入るよし聞ゆる日は、兩女院より白川に人を立て、いづかたへか參ると見せられけるぞ、ことわりに實に今見ゆべき事なれども、物の心もとなきは、さ覺ゆるわざぞかし、と例の口すげみて微笑む。日ぐらし待たれて、城介義景といふもの、三條河原にうち出でて、承明門院のおはしますなる院はいづくぞ、とかの院より立てられたる青侍の、いと怪しげなるにしも問ひければ、聞く心地現ともおぼえず。しか〳〵と申すまゝに、土御門殿へ參りたれど、門は葎つよくかため、扉もさびつき柱根朽ちて開かざりけるを、郎等どもにとかくせさせて、内に參りて見まはせば、庭には草ふかく青き苔のみむして、松風より外は答ふるものもなく、人の通へる跡もなし。故通宗宰相中將の御弟を子にし給へりし定通大臣ばかりぞ、何となくおのづからの事もや、と思ひて、なえばめる烏帽子直衣にてさぶらひ給ひけるが、中門に

花之色十廻とある句なり

あまりいはけたる云々―御惱は餘りいたづらをし給ひて驚かせ給ひしより發りたりとなり

月の五日より、内の上例ならぬ御事にて、七日の節會にも御帳にもつかせ給はねば、いとさう／＼しく人々思しあへるに、九日の曉かくれさせ給ひぬとて、のゝしりあへる、いとあさましとも言ふばかり無し。皆人呆れ惑ひて、なか／＼涙だに出でこず。女御もいまだ童遊の御さまにて、何心なくむつれ聞えさせ給へるに、いとうたていみじければ、うちしめり屈じて居給へる、いと幼げにらうたし。大殿の御心のうち思ひやるべし。御兄の若君も殿上したまへる。たゞ御門のおなじ御程にて、さわがしきまでの御遊のみにて明しくらさせ給ひけるに、かいひそみて群りゐつゝ、鼻うちかみうち泣く人より外はなし。かくのみあさましき御事どものうち續きぬるは、いかにもかの遠き浦々にて沈み果てさせ給ひにし、御歎どものつもりにや、とぞ世の人も囁めきける。御惱の初もなべてのすぢにはあらず、餘いはけたる御遊より、そこなはれたまひにけるとぞ。いまだ御つぎもおはしまさず、又御はらからの宮なども渡らせ給はねば、世中いかに成り行かんずるにか、と辿あへるさまなり。さてしもやはにて、東へぞ告げやりける。將軍は大殿の御子、今は大納言殿と聞ゆ。御後見は、承久に上りたりし泰時朝臣なり。時房朝臣と一所にて、小弓射させ酒もりなどして、心とけたる程なりけるに、京よりのはしり馬、と

椿葉のかげ　云々――新撰朗詠集に江相公、徳是北辰、椿葉之影再改、尊猶南面松

十一にて、正月五日御元服し給ふ。御いみな秀仁と聞ゆ。その年の十二月に、洞院故攝政殿の姫君九になりたまふを、祖父の大殿、御伯父の殿ばらなどゐたちて、いとよそほしくあらまほしきさまにひゞきて、女御まゐり給ふ。父の御ひとりこそものし給はねど、大方の儀式よろづ飽かぬ事なくめでたし。上もきびはなる御程に、女御もまだかく小うおはすれば、雛遊のやうにぞ見えさせ給ひける。天の下はさながら大殿の御心のまゝなれば、いとゆゝしくなん。土御門殿宮は、二十にもあまりたまひぬれど、御冠の沙汰もなし。城興寺宮僧正眞性と聞ゆる御弟子に、と語らひ申し給ひければ、さやうにもと思して、女院にもほのめかし申させ給ひけるを、いとあるまじき事とのみ諫め聞えさせ給ふ。その冬の比、宮いたう忍びて石清水社に詣でさせたまひ、御念誦のどかにしたまひて、少しまどろませ給へるに、神殿の内に椿葉のかげ二たびあらたまる、といと鮮明にけだかき聲にてうち誦じ給ふ、と聞きて御覽じあけたれば、明方の空すみわたれるに、星の光もけざやかにて、いと神さびたり。いかに見えつる御夢ならん、と怪しく思さるれど、人にものたまはず、とまれかくもあれ、といよ〳〵御學問をぞせさせ給ふ。年もかへりぬ。春の始はおしなべて、程々につけたる家々の身のいはひなど、心ゆき誇らしげなるに、正

○この巻は後嵯峨帝崩御より四條帝御葬送まで

警策—物事の賢しくすぐれたること

人わろく—外聞悪く

憍曇彌—釋迦の姨にて釋迦の母摩耶夫人の死後釋迦を愛育せり

第四　三神山

さても源大納言通方のあづかり奉られし阿波院宮は、おとなび給ふまゝに、御心ばへもいと警策に、御かたちもいと麗しく、けだかくやんごとなき御有様なれば、なべて世の人もいとあたらしき事に思ひ聞えけり。大納言さへ暦仁の比うせにしかば、いよ〳〵眞心に仕うまつる人もなく、心細げにて、何を待つとしもなくかゝづらひて御座しますも、人わろくあぢきなう思さるべし。御母は、土御門内大臣通親の御子に宰相中將通宗とて、若くて亡せにし人の御女なり。それさへかくれ給ひにしかば、宰相のはらからの姫君ぞ、御乳母のやうにて、憍曇彌の釋迦佛養ひ奉りけん心地しておはしける。二にて父御門には別れ奉り給ひしかば、御面影だにおぼえ給はねど、猶この世の中におはすと思されしまでは、おのづからあひ見奉るやうにや、など人しれず稚き御心にかゝりておぼしわたりけるに、十二の御年かとよ、かくれさせ給ひぬ、と傳へきゝ給ひし後は、いよいよ世のうさを思し屈じつゝ、いとまめだちてのみおはしますを、承明門院は心苦しうかなしと見奉りたまふ。はかなくあけくれて、仁治二年にもなりにけり。御門は今年

例のさほうに—火葬に

おはしましし世の云々—御在世中豫め定め置かせ給へる尊號なればとて

ふる里は入りぬる磯の草よただ夕しほみちて見らくすくなき

この浦にすませ給ひて、十九年ばかりにやありけん。延應元年といふ二月二十二日、六十にてかくれさせ給ひぬ。今一度都へ歸らんの御志深かりしに、遂に空しくてやみ給ひにし事、いと辱く哀になさけなき世も今更心うし。近き山にて例のさほうになし奉るも、むげに人ずくなに心ぼそき御ありさま、いと哀れになん。御骨をば、能茂といひし北面の入道して御供に候ひしぞ、頸にかけ奉りて都にのぼりける。さて大原の法華堂とて、今も昔の御庄の所々、三昧料に寄せられたるにてつとめ絶えず、かの法華堂には修明門院の御沙汰にて、故院わきて御心とゞめたりし水無瀬殿をわたされけり。今はの際まで持たせ給ひけるきりの御珠數なども、かしこにいまだ侍るこそ、哀にかたじけなく拜み奉るついでのありしか。はじめは顯德院と定め申されたりけれど、おはしましゝ世の御あらましなりけるとて、仁治の比ぞ、後鳥羽院とは更に聞えなほされけるとなん。

の歌をことごとく申さんは例の如くかたければせめては片はしだけにても申さむとなり

御手習のついでに一物書きたまひしついでに

人ごころうつり果てぬる花のいろに昔ながらの山の名もうし

右、家隆二位、

なぞもかく思ひ初めけんさくら花山とし高くなり果つるまで

秀能、

わたのはら八十島かけてしるべせよはるかに通ふ沖のつり船

山家といふ題にて、また左、御製、

軒端あれて誰れが水無瀬の宿の月すみこしままの色や淋しき

右、家隆、

淋しさやまだ見ぬ島の山ざとを思ひやるにもすむここちして

法皇みづから判のことばを書かせ給へるに、まだ見ぬ島を思ひやらんよりは、年久しくすみて思ひいでんは、今すこし志深くやとて、我御歌を勝とつけさせ給へる、いとあはれにやさしき御事なめり。かやうのはかなしごと、又は阿彌陀佛の御勤などに紛はしてぞおはします。御手習のついでに、

我ながらうとみ果てぬる身のうへは涙ばかりぞおも變りせぬ

御色ども云々―諒闇の朝終りて黑色の喪服を脱ぎかへたるをいふ

例の數々は云々―數々

あへなくうせ給ひぬれば、大殿の御歎たとへん方なし。二十六になり給ひける。いとかなしくし給ふ姫君、若君などものし給ふをも、今は峯殿のみ偏にはぐくみ聞え給ひけり。攝政にも大殿たちかへりなり給ひぬ。かくて三度政事を治め給ひぬるにや。北の政所の御父は公經大臣なれば、かの殿と一つにて、世はいよ／＼御心のまゝなるべし。今年ぞ御色ども改りぬれば、冬になりて御禊、大嘗會行はる。さま／＼めでたくもあはれにも、いろ／＼なる都のことどもを、ほのかに傳へ聞し召して、隱岐にはあさましの年の積や、と御齡にそへても盡きせぬ御なげきぐさのみ茂りそふ慰めには、おぼし馴れにしこととて、敷島の道にのみぞ御心をのべける。都へも便につけつゝ、題をつかはし歌を召せば、哀に忘れがたく戀ひ聞ゆる昔の人々、我も／＼と奉れるを、徒然におぼさるる餘に、自ら判じて御覽ぜられにけり。家隆二位も今まで生ける思ひ出でに、これをだにと哀にかたじけなくて、こと人々の歌をも、こゝよりぞとり集めて參らせける。むかしの秀能は、ありし亂の後、頭おろして深く籠りゐたり。如願とぞいひける。それもこの度の御歌合に召せば、今更にそのかみの事さこそは思ひ出づらめ、例の數々はいかでか只片はしをだにとて、左、御製、

に惜き御年齡なり

言ひしろふ—噂しあふ

らう〳〵しく—勞々し物事に巧者なり

この比は云云—天皇の御幼冲には攝政といひ年長ぜさせ給ひては關白といへばなり

心うくあさましと思さる。この御さしつぎの宮猶おはしますは、修明門院養ひ奉らせ給ふめり。かく言ひしろふほどに、院の御惱日々に重くならせ給ひて、八月六日いとあさましうならせ給ひぬ。世のおもしにておはしますべきことの、かくあへなき御ありさま、口惜しなど聞ゆるもなのめなり。大方御本性も柔和にらう〳〵しく、御容貌もまほに美しうとゝのほりて、二十に三つばかりや餘らせ給ふらん、若うさかりの御程に、御才なども和漢たど〳〵しからず、何事につけてもいとあたらしうおはしませば、世人の惜み聞ゆるさまかぎりなし。只暮れまどへる心地どもなり。御堀川院とぞ申しける。故宮の御はてだに過ぎず、又とりかさねて諒闇の三年までにならんことを、いと禍々しくゆゆしと皆人思ふべし。御禊の程のあはれさもいとありがたくなん。御禊大嘗會などもいとゞ延びぬ。只此處も彼處も、高きも下れるも、都も遠きも島々も、涙にうきしづみてぞ過し給ひける。うち續きかくのみ世の中騷がしく、天變もしきりいとあわたゞしきやうなれば、又年號かはりて、嘉禎元年といふ。まことや三月の末つ方より、攝政殿重く煩ひたまふ。故院の御位の程より、大殿の御讓にて關白と聞えしが、御門稚くおはしませば、この比は攝政殿と申すなるべし。御かたちも御心ばえめでたくおはしましつるに、いと

例ならず云云—御懷姙あらせられ

しだいふまだきより—期に先だちて

いといとほしう云々—甚御氣の毒

まして其程近くなりては、天の下やすきそらなく、山々、寺々、社々、御祈禱ひゞきさわげども、御物怪こはくていみじうあさまし。遂に九月十八日にかくれさせ給ひぬ。その程のいみじさ推し量られぬべし。今年二十五にならせ給ふ。若く淸らに美しげにて、さかりなる花の御姿、時の間の露と消えはてたまひぬるはいはん方なし。殿うへ思し惑ふさま、かなしとも言へば更なり。院に候ふ民部卿典侍ときこゆるは、定家中納言の女なり。この宮の御方にも、けぢかう仕うまつる人なりけり。かぎりなく思ひ沈みて頭おろしぬ。いみじう哀なる事なり。人の問へる返事に、

　悲さはうき世のとがと背けどもたゞ戀しさのなぐさめぞなき

當代の御母后にておはしつれば、天下みな一つ墨染にやつれぬ。この御歎に、いよ〳〵院は沈み增さらせ給ひて、うち絶えて御遊などをだに御覽じいるゝ事なくて、月日つもらせたまへば、御修法どもいとこちたく、山々寺々殘なく勤めのゝしる。醫師、陰陽師、祭、祓など、天の下騷ぎみちたり。又年號かはりぬ、文曆元年といふ。承久の廢帝十七になり給へるも、五月二十日にうせ給ひぬ。いと若き御ほどに、いといとほしうあたらしき御年なりかし。隱岐にも打續き哀なる事どもを聞し召し歎くべし。佐渡にはまして

人の口…なさけ―悪しざまに事をいひ觸らすこと
十善のあるじ―天皇のこと
いとゆゝしきまで云々―かく御幼少にて天位に上らせ給ひたるは前世にて如何なる善事をなし給ひし報ならむとなり

も侍りけるとかや。さて同じき四日おり居させ給ふ。御惱重きによりてなりけり。去年の二月后宮の御腹に、一の御子出でき給へりしかば、やがて太子に立たせ給ひしぞかし。例の人の口さがなさは、かの承久の廢帝の生れさせ給ふと等しく、ばうに居給へりしは、いと不用なりしを、などいふめり。上はおりさせ給ひて、其七日やがて尊號あり。御惱なほおこたらず、大方世も靜ならず。この三年ばかりは天變しきり地震ふりなどして、さとししげく、御愼おもきやうなれば、いかゞおはしまさんと御心ども騷ぐべし。今上は二歳にぞならせたまふ。あさましき程の御いわけなさにて、いつくしき十善のあるじにさだまり給ふ事、いとゆゝしきまで前世ゆかしき御有樣なり。むかし、近衛院三歳、六條院二歳にて位に卽き給へりし。いづれもいと心ゆかぬ例なり。閑院殿の淸涼殿にてまづ御袴奉る。十二月五日御卽位は事無くはてぬれば、めでたくて年もかはりぬ。中宮も御物怪に惱ませ給ひて、常はあつしうおはしますを、院はいとゞ晴間なく思し歎く。四月の比年號改まる、天福といふなるべし。その同じ比中宮も位去り給ひて、藻璧門院とぞ聞ゆなる。今年も又例ならずなやませ給へば、めでたき御事の數添はせ給ふべきにこそ、と世の中めでたくきこゆ。祭、祓なにくれとおびたゞしく、まだきよりのゝしる。

御目もきりふたがる―御目も涙にくもり塞がる

さゝめく―私語する

れば、御髪おろさせ給ひにけり。こゝら物をのみ思して、今年は三十七にぞならせ給ひける。いま一度都をも御覽ぜずなりぬる、いみじうかなしきを、隱岐の小島にもきこしめしなげく。承明門院はさま〲のうき事を見つくして、猶ながらふる命のうとましきに、又かくおなじ世をだに去り給ひぬる御歎の、いはん方なさに、など先だたぬと口惜しう思し焦るゝさま、ことわりにも過ぎたり。かしこにて召しつかひける御調度、何くれはかなき御手箱やうのものを、都へ人のまゐらせたりける中に、たまさかに通ひける隱岐よりの御文、女院の御消息などを一つにとりしたゝめられたる、いみじうあはれにて、御目もきりふたがる心地し給ふ。家隆二位のむすめ、小宰相と聞えしは、おのづからけぢかく御覽じなれけるにや、人よりことに思ひ沈みて、御服など黒う染めける。

うしと見しありし別は藤ごろもやがてきるべき門出なりけり

今年もはかなく暮れて、貞永元年になりぬ。定家中納言承りて、撰集の沙汰ありつるを、この程御門おりさせ給ふべきよし聞ゆればにや、いと疾く十月二日奏せられける。一年のうちに奏せられたる、いとありがたくこそ。新勅撰と聞ゆ。元久に新古今出來て後、程なく世の中もひきかへぬるに、又新の字うち續きたる心よからぬ事など、さゝめく人

唐土には云云―白樂天の長恨歌に後宮佳麗三千人三千寵愛在二一身一

御身―道家

座主長吏別當―皆住持の僧

たこの姫君入内ありて、もとの中宮はまかで給ひぬ。珍しきが參り給へばとて、などかかうしも強ならん。唐土には三千人なども候ひ給ひける、とこそ傳へ聞くにも、しな〴〵しからぬ心地すれど、如何なるにかあらん。後には各院號ありて、三條殿の后は安嘉門院、中の度參り給ひし殿の女御は、鷹司院とぞ聞えける。今の女御もやがて后だちあり。藤壺わたり今めかしく住みなしたまへり。御はらからの姫君も容貌よくおはするに、引き籠めがたしとて、内侍のかみになし奉り給ふ。同じき三年七月五日、關白をば御太郎のおとゞに讓り聞え給ひて、我が御身は、大殿とて后宮の御親なれば、思ひなしもやんごとなきに、御子どもさへいみじう榮え給ふさま、ためしなきほどなり。東の將軍、山の座主、三井寺の長吏、山階寺の別當、仁和寺の御室、皆この殿の君だちにておはすれば、天下はさながらまじる人すくなう見えたり。いとよそほしく重々しげにて、内の御宿直所などに、常はうちとけ候ひ給へば、關白殿次々の御子どもゝ大臣などにて、立ちかはり御前に絶えずものし給ひて、世の政事など聞え給ふ。北方は、公經のおとゞの御女なれば、まして世の重くなびき奉るさま、いとやんごとなし。まことや其年十一月十一日、阿波院かくれさせたまひぬ。いとあはれにはかなき御事かな。例ならず思されけ

攝籙—攝政の異稱

ふしておはしますに、ふるく仕うまつりける女房の、里にこもり居たりける許より、あはれなる御消息をきこえて、十月一日の比、御衣更の御衣奉りたるける御返事に、

思ひ出るころもはかなし我も人も見しにはあらず辿る世に

又御手ならひの序に、からうじて洩れけるにや。

消えかぬる命ぞつらきおなじ世にあるもたのみはかけぬ契を

さこそは實に思しみだれけめ。おろかなる契だに、斯るすぢの哀は淺くやは侍る。いかばかりの御心の中にてすぐし給ふらん、といとかたじけなし。はかなく明け暮れて貞應もうち過ぎ、元仁、嘉祿、安貞などいふ年も、程なくかはりて、寛喜元年になりぬ。このほどは、光明峯寺殿また關白にておはす。この御女、女御にまゐり給ふ。世の中めでたく花やかなり。これよりさきに三條太政大臣の姫君まゐり給ひて、后だちあり。いみじう時めき給ひしをおし退けて、前殿の御むすめ、いまだ稚くておはする、參り給ひにき。これはいたく御おぼえもなくて、三條后宮の淨土寺とかやに引き籠りて渡らせ給ふに、御消息のみ日に千度といふばかり通ひなどして、世の中すさまじく思されながら、流石に后だちはありつるを、父の殿攝籙かはり給ひて、今の峯殿なりかへり給ひぬれば、ま

横ざまのさいはひ—僥倖

くろみわたりぬ—一般に喪服を著たり

遠き御別—佐渡に遷らせたまへるをいふ

つる。父の宮をば太上天皇になし奉りて、法皇ときこゆ。いとめでたく横ざまの御さいはひおはしける宮なり。孫王にて位に即かせたまへるためし、光仁天皇より後は絶えて久しかりつるに、珍しくめでたし。その十二月一日に御即位、明くる年貞應元年正月三日御元服したまふ。御いみな茂仁とまうす。御容貌もなまめかしくあてにぞおはします。御母、基家中納言の女、北白川院と申しき。家實大臣又攝政になりかへらせ給ひて、萬おきてのたまふも、さま〴〵に引きかへしたる世なりかし。又の年五月の比法皇かくれさせ給ひぬれば、天下みなくろみわたりぬ。上も御服たてまつる。きびはなる御程に、いといみじうあはれなる御事なめり。前御門は、四にて廢せられ給ひて、尊號などの沙汰だになし。御母后も山里の御住居にて、いと心細くあはれなる世をつきせず思しなげく。この宮は、故攝政殿の姫君にてものし給へば、歌の道にもいとかしこう渡らせ給へば、大かた奥深うしめやかに重き御本性にて、はかなき事をも容易く洩させ給はず、御琴などもかぎりなき音を彈きとり給へれど、をさ〳〵搔きたてさせ給ふ世もなく、あまりなるまで埋れたる御もてなしを、佐渡院も限なき御志の中に飽かずなん、思ひ聞えさせ給ひける。かのとほき御別の後は、いみじう物をのみ思しくだけつゝ、いよ〳〵沈み

○この巻は後堀河帝即位に始まりて後鳥羽院崩御に終る

御孫の宮たちえり―おどろの下の巻に見えたり

この亂―承久亂

第三　ふぢ衣

その比、いと數まへられ給はぬふる宮おはしけり。守貞親王とぞ聞えける。高倉院第三の御子なり。隱岐法皇の御兄なれば、思へばやんごとなけれど、むかし後白河法皇、安德院の筑紫へおはしまして後に、見奉らせ給ひける御孫宮たちえりの時、泣き給ひしによりて、位にも即かせ給はざりしかば、世の中もの恨めしきやうにて過し給ふ。さびしく人目まれなれば、年を經てあれまさりつゝ、草ふかく八重葎のみさし固めたる宮の中に、いと心ぼそくながめおはするに、建保の比宮のうちの女房の夢に、冠したるもの數多まゐりて、劍璽を入れ奉るべきに、おの〳〵用意して候はれよ、といふと見てければ、いとあやしうおぼえて、宮に語り聞えければ、いかでかさほどの事あらん、と思しも寄らで、遂に御髮をさへおろし給ひて、此世の御望は絶ちはてぬる心地してものし給へるに、この亂出で來て、一院の御族は、皆さま〴〵に流浪へ給ひぬれば、おのづから小きなど殘り給へるも世にさし放たれて、さりぬべき君もおはしまさぬにより、東よりの掟にて、かの入道親王の御子の十になり給ふを、承久三年七月九日俄に御位に即けたてま

年のつもりに…とて——老年の故に大方忘れたれば尚又思ひ出でたらば機會を見て語らむとてひと先づ話を止めたり

木枯のおきのそまやま吹きしをり荒くしをれてもの思ふころ

折々よませ給へる御歌どもを書きあつめて、修明門院へ奉らせ給ふ。その中に、

水無瀬山わがふる里はあれぬらんまがきはのらと人も通はで

かざしをる人もあらばや言問はぬおきのみ山に杉は見ゆれど

限あればさてもたへける身のうさを民の藁屋に軒をならべて

かやうの類すべて多く聞ゆれど、さのみは年のつもりにえなん。今また思ひ出でば、ついで求めてとて。

かくながらは…なん—此のまゝに再び見奉ることを得ずば死しても冥途に赴きがたし

伊勢より須磨に—源氏物語に六條御息所より源氏の君に長々しき文をおくりたることあり

ふに、あさましくも、かくて月日經にける事、今日あすとも知らぬ命のうちに、今一度いかで見奉りてしがな。かくながらは死出の山路も越えやるべうも侍らでなん、などいと多く亂れ書き給へるを、御顏におし當てゝ、

垂乳根の消えやらで待つ露の身を風より先にいかで訪はまし

八百萬神もあはれめたらちねの我待ちえんと絶えぬたまの緒

初雁の翼につけつゝ、ここかしこより哀なる御消息のみ常は奉るを、御覽ずるにつけても、淺ましういみじき御涙の催しなり。家隆二位は、新古今の撰者にもめし加へられ、大方歌の道につけて、むつましく召し使ひし人なれば、夜晝戀ひ聞ゆること限なし。かの伊勢より須磨にまゐりけんも、かくやとおぼゆるまで、卷きかさねて書きつらねまゐらせたる和歌所の昔の面影、かず〳〵に忘れがたう、など申して、つらき命の今日まで侍ることの恨めしきよし、などえも言ず哀おほくて、

ねざめして聞かぬを聞きてわびしきは荒磯浪のあかつきの聲

とあるを、法皇も、いみじと思して、御袖いたくしぼらせ給ふ。

浪間なきおきのこじまの濱庇ひさしくなりぬみやこ隔だてて

二千里外故人心

同じ世にまたすみのえの月や見ん今日こそよそにおきの島守

年もかへりぬ。所々浦々あはれなる事をのみ思しなげく。佐渡院、旦暮御行をのみし給ひつゝなほさりとも、と思さる。隱岐には、浦より遠のはる〲と霞みわたれる空を眺め入りて、過ぎにし方かきつくし思し出づるに、行方なき御涙のみぞとゞまらぬ。

羨ましながき日かげの春に逢ひて汐くむ海士も袖やほすらん

夏になりて、かやぶきの軒端に、五月雨のしづくいと所狹きも、御覽じなれぬ御心地に、さまかはりて珍しくおぼさる。

あやめふくかやが軒端に風過ぎてしどろに落つるむら雨の露

初秋風のたちて、世の中いとゞもの哀く露けさ增るに、いはん方なく思しみだる。

ふる里を別路におふる葛の葉の秋はくれどもかへる世もなし

たとしへなく眺めしをれさせ給へる夕暮に、沖の方にいとちひさき木の葉の浮べると見えて、漕ぎ來るをあまの釣船か、と御覽ずるほどに、都よりの御消息なりけり。墨染の御衣夜の御ふすまなど、都の夜寒に思ひやり聞えさせ給ひて、七條院よりまゐれる御文ひきあけさせ給ふより、いといみじく御胸もせきあぐる心地すれば、やゝためらひて見給

難波の葦―亂るゝの序詞

藐姑射の山―上皇の御所

霞洞―同上

二千里の外―白樂天の詩に三五夜中新月色、

千世に八千代を重ね、霞洞の御住居、いく春を經ても空ゆく月日の限しらず、のどけくおはしましぬべかりける世を、あり〳〵てよしなき一ふしに、今はかく花の都をさへ立ち別れ、おのが散々にさすらへ、磯の苫屋に軒を並べて、おのづから言問ものとては、浦につりする蜑小船、鹽燒く烟のなびく方をも、我が故里のしるべにか、と許ながめ過させ給ふ。御住居どもは、それまでと月日を限たらんだに、明日しらぬ世の後めたさに、いと心細かるべし。まいていつを果とかめぐり逢ふべき限だになく、雲の浪、烟の波の幾重とも知らぬ境に、世をつくし給ふべき御さまども、口惜しといふもおろかなり。このおはします所は、人ばなれ里遠き島の中なり。海面よりは少しひき入りて、山陰にかたそへて、おほきやかなる巖の峙てるをたよりにて、松の柱葦ふける廊など、けしきばかり事そぎたり。誠に柴のいほりのたゞ暫、とかりそめに見えたる御宿なれど、さる方になまめかしくゆゑつきてしなさせ給へり。水無瀬殿思し出づるも夢のやうになん。遙遙と見やらるゝ海の眺望、二千里の外ものこりなき心地する、今更めきたり。鹽風のいとこちたく吹き來るを聞しめして、

われこそは新島守よおきの海のあらきなみ風こころして吹け

由とする所

故院の御位にて――後白河法皇在位中にて

天照御神も……なめり――天照大神、同じ御子孫の中に於ても特に當帝を護り給ふ事厚きなるべし

こやの――昆陽野、小屋の

君のほろび給へる例、この國にはいと數多も聞えざめる。されば承平の將門、天慶の純友、康和の義親、いづれも皆猛かりけれど、宣旨にはかたざりき。保元に崇德院の世を亂り給ひしだに、故院の御位にてうち勝ち給ひしかば、天照御神も御裳裾川のおなじ流、と申しながら、なほ時の帝を護り給はする事は強きなめり、とぞ古き人々もきこえし。また信賴衛門督、おほけなく二條院をおびやかし奉りしも、つひに空しき屍をぞ道のほとりに捨てられける。かゝればふりにしことを思ふにも、なほさりとも、いかでか三皇今上あまたおはします王城の、いたづらに亡ぶるやうやはあらん、と賴しくこそ覺えしに、かくいとあやなきわざの出で來ぬるは、この世ひとつの事にもあらざらめども、迷の愚なる前には、猶いとあやしかりし。「四にて位に卽き給ひて、十五年おはしましき。おり給ひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、猶天の下には同じ事なりしかば、すべて三十八年が程この國の主として、萬機の政事を御心ひとつに治め、百官をしたがへ給へりしそのほど、吹く風の草木を靡かすよりも勝れる御ありさまにて、遠きをあはれび近きを撫で給ふ御惠、雨の足よりも繁ければ、つの國のこやのひまなき政事を聞し召すにも、難波の葦の亂れざらん事を思しき。藐姑射山の峯の松も、やうやう枝を連ねて、

一ふし二ふしのよせ—何か一かど二かどの理

に、のどかにて都にてあらん事、いとおそれあり、と思されて、御心もてその年閏十月十日、土佐國のはたといふ所に渡らせ給ひぬ。去年の二月ばかりにや、若宮出で來たまへり。承明門院の御兄に通宗宰相中將とて、若くてうせ給ひし人のむすめの御腹なり。やがてかの宰相の弟に、通方といふ人の家にとゞめ奉り給ひて、近くさぶらひける北面の下﨟一人召次などばかりぞ、御供つかうまつりける。いとあやしき御手輿にて下らせ給ふ。道すがら雪かきくらし、風吹きあれ吹雪して、來しかた行くさきも見えず。いと堪へがたきに、御袖もいたく凍りて、わりなき事多かるに、

　うき世にはかかれとてこそ生れけめことわり知らぬわが涙かな

せめて近き程に、と東より奏したりければ、後には阿波國にうつらせ給ひにき。さても此度世のありさま、げにいとうたて口惜しきわざなり。あるは父の王を失ふためしだに、一萬八千人までありけり、とこそ佛も說き給ひためれ。まして世下りて後、唐土にも日本にも國を爭ひて、戰をなす事數へ盡すべからず。それも皆一ふし二ふしのよせはありけん。もしはすぢ異なる大臣、さらでもおほやけともなるべききざみの、少しの違めに世に隔りて、その恨の末などより事起るなりけり。今のやうに無下の民と爭ひて、

りいひおこするまゝに、彼二人の大將軍はからひおきてつゝ、保元のためしにや、院の上都の外にうつし奉るべし、と聞ゆれば、女院宮々所々に思しまどふ事更なり。本院は、隱岐國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ網代車のあやしげなるにて、七月六日入らせ給ふ。今日をかぎりの御歩行、淺ましうあはれなり。ものにもがなや、と思さるゝもかひなし。その日やがて御髮おろす。御年四十に一二や餘らせ給ふらん、まだいとほしかるべき御程なり。信實朝臣めしして、御姿うつし書かせらる。七條院へ奉らせ給はんとなり。かくておなじ十三日に御船にたてまつりて、遙なる浪路をしのぎおはします御心地、この世のおなじ御身とも思されず。いみじういかなりける代々の報にか、とうらめしく、新院も佐渡國に遷らせ給ふ。まことや七月九日、御門をもおろし奉りき。この四月かとよ、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にており給へる例も、これやはじめなるらん。唐土にぞ四十五日とかや位におはする例ありける、とぞ唐の書讀みし人のいひし心地する。それもかやうの亂やありけん。さて上達部、殿上人、それより下はた殘なく、この事に觸れにしたぐひは、重く輕く罪に當るさまいみじげなり。中院は、始より知しめさぬ事なれば、東にも咎め申さねど、父院遙にうつらせ給ひぬる

ものにもがなや―源氏物語に「とりかへす物にもがなや世の中をありしながらの我身と思へば」

唐土にぞ…例―秦王子嬰位に在ること四十六日

責一人に―一人は天子論語に百姓過あれば予一人に在り

まことのきは―實際

しう思さるゝに、只御涙のみぞ出で來る。過ぎにし方悔しう取返へさまほし。さま〴〵おこたりかしこまり申させ給ふ。山の御輿防ぎ奉りけんこと、必ずしも自おぼしよるにもあらざりけめど、責一人にといふらん事にや、とあぢきなし。」中院は飽かで位をすべり給ひしより、言に出でてこそものし給はねど、世のいと心やましきまゝに、斯樣の御騷にもことにまじらひ給はざめり。新院は、同じ御心にて萬軍の事などもおきて仰せられけり。いつの年よりも五月雨はれまなくて、富士川天龍などえもいはず漲り騷ぎて、いかなる龍馬もうち渡しがたければ、攻め上る武者どもゝ怪しく惱めり。かゝれども遂に都に近づくよし聞ゆれば、君の御武者もいでたつ。その勢六萬餘騎とかや。宇治勢多へ分ち遣す。世の中ひゞきのゝしる樣、言の葉も及ばず、まねびがたし。あるは深き山へに逃げこもり、遠き世界に落ち下り、凡て安げなくさわぎ滿ちたり。いかゞあらん、と君も御心亂れて思し惑ふ。かねては猛くみえし人々も、まことのきはになりぬれば、いと心あわたゞしく、色を失ひたるさまども賴しげなし。六月二十日あまりにや、いくばくの戰だになくて、遂に身方の軍破れぬ。荒磯に高潮などのさし來るやうにて、泰時と時房とみだれ入りぬれば、言はん方なくあきれて、上下たゞ物にぞあたり惑ふ。東よ

やんごとなき—尊き
顯密—天臺眞言の二宗
一年の御輿—建保六年九月二十一日延暦寺の僧徒日吉の神輿を奉じて京に亂入せしこと

は故大將の同胞なれば、一方ならず東を重く思して、さし答へもせず、院の御心の輕き事とあぶながり給ふ。七條院の御由縁の殿ばら、坊門大納言忠信、尾張中納言清經、中御門大納言宗家、又修明門院の御はらからの甲斐の宰相中將範茂など、つぎ〳〵數多聞ゆれど、さのみは記し難し。軍にまじり立つ人々、この外の上達部にも殿上人にも數多ありき。御修法ども數知らず行はる。やんごとなき顯密の高僧も、かゝるときこそ頼しきわざならめ。各心をいたして仕うまつる。御自もいみじう念ぜさせ給ふ。日吉社にしのびて、詣でさせ給へり。大宮の御前に、夜もすがら御念誦し給ひて、御心の中にいかめしき願どもを立てさせ給ふ。夜すこし更け靜りて、御社すごく、燈籠の光幽なるほどに、稚き童のふしたりけるが、俄に怯えあがりて、院の御前にたゞまゐりに走り參りて、託宣しけり。辱くもかく渡りおはしまして憂へ給へば、聞きすごし難く侍れど、一年の御輿振の時、情なく防がせ給ひしかば、衆徒己を恨みて、陣のほとりに振捨て侍りしかば、空しく馬牛の跡にかゝりし事は、今にうらめしく思ひ給ふるにより、此度の御方人はえ仕うまつり侍るまじ。七社の神殿を金銀に磨きなさん、と承るも、專うけ侍らぬなり、とのゝしりて、息も絶えぬるさまにて臥しぬ。聞し召す御心地物に似ず淺ま

かしこまりを申して―謝罪して

ば横ざまの死をせん事はあるべからず、心を猛く思へ。己打ち勝つものならば、二度この足柄箱根山は越ゆべし、など泣く〳〵言ひ聞かす。まことにしかなり。又親の顔拜まん事もいと危ふし、と思ひて、泰時も鎧の袖を絞る。互に今やかたみと哀に心細げなり。斯て打ち出でぬる又の日、思ひかけぬ程に、泰時たゞ一人鞭を上げて馳せ來たり。父胸うち騷ぎていかに、と問ふに、軍のあるべきやう大方のおきてなどをば、仰の如くその心を得侍りぬ。若道のほとりにも、計らざるに、忝く鳳輦を先立て御旗をあげられ、臨幸の嚴重なる事も侍らんに參り合へらば、其時の進退いかゞ侍るべからん。この一事をたづね申さんとて、一人馳せ侍りき、といふ。義時、とばかりうち案じて、畏くも問へる男かな。その事なり。まさに君の御輿に向ひて、弓を引くことはいかゞあらん、さ許の時は兜をぬぎ弓の弦を切りて、偏にかしこまりを申して身をまかせ奉るべし。さはあらで君は都におはしましながら、軍兵をたまはせば、命を捨てゝ、千人が一人になるまでも戰ふべし、と言ひも果てぬに急ぎ立ちにけり。都にも思しまうけつる事なれば、武士共召し集へ、宇治勢田の橋もひかせて、敵をふせぐべき用意心ことなり。公經大將一人のみなん、御孫のこともさる事にて、北方、一條中納言能保といふ人の女なり。その母北方

院の思し構ふる事―後鳥羽院の鎌倉征伐の御計畫

宿世をも見るばかり―運試しに戰はん

せたまふ。近比皆この御齢にて受禪ありつれば、これもめでたき御行末ならんかし。同じき廿三日院號の定ありて、今おりさせ給へるを、新院ときこゆれば、御兄の院をば中院と申し、父御門をば本院とぞきこえさする。このほどは家實大臣、關白にておはしつれど、御讓位の時左大臣道家大臣攝政になり給ふ。かのあづまの若君の御父なり。さても院の思し構ふる事、忍ぶとすれどやう〳〵漏れ聞えて、東ざまにもその心づかひすべかめり。あづまの代官にて、伊賀判官光季といふものあり。かつ〳〵かれを御勘事のよし仰せらるれば、御方に參る武士共おし寄せたるに、遁るべきやうなくて腹切りてけり。まづいとめでたし、とぞ院は思召しける。東にもいみじうあわて騷ぐ。さるべくて身の亡すべき時にこそあんなれ、と思ふものから、討手の攻め來りなん時に、はかなきさまにて屍を曝さじ。朝廷と聞ゆとも、自らし給ふことならねば、かつは我身の宿世をも見るばかり、と思ひなりて、弟の時房と泰時といふ一男と二人を首として、雲霞の兵士をたなびかせて都にのぼす。泰時を前に居ゑて言ふやう、おのれを此度都にまゐらする事は、思ふ所多し。本意の如く淸き死をすべし。人に後見えなんには、親の顏また見るべからず、今を限とおもへ。賤しけれども、義時君の御爲に後めたき心やはある。され

あへなん云云―應ぜん

只形代…にて―人形を崇めまつりたる樣にて

はいかゞにて、君達一所くだし聞えて將軍になし奉らせ給へ、と公經大臣に申し上せければ、あへなんと思すところに、九條右大臣殿の上は、この大臣の御女なり。その御腹の若君の二つになり給ふを下し聞えん、と九條殿宣へば、御孫ならんもおなじ事、と思して定め給ひぬ。その年の六月にあづまにゐて奉る。七月十九日におはしまし著きぬ。襁褓の中の御ありさまは、ただ形代などを祝ひたらんやうにて、萬の事さながら右京權大夫義時朝臣心のまゝなり。一人の御子の將軍になり給へるは、これぞはじめなるべき。かの平家の亡ぶべき世の末に、人の夢に、賴朝が後はその御太刀あづかるべし、と春日大明神仰せられけるは、この今の若君の御事にこそありけめ。「かくて世を靡かししたゝめ行ふ事も、ほと〳〵舊きには越えたり。忠實にめざましき事も多くなり行くに、院の上、忍びて思し立つ事などあるべし。近く仕うまつる上達部、殿上人、まいて北面の下﨟西面など言ふも、皆この方にほのめきたるは、旦暮弓矢兵杖のいとなみより外の事なし。劍などを御覽じ知ることさへ、いかで習はせ給ひたるにか、道のものにもやゝ立ち勝りてかしこくおはしませば、御前にてよきあしなど定めさせ給ふ。かやうのまぎれにて承久も三年になりぬ。四月二十日御門おりさせ給ふ。春宮四にならせ給ふに讓り申さ

大德—高僧

いといかめしきひゞき—大層なる評判

やまは裂け海はあせなん世なりとも君に二心わがあらめやも

とぞよみける。時政は建保三年にかくれにしかば、義時はあとを繼ぎけり。故左衛門督の子にて公曉といふ大德あり。親の討たれにしことを、いかでか安き心あらん、いかならん時にか、とのみ思ひわたるに、この内大臣、又右大臣に上りて、大饗など珍しく東にて行ふ。京より尊者をはじめ上達部、殿上人多く訪ひいましけり。さて鎌倉にうつし奉れる八幡御社に、神拜に詣づるいといかめしきひゞきなれば、國々の武士は更にもいはず、都の人々も扈從しけり。立ち騷ぎのゝしるもの、見る人も多かる中に、かの大德うち紛れて、女の眞似をして、白き薄衣ひきをり、大臣の車より下るゝ程をさし窺くやうにぞ見えける。あやまたず首を打ち落しぬ。その程の騷動いみじさ思ひ遣りぬべし。かくいふは、承久元年正月廿七日なり。そこらつどひ集れる者共、只あきれたるより外の事なし。京にも聞しめし驚く。世の中火を消ちたるさまなり。扈從に西園寺宰相中將實氏も下り給ひき。さならぬ人々も、泣く〳〵袖を絞りてぞ上りける。いまだ子も無ければ、立ちつぐべき人もなし。事靜りなん程とて、故大臣の母北方二位殿政子といふ人、二人の子をも亡ひて、淚ほすまもなく萎れ過すをぞ、將軍に用ゐける。かくてもさのみ

うけばりたる—萬事を一身に引き受けたる

入道—頼家

て、うけばりたるさまなり。子二人あり。太郎は宗時といふ、次郎は義時といへり。次郎は心も猛く魂まされるものにて、左衛門督をば相應しからず思ひて、弟の實朝君に附きしたがひて、思ひ構ふる事などもありけり。督は日にそへて人にも背けられゆくに、いといみじき病をさへして、建仁三年九月十六日、年二十二にて頭おろす。世の中残おほく何事もあたらしかるべき程なれば、さこそ口惜しかりけめ。稚き子の一萬といふにぞ、世をば讓りけれど、うけひくものなし。入道は、かの病つくろはんとて、鎌倉より伊豆國へ溫泉あびに越えたりける程に、彼處の修善寺といふ所にて遂に討たれぬ。一萬もやがて失はれけり。これは、實朝と義時とひとつ心にて謀りけるなるべし。さて今は偏に實朝故大將の跡を承け繼ぎて、官位とゞこほる事なく、よろづ心のまゝなり。建保元年二月二十七日正二位せしは、閑院の内裏つくれる賞、とぞ聞き侍りし。同じき六年權大納言になりて、左大將を兼ねたり。左馬頭をさへぞ附けられける。其年やがて内大臣になりても、猶大將、もとのまゝなり。父にもやゝ立ち勝りていみじかりき。此大臣は大方心ばへ麗しく、猛くもやさしくも萬めやすければ、ことわりにも過ぎて、武士の靡き隨ふさまも代々にも越えたり。如何なる時にかありけん、

落居ぬ心ばへ—輕躁なる氣風

はりて、地頭職にわが家の武士どもをなし集めける。この日本國の衰ふる初は、これよりなるべし。さて、東にかへり下るころ、上下いろ〳〵のぬさ多かりし中に、年比も祈などし給ひにし吉水僧正、かの長歌の座主のたまひ遣しける。

　あづまぢのかたに勿來の關の名は君を都にすめとなりけり

御かへし、賴朝、

　都には君もあふさかちかければ勿來の關はとほきとを知れ

其後もまた上りて、東大寺の供養にも詣でたりき。かくて新院の御位のはじめつ方、正治元年正月あづまにて頭おろして、同じき十三日、年五十三にてかくれにけり。治承四年より天の下に用ゐられて、二十年ばかりや過ぎぬらん。北方はさきに聞えつる北條四郎時政が女なり。その腹に男子二人あり。太郎をば賴家といふ、弟をば實朝と聞ゆ。大將かくれて後、兄はやがて立ちつぎて、建仁元年六月二十二日從二位。同日將軍の宣旨を給はる。又の年左衛門督になさる。かゝれども、少し落居ぬ心ばへなどありて、やうやう武士ども背き〳〵になりにける。時政は遠江守といひて、故大將のありし時より私の後見なりしを、まいて今は孫の世なれば、いよ〳〵身おもく勢そふ事かぎりなく

壽永の秋―平氏の都落は壽永元年七月二十五日

二の階―位二階を超えて從二位になりし事

くれで―くれ(木の切れ)與へずして

あいだてなし―主從の隔なし

けん、平家の人々は、壽永の秋の木がらしに散りはてゝ、遂にわたつ海の底の藻屑と沈みにし後、いよ〳〵頼朝權をほどこして、更に君の御後見を仕うまつる。相模國鎌倉里といふ所に居りながら、世を掌の中に思ひき。皆人知り給へることなれば、今更に申すもなか〳〵なれど、院のうへ、位につかせたまひしはじめより世の固となりて、文治元年四月二の階をのぼりしも、八島内大臣宗盛を生擒の賞と聞ゆ。建久の初つかた都にのぼる。その勢のいかめしき事、いへばさらなり。道すがら遊女どもまゐる。遠江國橋本宿につきたるに、例の遊女おほくえもいはず裝束きてまゐれり。頼朝うちほうゑみて、

はしもとの君になにをか渡すべき

といへば、梶原平三景時といふ武士、とりあへず、

ただそま山のくれであらばや

いとあいだてなしや。馬、鞍、紺纐纈などはこび出でて引けば、喜びさわぐ事かぎりなし。其年の十一月九日權大納言になされて、右近大將をかねたり。十二月の朔日比よろこび申して、同き日やがて官をば返し奉る。此時ぞ、諸國の總追捕使といふ事うけたま

○此卷は建保七年平氏勃興に始まりて仲恭帝廢立に終る
式部卿の御子―葛原親王
有るか無きかに―微々として

第二　新島もり

猛き武士のおこりを尋ぬれば、古田村などいひけん將軍どもの事は、耳遠ければさし置きぬ。昔より今まで、源平の二流は、時により折にしたがひて、公の御守とはなりにける。桓武天皇ときこえし御門をば、柏原帝とも申しけり。その御子に式部卿御子と聞えしより五代の末に、平將軍貞盛といふ人、維衡、維時とて二人の子を持たりけり。間近く榮えし西八條の淸盛大臣は、かの太郎維衡より六代の末なりき。その一門亡びしかば、其比は僅にあるか無きかにぞさまかよふめる。さて、かの維時が名殘は一向に民となりて、平四郎時政と言ふものゝみぞ、伊豆國北條郡とかやにあめる。それも維時には六代の末なるべし。また源氏武者といふも、淸和帝、あるは宇多院などの御後どもなり。二條院の御時平治の亂に、伊豆國蛭が小島にながされし兵衞佐賴朝は、淸和の御門より、八代のながれに、六條判官爲義といひし者の孫なり。左馬頭義朝が三郎になんありける。西八條入道おとゞ、やう／＼榮花おとろへんとて、後白川院を惱し奉りしかば、安からず思されて、かの賴朝を召し出でて、軍を起し給ひしに、しかるべき時やいたり

とその世の事かたじけなくなん。いまもすこし世の中隔たれる様にてのみ御座しますこそ、いといとほしき御ありさまなめれとぞ。

もていでぬ—おもてだちてし給はぬ

裏書—御詠草の裏に書くこと

わかの浦や　いまもたまもを　かきつめて　ためしもなみに
みがきおく　わがみちまでも　絶えせずは　ことのはごとの
いろいろに　のち見んひとも　戀ひざらめかも

返歌

君をいのるこころ深くはたのむらん絶えてはさらに山川の水

新院ものどかにおはしますまゝに、萬の事もていでぬ御本性にて、人々など集めて、わざとあるさまには好ませ給はず。建保の比内々百首御歌詠み給へりしを、家隆三位また定家治部卿の許などへ、いふかひなき兒のよめる、とて遣して見せたまひしに、何れもめでたくさま〲なる中に、懷舊の御歌に、

秋の色をおくり迎へて雲の上になれにし月もものわすれすな

とある所に、定家君驚きかしこまりて、裏書に、あさましくはかられ奉りける事など記して、

あかざりし月もさこそは思ふらめふかき涙もわすられぬ世を

と奏せられたり。院もえんありて御覽ずべし。げにいかゞ御心動かずしもおはしまさん、

なげき—投木、歎き

きみ—吉水僧正慈鎮

星の宿…やま—三公にもなるべき家柄を捨てて佛門に入り

それならぬ　うきふししげき　くれたけに　泣くねを立つる
うぐひすの　ふるすはゆきに　あらしつつ　あと絶えぬべき
たにがくれ　こり積むなげき　しひしばの　しひてむかしに
かへされぬ　くずのうら葉は　うらむとも　きみはみかさの
やまたかみ、　くもゐのそらに　まじりつつ　てる日を代々に
たすけこし　ほしのやどりを　ふりすてて　ひとり出でにし
わしのやま　世にもまれなる　あととめて　ふかきながれに
むすぶてふ　のりのしみづの　そこ澄みて　にごれる世にも
にごりなし　ぬまのあし間に　かげやどす　あきのなかばの
つきなれば　なほやまのはを　ゆきめぐり　そらふくかぜを
あふぎても　むなしくなさぬ　ゆくすゑを　みつのかはなみ
たちかへり　こころのやみを　はるくべき　ひよしのみかげ
のどかにて　きみをいのらん　よろづ代に　千代をかさねて
まつがえを　つばさにならす　つるの子の　ゆづるよはひは

久方の…なき—天照太神の神勅に與天壤無窮の語あり
昔の人—傳教大師

あすかがは　明日よりのちや　わがたちし　そまのたつきの
ひびきより　みねのあさぎり　はれのきて　くもらぬそらに
たちかへるべき

反歌

さりともと思ふこころぞなほ深きたえてたえゆく山川のみづ

定家中將、折節御前に侍ひければ、この返せよ、とてさし給はする。げにいと狭くかきて御覧ぜさせけり。

ひさかたの　あめつちともに　かぎりなき　あまつ日つぎを
ちかひてし　かみもろともに　まもれとて　わがたつそまを
いのりつつ　むかしのひとの　しめてける　みねのすぎむち
いろかへず　いくとしどしを　へだつとも　八重のしらくも
ながめやる　みやこのはるを　となりにて　みのりのはなも
おとろへず　にほはんものと　思ひおきし　すゑ葉のつゆも
さだめなき　かやがした葉に　みだれつつ　もとのこころの

みづかは―美豆川山城に在り
つくば山―着く
つくづく―撞く、熟々

なりぬべし　みねのひじりの　すみかさへ　こけのしたにぞ
うもれゆく　みちはらふべき　ひともがな　あなうのはなの
世のなかや　はるのゆめぢは　むなしくて　あきのこずゑを
おもふより　ふゆのゆきをも　たれか訪ふ　かくてやいまは
あと絶えん　とおもふからに　くれはとり　あやしきよるの
わがおもひ　消えぬばかりを　たのみきて　なほさりともと
おもひつつ　しばしみやこに　やすらひて　のこる御のりの
はなの香に　しひてこころを　つくばやま　しげきなげきの
ねをたづね　しづむむかしの　たまをとひ　すくふこころは
ふかくして　つとめ行くこそ　あはれなれ　みやまのかねを
つくづくと　わがきみが代を　おもふにも　みねのまつかぜ
のどかにて　千代にちとせを　添ふるほど　のりのむしろの
はなのいろ　野にもやまにも　にほひてぞ　ひとをわたさん
はしとして　しばしこころを　やすむべき　つひにはいかが

弓張としも―古今集に「てる月を弓張としもいふことは山べをさしていればなりけり」

しがの浦……べし―志賀浦に垂迹せる日吉の神の惠を頼め人の願を滿どもたすことかたしと

の僧正、世にもいと重く、山座主にてものし給ふ事も年久しかりし。その程にやんごとなき高名かず知らずおはせしかば、崇められ給ふさまも二なくものし給ひしかど、猶飽かず思す事やありけん。院に奉られける長歌、

さても何に　わしのみやまの　つきのかげ　つるのはやしに
入りしより　經にけるとしを　かぞふれば　ふたちとせにも
過ぎ果てて　のちのいつつの　もゝとせに　なりにけるこそ
かなしけれ　あはれみのりの　水のあわの　消えゆくころに
なりぬれば　それにこゝろを　すましてぞ　わがやまがはに
しづみゆく　こゝろあらそふ　のりの師は　われもわれもと
あをやぎの　いとところせく　みだれきて　はなももみぢも
散りゆけば　木ずゑあとなき　みやまべの　みちにまよひて
過ぎながら　ひとりこゝろを　とゞむるも　かひもなぎさの
しがのうら　あとたれましし　日よしのや　かみのめぐみを
たのめども　ひとのねがひを　みづかはの　ながれもあさく

北面—北面の武士院の御所の警衛を司る

院の御かたて—後鳥羽上皇の御敵手

あかしがた浦路はれゆく朝なぎにきりにこぎ入るあまのつり船

とありしに、北面の中に藤原秀能とて、年比もこの道にゆりたるすきものなれば、召し加へらるゝ事常のことなれど、やんごとなき人々の歌だにも、あるは一首二首三首には過ぎざりしに、この秀能九首までめされて、しかも院の御かたてに參れり。さてありつる海士の釣船の御歌の右に、

契りおきし山の木の葉のした紅葉そめしころもに秋風ぞ吹く

と詠めりしは、其身の上にとりて、ながき世の面目何にかはあらん、とぞ聞き侍りし。むかしの躬恒が御階のもとに召されて、弓張としもいふ事は、と奏して、御衣賜はりしをこそ、いみじきことにはいひ傳ふめれ。又貫之が家に、枇杷大臣、魚袋の歌の返しとぶらひにおはしたりしをも、道の高名とこそ世繼には書きて侍れ。近き比は西行法師ぞ北面の者にて、世にいみじき歌のひじりなめりしが、今の代の秀能は、殆ふるきにも立ち勝りてや侍らん。この度の御歌合、大方いづれとなくうち見わたして、すぐれたる限を撰り出でさせ給ひしかば、各むら〳〵にぞ侍りける。吉水の僧正慈圓と聞えし、又類なき歌の聖にていましき。それだに四首ぞ入り給ひにける。さのみは事長ければもらしぬ。こ

ひろはゞ…にや―源氏物語帚木の巻に「拾はば消えなんと見ゆる玉篠の上に霰などの云々」とある意をとりて洗米を霰に見たてたるならむとなり

けり、と心地騒ぎておぼゆべし。大方この院の上は、萬の事にいたり深く、御心もはなやかに、物に委しうなどぞ御座しましける。夏の比、水無瀬殿の釣殿に出でさせ給ひて、氷水めして水飯やうのものなど、若き上達部、殿上人どもに給はさせて、大御酒まゐるついでにも、あはれ古の紫式部こそはいみじくはありけれ。かの源氏物語にも、近き川の鮎、西川より奉れるいしぶしやうのもの御前に調じて、と書けるなん勝れてめでたきぞとよ。只今さやうの料理つかまつりてんや、など宣ふを、秦の某とかいふ御隨身、高欄のもと近く候ひけるが、うけたまはりて、池の汀なる笹を少し敷きて、白き米を氷に洗ひて奉れり。拾はゞ消えなんとにや。これもけしかるわざかな、とて御衣脱ぎて被けさせ給ふ。御かはらけ度々きこしめす。其道にもいとはしたなうものし給ふ。何事も愛敬づきめでたく見えさせ給ふ御ありさま、千歳を經ともあく世あるまじかめり。また清撰の御歌合とて、かぎりなく磨かせ給ひしも、水無瀬殿にての事なりしにや。當座の衆議制なれば、人々の心地いとゞ置所なかりけんかし。建保二年九月のころ、勝れたる限ぬき出で給ふめりしかば、いづれかおろかならん。中にもいみじかりし事は、第七番に、

左、院の御歌、

でたく定り果てぬるさまなり。新院はいでやと思さるらんかし。かくて院の上は、ともすれば水無瀬殿にのみわたらせ給ひて、琴笛の音につけ花紅葉のをり〳〵にふれて、萬のあそびわざをのみ盡しつゝ、御心ゆくさまにて過させたまふ。誠によろづ世も盡きすまじき御世の榮、次々いまよりいと賴しげにぞ見えさせ給ふ。御碁うたせ給ふついでに、若き殿上人ども召して、これかれ心のひき〳〵にいどみ爭はせさせ給へば、あるは小弓雙六などいふ事まで、思ひ〳〵に勝負をさうどきあへるも、いとをかしう御覽じてさまざまの興ある賭物どもとうでさせ給ふとて、なにがしの中將を御使にて、修明門院の御方へ、何にても男どもに賜はせぬべからん賭物、と申させ給ひたるに、とりあへず小き唐櫃の金物したるが、いと重らかなるを參らせられたり。この御使のうへ人、何ならんといとうぶかしくて、片端ほのあけて見るに錢なり。いと心えずなりて、さと面うちあかみて、あさましと思へる氣色しるきを、院御覽じおこせて、朝臣こそむげに口惜くはありけれ。かばかりの事知らぬやうやはある。古より殿上の賭弓といふ事には、これをこそ賭物にはせしか。されば今かけものと聞えたるに、これをしも出されたるなんいにしへの事知り給へるこそいたきわざなれ、と微笑みてのたまふに、さは惡しく思ひ、

さうどき―爭ひ騷ぎ

殿上の賭弓―殿上の侍臣どもに弓射させて御覽する儀式

御心ばへ…けろ—御性質は土御門上皇よりも少し才氣まさらせ給へり

いよ〳〵…たり—愈君臣合體せし心地して人人喜びあへり

悠紀方の御屛風歌めさる。長柄山、

菅の根のながらの山のみねの松吹きくる風もよろづ代の聲

斯樣の事は、皆人のしろしめしたらん、ことあたらしく聞えなすこそ、老の僻事ならめ。この御代にはいと掲焉なる事おほく、所々の行幸しげく好ましきさまなり。建保二年春日社に行幸ありしこそ、ありがたき程いどみ盡しおもしろうも侍りけれ。さて、その又の年、御百首御歌よませ給ひけるに、昨年の事おぼしいでて、うちの御製、

かすが山こぞのやよひの花の香にそめし心は神ぞしるらん

御心ばへは、新院よりも少しかどめいて、あざやかにぞおはしましける。御才も倭漢兼ねて、いとやんごとなくものし給ふ。朝夕の御いとなみは、和歌の道にてぞ侍りける。末の世に八雲などいふもの作らせ給へるも、この御門の御事なり。攝政殿の姫君まゐり給ひて、いと花やかにめでたし。この御腹に、建保二年十月十日一の皇子うまれ給へり。いよいよものあひたる心地して、世の中ゆすりみちたり。十一月二十一日、やがて親王になし奉り給ひて、おなじ二十六日坊にゐ給ふ。いまだ御五十日だにきこしめさぬに、いちはやき御もてなし珍かなり。心もとなく思されければなるべし。今ひとしほ世の中め

つぎ〳〵…なん―順々に數多の歌ありし樣なれどあまりうるさければいはず

いとあてに…御本性―甚だ上品に寛大なる御性質

つぎ〳〵順ながるめりしかど、さのみはうるさくてなん。何となく明け暮れて、承元二年にもなりぬ。十二月二十五日二の宮御かうぶりし給ふ。修明門院の御腹なり。この御子を院限なくかなしきものに思ひ聞えさせ給へれば、二なくきよらをつくし、いつくしうもてかしづき奉り給ふ事なのめならず。遂におなじき四年十一月に御位につけ奉り給ふ。もとの御門、今年こそ十六にならせ給へば、いまだ遙なるべき御盛に、かゝるをいと飽かずあはれ、と思されたり。永治のむかし鳥羽法皇、崇德院の御心もゆかぬにおろし聞えて、近衞院をすゑ奉り給ひし時は、御門いみじうしぶらせ給ひて、其夜になるまで勅使を度々奉らせ給ひつゝ、內侍所劍璽などをも渡しかねさせ給へりしぞかし。さて、其御憤の末にてこそ、保元亂もひき出で給へりしを、この御門は、いとあてに大どかなる御本性にて、思し結れぬにはあらねども、けしきにも漏し給はず、世にもいとどあへなき事に思ひ申しけり。承明門院などは、況ていと胸いたくおぼされにけり。其年の十二月に、太上天皇の尊號あり。新院と聞ゆれば、父の御門をば今は本院と申す。猶御政事はかはらず。今の御門は十四になり給ふ。御いみな守成と聞えしにや。元曆二年十一月十三日大嘗會なり。新院の御時もつかうまつられたりし資實中納言に、この度も

つかうまつれ—此度の作者は皆名人と許されたる老大家なり宮内卿は此列に入るには少早かるべけれども不都合あらじと思ひて加へたるなり朕が面目を施すに足る立派なる歌をよめ

のどもなり。宮内卿はまだしかるべけれども、けしうはあらずと見ゆめればなん。構へてまろが面起すばかり、よき歌つかうまつれ、とおほせらるゝに、面うち赤めて、涙ぐみて候ひけるけしき、限なきすきの程もあはれにぞ見えける。さてその御百首歌、いづれもとり〴〵なる中に、

薄く濃き野邊のみどりの若草にあとまで見ゆる雪のむら消え

草の緑のこきうすき色にて、去年のふる雪の遲く疾く消えける程を推しはかりたる心ばへなど、まだしからん人はいと思ひよりがたくや。この人年積るまであらましかば、實にいかばかり目に見えぬ鬼神をも動しなましに、若くて亡せにしいといとほしく可惜しくなん。かくてこの度撰ばれたるをば、新古今といふなり。元久二年三月二十六日、竟宴といふ事春日殿にて行はせたまふ。いみじき世のひゞきなり。かの延喜の昔思しよそへられて、院の御製、

いそのかみふるきを今にならべ來し昔の跡をまたたづねつつ

攝政殿、

しきしまや大和ことばの海にして拾ひし玉はみがかれにけり

判の詞—優劣を判定する詞

こたみは…

崇徳院の詞花集は、顯輔三位えらぶ。又白川院おり居させ給ひて後、金葉集、重ねて俊頼朝臣におほせて撰ばせたまひしこそ、はじめ奏したりけるに、輔仁親王の御なのりを書きたる惡しとて、かへされ又奉れるにも何事とかやありて、三度奏して後こそを納りにけれ。斯樣の例もおのづからの事なり。おしなべては撰者のまゝにて侍るなれど、今度は、院の上みづから和歌の浦におりたちあさらせ給へば、誠に心異なるべし。此撰集よりさきに、千五百番の歌合せさせ給ひしにも、勝れたるかぎりを撰ばせ給ひて、其道の聖たち判じけるに、やがて院も加はらせ給ひながら、なほこのなみには立ち及びがたし、と卑下せさせ給ひて、判の詞をば記されず、御歌にて優劣れる志ばかりをあらはし給へり。なか〳〵いと艶に侍りけり。上のその道をえ給へれば、下もおのづから時を知るならひにや、男も女も、この御代にあたりて、よき歌よみ多く聞え侍りし中に、宮内卿君といひしは、村上御門の御後に、俊房の左大臣ときこえし人の御末なれば、はやうはあて人なれど、官あさくて、うち續き四位ばかりにて亡せにし人の子なり。まだいと若き齡にて、そこひもなく深き心ばへをのみ詠みしこそ、いとありがたく侍りけれ。この千五百番の歌合の時、院のうへ宣ふやう、こたみは皆世に許たるふるき道のも

後京極殿—藤原良經

きびは—幼少

梨壺の五人—大中臣能宣・清原元輔・源順・紀時文・坂上望城なり梨壺は當時和歌所を置かれたる所

うつくしげにぞおはします。御本性も、父御門よりは少しぬるくおはしましけれど、御情深う物のあはれなど聞し召し過ぐさすぞありける。今の攝政は、院の御時の關白基通大臣、その後は、後京極殿ときこえ給ひし。いと久しくおはしき。此大臣は、いみじき歌の聖にて、院の上、同じ御心に和歌の道をぞ申し行はせ給ひける。文治の比千載集ありしかど、院いまだきびはに御坐しましゝかばにや、御製も見えざめるを、當帝位の御程にまた集めさせ給ふ。土御門内大臣二郎君、右衞門督通具といふ人をはじめにて、有家三位、定家中納言、家隆雅經などに宣はせて、昔より今までの歌をひろく集めらる。おの〳〵奉れる歌を、院の御前にて自みがき整へさせ給ふさま、いと珍しくおもしろし。この時も、先に聞えつる攝政殿とりもちて行はせ給ふ。おほかた古奈良御門の御代に、始めて右大臣橘朝臣勅を承りて、萬葉集を撰びしよりこのかた、延喜のひじりの御時の古今集、友則、貫之、躬恒、忠岑、天暦のかしこかりし御代にも、一條攝政殿いまだ藏人少將など聞えけるころ、和歌所別當とかやにて、梨壺の五人におほせられて、後撰集は集められけるとぞ。僻聞にやはべらん。その後、拾遺集は、花山法皇のみづから撰ばせ給へるとぞ。白河院位の御時は、後拾遺集、通俊治部卿うけたまはる。

内大臣―源通親

望、いと面白くなん。元久の比、詩に歌をあはせられしにも、取分きてこそは。

見わたせば山もとかすむみなせ川ゆふべは秋となに思ひけむ

茅葺の廊渡殿など、はる〴〵と艶にをかしうせさせ給へり。御前の山より瀧落されたる石のたゝずまひ、苔深き深山木に枝さし交したる庭の小松も、げに〳〵千世をこめたる霞の洞なり。前栽つくろはせ給へる比、人々あまた召して御遊などありける後、定家中納言、いまだ下﨟なりける時に奉られける。

あり經けんものと千年に舊りもせでわが君ちぎる峯のわか松

君が代にせき入るる庭をゆく水の岩こす數は千世も見えけり

今の御門の御諱は、爲仁と申しき。御母は、能圓法印といふ人の女、宰相君とて仕うまつられける程に、この御門うまれさせ給ひて後には、内大臣の御子になり給ひて、末には承明門院ときこえき。かの大臣の北方の腹にておはしければ、もとより後の親なるに、御幸さへ引き出で給ひしかば、まことの御女にかはらず。此御門も、やがてかの殿にぞ養ひ奉らせ給ひける。かくて建久九年三月三日御卽位。十月二十七日御禊。十一月二十二日は例の大嘗會なり。元久二年正月三日御冠したまひて、いとなまめかしく

あまれき云云―古今集の序によりて書けり

今日明日…とにや―僅に二十才にて御讓位ありたるは御窮屈なる帝位を免れて御氣樂に暮されむとてなるべし

なじき三年三月十三日に、法皇かくれさせ給ひにし後は、帝偏に世をしろしめして、四方の海なみ靜に、ふく風もえだを鳴さず、世治り民やすくして、普き御うつくしみの浪秋津島のほかまで流れ、しげき御惠筑波山のかげよりも深し。萬の道々にあきらけくおはしませば、國に才ある人おほく、昔に恥ぢぬ御代にぞありける。中にも敷島の道なんすぐれさせ給ひける。御歌かずしらず人の口にある中にも、

　奥山のおどろの下もふみわけて道ある世ぞと人に知らせむ

と侍るこそ、政事大事と思されける程著く聞えて、いといみじくやんごとなくは侍れ。建久九年正月十一日、第一の御子四になりたまふに、御位ゆづり申させ給ひておりゐ給ふ。御年十九。位におはします事十五年なりき。今日明日二十ばかりの御齡にて、いとまだしかるべき御事なれども、よろづ所せき御ありさまよりは、なか〳〵やすらかに、御幸など御心のまゝならんとにや。世を知しめす事は今もかはらねば、いとめでたし。鳥羽殿、白河殿なども修理せさせ給ひて、常に渡りすませ給へど、なほ又水無瀬といふ所に、えもいはずおもしろき院づくりして、しば〳〵通ひおはしましつゝ、春秋の花紅葉につけても、御心ゆく限世をひゞかして、遊をのみぞし給ふ。所がらも遙々と川にのぞめる眺

御禊—御身のけがれを祓ひ給ふ儀式

主基—大嘗會に神を祭る爲に建てらるる宮殿の名

兒生にもまみなど覺え給へり。いとらうたしとて、壽永二年八月二十日、御年四にて位に卽かせ給ひけり。内侍所神璽、寶劍は、讓位の時必ずわたる事なれど、先帝筑紫へ率ておはしにければ、此度始めて三種の神器なくて、めづらしき例になりぬべし。後にぞ内侍所神璽の御箱ばかり還り上りにければ、寶劍はつひに先帝の海に入り給ふ時、御身にそへて沈み給ひけるこそ、いと口惜しけれ。かくてこの御門、元暦元年七月二十八日御卽位。そのほどの事常のまゝなるべし。平家の人々いまだ筑紫に漂ひて、先帝と聞ゆるも御兄なれば、かしこに傳へ聞く人々の心地、上下さこそはありけめ、と思ひやられていとかたじけなし。同年の十月二十五日に御禊。十一月十八日に大嘗會なり。主基がたの御屛風のうた、兼光中納言といふ人、丹波國長田村とかやを、

神代より今日のためとや八束穗に長田の稻のしなひそめけむ

御門、いとおよすげて賢くおはしませば、法皇いみじう愛しと思さる。文治二年十二月一日、御書始せさせ給ふ。御年七なり。同六年女御まゐりたまふ。月輪關白殿の御女なり。立后ありき、後には宜秋門院と聞え給ひし御事なり。この御腹に、春花門院と聞え給ひし姫君ばかりおはしましき。建久元年正月三日、御年十一にて御元服し給ふ。お

○此卷は後鳥羽帝即位より建保六年御歌合までの事を記す

揭焉にも―目につくやうにも

第一 おどろのした

御門始り給ひてより、八十二代にあたりて後鳥羽院と申すおはしましき。御諱は尊成。これは高倉院第四の御子、御母は七條院と申しき。修理太夫信隆のぬしの女なり。高倉院御位の御時、后宮の御方に、兵衛督君とてつかう奉られし程に、忍びて御覽じ放たずやありけん、治承四年七月十五日に生れさせ給ふ。其年の春の比、建禮門院后宮と聞えし御腹の第一の御子、三になり給ふに位を讓りて帝はおり給ひにしかば、平家の一族のみいよ〳〵時の花をかざし添へて、花やかなりし世なれば、揭焉にもてなされ給はず。またの年養和元年正月十四日に、院さへ崩れさせ給ひにしかば、いよ〳〵位などの御望あるべくもおはしまさゞりしを、かの新帝平家の人々にひかされて、遙なる西の海にさすらへ給ひにし後、後白河法皇、御孫の宮たちわたし聞えて見奉りたまふ時、三の宮を次第のまゝに、と思されけるに、法皇をいといたう嫌ひ奉りて泣き給ひければ、めなむづかしとて、率て放ち給ひて、四の宮こゝにいませ、と宣ふに、やがて御膝の上に抱かれ奉りて、いと睦しげなる御氣色なれば、これこそ眞の孫におはしけれ。故院の

しるして、かの昔の面影にひとしからんとこそは、おぼすめれ、といらへて、
いまもまた昔をかけばます鏡ふりぬる代々のあとに重ねん

おろ〳〵—大略

世繼とか云云—榮花物語をいふ

そのかみの事は云々—昔の事は甚だ不確なれど之を語らでは後の事も明なり難きゆゑきれぎれに少し語らむ

目も耳も朧になりにて侍れば、ましていと怪しき僻事どもにこそは侍らめ。そもさやうに御覽じ集めけるふる事どもは、いかにぞ、といふ。いさ、只おろ〳〵見及びし物共は、水鏡といふにや。神武天皇の御代よりいと荒かにしるせり。その次には大鏡、文德の古より後一條の御門まで侍りしにや。又世繼とか四十帖の草子には、延喜より堀河の先帝までは、少しこまやかなる。又某の大臣の書き給へる、と聞き侍りし今鏡には、後一條より高倉院までありしなめり。まことや、いや世繼は、隆信朝臣の後鳥羽院の御位の御程までをしるしたり、とぞ見え侍りし。その後のことなん、いと覺束なくなりにける。覺え給へらん所々までも宣へ。こよひ誰も御伽せん。かゝる人に遭ひ奉れるも、しかるべき御契あらんものぞ、など語らへば、その昔の事はいみじうたど〳〵しけれど、誠に事のつづきを聞えざらんも、おぼつかなかるべければ、絶々に少しなん。ひが事ども多からんかし。そはさし直し給へ。いとかたはらいたきわざにぞ侍るべきかな。かのふるき事どもには準へ給ふまじうなんとて、

おろかなるこころや見えんます鏡ふるき姿にたちは及ばで

とわなゝかしいでたるもにくからず、いと古代なり。さらば、今宣はんことをも又書き

すげみたる―齒の脱け落ちて疎になりたるさま
おぼゝれて―ぼんやりして

らん。來し方ゆく先、例もあり難かりし世の騒にも、この御寺ばかりは恙なくおはします。なほやんごとなき如來の御光なりかし、など言ふも古代に雅かなり。年のほどなど聞くも珍しき心地して、かゝる人こそ昔物語もすなれ、と思ひいでられて、まめやかに語らひつゝ、昔の事の聞かまほしきまゝに、年の積りたらん人もがな、と思ひ給ふるに、嬉しきわざかな。少し宣はせよ。おのづから古き歌など書き置きたる物の片はし見るだに、その世にあへる心地するぞかし、といへば、すげみたる口うち微笑みて、いかでか聞えん。若かりし世に見聞き侍りし事は、こゝらの年比に、うば玉の夢ばかりだになくおぼゝれて、何のわきまへか侍らん、とは言ひながら、けしうはあらずあへなん、と思へる氣色なれば、いよ／＼いひはやして、かの雲林院の菩提講に參りあへりし翁の言の葉をこそ、假名の日本紀にはすめれ。又かの世繼が孫とか言ひし、つくも髮の物語も、人のもてあつかひぐさになれるは、御有樣のやうなる人にこそ侍りけめ。なほ宣へ、などすかせば、さは心うべかめれど、いよ／＼口すげみがちにて、そのかみは、げに人の齢も高く膽強かりければ、それに隨ひて魂も明にてや、しか聞えつくしけん。あさましき身は、いたづらなる年のみ積れるばかりにて、昨日今日といふばかりのことをだに、

鶴の…日—釋迦入滅の日、入滅の時拘尸那城の娑羅雙樹林盡く白く變じて白鶴の如くなりきとぞ

鳩の杖—老人の杖

増鏡

二月の中の五日は、鶴の林に薪盡きにし日なれば、かの如來二傳の御かたみのむつまじさに、嵯峨の清凉寺に詣でて、常在靈鷲山など心の中に唱へて拜み奉る。傍に八十にもや餘りぬらんと見ゆる尼一人、鳩の杖にかゝりて參れり。とばかりありて、たけく思ひ立ちつれど、いと腰いたくて堪へがたし。今宵はこの局にうちやすみなん。坊へ行きて御燈の事などいへ、とて具したる若き女房のつき〴〵しき程なるをばかへしぬめり。釋迦牟尼佛と度々申して、夕日の花やかにさし入りたるをうち見やりて、あはれにも山の端近く傾きぬめる日影かな。我身の上の心地こそすれとて、より居たるけしき、何となくなまめかしく、心あらんかしと見ゆれば、近く寄りて、何處よりまうで給へるぞ。ありつる人の歸り來んほど、御伽せんはいかゞ、など言へば、此邊近く侍れど、年の積にや、いと遙けき心地し侍る。あはれになん、と言ふ。さても何歳にかなり給ふらん、と問へば、いさ、よくも我ながら思ひ給へわかれぬ程になん。百歳にもこよなく餘り侍りぬ

大鏡終

かけし菖蒲—五月五日に根付の儘家々の軒頭に懸けしなり

まうけの君—儲君、東宮

もすさまじく思召すに、五月五日に内より、

諸共にかけし菖蒲のねをたえてさらに戀路にまどふころかな

御かへし、

方々に引きわかれつつ菖蒲草あらぬねをやはかけんと思ひし

との御もてなし、かたはらいたく煩しくて、久しく入らせ給はず。されど此宮おはしますこそは、頼しき事なれど、いまのみやに男御子うみ奉り給ひては、疑なきまうけの君と思召したる、理なり。よき女房おほく、出羽少將、小辨、小侍從などいひて、手かき歌よみなど、はなやかにていみじうて候はせ給ふ。

ときのまもこひしきことの慰まば世に二度もそむかれなまし

その時は、かやうなる事多く聞え侍りしかど、かず〲申すべきならず。後朱雀院位につかせ給うて、さはいへど花やかにめでたく世にもてなされて、しばしこそあれ、一の宮の方にゐさせ給ふ一品宮、后に立たせ給ふ。後三條院生れさせ給ひにしかば、さればこそ昔の夢は空しかりけりや。なからん末傳へさせ給ふべき君におはします、とぞ世つぎ申されし。いま后、弘徽殿におはしまし。春宮、梅壺におはしまして、先帝の一品宮、春宮に參らせ給ひて、藤壺におはしまして、女院入らせ給ひてひとつにおぼし奉らせ給へる宮だち、何れともおぼつかなからず見奉らせ給ふめでたさに、故院のおはしまさぬなげき、つきせず思召したりけり。關白殿に養ひ奉らせ給ひし故式部卿の宮の姫君、内に參らせ給ひて、弘徽殿におはしますべしとて、かねて后宮出でさせ給ひしこそ、いかにやすからず思召すらん、と世の人なやみ申ししか。あす罷出させ給はんとて、うへにのぼらせ給ひて、御門いかゞ申させ給ひけん。宮、

今はただ雲井の月をながめつつめぐり逢ふべき程も知られず

此宮に女宮兩所おはします。齋宮齋院にゐさせ給うて、いとつれ〲に宮達戀しく、よ

いらなく―甚しく

齋院―賀茂神社に奉仕する内親王

御思に―思は喪にあたるをいふ

を申すべきなめり。今も昔もしかぞ侍りし。二の舞の翁、ものまねびの翁、僧らが申さん事を、正教に準へて誰も聞しめせ、といへば、翁聞しめし所も侍るまじけれど、かくせちに勸め給へば、今はの際にをこのものに笑はれ奉るべきにこそ。見聞き侍りしは、後一條院、長元九年四月十七日うせさせ給へる。天下をしろしめす事二十一年。その程いらなく悲しきこと多く侍りき。中宮はやがて思召し歎きて、同じ年の九月六日うせさせ給ひにし。上東門院思召し歎きしかど、これにもおくれ奉らせ給ひて、一品の宮さきの齋院をこそはかしづき奉らせ給ひしか。院のおほん送葬の夜ぞかし、常陸國の百姓とかや。

かけまくも畏ききみが雲のうへに煙かからんものとやは見し

五月ばかり時鳥をきこしめして、女院、

ひとことをきみにつげなん郭公この五月雨はやみにまどふと

この御思に、源中納言顯基君出家し給ひて後、女院に申し給へりし。

身を捨てて宿を出でにし身なれどもなほ戀しきは昔なりけり

御かへし

二の舞―人眞似

たりけるに、人々處もなく、車もかちの人もありけん、稍待てど講師見えず。人々のいふを聞けば、今日のかうは夕つ方ぞあらん、などいふに、歸らんも罪えがましく思ふに、百年許にやあらんとみゆる翁のゐたる傍に、法師の同じ程に見ゆる人の中をわけて來て、この翁に、いとかしこく見奉りつけて、あながちに參りつるなり。そも〳〵おまへは、一年世繼の菩提講にて、物語りし給ひしに、あながちにゐよりてあどうち給ひし、と見奉るは、老法師のひがめか、といへば、男、さもや侍りけん、といふ。これはいで興ありて、その世繼にはまたや逢ひ給へりし、といへば、後三條院生れさせ給ひてなん、あひて侍りし、といへば、さて〳〵いかなる事か申されけん。そのかみごろも、見聞きも及ばず承り思う給へし。その後さま〴〵興ある事も侍るを、きかせ給ひけん。實にいまの世の事とり添へて宣はせよ。哀幾歳にならせ給ひ侍りぬらん、といへば、二の舞の翁にてこそは侍らめ。さはあれどきかん、と思召さば、すこぶる申し侍らん。まづ其年萬壽二年乙丑の年、今年己亥の年とやまうす。八十三年にこそなりにて侍りけれ。いでやなにばかり見聞きたる事のなさけも侍らず。かの世つぎの申されしことも、耳に止まるやうにも侍らざりき。といへば、法師いで〳〵さりとも八十三年の功德のはやしとは、けふの講

やうにこそ云々―昔咄は聞きづらきものなるにこの翁の物語のみはなほ話せかしと思はゝ

ひたる心地して、又々もいへかし、さしいらへごと問はましき事多く、心もと無きに、講師おはしましにたり、とたち騷ぎ罵しりし程に、かきさましてしかば、いとくちをしく、ことはてなんに、心つけて家はいづこぞと見せんと思ひしも、講のなからばかりが程に、その事となくどよみとて、かい罵しり出で來て、居込みたりつる人もみなくづれ出づる程に、まぎれて何れともなく見紛はしてくちをしさこそ、何事よりもかの夢の聞かまほしさに、居所も尋ねさせんとし侍りしかども、ひとり〳〵をだにえみつけずなりにしよ。

まこと〳〵、御門の母后の御もとに行幸せさせ給ひて、御輿よする事は、深草の御時よりありける事とこそ。それが前は下りて乘らせ給ひけるを、后宮、行幸のありさま見奉らん、只よせて奉れ、と申させ給ひければ、その度さておはしましけるより、今は寄せてのらせ給ふとぞ。

皇后宮の大夫殿書き繼がれたる夢なり。此年比聞けば、百日千日の講行はぬ家々なし。老いたるも若きも、後の世の修行をのみおぼし申すめるに、一日の講も行はず、唯つらく〳〵と徒に起臥してのみはべる罪深さに、或處の千日の講師の時になん行ふ、と聞えて參り

くちのまゆ—車前の庇のところ
ものけたまはる—物承る
聞かまうき

宮、皇太后宮より奉らせ給へりしぞありしや。大宮の一の車のくちのまゆに、香嚢かけられて、そらたき物焚かれたりしかば、二條の大路のつぶと烟みちたりし樣こそめでたく、今にさ許の見物またなし、などいへば、世繼、しか〳〵、いかばかり御心に入れて挑みさせ給へりしかは。それに女房の御心のおほけなさは、さばかりの事を簾おろして、わたり給ひにしはとよ、あさましかりし事ぞかしな。ものけたまはるくちに乘るべし、とおもはれけるが、しりにおしくだされ給へりける、とこそ承りしか。げに女房のからきことにせらるなれども、主の思召さん所も知らず、男はえしかあるまじくこそ侍れ。おほかたその宮には、心おぞましき人のおはするにや。一品の宮の御裳著に、入道殿より玉を貫き巖を立て、水をやり、えもいはず調ぜさせ給へる裳、唐衣をまづ奉らせ給ひて、中にもとりわきて思召さん人に給はせよ、と申させ給へりけるを、さりともと思ひ給ひける女房の給はらで、やがてその歎に病づきて、七日といふにうせ給ひにけるを、などいとさまで覺え給ひけん罪深く、ましていかに物妬の心深くいましけん、などいふに、あさましくいかでかく萬の事、御簾のうちまで聞くらんと恐し。かやうなる女翁などの故事するは、いとうるさく聞かまうきやうにこそおぼゆるに、是はたゞ昔に立ち返りあ

折ふしきりめ云々—そのよむべき時節機會をよく見てすべき事なり

と申したるを、いみじう感ぜさせ給ひて、おほうちき給はりて、肩にうちかくるまゝに、

白雲のこの方にしも下り居るはあまつ風こそ吹きてきぬらし

いみじかりしものかな。さばかりの者を近くめしよせて、勅祿給はすべき事ならねど、そしり申す人のなきも、君の重くおはしまし、又躬恒が和歌の道にゆるされたる、とこそ思ひ給へしか。かの遊女どもの歌よみ感じ給へるは、さぞ侍る。院にならせ給ひ、都離れたる所なれば、といふこそあまりにおよすげたれ。この侍とふ、圓融院の紫野の子の日の日、曾根好忠いかに侍りけることぞ、といへば、それ〳〵いと希有に侍りし事なり。さばかりの事に上下をえらばせ、和歌を賞ぜさせ給はん事、げにくちをしき事に侍れど、かくろへて優なる歌をよみ出さんだにいと無禮に侍るべき。ことに座にたゞつきに著きたりし、あさましく侍りし事ぞかし。小野宮殿、閑院大將殿などぞかし、ひきたてよひきたてよ、とおきてさせ給ひしは、躬恒が別祿給るにたとしへなき歌よみなりかし。歌いみじくとも折ふしきりめを見て仕うまつるべきなり。けしうはあらぬ歌よみなれど、からう劣りにし事ぞかし、といふ。侍こまやかにうちゑみて、古のいみじき事どもの侍りけんはしらず、某もの覺えて後不思議なりしことは、三條院の大嘗會の御禊の出車、大

> 鳥飼の院―攝津國下島郡
>
> 南院の七郎君―南院は是忠親王の家七郎君はその第七子源淸平朝臣
>
> あやしきぞ無き―一本「あらじとぞ聞く」とあり

大江の玉淵が女の聲よく容貌をかしげなれば、あはれがらせ給ひて、上に召しあげて、玉淵はいと勞ありて、歌などいとよく詠みき。この鳥飼といふ題を、人々のよむに、同じ心に仕うまつりたらば、まことの玉淵が子とは思召さん、と仰せ給ふ。承りてすなはち、

　深綠かひある春に遇ふときはかすみならねど立ちのぼりけり

などめでたがりて、帝より始め奉りて、ものかづけ給ふ程のこと、南院の七郎君に、うしろむべき事など仰せられける程など、委しうぞかたる。延喜の御時に古今撰ぜられしをり、貫之は更なり、忠岑や、躬恒などは、御書所にめされて候ひける程に、四月二日なりしかば、まだしのびねの比にて、いみじう興じおはします。貫之めしいでて歌仕うまつらしめ給へり。

　こと夏はいかが啼きけん郭公このよひばかりあやしきぞ無き

それをだにけやけき事に思ひ給へしに、おなじ御時に、御遊ありし夜、御前の御階のもとに、躬恒をめして、月を弓張といふ意は、なにの心ぞ、これがよし仕うまつれ、と仰せごとありしかば、

　てる月を弓張としもいふことは山邊をさしていればなりけり

かく世つぎ云々―この如く永く世を承けつぎて一門の繁榮を開く人はこの忠平公なりと

川尻―攝津國河邊郡

命だに―古今集離別の部に見え下句「何か別れのかなしかるべき」とあり

御相なりと申す。貞信公をば、あはれ日本國のかためやな。かく世つぎ門ひらく事、ただこの殿、と申したれば、われをあるが中に才なく心諂曲なり、とかくいふは恥かしきこと、と仰せられけるは。されどその儀に違はせ給はず、門をひらき榮花を開かせ給へば、なほいみじかりけり、と思ひ侍りて、又まかりたりしに、小野宮殿おはしましゝかば、え申さずなりにき。殊更に怪しき姿をつくりて、下﨟のなかに遠くゐさせ給へりしを、多かりし人の中よりのびあがり見奉りて、およびを指して物を申しゝかば、何事ならんと思ひ給へしを、後に承りしかば、貴臣よと申しけるなり。さるはいと若くおはします程なりかしな。いみじきあざれ事どもに侍れど、まことに是は德いたりたる翁どもにて候ふ。などか人の許させ給はざらん。又つたなき下﨟のさる事もありけるは、ときこしめせ。亭子院の川尻におはしましゝに、白女といふ遊女召して、御覽じなどせさせ給ひて、はるかに遠く候ふよし、歌に仕うまつれ、と仰せごとありければ、よみて奉りし。

濱千鳥飛び行くかぎりありければ雲たつ山をあはとこそ見れ

いといみじう愛でさせ給ひて、物かづけさせ給ひき。命だに心にかなふものならばも、この白女が歌なり。又鳥飼の院におはしましたるに、例の遊女どもあまた參りたるなかに、

影向―姿をあらはすこと

なりかし。かゝれば、前生にも戒をうけたもちて候ひける、と思ひ給ふれば、この生にも破らでまかりかへらん、と思ひ給ふるなり。今日この御堂に影向し給ふらん神明冥道たちも聞しめせ、とうち言ひて、したりがほに、扇うち使ひつゝ、見かはしたるけしき、ことわりに、何事よりも公私羨しくこそ侍りしか。さても〳〵、繁樹が年かぞへさせ給へ。たゞなるよりは年をしり侍らぬが口惜しきに、といへば、侍、いで〳〵とて、十三にておほき大殿に參りき、と宣へば、十ばかりにて、陽成院おりさせ給ふ年は、いますがりけるにこそ。これにて推し思ふに、あの世繼のぬしは、今十餘年が弟にこそあゝめれば、百七十には少あまり、六十にも及ばれにたるべし、など手を折りかぞへて、いとかばかりの御年どもは、相人などに相せられやせし、と問へば、させる人にも見え侍らざりき。ただ高麗人のもとに、二人つれて罷りたりしかば、二人長命と申しゝかど、いと斯許まで候ふべしとは、思ひかけ候ふべき事かは。他事問はん、とおもひ給へしほどに、昭宣公の君達三人おはしましにしかば、え申さずなりにき。それぞかし。時平の大臣をば、御かたちすぐれ、心たましひすぐれ賢くて、日本の固と用ゐんにあまらせ給へり、と相し申す。枇杷殿をばあまり御心うるはしくすなほにて、へつらひ飾たる小國にはおはせぬ

三寶―佛法僧

戒和尚―念佛授戒をする僧

けやけき命―すぐれて珍らしき長命

かうなり、かうなり。さらんをりは、かならず告げ給ふべきなり。杖にかゝりても必參りあひ申し侍らん、とうなづきあはす。たゞしさまでのわきまへおはせぬ若き人々は、そら物語する翁かな、と思すもあらん。わが心に覺えて、一言もむなしき事加はりて侍らば、この御寺の三寶、今日の座の戒和尚に請ぜられ給ふ佛菩薩を證とし奉らん。中にも、若うより、十戒の中に妄語をばたもちて侍る身なればこそ、かく命をばたもたれて候へ。今日この御寺のむねとそれを授け給ふ講の庭にしも參りて、あやまち申すべきならず。大方世の初は、人の命は八萬歳なり。それがやう〳〵滅しもていきて、百歳になる時に佛はいでおはしますなり。されど生死の定なき由を人に示したまふとて、猶今二十年をつゞめて、八十と申しゝ年入滅せさせ給ひにき。その年より今年まで一千九百七十三年にぞなり侍りぬる。釋迦如來滅し給ふを期にて、八十に究むべけれども、佛、人の命を不定なり、と見せさせ給ふにや。この比も、九十百の人おのづから聞え侍るめれど、この翁どもの命はまれなる事、甚深々々希有々々なりとは、これを申すべきなり。いと昔はかばかりの人侍り。神武天皇を始め奉りて、二十餘代までの間に、十代ばかりが程は、百歳百餘歳までは持ち給へる帝もおはしましたれど、末代には、けやけき命もちて侍る翁

あどをよううたせ給ふ―合槌を打つ

やしは子―玄孫

なさ残りて侍らん。それなりともおの〳〵宮殿ばら次々の人の御あたりに、人のうちきくばかりの事は、女房わらはべ申しつたへぬやうやは侍る。さればそれも不意に傳へ承らずしも候はず。されどそれをば、何とかは語り申さんずる。たゞ世にとりて、人の御耳とゞめさせ給ひぬべかりし昔の事ばかりを、かくかたり申すだに、いとをこがましげに御覽じおこする人もおはすめり。今日はたゞ殿の珍しう興ありげにおぼして、あどをよううたせ給ふに、はやされ奉りて、かばかりも口開けそめて侍れば、中々殘多く、又又申すべき事は期もなく侍るを、もし眞に聞召し果てまほしくば、駄一疋を給はせよ、はひ騎りて參り侍らん。かつは又御やどりに參りて、殿の御才學の程も承らまほしう思ひ給ふるやうは、いまだ年比かばかりもさしいらへし給ふ人に、對面給はらぬに、時々くはへさせ給ふ御ことばの、見奉る翁らがやしは子の程にこそは、と覺えさせ給ふに、この知しめし氣なることどもは、思ふにふるき御日記などを御覽ずるならんかし、と心にくく、下臈は、さばかりの才はいかでか侍らん。たゞ見聞き給へし事を心に思ひおきて、かく賢しがり申すにこそあれ。まこと人にあひ奉りては、おぼし咎め給ふ事も侍らん、と恥かしうおはしませば、老の學問にも承り明さまほしうこそ侍れ、といへば、繁樹も、唯

こころぎもなく——淺慮に

源氏の氏寺——東大寺

御簾の中ばかり云々——後宮の事のみはたしかならず

ればかくておはしますぞ、と思ひて、とばかり御前に候ふに、うち驚かせ給ふさまにて、御装束は果てぬにや、と仰せらるゝに、きかせ給はぬやうにてあらん、と思召しけるにこそ、と心得て立ちたまひにけり。げにかばかりの祝の御事、また今日になりて止らんも、忌忌しきに、やをら引き隱してあるべかりける事を、こころぎもなく申すものかな、といかに思召しつらん、と後にぞかの殿もいみじく悔やしがり給ひける。さる事なりかしな。されば、なでうことかはおはします。よきことにこそありけれ。又大宮のいまだ幼くおはしましける時、北政所ぐし奉らせ給ひて、春日に參らせ奉りけるに、おまへのものどもの參らせするゑたりけるを、にはかにつじ風の吹きまどひて、東大寺の大佛殿の御まへに落したりけるを、春日の御前なるものゝ、源氏の氏寺に取られたるをよからぬ事にや、とこれをもそのをり世の人申ししかど、長く御末榮え給ふは、吉相にこそはありけれ、とぞ覺え侍るな。夢も現もこれはよきこと、と人申せど、させる事なくて止むやう侍り。又かやうに怪だちて見給へ、聞ゆる事もかくよき事も候ふな。まことに世の中に、いくそばく哀にもめでたくも興ありて、承り見給へ集めたる事の、數知らずつもりて侍る翁どもとか人々思召す。やんごとなくも又くだりても、まぢかく御簾の中ばかりやおぼつか

わきあけに云々―闕腋半臂は尋常の袍の下に著るものにて闕腋の袍の下に著たるを見ずとなり

らんもむ―亂文、馬の乘り方の名

少しひかへつゝ所おき申しゝを、制せさせ給ひしかば、猶少しおそれ申してこそありしか。かしこく京の程は雨も降らざりしぞかし。閑院太政大臣殿の、西の七條より歸らせ給ひしをこそ、入道殿いみじう恨み申させ給ひけれ。堀河左大臣殿は、御社まで仕うまつらせ給ひて、御ひき出もの御馬ありき。枇杷殿宮、中宮とは、金づくりの御車にて、まうち君達のやんごとなきかぎりえらせ給へる御前具し申させ給へりき。御車のしりには、皇后宮の御めのと維經のぬしの御母、中宮の御めのと兼安實任ぬしの御母、おのおのこそ候はれけれ。殿の君達の、まだ男にならせ給はぬ童にて皆仕うまつらせ給へりき。又ついでなき事には侍れど、物怪と人の申しゝ事どもの、させる事なくてやみにしは、さきの一條院の御卽位の日、大極殿の御裝束すとて、人々集りたるに、高御座のうちに、髮つきたるものゝ頭の血うちはきたるを見つけたりける。あさましくいかゞすべき、と行事思ひあつかひて、斯許の事をかくすべきかはとて、大入道殿にかゝる事なん候ふ、と何がしのぬしして申させけるを、いと眠たげなる御氣色にもてなせ給ひて、物も仰せられねば、もし聞しめさぬにやとて、又御氣色給はれど、うちゆぶらせ給ひて、なほ御答なし。いと怪しくさまで御とのごもり入りたるとは見えさせ給はぬに、いかな

陵王、納蘇利―共に舞曲の名

試樂―舞の下稽古

半臂―袖短き服

祿を、これはいとしたゝかに御肩にひきかけさせ給ひて、いまひとかへり、えもいはず舞はせ給へりし。けふは又斯るべかりける業かな、とこそ覺え侍りしか。御師の、陵王はかならず御祿はすてさせ給ひてんぞ。同じさまにせささせ給はん、目なれたるべければ、さまかへさせ奉り給へるなりけり。心ばせまさりたり、とこそはいはれ侍りしか。女院かうぶり給はせしは、大夫殿をいみじくかなしがり申させ給へばとぞ。陵王の御師は給はらで、いと辛かりけり。それにこそ、北の政所すこしむづからせ給ひけれ。さて後にこそ給はすめりしか。かたのやうに舞はせ給ふとも、あしかるべき御年の程にもおはしまさず。わろし、と人申すべくも侍らざりしに、實にこそ二所ながら、この世の人と見えさせ給はで、天童などの降りきたる、とこそ見えさせ給ひしか。又この大宮の大原野の行啓は、いみじく侍りし事ぞや。雨の降りしこそいと口惜しう侍りしことよ。舞人には、たれたれそれ〱の君達などかぞへて、一の舞は、この關白殿君にこそはまはせ給ひしか。試樂の日、かいねりがさねの下襲に、黑半臂奉りたりしは、珍しく侍りしものかな。わきあけに人の著給へりしをまだ見侍らざりしかば、行啓には、入道殿某といふ御馬に奉りて、御隨身四人とらんもむにあげさせ給へりしは、輕々しかりしわざかな。公忠が

題名僧―經の題名を讀み上ぐる僧

いはれたうばんは―言はれ給はんは

故女院―東三條女院詮子

堂の北の廂にこそは、題名僧座はせられたりしか。その料にその御堂の廂はいれられたるなり。わざとの僧膳はせさせ給はで、湯漬ばかり給ふ。行事二人に五十人づつ分たせ給ひて、僧座せられたる御堂の南面に、鼎をたてゝ、湯を沸らかしつゝおものを入れて、いみじう熱くて參らせわたしたるを、溫くこそはあらめ、と僧たち思ひて、さふ〲と參りたるに、はしたなき際にあつかりければ、北風はいと冷たきに、さばかりにはあらで、いとよく參りたる御房たちもいまさうじけり。後に北向の座にて、いかに寒かりけんなど、殿の問はせ給ひければ、しか〲候ひしかば、こよなく溫りて、寒さも忘れ侍りにき、と申されければ、行事たちをいとよし、と思召したりけり。ぬるくて參りたりとも、別の勘當などあるべきにはあらねど、殿を始め奉りて、人にほめられゆく末にもさこそありけれ、といはれたうばんは、只なるよりは惡しからず、よき事ぞかし。いで又故女院の御賀に、この關白殿陵王、春宮大夫殿、納蘇利舞はせ給へりし。めでたさはいかにぞ。りようわうは、いとけだかくあてに舞はせ給ひて、御祿給はらせ給ひても、舞ひすてゝ、知らぬさまにて、入らせ給ひぬる美しさ、めでたさにならぶことあらじ、と見參らするに、納蘇利の、いとかしこく、またかくこそはありけれ、と見えて、舞はせ給ふに、御

清照法橋―従二位高階成忠卿の男

魂ある事―智慧才覺ある事

れば、人々も御けしきかはり、院の御前にもすこし涙ぐみおはしましけり、とぞ後に承りし。神泉の丑寅の隅の垣の内にて見給へしなり。又若く侍りし折も、佛法うとくて、世罵る大法會ならぬには、まかりあふ事もなかりしに、まして年積りては、動きがたく候ひしかど、參河入道の、入唐の馬のはなむけの講師、清照法橋のせられし日こそまかりしか。さばかり道心なきものゝ、始めて心おこる事こそ候はざりしか。まづは神分の心經表白のたまひて、かねうち給へりしに、許多集りたりし萬人、さとこそ泣きて侍りしか。それは道理の事なり。又清範律師の、犬の爲に法事しける人の講師に請ぜられて行くを、清照法橋、同じ程の說法者なれば、いかゞする、と聽くにかしらつゝみて、誰ともなくて聽聞しければ、たゞ今や過去聖靈は、蓮臺の上にて、ひよと吠え給ふらん、と宣ひけるを、さればよ。こと人かく思ひよりなましや。猶かやうの魂ある事は、すぐれたる御房ぞかし、とこそほめ給ひけれ。實に承りしに、をかしくこそ候ひしか。されば又聽聞の衆ども、さゝと笑ひてまかりかへりにき。いと輕々なる往生人なりやな。むげによし無しごとに侍れど、人のかど／＼しく魂あることの、興ありて優に覺え侍りしかばなり。法成寺の五大堂供養、しはすには侍らずやな。きはめて寒かりし比、百僧なりしかば、御

うつしおきたる馬—移鞍を置たる馬

よにあらじ—よもやさる事はあらじ

陪從—伶人の屬

求子—東遊の曲名

勢なるが來れば、誰ればかりならん、と怪しく思ひあへるに、頭中將、下襲のしりはさみて、うつしおきたる馬に乘りておはするに、院のおはしますなりけりと見て、車どもゝかち人も手まどひし立ち騷ぎて、いとものさわがし。二條よりは少し北によりて、冷泉院の築地づらに御車たてつ。御前どもおりて候ひ並み給ふ程に、内より見物しにひき續き出で給ふ上達部たちの見給ふに、大路のいみじく罵れば、怪しくて何事ぞ、と問はせ給ふに、院のおはしますなり、と申しけるを、世にあらじと思すに、頭中將殿もおはします、と言ふにぞ。まことなりけり、と覺えつゝ、御車よりいそぎ下りつゝ、皆參り給ひし。大臣二人は、左右の御車の輻うちおさへて立たせ給へり。東三條殿、一條左大臣殿よ。さて納言以下は、轅のこなたかなたに候ひ給ふ。中々うるはしからん事の作法よりも、めでたく侍りしものかな。舞人、陪從は皆のりて渡るに、時中源大納言の、いまだ大藏卿と申しゝをりぞ、使にておはしし。御車の前ちかく立ち止まりて、求子を袖のけしきばかり仕うまつり給ひて、ついゐ給ひしまゝに、御片袖を顏に押しあてゝ候ひ給ひしかば、香なる御扇をさし出ださせ給ひて、早うとかゝせ給ひしかばこそ、すこしおしのごひて立ち給ひしか。すべてさばかり優なる事また候ひなんや。げに哀なることの樣な

小野宮―實資

藏人判官代―禁中の藏人にて院の判官代を兼ねたる人

御法師子は、廣澤の僧正勸修寺の僧正二所こそはおはしましゝか。大方その程には、方々につけつゝ、いみじき人々のおはしましゝものをや、と言へば、この比もさやうの人はおはしまさずやはある、と侍のいへば、この四人の大納言たちよな。齊信、公任、行成、俊賢など申す君たちは又さらなり。さて又多くの物見し侍りし中にも、花山院の御時の石清水の臨時祭、圓融院の御覽ぜしばかり、興ある事さぶらはざりき。その折の藏人頭にては、今の小野宮の右大臣殿ぞおはしましし。御前の事果てけるまゝに、院は徒然におはしますらんかし、と思召して、參らせ給へりければ、さるべき人も候ひ給はざりけり。藏人判官代ばかりして、いと〳〵さうざうしげにておはします。かく參らせ給へるを、いと時よう思召したる御氣色を、いと哀に心ぐるしく見參らせさせ給ひて、もの御覽ぜよ、など御氣色たまはらせ給へば、俄には如何あるべからん、と仰せられけるを、かくて實資候へば、又殿上にさぶらふ男ども許にてあへ侍りなん、とそゝのかし申させ給ふ。御厩の御馬どもめして、候ひしかぎり、御前仕うまつり、頭中將は束帶ながら參り給ふ。堀河院なれば、程近くいでさせ給ふに、物見車ども、二條大宮の辻に立ちかたまりて見るに、布衣、衣冠なる御前したる車の、いみじく人はらひ、なべてならぬ

冬の御扇を云云―檜扇の骨を數へて數をとりしなり

あら田に生ふる―風俗歌なりこの歌を普通の歌の樣に歌ひたるなり

とみくさの花云々―荒田の曲中の句

所にはおはしまさで、わが御殿の前わたらせ給ひし程に、ひき出でて具し申させ給ひしなり。この生には御珠數とらせ給ふ事はなくて、只毎日に南無八幡大菩薩、南無金峯山金剛藏王、南無大般若波羅密多心經、と冬の御扇を數にとりて、一百八遍づつぞ念じ申させ給ひける。それより外の御勤せさせ給はず。四條の太后宮にかくなんと申す人のありければ、聞せ給ひて、なつかしからぬ御本尊かな、とぞ仰せられける。この殿こそあら田に生ふるをば、なべてのやうにうたひかへさせ給ひけれ。一條院の御時、臨時祭の御前の事はてゝ、上達部たちの物見にいで給ひしに、外記のすみの程過ぎさせ給ふとて、わざとはなくて、口すさびのやうに歌はせ給ひしが、中々優に覺え侍りし。とみくさの花、手につみいれて宮へ參らんの程を、例のには變りたるやうにうけたまはりしかば、遠き程に、老のひが耳にこそはと思ひ給へしを、この按察大納言殿も、しかぞ宣はせける。殿上人にてありしかば、遠くて善くも聞かざりき。かはりたりしやうの珍しうさまかはりて覺えしは、あの殿の御事なりしかばにや。又も聞かまほしかりしかど、さもなくて止みにしこそ、今に口惜しく覺ゆれ、とこそ宣ふなれ。この大臣殿たちの御弟の大納言優におはしましき。おほかた六條宮の御子どもの、皆めでたくおはしましゝなり。

所―寛大なる

はしまさゞりしなり。弟殿は、密事には無才にぞおはしましゝかど、若かに愛敬づき、なつかしき方はまさらせ給へりしかばなんめり、とぞ人申しし。父宮は出家せさせ給ひて、仁和寺におはしましゝかば、六條殿修理大夫にておはしましし程なれば、仁和寺へ參らせ給ふ往復の道を、一度は東の大宮より上らせ給ひて、一條より西ざまにおはしまし、又一度は西の大宮より下らせ給ひて、二條より東ざまなど過ぎさせ給ひつゝ、内裏を御覽じて、破れたる所あれば、修理せさせ給へり。いと手きゝたる御心ばへなりな。また一條殿の仰せられけるは、親王たちの中にて、世の案内も知らず、たつきなかりしかば、さるべき公事のをりは、人よりさきに參り、事はてゝも最末にまかり出でなどして、見習ひしなり、とぞ宣はせける。八幡の放生會には、御馬奉らせ給ひしを、御使などにも淨衣を給はせ、御自も淸まはらせ給ひしかばにや、おまへ近き木に、山鳩の必ずゐて、ひき出づるをりに飛びたちければ、かひありと喜び興ぜさせ給ひけり。御心いとうるはしくおはします人の、信をいたさせ給ひしかば、大菩薩のうけ申させ給へりけるにこそ。一年の旱の御祈にこそ、東三條殿の御加茂詣せさせ給ひしには、この一條殿も參らせ給ひき。大臣にならせ給ひぬれば、さる例なけれども、天下の大事なりとて、御いでたちの

嘉辰令月—朗詠に嘉辰令月歡無レ極、萬歳千秋樂未レ央
席田—催馬樂の曲名
ゆるぎたる

さはいへども世は暮れ塞がりたる心地せしものかな。世の衰ふる事もその御時よりなり。小野宮殿も一人と申せど、よそ人にならせ給ひて、若くはなやかなる御をぢたちにうちまかせ奉らせ給ふ。又御門は申すべきにあらず。あはれに候ひける事は、村上うせおはしまして、またの年、小野宮に人々參り給ひて、いと臨時客などはなけれど、嘉辰令月などうち誦せさせ給ふついでに、一條左大臣殿、六條殿など拍子とりて、席田うちいでさせ給ひけるに、あはれ先帝おはしまさましかばとて、御笏もうちおきつゝ、あるじ殿を始め奉りて、事いみもせさせ給はず。うへの御衣どもの袖ぬれさせ給ひにけり。さる事なりや。何事も聞きしり見わく人のあるはかひあり、無きはいと口をしきわざなり。今日かゝる事ども申すも、わどのゝきゝわかせ給へば、いとゞいま少しも申さまほしきなり、と言へば、侍もあまえたりき。藤氏の御事をのみ申し侍るに、源氏の御事も珍しう申し侍らん。この一條殿、六條左大臣殿たちは、六條の一品式部卿宮の御子どもにおはします。寛平の御孫なりとばかりは申しながら、人の御ありさま有職におはしまして、いづれをも村上帝ときめかし申させ給ひしに、今すこし六條殿をば愛し申させ給へりけり。兄殿は、いと餘うるはしく、公事より外の事多分には申させ給はで、ゆるぎたる所のお

あからめせさせ侍りなんや—他の男に心をうつさせんや

あとかばれ—子孫をいふ

玄上—皇室御祕藏の琵琶の名

青海波—琵琶の曲名

うにすきおき候ひしものよ、心にもあらず。世繼が家にはまうで來よりては、はぢにして、如何ばかりのいさかひ侍りしかど、さばかりにてかけそめてあからめせさせ侍りなんや。さる程にゐつき候ひては、翁をまた一夜も外目せさせ侍らぬをや、とほゝゑみたる口つきいとをこがまし。又此女ども世繼もしかるべきにて侍りけるぞ。かの女二百歳ばかりになりにて侍り。兼輔中納言、衆樹宰相も、今まであとかばねだにいませず。いかゞし侍らまし。世繼も今樣の若き女ども更にかたらはれ侍らじ、と言へば、かゝる命ながのいきあはず侍らましかば、いと怪しう侍らましとて、心よく笑ふ。げにと聞えてをかしくもあり。語るも現の事とも覺えず。あはれ今日ぐして侍らましかば、女房たちの御耳に今少し止る事どもは聞かせ給ひてまし。私の賴む人にては、兵衞内侍の御親をぞし侍りしかば、内侍のもとへは時々まかるめりき、と言ふに、とは誰にか、といふ人のあれば、いでこの高名の琵琶ひきよ。相撲の節に玄上給はりて、御前にて青海波仕うまつられたりしは、いみじかりしものかな。博雅三位などだに、おぼろげにはえならし給はざりけるに、これは承明門まで聞え侍りしかば、左の樂屋にまかりて承りしぞかし。かやうにものの榮うべ〳〵しき事どもよ、天暦の御時までなり。冷泉院の御代になりてこそ、

胡桃色—表は香色裏は青色

頭—藏人頭

物きたなうも候はざりけるにや、やんごとなき公達も、御覧じいれて、兼輔の中納言、良岑、衆樹の宰相の御文などももちて侍るめり。中納言は、みちのくに紙にかゝれ、宰相のは胡桃色のうすやうにてぞ侍るめる。この宰相ぞかし、五十までさせる事なく、ほとほとおほやけに捨てられたるやうにていますかりけるが、八幡に參り給ひたるに、雨いみじうふる。石淸水の坂のぼり煩ひつゝ參り給へるに、御前の橘の木のすこし枯れて侍りけるに立ち寄りて、

千早振かみのおまへの橘ももろきもともに老いにけるかな

とよみ給へば、神聞きあはれびさせ給ひて、橘もさかえ、宰相も思ひかけず頭になり給ふとこそは承りしか、と言へば、侍、加茂の御前にとかや、はるかの世の物語にわらはべもぞし侍るめるは、と應ふれば、さもや侍りけん、程へてひがごとも申し侍らん。宰相をば見奉らざりしかど、人となりてこそ尋ねうけ給はれ、といらふ。侍、そはさなり。其宰相は五十六にてぞ宰相になり、左近中將かけてこそいませしか。その折は何とも覺え侍らざりしかど、この比思ひ出で侍れば、見苦しかりける事かな、と思ひ侍る。此侍、いかでさる有職をば、物げなき若人にてはとりこめられしぞ、と問へば、さればこそさや

の前にてかきくもりあやめもしらぬ大空にありどほしをば思ふべしやはとよめるをいふ

ひとめぐり　一十二年

高き宮仕などもし侍らず。若くよりこの翁にそひて候ひにしかば、はかぐ〵しき事をも見給へぬものをば、と應ふれば、いづれの國人ぞ、と問ふ。陸奥國安積の沼にぞ侍りし、といふ。いかで京には來しぞ、と問へば、その人とはえしり奉らず。歌よみ給ひし北方おはせし。守の御任にぞのぼり侍りし、といふに、中務君にこそと聞くもをかしくなりぬ。いといたきことかな。北方をたれとか聞えし。よみ給ひけん歌は覺ゆや、といへば、その方に心もえで覺え侍らず。たゞのぼり給ひしに、逢坂の關におはして、よみ給へりし歌こそ、所々おぼえ侍れとて、

　都には待つらんものを逢坂の關まできぬと告げややらまし

など、いとたどく〵しげに語るさま、まことに男にたとしへなし。繁樹、此人をば人とおぼえずとよ。さやうの方は覺ゆらんものぞ。世間魂はしも、いとかしこく侍るを、とり所にて、え去りがたく覺え侍るなり、といふに、世繼、いでこの翁の女人こそ、いとかしこく物は覺え侍れ。今ひとめぐりがこのかみにて候へば、見給へぬ程の事なども、あれは知りて侍るめり。染殿の后の宮のひすましに侍りけり。母もかんの刀自にて仕うまつりければ、幼くより參りかよひて、忠仁公をも見奉りけり。わらはべがたちの程の、いと

ぞくかう—辱詬恥辱

承香殿の女御—式部卿重明親王の女徽子女王

ありどほしをば云々—紀貫之和泉國蟻通明神

とありけるに、あやしく思召されて、何者の家ぞ、と尋ねさせ給ひければ、貫之のぬしの御女のすむ所なりけり。遺恨の業をもしたりける哉とて、あまえおはしましける。繁樹、今生のぞくかうは、是や侍りけんかし。さるは思ふうなる木もて參りたりとて、衣被けられたりしも、からくなりにきとて、細かに笑ふ。繁樹、又いと切に優しく思ひ給へし事は、この同じ御時の事なり。承香殿の女御と申しゝは、齋宮の女御よ。帝久しく渡らせ給はざりける秋の夕暮に、琴をいとめでたく彈き給ひければ、いそぎ渡らせ給ひて、御傍におはしましけれど、人や有るとも思したらで、せめて彈き給ふをきこしめせば、

　秋の日のあやしきほどの夕暮に荻吹く風のおとぞきこゆる

と彈きたりし程こそせちなりしか、と御集に侍るこそいみじう候へ、と言ふは、あまり忝しやな。或人城外やし給へりし、といへば、遠國にはまからず。和泉國にこそ貫之のぬしの御任に下りて侍りしか。ありどほしをば思ふべしやは、と詠れたりし旅のともにも候ひき。雨の降りしさまなど語りしこそ、ふる草子にあるを見れば、程へたる心地し侍るに、昔にあひにたる心地してをかしかりしか。この侍も、いみじう興じて、繁樹が女どもこそ、今少しこまやかなることどもは語られめ、と言へば、われは京人にても侍らず、

きんち——汝

らせ給ひて、いみじくしほたれさせ給ひて、

呉竹の我が世は事になりぬともねは絶えせずぞ猶なかるべき

まことにこそ悲しく哀に承りしか。村上帝はた申すべきならず。なつかしうなまめきたる方は、延喜にもまさり申させ給へり、とこそ人申すめりしか。我をば人は如何いふなる、と人に問はせ給ひけるに、寛になんおはしますと世にはまうす、と奏しければ、さては褒むるなゝなり。王のきびしくなりなば、世の人いかが堪へん、とこそ仰せられけれ。いとをかしう哀に侍りし事は、この天暦の御時に、清涼殿の御前の梅の木の枯れたりしかば、求めさせ給ひしに、何がしのぬしの藏人にていますかりし時、承りて、若きものどもはえ見しらじ。きんちもとめよ、と宣ひしかば、ひと京まかりありきしかども、侍らざりしに、西の京のそこ〳〵なる家に、色濃く咲きたる木の容態美しきが侍りしを、掘り取りしかば、家あるじの木にこれ結びつけて持て參れ、と言はせたうびしかば、あるやうこそはとて、持て參りて候ひしを、なにぞとて御覽じければ、女の手にて書きて侍りける。

勅なればいともかしこし鶯のやどはと問はばいかがこたへん

ますとこそは、いはれさせ給ひしかども、將門が亂など出できて、恐れ過ぐさせおはしましょ程に、やがてかはらせ給ひにしぞかし。その程の事こそいと怪しう侍りけれ。母后の御もとに行幸せさせ給へりしを、かゝる御有樣の思ふやうにめでたく嬉しき事、など奏せさせ給ひて、今は東宮ぞかくて見聞えまほしき、と申させ給ひけるを、心もとなくいそぎ思召す事にこそありけれとて、程もなく讓り聞えさせ給ひけるに、后宮は、さも思ひても申さゞりし事を、たゞ〳〵末の事をこそ思ひしかとて、いみじく歎かせ給ひけり。さておりさせ給ひて後、人々の歎きけるを御覽じて、院より后宮に聞えさせ給へりし。國讓の日、

日の光いでそふ今日のしぐるるはいづれの方の山邊なるらん

后宮の御かへし、

白雲のおりゐる方やしぐるらんおなじみ山のゆかりながらに

などぞ聞え侍りし。院は、數月綾綺殿にこそはおはしましょか。後には少し悔い思召す事ありて、位にかへりつかせ給ふ御祈などせさせ給ひけりとあるは、まことにや。御心いと艶しくおはしましょ。御心地重くならせ給ひて、太皇太后宮の幼くおはしますを見奉

に入る

わびしら――わびしげ

山のかひ――峽を效にいかけたり

綾綺殿――仁壽殿と溫明殿との間宜陽殿の北にあり

息所―時平公の女褒子宇多帝の御息所

水ひきの歌―後撰集に入る

わびしらの歌―古今集

子の、七歳にて舞せさせ給へりしばかりの事こそ侍らざりしか。萬人しほたれぬ人侍らざりき。あまり御容の光るやうにし給ひしかば、山の神めでて、とり奉り給ひてしぞかし。その御時に、いと面白き事ども多く侍りきや。おほかた申し盡くすべきならず。まづ申すべき事をも、たゞ覺ゆる事に從ひて、しどけなく申さん。法皇のところ〴〵修行あそばせ給ひて、宮、瀧御覽ぜし程こそいみじう侍りしか。そのをり菅原大臣のあそばしたりし和歌、

　水ひきのしらいとはへて織るはたは旅の衣にたちやかさねん

大井の御幸も侍りしぞかし。さて又御幸ありぬべき所、と申させ給ふ。事のよし奏せんとて、一條大臣ぞかし。

　おほはらや紅葉の色もこころあらば今一度のみゆきまたなん

あはれ優にも候ひしかな。さて行幸にあまたの題たまはりて、やまと歌つかうまつりしなかに、猿叫峽、躬恒、

　わびしらに猿ななきそ足曳の山のかひある今日にやはあらぬ

その日の序題は、やがて貫之のぬしこそは仕うまつりしか。さて又朱雀院も優におはし

鷹のものは―鷹の糞
交野の鳥―久世野は山城久世郡交野は河内國交野郡
富小路の御

ひふれにくきものなり。さて我いかでか文月なが月に死せじ。相撲の節、九日の節の止らんがくちをしきに、と仰せられけれど、九月にうせさせ給ひて、九日の節はそれより止りたるなり。その日左衛門陣の前にて、御鷹ども放たれしは、哀なりしもの哉。頓にこそ飛び退かざりしか。公忠辨をば、大方の事にとりても、やん事なきものに思召したりしなかにも、鷹のかたざまにはいみじう興ぜさせ給ひしなり。日々に政事を勤め給ひて、馬をいつこにぞや立て給ひて、事果つるまゝにこそ、中山へはいませしか。官のつかさの辨曹司の壁には、その殿の鷹のものはいまだ附きて侍らん。久世の鳥、交野の鳥の味はまゐり知りたりき。かたへは空言を宣ふにこそ心見奉らんとて、みそかに二所の鳥をつくりまぜて、しるしをつけて人の參りたりければ、聊かとり違へず、これは久世の、これは交野のなり、とこそ參りしりたりけれ。かゝりければ、ひたぶるの鷹飼にて候ふものゝ、殿上に候ふこそ見ぐるしけれ、と延喜に奏し申す人のおはしければ、公事を粗略にして、狩をのみせばこそ罪はあらめ。一度政をもかゝで、公事をよろづ勸めて後に、ともかくもあらんはなでふ事かあらん、とこそ仰せられけれ。いで又いみじく侍りし事は、やがて同じ君の大井河の行幸に、富小路のみやす所の御腹の御

伽藍―梵語、精舍又ば衆園の意、寺を言ふ
六條の式部卿宮―宇多帝の第九皇子敦實親王

て思ふ給へし罪も今にうせ侍らじ。今日この伽藍にて懺悔仕うまつりてん、となり。六條式部卿宮とまうしゝは、延喜帝の一つ腹の御兄弟におはします。野の行幸供奉せさせ給ひしに、この宮仕うまつらせ給ふべかりけれど、京の程遲參せさせ給へりしかば、桂の里にぞ參りあはせ給へりしかば、御輿止めて先立て奉らせ給ひしに、某といひし犬飼の、犬のまへ足をふたつながら肩に引きこして、ふかき河の瀨わたりしこそ、行幸に仕うまつり給へる人々、さながら興じ給はぬなく、御門も興あり氣におぼしたる御氣色にこそ、見えおはしましゝか。さて山口いらせ給ひし程に、しらせうといひし御鷹の、鳥をとりながら、御輿の鳳のうへにとび參りてゐて候ひし。やう〳〵日は山の端に入りがたに、光のいみじうさして、山の紅葉錦を張りたる樣なるに、鷹の色はいと白くて、雉は紺青のやうにて、羽うち廣げてゐて候ひし程は、まことに雪すこし打ちりて、折節とり集めて、さる事やは候ひしとよ。身にしむ許思ひ給へしかば、いかに罪え侍りけんとて、彈指はた〳〵とす。大かた延喜帝のつねに笑みてぞおはしましける。その故はまめだちたる人には物言ひにくし、打解けたるけしきにつきてなん、人は物は言ひよき。されば大小事きかんが爲なり、とぞ仰事ありける。それさる事なり。氣憎き顏には物言

集—貫之の歌集

法皇—宇多帝

おもたゞしうこそは—面目ある心地す

集にもかきて侍るぞかし、と言へば、又繁樹、この翁もそのぬしの申されつるがごと、くだくだしき事は申さじ。同じ事のやうなれど、寛平延喜などの御讓位の程の事などは、いとかしこく確かに覺え侍るをや。伊勢君の、弘徽殿の壁に書きつけ給へりし歌こそは、そのかみの哀なる事、と人申ししか。

別るれどあひもおもはぬ百敷を見ざらんことやなにか悲しき

法皇の御かへし

身一つのあらぬ許をおしなべてゆき返りてもなどか見ざらん

といへば、傍なる人、法皇のかゝせ給へりけるを、延喜の後に御覽じつけて、傍に書きつけさせ給へり、とも承るは、何れか眞ならん。同じ御門と申せど、其御時に生まれあひて候ひけるは、あやしの民の竈までやんごとなくこそ。大小寒のころほひ、いみじう雪ふり冴たる夜は、諸國の民百姓いかに寒からんとて、御衣をこそ夜殿よりなげ出しおはしましければ、おのれらまでも惠みあはれびられ奉りて侍る身、とおもたゞしうこそは。されば其世に見給へし事は、猶末までもいみじきこと、と覺え侍るぞ。人聞召せ。この座にて申すは、憚ある事なれど、かつは若く候ひし程、いみじと身にしみ

の一時間）
程

御格子參らず—御格子を開けさせ給はぬなり

將門が亂—天慶二年

なれば、中々申さじ。しろしめしたらん。粗略に申すべきにも侍らず。さて後六年ばかりありてや、賀茂の臨時祭はじまりけん。位につかせおはしましゝ年とぞ覺え侍る。その日の酉の日にて侍りければ、やがて霜月のはての酉の日にては侍るぞ。始めたる東遊歌、敏行中將ぞかし。

　千早振かものやしろの姫小松よろづ代までも色はかはらじ

古今に入りて侍り。みな人しろしめしたる事なれど、いみじくよみ給へるぬしかな。今に絶えずひろごらせ給へる御末とか。御門と申せど、かくしもやおはします。八幡の臨時祭、朱雀院の御時よりぞかし。朱雀院うまれさせ給ひて三年はおはします。殿の御格子參らず。夜晝火をともして、御帳のうちにておほしたて奉らせ給ふ。北野におぢ申させ給ひて、天曆の御門をば、いとさも守り奉らせ給はず。いみじき折節に生れさせ給へるぞかし。朱雀院生れおはしまさずば、藤氏の御榮いとかうしも侍らざらまし。さて位につかせ給ひて、將門が亂いで來て、その御願にてとぞ承りし。その東遊のうた、貫之のぬしぞかし。

　松もおひまたもこけむす石淸水ゆくすゑとほく仕へまつらん

大殿—關白基經

時中ばかり—半時へ今

の洞院よりのぼりまかるに、大炊の御門より西ざまに、人々のさゝと走れば、怪しくて見候ひしかば、わが家の程にしも、いと暗うなるまで人立ち込みて見ゆるに、いとゞ驚かれて、もし燒亡かと思ひて、かみを見あぐれば烟もたゝず、さは大きなる追捕かな、とかた〴〵に心も無きまでまどひ罷りしかば、小野宮の程にて、上達部の御車や、鞍置したる馬ども、冠袍衣など著たる人々などの見え侍りしに、心えず怪しくて、何事ぞ〳〵と人ごとに問ひ候ひしかば、式部卿宮、御門にゐさせ給ふとて、大殿をはじめ奉りて、みな人參らせ給へるなりとて、急ぎまかりしなどぞ、物覺えたる事にて見給へし。又七つばかりにや、元慶六年ばかりにや侍りけん、式部卿宮の侍從と申しゝ寛平天皇、つねに狩をこのませおはしまして、霜月の二十餘日の程にや、鷹狩に、式部卿宮より出でおはしましゝ御供にはしり參りて侍り。賀茂の堤のそこ〳〵なる處に、侍從殿、鷹つかはせ給ひて、いみじ興にいらせ給へるほどに、俄に霧たち、世間もかい暗がりて侍りしに、東西もおぼえず、暮のいぬるにやと覺えて、藪のうちに倒れ伏して、わなゝき惑ひ候ふほどに、時中ばかりや侍りけん。後にぞ承れば、賀茂明神の顯れおはしまして、侍從殿にもの申させおはしましける程なりけり。そのことは、皆世に申しおかれて侍る

大鏡　巻之八

いと〳〵あさましく珍かに盡きもせず二人語ひしに、この侍、いと〳〵興あることをもうけ給はるかな。さても物の覺えはじめは何事ぞや。それこそ先聞かまほしけれ。語られよ、と言へば、世繼六七歳より見聞き侍りし事は、いとよく覺え侍れど、その事となきは證のなければ、もちゐる人も候はじ。九つに侍りし時の大事を申し侍らん。小松帝の親王にておはしましゝ時の御所は、みな人しりて侍り。おのが親の候ひし處、大炊の御門よりは北、町尻よりは西にぞ侍りし。されば、宮の傍にて、常に參りて遊び侍りしかば、いと閑散にてこそおはしましゝか。二月の三日、初午と言へど、甲午最吉日、つねよりも世擧りて、稻荷詣にのゝしりしかば、父の詣で侍りしともに從ひ參りて侍る。さは申せど、幼きほどにて、坂のこはきを上り侍りしかば、困じてえその日のうちに還向仕らざりしかば、父が、やがてその御社の禰宜大夫がうしろみ仕うまつりて、いとうるさくて候ひし宿にまかり寄りて、一夜はやどりして、又の日かへり侍りしに、東

えたれ。一日かた時生きて世にめぐらふべき心地もし侍らざりしかど、かくまで候ふは、愈々ひろごり榮えおはしますを、見奉り悦び申さんとに侍るめり。さて又の年五月二十四日こそは、冷泉院は誕生せしめ給へりしか。それにつけて、いとゞこそ口惜しき折のうれしさは、はかりもおはしまさざりしかな、と言へば、世繼もしか〳〵と心よく思へるさまおろかならず。朱雀院、村上などのうちつゞき生れおはしましゝは、又いかゞなどいふほど、あまりに恐しくぞ。また世繼が思ふ事こそ侍れ。便なき事なれど、あすともしらぬ身にて侍れば、たゞ申してん。この一品宮の御有樣のゆかしく覺えさせ給ふこそ、又命をしく侍れ。その故は、生れおはしまさんとて、いとかしこき夢想見たまへしなり。さ覺え侍りし事は、故女院この大宮など孕まれさせ給はんとてみえし。たゞおなじさまなる夢に侍りしなり。それにて萬おし量られさせ給ふ御有樣なり。皇太后宮に、いかで啓せしめん、と思ひ侍れど、宮のほとりの人にえあひ侍らぬが口惜しさに、こゝら集り給へる中に、もしおはしましやすらん、と思ひ給へて、かつはかく申し侍るぞ。行末にもかく言ひけるものかな、と思しあはする事も侍りなん、と言ひし折こそ、こゝにありとて差し出でまほしかりしか。

あまりに恐しくぞ―餘りに昔の事よく知れる故に

故女院―兼家公の女、圓融院の后詮子

我が寶君——繁樹の主人、貞信公忠平

となん、なにか制する、と語ひ侍れば、なにせんにか制せん。但さらん後には、若からん女童求めて得さすばかりぞ、といひ侍れば、わが姪なる女ひとりあり。それを今より言ひかたらはん。いとさし離れたらんもなさけなき事もぞある、と申せば、それあるまじき事なり。近くも遠くも、身の爲におろかならん人を、今更に寄すべきかは、となんかたらひ侍る。やう〳〵衣袈裟などのまうけに、よき絹一二疋もとめまうけ侍る、など言ひて、さすがにいかにぞや、もの哀げなるけしきの出できたるは、女どもに負かれん事の心細きにや、とぞ見え侍りし。さて今年こそは、天變しきりにし、世の妖言などよからず聞え侍るめれ。かんの殿のかく懐妊せしめ給ひ、院の女御殿のつねの御惱の中にも、今年となりては、暇なくおはしますなる、などこそ恐しう承れ。いでや、かうやうの事を打ち續け申せば、昔の事こそ、たゞ今のやうに覺え侍れ。見かはして、繁樹が言ふやう、いであはれ、かくさま〴〵にめでたき事ども、哀にもそこら多く見聞き侍れど、なほ我が寶君におくれ奉りしやうに、ものゝ悲しく思ひ給へらるゝ折こそ侍らね。八月十日あまりの事に候ひしかば、をりさへこそ哀に時しもあれと覺えはべりし物かなとて、はな度々かみて、えも言ひやらず、いみじと思ひたるさま、まことにその折もかくこそと見

染著の心—物に引かるる心
亂聲—先を拂ふ聲
大宮—上東門院彰子
戒壇—佛戒を授くる壇

宣ひいまさうじけり。かやうの事どもを見給ふるまゝに、いとしも此世の榮花御榮のみ覺えて、染著の心のいとゞ益に起りつゝ、道心盡くべうも侍らぬに、河内國そこ〳〵に住む某の聖人は、庵より出づる事もせられねど、後世のせめを思へばとて、のぼり參られたりけるに、關白殿參らせ給ひて、雜人どもをはらひ罵るに、これこそは一人におはしますめれ、と見奉るに、入道殿の御前にゐさせ給へば、なほまさらせ給ふなりけり、と見奉る程に、また行幸なりて亂聲し侍ちうけ奉らせ給ふさま、御輿の入らせ給ふ程など、見奉りつる殿たちの畏り申させ給へば、なほ國王こそ日本一の事なりけれ、と思ふに下りおはしまして、阿彌陀堂の中尊の御前についゐさせ給ひて、拜み申させ給ひしに、なほなほ佛こそ、上なくはおはしましけれど、この會の庭には、かしこう結緣し申して、道心なんいとゞ熟し侍りぬる、とこそ申され侍りしか。傍に居られたりしなりや。まことに忘れ侍りにけり。世の中の人の申すやう、大宮の入道せしめ給ひて、太上天皇の御位にならせ給ひて、女院となん申すべきに、この御寺に戒壇建てられて、御受戒あるべきなれば、世の中の尼ども參りて受くべかなりとて、悅をこそなすなれ。この世繼が女なども、かゝる事を傳へ聞きて申すやう、おのれも、その折にだに白髮のすそそぎてん

けさう―化粧

づれと聞えさすべくもなく、とりどりにめでたくおはしまさふ。大宮の御ぐし、御衣のすそに餘らせ給へり。中宮はたけに少し餘らせ給へり。皇太后宮は、御衣のすそに一尺ばかり餘らせ給へる御すそ扇のやうにぞ。かんの殿、御たけに七八寸あまらせ給へり。御扇すこしのけてさしかくさせ給ひける。一品宮は、殿の御前なにかゐさせ給ふ。立たせ給へとて、長押おりのぼらせ給ふ御手を執へつゝ、たすけ申させ給ふ。あまりなる事は、目もとゞろく心地なんし給ひける。顯ならず引きふたぎなど、つくろはせ給ひける程に、御覽じつけられたる物かは、あないみじ、宮仕に宿世の盡くる日なりけり、といける心地もせで、三人ながら候ひ給ひける程に、宮たち見奉りつるか、いかゞおはしましつる。このおい法師の女たちには、怪しうはあらず御座しまさふな。な侮られそよ、と打笑みて仰せられかけて、いたうも塞がせ給はで、おはしましたりしなん、いきいでたる心地して、嬉しなどは言ふべきやうもなく、かたみに見れば、顏はそこらけさうじたりつれど、草の葉の色のやうにて、又赤くなりなど、さまざま汗水になりて見かはしたり。さらぬ人だに、あざれたる物のづきは、いと便なき事にするを、せめてめでたう思召しければ、御悅に堪へで、又われと思召しつるにこそ、と思ひなすも、心おごりなんする、と

唐裝束―唐物の絹類にて調製したる裝束

呪師―まじなひするもの事を司る役人

おはします所に參りて、五所ゐならばせ給へりしを見奉りしかば、中宮の御衣の優に見えしは、わがしたればにや、とこそ大夫殿仰せられけれ。かく口ばかりさかしだち侍れど、下﨟のつたなき事は、いづれの御衣も程へぬれば、色どものつぶと忘れ侍りにけるよ。ことにめでたくせさせ給へりければにや。下は紅薄物の御單重にや。御上着覺え侍らず。萩の織物の三重がさねの御唐衣に、秋の野を縫ひものにし、繪にも書かれたるにや、とぞ目もとゞろきて見え給へし。他宮々のも殿ばらの調じて奉らせ給へりける、とぞ人申しゝ。大宮は二重織物をり重ねられて侍りし。皇太后宮はそうじて唐裝束、かんの殿のは、殿こそはせさせ給へりしか。こと御方々のも、繪かきなどせられたり、と聞せ給ひて、俄に箔おしなどせられたりければ、入道殿御覽じて、よき呪師の裝束かなとて、笑ひ申させ給ひけり。「殿は、まづ御堂々々あけつゝ待ち申させ給ふ。南大門の程にて見申すだにゑましく覺え侍りしに、御堂の渡殿の物の間より、一品宮の辨乳母、今一人はそれも一品宮大輔の乳母、中將の乳母とかや、三人とぞうけ給はりし。御車より下りさせ給ひて、ゐざり續かせ給ひつるを、見奉りたるぞかし。恐しさにわなゝかれしかど、今日さ許の事はありなんや、と思ひて見參らするに、などてかはとは申しながら、い

御ぐし—御髮

一品の宮—三條院の皇女、禎子內親王

まうち名—前つ君

日かねてせしめ給ひしになん參りて侍りし、といへば、世繼、己は度々參り侍り。供養の日の有樣のめでたさは、更にもあらずや。又の日、けふは御佛など近くて拜み奉らん。物共とりおかれぬ先に、と思ひて參りて侍りしに、宮達の諸堂拜み奉らせ給ひし、見申し侍りしこそ、斯る事に遭はんとて、今まで生きたるなりけり、と覺え侍りしか。物覺えて後さる事をこそ、未だ見侍らね。御手車に四所奉りしぞかし。口に大宮、皇太后宮。御袖ばかりを聊さし出ださせ給ひて侍りしに、枇杷殿宮の御ぐしの、土にいと長く曳かれさせ給ひて出でさせ給へりしは、いと珍かなりし事かな。後の方には、中宮、かんの殿奉りて、たゞ御身ばかり御車におはします樣にて、御衣どもみなながら出でて、それも土までこそ曳かれ侍りしか。一品の宮も中に奉りたりけるにや。御衣どもは何がしの主の持ちたうび、御車の後にぞ候はれし。單の御衣ばかりを奉りておはしましけるなめり。御車にはまうち君たちひかれて、後には關白殿をはじめ奉り、殿ばらさらぬ上達部、殿上人御直衣にてあゆみ續かせ給へりし、いであないみじや。中宮權大夫殿のみぞ、堅固の御物忌にて參らせ給はざりし。さていみじく口惜しがらせ給ひける。中宮の御裝束は權大夫殿せさせ給へりし。いと淸らにてこそ見え侍りしか。供養の日啓すべき事ありて、

らじ―翁らは未だ一度も缺かず人夫を上るとなり一本「またあらしか」とありあらしかは人夫

るなり。さて參りたれば惡しきことやはある。飯酒しげく賜び、もて參るくだ物をさへ惠みたひ、常に仕うまつる者は、衣裳をさへこそはたまひ行はしめ給へ。されば參る下人も、いみじう忙しがりてぞ進み集ふめる、といへば、しかそれさる事に侍り。但翁らが思ひえて侍るやうは、いと賴しきなり。翁いまだ世に侍るに、衣裳破れ、むつかしきめ見侍らず。又飯酒乏しきめ見侍らず。もしこの事どもの術なからん時は、紙三枚をぞ求むべき。故は入道殿下の御まへに申文を奉るべきなり。その文に作るべきやうは、翁、故太政大臣貞信公殿下の御時の小舍人童なり。それ多くの年積りて、術なくなりにて侍り。閣下の君の末の家の子におはしませば、同じき君と賴み仰ぎ奉る。物少し惠み給はらん、と申さんには、少々の物は賜ばじやは、と思へば、それは案の物にて、倉に置きたるが如くになん思ひ侍る、」と言へば、世繼それはげにさる事なり。家貧しくならん折は、御寺に申文奉らしめんとなん。賤しき童部と打ち語らひ侍る、と同じ心に言ひかはす。」さても〳〵、うれしく對面したるかな。年比の袋の口あけ綻を斷ち侍りぬること。扨も此のよしる無量壽院には、いくたび參り拜み奉り給ひつ、といへば、おのれは大御堂の供養の年の會の日は、人いみじう拂ふべかなり、と聞きしかば、試樂といふ事三

里の刀禰―里長

彌勒の世―遙かの後の世

御堂の夫―法成寺建立に使役せらるる人夫

翁らまだあ

かぎりなし。その故は、昔は、殿ばら宮ばらの馬飼牛飼、なにの御靈會、祭の料とて、錢、紙、米など乞ひのゝしりて、野山の草をだにやは枯らせし。仕丁おもの持ち出で來て、人の物とり奪ふ事の絶えにけり。また里の刀禰、村の行事出できて、火祭やなにやと煩はしくせめし事、今は聞えず。かばかり安穩泰平なる時には遭ひなんや、と思ふは、翁らが賤しき宿も帶紐をとき、門をだに鎖さで、安らかに伸び臥したれば、年も若え命も延びたるぞかし。先は北野、加茂川原につくりたる豆、さゝげ、瓜、茄子といふ物、此中比はさらに術なかりし物をや。この年比は、いとこそ樂しけれ。人のとらぬをばさる物にて、馬牛だにぞ食まぬ。されば、たゞ任せ捨てつゝ置きたるぞかし。かくたのしき彌勒の世にこそ遭ひて侍れや、といふめれば、いまひとりの翁、たゞ今は、この御堂の夫をしきりに召す事こそは、人は堪へがたげに申すめれ。それはさは聞き給はぬか、と言ふめれば、世繼、しか〳〵そのことぞある。二三日まぜに召すぞかし。されどそれ參るにあしからず。故は、極樂淨土の新に顯れいで給ふべきために召すなり、と思ひ侍れば、いかで力たへば參りて仕うまつらん。行末にこの御堂の草木となりにしがなどこそ思ひ侍れ。されば物の心知りたらん人は、望みても參るべきなり。されば翁らまだあらじ。一度かゝず奉り侍

横川の大僧正—慈惠大僧正

さがな目—物事をわきまへぬ目

ん。さるべきにて御爪もおち、幼くおはします人にしも仰せられけるにこそは侍りけめ。」扨やんごとなくならせ給ひて、御堂建てさせにおはします御車に、貞信公はいと小くて具し奉り給へりけるに、法性寺の前渡り給ふとて、父御に、此處こそよき堂所なめれ。ここに建てさせ給へかし、と聞えさせ給ひけるに、いかに見てかく言ふらん、と思して、さしいでて御覽ずれば、眞にいとよく見えければ、幼き目にいかでかく見つらん。さるべきにこそあらめ、と思召して、實にいとよき所なめり。汝が堂を建てよ。我はしかく〲の事のありしかば、そこに建てんずるぞ、と申させ給ひける。さて法性寺は建てさせ給ひしなり。「又九條殿の飯室の事などはいかにぞ。横川の大僧正の御房に上らせ給ひし御ともには、繁樹參りて侍りき。かやうの事ども聞き見給ふれど、なほこの入道殿世に勝れぬけ出でさせ給へり。天地にうけられさせ給へるは、此殿こそおはしませ。何事も行はせ給ふをりに、いみじき大風ふき長雨ふれども、まづ二三日かねて空はれ土乾くめり。かゝれば、或は聖德太子の生れ給へると申し、あるひは弘法大師の佛法興隆の爲に生れ給ふとも申すめり。實にそれは翁らがさがな目にも、たゞ人とは見えさせ給はざめり。なほ權者にこそおはしますべかめれ、となん仰ぎ見奉る。かゝれば、この御世の樂しき事

昭宣公—基經

わらは殿上—良家の子供の殿上を許さるゝこと

何處をはかりとも—何處をあてにして

どの大臣になり給ひて、御慶に木幡に參らせ給へりしに、御供に、入道殿具し奉らせ給ひて御覧ずるに、多くの先祖の御骨おはするに、鐘の聲聞き給はぬ、いと憂き事なり。わが身思ふさまになりたらば、三昧堂建てんと御心のうちに思召し企てける、とこそ承れ。昔もかゝりける事多く侍りける中に、極樂寺、法性寺ぞいみじく侍るや。御年などもおとなびさせ給へるだにも、思召し寄るらん程、なべてならず覺え侍るに、いづれの御時とは確にえ聞き侍らず。たゞ深草の御ほどにやなどぞ思ひやられ侍る。芹川の行幸せしめ給ひけるに、昭宣公わらは殿上にて仕うまつらせ給へりけるに、御門琴をあそばしける。この琴ひく人は、別の爪造りて指にさし入れてぞ、彈くことにて侍りし。さてもたせ給ひたりけるを、落しおはしまして、大事に思召しけれど、又造らせ給ふべきやうも無かりければ、さるべきにてぞ思召しよりけん。大人しき人々にも仰せられず、幼くおはします君にしも求めて參れ、と仰せられければ、御馬を打ちかへしておはしましけれど、何處をはかりともいかでかは尋ねさせ給はん。見附けて參らせざらん事のいといみじう思召しければ、これ求め出でたらん所には一伽藍を建てん、と願じおぼして、求め給ひけるに出できたる所ぞかし。極樂寺は、幼き御心にいかでか思召しよらせ給ひけ

天のみかど―聖武天皇

都率天―三十三天の一にて彌勒こゝに居る

恒徳公―太政大臣藤原爲光

父。當代竝に東宮の御祖父におはします。こゝらの御中に后三人竝べすゑて見奉らせ給ふ事は、入道殿下より外に聞えさせ給はざめり。關白左大臣、内大臣、大納言二人、中納言の御親にておはします。さりや、聞召しあつめよ。日本國には、唯一無二におはします。まづは造らしめ給へる御堂などのありさま、鎌足の大臣の多武峯、不比等大臣の山階寺、基經の大臣の極樂寺、忠平の大臣の法性寺、九條殿の楞嚴院、天の帝のつくり給へる東大寺も、佛ばかりこそは大きにおはしますめれど、なほこの無量壽院にはならび給はず。ましてこと御寺々は言ふべきならず。大安寺は都率天の一院を、天竺の祇園精舍にうつしつくり、天竺の祇園精舍を、唐の西明寺にうつしつくり、唐の西明寺の一院を、この國のみかどは大安寺にうつさしめ給へるなり。然あれども只今は猶この無量壽院まさり給へり。南京のそこばくの多かる寺どもなほあたりなし。恒徳公の法住寺いと猛なれど、なほこの無量壽院すぐれ給へり。難波の天王寺など、聖徳太子の御心に入れてつくり給へれど、なほこの無量壽院まされり。奈良は七大寺十五大寺など見比ぶるに、なほこの無量壽院いとめでたく、極樂淨土のこの世に現れけるよと見えたり。かるがゆゑに、この無量壽院も思ふに思しめし願ずる事も侍りけん。淨妙寺は東三條のおと

りて、又四十八代に歸りゐ給へるなり。御母后を贈皇后と申す。しかれば、不比等大臣の御女二人ながら后にましますめれど、高野女帝の御母后は、贈后と申したるにて、おはしまさぬ世に后宮にゐ給へる、と見えたり。かるがゆゑに不比等大臣は、光明皇后又贈后の父、聖武天皇ならびに高野女帝の御おほぢ。

一贈太政大臣冬嗣のおとゞは、太皇大后順子の御父。文徳天皇の御祖父。

一太政大臣良房のおとゞは、皇太后宮明子の御父。淸和天皇の御祖父。

一贈太政大臣長良のおとゞは、皇太后宮高子の御父。陽成天皇の御祖父。

一贈太政大臣總繼のおとゞは、贈皇太后宮澤子の御父。光孝天皇の御祖父。

一内大臣高藤のおとゞは、皇太后宮胤子の御父。醍醐天皇の御おほぢ。

一太政大臣基經のおとゞは、皇后宮穩子の御父。朱雀村上二代の御祖父。

一右大臣師輔のおとゞは、皇后宮安子の御父。冷泉院ならびに圓融院の御祖父。

一太政大臣伊尹のおとゞは、贈皇后宮懷子の御父。花山院の御祖父。

一太政大臣兼家のおとゞは、皇太后宮詮子、又贈后超子の御父。一條院三條院の御祖父。

一太政大臣道長大臣は、太皇大后宮彰子、皇太后宮姸子、中宮威子、東宮の御息所の御

奈良方の僧—興福寺の僧

加供—供養に加はること

衾つかはす—人々に祿として衾をたまはる

良方の僧を講師として、御齋會を行はしめ、公家よりはじめ、藤氏の殿ばらみな加供し給ふ。また三月七日よりはじめて十三日まで、藥師寺にて最勝會七日。又山階寺にて十月十日より維摩會七日。みなこれらの度に、勅使下向して衾つかはす。藤氏の殿ばらより五位まで奉り給ふ。南京の法師三會講師しつれば、已講となづけて、その次第を作りて、律師僧綱になる。かゝれば、かの御寺いかめしうやんごとなき所なり。いみじき非道の事も、山階寺にかゝりぬれば、又ともかくも人物いはず。山階道理とつけておきつ。かかれば、藤氏の御有樣たぐひなくめでたし。同じ事のやうなれど、又續を申すべきなり。后宮の御父、御門の祖父となり給へる類をこそは、あかし申さめとて、

一內大臣鎌足の大臣の御女二所、やがてみな天武天皇に奉り給へりけり。男女御子たちおはしませど、御門東宮たゝせ給はざめり。

一贈太政大臣不比等の大臣の御女二所、一人の御女は、文武天皇の御時の女御、みこ生れ給へり。それを聖武天皇と申す。御母をば光明皇后と申しき。今一人の御女は、やがて御をひの聖武天皇に奉りて、女親王生み奉り給へるを、女帝に立て奉り給へるなり。高野女帝と申すこれなり。四十六代に當り給ふ。それおり給へるに、又帝ひとり隔て奉

なほし近くとて―しは強め詞

三昧行ひ奉り給ふ―不斷一心不亂に稱名念佛する事

八省―八省院郎大極殿

させ給ひ、后宮、氏の大臣、公卿、みなこの明神に仕うまつり給ひて、二月、十一月上の申の日、御祭にてなん、種々の使たちのゝしる。帝この京に遷らしめ給ひては、又近くふり奉りて、大原野と申す。二月の初卯の日、霜月の初子の日と定めて、年に二度の御祭あり。又同じく公家の使たつ。藤氏の殿ばらみなこの神に御てぐら十列奉り給ふ。なほし近くとて、又ふり奉りて、吉田と申しておはしますめり。この吉田明神は、山陰の中納言のふり奉り給へるぞかし。御祭の日、四月下の子十一月下の申の日とを定めて、わが御族に、御門后宮たち給ふものならば、おほやけ祭になさん、と誓ひ奉り給へれば、一條院の御時よりおほやけ祭にはなりたるなり。又鎌足大臣の御氏寺、大和國多武峰に造らしめ給ひて、そこに御骨を納め給ひて、今に三昧おこなひ奉り給ふ。不比等大臣は、山階寺を建立せしめ給へり。それによりかの寺に藤氏を祈り申すに、この寺並びに多武峰、春日、大原野、吉田に、例に違ひ怪しき事いできぬれば、御寺の僧禰宜等など公家に奏し申して、その時に藤氏の長者殿卜はしめたまふに、御愼あるべきは、年のあたり給ふ殿ばら達の御もとに、御物忌をかきて、一の所よりくばらしめ給ふ。おほよそかの寺よりはじまりて、年に二三度、會をおこなはる。正月八日より十四日まで、八省にて奈

一兼家大臣の五郎道長の大臣は、太政大臣まで。

一道長大臣の太郎只今の關白左大臣頼通の大臣これにおはします。この殿の御子の、今までおはしまさざりつるこそ、いと不便に侍りつるを、この若君の生れたまへる、いとかしこき事なり。母は申さぬ事なれど、これはいとやんごと無くさへおはするこそ。故左兵衛督は人柄いとしも思はれ給はざりしかど、もとのあて人におはするに、又かく世を響かす御孫の出でおはしましたる、亡きあとにもいとよし。七夜の事は入道殿せさせ給へるにつかはしける歌、

年をへてまちつる松のわか枝にうれしくあへる春のみどりこ

御門東宮をはなち奉りては、これこそ孫の長とて、やがて御童名を長君とつけ奉らせ給ふ。この四家の君たち、昔も今も數多おはします中に、道絶えずすぐれ給へるはかくなり。その鎌足の大臣生れ給へるは、常陸の國なれば、かしこに鹿島といふ所に、氏の御神を住ましめ奉り給ひて、その御時より今にいたるまで、あたらしき帝后大臣立ち給ふ折は、御幣の使必ずたつ。帝、奈良におはしましゝ時に、鹿島遠しとて、大和國三笠山にふり奉りて、春日明神と名づけ奉りて、今に藤氏の御氏神にて、公家男女使に立て

みどりこ―嬰兒、松のみどりにいひかけたり

鹿島―今の官幣大社常陸國鹿島郡鹿島神宮

南圓堂—興福寺内に在り

不空羂索—生死の大海に妙法蓮華の餌を蒔き心念不空の繩を以て衆生の魚を釣り上げ菩提の彼岸に送る意

年。大臣の位にて七年。贈從一位左大臣。桓武天皇、平城天皇の二代にあひ給へり。

一内麿大臣の三郎冬嗣の大臣は、左大臣までなり給へり。贈太政大臣。この殿より次さまざまあかしたればこまかに申さじ。鎌足の御代より榮え廣ごり給へる。御末々やうやう失せ給ひて、この冬嗣の程は、むげに心細くなり給へり。その時は、源氏のみぞ、さまざま大臣公卿にておはせし。それにこの大臣なん南圓堂を建てゝ、丈六の不空羂索觀音をすゑ奉り給ふ。さてやがて、ふくけんざく經一千卷供養し給へり。今にその經ありつゝ、藤氏の人々取て守りにしあひ給へり。その佛經の力にこそ侍るめれ。また榮えて、帝の御後見今にたえず、末々せさせ給ふめるは、その供養の日ぞかし。こと姓の上達部あまた、日の中にうせ給ひにければ、誠にや人々申すめり。

一冬嗣大臣の太郎長良の中納言は、贈太政大臣までなりたまへり。

一長良大臣の三郎基經おとゞは、太政大臣までなり給へり。

一基經大臣の四郎忠平おとゞは、太政大臣までなり給へり。

一忠平大臣の二郎師輔の大臣は、右大臣までなりたまへり。

一師輔大臣の三郎兼家の大臣は、太政大臣まで。

御心地一度は怠りて―御病氣一度は快くなりて

りぬる木は枯れぬるものなり。今ぞ紀氏はうせなんずる、とぞ宣ひける。まことにこそしか侍るめれ。この鎌足の大臣の病づき給へるに、昔この國に佛法ひろまらず、僧などは容易く侍らずやありけん。聖徳太子傳へ給ふと言へども、この比だに生まれたるちごも法華經をよむと申せど、まだ讀まぬも侍るぞかし。百濟國より渡りたりける尼して、維摩經供養し給へりけるに、御心地一度は怠りて侍りければ、その經をいみじきものにし給ひけるまゝに、維摩會は侍るなり。

一鎌足の大臣の次郎右大臣正一位不比等大臣、御年六十二。養老四年八月三日うせ給ふ。大臣の位にて十三年。贈太政大臣にならせ給へり。元明天皇、元正天皇の御時二代。

一不比等の大臣の次郎房前、宰相にて二十年。大炊の天皇の御時、天平寶字四年庚子八月七日贈太政大臣になり給ふ。元正天皇、聖武天皇二代。此間宰相にて天平九年四月十七日に失せ給ひにき。

一房前のおとゞの四男眞楯大納言、稱徳天皇の御時、天平神護二年三月十五日にうせ給ふ。御年五十二。贈太政大臣公卿にて七年。

一眞楯大納言の二郎右大臣從二位左近衞大將内麿大臣、御年五十七。公卿にて二十

高野の女帝—孝謙天皇

北家の末云云—房前の子孫繁榮せり

り。この不比等の大臣の御女二人おはしける。一所は聖武天皇の御母后光明皇后とぞ申しける。今一所の御女は、聖武天皇の女御にて女親王をぞうみ奉り給へりける。女親王を聖武天皇、女帝にすゑ奉り給ひてけり。この女帝をば高野女帝と申しけり。二度位に卽せ給ひたりける。さて不比等の大臣の男子二人、又御弟二人とを四家となづけて、皆門をわかち給へりけり。其武智麿をば南家と名づけ、二郎房前をば北家と名づけ、御はらからの宇合式部卿をば式家と名づけ、その弟の麻呂をば京家と名づけ給ひて、これを藤氏の四家とは名づけられたるなりけり。この四つの家より、あたまのさま〴〵國王大臣公卿多くいで給ひて、榮えおはします。しかあれど、北家の末いまに枝ひろごり給へり。その御つぎきをまた一筋に申すべきなり。絶えにたるかたをば申さじ。人ならぬ程の者どもは、その御末にもや侍らん。此鎌足の大臣よりの次々今の關白まで十三代にやならせ給ひぬらん。その次第を聞しめせ。藤氏と申せば、たゞ藤原をばいふなりけり、とぞ人は思さるらん。然はあれど、本末しることは、いとあり難きことなり。

一內大臣鎌足大臣、藤原の姓賜はり給ひての年の十月十六日にうせさせ給ひぬ。御年五十六。大臣の位にて二十五年。此姓の出で來るをきゝて、紀氏の人のいひける。藤かゝ

淨名居士―維摩居士大善智識なり

のやんごとなきによりて、うせ給へるのちの御いみな淡海公と申しけり。この繁樹がいふやう、大織冠をば、いかでか淡海公とは申さん。大織冠は、大臣の位にて二十五年。御年五十六にてなんかくれおはしましける。ぬしの宣ふことども、天の川をかき流すやうに侍れど、をり〳〵かゝる僻事ぞまじりたる。されども誰か又かうは語らんな。佛在世の淨名居士とおぼえ侍るものかな、と言へば、世繼がいはく、昔から國に孔子と申すものしりの宣ひけるやう侍り。智者は千のおもひはかりは、かならず一つあやまちあり、となんあれば、世繼とし百歳に多くあまり、二百歳に足らぬ程にて、かくまでは問はずがたりを申すは、昔の人にも劣らざりけるにやあらんとなん覺ゆる、と言へば、繁樹、しか〳〵、誠に申すべき方なくこそ興あり。面白く覺え侍れとて、かつは涙をおしのごひなど感ずる。まことに言ひても餘にぞ覺ゆるにや。御子の左大臣不比等の大臣、實は天智天皇の御子なり。されど鎌足大臣の二郎になり給へり。この不比等の大臣、御名の文字よりはじめてなべてならずおはしましけり。ならび等しからずと附けられ給へる名にてぞ、この文字は侍りける。この不比等の大臣の御男君達二人ぞおはしける。太郎は武智麻呂と聞えて、左大臣までなり給へり。二郎は房前と申して、宰相までなり給へ

わが女御―天智天皇の女御與志古娘

足の大臣を、この天智天皇いとかしこく時めかし思して、わが女御一人をこの大臣にゆづらしめ給ひつ。その女御たゞにもあらず孕み給へりければ、御門の思さしめ給ひたるやう、この女御の孕める子、男ならば大臣が子とせん、女ならば朕が子とせん、と思して、かの大臣に仰せられけるやう、男ならば大臣の子にせよ。女ならばわが子にせん、と契らしめ給へりけるに、この御子男にて生れ給へりければ、内大臣の御子とし給ふ。五大臣はもとより男一人女一人をぞ持ち奉らせ給へりける。この御腹にさし續き女二人男二人生れ給ひぬ。その姫君天智天皇の皇子大友皇子と申しゝが、太政 大臣の位にて、次にはやがて同じ年の内に御門となり給ひて、天武天皇と申しける帝 の女御にて、二所ながらさし續きおはしけり。大臣のもとの太郎君をば、中臣意美麻呂とて、宰相までなり給へり。天智天皇の御子の孕まれ給へりし。右大臣までなり給ひて、藤原不比等のおとゞとておはしけり。うせ給ひて後、贈太政大臣になり給へり。鎌足の大臣の三郎は宇合とぞ申しける。四郎は麻呂と申しき。この男君だちみな宰相ばかりまでぞなり給へる。かくて鎌足大臣は、天智天皇の御時、藤原の姓賜り給ひし年ぞうせ させ給ひける。内大臣の位にて二十五年ぞおはしましける。太政大臣になり給はねど、藤原氏のいで始

御骨をさへ云々―道長女院の恩に報いんため女院崩御の際御骨の箱を自身にかけて木幡に葬りしを言ふ

きよ〳〵と―胸のいたむ形容

給はまし。そのなかにも道理すぎてこそは報じ奉り仕うまつらせ給ひしは、御骨をさへこそはかけさせ給へりしか。中關白殿粟田殿うち續きうせさせ給ひて、入道殿に世のうつりし程は、さも胸つぶれて、きよ〳〵と覺え侍りしわざかな。いとあがりての世は知り侍らず。翁物覺えて後は、かゝる事さぶらはぬものをや。今の世となりては、一の人の貞信公小野宮殿をはなち奉りては、十年とおはする事の、近くは侍らねば、この入道殿も、いかゞ、と思ひ申し侍りしに、いとゞ斯る運におされて、御兄たちはとりもあへずほろび給ひしにこそおはしますめれ。其もまた然るべくあるやうあることを、みな世はかゝるなめり、とぞ人々思召すとて、ありさまをすこし又申すべきなり。世の中の御門、神の代七代をばさる物にて、神武天皇よりはじめ奉りて、三十七代にあたり給ふ孝徳天皇の御代よりこそは、さま〴〵の大臣定り給ふなれ。たゞしこの御時中臣鎌足連と申して内大臣になりはじめ給ふ。その大臣は、常陸の國にて生れ給へりければ、三十九代にあたり給へる御門、天智天皇と申す。その御門の御時にこそ、この鎌足大臣の御姓藤原と改り給ひたれ。されば世の中の藤氏のはじめは、内大臣鎌足の大臣をし奉れり。その末々より多くの御門、后、大臣、公卿さま〴〵になりいで給へり。たゞしこの鎌

いかでかくは云々―女院の帝に奏する言

あはや宣旨云々―女院の道長にいふ言、宣旨は道長關白の命

中をひきかはらせ給はんことを、いと心苦しう思召して、粟田殿にも、頓にやは宣旨くださせ給ひし。されども女院の道理のまゝの御ことを思召し、また帥殿をばよからず思ひ聞えさせ給ひければ、入道殿の御事をいみじうしぶらせ給ひけれど、いかでかくは思召し仰せらるゝぞ。大臣こえられたる事だに、いといとほしく侍りしに、父大臣のあながちにし侍りしことなれば、いなびさせ給はずなりにしにこそ侍れ。粟田大臣にはせさせ給ひて、これにしも侍らざらんは、いとほしさよりも、御爲なんいと便なく、世の人もいひなし侍らんなど、いみじう奏せさせ給ひければ、むつかしうや思召されけん、後には渡らせ給はざりけり。さればうへの御局にのぼらせ給ひて、こなたへ、とは申させ給はで、われ夜御殿にいらせ給ひて、なく〳〵申させたまふ。其日は入道殿は、上の御局に候はせ給ふ。いと久しういでさせ給はねば、御胸つぶれさせ給ひけるほどに、とばかりありて、戸をおしあけてさし出でさせ給へりける。御顔は赤みぬれ艶めかせ給ひながら、御口は心よくゑませ給ひて、あはや宣旨くだりぬ、とこそ申させ給ひけれ。いさゝかの事だに、みなこの世ならず侍るなれば、いはんやか許の御ありさまは、人のともかくも思しおかんによらせ給ふべきにもあらねども、いかでかは院をおろかに思ひ申させ

大臣かろむる人の云々—左様に大臣などを軽んずる人の末は運よからぬもの

ひらはり—日を避ける幕

御車副をば云々—御車副を甚だしく愛し給ひていたはり世話し給ひしかば

たちのかせ給ひにけり。父大臣にぞ申させ給ひければ、大臣かろむる人のよきやうなし、とぞ宣はせける。三月上の巳の日の御祓に、やがて逍遥し給ふとて、帥殿、河原にさるべき人々あまたぐして、出でさせ給へり。平張どもあまたうち渡したるおはし所に、入道殿もいでさせ給へる。御車を近くやれば、便なき事、かくなせそ。やり除けよ、と仰せられけるを、某丸といひし御車副の、なにごと宣ふ殿にかあらん。かくきうしたまへれば、この殿は不運におはするぞかし。禍や〳〵とて、いたく御車牛を打ちて、いますこし平張のもと近くこそ、仕うまつり寄せたりけれ。辛うも此男に言はれぬるかな、とぞ仰せられける。さてその御車副をば、いみじくらうたくせさせ給ひ、御かへり見ありしかば、かやうの事にて、此殿たちの御中いと悪しかりき。女院は入道殿をとりわき奉らせ給ひて、いみじう思ひ申させ給へりしかば、帥殿は疎々しく待遇させたまへりけり。御門皇后宮をねんごろに、時めかせ給ふゆかりに、帥殿は旦暮御前に候はせ給ひて、入道殿をばさらにも申さず、女院をもよからず事にふれて申させ給ふを、おのづから心得やせさせ給ひけん、いと本意なき事に思召しける。ことわりなりな。入道殿の世をしらせ給はんことを、帝いみじうしぶらせ給ひけり。皇后宮父おとゞおはしまさで、よの

無邊世界—はてもなき空

石山—近江の石山寺

にはあたるものかは。次に帥殿射給ふに、いみじう臆し給ひて、御手もわなゝく氣にや、的のあたりだに近くよらず、無邊世界を射給へるに、關白殿色青くなりぬ。又入道殿射給ふとて、攝政關白すべきものならばこの矢あたれ、と仰せらるゝに、初と同じやうに的の砕るばかりに射させ給ひつ。饗應しもてはやし聞えさせ給ひつる興もさめて、事にかくなりぬ。父おとゞ帥殿に、何か射る。な射そ〳〵、と制し給ひて、事冷めにけり。入道殿矢もどして、やがて出でさせ給ひぬ。その折は左京大夫とぞ申しゝ。弓をいみじく射させ給ひしなり。又いみじく好ませ給ひしなり。けふに見ゆべき事ならねども、人の御様のいひでさせ給ふ事のおもむきより、片方は臆せられ給ふなめり。又故女院の御石山詣に、此殿は御馬にて帥殿は車にて參り給ふに、さはる事ありて、粟田口より歸り給ふとて、院の御車のもとに參り給ひて、案内申し給ふに、御車も止めたれば、ながえをおさへて立ち給へるに、入道殿は、御馬をおしかへして、帥殿の御項のもとに、いと近うち寄らせ給ひて、とく仕うまつれ、日の暮れぬるに、と仰せられければ、怪しく思されて見かへり給へれど、驚きたる御氣色もなく、頓にも退かせ給はで、日暮れぬ。とくとくとそゝのかせ給ふを、いみじう安からず思せど、いかゞはせさせ給はん、やをら

奉りしづめ―騎り静め
ひけし御心―おくれたる心

いとめでたくおはしましゝものかな。うへの御衣は黒きに、御單衣は紅のはなやかなるあはひに、雪の色もてはやされて、えも言はずおはしましゝものかな。名高の某といひし御馬いみじかりし悪馬なり。あはれそれを奉りしづめ給へりしはや。三條院もその日の事をこそ召しいでおはしますなれ。御病の中にも、賀茂の行幸の日の雪こそわすれがたけれ、と仰せられけんこそ哀に侍れ。かく世間の光にておはします殿の、一年ばかり物をやすからず思召したりしよ。いかに天道御覧じけん。さりながらも、いさゝかひけし御心やはとほさせ給へりし。おほやけざまの公事作法ばかりには、あるべき程に振舞、時違ふる事なく勉めさせ給ひて、内々には所もおき聞えさせ給はざりしぞかし。帥殿の南の院にて、人々集めて弓あそばしゝに、此殿渡らせ給へれば、思ひかけずあやし、と中關白殿おぼし驚きて、いみじう饗應し申させ給ひて、下臈におはしませど、前にたて奉りて、まづ射させ奉らせ給ひけるに、帥殿の矢かずいま二つおとり給ひぬ。關白殿又御前に候ふ人々も、今二度延べさせ給へ、と申して、のべさせ給へりけるに、安からず思しなりて、さらばのべさせ給へ、と仰せられて、又射させ給ふとて、仰せらるゝやう、道長が家より帝后たち給ふべきものならば、此矢あたれ、と仰せらるゝに、同じものゝ中心

毘沙門のいきほひ—勇猛なるを比す

奉れば、それもいとやんごとなくおはします。雷の相なんおはする、と申しければ、雷はいかなるぞ、と問ふに、一きははいと高くなれど、後とげのなきなり。されば御末いかがおはしまさん、と見えたり。中宮大夫殿こそ限なく極なくおはしませ、とこと人を問ひ奉るたびには、此入道殿を必ずひきそへ奉りて申す。いかにおはすれば、かく度毎には聞え給ふぞ、といへば、第一の相には虎子如渡深山峯なるを申したるに、聊違はせ給はねば、かく申し侍るなり。この譬は、虎の子の嶮しき山の峯をわたるが如し、と申すなり。御かたち容體は、たゞ毘沙門のいきほひ見奉らんやうにおはします。御相かくの如し、といへば、誰よりもすぐれ給へり、とこそ申しけれ。いみじかりける上手かな。當てたがはせ給へる事やはおはします。帥の大臣の、大臣までかくすがやかになり給へりしを、はじめ好しとは言ひけるなめり。雷はおちぬれど、又もあがる物を、星のおちて石となるにぞ喩ふべきや。それこそ返りあがること無けれ。をり〱につけたる御かたちなどは、げに長き思出、とこそは人申すめれ。中にも三條院の御時、賀茂の行幸の日、雪の殊の外にいたう降りしかば、御單の袖をひきいでて、御扇を高く持たせ給へるに、いと白くふりかゝりたれば、あないみじとて、うち拂はせ給へりし御もてなしは、

高御座—玉座大極殿の正面にあり

中宮大夫—道長

道殿はいと久しう見えさせ給はぬを、いかゞと思召す程にぞ、いとさりげなく、事にもあらず氣にて參らせ給へる。いかに〳〵、と問はせ給へば、いとのどかに、御刀に削られたるものをとりぐして奉らせ給ふに、こは何ぞ、と仰せらるれば、たゞにて歸り參りて侍らんは、證候ふまじきによりて、高御座の南面の柱のもとを削りさふらふなり、とつれなく申し給ふに、いとあさましう思召さる。こと殿達の御氣色は、いまにもなほ直らで、この殿のかくてまゐり給へるを、帝よりはじめ感じ罵られ給へど、羨しきにや、又いかなるにか、物も言はでぞ候ひ給ひける。なほ疑しく思召されければ、つとめて藏人して削屑をつかはして見よ、と仰せごとありければ、持ちていきておしつけて見たうびけるに、つゆ違はざりけり。その削跡はいとけざやかにて侍るめり。末の世にも見る人は、なほあさましき事にぞ申しゝかし。故女院の御修法して、飯室權僧正のおはしましゝ伴僧のさぶらひしを、女房どもの呼びて相せられけるついでに、內大臣殿はいかゞおはする、と問ふに、いと賢うおはします。天下とる相おはします。中宮大夫殿こそいみじくおはしませ、といふ。又粟田殿を問ひ奉れば、それもいとかしこうおはします、大臣の相おはします、又哀中宮大夫殿こそいみじうおはしませ、といふ。また權大納言殿を問ひ

塗籠―壁にて圍はれたる室

吉上―衞府より陣に召上ぐる下部

宴の松原―宜陽殿北、掃部寮西、近衞南、朱雀西

露臺―屋根なき舞臺仁壽殿の西北

なんや、と仰せられけるに、え罷らじ、とのみ申し給ひけるを、入道は何處なりともまかりなん、と申し給ひければ、さる所おはします帝にて、いと興ある事なり。さらばいけ。道隆は豐樂院、道兼は仁壽殿の塗籠、道長は大極殿へいけ、と仰せられければ、他の君たちは便なき事をも奏してけるかな、と思ふ。又うけたまはらせ給へる殿ばらは御氣色かはりて、益なし、と思したるに、入道殿はつゆさる御氣色もなくて、私の從者をば具し候はじ。この陣の吉上まれ瀧口まれ一人、昭慶門まで送れ、と仰言たべ。それより内には、一人いり侍らん、と申し給へば、證なき事、と仰せらるゝに、げにとて御手箱に置せ給へる小刀まうして立ち給ひぬ。今二所もにがむ〳〵各おはさうじぬ。子四つと奏して、かく仰せられ議する程に、丑にもなりにけん。道隆は右衞門の陣より出でよ。道長は承明門より出でよ、とそれをさへわかたせ給へば、しかおはしましあへるに、中關白殿陣まで念じておはしたるに、宴松原のほどに、その物ともなき聲どもの聞ゆるに、ずちなくて歸り給ふ。粟田殿は露臺の外まで、わなゝく〳〵おはしたるに、仁壽殿の東面の砌の程に、簷とひとしき人のあるやうに見え給ひければ、物も覺えで、身の候はゞこそおほせ事も承らめとて、各たちかへり參り給へれば、御扇をたゝきて笑はせ給ふに、入

四條大納言―公任

さるべき人は云々―偉人は幼年より心猛く佛神の守護も強きならむ

歌は、聞き給へりや。それこそいと興あることを、たゞ人は思ひよるべき事にも侍らぬ和歌の體なり。

おと宮のうぶやしなひを姉宮のしたまふ見るぞうれしかりける

とかや承りしとて、心よくゑみたり。四條大納言のかく何事もすぐれめでたくおはしますを、大入道殿いかでかゝらん、羨しくもあるかな。わが子供の影だに踏むべくもあらぬこそ口惜しけれ、と申させ給ひければ、中關白殿粟田殿などは、實にさもとや思すらん、と恥しげなる御氣色にて、物も宣はぬに、この入道殿は、いと若うおはします御身にて、影をば踏まで面をやは踏まぬ、とこそ仰せられけれ、眞にこそおはしますめれ。内大臣殿をだに、近くえ見奉り給はぬよ。さるべき人は、とうより御心魂のたけく、御守もこはきなめり、と覺え侍るは。花山院の御時に、五月下つ闇に五月雨もすぎて、いとおどろ〳〵しくかきみだれ雨のふる夜、帝さう〴〵しくや思召しけん、殿上に出でさせおはしまして、遊びおはしましけるに、人々御ものがたりなどし給ひて、昔恐しかりけることども、など申させ給へるに、今宵こそいとむつかしげなる夜なめれ。かく人がちなるだに氣色おぼゆ。ましてもの離れたる所などいかならん。さあらん所に一人い

あがりても―上代に於ても

御うぶやしなひ―兒の産れたるいはひ

そのかみや祈りおきけん春日野のおなじ道にも尋ねゆくかな

御かへし。

くもりなき世の光にや春日野のおなじ道にもたづね行くらん

かやうに申しかはさせ給ふほどに、げに〳〵と聞えてめでたく侍りしなかにも、大宮のあそばしたりし。

三笠山さしてぞ來つるいそのかみふるきみゆきの跡を尋ねて

これこそは、翁らが心の及ばざるにや。あがりてもかばかりの秀歌え候はじ。その日にとりては、春日の明神のよませ給へりけると覺え侍り。今日かゝる事どもの榮あるべきにて、先の一條院の御時にも、大入道殿の行幸申し行はせ給ひけるにや、とこそ心えられ侍れな。大方幸おはしまさん人の、和歌の道おくれ給へらんは、事のはえなくや侍らまし。この殿はをりふしごとに、必ずかやうの事を仰せられて、事を榮させ給ふなり。ひとゝせの北政所の御賀によませ給へりしは、

ありなれしちぎりは絶えて今更に心けがしに千代といふらん

又この一品の宮の生れおはしましたりし御うぶやしなひ、大宮のせさせ給へりし夜の御

居易―唐の詩人白樂天

轉輪聖王―天竺の聖王

らずといふ事なきに、この春こそはうせ給ひにしかば、いとゞ只三后のみ世におはしますめれ。此殿事にふれてあそばせる詩和歌など、居易、人丸、躬恒、貫之といふとも、え思ひよらざりけん、とこそ覺え侍れ。春日の行幸は、さきの一條院の御時より始まれるぞかしな。それに又當代稚くおはしませども、必あるべき事にて、始りたる例になりにたれば、大宮御輿にそひ申させ給ひておはします。めでたし、など言ふも世の常なり。すべらぎの御祖父にて、打添ひ仕うまつらせ給へる殿の、御ありさま御かたちなど、すこし世の常にもおはしましかば、あかぬ事にや。そこら集まりたるゐなか世界の民百姓こそは、たしかに見奉りけめ。たゞ轉輪聖王などはかくや、と光るやうにおはしますに、佛見奉りたらんやうに、額に手をあてゝ拜みまどふさまことわりなり。大宮の赤色の御扇さしかくして、御肩の程などは、すこし見えさせ給ひけり。かばかりにならせ給ひぬる人は、つゆの御透影もふたぎ、いかゞとこそは、もてかくし奉るに、ことかぎりあれば、今日はよそほしき御ありさまも、少しは人の見奉らんも、などかはともや思召しけん、殿も宮も言ふよしなく、御心ゆかせ給へりけること、おしはかられ侍れば、殿、大宮に、

かんの殿―後朱雀院の后藤原嬉子
楊貴妃―唐の玄宗皇帝の妃
王昭君―前漢の元帝の宮人
上陽人―玄宗の宮人

ど、なほ又同じき五月八日、准三宮の位にならせ給ひて、年官年爵得させ給ふ。御門東宮の御祖父、三后、關白、左大臣、内大臣、夥多の納言の御父にておはします。世をたもたせ給ふ事、かくて三十一年許にやならせ給ひぬらん。今年は滿六十におはしませば、かんの殿の御産の後に御賀あるべし、とぞ人申す。いかに又さま〴〵おはしまさせて、めでたく侍らんずらん。おほかた又世になき事なり。大臣の御女三人、后にてさしならべ奉り給ふ事、あさましく希有のことなり。唐には昔三千人の后おはしけれど、それは血統も尋ねで、たゞかたちありと聞ゆるを、隣の國まで擇びいだして、その中に楊貴妃ごときは、あまり時めきすぎて悲しき事あり。王昭君はえびすの王に給りて、胡國の人となり。上陽人は楊貴妃にそばめられて、帝に見え奉らで、春のゆき秋の過ぐる事をも知らずして、十六にて參りて六十までありけり。かやうなれば三千人のかひなし。わが國には七の后こそおはすべけれど、代々に四人ぞ立て給ふ。この入道殿下の御一門よりこそ、太皇大后宮、皇太后宮、中宮三所出でおはしたれば、まことに希有の御幸なり。皇后宮一人のみ、すぢわかれ給へりといへども、それも貞信公の御末におはしませば、これをよそ人と思ひ申すべき事かは。しかればたゞ世の中は、この殿の御光な

關白殿―頼通
内―後一條帝
東宮―後朱雀帝
行啓―中宮皇后などの御出行

殿の西の渡殿に出でさせ給ひて、南に向きて拜せさせ給ふ。春日明神に暇まうさせ給ふなりけり。慶明僧都長義律師して、御髮おろさせ給ふ。關白殿をはじめとして、公達殿ばらなど、いとあさまし、と思召せど、おぼしたちて俄にせさせ給ふ事なれば、誰々もあきれて、え制し申させ給はず。あさましとはおろかなり。院源法印戒師したまふ。信惠僧都の袈裟衣をぞ奉りそめける。俄の事にてまうけさせ給はざりけるにや。御名行觀とぞつかせ給へりし。後にしもの文字かへて行覺とぞ侍りし。かくて後にぞ、内東宮の宮たちにも、かくと聞えさせ給ひける。聞きつけさせ給へる宮たちの御心ども、あさましがり騷ぐとはおろかなり。申の時ばかり、小一條院わたらせ給ひ、御門の外にて、御車牛かきおろして引き入れて、中門の外にておりさせ給ひてこそはおはしましゝか。よせて下りさせ給はで、かしこまり申させ給ふ程、いともかたじけなくめでたき御有樣なりしぞかし。宮たちも夕さりこそは渡らせ給ひしか。中宮皇后宮などは、一つ御車にてぞ渡らせ給へりし。行啓のありさまも俄にて、例の作法にも侍らざりけり。同じき年の九月二十七日、奈良にて受戒侍りき。かゝる御ありさまにつけても、めでたき事どもの多く侍りしかど、皆人知り給へる事共なれば細に申し侍らじ。三月二十一日御出家し給へれ

かたほにて—不十分にて
もどかれさせ給ふべき—非難せらるべき
布袴—指貫

君のたまひける。この殿の君たち男女あはせ奉りて十二人、數のまゝにおはします。男も女も御つかさ位こそ心にまかせ給ひつらめ。御心ばへ人柄どもさへ聊かたほにて、もどかれさせ給ふべきもおはしまさず、とり〴〵に有識にめでたくおはしまさふも、只ことごとならず。入道殿の御幸のいふ限なくおはしますなめり。さき〴〵の殿ばらの君たちおはせしかども、皆かうしも思ふさまにやはおはせし。おのづから男も女も、善き惡しきまじりてこそおはしまさふめりしか。この北政所の二人ながら源氏におはしませば、末の世の源氏の榮え給ふべき、と定め申すなり。かゝれば、この二所の御ありさまかくの如し。但殿の御前は、三十より關白せさせ給ひて、一條院、三條院の御時世をまつりごち、我が御心のまゝにておはしましゝに、又當代の九歳にて位に卽かせ給ひにしかば、御年五十一にて攝政せさせ給ふ年、わが御身は太政大臣にならせ給ひ、攝政をば今の關白おとゞに讓り奉らせ給ひて、御年五十四にならせ給ふに、寛仁三年己未三月十八日夜中許より胸やませ給ひて、わざとにはおはしまさねど、いかゞ思召しけん、俄に二十一日の未の時ばかりに起きゐさせ給ひて、御冠めし、搔練の御下襲に、布袴をさうぞかせ給ひて御手水めせば、なに事にか、と關白殿を始めて殿ばらも思召すに、寢

威儀僧―法會の時件僧の先達となりて威儀をつくろふ僧

有識僧綱―有識は善知識僧綱は僧正、僧都、律師を言ふ此は有識なる僧綱の意

年ぞし給はん、とありけるに、かくと聞きてこそさればよ、と宣ひけれ。相人ならねどよき人はものを見給ふなり。入道殿は、益なし。いたう歎きて聞かれじ。心亂れせられんも此人の爲にいとほし。法師子の無かりつるに、いかゞはせん。幼くてもなさん、と思ひしかど、すまひしかばこそあれとて、たゞ例の作法の法師の御定にもてなしきこえ給ひき。受戒にはやがて殿登らせ給ふ。人々のわれも〳〵と御供にまゐり給ひて、いとよそほしげなりき。威儀僧には得もいはぬものども擇らせ給ひき。御さきに有識僧綱どものやんごとなき候ふ。山の所司、殿の御隨身ども、人はらひ罵りて、戒壇にのぼらせ給ひけるほどこそ、入道殿はえ見奉らせ給はざりけれ。御みづからは本意なくかたはら痛しと思したりけり。座主の、手輿に乘りて、白蓋さゝせてのぼられける程にこそ、あはれ天台座主戒和尙の一や、と見え給ひけれ。世繼が隣にはべるものゝ、その際におひて見奉りけるが語り侍りしなり。春宮大夫殿、中宮權大夫殿などの、大納言にならせ給ひしをりは、さりとも御耳止まりて聞かせ給ふらん、と覺えしかど、其大饗のをりの事ども、大納言の座敷添へられし程など、語り申しゝかど、聊御氣色かはらず念誦うちして、かやうの事たゞ霎時の事なり、とぞうち宣はせしなん、めでたく優におぼえしとぞ。通任の

殿—道長
上—道長の夫人
革堂—行願寺
とり奉り——婿に

更によし無し。これぞめでたき事。佛にならせ給はゞ、わが御爲にも、後の世のよくおはせんこそ、つひの事、と人々のいひければ、佛に成らせ給はんも嬉しからず。わが身の後の助けられ奉らんも覺えず。只今の悲しさより外の事なし。殿も上も、御子ども數多おはしませばいとよし。たゞ我一人が事ぞや、とぞふしまろび給ひける。げにさる事なりや。道心なからん人は、後の世の事までもしるべきかはな。高松殿の御夢にこそ、左の方の御ぐしを後をなからより剃りおとさせ給ふ、と御覽じけるを、かくて後にぞ、これが見えけるなりけり、と思ひ定めてちがへさせ祈などをもすべかりける事を、と仰せられける。革堂にて御ぐしおろさせ給ひて、やがてその夜山へ登らせ給ひけるに、加茂川わたりし程のいみじう冷く覺えしなん、少し哀なりし。今はかやうにてあるべき身ぞかしと思ひながら、とこそ仰せられけれ。今の右衞門督ぞ、とくよりこの君をば出家の相こそおはすれ、と宣ひて、中宮權大夫殿の上に、御消息聞えさせ給ひけれど、さる相ある人をばいかでとて、後に此大夫殿をばとり奉り給へるなり。正月に内よりいで給ひて、この右衞門督、右馬頭の物見よりさし出でたりつるこそ、無下に出家の相ちかくなりて見えつれ。何處ぞ、と宣ひければ、頭中將、十九にこそなり給ふらめ、と申し給ひければ、扨は今

菩提申す——佛道に入りて冥福を祈る事

出で——出家

御袙——御下著

心のいたり——思慮

九日入道し給ひて、この十餘年佛の如くして行はせ給ふ。いと思ひかけず哀なる御事なり。みづからの菩提申すべからず、殿の御爲にも、又法師なる御子のおはしまさぬが口惜しく事缺けさせ給へるやうなるに、されば頓て一度に僧正になし奉らん、となん仰せられけるとぞ承るを、いかゞ侍らん。うるはしき御法服、宮々よりも奉らせ給ひ、殿よりは麻の御衣奉るなるをば、あるまじき事に申させ給ふなるをぞ、いみじくわびさせ給ひける。出でさせ給ひける日は、緋の御袙のあまた候ひけるを、これかれあまた重ねて著たるなんうるさき。綿を一つに入れなして、一つばかりを著たらばや。しかせよ、と仰せられければ、此彼そゝぎ侍らんもうるさきに、綿をあつくして參らせん、と申しければ、それは久しくもなりなん。只とくと思ふぞ、と仰せられければ、思しめすやうこそは、と思ひて、あまたが綿を一つに取り入れて參らせたるを奉りてぞ、其夜はいでさせ給ひける。されば御乳母は、斯て仰せられけるものを、何しにして參らせけん。例ならず怪しと思はざりけん心のいたりの無さよ、と泣き惑ひ給ひけんこそ、いと理に哀なれ。ことしもそれに參らせ給はんやうに、かくと聞きつけ給ひては、やがてたえ入りて、なき人のやうにておはしけるを、かく聞かせ給はゞ、いとほしと思して、御心や亂れ給はん、と今

られたるなり

この君を取り奉りて、養ひ傅き奉りて、もちゐ給へるに、西宮殿も十五の宮もかくれさせ給ひにし後に、故女院の后におはしゝをり、この姫君を迎へ奉らせ給ひて、東三條殿の東の對に、帳をたて壁代をひきて、わが御しつらひに、聊おとさせ給はず、しすゑ聞えさせ給ひ、女房、侍、家司、下人まで、別にあかちあてさせ給ひて、姫宮などのおはしまさまし如くに、限なく思ひかしづき聞えさせ給ひしかば、御せうとの殿ばら、われもわれとよしばみまうし給ひけれど、后かしこく制しまうさせ給ひて、今の入道殿をぞ許し聞えさせ給ひければ、通ひ奉らせ給ひし程に、女君二所男君四所おはしますぞかし。女君と申すは、今の小一條院の女御。いま一所は故中務卿宮具平親王と申すは、村上の七の皇子におはしましき。その御男君三位中將師房君とまうすを、今の關白殿のうへの御はらからなるゆゑに、關白殿御子にし奉らせ給ふを、入道殿むことり奉らせ給へり。淺はかに心えぬ事、とこそ世の人申しゝか。殿の内の人も思したりしかど、入道殿思ひおきてさせ給ふやうありけんかしな。男君は大納言にて春宮大夫頼宗と聞ゆる。童名石君、今一所はおなじ大納言中宮權大夫能信と聞ゆる。今一所は中納言長家。御童名こわか君。今一所は右馬頭にて顯信とておはしき。御童名こけ君なり。寛弘九年壬子正月十

權者―佛の化身

思はざる外の事―この事師尹の條に見えたり謀反を企てたりと讒せ

物見、なにの法會やなどあるをりは、御車にても御棧敷にても、必ず御覽ずめり。内東宮宮々とあかれ〳〵よそほしくておはしませど、いづかたにも渡り參らせ給ひては、さし竝びおはします。只今三人の后、東宮の女御、關白左大臣、内大臣の御母、みかど東宮はた申さず、おほよそ世の親にておはします。入道殿と申すもさらなり。大かたこの二所ながら、さるべき權者にこそおはしますめれ。御なからひ四十年ばかりにやならせ給ひぬらん、哀にやんごと無きものに、かしづき奉らせ給ふ、と言へばこそおろかなれ。世の中には、古今の國王、大臣、みな藤氏にてこそおはしますに、この北の政所ぞ、源氏にて御幸極めさせ給ひにたる。昨年の御賀のありさまなどこそ、皆人見聞きたまひし事なれど、なほ返す〴〵もいみじく侍りしものかな。また高松殿の上と申すも、源氏におはします。延喜の皇子高明親王を、延喜二十年十二月二十八日姓をたまはりて、左大臣、左大將になし奉らせ給へりしに、思はざる外の事によりて、大臣とられて、太宰の權帥にならせ給ひて、ながされ給ひし。いとゞ心うかりし事ぞかし。其御女におはします。それをかの殿筑紫におはしましける年、此姫君まだいと幼くおはしけるを、御をぢの十五の宮と申したるも、同じ延喜皇子におはします、女子もおはせざりければ、

この宮々云云ー彰子、妍子、威子、嬉子

に、右大臣にならせ給ひて、長德二年七月二十日又左大臣にならせ給ひにき。そのまゝに、ほかざまへも分れずなりにしぞかし。今にもさこそは侍るべかんめれ。この殿は北の方二所おはします。この宮々の御母上と申すは、土御門左大臣、源雅信大臣の御むすめにおはします。其雅信大臣は、亭子御門の御子、一品式部卿の宮敦實親王の御子、左大臣時平のおとゞの御むすめの腹にうまれ給ひし御子なり。その雅信のおとゞの御女を今の入道殿下の北政所と申すなり。その御はらに、女君四所男君二所ぞおはします。その御有樣は、只今のことなれば、皆人見奉り給ふらめど、言葉つゞけ申さんとなり。第一の女君は、一條院の御時に長保元年十一月一日御歳十二にて、女御に參らせ給ふ。又の年長保二年庚子二月二十五日、十三にて后に立ち給ひて、中宮と申しゝ程に、うちつづき男御子二人うみ奉り給へりしこそは、今の御門東宮におはしますめれ。二所の御母后、太皇大后宮と申して、天下第一の母にておはします。その御さしつぎの女君、內侍のかみと申しし三條院の東宮におはしましゝに參らせ給ひて、宮位に卽かせ給ひにしかば、長和元年二月十四日に后にたゝせ給ひて、中宮と申しき。御年十九。扨又の年長和二年癸丑の年七月二十六日に、女みこ生れさせ給へるこそは。三四ばかりにて一品にな

ふりを乞はゞ云々―瓜を乞はゞ器用意せよ重き官を望む人は器量なかるべからずの意ふりは瓜の古言

はしまさず、たゞ同じ折のさしあはせたりし事なり。小一條左大將濟時卿は四月二十三日。六條左大臣殿、粟田右大臣殿、桃園中納言保光卿、この三人は五月八日一度にうせ給ふ。山井大納言殿は六月十一日ぞかし。又あらじかし、あがりての世にも、かく大臣公卿七八人、二三月のうちにかき拂ひ給ふ事。希有なりし業なり。それも只この入道殿の御幸の上をきはめ給へるにこそ侍るめれ。かの殿ばら、次第のまゝに久しく保ち給はましかば、いとかくしもやはおはしまさまし。まづは帥殿の御心もちゐのさが〳〵しくおはしまさば、父おとゞの御病のほど、天下執行の宣旨くだり給へりし儘に、おのづからさてもやおはしまさまし。それに又大臣うせ給ひにしかば、いかでか嬰兒のやうなる殿の、世の政し給はんとて、粟田殿にわたりにしぞかし。ふりを乞はゞ、うつはものを設けよ、と申す事まことにある事なり。さるべき御次第にて、それ又あるべき事なり。今の入道殿、そのをり大納言中宮大夫と申して、御年いと若く、行末まちつけさせ給ふべき御齢の程に、三十にて四月二十七日に大將にならせ給ふ。五月十一日に、宮中雜事、まづ內覽の關白の宣旨承り給ひて、榮えそめさせ給ひにしぞかし。同じ年の六月十九日

従四位上行云々―位より官の卑き時は行とかき尊き時は守とかく

世の疫―世に流行りし疾病

大鏡　巻之七

○太政大臣道長

この大臣は、法興院のおとゞの御五男。御母は従四位上行攝津守右京大夫藤原中正朝臣の女なり。その朝臣は従二位中納言山蔭卿の七男なり。此道長の大臣は、今の入道殿下、これにおはします。一條院、三條院の御舅、當代、東宮の御祖父にておはします。此殿、宰相にはなり給はで、直に永延二年正月二十九日權中納言にならせ給ふ。御とし二十三。その年上東門院うまれ給ふ。正暦二年九月七日大納言にならせ給ふ。正暦三年壬辰四月二十七日に従二位し給ふ。中宮大夫とぞ申しゝ。御年二十七。關白殿生れ給ふ年なり。長徳元年乙未四月二十七日、左近衛大將かけさせ給ふ。その年の祭の前より、世の中きはめて騒しきに、又の年いとゞいみじくなりたりにしぞかし。まづは大臣公卿多くうせ給へりしに、まして四位五位の程は數やは知りし。まづその年うせ給へる殿ばらの御かず、閑院の大納言殿は三月二十八日、中關白殿は四月十日。これは世の疫にはお

土殿—喪に籠る處

傅殿—道兼の兄右大將道綱

こそは、年比おはす、と聞き奉りしか。その北方は、九條殿の御子の大藏卿君の女ぞかし。さればこの粟田殿の御ありさま、殊の外にあへなくおはしましき。さるは御心いと情なく恐しくて、人にはいみじく怕ぢられ給へりし殿の、怪しく末なくてやみ給ひにき。この殿、父大臣の御忌には、土殿などにもゐさせ給はで、暑きにことつけて、御簾どもあげ渡して、御念誦などもし給はず、さるべき人々よび集め、後撰古今ひろげて興言しあそびて、つゆ歎かせ給はざりけり。その故は、花山院をばわれこそはすかしおろし奉りたれ。されば關白をも讓らせ給ふべきなりといふ御うらみなりけり。よづかぬ御事なりや。さま〴〵よからぬ御事ども聞えしを、傅殿、この入道殿二所は如法に孝じ奉り給ひき、とぞ承りし。

十つらの馬—賀茂の祭の時十人の舞人馬に騎り列りて馬場を競走するなり

御矢めおひ給へり—矢疵を負へり

し車のよこさまのふちを、弓のかたにしたて、●ふちをば矢の形にせられたりしさまの輿ありしなり。　和泉式部君歌詠まれて侍りき。

十つらの馬ならねども君乘ればくるまも的に見ゆるものかな

さてよき風流と見えしかど、人の口やすからぬものにて、賀茂の明神の御矢目おひ給へり、といひなしてしかば、いと便なくてやみにき。この君の頭とられ給ひし。いといみじう侍りし事ぞかし。頭になりて驚き喜び給ふべきならねど、あるべき事にてあるに、粟田殿、花山院すかしおろし奉り、左衞門督、小一條院すかしおろし奉り給へり。帝東宮の御あたり近づかでありぬべき御族といふ事、出できにしぞかし。いと希有に侍りきな。誰も聞しめし知りたる事なれど、男君達かくなり。女君は故一條院の御乳母の藤三位の腹に出でおはしましたりしを、やがてその御時の倉部屋の女御と聞えし。後にこの大藏卿通任君の北の方にてうせ給ひにしぞかし。御むかひばらに、佛神に申して孕まれ給へりし君、今の中宮に、二條殿の御方とてこそは候ひ給ふめれ。父殿女子をほしがりて願をたて給ひしかど、御顏だにえ見奉り給はずなりにき。かやうに哀なる事どもの世に侍るぞかし。その殿の御北の方、粟田殿の御後は、堀河殿の御子の左大臣の北の方にて

いひおこづらせ給ふべきか―いひすかして舞はしむべきか

いづる程に、わざはひかな、あはれ舞はじとて、角髪ひき亂り、御裝束をはら〳〵とひきやり給ふに、粟田殿御色眞青にならせ給ひて、あれにもあらぬ御氣色なり。ありとある人、さ思へる事よ、と見給へど、爲べきやうも無きに、御をぢの中關白殿の、下りて舞臺にのぼらせ給へば、いひおこづらせ給ふべきか、又にくさにえたへず追ひおろさせ給ふべきか、と方々見侍りしほどに、この君を御腰の程に引附けさせ給ひて、御手づからいみじく舞はせ給ひしこそ、樂もまさりおもしろく、かの君の御恥も隱れ、その日の興もことの外に勝りたりけれ。祖父殿も嬉と思したりけり。父大臣はさらなり。よその人だにこそすゞろに感じ奉りけれ。かやうに人のためなさけ〳〵しき所おはしましけるに、など御末かれさせ給ひにけん。この君、人しもこそあれ、蛇れうじ給ひて、その祟により頭にもの腫れてうせ給ひにき。此御弟の二郎君、今の左衞門督兼隆卿は、大藏卿の女の腹なり。この左衞門督の君達、男女あまたおはするなり。大姫君は三條院の三の御子敦平中務宮を、この二月かとよ、壻とり奉り給へる程に、いとよき御中にておはすめり。又姫君おはす四人。又粟田殿の三郎、前頭中將兼綱君、その君の祭の日調じ給へりし車こそ、いとをかしかりしか。檜網代といふもの張りて、的の形に彩られたり

報じ申すべき—道兼の實資に言ひしなり年來の御恩この度何かに付けて報ぜんとなり

この君—福足君

あやにくがりすまひ給へど—いやがりて辭退すれども

りて、とみには得罷り出でねば、かくて申し侍るなり。年比はかなき事につけても、心のうちに喜び申す事なん侍れど、させることなき程は、毎事にもえ申しはべらでなん過ぎまかりつるを、今はかくまかりなりて侍れば、公わたくしにつれて報じ申すべきになん。また大小の事も申し合せん、と思ひ給ふれば、無禮をもえ憚らず、かくらうがはしき方に案内申しつるなり、などこまかに宣へど、詞もつゞかず、只推當にさばかりなりめり、と聞きなさるゝに、御息ざしなど、いと苦しげなるを、いと不便なるわざかな、と思ひしに、風の御簾を吹きあげたりし間より見入れしかば、さばかりの重き病をうけ給ひてければ、いかでかは、御色も違ひて、きらゝかにおはする人とも覺えず、ことの外に不覺になり給ひにけり、と見え給ひながら、長かるべき事ども宣ひしなんあはれなし、とこそ後にかたり給ひけれ。この粟田殿の御男君達三人ぞおはせしが、太郎君は福足君と申しゝを、をさなき人は、さのみこそはと思へど、いとあさましく、正なく惡しくぞおはせし。東三條殿の御賀に、この君、舞をせさせ奉らんとて、習はせ給ふほども、あやにくがりすまひ給へど、よろずにおこづり、祈をさへして、敎へ聞えさするに、その日になりて、いみじうしたて奉り給へるに、舞臺の上にのぼり給ひて、物の調子吹き

御前をめしてかゝりて —前驅の者を召してそれに倚りかかりて

宣旨の下りしかば、あるじの喜び給ひたるさま推しはかり給へ。狹くてことの作法もあるまじとて、立たせ給ひし日ぞ、御喜をも申させ給ひし。殿の御前は、えもいはぬものの限りすぐられたるに、北方の二條にかへり給ふ御供の人は、よきもあしきも、數しらぬまで布衣などにてあるも交りて、殿いだしたて奉りて、わたり給ひしほどの殿のうちの榮、人の氣色は、たゞおぼしやれ。餘にもと見る人もありけり。御心地は少し例ならず思されけれど、おのづからの事にこそは、いま〳〵しく今日の御悅まうしとゞめじ、と思して、念じて內に參らせ給へるに、いと苦しくならせ給ひにければ、殿上よりはえ出でさせ給はで、御湯殿の馬道の戸口に、御前をめしてかゝりて、北の陣より出でさせ給ふに、こはいかにと人々見奉る。殿には常よりも經營して、まち奉り給ふに、人々にかゝりて御冠もしどけなくなり、御紐おしのけて、いといみじう苦しげにて下りさせ給へるを、見奉り給へる御心地、出で給ひつるをりに喩しへなし。されど唯さりともとざゝめきにこそざゝめけ、胸は塞りながら、心地よがほをつくりあへり。されば世にはいと夥しくも聞えず。今の小野宮の右大臣殿の御喜に參り給へりけるをり、母屋の御簾おろして、よび入れ奉らせ給へり。臥しながら御對面ありて、亂心地のいとあしく侍

の事申して大きなる恥辱を取りしと隆家の後悔せしなりほのめき給ふ―いさゝか世に知らる

またあらじかし―斯の如きは無類なるべし

給ひけるを、いみじと思したるさまも、事しもあれ、まことしき事のやうなり。この帥殿の御はらからといふ君たち、數あまたおはすべし。頼親内藏頭、周頼木工頭などいひし人、かたはしより亡くなり給ひて、いまは只兵部大輔周家の君ばかり、ほのめきたまふなり。小一條院の御宮達の御乳母の夫にて、院の恪勤して候ひ給ふ。いとかしこし。また井手少將とありし君は出家とか。故關白殿、御心おきていとうるはしく、あてにおはしましゝかど、御末怪しく、御命も短くおはすめり。今の入道一品宮とこの帥の中納言殿のみこそは殘らせ給ふめれ。

○右大臣道兼

この大臣はこれ大入道殿の御三郎。粟田殿とこそは聞えさすめりしか。長德元年乙未五月二日、關白の宣旨かうぶらせ給ひて、同じ月の八日に亡せさせ給ひにき。御とし三十五とぞ聞えし。大臣の位にて五年。關白と申して七日こそおはしましゝか。この殿ばらの御族に、やがて世をしろしめさぬたぐひ多くおはすれど、またあらじかし、夢のやうにてやみ給へるは。出雲守相如の主の御家にあからさまに渡り給へりしを、關白の

踏板―車の前方にある足かけ板

くゝり―指貫のくゝり

勇悍幹了―屈強の意

中納言―隆家

目をかため―八方に目くばりして

ぞくかう―辱垢、無益

の御牛かけて、御烏帽子直衣いと鮮かにさうぞかせ給へり。えびぞめの織物の御指貫すこし居出でさせ給ひて、祭のかへさに紫野はしらせ給ふ君達のやうに、踏板にいと長やかにふみしだかせ給ひて、くゝりは土にひかれて、簾いと高やかにまきあげて、雑色五六十人ばかり、聲のあるかぎりひまなく御前參らせ給ふ。院には更なり、えもいはぬ勇悍幹了の法師ばら、大中童子など、合せて七八十人ばかりに、大いなる石、五六尺ばかりなる杖ども持たせて、北南の御門築地つらに、一條のまへ洞院のうらへに、ひまなく立て竝めて、御門の中にも候ひ、僧の若やかに力強きかぎり、さるまうけして候ふ。さる事をのみ思ひたる、上下の、けふにあへるけしきどもは、げに如何はありけん。何方にも石杖ばかりにて、まことしき弓矢まではまうけさせ給はず。中納言殿、御車一時ばかりたて給ひて、勘解由小路よりは北に、御門近くまでは、やり寄せ給へりしかど、なほ得渡り給はで、かへらせ給ふに、院方に許多集ひたる者共、一つ心に目をかため守り守りて、やりかへし給ふ程は、一度に笑ひ合せたりし聲こそ、いと夥しかりしか。さる見ものやは侍りしとよ。王威はいみじきものなりけり。得渡らずなりぬるよ。無益の事をいひてけるかな。いみじきぞくかう取りつる、とてこそ笑ひ給ひけれ。院は勝ちえさせ

御門―隆家の

わぬし云々―花山院の御詞

に、何處ともなく、大筏をかずしらず集めて、筏の上に土をふせてうゑ木をたふし、よもやまの田をつくり住みつきて、大方おぼろげの戰に動ずべくもなくなりゆくを、かしこく構へてうちて奉りたるは、いみじき事なり。それはげに人の賢きのみにはあらじ、王威のおはしまさん限は、いかでかさる事はあるべき、と覺えて。さて壹岐對馬の人を、いとおほく刀伊國に捕り持ていきたりければ、新羅のみかどいくさを起し給ひて、みなうちかへし給ひてけり。さて使をつけてたしかにこの島におくり給へりければ、かの國の使には、大貳金三百兩とらせてかへさせ給ひける。この程の事どもかくいみじくしたため給へるに、入道殿猶この帥殿をすてぬ物に思ひ聞えさせ給へるなり。さればにや世にもいとふり捨てがたき覺にてこそおはすれ。御門には、いつかは馬車の三つ四つたゆる時のある。又道もさりあへずたつ折もあるぞかし。この殿の御子、男君、たゞ今の藏人少將良賴君、又右中辨經輔君、又式部丞などにておはすめり。まことに世に遇ひてはなやぎ給へりしをり、此帥殿は、花山院とあらがひごと申させ給へりしはとよ。いと不思議なりし事ぞかし。わぬしなりとも、わが門は得渡らじ、と仰せられければ、隆家、などてかわたり侍らざらん、と申し給ひて、その日と定められぬ。輪つよき御車に、逸物

刀伊國―女眞國の内の一國

御交際たえにたれば―眼病にて世に交はらぬ故

ふめり。政よくし給ふとて、筑紫の人、さながら從ひ申したりけり。例の大貳十年が程にて、のぼり給へり、とこそ申しゝか。彼國におはしましゝほど、刀伊國のもの、俄にこの國をうちとらんとや思ひけん、越え來りけるに、筑紫には、かねての用意もなくて、大貳殿、弓矢の本末をも知り給はねば、いかゞとおぼしけれど、大和心かしこくおはする人にて、筑後、肥前、肥後、九國の人をおこさせ給ふをばさるものにて、府の内に仕うまつる人をさへおしとりて、戰はしめ給ひければ、彼奴が方のものども、多く死にけるに、さはいへど家たかくおはします故に、いみじかりし事たひらげ給へりし殿ぞかし。朝廷、大臣、大納言にもなさせ給ひぬべかりしかど、御交際絶えにたれば、只にはおはするにこそあんめれ。この中にむねと射かへしたる者どもしるして、朝廷に奏せられたりしかば、みな賞ぜさせ給ひにき。種材は壹岐守になされ、其子は太宰監にこそはなさせ給へりしか。この種材が族は、純友うちたりしものゝすぢなり。此純友は、將門と同じ心に語ひて、恐しき事くはだてたるものなり。將門は、みかどをうちとり奉らん、と言ひ、純友は關白にならん、と同じく心を合せて、この世界にわれと政をし、君となりて過ぎん、といふ事をちぎり合せて、一人は東國にいくさを整へ、一人は西國の海

—道長を罵りたるなり
ひがくしの間—階を上りたる處の間
目つくろふ—眼科醫

わが御家のひがくしの間に尻うちかけて、手をはた〳〵とうちゐ給へりける。世の人は宮の御事ありて、この殿御後見もし給はゞ、天下の政はしたゝまりなん、とぞ思ひ申したりしかども、この入道殿の御榮の分けらるまじかりけるにこそは。三條院の大嘗會の御禊に、きらめかせ給へりしさまなどぞ、常より事なりしか。人のこのきはは、さりとも頽れ給ひなん、と思ひたりし所を、たがへんと思しよりしなんめり。さやうなる所おはしましゝこそ、節會行幸には皆練重は奉らぬ事なるを、單あをくて著けさせ給へれば、紅葉重にてぞ見えける。表の御袴、龍膽の二重織物にて、いとめでたくけうらにこそきらめかせ給へりしか。御目のそこなはれ給ひしこそ、いと〳〵あたらしかりしか。よろづにつくろはせ給ひしかども、やませ給うて、御まじらひ絶えたまへる比、大貳の闕いできて、人々望みのゝしりしに、唐人の目つくろふがあなるに、見せんと思して、試にならばや、と申し給ひければ、三條院の御時にて、又いとほしくもや思しめしけん、二言となくならせ給ひてしぞかし。その北方には伊豫守兼資のぬしの御女なり。その御腹の女君二所おはせし。一所は三條院の御子の式部卿の宮の北方。今一所は、傅殿の御子の小宰相のうへとぞ聞ゆめる。二所の御壻をとり奉り給ひて、いみじういたはり聞え給

紐おしやりて—直衣の紐を解き寛ろげ

かしこまりて云々—謹しみて差し控へて

うはぐみ—空を仰ぎ惘然として

哀の人非人

と宣はせて、わざと御消息きこえさせ給ふほど、酒坏數度になりて、人々亂れ給ひて紐おしやりて候はるゝに、この中納言參り給へれば、うるはしくなりて、居直などせられければ、殿、とかく御紐とかせ給へ、こと破れ侍りぬべし、と仰せられければ、かしこまりて逗留し給ふを、公信卿後より解き奉らん、とてより給ふに、中納言殿御氣色あしくなりて、隆家は不運なる事こそあれ、其許たちに斯樣にせらるべき身にもあらず、とあらゝかに宣ふに、人々御氣色かはり給へる中にも、今の民部卿殿はうはぐみて、人々の御顏とかく見給ひつゝ、こといできなんず。いみじきわざかな、と思したり。入道殿うち笑はせ給ひて、今日はかやうの戲ごと侍らでありなん。道長とき奉らんとて、よらせ給ひて、はら〳〵ととき奉らせ給ふに、これらこそあるべき事よとて、御氣色なほりて、さしおかれつる盃とり給ひて、あまたたびめし、常よりも亂れあそばせ給ひけるさまなど、あらまほしくおはしましけり。殿もいみじうもてはやし聞えさせ給ひけり。さて式部卿の宮の御事をのみ、さりともと待ち給ふに、一條院御惱重らせ給ふきはに、御前に參り給ひて、御氣色たまはり給ひければ、あの事こそ遂にえせずなりぬれ、と仰せられけるに、哀の人非人や、と申さまほしくこそありしか、とこそ宣ひけれ。さてまかで給ひて、

さがなもの―性悪しき人の意花山院を射などしたる行蹟ありしよりかくいへり
兄殿の御ののしり云々―兄伊周の流罪に處せられし騷動

言になりなどして、世の中のさがなもの、といはれ給ひし殿の、御童名は阿古君ぞかし。この兄殿の御のゝしりにかゝりて、出雲權守になりて、但馬にこそおはせしか。さて帥殿はかへり給ひしをり、この殿のぼり給ひて、もとの中納言になりし。また兵部卿などこそは聞えさせしか。それもいみじう魂おはす、と世人に思はれ給へりし。あまたの人々の下﨟になりて、かた〴〵すさましく思されながら、歩かせ給ふに、御賀茂詣に仕うまつり給へるに、無下にくだりておはするがいとほしくて、殿の御車に乘せ奉らせ給ひて、御物語こまやかなるついでに、一年の事は、おのれが事行ひたる、とぞ世間にはいひ侍りける。そこにもしかぞ思しけん、されどもさも無かりし事なり。宣旨ならぬ事、一言にても加へて侍らましかば、この御社にかくて參りなましや。天道も見給ふらん。いと恐しきこと、まめやかに宣はせしなん、中々に面おかんかたなく、すぢなく覺えし、とこそ後に宣ひけれ。それもこの殿におはすれば、さやうにも仰せらるゝにぞ。帥殿にはさまでもやは聞えさせ給ひける。この中納言殿は、かやうに得去りがたき事の折々ばかりあるき給ひて、いと古のやうにまじらひ給ふ事はなかりけるに、入道殿の土御門殿にて御遊あるに、かやうの事に、この權中納言のなきこそ、猶さう〴〵しけれ、

わが面伏せて云々—父祖はかくありしかど道雅は此の如しと人に侮られて父祖の面目を損ふな

魂のわき給ふ云々—心の分別ある意

えなり給はずして、坊官の勞に三位ばかりし給ひて、中將をだにえかけ給はずなりにしこそ、こと悲しかりし事ぞかし。あさましく思ひかけぬ事どもかな。この君故帥の中納言惟仲の女にぞ住み給ひて、男一人うませ給へりしは、法師にて明尊僧正の御房にこそおはすめれ。女君いかゞ思ひ給ひけん、みそかににげて、今の皇后宮にこそ參りて、大和宣旨とて候ひ給ふなれ。されば年比の妻子とやは頼むべかりける。中々それしもこそ侮りて、おこがましくもてなしけれ。哀翁が童のさやうに侍らましかば、白髪をも剃り、鼻をもかきおとし侍りなまし。よき人と申すものは、いみじかりし名のをしければ、ともかくもし給はぬにこそあめれ。さるはかの君さやうにしれ給へる人かは。魂のわき給ふ君をば。帥殿はこの内の生れさせ給へりし七夜に、和歌の序題かかせ給へりしぞかし。中々無心の事やな。本體は參らせ給ふまじきを、それにさし出で給ふより、多くの人のめをつけ奉り、いかにおぼすらん、なにせんに參り給へるぞ、とのみまもられ給ふ。いとはしたなき事にはあらずや。それにこの入道殿は、ことにすさましからずもてなしきこえさせ給へるかひありて、憎さはめでたくこそ書かせ給へりけれ。當座の御おもては優にて、それこそ人々ゆるし申し給ひけれ。この帥殿の御一つ腹の十七にて中納

松君—伊周の長男道雅、祖父道隆特に寵愛せしなり
もの覺えぬ—思ひもよらぬ
名簿うちして—名刺を送りて

も先にうせ給ひね、と祈り思ふべかりけれ。おのれ死なば、いかなるふるまひありさまをし給はんずらん、と思ふが悲しく、人わらはれになるべき事、といひつゞけて泣かせ給ふ。怪しきありさまをもし給はゞ、なき世なりとも、怨み聞えんずるとぞ。母北方にも泣々遺言したまひけるかし。その君達、大姫君は高松殿の春宮大夫殿の北方にて、あまたの君たちうみつゞけておはすめり。それはあしかるべき事ならず。今一所は大宮に參りて、帥殿の御方とて、いとやん事なく候ひ給ふめるこそは、思しかけぬ御ありさまなめれ。哀なめりかし。男君は松君とて生れ給ひしより、祖父おとゞいみじきものに思して、迎へ奉り給ふたびごとに、贈りものをせさせ給ひ、御乳母にも饗應し給ひし君ぞかし。このころ三位しておはすめるは。この君を父おとゞ、あなかしこ、我なからん世に、あるまじきわざをせず。又身すてがたしとて、もの覺えぬ名簿うちして、わが面伏せて、いでやさありしかど、かゝるぞかし、と人にいひのけてせさすな。世の中にありわびなんきはゝ、出家すばかりなり、と泣く〳〵いひ仰せ給ひけるに、この君當代の東宮にておはしましゝをりの亮になり給ひて、いと目安き事と見奉りしほどに、春宮亮道雅の君とて、いと覺えおはしきかし。それもいかゞしけん、位に卽かせ給ひしのちに、藏人頭にも

たいだいしき—怠々しき
元方の大納言の云々—元方悪靈となりて冷泉院を怨み奉りし事前に見えたり伊周の死後はさる事を聞かずとなり

を御使にて、入道殿に申し給ひけり。夜いたうふけて、人もしづまりにければ、やがて御格子のもとによりて、しはぶき給ふ。誰ぞ、ととはせ給ふに、御名のり申して、しか〴〵の事にて、修法はじめん、と仕うまつれど、阿闍梨にまうでくる人も候はぬを、請じて給はらん、と申し給へば、いと不便なる御事かな、えこそ承らざりけれ。いかやうなる御心地ぞ、いとたい〴〵しき御事にもあるかな、といみじう驚かせ給ひて、誰をめしたるに参らぬぞ、とくはしくとはせ給ふ。なにがし阿闍梨をこそは奉らせたまひしか。されど世の末は人の心も能くなりにけるにや、惡しくおはしますなど申しゝかど、元方の大納言のやうにやは聞えさせ給ふる。又入道殿なほ勝れさせ給へる威のいみじきに侍るめり。老のなみにいひすごしもぞし侍る、とけしきだちてこの程はうちさゝめく。源大納言重光卿の女のはらに、女君二所、男君三所おはせしが、この君だちみなをとなび給ひて、女君は后がねとかしづき奉り給ひしほどに、さま〴〵思し事どもたがひて、かく御なやみさへおもり給ひにければ、この姫君達をすゑ並べて、泣く〳〵宣ひける。年ごろ佛神にいみじく仕うまつりつれば、何事もさりともとこそたのみ侍りつれど、かくいふがひなき死にをさへせん事の悲しさ。かくしらましかば、君たちをこそわれより

かやうの事さへ云々—帥殿の勢威衰へたるをいふ

かゝれどただ今は—かかる有様なれど一の宮在れば出世の折もあらんと自他共に思ひし也

給ふに、御氣色こよなうなほりて見え給へば、殿をはじめ奉りて、參り給へる人々、哀になん見奉りける。さばかりの事を聞かせ給はんには、少しすさましくもてなさせ給ふべけれど、入道殿は、飽くまで情おはします御本性にて、必ず人のさ思ふらんことをば、おしかへしなつかしくもてなさせ給ふなり。この御博奕はうちたゝせ給ひぬれば、二所ながらはだかに腰からまらせ給ひて、夜半曉まであそばす。心をさなくおはする人にて、便なき事もこそいでくれ、と人はうけ申さざりけり。いみじき御かけ物どもこそ侍りけれ。帥殿はふるき物どもえもいはぬ。入道殿は新らしきが興ある。をかしきさまにしなしつつぞ、互に取りかはさせ給ひけれど、かやうの事さへ、帥殿は常にまけ奉らせ給ひてぞ、まかでさせ給ひける。かゝれどたゞ今は、一宮のおはしますをたのもしき物に思し、世の人もさはいへど、したには追從し、おぢ申したりし程に、今の帝、東宮さしつゞき生れさせ給へりしかば、世を思しくづほれて、月比御病もつかせ給ひて、寬弘七年正月二十九日うせさせ給ひにしぞかし。御年三十七とぞうけたまはりし。かぎりの御病とてもいたうくるしがり給ふ事もなかりけり。御しはぶき病にやなどぞ思しける程に、おもり給ひにければ、修法せんとて僧召せど、參るもの無きに、いかゞはせんとて、道雅の君

そら知らずして―知らぬふりして

帥殿の御供の人々いみじくはらへば、行くべき方のなくて、梅壺の塀の内にはら〳〵と入りたるに、これはいかにと殿御覧ず。怪しと人々見れど、さすがにえともかくもせぬに、なにがしといひし御隨身の、そら知らずして、荒らかにいたう拂ひ出せば、又外ざまにいとらうがはしく出づるに、帥殿の供の人々、このたびはえはらひあへねば、ふとり給へる人にて、すがやかにもえ歩みのき給はで、登華殿の細どのの蔀におし立てられ給ひて、やゝ、と仰せられけれど、せばき處にて、雜人いと多くはらはれて、おしかけられ奉りぬれば、とみにえ退かで、いとこそ不便に侍りけれ。それはげに御つみにもあらねども、只はなやかなる御ありきふるまひをせさせ給はずは、さやうに輕々なることはおはしますべき事かはとぞかし。又入道殿の御嶽に參らせ給へりし道にて、帥殿の方より便なきことあるべし、と聞えて、常よりも世をそれさせ給ふに、平にかへらせ給へるに、かの殿もかゝる事聞えたりけり、と人の申せば、いとかたはらいたく思されながら、さりとてあるべきならねば、參り給へり。道の程の物語などせさせ給ふに、帥殿いたく臆し給へる御氣色のしるきを、をかしくも、又さすがにいとほしくも思されて、久しく雙六仕うまつらで、いとさう〴〵しきに、けふあそばせとて、雙六の枰めして、おし拭はせ

そのうつりつる方―遷任したる躰家

式部卿宮―敦康親王

白殿とて、世の人集り參りしほど、粟田殿にわたりにしかば、手にすゑたる鷹をそらいたらんやうにて、なげかせ給ふ。一家にいみじき事に思しなげきし程に、そのうつりつる方も、夢の如くにてうせ給ひにしかば、今の入道殿その年の五月十一日よりして、世をしろしめしゝかば、かの殿いとゞ無得におはしましゝ程に、又その年、花山院の御事出で來て、御官位とられて、たゞ太宰權帥になりて、長德二年四月二十四日にこそはくだり給ひにしか。御年二十三。いかばかり哀に悲しかりし事なりな。されどげに必ずかやうの事、我がおこたりにてながされ給ふべくもあらず。よろづの事、身にあまりぬる人の、唐土にも、この國にもあるわざにぞ侍るなる。昔は北野の御事ぞかし、などいひて、はなうちかむ程も哀に見ゆ。この殿も御才日本には餘らせ給へりしかば、かゝる事もおはしますにこそは侍りしか。さて式部卿宮のうまれさせ給へる御慶賀にこそは、召し還されさせ給へれ。さて大臣になずらふる宣旨かうぶらせ給ひて、あるき給ひしありさまも、いと落居ても覺え侍らざりき。いとみぐるしきことのみ聞え侍りしものとて、内裏に參らせたまひけるに、北の陣より入らせ給ひて、西ざまにおはしますに、入道殿もさぶらはせ給ふほどなれば、梅壺の東の塀の戸の間に、下人どものいと多くゐたるを、この

小千代君—伊周公の童名

方は、御匣殿と申しし。御かたちいと美しうて、式部卿の宮の母代にておはしましゝも、はかなくうせ給ひにき。一つ腹の女君たちかくなり。對の御方と聞えさせし人の御腹にも、女君おはしけるは、今の皇后宮にこそは候ひ給ふなれ。またも聞え給ふぞかし。男君達は太郎君。故伊豫守守仁のぬしの女のはらぞかし。大千代君よな。それは祖父おとゞの御子にし奉り給ひて、道頼六郎君とこそは申しゝか。大納言までなり給へりき。父の關白殿うせ給ひし年の六月十一日に、うち續きうせ給ひにき。御年二十五とぞ聞えさせ給ひし。御貌いときよげにあまり可惜しきさまして、物よりぬけ出でたるやうにぞおはせし。御心ばへこそこと御同胞にも似たまはず、いとよく、又ざれをかしくもおはせしか。この殿は異腹におはす。皇后宮と同じ腹の男君、法師にて十餘の程に僧都になし奉り給へりし。それも三十六にてうせ給ひにき。今一所は小千代君とて、かのほかばらの大千代君には、こよなくひき越し、二十一におはせし時に、内大臣になし奉り給ひて、我がうせ給ひし年、長德元年の事なり。御病おもくなるきはに、内にまゐらせ給ひて、己れかくまかりなやみ候ふほど、この内大臣伊周のおとゞに、百官竝に天下執行の宣旨給ふべきよし申し下さしめ給ひて、我は出家せさせ給ひてしかば、この内大臣殿を關

起たんもはしたに云云―起つにも起たれずせん術なかりき

二位の新發―從二位高階成忠

古體―古風

しける。さぶらふ人も面の色たがふ心地して、うつぶしてなん、たたんもはしたにすぢなかりける。宮のちには見かへりたりしまゝに、動きもせられず、ものこそ覺えざりし、とこそ仰せられけれ。又學生ども召しあつめて、作文しあそばせ給ひけるに、金を二三十兩ばかり、屛風のかみより投げいだして、人々うち給ひければ、ふさはしからず憎しとは思はれけれど、その座にて饗應し申してとりあらそひけり。金給はりたるはよけれども、さも見ぐるしかりしものかな、とこそいまに申さるなれ。人々文作りて講じなどするに、善し惡じいとたかやかに定め給ふをりもありけり。二位の新發の御流にて、この御ぞうは女もみな才のおはしましたるなり。母上は高内侍ぞかし。されど殿上えせられざりしかば、御前にはえ參らで、行幸節會などには、南殿にぞ參られし。それはまことしき文者にて御前の作文にはふみ奉られしはとよ。少々のをのこには優りてこそ聞え侍りしか。さやうの折、召しありけるにも、臺盤所の方よりは參り給はで、弘徽殿の上の御局の方よりとほりて、二間になん侍ひ給ひける、とこそ承りしか。古體に侍るにや。女のあまりに才かしこきはものあし、と人の申すなるに、この内侍後にはいといみじう墮落せられにしも、そのけとこそ覺え侍りしか。さてその宮のうへのさしつぎの四の御

御思ひたがひて―豫期はづれて

せ給ふ、中宮と申しき。東三條殿の御腦のさかりも過ぎさせ給はで、奉らせ給ひしをぞ、世の人いかにぞや申し侍りし。さて關白殿などうせさせ給ひて後に、男御子一人女みこ二人うみ奉らせ給へりき。女一の宮は入道の一品宮とて三條におはします。女二宮は九つにてうせさせ給ひにき。男親王式部卿の宮敦康親王とこそ申ししか。たび〳〵御思ひたがひて世の中を思し歎きてうせ給ひにき。御年二十九にて、あさましうてやませ給ひにしかな。冷泉院の宮達などのやうに、かろ〴〵におはしまさましかば、いとほしさもよろしくや、世の人思ひ申さまし。御ざえいと賢く御心ばへもいとめでたくぞおはしましし。さて又この宮の御母后の御さしつぎの君は、三條院の東宮と申しゝをりの淑景舍とて、はなやかせ給ひしも、父殿うせ給ひにし後、御年二十二三ばかりにてうせさせ給ひにき。三の御方は冷泉のみこ、帥宮と申しゝをこそは、父殿壻とり奉らせ給へりしも、後にはやがて御中絶えにしかば、末の世は、一條わたりにいと怪しくておはする、とぞ聞え給へりし。まことにや。御心ばへなどの、いとおちゐずおはしましければ、かつは宮もうとみ聞え給へりけるとかや。僧客人などの參りたるをりは、御簾をいとたかやかにおしやりて、御ふところをひろげて立ち給へりければ、宮は御面うち赧めてなんおはしま

濟時、朝光―二人は道隆の酒友なれば二君の居らるる所ならば極樂に行かんとの意

天下執行の宣旨―太政官の文書内覽の宣旨

や、御病つきてうせ給ひける時、西にかきむけ奉りて、念佛申させ給へ、と人々の勸め奉りければ、濟時、朝光などもや、極樂にはあらんずらん、と仰せられけるこそ哀なれ。常に御心に思しめしならひたる事なれば、あの地獄の鼎のはたに、頭うちあてゝ、三寶の御名を思ひ出でけん人のやうなりや。御かたちぞいと淸らかにおはしましし。帥殿の天下執行の宣旨くだし奉りに、この民部卿殿の頭辨にて參り給へりけるに、御病いたく迫めて、御裝束もえ奉らざりければ、御直衣にて御簾の外にゐざり出でさせ給ひしにも、長押をおりわづらはせ給ひて、女の裝束御手にとりて、かたのやうにかづけさせ給ひしなん、いとあはれなりし。こと人のいとさばかりなりたらんは、ことやうなるべきを、なほいとかはらかにあてにおはせしかば、病つきてしもこそ、かたちはいるべかりけれ、となん見えしとこそ、民部卿殿はつねに宣ふなれ。その關白殿は腹々に男子女子あまたおはしましき。今の北方は大和守高階成忠のぬしの御女なり。後の世は、高二位、とこそ言ひはべりしか。さて積善寺の供養の日は、この入道殿の上に候はれしは、いとめでたうなりしわざかな。その腹に男君三所、女君四所おはしましき。大姫君は一條院の十一にて御元服なさせ給ひしに、十五にてや參らせ給ひけん。やがてその年の六月一日に后にゐさ

御前の松の光—前驅の持てる松明の光

乘り給ふぞいと興ある事にせさせ給ひける。但しこの殿御醉の程よりは、とく醒むることをぞせさせ給ひし。御賀茂詣の日は、社頭にて三度の御かはらけ定りて參らするわざなるを、その御時には、禰宜神主も心えて、大かはらけをぞ參らせしに、三度はさらなることにて、七八度などめして、上の御社に參り給ふ道にては、やがてのけざまにしりの方を御枕にて、不覺におほとのごもりぬ。一の大納言にてはこの御堂殿ぞおはしましゝかば、御覽ずるに、夜に入りぬれば、御前の松の光にとほりて見ゆるに、御透影のおはしまさねば、怪しと思しめしけるに、參りつかせ給ひて、御車かきおろしたれど、えしらせ給はず、いかにと思へど御前どももえ驚かしまうさで、只さぶらふなめるに、入道殿おりさせ給へるに、さてあるべきことならねば、轅の外ながら、たかやかにやゝと御扇をならしなどせさせ給へど、更に驚き給はねば、近く居寄りて表の御袴のすそをあらゝかに引かせ給ふをりぞ、驚かせ給ひて、さて御用意はならはせ給へれば、御櫛笄、ぐし給へりける取り出でてつくろひなどして、おりさせ給ひけるに、聊かさりげなく淸らかにてぞおはしし。さればさばかり醉ひなん人は、その夜は起きあがるべきかは。それぞこの殿の御上戸はよくおはしましける。その御心のなほ終までも忘れ給はざりけるに

御みき云々の―酒の中毒

大鏡 巻之六

○内大臣道隆

この大臣は、これ東三條の大臣の一男なり。御母は女院の同じ腹なり。關白になりさかえ給ひて、六年ばかりやおはしましけん。大疫癘の年こそ亡せさせ給ひけれ。されどもその病にはあらで、御みきの亂れさせ給ひにしなり。男は、上戸、ひとつの興の事にすれど、すぎぬるはいと不便なるをりはべりや。祭のかへさ御覽ずとて、小一條大將閑院大將と一つ御車にて、紫野に出でさせ給ひぬ。烏のついゐたるかたを、瓶に作らせ給ひて、興あるものに思して、ともすれば、おほ酒入れてめす。今日もそれにて參らする。もてはやさせ給ふほどに、あまり漸々すぎさせ給ひて、後には御車の尻口の簾みなあげて、三所ながら御もとどり放ちておはしましけるは、いとこそ見ぐるしかりけれ。大方この大將殿たちの參り給へる。尋常にて出で給ふをば、いと本意なく口をしき事に思しめしたりけり。物も覺えず、御裝束も引き亂りて、御車差し寄せつゝ、人にかかりて

いとあつしくて―病氣甚重くして

三平―時平、仲平、忠平

三道―道隆、道兼、道長

申すめりし。いとあつくして大將をも辭し給ひてき。その殿今の入道殿の北政所の御はらからをすみ奉り給ひて、生れ給へりし君、宰相中將兼經の君よ。道命阿闍梨、きはめたる和歌の上手におはしける。父大納言殿は、寛仁四年十月十三日に出家。同十六日にうせ給ひにき。御とし六十六とぞ聞き奉りし。大入道殿の三郎粟田殿、又、四郎は外腹の治部少輔君とて世の白痴にて、交際もせで、やみ給ひぬとぞ聞き侍りし。五郎君たゞ今の入道殿におはします。女院の御母北方の御はらの君達三所の御ありさま申し侍らん。昭宣公の御君達三平とは聞えさすめりしに、この三所をば三道とや世の人申しけん。えこそうけ給はらずなりしかとて、ほゝゑむ。

あがまゝ—我が思ふ儘

へりけれ。贈皇后宮の御ひとつはらの今一所の姫君は、圓融院の御時、梅壺の女御と申して、一の御子生れ給へりき。その御子五つにて東宮に立たせ給ひ、七つにて位に即かせ給ひにしかば、御母女御どの寛和二年丙戌七月五日后にたゝせ給ひて、中宮と申しき。この御門を一條院と申しき。その母后、入道せさせ給ひて太上天皇とひとしき位にて、女院と聞えさせき。一天下をあがまゝにしておはしましき。この父大臣の太郎君、女院の御ひとつはらの道隆の大臣、内大臣にて關白せさせ給ひき。次郎君は陸奥守倫寧ぬしの女の腹におはせし君なり。道綱と聞えし。大納言までなりて、右大將かけ給へりき。この母君きはめたる和歌の上手におはしければ、この殿の通はせ給ひけるほどのこと、歌などかきあつめて、かげろふの日記と名づけて、世にひろめ給へり。殿のおはしましたりけるに、門を遲くあけければ、たび／＼御消息いひいれさせ給ふに、女君、

歎きつつひとりぬる夜のあくるまはいかに久しき物とかはしる

いと興ありとおぼして、

げにやげに冬の夜ならぬ槇の戸もおそくあくるは苦しかりけり

されば、その御はらの君ぞかし。この道綱卿、後には東宮傅になり給ひて、傅殿とぞ

御帯―儀式の時に用ふる石帯

鈎―石帯の端の金具

元服劣―元服せる爲に容貌の前に劣れるを言ふ。

といふ高名の御帯は、三條院にこそは奉らせたまへれ。鈎のうちに東宮に奉る、と刀のさきして、自筆にかゝせ給へるなり。この比は一品宮にとこそ、うけたまはれ。この東宮の御弟の宮たちは、すこしかろがろにぞおはしましし。帥宮の祭のかへさ、和泉式部の君とあひ乘らせ給ひて、御覧ぜしさまも、いと興ありきやな。御車のくちの簾を、中よりきらせ給ひて、わが御方をば高う上げさせたまひ、式部の方をばおろして、衣ながう出ださせて、紅の袴にあかき色紙の物忌ひろきつけて、土とひとしうさげられたりしかば、いかにぞ、物見よりはそれをこそ人見るめりしか。彈正宮の童におはしましし時の御容貌の美くしさは、はかりも知らず、耀くとこそは見えさせ給ひしか。御元服劣の殊の外にせさせ給ひにしをや。この宮たちは御心のすこし輕くおはしますこそ、一家の殿ばらうけ申させ給はざりしかど、さるべき事のをりなどは、いみじうもて傅き申させ給ひし。帥宮一條院の御時の御作文に參らせ給ひしなどには、御前などさるべき人多くて、いとこそめでたうて參らせ給ふめりしか。御前には御襪のいたう狹めさせ給ひけるに、心地もたがひて、いと堪へがたくおはしましければ、この入道殿に、かくと聞え申させ給ひて、鬼間におはしまして、御襪をひきぬき奉らせ給へりければこそ、御心地なほらせ給

人やりならぬ—我が心より爲したる

さらとはしりかゝるものか。ともかくもの宣はせで、やがてたゝせ給ひぬ。東宮に參らせ給ひて、まことにさぶらひけるとて、し給ひつる有樣を啓せさせ給へれば、さすがにもと心苦しう思召しならせ給へる御中なればにや、いとほしげにこそおぼしめしたりけれ。内侍のかみは、殿歸らせ給ひて後に、ひとやりならぬ御心づからいみじう泣き給ひけりとぞ。そのをり見奉りたる人かたり侍りし。東宮にさぶらひ給ひしほども、宰相は通ひ參り給ふこと、あまりこと出でてこそは、宮もきこしめして、帶刀どもして射させやせまし、と思ひしかど、故大臣の事を亡きかげにもいかゞ、といとほしかりしかば、さもせざりし、とこそ仰せられけれ。この御過より、源宰相三條院の御時は殿上もしたまはで、地下の上達部にておはせしに、この御時にこそは殿上し、撿非違使の別當などになりてうせ給ひにしか。今一つの御腹の大君は、冷泉院の女御にて、三條院、彈正宮、帥宮の御母にて、三條院位に卽かせ給ひしかば、贈皇后宮と申しき。この三人の宮たちを、おほぢ殿ことのほかにかなしうし申し給ひき。世の中に、少しの事もいでき、かみもなり地震もふる時は、まづ東宮の御方に參らせ給ひて、をぢの殿ばら、それならぬ人人などを、内の御方へは參れ、この御方には、我さぶらはん、とぞ仰せられける。雲形

形の黑むまで云々―久しく持ちたまひて指などの色のかはるなり

不便―不都合

たちいとうつくしうて、御ぐしも十一二のほどに、絲をよりかけたるやうにて、いとめでたくおはしませば、ことわりとて、三條院の東宮にて御元服せさせ給ふ。夜の御そひぶしに參らせ給ひて、三條院もにくからぬものに思召したりき。夏いとあつき日渡らせ給へるに、御前なる氷をとらせ給ひて、これしばしもち給ひたれ。まろを思ひ給はゞ、今はといはざらんかぎりはおき給ふな、とて持たせ聞えさせ給ひて、御覽じければ、まことに、形の黑むまでこそ持ちたまひたりけれ。さりとも暫時ぞあらん、と思ししに、あはれさ過ぎて、うとましくこそ覺えし、かとこそ院は仰せられけれ。あやしきことは、源宰相賴定君かよひ給ふ、と世に聞えて、里にいで給ひにきかし。たゞならずおはすとさへ、三條院聞かせ給ひて、この入道殿にさる事のあなるは、まことにやあらん、と仰せられければ、まかりて見て參りはべらんとて、おはしたりければ、例ならず怪しくおぼして、几帳ひきよせ給ひけるを、おしやらせ給へれば、もとはなやかなるかたちに、いみじうけさうし給へれば、常よりも美しう見え給ふ。春宮に參りたりつるに、しか〱仰せられつれば、見奉りに參りつるなり。そらごとにもおはせんにしか聞しめされ給はんが、いと不便なればとて、御胸をひき開けさせ給ひて乳をひねり給へければ、御顏に

子を下ろす事

ゆふけとひ―夕占問ひ、夕方辻に出でて行人の語を聞きて我が思ふ事を判断するなり

せけるに、目に見えぬ物のはら〳〵と參りわたしたりければ、候ふ人々は怖ぢさわげど、殿はつゆ驚かせ給はで、御枕上なる太刀をひき拔かせ給ひて、月見るとて上げたる格子を下すは、何者のするぞ。いと便なし、元のやうに上げわたせ。さらずは惡しかりなん、と仰せられければ、やがて參りわたしなど、おほかたおちゐぬ事ども侍りけり。さてつひに殿はらのにもならで、かく御堂にはなさせ給へるなんめり。この大臣の御君達、女君四所、男君五人おはしましき。女二所、男三所、五所は攝津の守藤原中正のぬしの御むすめの腹におはします。三條院の御母の贈皇后宮と女院、大臣三人ぞかし。この御母いかに思しけるにか、未若うおはしけるをり、二條の大路にいでて、ゆふけとひ給ひければ、白髮いみじく白き女の、只ひとり行くが立ち止りて、なにわざし給ふ人ぞ。もしゆふけとひ給ふか。何事なりとも、おぼさんことかなひて、この大路よりも廣く長くさかえさせ給へよ、と申しかけてこそまかりにけれ。人にはあらで、さるべきものゝ示し奉りけるにこそ侍りけめ。女君一人は女院の后宮にておはしましゝをりの宣旨にておはしき。又對の御方と聞えし御腹の女、大臣いみじうかなしうし聞えさせ給ひて、十一におはせしをり、内侍のかみになし奉らせ給ひて、うちずみせさせ奉らせ給ひし。御か

賀茂の若宮―上賀茂社の別雷神

下格子―格

それさせ給ひて、夢ときに問はせ給ひければ、いみじうよき御夢なり。世の中の、この殿にうつりて、あの殿の人のさながら參るべきが見えたるなり、と申しけるが、あてざりしことかは。又その比いとかしこき巫侍りき。賀茂の若宮のつかせ給ふとて、伏してのみ物を申しゝかば、うちふしのみこ、とぞ世人つけて侍りし。大入道殿召してものとはせ給ひけるに、いとかしこく申せば、さし當りたること、過ぎにし方の事は、皆さいふ言なれば、しか思召しけるには、叶はせ給ふ事どものいで來るまゝに、後々には御裝束奉り、御冠せさせ給ひて、御膝に枕せさせてぞ、物は問はせ給ひける。それに一事として後々の事申しあやまたざりけり。さやうに近く召し寄するに、言ふかひなき程のものにもあらで、少しおもと程のきはにてありける。この殿法興院におはしますことをぞ、快からぬ所、と人はうけ申さゞりしかど、いみじう興ぜさせ給ひて、きゝもいれで、わたらせ給ひて、ほど無くうせおはしましにき。御物忌のをり渡らせ給はんとて、おはしましてはいかゞある、と御卜をせさせおはしまして、そのたび法興院にて御やまひつきてうせさせ給へるぞかし。みまやの馬に御隨身のせて、粟田口へ遣したるが、あらはにはるばると見ゆるなどをかしき事に仰せられて、月のあかき夜は、下格子もせで、ながめさ

紐ときて—直衣の紐を解き寛ろげて

夢とき—夢判斷する者

卿にて二十年。大臣の位にて十二年。攝政にて五年。太政大臣にて二年。世を知らせ給ふこと、さかえて五年ぞおはします。正暦元年七月二日うせさせたまひにき。御年六十二。出家せさせ給ひてしかば、後の御いみななし。うちに參らせ給ふにはさらなり。牛車にて北の陣まで入らせ給へば、それより内はなにばかりの程ならねど、紐ときて入らせ給ふとぞ。されどそれはさてもあり、相撲の折、東宮のおはしませば、二所の御前に、なにをもおしやりて、御汗衫ばかりにて候はせ給ひけるこそ、世にたぐひなくやんごとなき事なれ。末には北方もおはしまさゞりければ、をとこずみにて、東三條殿の西の對を清涼殿造に、御しつらひより始めて、住ませ給ふなどをぞ、あまりなる事に人申すめりし。なほたゞ人にならせ給ひぬれば、御果報のおよばせ給はぬにや。さやうの御身持に久しくは保たせ給はぬとも定め申すめりき。その程は、夢ときもかんなぎも、賢き者どもの侍りしぞとよ。堀河の攝政のはやり給ひし時に、この東三條殿は御つかさども停められさせ給ひて、いと辛くおはしましゝ時に、人の夢に、かの堀河院より矢をいとおほく東ざまに射るを、いかなるぞ、と見れば、東三條殿に皆落ちぬ、と見けり。よからず思ひ聞えさせ給へる方より、矢おはせ給はば、悪しき事ならん、と思ひて、殿にも申しければ、お

なり

御車にさぶらはせ給ひて、ひとみち、公成おぼしめせ思しめせ、とおなじことを啓せさせ給ひける。あはれなるものから、をかしうなんありし、とこそ宮仰せられけれ。繁樹が姪の女の、中務のめのとのもとに侍るが、まうできて語り侍りしなり。頭中將顯基の君の御若君とかや、御五十日をば四條にわたし聞えて、太政大臣殿こそくゝめさせ給ひけれ。御おほぢの右衞門督ぞ抱き聞え給へるに、この若君の泣き給へば、例はかくもむつからぬに、如何なればかゝらん、と右衞門督たちゐ慰め聞え給ひければ、自ら稚兒はさこそはあれ。汝もさぞありし、と太政大臣殿宣はせけるにこそ、人々參り給へりける、皆ほゝゑみ給ひにけれ。中にも四條少將隆國君は、つねに思ひいでてぞ、今に笑ひ給ふなる。かやうにあまりに古代にぞ、おはしますべき。昔の御童名は、宮雄君とこそは申しゝか。

○太政大臣兼家

この大臣は、これ九條殿の三郎君。東三條の大臣におはします。御母は一條攝政におなじ。冷泉院圓融院の御をぢ、一條院三條院の御おほぢ、東三條女院贈皇后宮の御父。公

内住—内裏に住居する事

かゝらであらばやなどぞ云々—公季幼少より皇子達と狎れ親しみし故皇子達と異なる待遇を受くる時は不平ある

にし。この生みおき奉らせ給へりし太政大臣をば、御姉の中宮さらなり、世のつねならぬ御族思ひにおはしませば、養ひ奉らせ給ふ。内にのみおはしまして、帝もいみじうらうたきものにせさせ給へば、つねには御前に候はせ給ひて、なに事も宮たちの御同じやうに傅づきもてなし申させ給ふに、おものめす御臺の丈ばかりをぞ、一寸おとさせ給ひけるを、區別にしるき事にはせさせ給ひける。昔はみこたちだに稚くおはしますほどは、内住せさせ給ふ事なかりけるに、此若君のかくて候はせ給へば、あるまじき事、と誹り申せど、かくておひたゝせ給へれば、なべての殿上人などに、なずらはせ給ふべきならねど、若うおはしませば、おのづから御戯などの程にも、なみ〳〵に振舞はせ給ひしをりは、圓融院の御門、同じほどのおのこども、と思ふにや、かゝらで有らばや、などぞ呻吟かせ給ひける。斯る程に、御年積らせ給ひて、又御うまごの頭中將公成君をことの外にかなしがり給ひて、内にも、御車のしりにのせさせ給はぬかぎりは、參らせ給はず。さるべきことのをりも、この君遲くまかり出で給へば、弓場殿に御さきばかり參らせ給ひてぞ、まちたゝせ給へれば、見奉り給ふ人など斯てはたゝせ給へる、と申させ給へば、いでまち侍るなり、とぞ仰せられける。無量壽院の金堂供養に、東宮の行啓ある

小野宮のおとゞ―清愼公實頼

まろは云々―自分は此世に生き長らふまじき心地す

したうづ―束帶に用ふる革足袋

殿―師輔

きし日、この宮うちにおはしますに、殿上の人々、四の宮の御方に參れ、おそろしくおぼしめすらん、とおほせ事あれば誰も參り給ふに、小野宮のおとゞぞかし。參らじ。御前のきたなきに、とつぶやき給へば、後にこそ、御門思召しあはせけめ。さて殿にまかでさせ奉りて、思ひかしづき奉らせ給ふ、といへば、さらなりや。さる程にこの太政大臣を孕み奉り給ひて、いみじうものの心細くおぼえさせ給ひければ、まろは、さらにあるまじき心地なんする。よし見給へよ、と男君に常にきこえさせ給ひければ、實にさもおはしますものならば、かた時もおくれ申すべきならず。もし心にあらず、ながらへ候はゞ、出家し侍りなん。又ふたつ、こと人見るべきにも侍らず、天がけりても御覽ぜよ、と申させ給ひける。法師にならせ給はんことは、あるまじきとやおぼしめしけん、ちひさき御唐櫃一よろひに、片つ方は御烏帽子、いまかたつ方には、したうづを、ひと唐櫃づつ御てづからつふと縫ひ入れさせ給ひけるを、殿はさもしらせ給はざりけり。さてつひにうせさせ給ひにしは。さればこの太政大臣殿は生れさせたまへる日を、やがて御忌日にておはしますなり。かの縫ひおかせ給ひし御烏帽子、御したうづ御覽ずるたびごとには、九條殿しほたれさせ給はぬ折なし。まことにその後はひとりずみにてぞやませ給ひ

四宮―康子內親王

御裳著の屏風―女子の裳著は男子の元服に相當す其祝ひに用ふる屏風

上―村上帝

の殿の御子。播磨守陳政の御女の腹に、女君二所、男一人おはします。大姫君は今の中宮の權大夫殿の北の方。今一所は源大納言俊賢卿、これ民部卿と聞ゆる。その御子のただ今の頭中將顯基君の御北方にてぞおはすめる。男君をば、御おほぢの太政大臣殿、わが御子にし奉り給ひて、公成とつけ奉らせ給へるなり。藏人頭にていとおぼえ殊にておはする君になん。この太政大臣殿の御有樣かくなり。帝后たゝせ給はす。このおほき大殿の御母うへは、延喜の御門の御女、四宮と聞えさせき。延喜いみじく時めかし思ひ奉らせ給へりき。御裳著の屏風に、公忠の辨、

　ゆきやらで山路くらしつ郭公いまひとこゑの聞かまほしさに

とよむは、この宮のなり。貫之などあまたよみて侍りしかども、人にとりてすぐれ罵られ給ひしうたよ。二代の帝の一つ御はらの妹におはします。さてうちずみして傅づかれおはしましゝを九條殿は、女房かたらひて、みそかに參らせ給へりしぞかし。世の人便なき事に申し、村上のすめらぎも安からぬ事に思召しおはしましけれど、色に出でてとがめ仰せられずなりにしも、この九條殿の御おぼえの限なきによりてなり。まだ人人うちさゝめき、上にもきこしめさぬほどに、雨のおどろおどろしく降り、かみなり閃

高名の弘高―有名なる畫家巨勢弘高

弘徽殿の女御―義子

て、そこなはれたゝなれ。この中納言になり給へるは、いと世おぼえあり、よき人にておはしき。また權中將道信君、いみじき和歌の上手にて、心にくき人にいはれ給ひし程に、うせ給ひにき。また只今の左衞門督公信卿、また法住寺の僧都君、阿闍梨君おはす。まこと一條攝政殿の御女の腹の女君たち、三四五の御方おはします。三の御方は鷹司殿のうへとて、尼になりておはします。四の御方は入道殿の俗におはしましゝをりの御子うみてうせ給ひにき。五君は今の皇后宮に候はせ給ふ。この大臣の御有樣かくなり。法住寺をぞ、いといかめしうおきてさせ給へる。攝政關白せさせ給はぬ人の御仕業にては、いと猛なりし。この大臣いとやんごとなくおはしましゝかど、御末ほそくぞ。

○太政大臣公季

この大臣、たゞいまの閑院大臣におはします。これ九條殿の十一郎君。御母、宮ばらにおはします。御子の御女をぞ北方にてはおはしましゝ。その御はらに、女君一所、男君二所。女君は一條院の御時の弘徽殿の女御、今におはします。男一人は三昧僧都如源と申しし、うせ給ひにき。今一所の男君は、只今の右衞門督實成卿にぞおはする。こ

ここに―自分に
この弟―齊信
故中關白―道隆

れも成らなん、と思して、わざと對面し給ひて、このたびの中納言のぞみ申し給ふな。ここに申し侍るべきなり、と聞え給ひければ、いかでか殿の御さきには罷りなり侍らん。ましてかく仰せられんにはあるべきことならず、と申し給ひければ、御心ゆきて、しかおぼして、いみじう申し給ふに、及ばぬ程にやおはしけん、入道殿この弟にそこには申されぬか、と宣はせければ、左衞門督の申さるればいかゞは、としぶ〳〵げに申し給ひければ、かの左衞門督はえならじ。又そこにさらずば、こと人こそはなるべかめれ、と宣はせければ、かの左衞門督まかりなるまじくば、よしなし、なしたふべきなり、と申し給へば、またかくあらんには、こと人はいかでかとてなり給ひにしを、いかにわれにむかひて、あるまじきよしをいひてはかりけるぞ、とおぼすに、いとゞ惡心おこして、除目の朝より、手をつよく握りて、われは齊信道長にはかられぬるぞ、といひいりて、物もつゆ參らず、うつぶし伏し給へるほどに、病つきて、七日といふにうせ給ひしに、握り給ひたりけるおよびはあまりつよくて、うへにこそ通りて出で給へりけれ。いみじき上戸にてぞおはせし。故中關白殿のひとゝせの臨時客に、あまり醉ひて、御座にゐながら立ちもあへ給はで、ものつき給へるにこそ、高名の弘高がかきたる樂府の御屛風にかかり

花山院の御時の女御―弘徽殿の女御忯子

入道中納言―藤原義懷

宰相―參議の唐名

侍らず。事の故はかくなり。關白は次第のまゝに、といふ御文思しめしより、御妹の宮に申してとり給へるも、最後に思すことどもしてうせ給へるほども、思ひ侍るに心強くかしこくおはしましける殿なり。

○太政大臣爲光

この大臣は、是九條殿の御九郎君。大臣の位にて七年。法住寺の大臣と聞えさす。正暦三年六月十六日に失せ給ひにき。御年五十一。のちの御いみな恒德公と申しき。御子男子七人。女君五人おはしき。女二所は佐理の兵部卿の御妹の腹。今三所は一條攝政の御女の腹におはします。男君たちの御母皆別々におはしましき。女君一所は、花山院の御時の女御。いみじうときにおはせし程に、御子孕ませ給ひて、八月にてうせ給ひにき。今一所は入道中納言の北の方にてうせ給ひにき。男君太郎は左衞門督誠信と聞えし。三十八にて惡心起してうせ給ひにし有樣は、いとあさましかりし事ぞかし。人にこえられからいめ見る事は、さのみこそおはしあるわざなるを、さるべきにこそはありけめ。同じ宰相におはすれど、弟殿には人がら世おぼえのおとり給へればにや。中納言あくきはにわ

ま―今にも息絶えん有様

昆明池の障子云々―禁祕抄清涼殿の條に、二間與二上御局一之際立二昆明池障子一とあり

昆明池は漢の武帝の掘りし池

てふしたまへる人の書きおこせ、と宣へば、人々怪しと思ふほどに、車に裝束せよ。御前もよほせ、と仰せらるれば、物のつかせ給へるか、うつし心もなくて仰せらるゝか、と怪しく見奉るほどに、御冠めしよせて、裝束などせさせ給ひて、内へ參らせ給ひて、陣のうちは君達にかゝりて、瀧口の陣の方より御前へ參らせ給ひて、昆明池の障子のもとに差し出でさせ給へるに、日御座に、東三條大將御前に候ひたまふ程なりけり。この大將殿は、堀河殿すでにうせ給ひぬ、と聞かせ給ひて、内に關白の事申さん、と思ひ給ひて、此殿の門を通りて參りて申し奉る程に、堀河殿の目をつゞらかにさしいで給へるに、御門も大將もいとあさましく思し召す。大將はうち見るまゝに起ちて、鬼間の方におはしぬ。關白殿御前についゐ給ひて、御氣色いとあしくて、最後の除目おこなひに參り給へるなりとて、藏人の頭めして、關白には賴忠大臣、東三條殿の大將をとりて、小一條の濟時の中納言を大將になし聞ゆる宣旨くだして、東三條殿をば治部卿になし聞えて、いでさせ給ひて、程なく失せ給ひしぞかし。心意地にておはせし殿にて、さばかりかぎりにおはせしに、妬さに内に參りて申させ給ひしほど、こと人は、すべうもなかりしことぞかし。されば、東三條殿司取りたまふことも、ひたぶるに堀河殿の非常の御心にも

いなふねの―最上川のぼれば下るいなふねのいなにはあらずこの月ばかり

かぎりのさ

由を、長歌(ながうた)によみて奉り給へりしかば、帝(みかど)の御かへり、いなふねの、とこそ仰せられければ、暫時(しはし)ばかりを思し歎きしぞかし。堀河殿はては我(われ)うせ給はんとて、關白をば御いとこの頼忠大臣(おとゞ)に讓り給ひしこそ、世人(よひと)、いみじきひが事、と謗(そし)り申しゝか。この向(むか)ひをる侍のいふやう、東三條殿のつかさとり奉らせ給ひし程の事は、理(ことわり)とこそ承りしか。おのれがおほぢ親は、かの殿(との)の年比(としごろ)のものにて侍りしかば細(こまか)に承りしは、この殿(との)たちの兄大臣の御中、年比のつかさ位の劣優(おとりまさり)のほどに、御中あしくて過ぎさせ給ひし間に、堀河殿の御病重くならせ給ひて、今は限にておはしましゝほどに、東の方に、前追(さきお)ふ音のすれば、御まへに侍(さぶら)ふ人たち、誰ぞ、など言ふほどに、東三條大將殿參らせ給ふ、と人の申しければ、殿聞かせ給ひて、年比なからひよからずして過(す)ぎつるに、いまは限になりたる、と聞きて、とぶらひにおはするにこそはとて、御前(おまへ)なるくるしきものとりやり、おほとのごもりたる所引(ひ)き繕(つくろ)ひなどして、入れ奉らんとて待ち給ふに、早くすぎて内へ參らせ給ひぬ、と人の申すに、いとあさましく心うくて、御前(おまへ)に候ふ人々もをこがましと思ふらん、おはしたらば關白など讓(ゆづ)ることなど申さん、とこそ思ひつるに、かゝればこそ年比(としごろ)なからひよからで過ぎつれ、あさましく安(やす)からぬ事なりとて、かぎりのさまに

そのけに—其故に

源帥—醍醐天皇の皇子高明

つるこそ、ありがたく覺えはべりつれ。心よくうちすみたりし顏氣色こそ、いとをかしかりしか。さて時々もとの上の御もとへおはしまさんとて、牛飼車副などに、そなたへ車をやれ、と仰せられけれど、さらにきかざりけり。この今北方、侍、雜色、隨身、車副などに、裝束ものとらする事はさるものにて、日毎に酒をいだして飮ませあそばせ、いみじき志どもをしける。そのけにやかくしけるを、それまたいと怪しき御心なりや。雜色牛飼の心にまかせて、それによりてえおはしまさゞりけんよ、さることやは侍る。さるはこの大將は御心ばへも容も、人に優れてめでたくおはせし人なり。又、堀河殿の御子大藏卿正光ときこえしが、御女源帥の御中君の御はらぞかし。今の皇后宮の御匣殿とてさふらひ給ふ。只今の左兵衛督の北方、また上野の前司兼定の君ぞかし。まことや北面の中納言とかや世に人の申しゝは時光卿。それまた、右京大夫にておはせし。この大夫の御子ぞかし、今の仁和寺の別當律師尋淸君。堀河殿の御末かばかりか、この大臣すべて非常の御心ぞおはしましし。かばかり末たえず榮えおはしましける東三條殿を、故なきことにより、御つかさ位をとり奉り給へりし。いかに惡事なりしかは。天道も安からず思し召しけんを、そのをりの帝圓融院にぞおはしましし。東三條殿かゝる歎の

て、髪ちゞけたるにぞおはしける。御容のほどを思ひしりて、さまにあひたる裝束とおぼしけるにや、まことにその御さうぞくこそ、容にあひて見えけれ。さばかりの人の北方と申すべくも見えざりけれど、もとの北方、重明式部卿の宮の姫宮、貞觀殿の内侍のかみの御はら、やんごとなき人と申しながら、容ありさまめでたく御座しけるに、かゝる人に思し移りて、去り奉らせ給ひけんほど思ひ侍るに、たゞ德のありて、かくもてかしづき聞ゆるに思のおはしけるにや。やんごとなき人だにこそ、かくはおはしけれ。あはれ、翁らが心にだに、いみじき寶をふらして扱はんといふ人ありとも、年比の女どもを打ち捨てゝまからんは、愛惜しかりぬべきに、さばかりにやんごとなくおはします人は、不合におはすといふとも、翁らがやどりのやうに侍らんやは。この今北の方ことに、世の人にも輕く思はれ、世おぼえも劣り給ふらし。いと口惜しき事に侍りや。さばかりの事思し分かぬやう侍るべしや。あやしの翁らが心におとらせ給はんやは、と思ひ給ふれど、くちをしく思ひ給ふる事なりしかば申すぞやとて、ほゝゑむ氣色恥しげなり。さばかりの人だにかくをはしましければ、それより次々の人のいかなる振舞もせん。理なりや。翁らがこゝらの年ごろ、あやしの宿に、わりなき世を念じすごして侍り

そのうへ―延光卿の北の方時平公の孫女

徳につき給へる―利益を目的にしたる

伏籠―衣服を暖むるに用ふる籠

練色―薄き黄色

ひたひに花形云々―疱瘡の痕を言ふ

りて、枇杷大納言延光卿のうせたまひにし後、そのうへの年老いて、容など悪くおはしけるにや、ことなる事聞え給はざりしをぞ住み給ひし。徳につき給へる、とぞ世人申しし。さて世おぼえも劣り給ひにしぞかし。元のうへ御容もいと美くしく、人の程もやんごとなくおはしましゝかど、不合におはすとて、かゝる今北方をまうけて、さり給ひにしぞかし。この今のうへの御もとには、女房三十人ばかり、裳唐衣きせて、えもいはず装束きて据ゑならべて、しつらひありさまより始めて、めでたく仕立てゝ、傅きこゆる事限なし。大将ありきて歸り給ふをりは、冬は火おほらかに埋みて、たきもの大きにつくりて、伏籠うちおきて、褻に著給ふ御衣をば暖にてぞ著せ奉り給ふ。すびつにしろがねのひさげ二十ばかりをすゑて、さま〴〵の藥をおき竝べて參り給ふ。疊のうはむしろに綿入れてぞしかせ奉らせ給ふ。寐たまふ時には大きなる熨斗もちたる女房三四人許いできて、かのおほとのごもるむしろをば、暖にのしなでてぞねさせ奉り給ふ。あまりなる御用意なりしかば、大方のしつらひ有樣、女房の裝束などはめでたけれども、この北方は練色のきぬの、綿あつきふたつばかりに白袴うちきてぞおはしける。年四十餘ばかりなる人の、大將には親ばかりにぞおはしける。色黑くて、ひたひに花がたうちつき

や、仕うまつり給へりしに、この胡籙おひ給へりしは、朝日の光に輝きて、さるめでたき事やは侍りし。今は目なれにたれば、珍しからず人も思ひて侍るぞ。何事につけても、華麗にもていでさせ給へりし殿の、父どのうせ給ひにしかば、世中衰へなどして、御病も重くて、大將も辭し給ひてしこそ口惜しかりしか。さてたゞ按察大納言とぞ聞えさせし。和歌などこそいと賢くあそばししか。四十五にてうせ給ひにき。北の方には貞觀殿の内侍のかみの御腹の、重明式部卿の宮の御中姫君ぞおはせしかし。その御腹に男君三人。女君の耀く如くなるおはせし。花山院の御時に參らせ給ひて、一月ばかりいみじう時めかせ給ひしを、いかにしてける事にかありけん、まう昇り給ふ事もとゞまり、帝も渡らせ給ふこと絶えて、御文だに見え聞えずなりにしかば、一二月候ひわびてこそは、出でさせ給ひにしか。又さあさましかりし事やはありし。御容などの世の常ならずをかしげにて、思し歎く。見奉りたまふ父の大將、御兄の君たち、いかがは思しけん。その御一腹の男君三所。太郎君は今の藤中納言朝經卿におはすめり。人におもく思はれ給ふめり。二郎三郎君は右馬頭少將などにて、みな出家しつゝうせ給ひにき。この右馬入道の御男子は今の右京の大夫なり。この閑院の大將殿は、後にはこの君達の母をばさ

爲平の式部卿の宮―村上天皇第四子母藤原安子

高松殿の御匣殿―道長の女寛子、御母は高松殿源高明の御女明子なればいふ

の承香殿の女御とておはせしかど、院うせ給ひて後、すゑには爲平式部卿宮の御子、源宰相頼定の君のきたのかたにて、あまたの君達おはすめり。その程の御事どもはみな人知しめしたらん。その宰相うせ給ひにしかば、尼になりておはします。いま一所は、今の小一條院のまだ式部卿の宮と申しゝをり、聟にとり奉らせ給へりしほどに、東宮にたたせ給へりしを、うれしき事に思ししかど、院にならせ給ひし後は、高松殿の御匣殿にわたらせ給ひて、御心ばかりは、通はせ給ひながら、かよはせ給ふ事たえしかば、女御も父大臣も、いみじう思し歎きしほどに、御病にもなりにけるにや、すぎにし未の年の二月ばかりにうせ給ひにき。いみじきものになりて、父大臣ぐしてこそ、しありき給ふなれ。院の女御には常につき煩はせ給ふなり。そのはらに宮たちあまた所おはす。又堀河關白殿の御次郎兵部卿有明親王の御女のはらの君、中宮の御一腹にはおはせず。これは又閑院左大將朝光と申して、父の大臣のおはしましゝをり、兄の大臣宰相にておはしける程は、この殿は中納言にてぞおはしける。ひき越され給ひけるぞめでたき。凡ていみじかりし御世覺にて、容も心もすぐれ給へり。御交際の程など、ことの外にきらめき給ひき。胡籙の水晶のはずも、此殿の思ひ寄り、しいで給へるなり。なにごとの行幸にぞ

これよりおとなる―此人より年長なる

廣幡云々―廣幡中納言庶明の女、計子

こく、また御後見などこそは申しすゝめけめ。物まうで禱をいみじうせさせ給ひけるとか。稲荷の坂にてもこの女ども見奉りけり。いと苦しげにて御後見押しやりて、扇がれさせ給ひける御姿つき、さしぬきの腰際なども、さはいへど、多くの人よりは氣高く、なべてならずぞ御座しましける。かやうに務めさせ給ふつもりにや、やう〳〵大人び給ふまゝに、これよりおとなる御女もおはしまさねば、さりとも后にたて奉らであるべきならねば、かく參らせ奉らせ給ひて、いとやんごとなくて候はせ給ひしぞかし。今一所のひめ君、内侍のかみにならせ給へりし。今におはします。六條左大臣殿の御子の讃岐守の上にておはすとかや。又、太郎君は顯光と聞えし。堀河左大臣とまうす。長德二年丙申七月二十日、右大臣にならせ給ひにき。御年七十八にやおはしましけん。治安元年五月二十五日ぞうせ給ひし。この五年ばかりにやなりぬらん、惡靈左大臣殿とまうし傳へたる。いと心うき御名ぞかし。その故どももみな侍るべし。この北方には村上の先帝の女五の宮、廣幡御息所の御はらぞかし。その御腹に男一人、女二人ぞおはしまし。男君は重家少將とて、心ばへ有識に世覺おもくてまじらひ給ひしほどに、世に久しく御座しますまじかりければにや、出家して亡せたまひにき。女君一所は、一條院の御時

卯酒―夜明けに呑む酒

て、内へ參らせ給ふまゝに、花の下に立ちよらせ給ひ、一枝おし折りて、御挿頭にさして、けしきばかり打ちかなでさせ給へりし日などは、いとこそめでたく見えさせ給ひしか。この殿には、後夜にめす卯酒の御さかなには、只今殺したる雉をぞ參らせけるに、もて參りあふべきならねば、宵よりぞまうけて置かれけるを、業遠のぬしのまだ六位にて始めて參らるゝ夜、御沓櫃のもとにゐられたりければ、櫃のうちに、物のほと／＼としけるが怪しさに、暗きまぎれなれば、やをら細目にあけて見給ひければ、雉の雄鳥はかゞまりをる物か、人のいふ事はまことなりけり、と淺ましくて、人の寢にけるをりに、やをら取り出でて、懷にさし入れて、冷泉院の山に放ちたりしかば、ほろ／＼と飛びてこそいにしか。事しえたりし心地は、いみじかりしものかな。それにぞわれは幸人なりけりとは覺えしか、となん語られける。殺生は殿ばらのみなせさせ給ふ事なれど、これはむげの無益なり。この殿の御女、式部卿の宮元平のみこの御女のはらの姫君、圓融院の御時の女御にまゐり給ひて、天延元年七月十一日后にたゝせ給ひて堀河中宮と申しき。御子生れ給はずなりにき。天延六年六月二日うせ給ひにき。稚くおはしましし程は、いかなりけるにか、例の御親のやうに、常に見奉りなどもし給はざりければ、御心いとかし

すぢなは―血統

れば、紫のうすやう一かさねに、故宮の御手にて、關白をば次第のまゝにせさせたまへ。努々たがへさせ給ふな、と書かせ給へる。御覽ずるまゝに、いとあはれげに思召したる御氣色にて、故宮の御手よ、など仰せられ、御文をばとりて入らせ給ひにけりとこそは。さてかくいで給へる、とこそは聞え侍りしか。いと心かしこく思しける事にて、さるべき御宿世とは申しながら、圓融院孝養の心深くおはしまして、母宮の御遺言たがへじとて、なし奉らせ給へりける、いと哀なる事なり。その時賴忠の大臣右大臣にておはしましゝかば、道理のまゝならば、この大臣のし給ふべきにてありしに、この文にてかくありける、とこそは聞え侍りしか。東三條殿もこの堀川殿よりは上﨟にておはしましゝかば、いみじう思召しよりたる事ぞかし。御母の事のなきは一條殿と同じきにや。この殿の御袴著に、貞信公の御もとに參り給へる、贈物にそへさせ給ふとて、貫之ぬしにめしたりしかば、奉りたりし歌、

ことに出でて心の中にしらるるは神のすぢなはひけるなりけり

ひきいで物に琴をせさせ給へるにや。御貌いと淸げに、きらやかになどぞおはしましし。堀河院に住ませ給ひし比、臨時客の日、寢殿のすみの紅梅さかりに咲きたるを、事はて

それがやうならん爲にこそあれ―直ちに關白になさんが爲に大將にはせさせ給はざりしとなり

貞元二年十一月八日うせさせ給ひき。御とし五十三。同二十日贈正一位の宣旨あり。後の御諱忠義公と申しき。この殿かくめでたくおはします程よりは、ひまなくて大將にえなり給はざりしぞ口惜しかりしや。それかやうならん爲にこそあれ。さても有りぬべき事なり。たゞ思しめせかしな。御母の事なきは一條殿の同母にや。圓融院の御母后は、此大臣の妹におはします。この后、村上の御時康保元年四月二十九日にうせ給ひにしぞかし。この后のいまだおはしましし時に、この大臣いかゞ思しけん、關白は次第のまゝにせさせ給へ、と書かせ奉りてとり給ひたりける御ふみを、守護のやうに首にかけて、年比持ちたりけり。御弟の東三條殿は、冷泉院の御時の藏人頭にて、此殿よりもさきに三位して、中納言にも成り給ひしに、この殿は、はつかに宰相ばかりにておはせしかば、世の中すさまじがりて、内にもつねに參り給はねば、帝も疎く思しめしたり。その時に兄の一條攝政、天祿三年十月にうせ給ひぬるに、この御ふみを内にもて參り給ひて御覽ぜさせん、と思すほどに、うへ鬼の間におはします程なりけり。折よし、と思召すに、御をぢの中に疎く御座します人なれば、うち御覽じて入らせ給ひき。さしよりて奏すべき事、と申し給へば、たち歸らせ給へるに、この文を引き出でて參らせ給へれば、取りて御覽ず

めかゝうして―赤目なして

る。また筍のかはを男のおよびごとに入れて、めかゝうして、稚兒をおどせば、顔あかめてゆゝしう怖ぢたるかた、又德人、たよりなしの家のうちの作法などかゝせ給へりしが、いづれも〳〵さぞ有りけん、とのみあさましうこそ候ひしか。この中に御覽じたる人もやおはしますらん。

○太政大臣兼通

この大臣、これ九條殿の二郎君。堀河の關白と聞えさせき。關白し給ふこと六年。安和二年正月七日宰相にならせ給ふ。閏五月廿一日宮内卿とこそは申ししか。天祿二年閏二月二十九日中納言にならせ給ひて、大納言をば經て十一月二十七日内大臣にならせ給ふ。いとめでたかりし事なり。弟の東三條殿の中納言におはしましゝに、未この殿は、宰相にていと辛きことに思したりしに、かくならせ給ひし。めでたかりし事なりかし。天延二年正月七日從二位せさせ給ふ。二月二十八日に太政大臣にならせ給ふ。やがて正二位せさせ給ひ、輦車ゆるさせ給ひて、三月二十六日關白にならせ給ひにしぞかし。宰相にならせ給ひし年より六年といふに、ならせ給ひにき。天延三年正月七日一位せさせ給ひてき。

けうら—立派

六宮—花山院第六皇子清仁親王

あて御繪—戯畫の類物に押しあてゝかく畫

いだされんがれう、とおもしろく思しめしたる事ぞかし。御調度どものけうらさこそ、えもいはず侍りけれ。六宮のたえいり給へりし御誦經にせられたりし御硯の箱見給へき。海賦に、蓬萊山手長足長など、黄金してまかせ給へりしこそ。かばかりの箱のうるしつき蒔繪のさま、唫置かれたりし樣などのいとめでたかりしなり。又木だちつくらせ給ひしをりは、櫻の花は優なるに、枝さしのこは〳〵しくて幹のやうなどもにくし。梢ばかりを見るなんをかしきとて、中門より外にうゑさせ給へる、何よりもいみじく思しよりたり、と人は感じ申しき。又撫子の種を、築地のうへにまかせ給へりければ、思ひかけず四方に色々の唐錦をひき懸けたるやうに咲きたりしなどを見給へしは、いかにめでたく侍りしかは。入道殿のくらべ馬せさせ給ひし日は、迎へ申させ給ひけるに、渡おはします日の御裝は更なり。おろかなるべきにもあらねど、それにつけても、まことに御車のさまこそ、又世に比類なく候ひしか。御沓にいたるまで、たゞ人の見ものになるばかりこそ、後には持ちて歩くと承りしか。あて御繪遊したりし興あり。さは、はしり車の輪には、薄墨にぬらせ給ひて、大きさのほどやなど、しるしには墨をにほはせ給へりし。實にかくこそ畫くべかりけれ。あまりにはしる車は、いつかは黒さの程やは見え侍

たる和歌は、いづれも人の口にのらぬなく、優にこそうけたまはれな。心見にほかの月をも見てしがなわが宿からのあはれなるかとなどはこの御有様に思召しよりける事とも覺え侍らず。心ぐるしうこそ候へ。さてまた冷泉院に筝奉らせ給へるをりのは、

よの中にふるかひもなき竹の子は我へん年をたてまつるなり

御かへし

年へつる竹のよはひは返してもこの世を長くなさんとぞ思ふ

忝く仰せられたり、と御集に侍るこそ哀に候へ。まことにさる御心にもいはひ申さん、と思しめしけんかなしさよ。この花山院は風流者にさへおはしましけるこそ。御所つくらせ給へりしさまなどよ、寢殿、對、渡殿などはつくりあひ、檜皮ふきあはする事も、此院のしいでさせ給へるなり。昔は別々にて、あはひに筧かけてぞ侍りし。内裏は今にさてこそは侍るめれ。御車やどりにはいたじきを、奥は高く、はしは下りて、大きなるつま戸をせさせ給へるゆゑは、御車の裝束を、さながらたてさせ給ひて、おのづからとみの事のをりに、とりあへず戸おしひらかば、からからと人の手ふれぬさきに、さし

庭火—御神樂の終りに庭前にて燃く火
事いださせ給へりし云云—喧嘩を言ふ
高帽の賴勢—高き帽を戴きたる賴もしき勢ある從者
達磨—數珠の止め珠

順のぬしの庭火いと猛なりや、と宣ひけるにこそ、萬人えたへず笑ひ給ひにけれ。さて又花山院のひとゝせ、祭の還さ御覽ぜし御ありさまは、誰も見奉りけんな。前の日、事いださせ給へりし度の事ぞかし。さる事あらん時、けふはなほ御歩行など無くてもあるべきに、いみじき一のものども高帽の賴勢を始として、御車のしりに多くうちむれ參りし氣色ども、言へばおろかなり。なによりも御珠數のいと興ありしなり。ちひさき柑子をおほかたの玉に貫かせ給ひて、達磨には大柑子をしたる御珠數いと長く、御指貫に具して、いださせ給へりしは、さる見ものやは候ひしな。人々紫野にて御車に目をつけ奉りたりしに、撿非違使參りて、きのふ事出だしたりし童とらふべし、といふ事いできにけるものか。此比の權大納言殿、まだ其比は若くおはしましし程ぞかし。人走らせて、かうかうの事候ふ。疾くかへらせ給ひね、と申させ給へりしかば、そこら候ひつるものども、蜘の子を風の吹き拂ふ如くに遁げぬれば、たゞ御車ぞひのかぎりにてやらせて物見車の後の方よりおはしまししこそ、さすがにいとほしく忝く覺えおはしましか。さて撿非違使づきや、いといみじうからうせめられ給ひて、太上天皇の御名は長く朽させ給ひにき。かゝればこそ、民部卿殿の御いひごとは實に、と覺ゆれ。さすがにあそばし

御親の院―冷泉院
頭光に―阿彌陀冠に項かせたる樣を言ふ

ます御屏風の面に引き附けられて、つぶと動きもせず。あまり久しくなれば、今はとて許させ給ふをりぞ、つげつる僧どものがり、躍り往きぬるを、早う院の御護法のひきとるにこそありけれ、と人々哀に見奉る。それさる事に侍り。驗もしなによる事なれば、いみじきおこなひ人なりとも、いかでかなずらひ申さん。前生の戒力に、又國王の位をすて給へる出家の御功德、かぎりなき御事にこそおはしますらめ。行末までもさばかりにならせ給ひなん御心には、懈怠せさせ給ふべき事かはな。それにいと怪しくならせ給ひし御心あやまちも、たゞ御物怪のし奉りぬるにこそは侍るめりしか。中にも冷泉院の南の院におはしましし時、燒亡ありし夜、御とぶらひに參らせ給へりし有樣こそ、不思議に候ひしか。御親の院は、御車にて二條町じりの辻にたゝせ給へり。この院は、御馬にて、頂に鏡いれたる笠、頭光に奉りて、何處にか在します〱、と御てづから人ごとに尋ね申させ給へば、こそ〱になん、ときかせ給ひて、おはしまし所へ近くおりさせ給ひぬ。御馬の鞭かひなにいれて、御車のまへに御袖うちあはせて、いみじうつぎ〱しうゐさせ給へりしは、さる事やは侍りしとよ。それに又冷泉院の御車の中より、高やかに神樂歌を謠はせ給ひしは、さま〲興ある事をも見きくかな、と覺え候ひしに、明

いたりありける人—思慮の周到なる人

驗くらべ—修驗者共互に我が修法の功驗の優劣を比較する事

いみじう笑はせ給ひけり。この義懷中納言の御出家、惟成辨のすゝめ聞えられたりけるとぞ。いみじういたり有りける人にて、今更によそ人にてまじらひ給はんほど、見ぐるしかりなん、と聞えさせければ、實にさもといとゞ思してなり給ひにしを、もとよりおこし給へる道心ならねば、いかゞと人思ひ聞えしかど、おちゐ給へる御心の本性なれば、懈怠なく行ひ給ひてうせ給ひにしぞかし。その御子は只今の飯室の尋圓僧都。又延圓阿闍梨、入道中將成房の君なり。この三人は、備中守爲雅が女の腹なり。その中將の御女は、定經ぬしの御妻にてこそはおはすめれ。一條殿の御族は、いかなる事にか、御命短くぞおはしますめる。花山院御出家の本意あり。いみじう行はせ給ひ、修行せさせ給はぬ所なし。されば、熊野の道に、千里濱といふ所にて、御心地そこなはせ給へれば、濱づらに石のあるを御枕にて、おほとのごもりたるに、いと近くあまの鹽やく烟のたちのぼる心細さ、げにいかに哀におぼされけんな。

旅のそら夜半の煙とのぼりなば蜑のもしほ火たくかとやみん

かゝるほどに御驗もいみじうつかせ給ひて、中堂にのぼらせ給へる夜、驗くらべしけるを、試みんと思召して、御心の中に念じおはしましければ、護法つきたる法師、おはし

ふび—不便

ひければ、舞人の馬を後涼殿の北の馬道よりとほさせ給ひて、朝餉のつぼに引き下させ給ひて、殿上人どもをのせて御覽ずるをだに、あさましう人々思ふに、はては乘らんとさへさせ給ふに、すべき方もなくて候ひあひ給へる程に、さるべきにや侍りけん、入道中納言さしいで給へりけるに、帝御面いと赤くならせ給ひて、ずちなげに思召したり。中納言もいとあさましう見奉り給へど、人々の見るに制し申さんも、中々に見ぐるしければ、もてはやし興じ申させ給ふ様にもてなしつゝ、みづから下襲の尻はさみて乘り給ひぬ。さばかり狹きつぼに、をりまはしおもしろうあげ給へば、御氣色なほりて、あしき事にはあらぬ事なりけり、と思召して、いみじう興ぜさせ給ひけるを、中納言あさましうも、哀にもおぼさるゝ御けしきは、同じ御心によからぬ事をはやし申し給ふとは見えず。誰もさぞかしとは、見しり聞えさする人もありければこそは。かく申しつたへたれな。又みづからのり給ふまでは餘なり、といと人もありけり。これならず、ひたぶるに色にはいたくも見えず、たゞ御本性のけしからぬ樣に見えさせ給へば、いと大事にぞ。されば源民部卿は、冷泉院のくるひよりは花山院のくるひこそずちなき物なれ、とまうし給ひければ、入道殿は、いとふびなる事をも申さるゝかな、と仰せられながら、いと

有識――ものしり

内劣の外めでた――花山院内裏におはします頃はさもあらざりしに出家の後はいみじく行はせられしを言ふなり

たるぞかし、と放言し奉りたるを、大納言殿きかせ給ひて、明理の濫行に行成が醜名よぶべきにあらず。いとからい事なりとて、笑はせ給ひければ、人々いみじう宣はせたり。と興じ奉りて、その比のいひごとにぞしはべりしか。また一條攝政殿の御男子、花山院の御時、帝の御をぢにて、義懷中納言ときこえし。少將たちの御同腹よ。その御時はいみじうはなやぎ給ひしに、御門御出家せさせ給ひてしかば、やがてわれもおくれ奉らじとて、花山寺まで尋ね參りて、中ひと日はさめて、法師になり給ひき。飯室といふ處に、いと尊く行ひてぞかくれ給ひしに、その中納言文旨にこそおはせしかど、御心魂いとかしこく、有識におはして、花山院の御時の政は、たゞこの殿と惟成辨としておこなひ給へれば、いといみじかりしぞかし。その帝をば内劣の外めでた、とぞ世の人申しし。冬の臨時祭日の暮るゝあしき事なり。辰の時に人々參れ、と宣旨下させ給ふを、さぞ仰せらるとも、巳午の時にぞはじまらん、など思ひ給へりけるに、舞人の君達、裝束給りに參りおはさうじたりければ、みかどは御裝束奉りて、たゝせおはしましたりける。この入道殿も舞人にておはしましければ、このごろ語らせ給ふなるを、傳へて承るなり。あかく大路など渡るがよかるべきにや、と思ふに、みかど馬をいみじう興ぜさせ給

御筆とぢめて―御筆やはらかに

一の大納言―大納言中の故參

上人、扇どもして參らするに、こと人々は骨に蒔繪をし、或は金、銀、沈、紫檀の骨になん、筋を入れ、ほりものをし、えもいはぬ紙どもに、人のなべてしらぬ歌や歌や、又六十餘國の歌枕、名あがりたる所々などをかきつゝ人々參らするに、例のこの殿は、骨の漆ばかりを、をかしげに塗りて、黄なるから紙のした繪ほのかにをかしき程なるに、おもての方には樂府を麗しう眞にかき、裏には御筆とぢめて、草にめでたくかきて奉り給へりければ、うちかへしうちかへし、御門御覽じて、御手箱にいれさせ給ひて、いみじき御寶と思しめしたりければ、こと扇どもは、たゞ御覽じ興ずるばかりにてやみ侍りにけり。いづれも〳〵御門の御感侍るに增すことやは有るべきよな。いみじき秀句宣へる人なり。この賀陽院どのにて競馬ある日、つゞみは讃岐の前司明理の君ぞうち給ひし。一番にはなにがし、二番にはかがし、など言ひしかど、その名こそ覺えね、勝つべきかたのつゞみを惡しく打ち下げて、負けになりければ、その隨身のやがて馬の上にのりながら、ないばらをたちて、見かへるまゝに、あなわざはひや。かばかりの事をだにしそこなひ給ふよ。かゝれば明理、行成と一雙にいはれ給ひしかども、一の大納言にていとやんごとなくて候はせ給ふに、くさりたる讃岐の前司ふる受領の、鼓うちそこなひて、たち給ひ

歌論議—殿上にて和歌の討論する事

えしらず—知らぬにはあらず萬一を慮りて知らずと答へたるなり

らう／＼しく—老練に

こまつぶり—獨樂

たまはざりける。このもののけの家は、三條よりきた西洞院よりは西なり。今は一條殿の御族荷且にも入らぬ處なり。この大納言殿よろづにとゝのひ給へるを、和歌のかたや少しおくれ給へりけん。殿上に歌論議といふ事いできて、その道の人々いかゞ問答すべき、など歌の學問より外の事もなきに、此大納言殿は、物ものたまはざりければ、いかなる事ぞとて、某の殿の、難波津に咲くやこの花冬こもり、いかに、と聞えさせ給ひければ、とばかり物も宣はで、いみじう思ひ案ずるさまにもてなして、えしらず、と答へさせ給へりけるに、人々笑ひてことさめ侍りにけり。少しいたらぬ事にも、御魂の深くおはして、らう／＼しくなし給ひける御本性にて、御門をさなく御座しまして、人々に遊もの參らせよ、と仰せられければ、さま／＼金銀など心を盡して、いかなる事をがな、と風流をしいでてもて參りあひたるに、この殿こまつぶりに、村濃の緒つけて奉り給へりければ、怪しの物のさまや。こは何ぞ、と問はせ給ひければ、しか／＼の物になん、と申す。まはして御覽じおはしませ、興ある物に、など申されければ、南殿に出でさせ給ひて、まはさせ給ふに、いとひろき殿の中に殘らずくるめきあるきければ、いみじう興ぜさせ給ひて、これをのみ常に御覽じ遊ばせ給へば、こと物どもは籠められにけり。又殿

代々の御悪霊—いつまでも祟る悪霊

まもりのこはく—守護神の力強く

し男子も女子もありとも、はか〴〵しくてはあらせじ。哀といふ人もあらば、それをも怨みん、など誓ひて、失せ給ひにければ、代々の御悪霊とこそはなり給ひたれ。されば、ましてこの殿近うおはしませば、いと恐し。殿の御夢に、南殿の御うしろ必ず人の参るに通る所よな。そこに人の立ちたるを、たれぞ、と見れば、顔は戸のかみに隠れたればよくも見えず。怪しうて誰ぞ〳〵、とあまたたび問はれて、朝成に侍り、といらふるに、夢の中にもいと恐しけれど、念じて、などかくては立ち給ひたるぞ、と問ひ給ひければ、頭辨の参らるゝを待ち侍るなり、と言ふと見給ひて、驚きて、今日は公事ある日なれば、とく〳〵参るらん。不便なる業かな、とて夢に見え給へる事あるを、今日は御病まうしなどもして、物忌かたくして、なにか参り給ふ、細かにはみづからと書きて、急ぎたてまつり給へど、違ひていととく参り給ひにけり。まもりの強くやおはしけん。例のやうにはあらで、北の陣より藤壺後涼殿の間より通じて殿上にまゐり給へるに、こはいかに。御消息奉りつるは御覽ぜざりつるか。かゝる夢をなん見侍りつるは、とくいでさせ給ひね、と聞えさせ給ひければ、手をはたと打ちて、いかにぞ。とこまかにも問ひ申させ給はず。また二つものも宣はで出で給ひにけり。さてぞ御祈などし給ひて、しばしは内へも参り

はたうと―ばたと

のれは此度まかり外れなば、いみじう辛かるべき事にてなん侍るべきを、この度申させ給はで侍りなんや、と申し給ひければ、こゝにもさ思ふ事なり。さらばさり申さん、との給ふを、いとうれし、と思はれけるに、いかに思しなりにける事にか、やがて問言も無くなり給ひにければ、かく計り給ふべしやは、といみじう心やまし、と思ひ申されける程に、御中よからぬことにてすぎ給ふ程に、この一條殿の御つかうまつり人とかやの爲に、なめきごとし給ひたりけるを、本意なしなどばかりは思ふとも、いかに事にふれてわれなどをばかく無禮にもてなすぞとむつかり給ふ、と聞きて、あやまたぬよしも申さん、とて參られたりけるに、さやうの人はわれより高き所にまうでては、こなたへと無き限は、上にものぼらで下に立てることにてなんありけるを、此は六七月のいと暑く、堪へがたき比、かくと申させて、今や〳〵と中門に立ちて待つ程に、西日もさしかゝりて暑く堪へ難しとは愚かなり。心地もそこなはれぬべきに、早うこの殿は我をあぶり殺さん、と思すにこそありけれ。やく無くも參りにけるかな、と思ふに、すべて惡心起るなどはおろかなり。夜になる程に、さてあるべきならねば、笏をおさへて起ちければ、はたうと折れけるは、いかばかりの心を起されにけるにか。さて家にかへりて、この族長く絶たん、も

いづこもとゝかにさしあひ—何處とかにて行き逢ひ

ざえ—才能

さうなく—容易に

によりて、後の頭はなることにて侍りしなり。されば殿上に我なるべし、などさだのぶの民部卿中將にておはせしをり、思ひ給へりける此人は、こよひと聞きて參りたまへるに、いづこもとゝかにさしあひ給へりけるを、たれぞ、と問ひ給へるに、御名のりし給ひて、思ひかけず思して、何事に參り給へるぞ、とあれば、頭になしたびたれば、參りて侍るなり、とあるに、あさましとあきれてこそ、動きもせで立ち給ひたりけれ。げに思ひかけぬ事なれば道理なりや。この源民部卿、かく申しなし給へる事をおぼし知りて、從二位のをりかとよ、こえ申し給ひしかど、更に上にゐ給はざりき。かの殿いで給ふ日は、われやまひ申し、又ともにいで給ふ日は、向座などにぞゐ給ひし。さて民部卿、正二位のをりこそは、本のやうに下臈になり給ひしか。大方この御ぞうの頭爭に、仇敵をつぎ給へば、これもいかゞおはすべからん。みな人しろしめしたることなれど、朝成中納言と、一條の攝政とおなじをりの殿上人にて、しなのほどこそ、一條殿にひとしからぬ。身のざえ、世おぼえやんごとなき人なりければ、頭になるべき次第いたりたるに、又この一條殿さうなく道理の人にておはしましけるを、この朝成君申し給ひけるやう、殿はならせ給はずとも、人惡く思ひ申すべきにあらず、後々にも御心にまかせさせ給へり。お

地下―五位以下の官人
上達部―三位以上の官人

あしき人にてぞおはせし。その義孝少將、桃園の源中納言保光卿の御女の腹に生ませたまへりし君ぞかし。今の侍從大納言行成卿、世の手かきとのゝしり給ふは、この殿の御男子。只今の但馬守實經君、尾張の權守良經君二人は、泰清の三位の女のはらなり。嫡妻の少將行經君、又女君は入道殿の御子高松ばらの權中納言殿の北方にておはせし。姫君十五にて失せ給ひにきかし。又今の丹波守經頼の君の北方にておはす。又大姫君おはしますとか。この侍從大納言こそ、備後介とてまだ地下におはせし時、藏人頭になり給ふ。例いと珍しきことよな。そのころは源民部卿殿は職事にておはしますに、上達部になり給ひければ、一條院、この次には又誰れかなるべき、と問はせ給ひければ、行成などまかりなるべき人に候ふ、と奏せさせ給ひけるを、地下の者はいかがあるべからん、とのたまはせければ、いとやん事なきものに候ふ。地下など思召し憚らせ給ふまじ。行末にも、おほやけに何事にも仕うまつらんに、堪へたるものになん。かやうなる人を御覽じわかぬは、世のためあしき事に侍り。善惡をわきまへおはしませばこそ、人も心づかひは仕うまつれ。このきはになさせ給はざらんは、いと口惜しき事にこそ候はめ、と申させ給ひければ、道理の事といひながらなり給ひにしぞかし。おほかた昔は、前頭の擧

見つぎ〳〵—見に云々—見失はぬやうにあとにつき行く
香染—赤黑くて黄ばみたる色薄色は紫のなり
一生精進—一生の間佛道に心をひそめて勤行する事
有難き—珍らしき

しか。やがて見つぎ〳〵に御供に參りて、御額つかせ給ひしも見奉り侍りき。いと悲しく哀にこそ侍りしか。御ともに童一人ぞさぶらふめりし。又殿上の逍遙侍りし時さらなり。こと人は皆心々に狩裝束めでたうせられたりけるに、此殿はいたう待ちたれ給ひて、白き御衣どもに、香染の御狩衣薄色の御指貫、はなやかならぬあはひにて、さしいで給ひけるこそ、中々に心をつくしたる人よりは、いみじうおはしましけれ。常の御事なれば、法花經御口につぶやきて、紫檀の御數珠の水精の裝束したるひき隱して持ち給ひける御用意などの、優にこそおはしましけれ。おほかた一生精進はじめ給へる。まづ有難き事ぞかし。なほ〳〵同じ事のやうに侍れど、いみじと見給へ。きゝおきつる事は、申さまほしくて、この殿は御容のありがたく、末の世にもさる人や出でおはしまし難かるらん、とまでこそ見給へりしか。雪のいみじう降りたりし日、一條左大臣殿に渡らせ給ひて、御前の梅の木に、雪のいたう積りたるを折りて、うち振らせ給へりしかば、御上にはら〳〵とかゝりたりしを、御直衣の裏の花なりけるが、かへりていとまだらになりて侍りしに、もてはやされさせ給へりし御容こそ、いとめでたくおはしましゝか。御兄の少將もいとよくおはしき。この弟殿のかくあまりに麗はしくおはしゝをもどきて、すこし勇悍に

ぬかを云々―西に向ひて幾度も禮拜せり

ゆたち―袴の裾

生れ給へるにぞあなる。かやうにも夢など示し給はずとも、この人の御往生をうたがひ申すべきにあらず。よのつねの君達のやうに、内わたりなどにても、おのづから女房とかたらひ、はかなきことをだに宣はせざりけるに、いかなる折にかありけん。細殿にたちより給へれば、例ならず珍しくて、物がたり聞えさせけるに、やう〳〵夜半などにもなりやしぬらん、と思ふほどに、立ちのき給ふを、いづ方へか、とゆかしうて人をつけ奉りて見せたりければ、北の陣より出で給ひけるほどより、法花經をいみじくたふとく誦し給ひ、大宮上におはして、世尊寺におはしまし著きぬ。なほ見れば、東對のつまなる紅梅のいみじう盛に咲きたる下に立たせ給ひて、滅罪生善往生極樂、といふ。ぬかを西に向ひて數多たびつかせ給ひけり。かへりて御ありさま語りければ、いと〳〵哀にきゝ奉らぬ人なし。この翁もそのころ大宮なる所に宿りて侍りしかば、御聲にこそ驚きて、翁いといみじう承りしか。出でて見奉りしかば、空はかすみ渡りたるに、月いみじうあかくて、御直衣のいと白きに、こき御指貫によいほどに御くゝりあげて、なに色にか色ある御衣どもの、ゆたちより多くてこぼれ出でて侍りし御容體などよ。御顏の色、月影にはえていと白う見えさせ給ひしに、鬢ぐきの掲焉にめでたくこそ、誠におはしまし

枕がへし―死人の枕を北向に直すこと

くべし、とのたまひて、方便品を讀み奉り給ひてぞうせ給ひける。その遺言を母北方わすれ給ふべきにあらねど、物も覺えでおはしければ、思ふに人のし奉りてげるにや。枕がへしなにやと例のやうなる有樣どもにしてければ、えかへり給はずなりにけり。後に母北方の御夢に見え給ひける。

しかばかり契りしものをわたり川かへる程には忘るべしやは

とぞよみ給へりける。いかにくやしく思しけんな。さて後程へて賀縁阿闍梨と申す僧の夢に、此の君達二人おはしけるが、兄の前少將はいたう物思へるさまに見え、この後少將は、いと心地よげなるさまにて見え給ひければ、阿闍梨君は、など心地よげにておはする。母上は、君をこそは兄君よりはいみじう戀ひ聞え給ふめれ、と聞えければ、いと能はぬさまのけしきにて、

時雨とははちすの花ぞ散りまがふなにふる里に袖ぬらすらん

などうちよみ給ひける。さて後に小野宮實資の大臣の御夢に、おもしろき花の蔭におはしけるを、うつゝにもかたらひ給へりし御中にて、いかでかくては、いづくにかと珍しがり申し給ひければ、昔契㆓蓬萊宮裏月㆒、今遊㆓極樂界中風㆒、とぞ宣ひけるは、極樂に

三寶繪—佛書をいふ三寶は佛、法、僧

道心者—佛法に志深き人

にて、打續きうせさせ給ひにき。九君は、冷泉院の彈正宮と申しし御うへにておはせしを、その宮うせ給ひて後、尼にていみじう行ひ勤めておはすめり。又忠君の兵衛督の北方にておはせしが、後には六條左大臣殿の御子の右大辨の上にておはしけるは、四の君とこそは。又花山院の御いもうとの女一宮はうせ給ひにき。女二宮は冷泉院の御時の齋院にたゝせ給ひで、圓融院の御時の女御に參り給へりし。程もなく內のやけにしかば、火宮と世の人もつけ奉りき。さて一二度まゐり給ひて後、程もなく失せさせたまひにき。この宮の御覽ぜさせんとて、三寶繪はつくれるなり。男君達は代明親王の御女のはらに、前少將、後少將とて、花ををり給ひし君達の、殿うせ給ひて三年ばかりありて、天延二年甲戌のとし、疱瘡起りたるにわづらひ給ひて、前少將は朝にうせ給ひ、後少將は夕にかくれ給ひしぞかし。一日が中に二人の子を失ひ給へりし母北方の御心地は、いかなりけん。いとこそ悲しく承りしか。かの後少將は義孝とぞ聞えし。御かたちいとめでたくおはしまし。年比きはめたる道心者にぞおはしましける。病重くなるまゝに、生くべうもおぼえ給はざりければ、母上に申し給ひけるやう、おのれ死に侍りぬとも、とかく例のやうにせさせ給ふな。しばし法花經誦じ奉らんの本意侍れば、必ず歸りまうで

氏寺―祖先を祀りたる寺

御かへし、

逢ふことはとほちの里にほど經しも吉野の山とおもふなりけん

助信少將宇佐の使にてくだられしに、殿上にて餞に菊の花の移ひたるを題にて、別の歌よませ給へる。

さは遠くうつろひぬとかきくのはな折りて見るだにあかぬ心を

御門の御をぢ東宮のおほぢにて攝政をさせ給へば、世中はわが御心にかなはぬ事なく、過差ことのほかに好ませ給ひて、大饗せさせ給ふに、寢殿のうら板の壁の少し黑かりければ、俄に御覽じつけて、疾くみちの國紙をつぶとおさせ給へりけるが、なか〳〵白く淸らに侍りける。思ひよるべき事かはな。御家は今の世尊寺ぞかし。御族の氏寺にて置かれたるを、かやうのついでには立ち入りて見給ふれば、まだ其紙のおされて侍るこそ、昔にあへる心地して、あはれに見給ふれ。かくやうの御榮を御覽じおきて、御年五十にだに足らで失せうせ給へるあたらしさは、父大臣にも劣らせたまはずとこそ、世人惜み奉りしか。其御男子女君たち數多おはしましき。女君一人は、冷泉院の御時の女御にて、花山院御母、贈皇后宮にならせ給ひにき。つぎ〳〵の女君二人は、法住寺大臣の北方

御集—和歌集
九條殿の御遺言云々—父師輔の御遺言に背きて質素を守らざる故なり

大鏡　巻之五

○大政大臣伊尹

この大臣は一條攝政と申しき。この九條殿の一男におはします。いみじき御集つくりて、豊景となのらせ給へり。大臣になり榮え給ひて三年。天祿三年十一月一日に失せ給ひにき。御年四十九。御いみな謙德公と申しき。いと若くて失せおはしたる事は、九條殿の御遺言をたがへさせ給へける、とぞ人申しける。されどいかでかは、さらでもおはしまさん。御葬送のさたを、むげに略定に書きおかせ給へりければ、いかでか、いとさはとて、例の作法に行はせ給ふとぞ。これはことわりの御しわざぞかし。たゞ御かたち身の才なに事もあまり勝れさせ給へれば、御命のえとゝのはせ給はざりけるにこそ。をり〳〵の御和歌などこそめでたく侍れな。春日の使におはしまして、かへるさに女のもとに遣しける。

暮ればとく行きて語らん逢ふ事はとほちの里の住みうかりしも

世の人をんな子といふ事は云々―世に女は氏なくして玉の輿といふはこれにや

わらせ給ひにしか。それは人の目にあらはれて、九條殿なん御うしろをいだき奉りて、御輿のうちに候はせ給ひける、とぞ人申しゝ。げに現にても、いと凡人とは見えさせ給はざりしかば、ましておはしまさぬ後には、さやうに御まもりにてそひ申させ給ひつらん。さらば元方卿桓算供奉をぞ逐ひのけさせ給ふべきな。それはまた然るべき前の世の御報にこそはおはしましけめ。さるは御心いとうるはしくて、世の政事もかしこくせさせ給ひつべかりしかば、世の中にいみじうあたらしき事にぞ申すめりし。さてまた今は故九條殿の御子どもの數、この冷泉院、圓融院の御母后、貞觀殿の内侍のかみ、一條攝政、堀川關白、大入道殿、忠君兵衛督と六人は、武藏守從五位上經邦の女の腹におはしまさふ。世の人、をんな子といふ事は、この御ことにや。大かた御はら異なれど、男君たち五人は太政大臣。三人は攝政し給へり。

魚袋—印籠の如きもの束帯の時に石帯の右につけておぶ

諸大夫—五位六位の侍の攝家の家司などに使はるゝもの

年比持たせ給へりける、とり出でさせ給ひて、やがて肖ものにもとて奉らせ給ふを、ことうるはしう松の枝に附けさせ給へり。その御かしこまりのよろこびは、御心の及ばぬにしもおはしまさざらめど、なほ貫之に召さん、と思召して、わたりおはしましたるを、まちつけ申しけん面目、いかがはおろかなるべきな。

吹く風にこほり解けたる池のうへを千代まで松のかげにかくれん

集に書き入れたることわりなりかしな。古より今に限もなくおはします殿の、たゞ冷泉院の御ありさまのみぞ、いと心うく口惜しき事にてはおはします、といへば、侍、されば事の例には、まづその御時をこそは引かるめれ、といへば、それはいかでか。さらでは侍らん。その御門のいでおはしましたればこそは、長くこの藤氏の殿ばら今に榮えおはしませ。さらざらましかば、このごろ僅にわれらも諸大夫ばかりになりいでて、所々の御前雜役につられありきなまし、とこそ入道殿はおほせらるれば、源民部卿は、さるかたちしたる諸大夫たちのさぶらはましかば、いかに見苦しう侍らまし、とこそ笑ひ申させ給ふなれ。かゝればおほやけわたくし、その御時の事をためしとせさせ給ふことわりなり。御物怪こはくていかゝ、と思召ししに、大嘗會の御禊にこそ、いとうるはしくて

荒涼して心知らざらん人―見さかひなくものの理を知らぬ人の前にては夢語りすなとなり

がて胸に釘はうちてき、とこそ宣ひけれ。大かた此九條殿、いとたゞ人にはおはしまさぬにや、思召しよる行末のことなども、かなはぬはなくぞおはしましける。くちをしかりける事は、未いと若くおはしましける時、夢に朱雀門の前に、左右の足を西東の大宮にさしやりて、北むきにて内裏を抱きて立てりとなん見えつる、と仰せられけるを、御前になまさかしき女房のさぶらひけるが、いかに御股痛うおはしましつらん、と申したりけるに、御夢違ひて、かく御子孫は榮えさせ給へど、攝政關白えしおはしまさずなりにし。又御末に思はずなる御事のうちまじり、帥殿の御事なども、これが違ひたる故に侍るめり。いみじき吉左右の夢も、惡しざまに合せつれば違ふ、と昔より申し傳へて侍ることなり。荒涼して心知らざらん人の前にて、夢語ぞこの聞かせ給ふ人々しおはしまさざれ。いま行末も、九條殿の御ぞうのみこそ、とにかくにつけてひろごり榮えさせ給はめ。いとをかしき事は、かくやん事なくおはします殿の、貫之のぬしの家におはしましたりしこそ、なほ和歌はめざましき事なりかし、と覺え侍りしか。正月一日着けさせ給ふべき魚袋のそこなはれたりければ、つくろはせ給ふ程、まづ貞信公の御許に參らせ給ひて、かうかうの事の侍れば、うちに遲く參るよしを申させ給ひければ、おほき大殿驚かせ給ひて、

内がはにかかれろ帳

時なかばかり—牛時ばかり

靈にいでまして云々—元方生靈師輔の處に出でたれば師輔も庚申祭の夜のことを思ひ出して胸に釘打たれたる如くこたへたりとなり

う人にかしこまり申させ給へるさまにておはします。御車は榻にかくな。只隨身どもは轅の左右に、軛のもとにいと近く候ひて、前を高くおへ。雜色どもも聲たえさすな。御前どもも近くあれ、と仰せられて、尊勝陀羅尼をいみじう讀み奉らせ給ふ。牛をば御車のかくれの方にひきたてさせ給へり。さて時なかばかりありてぞ、御すだれあげさせ給ひて、今は牛かけてやれ、と仰せられけれど、つゆ御ともの人々は心もえざりけり。後々にしか〴〵の事ありしなど、さるべき人々にこそは忍びて語り申させ給ひけめど、さる珍しき事は、おのづからちり侍りけるにこそは。元方民部卿の御孫、儲君にておはするころ、御門の御庚申せさせ給ふに、この民部卿參り給へる、さらなり。九條殿さぶらはせ給ひて、人々あまた候ひて、攤うたせ給ふついでに、冷泉院の孕まれおはしましたる程にて、さらぬだに世人いかゞ、と思ひ申したるに、九條殿、いで今宵の攤仕うまつらん、と仰せらるゝまゝに、この孕まれ給へる御子、男におはしますべくば、重六出で來とて、打たせ給ひけるに、たゞ一度にいでくるものか。ありとある人目を見かはして、感じもてはやし給ひ、わが御みづからもいみじ、と思したりけるに、此民部卿のみけしき、いと惡しうなりて、色もいと青くこそなりたりけれ。さて後に靈にいでまして、その夜や

正月二七夜—正月十四日の夜
おこなひ—勤行
下簾—簾の

し。されども、それは九條殿后宮などうせおはしましてのちの事なり。此右馬頭殿の御出家こそ、親たちの榮えさせ給ふことのはじめをうち棄てゝ、いと〳〵ありがたう悲しかりし御事よ。とうより、さる御心まうけは思しよらせ給ひにけるにや。御はらからの公達に具し奉りて、正月二七夜のほどに、中堂に上らせ給へりけるに、さらに御おこなひもせで大殿ごもりたりければ、殿ばら、曉になどかくて臥したまへる。起きて念誦もせさせ給へかし、と申させ給ひければ、今一度に、と宣ひしを、そのをりは思も咎められざりき。かやうの御ありさまを思し續けけるにや、とこそ此のをりには君たち思し出でて申し給ひけれ。さりとてうち屈じや、いかに、ぞやなどある御けしきも無かりけり。人よりことに誇りかに心地よげなる人がらにてぞおはしましける。この九條殿は、百鬼夜行にもあはせ給へるは、何の月といふ事はえ承らず。いみじう夜更けて、内より罷出させ給ふに、大宮より南ざまへおはしますに、あはのの辻のほどにて、御車のすだれうち垂れさせたまひて、御車牛をもかきおろせ〳〵、と急ぎ仰せらるれば、怪しと思へどかきおろしつ。御隨身御前どもも、いかなる事のおはしますぞ、と御車のもとに近く參りたれば、御下簾うるはしくひき垂れて、御笏とりて、うつぶさせ給へる氣色、いみじ

五人は太政大臣―伊尹兼通、兼家、爲光、公季

君と申すにうつらせ給ひにき。四君はとくうせ給ひにき。六君は冷泉院の東宮におはしまししに參らせ給ひなど、女君たちは皆かくおはしまさふ。男君たちは、十一人の御なかに、五人は太政大臣にならせ給へり。それあさましくおどろ〳〵しき御さいはひなりかし。その御外は、右兵衛督忠君、又北野の三位遠度、又大藏卿遠量、多武峰入道少將君なり。又法師にては飯室の權僧正、いまの禪林寺の僧正などにこそはおはしますめれ。法師といへども世の中の一の驗者にて、佛の如くに公私頼みあふぎ申さぬ人なし。又北野の三位の御子は尋空律師、朝源律師などなり。又大藏卿の御女子は、粟田殿の北方、いまの左衛門督の母上。この御族かやうにておはします中に、多武峰の少將の出家し給へりし程は、如何にあはれにもやさしくも、さま〴〵なる事どもの侍りしかは。中にも御門の御消息遣したりしこそ、おぼろげならず御心もや亂れ給ひけん、と忝く承りしか。

都より雲のやへ立つおくやまのよかはの水はすみよかるらん

御かへし

ここのへのうちのみ常に戀しくて雲のやへたつ山はすみうし

はじめは横川におはして、後に多武峯にはすませ給ひき。いといみじく侍りしことぞか

いろある―好色

世になくおぼえおはして―世に例なきまで御寵愛ありて

宮の北方にてぞ、おはせしかし。その親王は村上の御はらからにおはします。この宮の上、さるべき事のをりは、物見せ奉りにとて、后の迎へ奉り給へば、忍びつゝまゐり給ふに、御門ほのかに御覽じて、いと美くしうおはしましけるを、いといろある御心ぐせにて、宮にかくなん思ふ、とあながちにせめ申させ給へば、一二度知らず顔にて許し申させ給ひてけり。さてのち御心はかよはせ給ふげなる御けしきなれど、さのみはいかゞは、とや思しめしけん。后さらぬ事だに、この方ざまには、なだらかにも作りあへさせ給はざめるなかに、ましてこれは外のことよりは、心づきなうも思しめしぬべけれど、御あたりを廣うかへり見給ふ御心の深さに、人の御ため聞きにくゝうたてあれば、なだらかに色にも出でず、過させ給ひけるこそ、いと忝う悲しき事なれな。さて后宮もうせおはしましゝ後に、式部卿の宮もうせ給ひて、御門わりなく戀しと思しければ、めしとりて、いみじく時めかさせ給ひて、貞觀殿内侍のかみとぞ申ししかし。世になくおぼえおはして、こと女御御息所そねみ給ひしかど效なかりけり。これにつけても、九條殿の御さいはひ、とぞ人申しける。又三君は、西宮殿の北方にておはせしを、御子生みてうせ給ひにしかば、そよ人は君だちの御爲あしかりなんとて、また御弟の五にあたらせ給ふ愛

二所ながら—當帝及び東宮二皇子共

な。祿なからんも便なく、とりにやり給はんも程經ぬべければ、とりわきたるさまを見せ給ふなんめり。えせものはえ思ひよらじかし、とぞ申させ給ひける。この當帝や東宮などのまだ宮たちにておはしましゝ時、祭見せ奉らせ給ひし御さじきの前過ぎさせ給ふほど、殿の御膝に二所ながらすゑ參らせ給ひて、この宮たち見奉らせ給へ、と申させ給へば、御輿の帷より、あかいろの御扇のつまを差出でさせ給へりけり。殿をはじめ奉りて、なほ心ばせめでたくおはする院なりや。かゝるしるしを見せ給はずば、いかでかは見奉らせ給はんとも知らまし、とこそは感じ奉らせ給ひけれ。さて齋院より大宮に聞えさせ給へる。

光いづるあふひのかげを見てしより年つみけるも嬉しかりけり

御かへし

もろかづら二葉ながらに君にかくあふひや神のしるしなるらん

げにも賀茂の明神などのうけ奉り給へればこそは、二代まで打續き榮えさせ給ふらめな。この事いとをかしうせさせ給へり、と世人申ししに、前帥殿のみぞ、追從ふかき老狐かな。あな愛敬な、と申し給ひける。まことこの后の宮の御弟の中の君は、重明式部卿の

齋宮世におほくおはしませど、これはことに動きなく世に久しくたもちおはしますも、たゞこの御一すぢのかく榮え給ふべき、とぞ見申す。御門たび〳〵うせ給へど、この齋院はうごきなくおはします。それも賀茂明神のうけたまへれば、動きなくおはしますなり。佛經などの事は、昔の齋宮齋院はいませ給ひけれど、この宮には佛法さへ崇め給ひて、朝ごとの御念誦かゝせ給はず。近うはこの御寺のけふの講には、さだめて布施をこそ贈らせ給ふめれ。いと夙うより神人にならせ給ひて、いかでかゝる事を思召しよりけん、と覺え候ふは、賀茂の祭の日、一條の大路にそこら集りたる人、さながらともに佛とならん、とちかはせ給ひけんこそ、なほあさましく侍れ。さりとて又現世の御榮花をとゝのへさせ給はぬかは。御禊よりはじめ三箇日の作法、出車などのめでたさは、けほかた御さまのいと優にらう〳〵しくおはしましたるぞ。今の關白殿兵衞佐にて御禊に御前せさせ給へりしに、いと幼くおはしませば、例は本院にかへらせ給ひて、人々に祿などは給はするを、これは川原より出でさせ給ひしかば、思ひかけぬ御事にて、ある御心まうけもなかりければ、御前にめしありて御對面などせさせ給ひて、奉りたまへりける御小袿をぞかづけ奉らせ給ひける。入道殿きかせたまひて、いとをかしくもしたまへるか

佛經などの事は云々ー齋宮齋院にては佛法を忌みて經文を染紙僧を髮長尼を女髮長寺を瓦葺などいへり

三箇日の作法ー御禊と中の申の日の國祭と中の酉の日の御祭となり

瀧口―禁中を警衛する武士
所やは侍りし―立錐の地無かりしなり
つぶと―全く

束馬鞍まで、内裏のうちに召し入れて御覽ずるは、又なき事とこそは承れ。瀧口をはなちては、布衣のもの内にまゐる事は、かしこき君の御時も、かゝる事の侍りけるにや。大方いみじかりし日の見物ぞかし。物見車は大宮のぼりに、所やは侍りしとよ。さばかりの事こそ、この世にはえさぶらはね。殿ばらの宣ひけるは、大路わたる事は常なり。藤壺のうへの御局に、つぶとえもいはぬうち出でども、わざとなくこぼれ出でて、后の宮内の御前などさしならび、御簾の中におはしまして御覽ぜしに、御前通りしなん倒れぬべき心地せし、とこそ宣ひけれ。又それのみかは、大路にも宮の出車十ばかりひきつづけて立てられたりしは、一町かねてはあたりに人もかけらず、瀧口さぶらひの御前どもに、擇りとゝのへさせ給へりし。さるべきものゝ子どもにて、心の限今日はわれ世とひとはらはせ、きらめきありへし氣色どもなど、よそ人まことにいみじうこそ見侍りしかとて、車の衣の色などをさへ語りゐたるぞあさましきや。さてこの御腹におはしましゝ女宮一所は、いとはかなくうせ給ひにしぞかし。又女七の宮は、御物怪こはくてうせ給ひにき。今一所は入道一品宮とて、三條におはしましき。うせ給ひて十餘年にやならせ給ひぬらん。うみおき奉らせ給ひしたびの十の宮こそは、今の齋院におはしませ。

ふあいの物—不愛想のもの

世おぼえ—人望

し。止めさぶらひなん。されどなほ我ながらふあいの物にて覺えさぶらふにや。式部卿宮、我が御身のくちをしう本意なきを、思しくづほれてもおはしまさで、なほ末の世に、花山院の御門は、冷泉院の皇子におはしませば、御をひぞかし。その御時に御女奉り給ひて、御みづからも常に參りなどし給ひけるこそ。さらでもありぬべけれ、と世の人もいみじうそしり申しけり。さりとても御つぎなどのおはしまさば、古の御本意のかなふべかりけるとも見ゆべきに、御門出家し給ひなどせさせ給ひてのち、又この今の小野宮の右大臣殿の北方にならせ給へりしよ。いと怪しかりし御事どもぞかし。その女御殿には、道信中將君も、御消息きこえ給ひけるに、それはさもなくて、かの大臣に參り給ひにければ、中將の申し給ふぞかし。

嬉しさはいか許かはおほゆらん憂きは身にしむ心地こそすれ

いまに人の口に入りたる秀歌にて侍るめり。まことこの式部卿の宮は、世にあはせ給へるかひあるをり、一度おはしましたるは、御子の子日ぞかし。御弟の皇子たちも、いまだ幼くおはしまして、かの宮をとなにおはします程なれば、世おぼえ御門の御もてなしも、ことに思ひまうさせ給へる餘に、その日こそは、御供の上達部殿上人などの狩裝

式部卿の宮—第二の皇子爲平親王
西宮殿—源高明

威儀の親王—天皇御卽位の時高御座の傍に在り威儀を整ふることを司り給ふ親王

くは只この九條殿の一筋なり。男宮たちの御ありさまは、代々の御門の御事なれば、かへすがへす又はいかゞは申し侍らん。此后の御腹には式部卿の宮こそは、冷泉院の御次に、まづ東宮にも立ち給ふべきに、西宮殿の御壻にておはしますにより、御弟のつぎの宮にひき越されさせ給へる程などの事ども、いといみじく侍り。その故は、式部卿の宮、御門にゐさせ給ひなば、西宮殿の御ぞうに世の中うつりて、源氏の御榮になりぬべければ、御をぢたちの魂ふかく非道に、御弟をばひきこし申させ奉らせ給へるぞかし。世の中にも宮の中にも、殿ばらの思しかまへけるをば、いかでかは知らん。次第のまゝにこそは、と式部卿宮の御ことを思ひ申したりしに、にはかに若宮御髮かいけづり給へなど、御めのとたちに仰せられて、大入道殿御車にうちのせ奉りて、北の陣よりなんおはしましける、などこそは傳へ承りしか。されば道理あるべき御かたの人たちは、いかゞは思されけん。そのころ宮たち數多おはせしかど、事しもあれ威儀の親王をさへせさせ給へりしよ。見給へりける人も哀なる事にこそ申しけれ。そのほど西宮殿などの御心地よな、いかゞ思しけん。さてぞかし、いと恐しく悲しき御事ども出で來にしは。かやうに申すも中々にいと／＼こと愚なりや。斯樣の事は、人中にて下臈の申すにいと忝

その道は云云―嫉妬などいふ事は心ばへのよしあしにもよらぬことにや

にも、かつは情あり、御みやびをかはさせ給ふに、心より外に餘らせ給ひぬる時の御物妬みの方にや、いかゞおはしましけん。此小一條の女御は、いとかく御容貌のめでたうおはすればにや、御ゆるされに過ぎたるをり〳〵の出でくるにより、かゝる事もあるにこそ。その道は心ばへにもよらぬ事にやな。かやうの事までは申さじ。いと忝し。大かた殿上人女房さるまじき女官までも、さるべき折の訪問をせさせ給ひ、いかなる折も、必見すぐし聞き放たせ給はず、御覽じ入れてかへり見させ給ふ。まして御兄弟たちをばさらなりや、御兄をば親のやうに頼み申させ給ひ、御弟をば子の如くにはぐくみ給ふ御心おきてぞや。されば亡せおはしましたりし理とはいひながら、田舍世界までこそは聞きつぎ奉りて惜み悲び申ししか。御門よろづの政事をば、聞えさせ合せてせさせ給ひけるに、人のため歎きとあるべき事をば直させ給ひ、喜となりぬべき事をば、そゝのかし申させ給ひ、おのづから、おほやけ聞しめしてあしかりぬべき事、など人の申すをば、御口より出させ給はず。かうやうの御心おもむけのありがたくおはしませば、御祈ともなりて、長く榮え御座すにこそあべかめれ。冷泉院、圓融院、爲平の式部卿の宮と、女宮四人との御母后にて、又雙なくおはしましき。みかど東宮と申し、代々の關白攝政と申すも、多

かしこまらせ給へりしかば―勘當を受け給ひしかば

麿―男女通じていふ自卑の語

おとぎき見ぐるし―外聞惡し

尹、兼通、兼家などが言催してせさするならん、と仰せられて、みな殿上に候はせ給ふ程なりければ、三所ながら、かしこまらせ給へりしかば、其折に后いとゞおほきに腹立たせ給ひて、渡らせたまへ、と申させ給へれば、思ふにこの事ならん、と思しめして、わたらせ給はぬを、度々なほ〳〵と御消息ありければ、渡らずばいとゞこそむつからめ、と恐しくいとほしく思召して、おはしましたるに、いかでかゝる事はせさせ給ひたるぞ。いみじからんさかさまの罪ありとも、この人々をば思しゆるすべきなり。いはんや麿がかたざまにてかくせさせ給ふは、いとあるまじく心うき事なり。只今めし還せ、と申させ給ひければ、いかでか只今は許さん。おとぎき見ぐるしき事なり、と聞えさせ給ひけるを、更にあるべき事ならず、と責め申させ給ひければ、さらばとて還りわたらせ給ふを、おはしましなば、只今しも許させ給はじ。只こなたにてを召せ、とて御袖をとらへ奉りて立て奉らせ給はざりければ、いかゞはせん、と思召して、この御方に職事めしてぞ、參るべきよしの宣旨くださせ給ひける。これのみにもあらず、かやうなる事どもいかに多く聞え侍りしかど、大方の御心はいと廣く、人の御爲などにも思ひやりおはしまし、あたりあたりにあるべきほど〳〵は過させ給はず、御かへりみあり。かたへの女御たちの御爲

童殿上―童にて殿上を許さるゝこと

にぞ、世の人にいはれおはしましし。御門をも常にふすべ申させ給ひて、いかなる事のありける折にか、夕さり渡らせおはしましたりけるを、御格子を叩かせ給ひけれど、開させ給はざりければ、叩きわづらはせ給ひて、女房になど開けぬぞ、と問へと、なにがしのぬしの童殿上したるが、御供なるにおほせられければ、開きたる處やある、とこゝかしこ見給ひけれど、さるべき方は皆たてられて、細殿の口のみあきたるに、人のけはひしければ寄りて、かく、と宣ひければ、答はともかくもせでいみじく笑ひければ、參りてありつるやうを奏しければ、御門もうち笑はせ給ひて、例の事なり、とおほせられてぞ、歸り渡らせおはしましける。この童は伊賀の前司資國がおほぢなり。藤壺弘徽殿うへの御局は、程もなく近きに、藤壺の方には、小一條の女御、弘徽殿のには此后上りておはしましあへるを、いとやすからず思召して、えや鎭めがたくおはしましけん、中へだての壁に穴をあけて覗かせたまひけるに、女御の御かたちのいと美くしうめでたくおはしましければ、むべ時めくにこそありけれ、と御覽ずるに、いとゞ心やましくならせ給ひて、穴よりとほるばかりの土器のわれして、打たせ給へりければ、御門のおはします程にて、これ許にはえ堪へさせ給はず、むつかりおはしまして、かうやうの事は女房はえせじ。伊

ありがたき御事—出來がたき事
さがなく—意地わるく

大鏡 巻之四

○右大臣師輔

この大臣は忠平の大臣の二郎君。御母右大臣源能有の御女。所謂九條殿におはします。公卿にて二十六年。大臣の位にて十四年ぞおはしましし。天德四年五月二日出家せさせ給ひにき、御年五十三にて。御孫は東宮又四五の宮を見おき奉りて、かくれ給ひけんは、極めてくちをしき御事ぞや。御年まだ六十にも足らせ給はねば、行末遙にゆかしき事多かるべき程にて、と世繼せめてさゝやくものから、手をうちてあふぐ。その殿の御公達十一人。女五六人ぞおはせし。第一の御女は、村上の先帝の御時の女御、多くの女御御息所の中に、すぐれてめでたくおはしましき。天德二年十二月二十六日后にたゝせたまふ。皇后宮と申しき。御とし三十二。御門も、この女御殿には、いみじう恐ぢ申させ給ひき。ありがたき御事をも奏せさせ給ふ事をば、いなびさせ給ふべくもあらざりけり。いはんや自餘の事をば申すべきならず。少し御心さがなく、御物怨などもせさせ給ふやう

ぶらひつれど—思ひ奉りたれど

ねば、さりとも哀とは仰せごと候ひなん、と思ひ給へて參り候ひながらも、いみじうつゝましく候ひつるに、かく仰せらるゝ事、やるかたなく嬉しく候ふとて、手をすりて泣くけはひに、ゆゝしくも哀にも思召されて、殿も泣かせ給ひにけり。出で給ふ路に、南大門に人々ゐたる中をおはしければ、某のぬしの引き留められけるこそ、いと不愛の事なりや。後に殿も聞かせ給ひければ、いみじうむつからせ給ひて、いと久しう御かしこまりにていましき。さて御うれへの所は、永く論あるまじく、この人の御領にてあるべきよし仰せくだされにければ、もとよりもいとしたゝかに領じ給ふ。極めていとよし。さばかりになりなんには、物の恥も知らでありなん。かしこく申し給へるいとよき事、と口口褒め聞えしこそ、中々におぼえ侍りしか。大門にてとらへたりし人は、式部大夫源政成が父なり。さばかり優におはしけん御すゑこそ、少しはか〴〵しき人なけれ。

うれへ申し―哀訴し

思ひ給へさ

又伊豫入道もそれぞかし。いま一所の女君は、いと甚しく心うき御有樣にておはすめり。父大將のとらせたまへりける處分の領所近江にありけるを、人に奪られければ、すべきやうなくて、かばかりになりぬれば、物の恥しさも知られずや思はれけん、夜徒歩より御堂に參りて、うれへ申し給ひしはとよ。殿の御前は阿彌陀堂の佛の御前に念誦しておはしますに、夜いたく更けにければ、御脇息によりかゝりて、すこし眠らせたまへるに、犬防のもとに人のけはひのしければ、怪しと思しめしけるに、女のけはひにて、忍びやかに物申しさふらはん、と申すを、御ひが耳かと思召すに、數多度になりぬれば、實なりけり、と思召して、いとあやしくはあれど、誰ぞあれは、と問はせ給ふに、しか〴〵の人の申すべき事侍ひて參りたるなり、と申し給ひければ、いと〳〵淺ましくは思しめせど、あらく仰せられんもさすがにいとほしくて、何事ぞ、と問はせ給ひければ、これ知しめしたる事に候ふらんとて、事のありさま細に申し給ふに、いと哀に思召して、更なり、皆聞きたる事なり。いと不便なることにこそあなれ。今しか爲まじきよし速にいはせん。かくいましたることとあるまじき事なり。人してこそいはせ給はめ。とく歸られね、と仰せられければ、さこそは返す〴〵も思ひ給へさぶらひつれど、申し次ぐべき人の更に候は

さしつぎの二宮―すぐ次の第二の皇子
御かしづき物―大事にするもの
あら三位云云―荒三位云云―一に悪三位に作る、
たゝせ給ひは醜聞の立ちしなり

の事どもこそ侍れ。おはします人の御事申す便なきことなりかしな。さて式部卿宮と申すは、故一條院の一の皇子におはします。その宮をば年比帥宮とまうししを、小一條院式部卿にておはしましゝが、東宮にたゝせ給ひて、明くところに、帥をば退かせ給ひて、式部卿宮とは申ししぞかし。その後のたびの東宮にもはづれ給ひて、思歎きし程に、うせ給ひて後、又この小一條院の御さしつぎの二の宮、敦儀親王をこそは、式部卿とは申すめれ。又次の三の宮敦平親王を中務宮とまうす。次の四の宮師明親王とまうす。幼くより出家して、仁和寺僧正の御かしづき物にておはしますめり。この宮達の御妹の女宮達二人、一所はやがて三條院の御時の齋宮にてくだらせ給ひしを、のぼらせ給ひて後、あら三位道雅君に名たゝせたまひにければ、三條院も御惱のをり、いとあさましき事に思しなげきて、尼にならせ給ひにき。いま一所の女宮まだおはします。小一條大將の御姫君こそは、たゞいまの皇后宮と申しつるよ。三條院の御時に后に立て奉らんと思しけるに、こちよりては、大納言の女にて后にたつ例無かりければ、御父の大納言を、贈太政大臣になしてこそは、后に立てさせ給ひてしか。されば后宮いとめでたくおはしますめり。御兄一人は侍從入道、いま一所は大藏卿通任君こそはおはすめれ。

堀河女御—顯光の女延子

おもの—御膳、食物

かりの事になりて逗留せさせ給はんやは。火燒屋陣屋などとりやられける程にこそ、え堪へず忍音なく人々侍りけれ。まして皇后宮堀河の女御殿などは、さばかり心深くおはします御心どもに、いかばかり思しめしけん、と覺え侍り。世の中の人、女御殿の、

雲ゐるまでたちのぼるべき煙かとみえし思のほかにもあるかな（一）

といふ歌よみ給へり、など申すこそさらによもとおぼゆれ。いとさばかりの事に和歌のすぢ思しよらじかしな。御心の中には自後にもおぼえさせ給ふやうもありけめど、人の聞傳ふるばかりは如何ありけん、といへば、翁、げにそれはさる事に侍れど、昔もいみじき事の折、かゝる事いと多くこそ聞え侍りしか、とてさざめくはいかなる事にか。さて斯くせめおろし奉り給ひては、又御聟にとり奉らせ給ふほど、もてかしづき奉らせ給ふ御有樣、實に御心も慰ませ給ふばかりこそきこえ侍りしか。おもの參らするをりは、臺盤所におはしまして、御臺や盤などまで手づから拭はせ給ふ。何をもめし試みつゝなんまゐらせ給ひける。御障子口までもておはしまして、女房にたまはせ、殿上に出す程にも立添ひて、よかるべきやうに敎へなど、これこそは御本意よ、とあはれにぞ。このきはに故式部卿の宮の御事ありける、といふことも虚言なり。何故ある事にもあらなくに。昔

かためさせ—警固せさせ

事ども—院號を奉る式院付の官人の補任など

祿—褒美に賜はる布帛の類

かなる事ぞ、と怪しく思して、案内し申させ給へど、例の女房の參る道を、かためさせ給ひてけり。殿には年比思召しつる事など細かにきこえん、と心づよく思召しつれど、實になりぬるをりは、いかになりぬる事ぞ、とさすがに御心騷せ給ひぬ。むかひ聞えさせ給ひては、方々に臆せられ給ひにけるにや。たゞ昨日の同じさまに、中々言ずくなに仰せらるゝ、御かへりは、さりともいかにかくは思召し寄りぬるぞ、などやうに申させ給ひけんかしな。御氣色の心苦しさを、かつは見奉らせ給ひて、すこしおしのごはせ給ひて、さらば今日よき日なり、とて院になし奉らせ給ひて、やがて事ども始めさせ給ひて、萬の事さだめ行はせ給ふ。判官代には、宮司ども藏人などかはるべきにあらず。別當には中宮權大夫をなし奉り給へれば、おりて拜し申させ給ふ。事ども定り果てぬれば、出させ給ひぬ。いと哀に侍りける事は、殿のまだ侍はせ給ひける時、母宮の御方より、何方の道より尋ね參りたるにか。あらはに御覽ずるも知らぬ氣色にて、いと怪しげなる姿したる女房の、わなゝくわなゝく、如何にかくはせさせ給へるぞ、と聲もかはりて申しつるなん、あはれにも又をかしうも、とこそ仰せられけれ。勅使こそ誰ともえ確にも聞き侍らね。祿などにはかにて如何にせられけん、といへば、殿こそはせさせ給ひけめ。さば

いとこちたくひゞきごとにて—甚仰々しく世間の人の驚くばかりのさわぎにて
すゞろはしう—落ちつかず
内—天皇

も延びば、思しかへして、さらでありなんとあらんをば、いかはせさせ給はん、と申させ給へば、さることとおぼして、御暦御覧ずるに、今日も悪しき日にもあらざりけり。關白殿も参らせ給へるほどにて、疾く〱とそゝのかし申させ給ふ。まづ如何にも大宮に申してこそは、とて内におはします程なれば、まゐらせ給ひて、かくなんと聞かせ奉らせ給へば、まして女の御心はいかゞは思召されけん。それよりぞ東宮にまゐらせ給ふ。かう申す事は寛仁元年八月六日の事なり。御子どもの殿ばら、また例も御供にまゐり給ふ。上達部殿上人ひき具せさせ給へれば、いとこちたくひゞきごとにておはしますを、待ちつけさせ給へる宮の御心地は、さりとも少しすゞろはしう思召されけんかし。心も知らぬ人は、つゆ参り寄る人だになきに、昨日一位中將殿の参り給へりしだにあやし、と思ふに、又今日かくおびたゞしく賀茂詣などのやうに、御さきの音もおどろ〱しう響きて参らせ給へるを、いかなる事ぞ、とあきるゝに、すこしよろしき程のものは、御匣殿の御事申させ給ふなんめり、と思ふはさも似つかはしや。むげに思ひやりなき際のものは、又我心にかゝるまゝに、内の如何におはしますぞ、などまで心さわぎしあへりけるこそ、淺ましうゆゝしけれ。母宮だにも知らせ給はざりけり。かくこの御方に物騒しきを、い

りて—受領は地方官所謂年官年爵など受くるやうにありたしとの意

何なるべき事にかと傳へ聞えられよ、と仰せられければ、畏りて罷出させ給ひぬ。その夜は更けにければ、つとめてぞ殿にまゐらせ給へるに、内へ參らせ給はんとて、御裝束の程なれば、え申させ給はず。大方には御供にまゐるべき人々、さらぬも出でさせ給はんに見參せん、と多く參り集ひて物騷がしければ、御車に奉りにおはしまさんに申さんとて、そのほど寢殿のすみのまの勾欄によりかゝりてゐさせ給へるを、源民部卿よりおはして、などかくてはおはします、ときこえさせ給へば、この殿には隱し聞ゆべき事にもあらねば、しか〳〵の事のあるを、人々の侍へばえ申さぬなり、と宣するに、御氣色うちかはりて、この殿も驚き給ふ。いみじうかしこき事にこそあんなれ。たゞとくきかせ奉り給へ。内にまゐらせ給ひなば、いとゞ人がちにてえ申させ給はじ、とあれば、げにと思して、おはします方に參り給へれば、さならんと御心えさせ給ひて、すみの間に出でさせ給ひて、東宮に參りたりつるか、と問はせ給へば、昨夜の御消息くはしく申させ給ふに、さらなりや。疎に思召さんやは、おして下し奉らん事は憚り思召しつるに。かゝる事のいできぬる御悅なほ盡せず。まづいみじかりける大宮の御宿世かな、と思召す。民部卿に申し合せさせ給へば、只とく〳〵せさせ給ふべきなり。何かよき日をも問はせ給ふ。少し

左大臣殿—東宮の御岳父顯光
なまむつかし—小うるさし
朝餉—朝の御膳をきこしめす間
受領などあ

はあらん。いかにも宣はせん事を聞くべきなり、と申させ給へば、參らせ給ふ程日も暮れぬ。陣に左大臣殿の御車や御前どものあるを、なまむつかし、と思召せど、かへらせ給ふべきならねば、殿上にのぼらせ給ひて、參りたるよし啓せさせよ、と藏人に宣すれば、大臣殿の御前に侍はせ給へば、只今はえなん申しさぶらはぬ、と聞えさする程、見まはさせ給ふに、庭の草もいと深く、殿上の有樣も、東宮のおはしますとは見えず、あさましう辱げなり。大臣殿いで給ひて、かくと啓すれば、朝餉の方に出でさせ給ひて、めしあれば參り給へり。いと近くこち、と仰せられて、ものせらるゝ事もなきに、案内するも憚多かれど、大臣に聞ゆべき事のあるを、傳へものすべき人のなきに、近き程なれば、たよりにもと思ひて、消息し聞えつるなり。その旨はかくて侍るこそは、本意ある事と思ひ、故院のしおかせ給へる事を違へ奉らんも、かた〴〵にはゞかり思はぬにあらねど、かくてあるなん思ひつゞくるに、罪深くもおぼゆる。内の御行末はいとはるかにものせさせ給ふ。いつとも無くて、はかなき世に命も知りがたし。此有樣退きて、心に任せて行をもし物詣もし、やすらかにてなんあらまほしきを、むげにさきの東宮にてあらんは見苦しかるべくなん。院號たまはりて、年に受領などありてなんあらまほしきを、如

りし、とこそ聞き侍りしか。されば故院も、さばれ無くとも立てでは、とておはしましなり。しかるべきとは、おのづからの事を申させて、皇后宮にもかくとも申させ給はず、只御心のまゝに、殿に御消息聞えんと思召すに、睦じうさるべき人ものし給はねば、中宮權大夫殿のおはします四條の坊門と、西の洞院とは宮近きぞかし。それればかりを、こと人よりはとや思召し寄りけん。藏人某を御使にて、あからさまにまゐらせ給へ、とあるを、おぼしもかけぬ事なれば、驚かせ給ひて、なにしに召すぞ、と問ひ給へば、申させ給ふべき事の候ふにこそ、と申すを、この聞ゆる事どもにや、と思せど、退かせ給ふ事は、さりとも世にあらじ。御匣殿の御事ならん、と思す。いかにもわが心ひとつには思ふべき事ならねば、驚きながら参り候ふべきを、大臣に案内申してなん候ふべき、と申させ給ひて、まづ殿にまゐり給へり。東宮より、しか〳〵なん仰せられたりつる、と申させ給へば、殿も驚かせ給ひて、何事ならん、と仰せられながら、大夫殿と同じ様にぞ思しよられける。實に御匣殿の御事、宣はせんをいなび申さんも便なし。まゐり給ひなば、又さやうにあやしくてはあらせ奉るべきならず。又さては世の人の申すなるやうに、東宮退かせ給はんの御覺あるべきならずとは思せど、しか故と召さんには、いかでか參らで

高松殿の御匣殿―道長の末女母は源高明の女

かんなり、などのみ申すを、實にしもあらざらめど、げに事の樣も、よもとおぼゆまじければにや、聞かせ給ふ御心地は、いとゞ浮きたちたる樣に思召されて、一向に取られんよりはわれとや退きなまし、と思召すに、又高松殿の御匣殿まゐらせ給ひて、殿花やかにもてなし奉らせ給ふべかんなりとも、例の事なれば、世の人のさま〴〵定め申すを、皇后宮きかせ給ひて、いみじう喜ばせ給ふを、東宮はいとよかるべき事なれど、さだにあらば、いとゞ我が思ふ事えせじ。なほかくてあるまじく思召されて、御母宮にしか〳〵なん思ふ、と聞えさせ給へば、さらなりや、いと〳〵あるまじき御事なり。御匣殿の事をこそ、實ならばすゝみきこえさせ給はめ。更に〳〵思召寄るまじき事なり、と聞えさせ給ひて、御物怪のするなり、と御祈どもせさせ給へど、更に思召止らぬ御心の中を、いかでか世人も聞きけん。さてなん御匣殿まゐらせ奉り給へとも聞えさせ給ふべかなり、などいふ事、殿の邊にもきこゆれば、實にさもおぼしゆるぎて宣はせば如何すべからん、など思す。さて東宮は遂に思召立ちぬ。さて後に御匣殿の御事もいはんに、中々それはなどか無からん、などよき方ざまに思しなしけん、不覺の事なりやな。壺切などのこと僻事にあんめり。故三條院たび〳〵申させ給ひしかども、とかく申しやりて奉らせざ

れてあり
御遊—管絃
みちかひ—一本ゆきかひ
朝ぎよめ—朝の掃除
大宮—道長の女上東門院彰子

と詳しく承りたる事ども侍るものを、といへば、世繼、さも侍らん。傳りぬる事はいでいで承らばや。習ひにし事なれば、ものゝ猶聞かまほしくぞ侍るぞ、といふ。興ありげに思ひたれば、事のやうだいは、三條院のおはしましつる程こそあれ、うせさせ給ひにける後は、世の常の東宮の御やうにもなく、殿上人など參りて、御遊せさせ給ひ、もてなしかしづき申す人などもなく、いと徒然に紛るゝ方なく思召されけるまゝに、心やすかりし御有樣のみ戀しく、ほけ〳〵しきまで覺えさせ給ひけれど、三條院おはしましつる限は、院の殿上人などもまゐりや、御使もしげくまゐり通ひなどするに、人目もしげく、萬慰めさせ給ふを、院うせおはしましては、世の中のもの怖しく、大路のみちかひも如何とのみわづらはしく振舞にくきにより、宮司などだにも、まゐり仕う奉ることもかたくなり行けば、まして下司の心はいかゞはあらん。主殿寮の下部も、朝ぎよめ仕うまつる事もなければ、庭の草も茂りまさりつゝ、いとかたじけなき御住家にておはします。稀々まゐりよる人々は、世に聞ゆる事とて、三の宮のかくておはしますを、心苦しく殿も大宮も思ひ申させ給ふに、もし內に男宮も出でおはしましなば如何あらん。さあらぬさきに、東宮にたて奉らばや、となん仰せらるるなる。さればおしてとられさせ給ふべ

法師東宮―桓武天皇の皇子早良親王

いはひすゑられ給へれ―齋き祀ら

度の東宮には、式部卿の宮をとこそは思召すべけれど、一條院の、はかぐしき御後見なければ、東宮に當帝を立て奉るなり、と仰せられしかば、是も同じ事なんなり、と思し定めて、寛仁元年丁巳八月五日にこそは、九歳にて三宮東宮にたゝせ給ひて、同月の廿三日こそは、壺切といふ太刀は、内よりもてまゐりしか。當帝位に卽かせ給ひしかば、卽ち東宮にもまゐるべかりしを、しかるべきにやありけん。とかく障りて、此年比内の納殿にさぶらひつるぞかし。同三年己未八月二十八日に、御年十一にて御元服せさせ給ひしか。前の東宮をば小一條院と申す。今の東宮の御有樣申すかぎりなし。つひの事とは思ひながら、たゞ今かくとは思ひかけざりし事なりかし。小一條院わが御心もて退せ給へる事は、これを始とす。世はじまりて後、東宮の御位とりさげられ給へる事は、九代ばかりにやなりぬらん。中に法師東宮おはしましけるこそは、うせ給ひて後に、贈太上天皇と申して、六十餘國にいはひすゑられ給へれ。公にも知しめして、崇道天皇とて、官物の初穗さき奉らせ給ふめり。此院のかくおぼし立ちぬる事は、かつは殿下の御報のはやくおはしますにおされ給へるか。又多くは元方民部卿の靈の仕う奉りつるなり、といへば、侍、それもさるべきなり。この程の御事どもこそ、特の外にかはりて侍れ。某はい

御物怪―冷泉院を惱ませ奉りし元方の靈

さら〳〵思召しそ―一本に、さ思召すべきぞ

親王とて、式部卿宮とぞ申しゝ程に、長和五年正月二十九日三條院おりさせ給へば、當帝位につかせ給ひて、この式部卿の宮、東宮にたゝせ給ひにき。御年二十三。たゞし道理あること、と皆人思ひ申しゝ程に、院うせさせ給ひて後二年許ありて、いかゞ思しめしけん、宮たちと申ししをり、萬に遊びならはせ給ひて、うるはしき御有樣いとくるしく、いかでかゝらでもあらばや、と思しなられて、皇后宮に、斯なんおぼえ侍る、と申させ給ふを、いかでかは實にさもとは思さんずる。すべてあさましくあるまじき事とのみ、いさめ申させ給ふに、おぼしあまりて、入道殿に御消息ありければ參らせ給へるに、御物語こまやかにて、此位去りて、たゞ心やすくてあらんとなん思ひ侍る、と聞えさせければ、さらに〳〵承らじ。さは三條院の御末は絶えね、と思召しおきてさせ給ふか。いとあさましく悲しき御事なり。かゝる御心のつかせ給ふは、こと事ならじ。たゞ冷泉院の御物怪などの思はせ奉るなり。さら〳〵思召しそ、と啓し給ふに、然ばたゞ本意もあり。出家にこそはあんなれ、と宣はするに、さまで思召す事ならば、いかゞはともかくも申さん。内に奏し侍りてを、と申させ給ふ折にぞ、御氣色いとよくならせ給ひにける。さて殿内にまゐらせ給ひて、大宮にも内にも申させ給ひければ、いかゞは聞かせ給ひけんな。この

いと時におはしまししー寵を得て榮え給ひ

するにてよくも御覽ぜざりけり。たゞ人々のほゝゑみて出で給ひしをぞ見しとぞ。この比をかしかりしことに語り給ふなる。大將は、何せんにかゝる事をせさせ奉りて、又しか宣へとも教へ聞えさせつらん、と口惜しく思すに、御色も青くなりてぞおはしける。實に親王をば、もとよりさる人と知り申したれば、これをしも謗り申さず。この殿をぞかかる御心と見る〳〵、せめて無くてあるべき事ならぬに、かく見ぐるしき御有様を、數多の人に見せきこえ給へる事、とぞ謗り申しし。いみじき心ある人と世覺おはせし人の、口惜しき辱詬とり給へるよ。この殿の御北方にては、枇杷の大納言延光の御女ぞおはする。女君二所男君二人ぞおはせし。女君は三條院の東宮にておはせしまゝ折の女御にて、宣耀殿と申して、いと時におはしましし。男御子四所女宮二人生れ給へりし程に、東宮位に卽かせ給ひて、又の年長和元年四月二十八日后にたち給ひて、皇后宮と申す。又今一所の女君は、父殿うせ給ひにし後、御心わざに、冷泉院の四のみこ、帥宮と申す御上にて、二三年許おはせし程に、宮、和泉式部に思しうつりにしかば、本意なくて小一條にかへらせ給ひしに後、この比聞けば、心えぬ有樣のことの外なるにてこそおはすなれ。この殿の御面おこし給ふは、皇后宮におはしましき。この宮の御腹の一のみこ敦明

古代―古風

目をくはせ―目くばせし

出でつゝおかせなど、又人の奉りかふるまでは置かせ給ひて、とり動かすことはせさせ給はぬ。あまりやさしき事なりな。人などの參るにも、かくなんと見せ給ふ料なめり。昔人はさる事をよきにはしければ、そのまゝの有様をせさせ給ふとぞ。かくやうに、いみじう心ありと思したりし程よりはよしなしごとし給へり、とぞ人にいはれ給ふめりし。御甥の八宮に大饗せさせ奉り給ひて、上戸におはすれば、人々醉はして遊ばんなど思して、さるべき上達部たちとく出づるものならば、しばしなど、をかしき樣に留めさせ給へ、とよく敎へ申させ給ひけり。さこそ人がらやさしくしれ給へれど、やんごとなき親王の大事にし給ふことなれば、人々數多まゐり給へりしも古代なりかし。されどおほやけ事さしあはせたる日なれば、いそぎ出で給ふに、實さる事ありつと思召しいでて、大將の御方を數多度見やらせ給ふに、目をくはせ申し給へば、御面いと赤くなりて、頓にはうち出でさせ給はず、ものも仰せられで、俄におびゆるやうに、おどろ〳〵しくあらゝかに、人々のうへの衣の片袂、斷ちぬばかりとりかゝらせ給ふに、參りと參れる上達部は、末の座まで見合せつゝ、えしづめずやありけん、顏氣色かはりつゝ、とりあへず事に事をつけつゝ急ぎたちぬ。この入道殿などは、若殿上人にておはしましける程なれば、事

しれ給へりける―白痴なる

おぼろげにては―一通りのすすめにては

御母后うせ給ひてこそ、中々こよなくおぼえ劣り給へり、とは聞えしか。故宮のいみじくめざましく安からぬ者に思したりしかば、思ひ出づるにいとほしくやしきなり、とぞ仰せられける。この女御の御腹に、八宮とて男みこ一人うまれ給へり。御容などは清げにおはしけれど、御心きはめたる白痴者とぞ聞き奉りし。世の中のかしこき帝の御ためしに、唐土には堯の帝舜の帝と申す。この國には延喜天暦とこそ申すめれ。延喜とは醍醐の先帝の御事、天暦と申すは村上の先帝の御事なり。その御門の御子、小一條の大臣の御孫にて、しかしれ給へりける。いと〳〵怪しき事なりかし。その母女御の御兄濟時の左大將と申しし。長徳元年四月二十三日にうせたまひにき。御とし五十五。この大將は、父大臣よりも御心ざま煩しくくせ〴〵しきおぼえまさりて、あまり名聞になどぞおはせし。御妹の女御殿に、村上の琴教へさせ給ひけるを、御前にさぶらひ給ひて、きならひ給ふ程に、自われも其道の上手に、人にも思はれ給へりしを、おぼろげにては心よくならし給はず。さるべき事の折も、切てそゝのかされて、物一つばかりかき合はせなどこそし給ひしか。あまりけにくし、と人にもいはれ給ひき。人の奉りたる贄などいふ物は、御前の庭にとりおかせ給ひて、夜は贄殿にをさめ、晝は又もとのやうにとり

さて其年も過さず云々―高明を讒構せし報にてその年内に薨去せしとなり

はねをかはせる鳥、かはせる枝―白樂天長恨歌に、在レ天願レ作二比翼鳥一、在レ地願レ爲二連理枝一

年も過さずうせ給ふ、などこそ申すめりしか。それも實にや。御女、村上の御時の宣耀殿の女御。容をかしげに美しうおはしけり。内へまゐり給ふとて、御車にたてまつり給ひければ、わが御身は乘り給ひけれど、御髪のすそは、母屋の柱のもとにぞおはしける。一筋を檀紙におきたるに、いかにもすきま見え給はず、とぞ申し傳へためる。御目のしりの少しさがり給へるが、いとどらうたくおはするを、御門いとかしこくときめかさせ給ひて、かく仰せられけるとか。

いきてのよ死にてののちの後の世も羽をかはせる鳥となりなん

御返し、女御

秋になる事のはだにもかはらずはわれもかはせる枝となりなん

古今うかべ給へり、と聞かせ給ひて、御門試に本をかくして、女御には見せ給はで、大和歌はとあるをはじめにて、まへの句のことばを仰せられつゝ問はせ給ひけるに、いひ違へ給ふ詞にても歌にても無かりけり。かゝることなど父大臣は聞き給ひて、御裝束し御手洗などして、ところ〴〵に誦經などし、念じ入りてぞおはしける。御門御箏の琴をめでたくあそばしけるも、御心に入れてをしへなど、かぎりなく時めき給ふに、冷泉院の

るぞかし。

をぐら山あらしの風のさむければ紅葉のにしききぬ人ぞなき

申しうけ給へる、效ありてあそばしたりな。御みづからも宣ふなるは、作文の船にぞ乘るべかりける。さてかばかりの詩をつくりたらましかば、名のあがらん事も勝りなまし。口惜しかりけるわざかな。さても殿の、いづれにとかおもふと宣はせしになん。われながら心おごりせられし、と宣ふなる。ひと事の優るゝだにあるに、かくいづれの道にもぬけいで給ひけんは、古も侍らぬ事なり。大臣永祚元年六月二十六日にうせ給ひて、おなじき月の三十日、贈正一位になり給ふ。廉義公とぞ申しける。この大臣の御すゑかくなり。

○左大臣師尹

この大臣は忠平のおとゞの五郎、小一條大臣と聞えさせ給ふめり。御母九條殿に同じ。大臣の位にて三年。左大臣にうつり給ふこと、西宮殿の筑紫へくだり給ふ御かはりなり。その御事のみだれは、此小一條の大臣のいひ出で給へる、とぞ世の人聞えし。さてその

西宮殿—左大臣源高明

の幼名

亮に仕うまつり給へるに—公任が皇后宮の亮として仕ふるなり

素腹の后—子なしの后、遵子、

洞院のぼりにおはしませば、東三條のまへをわたらせ給ふに、大入道殿も故女院も、胸いたく思召しけるに、按察大納言は后の御兄にて、御心地よくおぼされけるまゝに、御馬をひかへて、この女御は、いつか后にたち給ふらん、とうち見いれて宣へりけるを、殿をはじめ奉りて、その御族やすからず思しけれど、男宮おはしませば、たけくぞ外の人人も益なくも宣ふかな、と聞きたまふ。一條院位につかせ給へば、また女御后にたゝせたまひて、内に入り給ふに、この大納言殿の亮に仕うまつり給へるに、出車より扇をさし出して、やゝ物申さん、と女房の聞えければ、何事にかとて、うち寄り給へるに、辨の内侍顔を差出して、御妹のすばらの后は何處にかおはする、と聞えかけたりけるに、先年の事を思ひ置かれたるなりけり。みづからだにいかがと思えつる事なれば、道理なくなりぬる身にこそと覺えしか、とこそ宣ひけれ。されど人がら萬によくなり給ひぬれば、ことにふれて捨てられ給はず。かの内侍のとがなるにてやみにき。一年入道殿の大井川の逍遙せさせ給ひしに、作文の船、管絃の船、和歌の船と分たせたまひて、その道にたへたる人々を乘せさせ給ひしに、この大納言殿のまゐり給へるを、入道殿、かの大納言いづれの船にかのらるべき、と宣はすれば、和歌の船にのり侍らん、と宣ひてよみ給へ

多武峯の入道少將—藤原高光まちをさ君はそ

むし齋などかぎりなく如法に供養せさせ給ひ、御前よりも、又とりわきさるべきものども出ださせ給ふ。御みづからも淨き御衣奉り、限りなく淸まはらせ給ひて、僧に賜はらするものどもは、まづ御前にとりすゑさせて、拜ませ給ひてぞ後に遣しける。惠心の僧都の、頭陀行せられけるをりに、京中こぞりていみじき御齋を設けつゝ參りしに、この宮にはうるはしく金の御器どもうたせ給へりしかば、かくてはあまり見苦しとて、僧都の乞食とゞめ給ひてき。今一ところの姫君、花山院の御時の女御にて、四條の宮に尼にておはしますめり。やがて后女御のひとつ腹の男君、只今の按察大納言公任卿と申す。小野の宮の御孫なればにや、歌の道すぐれ給へり。よに恥しう心にくきおぼえおはす。その御女、たゞ今の內大臣の北方にて、年比多くの公達生みつゞけ給へりつる、去年の正月にうせ給ひて、大納言よろづを知らず思し歎く事限なし。又男君一人ぞおはする。左大辨定賴の君、若殿上人の中に、心あり歌なども上手におはすめり。母北方いとあてにおはすかし。村上の御九宮の御女、多武峯入道少將まちをさ君の御女のはらなり。內大臣殿のうへもこの辨の君も、されば御なからひいとやんごとなし。この大納言殿無心の事一度ぞのたまへるや。御妹の四條の宮の、后にたゝせ給ひて、はじめて內へ入り給ふに、

布袴―常の袍に下襲指貫を著たる裝束

有心者―物のわかる人

季の御讀經―毎年二月と八月とに宮中にて大般若經を講ぜしめらるゝ事

十人許に、さきいと高くおはせて、うち見いれつゝ、馬の手綱ひかへて、扇高くつかひて通り給ふを、あさましくおぼせど、中々なる事なれば、事多くも宣はで、たゞなさけなげなる男にこそありけれ、とばかりぞ申し給ひける。非常の事なりや。さるは帥の中納言殿のうへの六條殿の姫君は、母は三條殿の御女におはすれば、御孫ぞかし。されば人よりは參り仕うまつりだにこそし給ふべかりしか。この賴忠の大臣、一人にておはしましゝかど、御直衣にてうちに參り給ふ事侍らざりき。奏せさせ給ふべき事ある折は、布袴にてぞ參り給ふ。さて殿上に候はせ給ひ、年中行事の御障子のもとにて、さるべき職事、藏人などしてぞ奏せさせ給ひ、うけたまはり給ひける。又あるをりは鬼の間に御門出でさせ給ひて、めしあるをりぞまゐらせ給ひし。關白し給へど、よその人にておはしましければにや。故中務卿代明親王の御女の腹に、御むすめ二人男一人おはしまして、大姫君は圓融院の御時の女御にて、天元五年三月十一日后にたゝせ給ひて中宮と申しき。御年二十六。皇子おはせず。四條の宮とぞ申すめりし。いみじき有心者有識にぞいはれ給ひし。功德も御祈も如法に行はせ給ひし。年毎の季御讀經なども、常のこととも思しめしたらず。四日が程二十人の僧を、房のかざりめでたうてかしづきすゑさせ給ひ、湯あ

うたてある事—然るべからざる事、關白の位に在りながら油の世話までするをいふ

條よりは北、西洞院よりは東に住み給ひしかば、三條殿と申す。このおとゞいみじき事どもしおき給へる人なり。賀茂詣に撿非違使車のしりに具する事、又馬の上の隨身左右に四人つがはしむることも、この殿のしいでたまへり。古はものゝふしのかぎり一人づつありて、府生は無くてはべりしなり。一人おはすなど見ゆることはべらざりけり。かならずかく侍るなりける事なりかし。あまりよろづしたゝめあまり給ひて、殿の内によひにともしたる油を、又のつとめて、さぶらひに油瓶をもたせて、女房の局までめぐりて、殘りたるをかへし入れて、又今日の油にくはへて燈させ給ひけり。あまりにうたてある事なりや。一條院位に卽かせ給ひにしかば、よそ人にて、關白のかせ給ひにき。たゞおほきおほい殿と申して、四條の宮にこそは一つに住ませ給ひしか。それにこの前の帥殿は、時の一人の御孫にて、えもいはずはなやぎ給ひしに、六條殿の御壻にておはせしかば、つねに西洞院上にありき給ふを、こと人ならば、こと方より過ぎてもおはすべきを、おほ后太政大臣のおはします前を馬にてわたり給ふ。おほきおほい殿、いとやすからず思せども、いかゞはせさせ給はん。なほ如何やうにてかとゆかしくおぼして、中門の北の廊の連子より覗かせ給へば、いみじうはやる馬にて、御紐おしのけて、雜色二三

人―子を愛する身代のよき人・

祖父大殿―太政大臣實頼

せられたり。湯屋に大きなるかなへ二つぬりすゑられて、烟絶えぬる日なし。御堂には金色の佛多くおはします。供米三十石定器におかれて絶ゆる事なし。御堂に參る道には、御前の池よりあなたを、はる〴〵と野につくらせ給ひて、時々の花紅葉を植ゑさせ給へり。又は船に乘りて池より漕ぎてもまゐる。これより外に道なし。住僧にはやんごとなき智者、あるひは持經者眞言師どもなり。これに夏冬の法服をたまひ、供料をあて給ひて、わが滅罪生善の御祈、又姫君の御息災を祈らしめ給ふ。この小野の宮を、明暮造らせ給ふ事、日にたくみの七八人たゆる時なし。世の中にて斧の音する所は、東大寺とこの小野宮とこそは侍るなれ。祖父おほいどののとりわけ給ひし驗おはする殿なり。實この御男子は、今の伯耆守資頼と聞ゆめるは、姫君の御ひとつ腹にはあらず、いづれにかありけん。

○太政大臣頼忠

この大臣は小野の宮實頼の大臣の次郎なり。御母時平の大臣の御女、敦敏の少將の御同じ腹なり。大臣の位にて十九年、關白にて九年。この生きはめさせ給へる人ぞかし。三

かなしうし給ひき―愛し給ひき

中宮權大夫のうへ―かくや姫

寢殿―主人の住する本屋

こもりとく

みじうかなしうし給ひき。この大臣の御名の文字なり、さねもじは、といふ程もあまり才がりたりや。わらは名はたいかく丸とぞつけたりける。その君こそ今の小野の宮の右大臣と申して、いとやんごとなくておはすめり。この大臣の、御子無きなげきをし給ひて、わが御をひの資平宰相を養ひ給ふめり。又すゑに宮仕へ人をおぼしける腹にいでおはしたる男子は、法師にて内供良圓の君とておはす。又候ひける女房をめしつかひ給ひける程に、おのづからうまれ給りける女君、かぐや姫とぞ申しける。この母は頼定の宰相のめのとご、北方は花山院の女御、爲平式部卿の親王の御女、院そむかせ給ひて後、この女御、殿に候ひ給ひしなり。この女君千日の講おこなひ給ふ。資家中納言のうへのはらなり。兼頼の中納言の北方にてうせ給ひにき。大かた子がたくおはしましける族にや。これも中宮權大夫のうへも、まゝ子をやしなひたまへる。この女君を小野の宮の寢殿の東面に帳床立てゝ、いみじうかしづきすゑ奉らせ給へり。いかなる人か御聟となり給はんとすらん。かの殿はいみじきこもりとく人にぞおはします。故小野宮のそこばくの寶物庄園は、皆この殿にこそはあらめ。殿づくりせられたる樣、いとめでたしや。對寢殿渡殿は例の事なり。辰巳の方に三間四面の御堂立てられて、廻廊はみな供僧の房に

法住寺の大臣―藤原爲光

たれ奉りて參り給ひければ、すこし骨なく思召さるれど、さりとてあるべき事ならねば、書きてまかんで給ふに、女の裝束被けさせ給ふを、さらでもありぬべく思さるれど、捨つべき事ならねば、そこらの人の中をわけ出でられけるならん、なほ懈怠の失錯なりける。長閑なる今朝とくもうち參りて書かれたらましかば、かゝらましやはとぞ、見る人も思ひ自も思したけりける。むげのその道のなべての下臈などにこそ、かうやうなる事はせさせ給はめ、と殿をも謗り申す人々ありけり。その大貳の御女、從兄の懐平の右衛門督の北の方にておはせし。經任君の母よ、大貳に劣らず女の手かきにておはすめり。大貳の御妹は、法住寺大臣の北方にておはす。その御腹の女君は、花山院の御時の弘徽殿の女御。又入道中納言の御北方にて、又男子は、今の中宮大夫齊信卿とぞ申すめる。小野宮の大臣の三郎敦敏少將の同じ腹の君、右衛門督までなり給へりし。齊敏とぞきこえしかし。その御男君播磨守尹文の女の腹に三所おはせし。太郎高遠の君、大貳になりてうせ給ひにき。二郎懐平とて中納言右衛門督までなり給へりし。その御男子なり。今の右兵衛督經通の君、また侍從宰相資平の君、今の皇太后宮權大夫にておはすめり。その齊敏君の御男子の御祖父の小野宮の大臣の御子にし給ひて、實資とつけ奉り給ひて、い

三島に侍る翁—伊豫國三島神社の神

ひの裝束—束帶の禮裝

如泥人—取りしまりなき人

中關白—藤原道隆

りて、此折ならでは何時かはとて止め奉りたるなり、と宣ふに、誰とか申す、と問ひ給へば、この浦の三島に侍る翁なり、と宣ふに、夢の中にもいみじうかしこまり申す、と思すに、驚き給ひてはまた更にもいはず。さて伊豫へ渡り給ふに、多くの日あれつる日ともなく、うら〳〵となりて、そなたざまに追風吹きて、飛ぶが如くまうでつき給ひぬ。湯度々あみ、いみじく潔齋して淸まはりて、ひの裝束して、やがて神の御前にて書き給ふ。社の官どもめし出でて打せなど、よく法の如くしてかへり給ふに、つゆ怖るゝ事なくて、末々の船に至るまで、平にのぼり給ひにき。我することを人間のほめあがむるだに興あることにてこそあれ。まして神の御心にさまでほしく思しけんこそ、いかに御心おごり給ひけん。また大方、これにぞいとゞ日本第一の御手のおぼえは取りたまへりし。六波羅密寺の額も、この大貳のかき給へるなり。されば、かの三島の社の額とこの寺とは同じ御手に侍り。御心ばへぞ懈怠し、すこしは如泥人とも聞えつべくおはせし。故中關白殿、東三條つくらせ給ひて、御障子に歌繪ども書かせ給ひし色紙形を、この大貳に書け、と宣はするを、いたく人騒がしからぬ程に參りてかゝれなば、よかりぬべかりけるに、關白殿わたらせ給ひて、上達部殿上人などさるべき人々數多まゐり集ひて後に、日高く侍

ぼし忘れぬる折は、御袖をかづきてぞ驚きさわがせ給ひける。この大臣の御女子、女御にてうせ給ひにき。村上の御時にや、たしかにおぼえ侍らず。男君は、時平大臣の御女の御腹に、敦敏少將とておはせし。父大臣の御さきにかくれ給ひにきかし。さていみじう思し歎くに、東の方より、うせ給へりしも知らで、馬を奉りたりければ、大臣、

まだ知らぬ人もありけり東路に吾も行きてぞ住むべかりける

いと悲しき事なり、とて目おし拭ふに、大臣の御童名をば牛飼と申しき。さればその御族は、牛飼をば牛附とのたまふなり。敦敏の少將の子なり。佐理大貳、世の手かきの上手。任果てて上られけるに、伊豫國のまへなる泊にて、日いみじうあれ、海の面悪しくて風怖しう吹きなどするを、すこしなほりて出でんとし給へば、また同じやうになりぬ。かくのみしつゝ日比過ぐれば、いと怪しく思して物とひ給へば、神の御祟とのみいふに、さるべき事もなし。いかなる事にか、と怖れ給ひける夜の夢に見え給ひけるやう、いみじうけだかき樣したる男のおはして、この日のあれて日ごろ此處に經給ふは、おのれがし侍る事なり。それは萬の社に額のかゝりたるに、己が許にしも無きが悪しければ、懸けんと思ふに、なべての手して書かせんがわろく侍れば、我にかゝせ奉らん、と思ふによ

さずばあしかりなんとて、御太刀をひき抜きて、かれが手をとらへさせ給へりければ、惑ひてうち放ちてこそ、丑寅の隅ざまへまかりにけれ。思ふに夜の事なりけんかし。こと殿ばらの御事よりも、この殿の御事申すは、辱くも哀にも侍るかなとて、聲うちかはりて鼻たび〱うちかむめり。いかなりける事にか、七月にて生れさせ給へるとこそ、人申しつたへたれ。天暦三年八月十四日にぞうせさせ給ひける。正一位贈せられ給ふ。

○太政大臣實頼

この大臣は忠平の大臣の一男におはします。小野宮の大臣とまうしき。御母は寛平法皇の御女なり。大臣の位にて二十七年。天下執行攝政關白したまひて、二十年許やおはしけん。天祿元年五月十八日うせさせ給ひにき。御年七十一。御いみな淸愼公なり。和歌の道にもすぐれおはしまして、後撰にも數多入り給へり。大方何事も有職に、御心うるはしくおはします事は、世の人の本にぞひかれさせ給ふ。小野宮の南面には、御髻はなちて出でさせ給ふ事なかりき。その故は稻荷の杉のあらはに見ゆれば、明神御覽ずらんに、いかでか無禮にては出でん、と宣はせて、いみじく愼ませ給ふに、おのづからお

御髻はなちて—冠なかぶらず髪をあらはにして

―石疊に車などのきしる音

きたなきもの―はき物

陣座ざまに云々―陣の座の方に、陣の座は節會神事等の時上卿の事を執り行ふ處

南殿―紫宸殿

き侍れば、昔の名殘にいと辱くこそ見給ふれ。この翁どもは、今もおぼろげにてはとほり侍らず。今日もまはり侍らんが、腰の痛く侍りつれば、術なくてぞまかり通りつれど、なほ石疊をばよきてぞまかりつる。南のつらのいとあしき泥をばふみこみて候ひつれば、きたなきものもかくなりて侍るなりとて、引き出でて見す。先祖の御物はなにもほしけれど、小一條のみなん用に侍らぬ。人は子うみ死ぬる料にこそ家もほしきに、さやうのをり、外へ渡らん處はなにかはせん。又大方常にもたゆみなく怖し、とここの入道殿は仰せらるゝなれ。道理なりや、この貞信公には、宗像明神うつゝに物など申し給ひけり。我よりは御位高くてゐさせ給へるなん苦しき、と申したまひければ、いと不便なる御事とて、神の御位は申しまさせ給へるなり。この殿いづれの御時とはおぼえ侍らず、思ふに延喜朱雀院の御程にこそは侍りけめ。宣旨うけたまはらせ給ひて、おこなひに陣座ざまにおはします道に、南殿の御帳のうしろの程通らせ給ふに、物のけはひして、御太刀のいしづきを捉へたりければ、いと怪しくてさぐらせ給ふに、毛はむく〳〵とおひたる手の、爪長く刀のはのやうなるに、鬼なりけり、といと怖しく思しけれど、臆したる樣みえじ、と念ぜさせ給ひて、おほやけの勅定承りて、定にまゐる人とらふるは何者ぞ。ゆる

みじ〳〵と

○太政大臣忠平

この大臣は、これ基經大臣の四郎君。御母は本院大臣。枇杷の大臣におなじ。延長八年庚寅九月二十一日攝政。天慶四年辛丑十一月八日關白の宣旨かうぶらせ給ふ。公卿にて四十二年。大臣の位にて三十二年。世をしらせたまふ事二十年。後の御いみな貞信公となづけ奉る。小一條の太政大臣と申す。朱雀院ならびに村上の御叔父におはします。この御子五人。其折は我が御位太政大臣にて、御太郎は左大臣にて實賴のおとゞ、これ小野宮殿と申しき。次郎右大臣師輔のおとゞ、これを九條殿と申しき。四郎師氏大納言と聞えき。五郎また左大臣師尹のおとゞ、小一條殿と申しきかし。この四人の君達左右大臣大納言などにてさし續きおはしましし。いみじかりし御榮花ぞかし。女子一所は先坊の御息所にておはしましき。常にこの三人の大臣たちのまゐらせ給ふ料に、小一條の南勘解由小路には、石だたみをぞせられたりしがまだ侍るぞかし。宗像明神おはしませば、洞院うしろの辻よりおりさせ給ひしに、雨などの降る日の料、とぞ承りし。大方その一町は、人罷りありかざりき。今はあやしのものも馬車に乗りつゝ、みじ〳〵とあり

ほに出でて人にむすばれにけり—上の句、花薄われこそしたに思ひしか古今集
おほきおほい殿—太政大臣忠平
御あはひ—兄弟の御間柄

大鏡　巻之三

○左大臣仲平

この大臣は基經の大臣の次郎。御母は本院の大臣におなじ。大臣の位にて十三年ぞおはせし。枇杷左大臣と申す。御子もたせ給はず。伊勢が集に、ほに出でて人にむすばれにけり、などよみ給へるは、この人におはす。貞信公よりは御兄なれども、二十年まで大臣になりおくれ給へりしを、つひになり給へれば、大きおほい殿の御悦の歌、

おそくとくつひに咲きぬる梅の花たが植置したねにかあるらん

やがてその花をかざして、御對面の日喜び給へり。ひさしの大饗せさせ給ひけるにも、よこさまにすゑ參らせさせ給ひけるこそ、年比すこしかたはらいたく思されける御心とけて、如何にかたみに心ゆかせ給へりけん、と御あはひめでたけれ。この殿の御心ぞ、まことにうるはしくおはしましける。皆人聞きしろしめしたる事なり。申さじ。

いらなく―作法

神―雷

所おく―遠慮する

につきて、事きびしく定めのゝしり給ふに、この史みんばさみに文はさみて、いらなく振舞ひて、この大臣に奉るとて、いと高やかに放屁して侍りけるに、大臣ふみもえ執らず、手わなゝきてやがて笑ひて、今日は術なし。右大臣にまかせ申す、とだにいひやり給はざりければ、それにこそ菅原の大臣、御心のまゝにまつりごちたまひけれ。また北野神にならせ給ひて、いと怖しく神鳴りひらめき、清涼殿におちかゝりぬと見えけるが、本院大臣太刀をぬきさげて、生きても我が次にこそものし給ひしか。今日神となり給へりとも、この世には我に所おき給ふべし。いかでかさらではあるべき、と睨みやりて宣ひけるに、一度はしづまらせ給へりけりとぞ、世の人の申し侍りし。されど、それはかの大臣のいみじくおはするにはあらず。王威の限なくおはしますによりて、理非を示させ給へるなり。

過差―奢侈
職事―六位藏人
一人―左大臣

を、帝小蔀より御覽じて、御氣色いとあしくならせたまひて、職事をめして、「世間の過差の制きびしきころ、左大臣の、一人といひながら、美麗ことの外にて參れる。便なきことなり。はやく退出づべきよしおほせよ」と仰せられければ、承る職事はいかなる事にか、と恐れ思ひけれど、參りて、わなゝく〳〵しかぐ〳〵の事、と申しければ、いみじく驚きかしこまり承りて、御隨身のみさきまゐるも制し給ひて、急ぎまかりいで給へば、御前どもゝあやしと思ひけり。さて本院の御門一月ばかり鎖させて、簾の外にも出で給はず。人などの參るにも、勘當の重ければとて、あはせ給はざりしにこそ、世の過差は平ぎたりしか。うち〳〵承りしかば、さてばかりぞしづまらんとて、帝と御心あはせさせ給へりけるとぞ。この左大臣ものゝをかしさぞ、え念ぜさせ給はざりける。笑ひたゝせたまひぬれば、すこぶる事も亂れけるとか。北野と世をまつりごたせ給ひけるあひだ、非道なる事おほせられければ、さすがにやんごとなくて、せちにし給ふ事をいかゞは、と思して、この大臣のし給ふ事なれば、不便なりと見れど、いかゞはすべからん、と歎き給ひけるを、なにがしの史が、事にも侍らず、おのれかまへてこの御事をとゞめ侍らん、と申しければ、いとあるまじき事、いかにしてかは、など宣はせけるを、たゞ御覽ぜよとて、座

四分一の家―地所の内四分の一だけ家作せしなり

枇杷の大納言―醍醐天皇の皇子代明親王の第三子源延光

大和魂―世才

はず、われ出でさせ給ひて、御手づからぞすましける。御めしものは、うるはしく御器などにもまゐりするゑで、たゞ御土器にて、臺などもなく、折敷などにとりするゑつゝぞまゐらせける。儉約したまひしも、さるべき事のをりの御座と御はん所とにぞ、大臣とは見え給ひし。かくもてなし給ひしけにや、この大臣のみぞ御族の中に六十餘までおはせし。四分一の家にて大饗し給へる人なり。富小路の大臣と申す。是より外の君たちみな三十餘四十に過ぎ給はず。その故はたゞ事にはあらず。この北野の御歎になんあるべき。顯忠の大臣の御子、重輔の右衞門佐とておはせしが御子なり。いまの三井寺の別當心譽僧都、山階寺の權別當扶公僧都など、この公達こそはものし給ふめれ。敦忠中納言の御男子、數多おはしける中に、兵衞佐なにがしの君とかや申しゝ。その君出家して往生し給ひにき。その僧の御子なり、岩倉の文慶僧都は。敦忠の御むすめは、枇杷大納言の北の方にておはしき。かくあさましき惡事を申し行ひ給へりし罪により、この大臣の御裔はおはせぬなり。さるは、大和魂などは、いみじくおはしましたるものを、延喜の世間の作法したゝめさせ給ひしかど、過差をばえしづめさせ給はざりしに、この殿制を破りたる御裝束の、ことの外にめでたきをして、内に參り給ひて、殿上にさぶらひ給ふ

御前つがひたまはず――警蹕などもせしめず

御かへし、大輔、

　こひしさの慰むべくもあらざりき夢のうちにもゆめと見しかば

今一人の御息所は、玄上の宰相の女にや。その後朝の使に、敦忠の中納言少將にてし給ひける。宮うせ給ひて後、この中納言にはあひたまへるを、限なく思ひながら、いかゞ見給ひけん、文範の民部卿播磨守にて、殿の家司にてさぶらはるゝを、われは命短き族なり。かならず死なんず。その後君は、この文範にぞあひ給はんずる、とのたまひけるを、あるまじき事、と答へ給ひければ、あまがけりても見ん。よにたがへ給はじ、など宣ひけるが、實にさていますがるぞかし。たゞこの君たちの御中には、大納言源昇卿の御女の腹の顯忠おとゞのみぞ、右大臣までなり給へる。その位にて六年おはせしかど、すこしおぼす處やありけん、出でてありき給ふにも、家の中にても、大臣の作法をふるまひ給はず。御ありきのをりは、おぼろけにて御前つがひたまはず、まれ〳〵も數少くて、御車の後にぞさぶらひし。車副四人つかはせ給はざりき。御さきも時々ほのかにぞまゐりし。又半插盥して御手すますことなかりき。寢殿の東の間に棚をして、小桶にちひさきひさげ具しておかれたれば、仕丁早朝ごとに、湯もて參りていれければ、人してもかけさせ給

うちあげたるを―聲はり上げて讀みたるを

博雅三位―醍醐天皇の御孫克明親王の三男管絃の達人

先坊に御息所云々―坊は東宮の事先坊は保明親王御息所は太子の妃

給ひしに、藥師經の讀經枕上にてせさせ給ふに、いはゆる宮毘羅大將とうちあげたるを、われを縊ると讀むなりけり、とおぼしける臆病に、やがて絶え入り給へり。經の文といひながら、こはき物怪にとりこめられ給へる人に、げにあしくはうちあげ侍るかし。さるべきとはいひながら、物はをりふしのことだにも侍ることなり。その弟の敦忠の中納言もうせ給ひにき。世にめでたき和歌の上手。管絃の道にすぐれ給へりき。かくれたまひてのち、御あそびなどあるをりに、博雅三位のさはる事ありて參られぬ時は、けふの御遊は止りぬ、と度々めされて參るを見て、ふるき人々は、世の末こそあはれなれ。敦忠の中納言のいますがりしをりは、かゝる道にこの三位の、おほやけをはじめ奉りて、世の大事に思はるべきものにとこそ思はざりしか、とぞのたまひける。先坊に御息所まゐり給ふ事、本院のおとゞの御女具して三四人なり。本院のはうせ給ひにき。中將の御息所と聞えしは、後は重明の式部卿の親王の北の方、齋宮の女御の御母にて、そもうせ給ひにき。今一人の御息所はいとやさしくおはせし。先坊を戀ひかなしみ奉り給ふ。大輔なん夢に見奉りたる、と聞きておくり給へる。

ときの間もなくさめつらん君はさは夢にだに見ぬわれぞ悲しき

つくるとも云々―幾度造るとも菅原の大臣の無實の罪はれて心中の憤の止まぬ間は幾度も燒くべし

いとうるはしく鉋かきてまかり出でつゝ、又の明日に參りて見るに、昨日のうら板に物のすゝけて見ゆるところのありければ、梯にのぼりて見るに、夜のうちに蟲の食めるなりけり。その文字は、

　つくるとも又も燒けなん菅原やむねのいたまのあかぬかぎりは

とこそありけれ。それもこの北野のあそばし給へる、とこそは申すめりしか。かくてこのおとゞは、筑紫におはしまして、延喜三年癸亥二月二十五日にうせたまひしぞかし。御年五十九。さて後七年ばかりありて、左大臣時平のおとゞ、延喜九年己巳四月四日うせ給ふ。御歳三十九。大臣の位にて十一年ぞおはしましける。本院大臣と申す。この時平のおとゞの女の女御もうせ給ひぬ。御孫の東宮も、一男八條の大將保忠卿もうせ給ひにきかし。この大將八條に住み給へば、内に參りたまふ程いと遙なるに、いかゞ思されけん、冬は餅のいと大きなるをば一つ、小きをば二つ燒きて、燒石のやうに、御身にあてて持ち給へりけるに、ぬるくなれば、小きをば一つづつ、大きなるをば中よりわりて、御車副に投げとらせ給ひける。あまりなる御用意なりかし。その世にも耳とゞまりて人の思ひければこそ、かくいひ傳へ侍らめ。この殿ぞかし。病つき給ひて、さま〴〵の祈し

なまふがう—生不學、學問の未熟なる意

筑紫にてつくり集めさせ給へりけるを、かきて一巻とせしめ給ひて、後集と名づけられたり。又をり〱の歌をかきおかせ給へりける。おのづから世にちり聞えしなり。世繼が若う侍りし時、この事のせめて哀に悲しく侍りしかば、大學の衆どものなまふがうにいますがりしを、問ひたづね語らひとりて、さるべき餌袋破子やうのもの調じて、うち具してまかりつゝ、習ひ取りて侍りしかど、老のけの甚しきことは、皆こそ忘れ侍りにけれ。これはたゞ頗るおぼえ侍るなり、といへば、聞く人々、げに〱いみじきすきものにも物し給ひけるかな。今の人はさる心ありなんや、など感じあへり。また雨の降る日、うちながめ給ひて、

天の下かわけるほどの無ければや著てし濡衣ひるよしもなき

やがて彼處にてうせさせ給へり。夜のうちに、この北野にそこらの松をおほさしめ給ひて、わたり住み給ふをこそは。只今の北野宮と申して、あら人神におはしますめれば、おほやけも行幸せしめ給ふ。いとかしこくあがめ奉り給ふめり。筑紫のおはしましゝ所は、安樂寺といひて、おほやけより別當所司などなさせたまひて、いとやんごとなし。内裏燒けてたび〱造らしめ給ひしも、圓融院の御時の事なり。工匠ども、うら板どもを

文集の云々―唐の白居易(字樂天)の白氏文集に日高睡足猶慵起、小閣重衾不怕寒、―、―、匡廬便是逃名地、司馬仍爲送老官、心泰身寧是歸處、故郷何獨在長安、

よいよ延へて物を繰り出すやうに言ひつゞくる程ぞ、實に希有なるや。繁樹涙を拭ひつつ興じゐたり。筑紫におはします處の御門もかためておはします。大貳の居所遙なれども、樓の上の瓦などの、心にもあらず御覽じやられけるに、又いと近く觀音寺といふ寺のありければ、鐘の聲をきこしめして作らせ給へる詩ぞかし。

都府樓纔看瓦色　觀音寺只聽鐘聲

これは、文集の白居易の、遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峯雪撥簾看といふ詩にも、まさざまに作らしめ給へり、とこそ昔の博士どもは申しけれ。又かの筑紫にて、九月十日菊の花を御覽じけるついでに、まだ京におはしましし時、九月の今宵、内裏にて菊の宴ありしに、この大臣のつくらせ給へりける詩を、帝かしこく感じたまひて、御衣たまはり給へりしを、筑紫に持て下らしめ給へりければ、御覽ずるに、いとゞそのをり思しめし出でて、つくらせ給ひける。

去年今夜侍清涼　秋思詩篇獨斷腸
恩賜御衣今在此　捧持毎日拜餘香

この詩いとかしこく人々感じ申されき。この事どもたゞちりぢりなるにもあらず、かの

なげき—歎に投木

おどろ〳〵しき事—仰仰しき事

又播磨の國におはしまし著きて、明石の驛といふ所に御やどりせしめ給ひて、驛の長のいみじう思へる氣色を御覽じて、作らせ給へる詩いとかなし。

驛長無驚時變改　一榮一落是春秋

かくて筑紫におはしまし著きて、ものあはれに心ぼそく思さるゝ夕、遠方に所々烟たつを御覽じて、

夕されば野にも山にもたつ煙なげきよりこそ燃えはじめけれ

又雲のうきてたゞよふを御覽じても、

山わかれ飛びゆく雲のかへりくるかげ見る時はなほ賴まれぬ

さりともと世をおぼしめされけるなるべし。月のあかき夜、

海ならずたゞよふ水の底までもきよきこころは月ぞてらさん

これいとかしこくあそばしたりかし。實に月日こそは照し給はめとこそはあめれ。實におどろ〳〵しき事はさる物にて、かくやうの歌や詩などをさへ、いとなだらかにゆゑ〳〵しう言ひつゞけまねぶに、見聞く人々、目もあやに淺ましくあはれにもまもりゐたり。物のゆゑ知りたる人なども、むげに近く居よりて、外見せず見聞く氣色どもを見て、い

ちひさきはあへなん―幼少なる者は許さん

に、左大臣やすからずおぼしたる程に、さるべきにやおはしけん、右大臣の御爲に、よからぬ事出できて、昌泰四年正月二十五日太宰權帥になし奉りて流され給ふ。この大臣子供數多おはせしに、女君たちは壻どりし。男君たちは皆ほど〳〵につけて、位どもおはせしを、それも皆方々に流され給ひて悲しきに、幼なくおはしける男君女君たち、慕ひ泣きておはしければ、ちひさきはあへなん、と朝廷もゆるさしめ給ひしかば、ともにゐて下り給ひしぞかし。帝の御おきて極めてあやにくにおはしませば、この御子どもを、おなじ方にだに遣はさゞりけり。かた〴〵にいと悲しく思しめして、御前の梅の花を御覽じて、

東風吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ

又亭子帝に聞えさせ給ふ。

流れゆくわれは水屑になりはてぬ君しがらみとなりて留めよ

なき事によりてかく罪せられ給ふを、からくおぼし歎きて、やがて山崎にて出家せしめ給ひて、都遠くなるまゝに、あはれに心細く思されて、

君がすむやどの梢をゆくゆくと隱るるまでもかへりみしはや

官年爵を賜はること

寶の君―大事の主君

忠平といふに、繁樹がけしきことになりて、まづ後の人の顔うち見わたして、それぞいはゆるこの翁が寶の君貞信公におはします、とて扇うち使ふかほもち特にをかし。三郎にあたらせ給ひしは、從三位して宮内卿兼平の君と申して、うせたまひにき。さるは御母忠良の式部卿親王の御女にて、いとやんごとなくおはすべかりしかど、この三人の大臣たちを、世の人三平と申しき。

○左大臣時平

このおとゞは、基經の大臣の太郎なり。御母四品彈正尹人康親王の御女なり。醍醐帝の御時、このおとゞ左大臣の位にて、年いと若くておはします。菅原大臣は右大臣の位にておはします。そのをり帝御年いと若くおはします。左右大臣に世の政行ふべき宣旨くださしめ給へりしに、そのをり左大臣御年二十八九ばかりなり。右大臣の御年五十七八許にやおはしましけん。ともに世の政をせしめ給ひし程に、右大臣は才世にすぐれ、めでたくおはしまし、御心おきてもことの外にかしこくおはします。左大臣は御年も若く、才もことのほかに劣り給へるによりて、右大臣御おぼえことの外におはしましたる

准三宮―太皇太后、皇太后、皇后に准じて年

又上野峰雄といひし人のよみたる。

深草の野べの櫻しこころあらばことしばかりはすみぞめに咲け

などは、古今に侍ることどもぞかしな。御家は堀河院と閑院とに住ませ給ひしを、堀河院をば、さるべき事のをり、はれ〴〵しき料にせさせたまひ、閑院をば御物忌や、又うとき人などは參らぬ所にて、さるべくむつましく思す人ばかりを、御供にさぶらはせて、わたらせ給ふをりもおはしましけり。堀河院の地形のいといみじきなり。大饗のをり、殿ばらの御車のたちやうなどよ、尊者の御車をば、川より東にたて、牛は御橋のひらき柱にひきつなぎ、こと上達部の車をば、川よりは西にたてたるがめでたきとぞ。尊者の御車の別にことに見ゆる事は、こと所はえ侍らぬ物をや、と見給ふるに、この賀陽院殿にこそおされてはべるめれ。方四町にて、四面に大路ある京中の家は、冷泉院のみとこそ思ひさふらひつれ。世の末になるまゝに、まさる事のみ出でまうでくるなり。この昭宣公の大臣は、陽成院の御叔父にて、宇多帝の御時、准三宮の位にて、年官年爵を得給ひ、朱雀院竝に村上の祖父にておはします。世おぼえやむことなし、と申せば、おろかなりや。御男子四人おはしましき。太郎左大臣時平、次郎左大臣仲平、四郎太政大臣

きやうさく—警策、物事のすぐれたること
大饗—大臣に任ぜられたる人の大納言以下を饗應する式
尊者—大饗の時の上客
御となぶら—燈火
融のおとゞ—左大臣源融

らせ給ひけるが、良房のおとゞの大饗にや、昔は親王たち必ず大饗につかせ給ふ事にて、わたらせ給へるに、雉の足は必ず盛る物にて侍るを、いかゞしけん、尊者の御前にとりおとしてけり。陪膳する人親王の御前のをとりて、まどひて尊者の御前にすうるを、いかゞ思しめしけん、御前の御となぶらを、やをらかい消たせ給ひける。この大臣は、そのをりは下臈にて、座の末にて見奉らせ給ふに、いみじくもせさせ給ふものかな、といよいよ見めで奉らせ給ひて、陽成院おりさせ給ふべき陣の定にさぶらはせ給ふ。融のおとゞ、やんごとなくて、位につかせ給はん御心ふかくて、いかゞは近き皇胤をたづねば、融らも侍るは、といひ出でたまへるを、この大臣こそ、皇胤なれど姓を給はりて、たゞ人にてつかへて、位に卽きたるためしやある、と申し出でたまへれ。さもある事なれば、この大臣の定によりて、小松の帝は、位に卽かせたまへるなり。帝の御末もはるかに傳り、大臣の末もともにつたはりつゝ、後見まうし給ふ。さるべく契おかせ給へるにや、とぞ思ひ侍る。大臣うせ給ひて、深草の山にをさめたてまつる夜、勝延僧都のよみたまへる。

うつせみはからを見つつもなぐさめつ深草の山けぶりだにたて

この中納言は冬嗣のおとゞの太郎。母は白川大臣西三條大臣に同じ。公卿にて十三年。陽成院の御時に御祖父におはするが故に、元慶元年丁酉正月に贈左大臣正一位。又贈太政大臣枇杷大臣と申す。この殿の御男子六人おはせし。その中に基經の大臣すぐれ給へり。

○太政大臣基經

このおとゞは、長良中納言の三郎におはす。このおとゞの御女は、醍醐の御時の后、朱雀院ならびに村上二代の御母后におはします。この大臣の御母は、贈太政大臣總繼の女、贈正一位大夫人乙春なり。陽成院位につかせ給ひて、攝政の宣旨かうぶり給ふ。御年四十一。寛平の御時、仁和三年丁未十一月二十一日關白にならせ給ふ。御とし五十六にて、寛平三年正月十三日うせさせ給ひにき。御いみな昭宣公と申す。公卿にて二十七年。大臣の位にて二十年。世をしらせ給ふ事十餘年かとぞおぼえ侍る。世の人堀川大臣と申す。小松の帝の御母、この殿の御母の同胞におはします。さて兒より小松の帝をば親しく見奉らせ給ひて、ことにふれて、きやうさくにおはしますを、あはれ君かな、と見奉

小松の帝—光孝天皇

みな人知しめしたらめど、物を申しはやりぬればさぞ侍る。かくいみじき幸人の、子のおはしまさぬこそ口惜しけれ。御兄の長良の中納言、ことの外にこえられ給ひけんをり、いかばかり辛う思され、又世人もことのほかに思ひ申しけめども、その御末こそ、今に榮えおはしますめれば、行末はことの外にまさり給へりけるものを。

○右大臣良相

このおとゞは、冬嗣のおとゞの五郎。御母白川の大臣に同じ。大臣の位にて十一年。贈正一位西三條大臣と申す。淨藏定額を御祈の師にておはす。千手陀羅尼の驗德かうぶり給へる人なり。この大臣の御女の御事よくしらず。ひとりぞ水尾の御時の女御。男子は、大納言常行の卿と聞えし。御子二人おはせしも、五位にて典藥助主殿頭などいひて、いとあさくてやみ給ひにき。かくばかり末さかえ給ひける中納言殿を、やへ〱の御弟にて、越え奉り給へりける御あやまちにや、とこそおぼえ侍れ。

○權中納言從二位左兵衞督長良

やへ〱の御弟—最末の弟

年官年爵—一種の俸祿

染殿の后—清和天皇の御母藤原明子

素性きみ—素性法師

詔ありて、年官年爵給はりたまふ。貞觀八年丙戌關白にうつり給ふ。御年六十三。うせ給ひて後の御諡號忠仁公と申す。又白川の大臣、染殿の大臣とも申し傳へたり。但しこのおとゞは、文德天皇の御叔父、太皇太后宮明子の御父、清和天皇の御祖父にて、太政大臣准三宮の位にのぼらせたまひ、年官年爵の宣旨くだり、攝政關白などし給ひて、十五年こそはおはせしか。大方公卿にて三十年。大臣の位にて二十五年ぞおはせし。この殿ぞ藤氏のはじめて太政大臣攝政し給ふ。めでたき御有樣なり。和歌もあそばしけるにこそ。古今にもあまた侍るめるは。さきのおほいまうちぎみとは、この御事なり。多かる中にも、いかに御心ゆき、めでたくおぼえてあそばしけん、とおしはからる。御女の染殿の后の御前に、櫻の花がめにさゝれたるを御覽じて、かくよませ給へるにこそ。

　年ふればよはひは老いぬ然はあれど花をし見れば物思もなし

后を花にたとへ申させ給へるにこそ。かくれ給ひて、白川にをさめたてまつる日、素性きみのよみ給へりしは、

　血の涙落ちてぞたぎつ白川は君が世までの名にこそありけれ

田邑—文徳天皇

水尾の帝—清和天皇

大鏡　巻之二

○左大臣冬嗣

この大臣は、内麿呂の大臣の三郎。御母は正六位上飛鳥部奈止麿呂の女なり。公卿にて十六年。大臣の位にて六年。田邑の御祖父におはします。かるがゆゑに、嘉祥三年庚午七月十七日贈太政大臣になり給へり。閑院の大臣と申す。このおとゞは、大方男子十一人おはしたるなり。されど、くだ〳〵しき女子たちの事は、くはしく知り侍らず。たゞし、田邑の帝の御母后、贈太政大臣長良のおとゞ、太政大臣良房のおとゞ、右大臣良相のおとゞは、ひとつ御腹なり。

○太政大臣良房

このおとゞは、左大臣冬嗣の次郎なり。天安元年丁丑二月十九日太政大臣になり給ふ。同じ年四月十九日従一位。御年五十四。水尾帝は御孫におはしませば、即位の年摂政の

嗣は左大臣
なればいふ

の入道殿（にふだうどの）、よにすぐれさせ給へり。

閑院の大臣―藤原師輔の十一男公季

藤左子―冬

さだまりて大寶元年といふ。五十五代の帝文徳天皇の齊衡四年丁丑二月十九日、帝の御叔父、左大臣從一位藤原良房大臣、太政大臣になり給ふ。御とし五十四。この大臣こそ、はじめて攝政もしたまひつれば、やがてこの殿よりして、今の閑院の大臣まで、太政大臣十一人つゞき給へり。たゞしこれよりさき、大友皇子、高市皇子くはへて十三人の太政大臣なり。太政大臣になり給ひぬる人は、うせ給ひて後かならず諡といふものあり。されども大友皇子やがて帝になりたまへり。高市皇子の御いみなおぼつかなし。又太政大臣といへど、出家しつれば諡なし。さればこの十一人續かせ給ひたる太政大臣、二所は出家し給ひつれば、いみなはおはせず。この十一人の太政大臣たちの御次第ありさま、はじめ終申し侍らんとおもふなり。流を汲みて源を尋ねてこそは、よくはべるべきを、大織冠よりはじめ奉りて申すべけれど、それは餘あがりての世の事なり。このきかせ給はん人々もあなづりごとには侍れど、何事とも思されざらんものから、こと多くて講師おはしなば、ことさめ侍りなむも口惜し。されば帝王の御事も、文徳の御時より申して侍れば、その帝の御祖父の鎌足の大臣よりは第六にあたりたまふ。世の人は藤左子とこそ申すめれ。その冬嗣の大臣より申し侍らん。その中に、おもふに、たゞ今

わざとの太政大臣―贈官ならで存生中ことさらになりたる太政大臣

その人なくば云々―職員令に無其人則闕云々

ぐひ七人ばかりやおはすらん。わざとの太政大臣はなりがたく少くぞおはする。神武天皇より三十七代にあたり給へる、孝徳天皇と申す帝の御代にや、八省百官左右大臣内大臣なりはじめ給へらん。左大臣には安倍の倉橋麻呂。右大臣には蘇我の山田の石川麻呂、これは元明天皇の御おほぢなり。石川麻呂の大臣、孝徳天皇位に卽き給ひての元年乙巳大臣になり、五月己酉東宮のためにころされ給へりとこそは、これはあまりあがりたる事なり。内大臣には中臣の鎌子の連なり。かの時年號未あらざれば月日申しにくし。又三十九代にあたり給へる帝、天智天皇こそは、はじめて太政大臣をばなし給へりけれ。それはやがて、わが第四の皇子におはします大友皇子なり。正月に太政大臣になり、同じ年十二月二十五日に位に卽かせ給ふ。天武天皇と申しき。代をしらせ給ふこと十五年。神武天皇より四十一代にあたらせ給ふ、持統天皇また太政大臣に高市皇子をなし給へり。天武天皇の皇子なり。この二人の太政大臣、一人はやがて帝となりたまへり。高市皇子は大臣ながらうせ給ひにけり。その後太政大臣いと久しく絶え給へり。たゞし職員令には太政大臣にはおぼろげの人はなすべからず。その人なくばたゞにおかるべし、とこそあなれば、おぼろげの位にははべらぬにや。四十二代にあたり給ふ文武天皇の御時に、年號

世間の太政大臣攝政關白と申せど、始終めでたき事は、えおはしまさぬことなり。法文聖教の中にものたまへるなるは、魚の子多かれど、まことの魚となる事は難し。奄羅といふ植木あれど果を結ぶ事かたし、とこそは說きたまふなれ。天下の大臣公卿の御中に、この寶の君のみこそ、世に珍かにおはすめれ。今行末も、誰の人かかばかりはおはせん、いとありがたくこそ侍れや。誰も〳〵心をとなへてきこしめせ、世にある事は何事をか見のこし聞きのこし侍らん。この世繼が申す事どもはしも、知りたまはぬ人々多くおはすらんとなん思ひはべる、といふめれば、すべて〳〵申すべきにも侍らずとて、きゝあへり。

世はじまりて後、大臣みなおはしけり。されど左大臣、右大臣、内大臣、太政大臣と申す位、天の下になり集り給へる、かぞへて皆おぼえて侍り。世はじまりて後今に至るまで、左大臣三十人。右大臣五十七人。内大臣十二人なり。太政大臣は、古の帝の御代には、たはやすくおかせ給はざりけり。あるひは帝の御祖父、あるひは御門の御叔父ぞなり給ひける。又しかの如くに、帝王の御祖父叔父などにて、御後見し給ふ大臣納言、かずおほくおはす。うせ給ひて後贈太政大臣などになり給へる類、數多おはすめり。さやうのた

怪しながら|此の翁共語る所甚だ奇怪ながら信ぜらるべき氣色もありて面白く珍らし

一乘の法|法華經方便品、十方佛土唯有二一乘法一無レ二無レ三云々

といふめれば、世繼いたく感じて、あまたたび誦してうめきて、返、

すべらきのあともつぎづきかくれなく新に見ゆるふる鏡かも

今やうの葵八つ花形の鏡、螺鈿のはこにいれたるに、向ひたる心地し給ふるや。いでやそれはさきらめけど、曇りやすくぞあるや。いかに古の古代の鏡は、かね白くて人手觸れねど、かくぞあかきなど、したり顔に笑ふかほつき、繪に書かまほしく見ゆ。怪しながらさすがなるけつきて、をかしく實に珍かになん。世繼、よしなし事よりは、まめやかなる事を申し出でん。よく〱誰も誰もきこしめせ。けふの講師の說法は、菩提の爲とおぼし。又翁らが說く事は、日本紀をきくと思すばかりぞかし、といへば、僧俗げに說經說法おほくうけたまはれど、かく珍しき事のたまふ人は、さらにおはせぬなりとて、年老いたる尼法師ども、額に手をあてて信をなしてきゝゐたり。世繼はいとおそろしき翁にはべる。眞實の心おはせん人は、などか恥かしとおぼさざらん。世の中を見しりうかべたてて、もちてはべる翁なり。目にも見、耳にもきゝあつめて侍る萬の事の中に、只今の入道殿下の御有樣、古を聞き、今を見侍るにも、二もなく、三もなく、ならびなくはかりなくおはします。たとへば一乘の法の如し。御有樣のかへす〴〵めでたきなり。

いたくゆげする—甚だ愉快がる

かし。「帝の御次第はまうさでもありぬべけれど、入道殿下の御榮花も、なにより開け給ふぞ、と思へば、まづ帝后の御有樣を申すなり。植木は根をおほしてつくろひたてつればこそ、枝もしげりて木の實もむすべや。しかればまづ帝王の御つゞきをおぼえて、次に大臣の御つゞきはあかさんとなり、といへば、大犬丸男、いで〳〵いといみじうめでたしや。こゝらのすべらきの御有樣をだに、鏡をかけたまへるに、まして大臣などの御事は、年比闇にむかひたるに、朝日のうらゝかにさし出でたるに、遇らん心地もするかな。又翁らが家の女どものもとなる、櫛笥の鏡の影見えがたく、磨ぐわざもしらず、うち挾めて置きたるに習ひて、明くみがける鏡にむかひて、わが身の容うつるに、かつは影恥しく、またいと珍しきにも似たまへりや。あな興ありのわざやな。更に翁二十年の命は、今日延びぬる心地し侍り、といたくゆげするを、見聞く人々、をこがましうをかしけれども、いひつゞくる事どもは、疎ならず怖しければ、物もいはで皆聞きゐたり。大犬丸男いで聞き給へや。歌ひとつ作りて侍り、といふめれば、世繼、いと興ある事なりとて、承はらんといへば、繁樹いとやさしげにいひ出づ。

あきらけき鏡にあへば過ぎにしもいま行末のことも見えけり

はぐくみ—愛養し

二の宮—敦成親王

れど先すべらきの御事を申すさまに違へ侍らぬなり。寛弘五年戊申九月十一日、土御門殿にて生まれさせ給ふ。同八年辛亥六月十三日東宮に立たせ給ひき。御年四歳。長和五年丙辰正月二十九日位につかせ給ひき。御年九歳。寛仁二年戊午正月三日御元服。御とし十一。位につかせ給ひて十年にやならせ給ふらん。今年は萬壽二年乙丑の歳とこそ申すめれ。おなじ御門と申せども、御後見おほく頼しくおはします。御祖父にてたゞ今の入道殿下、出家せさせ給へれど、世のおや一切衆生を一子の如くはぐくみおぼしめす。第一の御叔父只今の關白左大臣、一天下をまつりごちておはします。次の御叔父と申すは、内大臣にて左大將かけておはします。つぎ〳〵の御叔父と申すは、大納言春宮大夫、中宮權大夫、中納言などさま〴〵にておはします。かやうにおはしましあへば、御後見おほくおはします。昔も今も帝かしこしと申せど、臣下の數多して傾け奉る時は、傾き給ふものなり。さればたゞ一天下は、わが御後見のかぎりにておはしませば、いと頼しくめでたき事なり。昔一條院の御惱のをり、仰せられけるは、すべからくは、次第のまゝに、一の皇子をなん東宮とすべけれど、後見すべき人のなきにより思ひかけず。されば二の宮をば立て奉るなり、とおほせられけるも、この當帝の御事よ。げにさる事ぞ

桓算供奉―僧賀靜供奉は僧官
中堂―比叡山延曆寺の根本中堂
おこたり―平癒
くみれ―天井
おいらか―おだやか、おとなしやか

桓算供奉の御物怪にあらはれて申しけるは、御首にのりゐて、左右の羽をうちおほひ申したるに、うちはぶき動す折に、すこし御覽ずるなり、とこそいひ侍りけれ。御位去らせ給ひし事も、多くは中堂にのぼらせ給はんとなり。さりしかど、のぼらせ給ひて、さらにその驗おはしまさゞりしこそ口惜しかりしか。やがておこたりおはしまさずとも、少しのしるしはあるべかりし事よ。さればいとゞ山の天狗のし奉るとこそ、さま〳〵にきこえ侍るめれ。太秦にも籠らせ給へりき。さて佛の御前より、東の庇に、くみれはせられたるなり。御烏帽子せさせ給へりけるは、大入道殿にこそ似たてまつり給へりけれ。御心ばへいとなつかしうおいらかにおはしまして、世の人いみじうこひ申すめり。齋宮のくだらせ給ふ別の御櫛さゝせ給ひては、かたみに見かへさせ給はぬことを、思ひかけぬにこの院はむかせ給へりし、あやしとは見奉りしものをとぞ、入道殿おほせられける。

○六十八代

次の帝當帝御いみな敦成。これ一條院の第二の皇子なり。御母いまの入道殿下の第一の御女なり。皇太后宮彰子と申す。たゞ今誰かはおぼつかなくおぼし思ふ人の侍らん。さ

奉らせ給ひて—かはゆきものに思召して
三條院の御券—三條院讓與の證文
つくろひ—療治し

いとをかしげにおはしますを、探り申させ給ひては、かく美しうおはする御髪を、え見ぬこそ心憂く口惜しけれとて、ほろ〳〵と泣かせ給ひけるこそあはれに侍れ。わたらせ給ひける度には、さるべき物を必 奉らせ給ふ。三條院の御券を具して、還りわたらせ給へりけるを、入道殿御覽じて、賢くおはしける宮かな、幼き御心に、古反故と思してうち捨てさせ給はで、もてわたらせ給へるよ、と興じ申させ給ひければ、まさなくも申させ給ふものかなとて、御乳母たちは笑ひ申させ給ひけり。冷泉院も奉らせ給ひけれど、昔より、帝の御領にてのみさふらふ所を、今更にわたくし物になり侍らんは、便なきことなり、おほやけものにて候ふべきなりとて、かへし申させ給ひてけり。されば代々の渡物にて、朱雀院の同じ事に侍るべきにこそ。この御目の爲には、萬につくろひおはしましけれど、其しるしある事も無き、いといみじき事なり。もとより御風重くおはしますに、醫師どもの、大小寒の水を御髪にいさせ給へ、と申しければ、こほり塞がりたる水を、多くかけさせ給ひけるに、いといみじく慄ひわなゝかせ給ひて、御色も違ひおはしましたりけるなん、いと哀にかなしく、人々見參せけるとぞ承りし。御病により、金液丹といふ藥をめしたりけるを、其藥くひたる人は、かく目をなん病など、人は申ししかど、

一品の宮—三條院の皇女禎子内親王
かなしうし

てこの帝を生み奉り給ふ。東三條の女院とこれを申す。この御母は、攝津守藤原仲正のむすめなり。

○六十七代

次の帝三條院天皇と申しき。御いみな居貞。これ冷泉院第二の皇子なり。御母贈皇宮宮超子と申しき。太政大臣兼家の大臣の第一の御女なり。この帝は貞元元年丙子正月三日に生まれさせ給ふ。寛和二年丙戌七月十六日東宮に立たせ給ふ。おなじ日御元服なり。御年十一。寛弘八年辛亥六月十三日位に卽かせ給ふ。御年三十六。世をたもたせ給ふ事五年。院にならせ給ひて、御目を御覽ぜざりしこそ、いといみじかりしか。この人の見奉るには、聊か變らせ給ふ事おはしまさゞりければ、虛言のやうにぞおはしましける。御眼なども、いと淸らかにおはしましけり。いかなる折にか、時々は御覽ずる時もありけり。御簾のあみ緒の見ゆるなども仰せられて、一品宮ののぼらせたまへりけるに、辨の乳母の、御供に候ふが、指櫛を左にさゝれたりければ、吾子よ、など櫛は惡しくさしたるぞ、とこそ仰せられけれ。この宮をことの外にかなしうし奉らせ給ひて、御髮の

もしおして人などや云云—若し寺にて強ひて道兼を出家せしむるものあらん事を慮りて

出でて、大臣にもかはらぬ姿今一度見え、かくと案内も申して、必參りはべらん、と申したまひければ、朕をば欺るなりけり、とてこそ泣かせ給ひけれ。哀に悲しき事なりな。日比よく御弟子にてさぶらはんと契りて、すかし申し給ひけんが恐しさよ。東三條殿は、若さる事やし給ふと危さに、さるべくおとなしき人々、なにがしかゞし、といふいみじき源氏の武者たちをこそ、御送に添へられたりけれ。京の程はかくれて、堤の邊よりぞうち出で參りける。寺などにては、もしおして人などやなし奉るとて、一尺ばかりの刀どもを拔きかけて、まもり申しけるとぞ。寛弘五年二月八日うせさせ給ふ。御とし四十一。

○六十六代

次の帝一條院天皇と申しき。御いみな懷仁。これ圓融院の第一の皇子なり。御母皇后宮詮子と申しき。これ太政大臣兼家の大臣の第二の御女なり。此帝天元三年庚辰六月一日、兼家の大臣の東三條の家にて生れさせ給ふ。東宮に立たせ給ふこと永觀二年甲申八月二十八日なり。御とし五歲。寛和二年丙戌六月二十三日位に卽かせたまふ。御とし七歲。永祚二年庚寅正月五日御元服。御とし十一。世をたもたせ給ふ事二十五年。御母は十九に

弘徽殿の女御—藤原爲光の女忯子

晴明—天文博士安倍晴明

式神—陰陽師に使はるる神

し申し給ひけるは、まだ帝出でさせおはしまさゞりける前に、手づから執て、東宮の御方に渡し奉り給ひてければ、歸りいらせ給はんことはあるまじく思して、しか申させ給ひけるとぞ。さやけき影を、まばゆく思しめしつる程に、月の顔に村雲のかゝりて、すこし暗がり行きければ、わが出家は成就するなりけり、と仰せられて、歩み出でさせ給ふ程に、弘徽殿の女御の御ふみの、日比破り殘して、御身もえ放たず御覽じけるを思し出でて、しばしとてとりに入らせ給ひける程ぞかし。粟田殿の、いかに思召しならせおはしましぬるぞ。只今過ぎさせ給はば、おのづから障りも出でまうで來なん、とそら泣し給ひけるは。さて御門より東ざまにゐて出しまゐらせ給ふに、晴明が家の前をわたらせ給へば、みづからの聲にて、手をおびたゞしくはたく／＼と拍つなる。帝おりさせ給ふと見ゆる天變ありつるが、既になりにけりと見ゆるかな。參りて奏せん。車に裝束疾うせよ、といふ聲を聞かせ給ひけんは、さりともあはれに思召しけんかし。かつ／＼式神一人内裏へまゐれ、と申しければ、目には見えぬものの戸をおし明けて、御後を見まゐらせん。只今これより過ぎさせおはしますめり、と答へけるとかや。その家は、土御門町口なれば、御道なりけり。花山寺におはしましまし著て、御ぐしおろさせ給ひて後にぞ、粟田殿はまかり

一身一家の面目なり

御禊—大嘗會を行はせらるゝ前のみそぎ

粟田殿—兼家の男道兼

にもいとあはれに辱く候ふな。そのとゞまりおはします女宮こそは大齋院よ。

○六十五代

次の帝花山院天皇と申しき。御いみな師貞。冷泉院の第一の皇子なり。御母贈皇后宮懐子と申す。太政大臣伊尹の大臣の第一の御女なり。この帝安和元年戊辰十月二十六日母方の御おほぢの一條の家にて生まれさせ給ふ、とあるは、世尊寺の事にや。その日は冷泉院の御時の大嘗會の御禊あり。同じ二年己巳八月十三日東宮に立たせたまふ。御とし二歳。天元五年壬午二月十九日御元服せさせ給ふ、御年十五。永觀二年甲申八月二十八日位に卽かせ給ふ。御年十七。寛和二年丙戌六月二十三日の夜、あさましく候ひし事は、人にも知らさせ給はで、密に花山寺におはしまして、御出家入道せさせ給へりしこそ、御年十九。世をたもたせ給ふ事二年。其後二十二年はおはしましき。あはれなる事は、おりおはしましける夜は、藤壺のうへの御局の小戸より出でさせ給ひけるに、有明の月のいみじう明かりければ、顯證にこそありけれ。いかゞすべからん、とおほせられたるを、さりとて止らせ給ふべき樣はべらず、神璽寶劍わたり給ひぬるにはと、粟田殿のさわが

いと聞きにくゝ云々―藤原氏が左大臣源高明を排斥して其女壻爲平親王の御卽位を妨げしを云ふ

この世の光云々―經邦の死後贈位せられしは

○六十四代

次の帝圓融院天皇と申しき。御いみな守平。これ村上帝の第五の皇子なり。御母冷泉院の同じ御腹におはします。この帝天德三年己未三月二日生れさせたまふ。この御門の東宮に立たせ給ふ程は、いと聞きにくゝいみじき事どもこそ侍れな。これは皆人のしろしめしたる事なれば、事も長し、止め侍りなん。安和二年己巳八月十三日にこそは位につかせ給ひけれ、御年十一にて。さて天祿三年壬申正月三日御元服。御とし十四。世をたもたせ給ふ事十五年。御惱ありて御出家。法名金剛法と申しき。正曆二年二月十二日うせさせ給ふ。御年三十三。母后の御とし二十三四にて、うちつゞきこの御門と冷泉院と生み奉り給へる、いとやむごとなき御宿世なり。御母方の祖父は出雲守從五位下藤原經邦といひし人なり。末の世には賞ぜさせたまひてこそは贈三位し給ふとうけたまはりしか。いまさぬあとなれど、この世の光はいと面目ありかし。中后と申すこの御事なり。女十の宮うみ奉り給ふたび、かくれさせ給へりし御歎こそ、いと悲しく承りしか。村上の御日記御覽じたる人もおはしますらん。ほの〴〵傳へうけたまはるに、及ばぬ心

> 末の世まで云々—末代まで傳へらるゝ程の名歌をよみおく人は優にやさし

五月の事に侍りけり。げにいかにと思ゆるふし〴〵、末の世まで傳はるばかりの事いひおく人、優にはべるかしな。さてさきの東宮におくれ奉りて、限なく歎かせ給ふ。同じ年朱雀院生れさせ給ひ、われ后に立たせ給ひけんこそ、さま〴〵御歎御悦かき交たる心地つかうまつれ。世に大后とこれを申す。

○六十三代

次の帝冷泉院天皇と申しき。御いみな憲平。これ村上天皇の第二の皇子なり。御母皇后宮安子と申しき。右大臣師輔の大臣の第一の御女なり。此帝天暦四年庚戌五月二十四日、在衡の大臣のいまだ從五位下にて、備前介と聞えける折の五條の家にて生れさせ給へり。同じ年七月二十三日東宮に立たせ給ふ。應和三年癸亥二月二十八日御元服。御年十四。康保四年丁卯五月二十五日御とし十八にて、位につかせ給ふ。世をたもたせ給ふこと二年。寛弘八年辛亥十月二十四日、御とし六十二にてうせさせおはしましけるを、三條院位につかせ給ふ年にて、大嘗會などの延びけるをぞ、をり惡しと世の人申しける。

前坊―前東宮保明親王

ゆゝしがりて―縁喜わるがりて

次の帝村上天皇と申しき。御いみな成明。これ醍醐帝の第十四の皇子なり。御母朱雀院の御同腹におはします。このみかど、延長四年丙戌六月二日桂芳坊にてうまれさせ給ふ。天慶三年庚子二月十五日御元服。御とし十五。同じ七年甲辰四月二十二日に東宮にたゝせたまふ。御とし十九。同じ九年丙午四月十三日位につかせ給ふ。御年二十一。世をしらせ給ふ事二十一年。康保四年五月二十五日うせさせ給ふ。御とし四十二。みさゝぎ村上にあり。御母后延喜三年癸亥前坊を生み奉らせ給ふ。御とし十九。同じ二十年庚辰女御宣旨くだり給ふ。御とし三十六。同じ二十三年癸未朱雀院生れさせ給ふ。閏四月二十五日后の宣旨かうぶらせ給ふ。御とし三十九。やがて帝生み奉り給ふ。同じ月に后にも立たせ給ひけるにや。四十二にて村上は生れさせ給ひけり。后に立たせたまふ日は、前坊の御事を宮のうちにゆゝしがりて、申しいづる人も無かりけるに、かの御乳母子に、大輔の君といひける女房の、かくよみて出したりける。

わびぬれば今はたものを思へども心に似ぬは涙なりけり

また御法事はてて、人々まかりいづる日も、かくこそはよまれたりけれ

今はとてみ山を出づる時鳥いづれの里に啼かんとすらん

北野におぢ申させ給ひて―菅原道眞の靈を恐れ給ひて

太后宮穩子と申しき。太政大臣基經の大臣の第四の御女なり。この帝延長元年癸未七月廿四日生れさせ給ふ。同じ三年乙酉十月二十一日東宮にたゝせ給ふ。御歳三歲。同じ八年庚寅九月二十二日、位につかせ給ふ。御とし八歲。承平七年正月四日御元服。御とし十五。世をたもたせ給ふ事十六年なり。天慶九年四月十三日におりさせ給ふ。御とし二十四。天暦六年壬子三月十四日御惱ありて入道せさせ給ひて、同じ八月十五日うせさせたまふ。御とし三十七。みさゝぎ鳥部野にあり。八幡の臨時の祭は、この御時よりあるぞかし。この帝生れさせ給ひては、御格子もまゐらず、夜晝火をともして、御帳の内にて、三つまでおほしたて奉らせ給ひき。北野におぢ申させ給ひてかくありしぞかし。この帝うまれおはしまさずば、藤氏の榮いとかうしもおはしまさゞらまし。いみじきをりふし生れさせ給へりしぞかし。位につかせ給ひて將門が亂いできて、御願にてとぞきこえはべりし。この臨時の祭に、その東遊の歌、貫之のぬしのよみたりし。

松もおひまたもかげさすいは淸水ゆくすゑ遠くつかへまつらん

○六十二代

七年乙卯正月十九日十一歳にて御元服したまふ。同じ九年丁巳七月三日位につかせたまふ。御年十三。やがて今宵夜御殿より、俄に御かうぶり奉りて、さしいでおはしましたりける、御手づからわざと人の申すは實にや。さて世をたもたせ給ふこと三十三年。この御時ぞかし、村上か朱雀院かの生れおはしましたる御五十日の餅を、殿上にいださせたまへるに、伊衡の中將の、和歌つかうまつり給へるはとておほゆめる。

ひとゝせに今宵かぞふる今よりはもゝ歳までの月かげを見ん

とよむぞかし。御かへりごと帝のしおはしましけん辱さよ。

祝ひつることだまならばもゝ歳の後もつきせぬ月をこそ見め

御集など見たまふるに、いとなまめかしう、かやうの方さへおはしましける。延長八年九月二十五日おりさせ給ひ。同じ八日うせさせたまふ。みさゝぎ山科にあり。後の山科といふはこの時ぞかし。

○六十一代

次の帝朱雀院天皇と申しき。御いみな寛明。これ醍醐帝の第十一の皇子なり。御母は皇

御かうぶり奉りて―元服し給ひて

ことだま―言靈

旅寝の夢に云々—故郷の旅寝のゆめに見えつるは恨みやすらむまたも訪はねば

たゞ人に　凡人にて源姓を賜りて臣下となれるをいふ

家人—一に下人に作る

き。承平元年七月十九日うせさせ給ひぬ。御年六十五。肥前の掾橘良利殿上に候ひける。入道して、修行の御供に、これのみぞつかうまつりける。されば熊野にても、日根といふ所にて、旅寝の夢に見えつるは、ともよむぞかし。人々の涙おとすも、道理にあはれなる事かな。この帝の、たゞ人になり給ふ程などおぼつかなし。よくも覺え侍らず。御母洞院の后と申す。このみかどの源氏にならせ給ふ事、よくしらぬにや、王侍従とこそ申しけれ。陽成院の御時、殿上人にて神社の行幸には、まひ人などせさせ給へり。位につかせたまひてのち、陽成院をとほりて行幸ありけるに、當帝は家人にはあらずや、あしくも通るかな、とこそ仰せられけれ。さばかりの家人もたせ給へる帝も、ありがたき事ぞかし。

○六十代

次の帝醍醐天皇と申しき。御いみな敦仁。これ亭子太上法皇の第一の皇子におはします。御母皇太后宮胤子と申しき。内大臣藤原高藤大臣の御女なり。この帝仁和元年乙巳正月十八日に生れたまふ。寛平五年癸丑四月二日に、東宮にたゝせ給ふ。御とし九歳。同じ

敏行朝臣―藤原武智麿の六代の孫

茂の御社の邊に鷹つかひ運びありきけるに、賀茂の明神の託宣し給ひけるやう、此邊に侍る翁どもなり。春は祭多く侍り。冬のいみじくつれ〴〵なるに、祭たまはらん、と申し給へば、その時に、賀茂の明神の仰せらるゝ、と覺えさせ給ひて、おのれは力及び候はず。おほやけに申させ給ふべき事にこそ候ふなれ、と申させ給へば、力及ばせ給ひぬべきなればこそ申せ。いたく輕々なるふるまひなせさせ給ひそ。さ申すやうあり。近くなり侍りとて、かい消やうに失せ給ひぬ。いかなる事にか、と心得ずおぼしめすほどに、かく位につかせ給へりければ、臨時祭せさせ給へるぞかし。賀茂の明神の託宣して、祭せさせたまへ、と申させ給ふ日、酉の日にて侍りければ、やがて霜月のはての酉の日、臨時祭は侍るぞかし。東遊の歌は、敏行朝臣のよみけるぞかし。

　ちはやふる賀茂の社の姫小松よろづ代ふともいろはかはらじ

これは古今にいりて侍り。人皆しらせ給へる事なれども、いみじくよみ給へるぬしかな。今にたえずひろごらせたまへる御末、みかどと申すともいとかくやはおはします。位につかせ給ひて二年といふにはじまれり。使右近の中將時平朝臣こそはし給ひけれ。寛平九年七月五日おりさせ給ふ。昌泰二年己未十月十四日出家せさせ給ふ。御名金剛覺と申し

太宰帥かけ給ひて—太宰帥兼ね給ひて

黒戸はあきたる云々—黒戸の通路があきたる黒戸は清涼殿の北瀧口の戸の西

十三。同じ八年甲辰正月十三日太宰帥かけ給ひて、二月四日位につきたまふ。御歳五十五。世をしらせたまふ事四年。小松の帝と申す。この御時に藤壺の上の御局の黒戸はあきたると聞き侍るは、實にや。仁和三年八月二十六日うせさせ給ふ。御歳五十八。

○五十九代

次の帝亭子の帝と申しき。これ小松天皇の第三の皇子なり。御いみ名定省。御母皇太后宮班子女王と申しき。二品式部卿贈一品太政大臣仲野親王の御女なり。このみかど貞觀九年丁亥五月五日生れさせ給ふ。元慶九年甲辰四月十三日、源氏になり給ふ。御歳十八。王侍従などきこえて、殿上人にておはしましける時、殿上の御倚子の前にて、業平の中將と相撲とらせ給ひける程に、御倚子にうちかけられて勾欄をれにけり。そのをれめ、今に侍るなり。仁和三年丁未八月二十六日東宮に立たせ給ひて、やがて同じ日に位につかせ給ふ。御年二十一。世をしらせ給ふ事十年。寛平元年己酉十一月二十一日己酉の日、賀茂の臨時祭始る事、この御時よりなり。使には右近衛中將時平なり。昌泰元年戊午四月十日御出家せさせ給ふ。この帝いまだ位につかせ給はざりける時、十一月廿餘日の程に、賀

代のことも云々―大原やをしほの山も今日こそは神代の事もおもひいづらめ

見もせぬ人の云々―見ずもあらず見もせぬ人の戀しくばあやなく今やながめくらさむ、業平の歌

語などおぼえさせ給はぬはあらんずる。見もせぬ人の戀しきはなど申す事も、この御中らひの程とこそは、うけたまはれ。末の世までかきおき給ひけん、おそろしきすきものなりかしな。いかに昔はなか〳〵にけしきある事も、をかしき事もありけるものとて、うち笑ふ氣色、ことになりて、いとやさしげなり。二條后と申すは、この御事なり。

○五十八代

次の帝光孝天皇と申しき。御いみ名時康。仁明天皇の第三の皇子なり。御母贈皇太后宮藤原澤子と申しき。贈太政大臣總繼の御女なり。この帝淳和天皇の御時、天長七年庚戌東六條の家にて生れ給ふ。御おやの深草の帝の、承和三年丙辰正月七日四品し給ふ。御年七つ。嘉祥三年庚午正月、中務卿になり給ふ。御年二十一。仁壽元年辛未十一月廿一日三品にのぼり給ふ。御とし二十二。貞觀六年甲申正月十六日上野太守かけさせ給ふ。御年三十五。同じ八年丙戌正月十三日太宰權帥にうつりならせたまふ。御年三十七。同じ十二年庚寅二月七日二品にのぼらせ給ふ。御年四十一。同じ十八年丙申十二月廿六日式部卿にならせ給ふ。御歳四十七。元慶六年壬寅正月七日一品にのぼらせ給ふ。御歳五

釋迦如來の
云々—大江
朝綱の作、
計其實算、
釋迦如來一
年之兄、

いまだよご
もりて—深
窓の下に養
はれて

在中將—中
將在原業平

つまもこも
れり—上句
春日野は今
日はな燒き
そ若草の神

おはしましける。さて六十五年なれば、八十一にて天暦二年九月二十九日にかくれさせ給ふ。御法事の願文には、釋迦如來の一年のこのかみとは作られたるなり。智恵深く思ひよりけん程、いと興あれど、佛の御年よりは御年高しといふ心の、後世のせめとなんなれるとこそ、人の夢に見えけれ。御母后、清和の御門よりは九年の御姉なり。廿七と申ししとし、この陽成院をば生み奉り給へるなり。元慶元年丁酉正月に后に立たせ給ひて、中宮と申す。御年三十六。同じ六年壬寅正月七日皇太后宮にあがり給ふ。御歲四十一。此后の宮仕しそめけんやうこそ、おぼつかなけれ。未世隱りておはしける時、在中將の忍びてゐて隱し奉りたりけるを、御兄の君達、基經の大臣國經の大納言などの、若くおはしけん程の事なりけんかし、とりかへしにおはしたりける折、妻もこもれり我もこもれり、とよみ給ひたるは、この御事なれば、末の世に神代のことも、とは申しいで給ひけるぞかし。さればよのつねの御かしづきにては、御覽じそめられ給はずやおはしましけん、とぞおぼえ侍る。もし離れぬ御中にて、染殿の宮に參り通ひなどし給ひけん程の事にや、とぞおしはかられ侍る。及ばぬ身に、かやうの事をさへ申すは、いとかたじけなき事なれど、これは皆人のしろしめしたる事なり。いかなる人かは、この比古今伊勢物

染殿院―藤原良房の家正親町の北に在り

護持僧―朝夕宮中にて玉體の平安を祈り奉る僧

ひて、天安二年戊寅八月二十七日、御年九つにて位につかせ給ふ。貞觀六年甲申正月朔日御元服。御年十五なり。世をたもたせ給ふ事十八年。おなじ十八年十一月二十九日染殿の院にておりさせ給ふ。元慶三年己亥五月八日御出家。御とし三十。水尾帝と申す。この御末ぞかし、いまの世に源氏の武者の族は。それも朝廷の御かためとこそはなるめれ。御母廿三にてこの帝を生み奉り給へり。貞觀六年正月七日皇后宮にあがりゐ給ふ。后の位にて四十一年おはします。染殿の后と申す。その御時の護持僧は智證大師におはします。天安二年にぞ唐よりかへりたまへる。

○五十七代

次の帝陽成天皇と申しき。御諱貞明。これ清和天皇の第一の皇子なり。御母皇太后宮高子と申しき。權中納言贈正一位太政大臣長良の御女なり。この帝貞觀十年戊子十二月十六日、染殿の院にて生れ給へり。同じ十一年己丑二月一日御年二つにて東宮にたたせ給ひて、同じ十八年丙申十一月廿九日に位に卽かせ給ふ。御年九歲。元慶六年壬寅正月二日、御元服。御年十五。世をしらせ給ふ事八年。位おりさせ給ひて、二條院にぞ

宵々ごとに―上句、人知れぬわが通路の關守は

春や昔の―月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つはもとの身にしてとよみしも五條の后の家にてなりと

りゐ給ふ。貞觀三年辛巳三月廿九日、御出家して灌頂せさせたまへり。おなじき六年甲申正月七日皇太后宮にあがりゐ給ふ。これを五條の后と申す。伊勢物語に、業平の中將の宵々ごとにうちも寢ななん、とよみ給ひけるは、この宮の御事なり。いかなる事にか二條后に通ひ申されける間の事、とぞうけたまはりおよぶなり。春や昔のなども、五條の后の御家とはべるは、わかぬ御中にて、その宮にやしなはれ給へれば、おなじ處におはしけるにや。

○五十六代

次の帝淸和天皇と申しけり。御いみ名惟仁。文德天皇の第四の皇子なり。御母皇太后宮明子と申しき。太政大臣良房大臣の御女なり。此帝は嘉祥三年庚午三月二十五日に、母方の御祖父太政大臣の小一條の家にて、父帝の位につかせ給へる五日といふ日生れ給へりけんこそ、いかにをりさへ花やかにめでたかりけん、と覺え侍れ。この帝は御心いつくしく、御容貌めでたくぞおはしましける。惟喬の御子と東宮あらそひし給へりけんも、この御事とこそおぼゆれ。やがて生れ給へる年の十一月二十五日、東宮に立たせ給

かけまくもかしこき—言葉にあらはして言はむも畏多き

しき。その御門よりこなた、今の御門まで十四代にぞならせ給ひにける。世を數へ侍ればば、その帝位につかせ給ふ嘉祥三年庚午の歳より、今年までは、一百七十六年許にやなりぬらん。かけまくもかしこき君の御名を申すは辱く候へども、とていひつゞけ侍りき。

○五十五代

文德天皇と申しける御門は、仁明天皇の第一の皇子なり。御いみ名は道康。御母は太皇太后宮藤原順子と申しき。その后左大臣贈正一位太政大臣冬嗣の大臣の御女なり。この帝、天長四年丁未八月に生れ給ひて、御心あきらかに、よく人をしろしめせり。承和九年壬戌二月廿六日に御元服。同じき八月四日東宮に立たせ給ふ。御年十六。仁明天皇もとおはする東宮をとりて、このみかどを承和九年八月四日東宮になし奉らせ給へるなり。いかに安からず思しけんとこそ覺え侍れ。嘉祥三年庚午三月廿一日に位につかせ給ふ。御年廿四。さて世をたもたせ給ふ事八年。天安二戊寅の歳八月二十七日うせさせたまひぬ。御歳三十二。みさゝぎ田村にあり。御母后の御年十九にてぞ、この帝を生み奉り給ふ。嘉祥三年四月に后に立たせ給ふ。御年四十二。齊衡元年甲戌の歳皇后宮にあが

おはします事を、道俗男女の御まへにて申さんと思ふが、いと事多くなりて、數多の帝后また大臣公卿の御上をつゞくべきなり。その中に幸人におはしますこの御有樣申さんと思ふ程に、世の中の事のかくれなく顯るべきなり。つてに承れば、法華經一部をとき奉らんとてこそ、まづ餘教をばとき給ひけれ。それを名けて五時教とはいふにこそはあんなれ。しかの如くに、入道殿の御榮を申さんと思ふ程に、餘教の說かるゝと謂ひつべし、などいふも、わざ〳〵しくこと〴〵しく聞ゆれど、いでやさりとも、なにばかりの事をか、と思ふに、いみじうこそいひつゞけ侍りしか。世間の攝政關白と申し、大臣公卿ときこゆる、古今の、みなこの入道殿の御有樣のやうにこそはおはしますらめとぞ、今樣の兒どもは思ふらんかし。されどそれさもあらぬ事なり。言ひもて行けば、同じ種一つすぢにてあれど、門分れぬれば、人々の御心もちゐるも、又それに從ひてことごとになりぬ。この世はじまりて後、帝はまづ神の世七代をおき奉りて、神武天皇をはじめ奉りて、當帝まで六十八代にぞならせ給ひにける。すべからくは、神武天皇をはじめ奉りて、つぎ〳〵の御門の御次第をおぼえ申すべきなり。しかりといへども、それはいと聞き耳遠ければ、たゞ近き程より申さんと思ふに侍り。文德天皇と申す御門おはしま

あたり日—起り日
さう〴〵し—淋し
しかしか—然り然り
あどうつめりし—合槌をうちて應答する如くなりき
いとかしこきもの—甚だ貴きもの

してあたり日に侍りつれば、口惜しうもえ參り侍らずなりぬ、などあはれにいひ語らひて泣くめれど、涙墮つとも見えず。かくて講師待つ程に、われも人も久しう徒然なるに、この翁どものいふやう、いでさう〴〵しきにいざ給へ。昔物語してこの御座さう人々に、さは古の世はかくこそありけれ、と聞かせ奉らん、といふめれば、しか〳〵、いと興ある事なり。いでおぼえ給へ。時々さるべき事のさしいらへ、繁樹もうちおぼえ侍らんかし、といひて、言はん〳〵と思ひたる氣色ども、いつしかと聞かまほしく、おくゆかしき心地するに、そこらの人多かりしかど、物はか〴〵しく耳留むるもあらめど、人目にあらはれては、この侍ぞ、よく聞かんとあどうつめりし。世繼がいふやう、世はいかに興あるものぞや。さりとも翁こそ、せう〳〵の事はおぼえ侍らめ。昔さかしき御門の御政のをりは、國のうちに年老いたる翁嫗やあるとめし尋ねて、古のおきての有樣をとはせ給ひてこそは、奏する事を聞しめしあはせて、世の政は行はせ給ひけれ。されば老いたる身はいとかしこきものに侍り。若き人たちな侮り給ひそ、とて黑柹の骨の九つあるに、黄なる紙貼りたる扇をさしかくして、氣色だち笑ふほども、さすがにをかし。まめやかに世繼が申さんと思ふ事は他事かは。只今の入道殿下の御有樣の、世に勝れて

都ほとり云々—都附近に住めば自然貴人の風をも見習ひて

いとゞ五月にさへ生れて云々—其上人の嫌ふ五月にさへ生れたれば甚だ困却せり

給へて、産衣に書きおきて侍りける、未だ侍り。丙申の年に侍り、といふも、げにと聞ゆ。今ひとりに、なほも翁の年こそ聞かまほしけれ。生れけん年は知りたりや。それにていとやすく數へてん、といふめれば、これは實の親にもそひ侍らず。こと人のもとに養はれて、十二三までぞ侍りしかば、はか〴〵しうも申さず。たゞ我は子生むわざも知らざりしに、主の御つかひに、市へまかりしに、又私にも錢十貫を持ちて侍りけるに、にくげもなき兒を抱きたる女の、これ人に放たんとなん思ふ。子を十人まで生みて、是はし十たりの子にて、いとゞ五月にさへ生れて、むつかしきなり、といひ侍りければ、このもたる錢に換へて來にしなりと。姓は何とかいふ、と問ひ侍りければ、夏山とは申しける。さて十三にてぞおほき大殿にはまゐり侍りし、などいひて、さてもうれしく對面したるかな。佛の御しるしなんめり。年比此處彼處の説教とのゝしれど、何かはとて參り侍らず。かしこく思ひたちて參り侍りにけるが嬉しき事、とて其處におはするは、その折の女人にや見えますらん、といふめれば、繁樹がいらへ、いでさも侍らず。それは早うせ侍りにしかば、これは其後あひそひて侍る童部なり。さて閤下は如何にといふめれば、世繼がいらへ、それは侍りし時のなり。今日も諸共に參らんと出でたち侍りつれど、瘧病を

きんち—汝

いとあさましくなりぬ—餘りに老年なるに驚く

水尾帝—淸和天皇

下臈—身分卑きもの

大犬丸ぞかし。ぬしはその御時の母后の宮の御方の召使、かう名の大宅の世繼とぞいひ侍りしかしな。さればぬしのみ年は、おのれにはこよなく勝りたまへらんかし。みづからは小童にてありし時、ぬしは二十五六許の男にてこそはいませしか、といふめれば、世繼、しか〳〵、さ侍りし事なり。さてもぬしの御名はいかにぞや、といふめれば、太政大臣殿にて、元服つかうまつりし時、きんちが姓はなにぞ、と仰せられしかば、夏山となん申すと申ししを、やがて繁樹となん附けさせ給へりし、などいふに、いとあさましくなりぬ。誰も少しよろしき者どもは見おこせ、居寄りなどしけり。年二十許なる生侍めきたるものの、切に近くよりて、いでいと興ある事いふ老者たちかな。更にこそ信ぜられね、といへば、翁二人見かはしてあざわらふ。繁樹となのるが方ざまに見やりて、主はいくつといふ事おぼえずといふめり。この翁どもはおぼえ給ふや、と問へば、さらにもあらず、一百五十歳にぞ今年はなり侍りぬる。されば繁樹は、百四十に及びて候ふらめ、とやさしく申すなり。おのれは、水尾御門のおりおはします年の正月のもちの日生れて侍りしかば、十三代にあひ奉りて侍るなり。けしうはさぶらはぬ年なりな。實と人々思さじ。されど父がなま學生につかはれ奉りて、下臈なれども、都ほとりといふ事侍れば、目を見

大鏡

卷之一

雲林院—山城國葛野郡雲林院村に在り
うたてげなる—異樣なる
入道殿下—藤原道長
貞信公—忠平

さいつころ雲林院の菩提講にまうでて侍りしかば、例の人よりはこよなう年老い、うたてげなる翁二人嫗と行きあひて、同じ所に居ぬめり。あはれに同じやうなる者の樣かな、と見侍りしに、是等うち笑ひ見かはしていふやう、年比、昔の人に對面して、いかで世の中の見聞く事どもを聞えあはせん。このたゞ今の入道殿下の御有樣をも申しあはせばや、と思ひしに、あはれに嬉しくも逢ひ申したるかな。今ぞ心やすく黃泉もまかるべき。おぼしき事いはぬは、實にぞ腹脹るゝ心地しける。かゝればこそ昔の人は、もの言はまほしくなれば、穴を掘りては言ひいれ侍りけめ、とおぼえ侍る。かへすぐ〳〵嬉しく對面したるかな。さてもいくつにかなり給ひぬる、といへば、今ひとりの翁、いくつといふ事は更におぼえ侍らず。たゞし己は故太政大臣貞信公の、藏人の少將と申しし折の、小舍人童

水鏡終

今の世の中は大方減劫の末人壽百歳を限りとなす時なりとなり

水鏡の程は侍らざらん―水に物の映る位には昔の面影の知れざる事あらじ

なかるべし。紫式部が源氏など書きて侍る様は、たゞ人のしわざとやは見ゆる。されどもその時には、日本紀の御局などつけて笑ひけりとこそは、やがて式部が日記には書きて侍るめれ。まして此世の人のくち、かねて推量られてかたはらいたく覺ゆれども、人のためとも思ひ侍らず、只若くよりかやうの事の心にしみならひて、行のひまにも捨てがたければ、我一人見んとて書きつけ侍りぬ。大鏡巻も凡夫のしわざなれば、佛の大圓鏡智の鏡にはよも及び侍らじ。是も若し大鏡に思ひよそへば、そのかたち正しく見えずとも、などか水鏡の程は侍らざらんとてなん。

> 命長からん定云々―如何に長命するも七八十に過ぎざればともかくも今日を暮してありぬべし
>
> 滅劫―巻首に見えたり

さて此申す事は、見聞きし事計なれば、大切なる事も多くおち侍りぬらん。是は只おほやうの有樣を思し合せさせんと思ひ給ふる計なり。この申し續けつる事ども、曉のねぶりの程の夢に、いづこか違ひ侍りたる。いづらはめでたかりし世の中、いづらはわろかりし事、たとひ神武天皇の御代より生ける人ありとも、我身にて思ふに、ながき夢見たる人にてぞ侍らん。ましてこの比の人、命長からん定七八十なり。とてもかくてもありぬべし。大方世の中の滅劫の末、佛の滅後に小國の中に生れて、見聞く事の惡からんこそ實の理なれ、とて、もとの道さまへ歸り罷りにき。今かく語り申すも、猶仙人の申しし事十が一をぞ申すらん。其中に猶僻事多く、世の人の皆知りをこがましき事どもにてこそ侍らめ。徒に寢を寐んよりは、御目をも覺し奉らんとて、あさましかりし事の有樣を語り申すなり。御心の外に散し給ふな、とて、夜明け方になりしかば、又所作などして、京へ必ずおはせ、と契りて罷りいでにき。その後行方をしらず、尋ねてきたる事もなし。本意なき事限りなし。心より外には、といひしかども、此事をけちてやまん、口惜くて書きつけ侍るなり。世あがり才賢かりし人の、大鏡などいひて書きおきたるには似ずして、ことば賤しく僻事多うして、見所なく文字おちちりて、見ん人に譏りあざむかれん事疑

誕生を祝する行事
まできて―參り來りて
忠仁公―藤原良房
きせい―橘勢
帶刀―宿直警衛する東宮坊の武官
惡王―唐武宗をいふ
男になりて―俗人の姿になりて

岐へつかはす。又中納言吉野宰相秋津など流されにき。この但馬權守と申すは、世の人きせいとぞ申す。神になりておはすめり。東宮おそりおぢ給ひて、太子を遁れんと申し給ひしかば、御門、この事は健岑ひとりが思ひたちつる事なり。東宮の御あやまりにあらず。とかくおぼす事なかれ、とて唯舊のやうにておはしまさせき。東宮と申すは、淳和天皇の御子なり。御門には御いとこにておはしましなり。今年十六になり給ひし。八月三日御門冷泉院に行幸ありてすゞませ給ひしに、東宮もやがて參らせ給ひたりしに、いづ方よりともなくて文をなげいれたりき。健岑が東宮を敎へ奉りたる事どもありしかば、俄に東宮の宮づかさ、帶刀おもと人など百餘人捕へられて、東宮をば淳和院へかへし奉りて、四日當代の第一親王を東宮に立て申したまひき。文德天皇これにおはします。嘉祥元年三月二十六日に、慈覺大師も唐土よりかへり給ふ。唐土におはせし間惡王にあひたてまつりて、かなしきめどもを見給へりしなり。佛經を焚失ひ、尼法師を還俗せさしめ給ひしをりにあひて、この大師も男になりて、頭をつゝみておはせしなり。同三年三月に、御門御病重くならせ給ひて、御ぐしおろして、中一日ありてうせおはしましきとぞ。

後七日御修法—眞言院にて正月八日より七日間行はる、初の七日過ぎて次の七日間に行ふが故に後七日といふ、五穀の豐饒等を祈る

佛名—歳暮に三世諸佛の御名を唱して罪障を滅する式

灌佛—灌佛會、釋迦の

かども、身に病侍るよしなど申して、まからざりしにあはせて、唐土へ遣しける文の、ことばのつゞきにひかされて、世のためによからぬ事どもを書きたりけるを、嵯峨の法皇御覽じて、大にいかり給ひて、流しつかはさせ給ひしなり。同六年正月にぞ、篁隱岐へまかりし。

わたのはらやそ島かけて漕ぎいでぬと人にはつげよあまの釣舟

とはこの時によみ侍りしなり。同七年四月八日、始めて灌佛は行はれしなり。六月に小野篁配所より召しかへされて、未だ位もなかりしかば、黄なる袍を着てぞ京へは入れりし。同九年七月十五日に、嵯峨法皇うせさせ給ひにき。當代の御父におはします。十七日平城天皇の御子に、阿保親王と申しし人、嵯峨の大后の御もとへ、御消息を奉りて申し給ふやう、東宮の帯刀健岑と申すものまできて、太上法皇既にうせさせ給ひぬ、世の中の亂出で來侍りなんず。東宮を東國へわたし奉らんと申すよしを告げ申し給ひしかば、忠仁公の中納言と申しておはせしを、后呼び申させ給ひて、阿保親王の文を御門に奉り給ひき。この事健岑と但馬權守橘逸勢と謀れりける事にて、東宮は知り給はざりけり。二十四日に事あらはれて、二十五日に但馬權守を伊豆國へつかはし、健岑を隱

よし申し給ひしかば、太上天皇弘福寺たまはせき。高野より都に通ひ給はん道の宿所にし給へ、とぞ宣はせし。弘福寺は天武天皇の御願なり。同十年二月二十八日に、御門位を御甥の東宮に讓り申し給ひて、西院に移り在しき。

○第五十五代　仁明天皇

嘉祥三年三月廿一日崩御年四十一
葬深草山陵

次の御門仁明天皇と申しき。嵯峨天皇の第二の御子、御母太皇太后橘嘉智子なり。弘仁十四年癸卯四月二十五日東宮に立ち給ふ、御年十五。天長十年癸丑三月六日位に即き給ふ。御年二十四。世をしり給ふ事十七年。御才かしこく、管絃の方もいみじくおはしましき。すべて御身の能いにしへの御門にも勝れ給ひて、醫師の方などさへならび奉る人なかりしなり。今年慈覺大師如法經をかき給ひき。承和元年正月二日、淳和院へ朝覲行幸侍りき。弘法大師の申し行ひ給ひしによりて、今年より後七日御修法はじまりしなり。三月二十一日に、弘法大師定に入り給ひにき。生年六十二なり。同四年六月十七日、慈覺大師唐土へわたりたまひき。同五年十二月十九日に、佛名は始りしなり。この月に、小野篁を隱岐國へ流しつかはしき。その故は、度々もろこしへ遣さんとせし

朝覲行幸―天皇の太上天皇皇太后等の御許に行幸して拜し給ふ事

ひき。位をこそ東宮にておはしませば、限りありて讓り奉り給はめ、我御子のおはしまさぬにてもなきに、弟の御子を東宮にさへ立て奉らんとし給ひし御心は、有難かりし事なり。

○第五十四代　淳和天皇　承和七年八月崩御年五十五　葬二物集陵一

次の御門淳和天皇と申しき。桓武天皇の第三の御子、御母參議百川の女旅子なり。弘仁元年庚寅九月に東宮に立ち給ふ。御年二十五。平城天皇の御子、高岳親王の御かはりなり。同十四年癸卯四月二十八日に位に卽き給ふ。御年三十八。世をしり給ふ事十年なり。天長二年十一月四日丙申、御門嵯峨の法皇の四十の御賀し給ひき。今年浦島の子は歸れりしなり。持たりし玉の箱を開けたりしかば、箱の內より紫の雲一筋西ざまへまかりて後、いとけなかりけるかたち、忽に翁となりて、はか〲しく歩をだにもせぬ程になりにき。雄略天皇の御代にうせて、今年三百四十七年といひしに歸りたりしなり。同四年に、智證大師、生年十四にて讃岐國より登り給ひて、比叡の山へ登り給ひき。母は弘法大師の御めひなり。同九年十一月十二日に、弘法大師高雄より高野へ歸り居給ふべき

ど御前にて論義すれば内論義といふ

官符—太政官より下す命令の書附

ねぎはふり—禰宜祝部共に神に仕ふる者

入定—禪定に入りて彌勒の出世を待つこと、轉じて死ぬること

給ひき。たふときもいやしきも、命ををしむ心はかはる事なきを、世の人生けるをりは苦めつかひて、病づきぬれば即ち大路にいだす、扱ひ養ふ人さらになければ、つひに飢ゑ死ぬ、永くこの事をとゞむべし、と仰せ下されしこそ、めでたき功德とおぼえ侍りしか。この比もやすくありぬべき事なり。五年の春、傳教大師唐土へ渡り給ひしをりの願を遂げんとて、筑紫へおはして、佛をつくり經をうつし給ふ。又宇佐の宮の神宮寺にて、みづから法華經を講じたまひしに、大菩薩託宣し給ひて、我久しく法を聞かざりつ、今我爲に樣々の功德を行ひ給ふ、いとうれしき事なり。我もてる衣あり、と宣ひて、託宣の人御殿に入りて、紫の七條の御袈裟一帖紫の衾一領を大師に奉り給ひき。ねぎはふりなど、昔よりかゝる事を未だ見聞かず、と申し侍りき。其御袈裟衾、今に比叡の山にあり。五月八日、皇子たち、源といふ姓を賜り給ひき。同七年弘法大師入定の所を、高野の山に定め給ひき。御年四十三。同十三年六月四日傳教大師うせ給ひにき。生年五十六になんなり給ひし。同十四年御門位を御弟の東宮に讓り奉りて、やがて其御子の治部卿親王恒世を、東宮に立て申し給ひしを、親王あながちに遁れ申し給ひて、籠り居て御使をだに通し給はざりしかば、仁明天皇の、皇子にておはしましを、東宮に立て申し給

かたちありさま云々―容貌風采尋常ならざりし人なり

御齋會―正月八日より十四日まで最勝王經を講ぜしめらるゝをいふ問者講師な

を立ちてむまごの親王をかき抱き奉りて、舞ひかなでて、御門に申していはく、田村麿むかし多くの軍の將軍として、えびすを討ち平げ侍りしは、只御門の御稜威なり。つはものの道を習ふといへども、いまだ極めざる所おほし。今親王の年幼くしてかくおはする、田村麿更に及び奉るべからず、と申しき。今もむかしも、子孫を思ふ心はあはれに侍る事なり。さて程なく五月二十三日に田村麿うせにき。年五十四になんなりし。かたちありさまゆゝしかりし人なり。丈五尺八寸、胸のあつさ一尺二寸、目は鷹のまなこの如く、鬚はこがねの糸すぢをかけたるが如し。身を重くなすときは二百一斤、輕くなすをりは六十四斤、心にまかせて折にしたがひしなり。怒れるをりは、眼を廻らせばけだもの皆仆れ、笑ふ時は、かたちなつかしく稚き子もおぢ恐れずいだかれき。たゞ人とは見え侍らざりしなり。同四年正月に、御齋會の内論義ははじまりしなり。今年冬嗣、山階寺の中に南圓堂を建て給ひにき。その時藤氏の人僅に三四人おはせしを歎きて、氏のさかえを願してたて給へりしなり。誠にその驗と見え侍るめり。神武天皇より後、御門の御後見代々におはすれども、子孫相繼ぎて今日あすまでかくおはするは、この藤氏こそはおはすめれ。六月一日官符を下し給ひて、病人を道のほとりに出し捨つる事を留めさせ

すぢなくて―せん方無くて
太上天皇の御子の東宮―高岳親王法號眞如
青馬―白馬を青馬といふ所謂白馬節會

既におこりにしかば、かねて將軍の心を勇まさせ給ひしにこそ。さて十一日に太上天皇軍を起して、内侍のかみとひとつ御輿にたてまつりて、東國の方へむかひ給ひしに、大外記上毛頴人奈良より馳せ參りて、太上天皇既に諸國の軍を召し集めて東國へ入り給ひぬ、と御門に申ししかば、大納言田村麿、宰相綿麿を遣して、その道を遮りて仲成を射殺してき。太上天皇の御方の軍逃げうせしかば、太上天皇すぢなくて歸り給ひて、御ぐしおろして入道し給ひてき。御年三十七なり。内侍のかみみづから命をうしなひてき。おそろしかりし人の心なり。太上天皇の御子の東宮を捨て奉りて、御門の御弟の大伴親王とて、淳和天皇のおはしましを、東宮に立て申させ給ひき。すべて太上天皇の御方の人、罪をかうぶる多かりき。同二年正月七日、初めて青馬を御らんじき。二十三日に豐樂院に出でさせ給ひて、弓あそばして、親王已下射させ奉らせ給ひしに、御門の御弟の葛井親王は、いまだ稚くおはして、弓射たまふうちにもおぼしよらざりしを、御門たはぶれて、親王稚くとも弓矢をとり給ふべき人なり。射たまへ、と宣はせしに、親王たちはしりて射給ひしに、二つの矢みな的にあたりにき。生年十二にぞなりたまひし。母方の祖父にて田村麿大納言その座に侍りて、驚きさわぎ喜びて、えしづめあへずして、座

内侍のかみ—内侍は後宮に仕ふる女官、その長官（かみ）を尙侍といふ、此の尙侍は藥子

おちゐずして—輕燥にして

さゝめく—騷ぐ

○第五十三代　嵯峨天皇

承和九年七月十五日崩御年五十七
葬二嵯峨西山陵一

次の御門嵯峨天皇と申しき。桓武天皇の第二の御子、平城天皇のひとつ御腹なり。大同元年五月十八日に東宮に立ち給ふ。御年二十一。同四年己丑四月十三日に位に卽き給ふ。御年二十四。弘仁元年正月に、太上天皇ならの都にうつり住み給ふ。中納言種繼のむすめに、内侍のかみと申しし人をおぼしめしき。その兄の右兵衞督仲成心おちゐずして、妹の威をかりて、さま〴〵の横さまの事をのみせしかども、世の人憚をなしてとかくいはざりき。内侍のかみも心ざましづまり給はざりし人にて、太上天皇に、事にふれて位を去り給ひにし事の、口をしきよしをのみ申し聞かせしかば、悔しくおぼす心やういで來給ひし程に、九月に内侍のかみ太上天皇を勸め奉りて、位にかへり卽きて、わが后に立たんといふ事いできて、世の中しづかならずさゝめきあへりし程に、御門内侍のかみの官位をとり給ひ、仲成を土佐國へ流しつかはすよし、宣旨を下させ給ひしに、太上天皇大にいかり給ひて、十日丁未畿内のつはものを召し集め給ひしかば、御門關をかためしめ給ひて、田村麿の中納言の大將と申ししを、俄に大納言になし給ひてき。事

あざむ―驚嘆する

かみのまろなる點を忘れ給ひて、門にうちて後見つけ給ひて、驚きて筆をぬらして、投げあげ給ひしかば、その所につきにき。見る人、手をうちあざむ事かぎりなく侍りき。只空に仰ぎて文字を書き給ひしかば、その文字あらはれにき。これのみならず、事にふれてかやうの事多く侍れど、只今思ひ出さるゝ事を片はし申すなり。十一月に中務卿伊與親王、御門を傾け奉らんとはかり奉る、といふ事聞えて、母の夫人ともに、河原寺の北なりし所に籠められ給へりしに、みづから毒を食ひてうせ給ひにき。その親王菅絃の方勝れ給へりき。その後世の中心ちおこりて、大嘗會もとゞまりにき。同三年慈覺大師、生年十五にて比叡の山にのぼり給ひて、傳教大師の御弟子になり給ひしなり。もとは下野國の人におはす。いまだ下野におはせしに、傳教大師を夢に見奉りて、あけくれいかで大師の御許へ參らんと思ひ給ひしに、遂に人につきて登り給ひて、山に登りて見奉り給ひしに、夢の御すがたにいさゝか違ひ給はざりき。同四年に、御門、春の比より例ならずおぼされて、おこたり給はざりしかば、御位を御弟の東宮にゆづり奉りて、太上天皇と申しき。御子の高岳親王を東宮に立て申したまふ。

の初穂

日の御裝束
―晝の裝束
卽ち束帶の
正裝

あらはに云
云―佛菩薩
の化身たる
不思議のふ
るまひ現に
ありき

みかどを東宮に立て申させ給ひたりしを、御門棄て奉らんの御心ありしに、冬嗣の東宮の傅にておはせしが、かゝる事なん、と告げ申し給ひしかば、東宮おぢおそり給ひて、いかゞせんずる、と宣はせしかば、冬嗣、この事今日あす既に侍るべき事にこそ、人の力の及ぶべきにあらず。父みかどの陵に祈り申し給ふべきなり、と申し給ひしかば、東宮日の御裝束奉りて庭におりて、遙に柏原の方を拜し、雨しづくと泣きうれへ申させ給ひしに、俄に烟世の中にみちて、夜の如くになりにしかば、御門驚きをのゝき給ひて、御占ありしに、柏原の御祟、と占ひ申ししかば、御門大におどろき給ひて、この事を陵に悔い申させ給ひしかば、二日ありて烟やう／＼うせにき。同二年十月二十二日に、弘法大師唐土よりかへり給へりき。東寺の佛法これより傳れりしなり。この大師、あらはに權者とふるまひ給ひき。御手ならびなく書かせ給ひしかば、もろこしにても御殿のかべの二間侍るなるに、義之といひし手かきの物を書きたりけるが、年久しくなりてくづれにければ、また改められて後、大師に書きたまへ、と唐土の御門申し給ひければ、五つの筆を御口左右の御足手にとりて、壁に飛びつきて、一度に五くだりになん書き給ひける。この國に歸り給ひて、南門の額は書き給ひしぞかし。さて又應天門の額を書かせ給ひしに、

りさきには、長岡にして行はるゝ事もありき。又ならの法花寺にても行はれしなり。同二十二年閏十月二十三日、傳教大師筑紫におはして、唐土へ平にわたり給はんの御いのりに、かまどの山寺にて藥師佛四體を造り給ひき。同二十三年五月十二日、弘法大師生年三十一と申ししに、唐土へわたり給ひき。七月に傳教大師おなじく唐土へわたり給ひき。同二十四年六月に、傳教大師唐土よりかへり給ひて、天台の法文これよりひろまりしなり。

かまどの山寺—大宰府なる竈門山寺

○第五十二代　平城天皇　天長元年七月七日崩御年五十一　葬二楊梅陵一

次の御門平城天皇と申しき。桓武天皇の第一の御子。御母内大臣藤原良繼の女、皇后乙牟漏なり。延曆元年十一月二十五日に東宮に立ち給ふ。御年十二。早良親王の御かはりなり。同六年五月十八日に御元服ありき。大同元年五月二十八日に位に卽き給ふ。御年三十二。世を知り給ふ事四年なり。御心さとく御才かしこくおはしましき。十一月に天台の受戒はじまりき。今年崇道天皇の御ために、山科に八島寺を建て給ひて、諸國の正稅の上分を奉りて、祈り鎭めたてまつり給ひき。御門位に卽き給ひし日、御弟の嵯峨の

正稅の上分—田租の稻

鞍馬—鞍馬寺
こゝち起りて—疫病起りて
田村將軍—坂上田村麿
和氣弘世—清麿卿の子

給ひき。同十三年十二月二十二日辛酉、長岡の京より今の京にうつり給ひて、賀茂の社に行幸ありき。同十五年に御門東寺をつくり給ふ。今年また藤原伊勢人といひし人、貴船の明神の御をしへにて、鞍馬をばつくり奉りしなり。同十七年に、勅使を淡路の國へつかはして、早良親王の骨をむかへ奉りて、大和の國八島の陵にをさめたまひき。この親王流され給ひてのち、世の中こゝち起りて人おほく死亡せしかば、御門おどろき給ひて、御迎に二度まで人をたてまつり給ひし、皆海に入り波に漂ひて命を失ひてき。第三度に、親王の御甥の宰相五百枝をつかはしき。ことに祈り請ひて、平に行著きて渡し奉りしなり。七月二日田村將軍清水の觀音をつくり奉り、又我家を毀ちわたして堂に建てき。同十九年七月己未の日、御門、思ふ所あり、と宣ひて、前東宮早良親王に尊號を奉り、崇道天皇と申す。又井上内親王を皇太后に崇め奉るべきよし仰せられき。おの〳〵おはしまさぬ後にも、恨の御心をしづめ奉らん、と思し召しけるにこそ侍るめれ。同二十一年正月十九日和氣弘世、たかをの法華會を行ひ始めき。九月二日傳敎大師もろこしへ渡り給ひて、天台の敎文を傳ふべきよしの宣旨を下され侍りしなり。十月に維摩會をもとのやうに山階寺にて行ひて、永く外にて行ふべからざるよし宣旨を下さる。これよ

むづかり給ひて—怒り給ひて
そのひまを—種繼を殺すべき機會を
この比は忌む云々—現今は七日歸りを忌むとなり

らん、と申ししを、御門むづかり給ひて、更に聞き給はずして、この後東宮に政事をあづけ奉り給ふ事なくなりにしを、安からずおぼして、そのひまを年比うかゞひ給ひつるに、よきをりふしにて、かくし給ひつるなり。御門奈良よりかへり給ひにき。丙戌の日行幸はありて、今日は壬辰の日なれば、七日といひしに歸り給へり、とぞ覺え侍る。此比は忌むなど申すとかや。かくて十月に、東宮を乙訓寺にこめ奉り給へりしに、十八日までその命たえ給はざりしかば、淡路の國へ流し奉りたまひしに、山崎にてうせさせ給ひにき。延暦七年に、去年の冬より今年の四月まで、五月のほど雨ふらで、世の人この事をなげきしに、御門御沐浴ありて御身を清めて、庭におりて祈りこひ給ひしかば、暫ばかりありて空くらがり雲いできて、忽に雨くだりて世の人よろこぶ事かぎりなかりき。今年傳教大師、比叡山に根本中堂を建て給ひき。生年二十二にぞなり給ひし。やがて今年とぞおぼえ侍る。弘法大師讃岐より京へのぼり給ひき。生年十五にぞなり給ひし。同十年八月辛卯の日の夜、ぬす人伊勢太神宮を燒き奉りき。今もむかしも人の心ばかりゆゝしきものは侍らず。十月に東宮伊勢へまゐらせ給ひき。御病のをりの御願とぞうけたまはりし。この東宮と申すは、平城天皇におはします。同十二年に、今の京の宮城を造り

化生―佛が他のものに生れ出づること

相―前徵

正稅―田租をいふ、稻一束より春米五升を得

齋宮―伊勢の神宮につかうまつる皇女

宰相―參議の唐名

七日、蛙三萬ばかり集りて、三町ばかりに連りて、難波より天王寺へ入りにき。この事都うつりのあるべき相なり、と申しあへりし程に、二十六日に山城の長岡に京たつべしといふ事出できて、人々をつかはしてその所を定めさせ給ひき。六月に長岡の京に宮づくりを始めさせ給ふ。諸國の正稅六十八萬束を、大臣已下參議已上にたまひて、長岡の京の家を造らしめ給ふ。十一月八日の戌の時より丑の時まで、空の星はしりさわぎき。十一日戊申長岡の京にうつり給ふ。同四年七月中の十日比に、傳敎大師比叡の山に登りて住みはじめ給ひき。生年十九になり給ひし。八月にならの京へ行幸侍りき。去年京長岡にうつりにしかども、齋宮は猶奈良におはしましかば、伊勢へ下らせ給ふべき程近くなりて行幸ありしなり。長岡の京には中納言種繼留主にて候ひしを、御門の御弟の早良親王東宮とておはせしが、人をつかはして射殺さしめ給ひてき。事のおこりは、御門常にこゝかしこに行幸し給ひて、世の政事を東宮にのみあづけ奉り給ひしかば、天應二年に、佐伯今毛人といひし人を宰相になさせ給ひたりしを、御門かへらせ給ひたりしに、この種繼、佐伯の氏のかゝる事はいまだ侍らず、と御門に申ししかば、宰相をとり給ひて、三位を經させさせ給ひてしを、東宮世に口をしきことに思して、種繼をたまは

て凡夫は定めて神も佛もなき世かと思ひもすべし

無量劫—無量時

貌をも見るまじきこと、と宣ひ續けて、泣き歎かせ給ふ事かぎりなし。また東宮の御なげきおぼしやるべし。御かたちも變るほどにならせ給ひしかば、見奉る人、いかにかくならせ給へるぞ、と申ししかば、百川我ために身をも惜まず力をつくせりき。われさせる報なし、今計らざるに命をうしなひつ。この事を思ふにかくなれるなり、と宣ひし。誠にことわりと覺え侍りしことなり。天應元年四月三日、御門位を東宮にゆづり奉り給ひて、太上天皇と申しき。

○第五十一代　桓武天皇

延暦二十五年三月十七日崩御年七十　葬二柏原陵一

次の御門桓武天皇と申しき。光仁天皇の第一の御子、御母贈正一位乙繼の女、皇太夫人高野新笠なり。寶龜四年正月十四日東宮に立ちたまふ。御年三十七。そのほどの事百川が力をいれ奉りしさま、光仁天皇の御事の中に申し侍りぬ。天應元年辛酉四月二十五日位に卽きたまふ。御年四十五。世をしり給ふ事二十四年なり。延暦元年五月四日、宇佐の宮託宣し給ふやう、吾無量劫の中に三界に化生して、方便をめぐらして衆生をみちびく、名をば大自在王菩薩となんいふ、とのたまひき。たふとく侍る事なり。同三年五月

あらたに云云―誓言の験あらたかに

家乏しくして云々―家貧困にして葬式など行ひがたし

凡夫の心は云々―百川の最後を見

き。その時の御願にておこたり給ひて後、參らせ給ひしなり。今年とぞおぼえ侍る、傳教大師、大安寺に行表と申しし僧の弟子になりて、法師になり給ひしは。年十二になり給ふとぞ承りし。もと近江の國の人におはしき。同十年五月に、阿部仲麿唐土にてうせにけり、と聞え侍りき。家乏しくして、後の事などかなはず、と御門きこしめして、絹百疋綿三百屯をなんたまはせし。この人なり、唐土にて月のいづるを見て、この國の方を思ひいだして、三笠の山にいでし月かも、とよめりき。七月五日、ある巫、百川に、この月の九日物忌かたくすべし。あなかしこ、といひしかば、百川常に夢見さわがしき事を思ひ合せて、かんなぎの事を頼みて、九日になりて、戸をさし固めて籠り居たるほどに、泰隆といふ僧は、年ごろ百川がいのりをして相頼めりしものなり。その僧の夢にも、井上の后を殺すによりて、百川が首を斬る人あり、と見て驚きさめて、即ち百川がもとへ走り行きて、この事を告げんとするに、百川巫のをしへに隨ひて、この泰隆にあはず。泰隆爪はじきをしてかへりにき。この日百川俄にうせにき、年三十八になんなりし。私の心なく、世のためとてこそは申し行へりしかども、遂にかくまたなりにし。凡夫の心はいかに侍るべきにか。御門、わが位をたもてることは、偏に百川が力なり。永くその容

やすく生けらんものと思ふな―生命は無きものと思へ

かたみに―互に

ちかごと―誓詞

おひうて―逐ひ棄て

もとむ、とたび〳〵見えき。又御門東宮の御夢にも、かやうに見えさせ給ひて、惱しくおぼされき。これみな井上の后他戸親王の靈とおぼして、御門深くうれへ給ひて、諸國の國分寺にて金剛般若を讀ましめさせ給へりき。同九年二月に、他戸親王いまだ世におはす、といふことを、ある人御門に申しき。御門、この親王を東宮にかへし立てんの御心もとより深かりしかば、人を遣して見せしめ給ひしに、百川御使を呼びよせて、汝あなかしこ、まことを申すことなかれ。もし申してば國は傾きなんずるぞ。やすく生けらんものと思ふな、といひしかば、この御使おぢ戰きながら行きて見るに、うせ給ひにきと聞え給ひし他戸親王は、いさゝかの恙もなくておはすものか。あさましく思ひながら、この使かへり參りて、百川におぢおそりて、ひがことに侍り。あらぬ人なりと申ししを、親王の乳母仕うまつり人集り參りて、御使とかたみに爭ひ申すに、御使ちかごとを立てて、若し僞れる事を申さば、二つの目ぬけおち侍るべし、と申ししかば、人みなひが事と思ひて、親王をおひうて申して後、いくばくの程もなくて、その御使の目二つながら拔け落ち侍りにし。あらたにあさましく侍りし事なり。十月に、東宮伊勢太神宮へ參り給ひき。過ぎぬる春の比御病おもくて、さま〴〵にせさせ給ひしかども、その驗なかり

御ことわり—御裁断

つとめて—翌早朝

り。濱成申す事道理にあらず。我命をもをしみ侍らず。また二心なし。只早く御門の御ことわりをかうぶり侍らん、とせめ申ししかば、御門ともかくも宣はで、立ちて内へ入り給ひにき。百川この事を承りきらんとて、齒をくひしばりて、少しもねぶらずして四十餘日立てりき。御門、百川が心の強く動がざる事を御覽じて、さらば疾く山部親王の立つべきにこそ、としぶ〳〵におほせ出し給ひしを、御ことばいまだ終らざりしに、庭におりて手をうち喜ぶ聲おびたゞしく高くして、人々みなおどろきさわぎ、百川やがてつかさ〳〵を召して、山部親王の御もとへたてまつりて、太子に立て奉りにき。御門あわたゞしく思して、あきれ給へるさまにてぞおはしましし。濱成色をうしなひ、朽ちたる木などの如くに見え侍りき。百川君の御ために力をつくし身を捨つる事、古もかゝる例なし、と人々申しあへりき。同六年四月二十五日、井上の后うせ給ひにき。現身に龍になり給ひにき。他戸親王もうせ給ひにき、といふ事、世に聞え侍りき。同七年九月に、二十日ばかり、夜ごとに瓦石つちくれふりき。つとめて見しかば、屋の上にふりつもれりき。同八年冬雨も降らずして、世の中の井の水みな絶えて、宇治川の水既に絶えなんとする事侍りき。十二月に百川が夢に、鎧兜を着たるもの百餘人きたりて、我を

儲君—皇太子

濱成—藤原宇合の孫

先等定と申しし僧を、百川梵釋寺に籠めて、この親王を位に即け奉らんといふ事を祈り申さしめき。その僧、親王の御たけの寸法をとり奉りて、梵天帝釋を造り奉りておこなひ奉りき。大臣以下御門に申していはく、儲君は、しばしもおはせずしてあるべき事ならず、速に立て奉り給へ、と申ししかば、御門誰をか立つべき、と宣はせしかば、百川すゝみて、第一の御子山部親王を立て申し給ふべし、と申しき。御門仰せらるゝやう、山部は無禮の親王なり、我いかにいふとも、いかで后をばおかすべきぞ、と宣はせしを、百川申していはく、この仰事いはれなく侍り。父のいふ事を違へざるを孝子とはいふなり、とおほせ事ありしかばこそ、親王はおほせに隨ひ給ひしか。初すゝめ給ふも御門におはします。後にきらひ給ふも御門なり。いかにかくは仰事あるぞ、と申すに、濱成申していはく、山部親王は母いやしくおはす。いかでか位に卽き給はん、と申ししかば、御門、まことにさる事なり、酒人内親王を立て申さん、と宣ひき。濱成又申していはく、第二の御子稗田親王御母いやしからず。この親王こそ立ち給ふべけれ、と申ししを、百川目を瞋かし、太刀をひきくつろげて、濱成を罵りていはく、位に卽き給ふ人、更に母のいやしきたふときを擇ぶべからず。山部親王は御心めでたく、世の人もみな隨ひ奉るこゝろあ

御封—御封祿

はかりもなかりしかば—無量なりしかば

聞き侍りにたり。いかでかさてはおはしますべき、と申ししかば、御門、實にいかでかたゞもあらん、と宣はせて、后の御封など皆留め給へりしかども、后さらに憚り給ふけしきなくて、只御門をさま〴〵のあさましきことばにて、みだりがはしくのり申し給ふ事より外になし。百川、東宮もしばし退け奉りて、心をしづめ奉らん、と申ししかば、御門ゆるし給ひき。百川僞りて宣命をつくりて、人々をもよほして、太政官にして宣命を讀ましむ。皇后及び皇太子をはなち追ひ奉るべきよしなり。この事をある人御門に申すに、御門大におどろき給ひて、百川を召して、后なほ懲給はず、しばし東宮を退けんとこそ申しこひつるに、いかにかゝる事はありけるぞ、と宣ふに、百川申していはく、退くとは永くしりぞくる名なり、母罪あり子おごれり。實にはなち追はんに足れることなり、と少しも私あるけしきなく、偏に世のためと思ひたる心、かたちに顯れて見えしかば、御門かへりて百川におぢ給ひて、ともかくもの給はせずして、うち〳〵に歎き悲び給ふ事かぎりなかりき。これも百川のはかりごとにて位に卽き給へりし、功勞のはかりもなかりしかば、只申すまゝにておはしまししなり。同四年正月十四日に、山部親王の中務卿と申しておはせし、東宮に立ちたまふ。この事偏に百川の力なり。その故は、

罵り申し給ひて

あやまち―亡し奉らん

おち伏しにき―服罪せり

し縫殿寮にわたし奉りてこらしめ奉らん。又東宮もあしき御心のみおはす。世のためいといと不便に侍る、と申ししかば、御門よからんさまに行ふべし、と宣ひしかば、三月四日后の位をとり奉りて、いで給ふべきよし啓せしかども、后の更に出で給はずして、忍びやかに巫どもを召しよせて、さま〴〵の物どもを賜せて、御門を呪咀し奉り給へりしを、百川聞きつけて、かんなぎを尋ね召さしめしに、かんなぎ逃げ失せしかば、其かんなぎの親かりしものを召して、更に恐をなすべからず。ありのまゝにこの事を申さば、我必ず位を申し授くべし、といひしかば、即ちこのよしを、かのかんなぎに告げいひしかば、かんなぎ謀られて申していはく、君をあやまち奉らんと謀れる罪は遁れがたかるべき事なり。后宮我等を召して、さま〴〵の物を賜はせたりしかども、いかにすべしとも覺え侍らで、只御門の御ためにかへりて寺々に誦經にして、惡しき心つゆ起さずなり侍りにき、といひき。このよしを百川つぶさに御門に申ししかば、その巫どもを召しよせて、重ねて問はしめさせ給ひしに、おの〳〵皆おち伏しにき。御門この事をきこしめして、涙を流したまひて、われ后のためにいさゝかも疎なる心なかりつるに、今この事あり、いかにすべき事ぞ、と仰事ありしかば、百川申していはく、この事世の中の人皆

まじわざ―呪咀、災厄の人にかゝるやうに祈禱すること

のり申し―

くおはすべかりしに、この山部親王御まゝ子にて、御年などもことの外にあひ給はず、今年三十六になり給ひしを、またなきものと思ひ申し給へりし、いと見苦しくこそ侍りしか。常にこの親王をのみ呼び奉り給ひて、御門を疎くのみもてなし奉り給へば、御門恥ぢ恨みたまふ御心やう〳〵出來けり。百川このほどの事どもをうかゞひ見るに、后まじわざをして、御井に入れさせ給ひき。御門を疾うしなひ奉りて、我御子の東宮を位に卽け奉らんといふ事どもなり。その井に入れたるものを、ある人とりて宮の內にもてあつかひしかば、この事みな人知りにき。百川、御門に、この事既にあらはれにたり。又后の宮の人八人、この比横さまなる事をのみ仕うまつりて、世の人堪ふべからず。人の妻をうばひて、やがてその男の前にてゆゝしきわざをして見せ、又その男を殺し、かやうの事申し盡すべからず。この八人をとらへさせしめて、人のうれへをしづめん、と申ししかば、御門申ししまゝに免し給ひしかば、百川つはものを遣して召しとりし程に、その八人をうち殺してき。その使かへりてこのよしを申すに、后、御門のおはします所へ怒りておはして、老朽は己がおいほれたるをば知らずして、我宮人どもをばいかでか殺さするぞ、とのり申し給ひしかば、百川この事を聞きて、あさましく侍る事なり。后をしば

うちたまひしに—雙六の勝負なし給ひしに

まめやかに—まじめに

うちたまひしに、御門負け給ひにき。后、まめやかに御門をせめ申し給ふ。御門たはぶれとこそ思しつるに、こと苦りて思ひ煩ひ給ふ程に、百川この事を聞きて、山部親王を后にたてまつり給へ、と御門にすゝめ申しき。この山部親王と申すは桓武天皇なり。さて百川また親王の御もとへ參りて、御門この事を申し給はんずらん、あなかしこいなび申し給ふな。思ふやうありて申し侍るなり、と申しし程に、御門親王を呼び奉りたまひて、かゝる事なんある。后の御もとへおはせ、と申し給ひしに、親王おそれかしこまりて、あるべき事に侍らず、と申してまかり出で給ひしを、度々強ひ申し給ひしかども、なほうけたまはり給はざりしかば、御門、孝といふは父のいふ事にしたがふなり。われ年老いて力堪へず。速に后の御もとへ參りたまへ、とせめ給ひしかば、え逃れ給はずして、遂に后の御もとへ參り給ひにき。さてこの后、親王の御ことをいみじきものにし奉り給ひし。いとけしからず侍りし事なり。この后、御年五十六になり給ひき。この御腹の他戸の親王は、御門の第四の御子にて、御年などもいまだ幼くおはしまして、今年は十二にぞなり給ひしかども、この后の御腹にておはせしかば、兄たちをおき奉りて、こぞの正月に東宮に立ち給ひしぞかし。后御年もたけ、東宮の御母などにて、いみじく重々し

宣命—國文にて書きたるみことのり

粉河寺—紀伊國那賀郡風市村に在り

てありしに、この淨三、我身そのうつはものにかなはず、とあながちに申し給ひしかば、その弟の宰相大市と申ししを、さらば卽け申さん、と申すに、大市うけひき給ひしかば、旣に宣命を讀むべきになりて、百川、永手、良繼、この人々心をひとつにて、目をくはせて、密に白壁王を太子と定め申すよしの宣命を作りて、宣命使をかたらひて、大市の宣命をば卷きかくして、この宣命を讀むべきよしをいひしかば、宣命使庭にたちて讀むを聞くに、事俄にあるによりて、諸臣たちはからく、白壁王は諸王の中に年たけたまへり。また先帝の功ある故に太子と定め奉る、といふよしを讀むを聞きて、この大市を立てんといひつる人々、あさましく思ひて、とかくいふべき方もなくてありしほどに、百川やがて兵を催して、白壁王を迎へ奉りて御門と定め奉りてき。この御門の位に卽き給ふことは、偏に百川のはからひ給へりしなり。二十一日に、道鏡をば下野國へ流しつかはす。大納言弓削淨人を土佐へ流しつかはす。この淨人は道鏡が弟なり。十一月一日位に卽き給ふ。御年六十二。世をしり給ふ事十二年なり。粉河寺は今年建てられしなり。寶龜三年に、御門井上の后と博奕したまふとて、たはぶれ給ひて、我負けなば、壯ならん男を奉らん。后負けたまひなば、色かたちならびなからん女をえさせ給へ、と宣ひて

んとて―ませ奉らんとて

おこたり―平愈

こまかに申さば云々―詳細に記さば忌諱に觸るゝ恐れありと

て、ならの京へ還らせおはしまして、さま〴〵の御藥どもありしかども、そのしるし更に見えざりしに、ある尼一人いで來りて、いみじき事どもを申して、やすくおこたり給ひなん、と申ししに、百川怒りて追ひ出してき。御門終にこの事にて、八月四日うせさせ給ひにき。こまかに申さばおそれも侍らん。この事は百川の傳にぞ、こまかに書きたる、とうけたまはる。この御門たゞ人にはおはしまさゞりしにこそ。かやうの事も世の末を戒めんがためにやおはしましけん、とぞおぼえ侍りし。

○第五十代　光仁天皇　天應元年十二月廿三日崩御年七十三

次の御門光仁天皇と申しき。天智天皇の御子に、施基皇子と申しし、第六子におはす。母は贈太政大臣紀諸人の女、贈皇后橡姫なり。神護景雲四年八月四日、稱德天皇うせさせおはしましにしかば、位を繼ぎ給ふべき人もなくて、大臣以下おの〳〵この事を定め給ひしに、天武天皇の御子に、長親王と申しし人の子に、大納言文屋淨三と申す人を、位に卽け奉らん、と申す人々もありき。又白壁王とて、この御門のおはしましを卽け奉るべし、と申す人々もありしかども、猶淨三をと申す人のみつよくて、既に卽き給ふべきに

月

よぼろ—俗にいふひかがみ

八萬餘屯—一屯は今の百二十匁

ゆかし奉ら

ち月の如くにて光り輝き給へり。清麿きもたましひも失せて、え見奉らざりき。この時に重ねて託宣したまはく、道鏡諂へる幣帛を、さま〲の神たちに奉りて、世を亂らんとす。我天の日繼のよわくなりゆくことをなげき、惡しきともがらの起り出でんとすることをうれふ。彼は多く我はすくなし。佛の御力をあふぎて、御門のすゑを助け奉らんとす。速に一切經を書き佛像をつくり、最勝王經一萬卷を讀み奉り、一つの伽藍を建てて、このあしき心ある輩をうしなひ給へ、と申すべし。この事一言も落すべからず、と宣はせき。清麿かへりまゐりて、このよしを申ししかば、道鏡大にいかりて、清麿が官をとり、大隅の國へ流しつかはして、よぼろの筋を斷ちてき。清麿悲びをなして、輿に乘りて宇佐宮へ參れりしに、猪三萬ばかり出で來りて、道の左右に歩みつらなりて、十里ばかり行きて山の中へ走りいりにき。かくて清麿宇佐に參りつきて、拜し奉りしに、即ちもとの如く立ちにき。託宣したまひて、神封の綿八萬餘屯をたまはせき。同四年三月十五日に、御門由義の宮に行幸ありき。道鏡日にそへて御おぼえさかりにて、世の中既にうせなんとせしを、百川うれへ歎きしかども、力も及ばざりしに、道鏡御門の心をいよ〱ゆかし奉らんとて、思ひかけぬものを奉れたりしに、あさましきこと出で來

位の後其年の新穀を奉りて天神地祇を祀り給ふ御儀式

和氣清麿が姉の尼―法均尼、託宣を僞りしは習宜阿曾麿にて法均尼に非ず

もち月―滿

子となれり、とて出家の人も相雑りてつかはるべきよし仰せられき。今年西大寺をつくり給ひて、金銅の四天王を鑄奉り給ひしに、三體は成り給ひて、今一體の七度まで鑄損はれ給ひしかば、御門誓ひ給ひて、もし佛の徳によりて、永く女の身をすてて佛となるべくば、銅のわくに我手をいれん。この度鑄られたまへ。もしこの願かなふべからずば、我手燒けて損はるべし、とのたまひしに、御手にいさゝかなる疵なくして、天王の像成り給ひにき。神護景雲二年十月二十日、道鏡に法皇の位をさづけ給ひき。神護景雲三年七月に、和氣清麿が姉の尼、僞りて八幡の宮の御託宣といひて、道鏡を位に卽けたまひたらば、世の中大によかるべきよしを申しき。道鏡この事を聞きて、喜ぶ事かぎり無かりしほどに、八幡の宮御門の御夢に見え給ひて、我國は昔よりたゞ人を君とする事は未だなき事なり。かく横さまなる心あらん人をば、速にはらひのくべし、と宣はせしを、道鏡大にいかりをなして、御門をすゝめ奉りて、清麿を御使として、宇佐宮へたてまつりて、この事を申しこはしめ奉りしに、託宣したまひし事は、御門の御夢にいさゝかも違はざりしかば、清麿、この事極りなき大事なり、託宣ばかりは信じがたかるべし。なほ其驗を顯し給へ、と祈り申ししかば、卽ち形を顯し給ひき。御たけ三丈ばかりにて、も

うつはもの―御器量

大嘗會―卽

ものをおこして、内裏をかこみ給ひしかば、宮の内に候ひし人々皆逃げうせにしかば、御門、御母又そのつかうまつり人二三人ばかりを相具して、かちにて圖書寮の方におはして立ち給へりしにこそは、少納言向ひ奉りて位をおろし奉るよしの宣命をば讀みかけ奉りしか。その御ことばには、位を保ち給ふべきうつはものにおはせぬに合せて、仲麿とおなじ心にて、我をそこなはんと謀り給ひけり。しかれば御門位を退け奉りて親王の位をたもふ、とて淡路の國へ流し奉りたまひてき。心うく侍りしことなり。

○第四十九代　稱德天皇　神護景雲三年八月四日崩御年五十二　葬二添下郡陵一

次の御門稱德天皇と申しき。これは孝謙天皇のまたかへり卽きたまへりしなり。天平寶字八年十月九日位に卽きたまふ。御年四十七。世をしり給ふこと五年なり。同九年に、淡路の廢帝國土を咀ひ給ふによりて、日でり大風ふきて、世の中わろくて、飢ゑ死ぬる人おほかりき、と申しあひたりき。十月に廢帝うらみの心に堪へずして、垣をこえて逃げ給ひしを、國守つはもの起して留め申ししかば、かへり給ひて明くる日うせ給ひにき。閏十月二日、大臣禪師道鏡太政大臣になりき。十一月に大嘗會ありしに、われ佛の御弟

たゞうちある程の人云云ー權勢竝びなき人の御女にもあれば果報めでたくして二人の夫にだに見ゆることなかるべしと思ひたりとなり

も、世のおぼえめでたくおはせし人の、時の間にかくなり給ひぬる、あはれに侍りしことなり。又心うき事侍りき。その大臣のむすめおはしき。色かたちめでたく、世にならぶ人なかりき。鑒眞和尚の、この人千人の男にあひ給ふ相おはす、と宣はせしを、たゞうちある程の人にもおはせず、一二人の程だにもいかでか、と思ひしに、父の大臣討取られし日、みかたの軍千人悉くにこの人ををかしてき。相はおそろしき事にぞ侍る。二十日太上天皇のたまはく、仲麿、さきの東宮の兄の鹽燒王を、位に卽けんといふことを謀りて、官の印をさして、國々に遣して人の心をたぶろかし、關を固め兵をおこし、罪もなかりける兄豐成の大臣を讒し申して、位を退けたりけり。この事仲麿がいつはれる事と知り給ひぬ。豐成をもとの如く大臣の位にをさめ給ふ。またこの禪師、朝夕に仕うまつれる有樣を見るに、いとたふとし。われ髮をそりて佛の御袈裟をきてあれども、世の政事をせざるべきにあらず。佛も、經に國王位に卽き給はんをりは菩薩戒をうけよとこそ說きおき給ひたれ。これを思へば、尼となりても、世の政事をせんに何のさはりかあるべき。しかれば御門の出家していませんに、又出家してあらん大臣もあるべしと思ひて、この道鏡禪師を、大臣禪師と位を授け奉る、と宣はせて、十月九日太上天皇つは

我子―次男訓儒麿
宰相―參議の唐名
もたひ―酒甕
上達部―三位以上の人即ち公卿

て、御おぼえならびなかりしかば、恵美の大臣、御門を恨み奉る心やう〳〵出できにき。同八年九月二日、恵美の大臣、私に太政官の印をさして事を行ふといふことを、大外記比良麿忍びやかに申したりしかば、十一日に太上天皇少納言をつかはして、鈴印を收めさせしめ給ひしを、恵美の大臣聞きつけて、その道に、我子の宰相といひしを遣りて、奪ひとゞめさせしかば、又太上天皇人を遣して射殺させしめ給ひしに、大臣の使また相互に射殺してき。かゝる世の亂いできて、大臣官位をとられ、關をかため軍を起して討たしめんとし給ひしかば、大臣その夜逃げて近江の國へ行きしに、みかたの軍外の道よりさきに至りて、勢田の橋を燒きてき。大臣これを見て、高島郡の方へにげて、小領といふものの家にとまれりしに、星の大さ、もたひのほどなりしが、その屋の上におちたりし、いかなる事にてか侍りけん。さて越前の國に行きて、相具したりし人々を、これは御門におはす、これは上達部なり、など僞りいひて、人の心をたぶろかしき。かくて御方の軍追ひいたりて攻めしかば、大臣また近江の國へかへりて、船に乗りて逃げんとせしほどに、あらき風吹きて溺れなんとせしかば、船よりおりて相戰ひしほどに、十八日に大臣討取られてき。その頭をとりて京へもて參れりしにこそ。同じ大臣と申せど

れなり

ほひろかに—專橫に

うやうやしきけ—恭敬の狀

まざまの罪を行はれき。その程の事どもおしはかり給ふべし。このほどは、道鏡もいまだほひろかに參り仕うまつらざりしかば、この仲麿、御門の御寵愛ならびなかりき。天平寶字二年八月二十五日、仲麿大保になりにき。これは右大臣をかく申ししなり。やがてその日大將になりて、本の藤原の姓に惠美といふ二文字を加へ給はせき。これらも皆太上天皇の御おぼえ雙なくてせさせ給ひしなり。ゑみといふ姓も、御覽ずるたびに笑しく思すとて賜はする、とぞ申しあひたりし。又仲麿といふ名をかへて、押勝とぞ申しし。同三年六月二日、道のほとりに果物の木を植うべきよし仰下されき。この事は、東大寺の普昭法師と申す人の申し行ひ侍りしなり。そのゆゑは、國々の民往來絶ゆることなし。その蔭にやすみ、その實を採りて疲をさゝへんとなり。いみじき功德とおぼえ侍りし事なり。八月三日鑒眞和尙と申しし人、聖武天皇の御ために招提寺をたて給ひき。同六年六月、太上天皇尼になり給ひてのたまはく、われ菩提心を起して尼となりぬれども、御門事にふれてうやうやしきけ更におはせず。かやうにいはるべき身にはあらず。世の政事の常の小事をば行ひたまへ。世の大事賞罰をばわれ行はん、と宣はせて、この後世を行ひたまひき。同七年九月に、道鏡少僧都になりて、常に太上天皇の御傍にさぶらひ

おの〳〵とがどもおはす―續紀に船王は閨房修らず池田王は孝行闕くる所あり鹽燒王は太上天皇その無禮を責めたまへり云云とあるこ

奉り給ひて、四月に大臣以下を召して、東宮には誰をか立て奉るべき、と定め申すべきよしおほせ事ありしに、右大臣豐成、式部卿永手は、さきの東宮の御兄鹽燒王立ち給ふべし、と申しき。攝津大夫珍努、左大辨古麿は、池田王立ち給ふべし、と申しき。大納言仲麿は、臣を知るは君にはしかず、子を知るは父にはしかず。唯御門の御心にまかせ奉る、とおの〳〵思ひ〳〵に申ししかば、御門ののたまはく、御子たちの中に、舍人新田部この二人はむねとおはせし人なれば、新田部親王の子を東宮に立てたりつれども、かくをしへに從ひ給はずなりぬれば、今は舍人親王の子を立て申すべきに、おの〳〵とがどもおはす。その中に大炊王は年若くおはせど、させる科聞えず。この人を立てんと思ふはいかゞあるべき、とのたまはせき。大臣以下、皆仰事にしたがふべきよし申しき。このさだめより先に、仲麿の大納言、この大炊王をむかへとり奉りて、わが家にすゑ奉りしかば、內よりの御使、その殿にまゐりて迎へ奉りて、東宮には立ち給ひしなり。大炊王と申すは、卽ちこの御門におはします。かくて後、この東宮に選びすてられ給ひつる王たち、又志ある人々あまたよりあひて、御門東宮を傾けたてまつり、仲麿を失はんとす、といふ事、おのづからもれ聞えしかば、仲麿內にまゐりて、この由を申ししかば、さ

水鏡　巻之下

○第四十八代　廢帝

天平寳字九年十月崩御年三十三
葬淡路國三原郡陵

廢帝―明治三年淳仁天皇と謚を奉る

ゆゝしき事―忌はしき事

をりふしも云々―時節柄をも辨へず不行跡を働くな

次の御門廢帝と申しき。天武天皇の御子に、一品舎人親王と申しし第七の御子なり。御母上總守當麻の老が女なり。天平寳字元年四月に東宮に立ち給ふ。御年二十五。同二年己亥八月一日位に卽き給ふ。御年二十六。位にて六年ぞおはしましし。この御門東宮に立ち給ひしをりは、ゆゝしき事ども侍りき。孝謙天皇の御時、東宮は新田部親王の子道祖王とておはせしに、聖武天皇うせさせ給ひて、諒闇にてありしに、この東宮、この程をも憚りたまはず、女の方にのみ亂れ給へりしかば、孝謙天皇、をりふしも知り給はず、かくなおはせそ、と申させ給ひしかども、つゆそのことに從ひ給はざりしかば、天平勝寳九年三月二十九日、大臣以下、この東宮は、聖武天皇の御すゝめにて立て奉りき。しかるにその事をも思ひしり給はず、かくみだりがはしき心のし給へるをば、いかゞし奉るべき、と宣はせしに、人々みな、唯仰事にしたがふべし、と申ししかば、東宮をとり

—齋き祀り奉り

御おぼえ云云—御寵愛を得ることとなりしとなり

り。七日丁亥東大寺供養侍りき。行幸ありき。また聖武天皇は太上天皇とて、同じくこの供養にあはせ給ひき。八幡の宮もおはしましき。めでたく侍りし事どもなり。皆人しり給へる事どもなり。天平勝寶四年三月十四日に、東大寺の大佛に始めてこがねを塗り奉りき。四月九日萬僧を請じて、供養したてまつり給ひき。今年ぞかし、道鏡内へまゐりて、如意輪法を行ひ給ひし程に、やう〳〵御門の御おぼえいできはじまりしなり。弓削の法皇と申ししはこの人なり。寶字二年、御門位を東宮に讓り奉り給ひて、太上天皇と申しき。

しとなり一本この月十一日にの下に「廣嗣が軍敗れし也其の靈を神と崇め奉り」の十八字あり

やがて又かはり―天平勝寳と改めらる

いはひ奉り

京にて東大寺の大佛を始め給ひき。同十七年八月二十三日に、東大寺の大佛の座をつきはじめ給ふ。同十九年九月二十九日、大佛を鑄奉りたまふ。同二十年正月に、陸奥より金九百兩を奉れりき。日本國に金出でくる事これより始まれりき。これによりて四月十八日に、年號を天平感寳元年とかへられにき。されどもこの年號は、やがて又かはりにしかば、年代記などには入り侍らざるなり。七月二日位を去りて、御ぐしおろして太上天皇とぞ申し侍りし。御年五十にならせ給ひしなり。

○第四十七代　孝謙天皇　治十年

次の御門孝謙天皇と申しき。聖武天皇の御女、御母不比等の御女光明皇后におはします。天平勝寳元年己丑七月二日位に卽き給ふ。御年三十一。世をしり給ふ事十年なり。御弟に東宮おはしまししかども、神龜五年に御年二歳にてうせ給ひにしかば、この御門位をつぎおはしましき。天平勝寳元年十月二十四日に、東大寺の大佛を鑄奉りをはりにき。三年のほど八度といふに事はてにしなり。十一月に八幡の宮託宣したまひて、十二月に筑紫より京へうつりおはしましき。梨原に宮づくりして、いはひ奉りしな

云ー御病氣

少貳しづまり云々ー廣嗣が軍敗れて事鎭まり

御祈念に、御門山階寺の內に、東金堂をば建て給ひしなり。その年行基菩薩山崎の橋を造りて、その上に法會をまうけて供養し給ひしに、俄に大水出でて流れ死ぬる人おほかりき。四年と申しし三月二十日泊瀨は供養せられしなり。行基菩薩その導師にておはしき。天平五年七月に盂蘭盆始まりしなり。同六年正月十一日に、光明皇后御母の橘の氏の御ために、山階寺の內に西金堂を建て給ひき。同七年吉備の大臣唐土にとゞめられて、日月を封じたりければ、十日ばかり世の中暗くなりにけり。この事を占はしめけるに、日本國の人を留めて歸さざるによりて、秘術をもちて日月をかくせるなり、と申しければ、この國へは歸り來れりしなり。同十二年九月に、太宰少貳廣繼と申しし人は、宇合の子におはす。その人、一萬人のつはものをおこして、御門を傾け奉らんと謀り奉る、といふ事きこえて、大野東人といふ人に、國々の軍一萬七千餘人を相具して、八幡の宮に祈り申して、戰はしめに遣す。十一月に御門伊勢太神宮に行幸し給ひて、この事を祈り申し給ひしに、この月十一日に、肥前國松浦の郡にて、少貳しづまり給ひしところなり、今鏡の宮とておはします。同十三年六月戊寅の日の夜、京中の條々に飯ふりて侍りき。同十四年十一月に、陸奥に赤き雪降りはべりき。十五年十月十五日、近江の信樂

御はて—周忌の法要

例ならず云

を撰びて、御門に奉り給ひき。同三年と申しし二月に百官を召して、笏を持つ事は始まり侍りしなり。同四年八月三日不比等うせ給ひにき。九月大隅日向の國に、おほやけに隨ひ奉らぬものどもありしかば、宇佐宮の禰宜宣旨をうけたまはりて、軍を起してこれらを討ち平げてき。その時に宇佐の宮の託宣したまひて、たゝかひの間多くの人をころせり、これによりて放生會をすべし、と宣はせしかば、これより諸國の放生會をはじめられしなり。同五年八月三日、御門太上天皇もろともに、不比等の御はてに、山階寺の内に北圓堂をたて給ひぎ。同八年二月四日、御門位を東宮に讓り奉り給ひて、太上天皇と申しき。

○第四十六代　聖武天皇　天平勝寶七年五月二日崩御年五十二 葬ニ佐保山陵ニ

次の御門聖武天皇と申しき。文武天皇の御子、御母不比等の御女皇太后宮の御子なり。養老八年二月四日位に卽き給ふ。御年二十五。世をしり給ふ事二十五年なり。年號を神龜とかへられにき。二年と申ししに、唐土より柑子の種をもて來れりき。これより始めてこの國には出できそめしなり。三年と申しし七月に、太上天皇例ならずおはしまし

れども不比等の地位は之に相當せる也

國々の郡の名云々―風土記撰錄の事をいふ

不破の山の溫泉―養老瀑

山科より奈良の京にうつし建て給ひき。同六年國々の郡の名をしるして、さま〴〵の出くる物どもの數を、目錄をせさせしめ給ひき。同七年十月、維摩會を山階寺にうつし行ひ給ひき。この會は九所にて行はれしに、その事中絶えて今年四十二年になり侍りし。同八年九月三日、位を御女の元正天皇の氷高内親王と聞え給ひしに、ゆづり奉り給ひき。

○第四十五代　元正天皇

天平二十年四月二十一日崩御年六十九
葬二佐保山陵一

次の御門元正天皇と申しき。文武天皇の御姉、これも元明天皇の御腹におはします。元明天皇位を去り給ひし時、聖武天皇を東宮と申ししかば、位を繼ぎ給ふべかりしかども、その年ぞ御元服したまひて、御年十四になり給ひしに、なほいまだいとけなくおはします、とて、この御門は御伯母にて讓を得給ひしなり。和銅八年乙卯九月三日位に卽き給ふ。御年三十五。世をしり給ふ事九年なり。年號かはりて靈龜と申しき。三年と申しし九月に、御門美濃の國不破の山の溫泉に行幸ありき。その湯をあみし人、白髮かへりて黑くなりき。目暗かりしもの忽に明らかになり、痛き所を洗ひしかば卽ち癒えにき。かくて御門かへり給ひて、十一月七日年號を養老とかへられにき。二年と申ししに不比等律令

この比こそ—著者の時代なれどひろく藤原氏攝關時代と見て可なり

かたおもぶき—一概に

一の人—攝政關白、當時未だ攝政關白は無け

に及び給はで、うせさせおはしましにし、いと心うかりしことなり。その時、聖武天皇は、いまだ稚くおはしましき。八歲にやならせ給ひけん。この比こそ二三にても位に卽かせおはしますめれ、その程まではさる事なかりしかば、御母にて位に卽かせ給へりしなり。慶雲四年七月十七日に位に卽き給ふ。御年三十六。世をしり給ふ事七年なり。五年正月十一日に、武藏より銅をはじめて奉りしかば、年號を和銅とかへられにき。三月不比等右大臣になり給ふ。同二年五月に、新羅の使さま〴〵の物を相具して參れりしに、不比等その使にあひ給ひにき。昔より執政の大臣のあふ事は、いまだなき事なり。しかれどもこの國のむつましき事を顯すなり、と宣ひしかば、使ども座を去りて拜し奉りて、うるはしく又座につきて、使どもは本國の賤しきものどもなり、王の仰をかうぶりて今都に參れり。幸の甚しきなり。しかるに辱くあひ見え奉りぬ、悅び恐るゝこと限なし、と申しき。國王大臣も、時に隨ひてふるまひ給ふべきにこそ。この比ならばかたおもぶきに、異國の人に一の人のあひ給ふはなき事なり、などぞ誹り申さまし。同三年三月に、難波より大和の平城の京へ都遷りて、左右京の條坊を定め給ひき。これよりさき〴〵も代代常に京うつり侍りしかども、ことならぬをば申し侍らず。この月に不比等、興福寺を

釋奠—儒教にて孔子並に十哲を祀る儀式

追儺—惡鬼を追ひ拂ふ儀式、續紀に據ろに景雲三年の事なり

給ひにき。その月とぞおぼえ侍る、役行者伊豆國より召し還されて、京に入りて後空へ飛びのぼりて、我身は草座にゐ、母の尼をば鉢にのせて唐土へ渡り侍りにき。さりながらも本所を忘れ難くして、三年に一度、この葛城山と富士の峰へとは來り給ふなり。時々はあひ申し侍り。唐土にては、第三の仙人にておはするよしぞ語り給ふ。二月丁未の日、釋奠は始まると承り侍りき。三月二十一日に、對馬より始めて銀をまゐらせたりしかば、大寶元年と年號を申しき。この後より年號は相續きて、今日までたえず侍るにこそ。二年と申しし七月よりぞ、御子たち馬に乘りて九重の内に出入し給ふ事はとゞまりにし。四年と申しし五月五日、大極殿の西の樓の上に慶雲見えしかば、年號を慶雲とかへられにき。二年と申ししに世の中の心地おこりて、煩ふ人おほかりしかば、追儺といふ事ははじまれりしなり。

○第四十四代　元明天皇

養老五年十二月四日崩御年六十一
葬大和國添上郡椎山陵

次の御門元明天皇と申しき。天智天皇の第四の御女、御母蘇我大臣山田石川麿のむすめ、嬪姪娘なり。この御門は文武天皇の御母におはします。文武天皇いまだ三十にだ

人にあらず佛神の權化なりとの義

三身—一に法身二に報身三に應化身

繩床—藁の床

佛師にあひ給ふとも、猶斧のつまづきあるべし。たとひよき繪師にあひ給ふとも、いかでか筆のあやまちなからん。唯大ならん鏡を佛の御前にかけて、その寫り給へらん影を禮し奉りたまへ。書けるにもあらず造れるにもあらずして、三身具足し給はん。その形を見るは應身の體なり、その影をうかゞふは化身の相なり、その空しきことを觀ずるは法身の理なり、功德の勝れたる事、これに過ぎたるは無かるべし、と申しき。御門御夢さめ給ひて、如來の御願に應じ給ふ事を悅び給ひて、大なる鏡を佛の前にかけて、五百人の僧を請じて供養じ奉り給ひき。眞實の功德とおぼえ侍りしことなり。この頃もこの思ひをなしてする人侍らば、いかにめでたき事にか侍らん。四年と申しし三月に、道昭和尚と申しし人の室のうちに、俄に光滿ちて香しき事かぎりなし。道昭弟子を呼びて、この光を見るや、と問ひしに、弟子見ゆるよしを答へしかば、道昭、物な言ひそ、といひし程に、室より光いでて寺の庭にめぐりて、やゝ久しくして、その光西をさして行きさりて後、道昭繩床に端坐して命終りにしかば、弟子ども火をもちて葬りて、その骨をとらんとせしに、俄に風吹きて灰だにもなくまき失ひてき。日本に火葬は、これになん始り侍りし。五年と申しし正月に、不比等中納言になり給ひて、やがてその日大納言になり

すぢなく—せん方なく

化人—たゞ

ませ薪木をとらす。又御嶽とこの葛城の峰とに石橋をわたせ、と、この鬼神どもにいひしかば、夜々いはほを運びて削りとゝのへて、既に渡しはじめし程に、行者心もとながりて、晝もたゞかたちを顯して渡せ、とせめしを、一言主神、わがかたちの見にくきことを恥ぢて、なほ夜々ばかり渡し侍りしかば、行者いかりて、神呪をもちて、この一言主の神をしばりて、谷の底に投げいれてき。その後ひとことぬしの神御門に近く候ひし人に憑きて、われは御門の御ために、あしき心を起す人をしづむるものなり。役行者御門を傾け奉らんとはかる、と申ししかば、宣旨を下して行者をめしに遣したりしに、行者空に飛びあがりて、捕ふべき力も及ばで、使かへり參りてこの由を申ししかば、行者の母を召し捕られたりしをり、すぢなくて母に代らんが爲に、行者まゐられしを、伊豆の大島へは流し遣したりしに、晝はおほやけに隨ひ奉りてその島に居、夜は富士の山にゆきて行ひき。六月に、御門丈六の佛像を造り奉らんとて、佛師のよからんをもとめ給ひしに、その人なかりしかば、御門大安寺に行幸ありて、佛の御前に掌を合せ願をおこし給ひて、よき佛師にあひて、この佛を造り奉らん、と申し給ひしに、その夜の御夢に、一人の僧ありて、この寺の佛を造り奉りしは化人なり、又來るべきにあらず。たとひよき

踏歌―男女歌をうたひて舞踏する朝庭の儀式

役行者―賀茂役公小角修驗道の開祖

○第四十二代　持統天皇

大寶二年十二月十日崩御年五十八
葬二大內陵一天武同陵此後火葬

次の御門持統天皇と申しき。天智天皇の第二の御女、天武天皇の后なり。御母山田大臣石川麿の女越智姬なり。丁亥の年を元年として、第四年に位に卽き給ひて、世をしり給ふ事十年なり。七年と申しし正月にぞ、踏歌は始り侍りし。十年と申ししに位を去り給ひて、太上天皇と申し侍りき。その後四年おはします。

○第四十三代　文武天皇

慶雲四年崩御年二十五
葬二大和國檜前安呂岡上陵一

次の御門文武天皇と申しき。天武天皇の御子に、草壁の皇子と申しし皇子の第一の御子、母は元明天皇なり。丁酉の年八月一日に位に卽き給ふ。御年十五。世をしり給ふ事十一年なり。三年と申しし五月に、役行者を伊豆の國へ流し遣はしてき。その行者は大和國の人なり。廣く物をならひ、深く三寶をあふぎて、三十二といひし年よりこの葛城山に籠りゐて、三十餘年のほど藤の皮を着物とし、松の葉を食物として、孔雀の神呪をたもちて、さまざまの驗を施しき。五色の雲に乘りて仙宮に至り、鬼神をつかひて水をく

御舅にても云々―大友皇子卽ち弘文天皇の御后は天武天皇の皇女十市皇女なり

大友皇子の御子―與多王といふ

三井寺―園城寺

ながちに勝にのり給ひしことの、佛神もうけ給はずなりにしにこそ侍るめれ。八月に御門野上の宮に移り給ひたりしに、筑紫より足三つある雀の赤きを奉りしかば、年號を朱雀元年とぞ申し侍りし。明くる年の三月に、備後國より白き雉子を奉りしかば、朱雀といふ年號を白鳳とぞかへられにし。三月に河原寺にて、始めて一切經をかゝしめ給ひき。九年と申しし十一月に、后宮御病によりて藥師寺を建てさせ給ひしなり。十三年と申ししに、御門例ならずおはしまして、東宮を始め奉りて、百官大安寺にまうでて、御門この寺にして法會を行はんとおぼす御願あるを、果し遂げ給はずして止みなんとす。たとひ定業なりとも、三年の御命を延べ奉り給へ、この願を遂げさせ奉らん、と祈り申ししに、御門御夢に、御命延び給ふよし御覽ぜられて、御病おこたらせ給ひにしかば、三年の間佛をあらはし經を寫して、本意の如く供養し奉り給ひき。十四年と申しし十月二十三日、天文悉くにみだれ、星のおつる事雨の如く侍りき。十五年と申ししに、大和の國より赤き雉子を奉れりき。さて朱鳥元年と年號をかへられにき。明くる年大友皇子の御子、父の宣はせ置きしによりて、三井寺をつくり給ひしなり。

皇子二人―草壁皇子忍壁皇子

鈴鹿關―伊勢

不破關―美濃

右大臣―中臣連金

左大臣―蘇我臣赤兄

その日菟田といふ所におはし著きたりしに、狩人二十餘人したがひ奉りにき。また米負せたる馬三十疋ばかりあひ奉りたりしを、その米をおろし棄てて、かちにて御供にさふらふ人を皆乗せたまひて、夜半ばかりに伊賀の國におはし著きて、國の軍あまた隨ひ奉りしを相具して、明くる日伊勢の國におはして、天てる御神を拜し奉りたまひき。國の守五百人の軍をおこして、鈴鹿の關をかため、大友皇子三千人の軍をひきゐて不破の關を固む。御門不破の宮におはして、國々の軍を起し給ひしに、つはものその數をしらず。かくて七月六日より、所々にして、大友皇子と戰ひ給ふ。二十一日に勢田に攻めより給ひしに、大友皇子、左右の大臣相共に、橋の西に陣をはりてたゝかふ。此方彼方の軍雲霞の如くにして、その數を知らず、矢の下る事雨のごとし。かゝりしほどに、皇子の方の軍やぶれて、皇子も大臣も僅に命を遁れて山に入りにき。二十三日に皇子みづから遂に命をうしなひてしかば、二十六日にぞその首をとりて不破の宮に奉りし。二十七日に右大臣殺され、左大臣流されにき。その外の人々、罪をかうぶる、多く侍りき。やがてその日ぞ、軍に力をいれたる人々、官位どもを賜はせし。御門は皇子の御叔父にておはせしうへに、御舅にてもおはしまししぞかし。かたぐ〵したがひ奉り給ふべかりしを、あ

尋常ならば天智天皇の次に即位し給ふべき筈なれども種種の事情の爲におくれて僅に即位し給へりとなり

みそか―ひそか

いかではうちとけてもあるべき―如何で油斷して居らるべき

くして即き給ひしなり。世を遁れ給ひしこと、天智天皇の御事の中に申し侍りぬ。天智天皇、十二月三日うせさせ給ひにしかば、同五日大友皇子位につき給ひて、明くる年の五月に、なほこの御門を疑ひ奉りて、出家して吉野の宮に入り籠らせ給へりしを、左右の大臣諸共に、兵をおこして吉野の宮をかこみ奉らんと謀りし程に、この事漏り聞えにき。美濃尾張の國に、天智天皇の陵をつくらん料とて、人夫をその數召すに、皆つは物の具をもちて參るべきよし仰下さる。この事更に陵のことにあらず。必ず事の起り侍るべきにこそ。この宮を逃げ去り給はずばあしかりなん、と告げ申す人あり。又近江の京より大和の京まで、所々に皆つはものを置て守らしめ侍り、など申す人もありき。大友皇子の御妻は、この御門の御女なりしかば、みそかにこの事のありさまを、御消息にて告げ申し給へりけり。吉野の宮には、位を讓り世を遁るゝ事は、病をつくろひ命を保たんとこそ思ひつるに、思はざるに我身を失ふべからんにとりては、いかでかうちとけてもあるべき、と思して、皇子たちをひき具し奉りて、物にも乘り給はずして、東國の方へ入り給ひし道に、縣犬養大伴といひし者遇ひ奉りて、馬に乘せ奉りてき。又后宮を輿に乘せ奉りて、御供には皇子二人、をのこども二十餘人、女十餘人ぞつき奉りたりし。

給ひしより

御弟の東宮ー大海人皇子卽ち天武天皇

山科ー山城國宇治郡山科村及醍醐村の邊を汎稱す

うちまかせては云々ー

しし正月五日、御門の御子に大友皇子と申ししを、太政大臣になし奉り給ひき。二十五にぞなり給ひし。東宮などにぞ立ち給ふべかりしを、御門の御弟の東宮にてはおはしまししかば、かくなり給へりしにこそ。九月に御門例ならずおほされしかば、東宮を呼び奉りて、わが病重くなりたり、今は位讓り奉りてん、と宣はせしかば、東宮、あるべき事にも侍らず。身に病多く侍り、后宮に位を讓り奉りたまひて、大友の太政大臣を攝政とし給ふべきなり、われ御門の御爲に佛道を行はん、と申し給ひて、やがて頭をそりて吉野山に入り給ひにき。さて十月にぞ、大友太政大臣は東宮に立ち給ひし。十二月三日、御門御馬にたてまつりて山科へおはして、林の中に入りてうせ給ひぬ。何處におはすといふことを知らず。只御沓の落ちたりしを、陵にはこめ奉りしなり。

○第四十二代　天武天皇　治十五年崩御年七十二 葬二大和國檜隈大內陵一

次の御門天武天皇と申しき。舒明天皇の第三の御子、御母齊明天皇なり。天智天皇の御世、七年二月に東宮に立ち給ふ。癸酉の年二月二十七日位に卽き給ふ。世をしり給ふこと十五年なり。この御門、うちまかせては位を繼ぎ給ふべかりしかども、又ありがた

徳天皇の御世に定められたる冠位の第一

ひがごとぞとも—太政大臣になりたりといふは誤りなりとも

はかなかりし云々—ちよつとしたることより御心を寄せ

なん申しし。かゝりし程に、御心地例ならずおぼされしが、まことしく重り給ひし時に、御門行幸し給ひて、思し置く事あらば宣はせよ、と仰事ありしかば、大臣、今は限に侍る、何事をかは申し侍るべき、と申し給ひしを聞し召して、御門御涙にむせびて歸らせおはしまして、御弟の東宮を、又大臣の家におはして宣はせよ、とて、さき〴〵の御門の御後見多かりしかども、大臣の志にくらぶべき人更になし、我一人かく去りがたく思ふのみにあらず、次々の御門大臣の末を惠みて、年ごろの恩を必ず報ふべし、と宣はせて、太政大臣にあげ奉り給ふよし仰せ給ふ、とその時の人申しあひたりしかども、この事は確にも聞き侍らざりき。内大臣になり給ふを、太政大臣とはひがごとぞとも申しあひたりしなり。十六日に遂にうせ給ひにき。御門歎きかなしび給ふ事かぎりなし。先に申し侍りつるやうに、御門も王子と申し、大臣もいまだ位淺くおはせしに、御沓とりて奉り給へりし、はかなかりし御心よせの、後位に卽き給ひて今日に至るまで、互にふた心なくおぼし通はし給へるに、御年の程の今はいかゞはなどおぼし慰むべきにもあらず、今年五十六にこそはなり給ひしか。事にふれておぼし續くるに、げにことわりと、御門の御心の中推しはかられ侍りしことなり。大臣は大中臣美氣祜卿の子におはす。十年と申

するなり

般若の不思議—般若心經の功德によりて生じたる奇特

大織冠—孝

て、密に窓の紙をやぶりて見れば、義覺經を讀みける口より光を放てるなり。惠義あさましく思ひて、明くる日なん人々にかたり侍りし。義覺、弟子に語りしを聞き侍りしかば、一夜心經を讀み奉りて、百反ばかりになりし程に、目を見上げて室のうちを見しかば、周圍に隔も更になくて、庭のあらはに見えしかば、いかなる事にかと思ひて、室を出でて、寺の内を見めぐりて歸りたりしかば、もとの如く壁もありとほそも閉ぢたりしかば、室の外のゆかに居て又心經を讀み奉りしに、先にありつるやうに、隔もなくなりにき。これは般若の不思議なり、となん申しし。心に萬法皆空しと思ひて、觀念の至りけると覺えて、あはれに侍りし事なり。

○第四十代　天智天皇

治十年崩御年五十二
葬山城國山科北陵

次の御門天智天皇と申しき。舒明天皇の第一の御子、御母齊明天皇なり。孝德天皇位に卽き給ひし日、東宮に立ち給ひき。壬戌の年正月三日位に卽き給ふ。世をしり給ふ事十年なり。七年と申しし十月十三日、鎌足内大臣になりたまふ。この御時に始めて内大臣といふ官はいできしなり。御姓は中臣と申ししを、藤原をたまはらせき。大織冠と

かへり即き給ひし―重祚し給ひしなり、重祚の例是に始まる

山階寺―後春日に移りて興福寺といふ、維摩會は維摩經を講說して病難を消除

かば、佛右の御手をさゝげ給ひて、掌の中にちひさき淨土をあらはし給ひき。智光夢さめて、この淨土のありさまを寫し書かせて、朝夕にこれを觀じて、遂に極樂にまゐりにき。かゝれば、佛道は只心によるべき事なり。

○第三十九代　齊明天皇　治七年御年六十八　葬二越智大間陵一

次の御門齊明天皇と申しき。これは皇極天皇と申しし女帝の、又かへり即き給ひしなり。乙卯の年正月三日位に即き給ふ。世をしり給ふ事七年なり。二年と申ししに、鎌足病をうけて久しくなり給ひしかば、御門大に歎かせ給ひしに、百濟國より來れりし尼法明といひし、維摩經を讀みてこの病を祈らん、と申ししかば、御門大に悅び給ひき。法明この經を讀みしに、卽ち鎌足の御病おこたり給ひにき。さて明くる年山階寺をたてて、維摩會を始め給ひしなり。七月に、智通智達といふ二人の僧を唐土に遣はして、玄奘三藏に法相宗をば傳へ習はさせ給ひしなり。この御時に義覺といふ僧ありき。百濟國より來れりし人なり。難波の百濟寺になん住み侍りし。その寺に惠義といふ僧ありき。夜半ばかりに出でて、義覺がある所をよりて見れば、室のうちに光を放てり。惠義あやしく思ひ

従ふべし
ふつといらふろ云々—少しも返答することなし

善根—善業
佛果を得る根源

ば、後世のありさまいと覺束なし、と思ひて、二三月のほど、賴光があり所知らせ給へと、佛に祈り申しし程に、智光夢に、賴光が居たる所へ行きて見れば、たとへん方なくめでたし。智光、これはいかなる所ぞ、と問へば、賴光、これは極樂なり、汝あながちに祈りつれば、我生れたる所を見するなり、汝があるべき所にあらず、疾く還りね、といふに、智光、我淨土を願ふ身なり、いかで還らん、といふ。賴光、汝させる行をせず、暫時もいかでかこの所に留らん、といふ。智光、汝世にありし時、させる行もし給はざりき。いかにしてこの所に生れ給へるぞ、といふ。賴光、いかでか知り給はん。昔經論を見給へしに、極樂に生れんこと、いと難くおぼえしかば、偏に世の事をすて、物いふ事をとゞめて、心の中に彌陀の相好、淨土の莊嚴を觀じて、多くの年をつもりて、わづかに生れて侍るなり。汝心みだれ善根すくなくて、淨土へ參るべき程にいまだ至らず、といふを智光聞きて、泣き悲びて、いかにしてか決定して往生すべき、と問ひしかば、賴光、佛に問ひ奉れ、とて、智光を相具して佛の御前に參りぬ。智光佛を禮拜し奉りて、いかなる事をしてか此所に參るべき、と申しき。佛智光に告げての給はく、佛の相好、淨土の莊嚴を觀ずべしと。智光、この土の莊嚴は心も眼も及ばず、凡夫はいかでかこれを觀ずべき、と申しし

いひあはせ―相談

あながちに云々―強ひて辭し讓り給ひしなり

兄の御子―古人大兄皇子

宇治橋―宇治河に架けたる橋、書紀に道昭とあれど宇治橋斷碑には道登とあり

智天皇の、いまだ皇子と聞えしに讓り奉らん、と宣ひしを、皇子、あるべき事に侍らず、と申し給ひて、鎌足に、御門かゝる事をなんの給はせつる、といひあはせ給ひしに、鎌足、この御門の御子、御伯父の皇子を超え奉りて、いかでかその先に位をつぎ給ふべき、世の人のうけ申さんこともありがたく侍るべし、と申し給ひしかば、みこ、我御心にかなひておほしければ、あながちに申し返し給ひしかば、この御門にゆづり奉り給ひしを、これもまた度々返し奉り給ひき。又天智天皇の兄の御子に讓り奉られしに、御子、あるべき事に侍らず、とて出家して吉野山へ入り給ひにき。二人の御子あながちにかく返し奉り給ひしかば、遂にこの御門は位に卽き給ひしなり。かくて鎌足、大臣の位に準へて、内臣となん始めて申し侍りし。大化二年に、道登といひしものの、宇治橋は渡しはじめたりしなり。この御時に、元興寺に智光賴光といふ二人の僧ありき。稚くより同所にて學問をす。賴光身にする勤もなく、又人にあひて物などいふ事もなし。只徒にして月日をすごす。智光あやしみをなして、いかに徒にてはおはするぞ、と問へども、ふつといらふる事もなし。かくて多くの年を經て賴光うせにき。智光歎きて、年來の友なりき、いかなる所にか生れぬらん。おこなひする事もなく、物をだにはか〴〵しく言はざりつれ

いるかせ—ゆるかせ（忽）
その年のその月日—某年某月日
かぎりある事は—定まれる命數ある事は

を奪ひ取りてければ、取られじとをしむ程に、このめの童部ども、おのれは鷲の食殘しぞかし、いかで我等をばいるかせには言ふべきぞ、とて打ちしかば、めのわらは泣きて、この宿りたりつる家にかへりぬ。男、家ぬしに、このめの童を、鷲のくひのこしと申し合ひたりつるはいかなる事ぞ、と問へば、家あるじ、その年のその月日、我木にのぼりて侍りしに、鷲稚き子をとりて西の方より來りて、巣におとし入れて、鷲の子に飼はんとせし程に、この子なく事限なし。鷲の子、その聲におどろき恐れて食はざりき。我兒のなく聲を聞きて、巣のもとによりてとりおろし侍りし子なり、さてかく申しあひたるにこそ、といひしを聞くに、我子の鷲にとられにし月日なり。この事を聞くにあさましく覺えて、泣き悲びて、親子といふ事知りにき。人の命のかぎりある事は、あさましく侍る事なり。

○第三十八代　孝德天皇

白雉五年十月十日崩治十年
葬二河內國大坂磯長陵一

次の御門孝德天皇と申しき。皇極天皇の御弟、御母欽明天皇の御孫吉備姬なり。乙巳の歲六月十四日位に卽きたまふ。世をしり給ふ事十年なり。皇極天皇は、位をわが御子天

二人―佐伯連子麿と葛城稚犬養連網田

時のほどに―一寸の間に

ことのゆかりありて―行くべき縁ありて

ぞ、と問ひしかば、御門に近づき奉ること恐れ思ひ侍るなり、と答ふ。かくて入鹿が首を斬るべきにてあるに、その事を承りたる人二人ながらおぢ恐れ、汗を流して寄らざりしかば、皇子その一人を相具し給ひて、入鹿が前にすゝみ寄りて、その人をして肩を斬らせしめ給ひつ。入鹿愕きて立ちさわぎしに、又足を斬りつ。入鹿御門に申していはく、我何事の罪といふ事を知り侍らず、その事を承らん、と申しき。御門大におどろき給ひて、いかなる事ぞ、と問ひ給ひしかば、皇子、入鹿は多くの皇子をうしなひ、御門の御位を傾け奉らんとす、と申し給ひしかば、御門立ちて内へ入り給ひにき。このをり遂に入鹿が首を斬りてき。その後入鹿が屍を父の大臣に賜せしかば、大臣大に怒て、みづから命をほろぼして、大鬼道に墮ちて、蘇我の一門時のほどに亡びうせにき。この御時とぞ覺え侍る。

但馬國に人ありき。稚き女子をもちたりき。その子庭にはひありきし程に、俄に鷲出できたりて、子をとりて東をさして飛びさりぬ。父母泣き悲めども行方をしらず。その後八年といひしに、其子の父ことのゆかりありて、丹後國へゆきけるが、宿れる家にめのわらはあり、井にゆきて水を汲む。このやどれる男、井のもとにて足を洗ひて立てるほどに、その村のめの童ども來り集りて水を汲むとて、ありつるめの童の汲みたりつる水

遊を爲し給ひしなり。

その御末の云々—藤原氏世々攝關と僞りて天皇を補佐し奉るをいふ

十二門—宮城四方の城門

末の、今日までも御門の御後見はし給ふぞかし。よき事もあしき事も、はかなき程の事ゆゑに出でくることなり。十一月に大臣蝦夷、その子の入鹿、いかめしき家を造りて、内裏の如くに宮門といひて、我子どもをば皆王子となづけき。五十人のつはものを身にしたがへて、出入にいさゝかも立ち離れざりき。かくて偏に世の政をとれるが如くなりしかば、御門入鹿をうしなはんの御心ありき。又天智天皇のいまだ皇子と申ししも、同じくこの事を御心の中におぼしたちしかども、思ひのまゝならざらん事をおぼし恐れし程に、鎌足皇子を勸め奉りて、蘇我宿禰山田石川麿が女をかりそめにあはせ奉りて、この事をはかり給ひき。鎌足願をおこして、丈六の釋迦佛の像をあらはし奉りき。今の山階寺の金堂におはしますはこの御佛なり。六月に、御門大極殿に出で給ひて、入鹿を召しき。入鹿めしにしたがひて參りぬ。人の心をうたがひて、よるひる太刀を佩きてなん侍りしを、鎌足何ともなきさまに、たはぶれにいひなし給ひて、太刀をとかせて座にすゑ給ひつ。その後十二門をさしかためて、山田石川麿にて、新羅、高麗、百濟、この三韓の表を讀ませしめ給ひしに、石川麿この事を謀り給ふを、心の中におぢ恐れ思ひけるにや、身ふるひ聲わなゝきて、え讀まずなりにければ、入鹿、いかなればかくおぢ恐れ侍る

河上に行幸し給ひて—書紀に南淵河とあり

法興寺—元興寺に同じ

鞠をあそばし—蹴鞠の

りて御門河上に行幸し給ひて、四方を拜み天に仰ぎて祈りこひ給ひしかば、忽に神なり雨くだりて五日をへき。世の中皆なほり百穀ゆたかなりき。いみじく侍りし事なり。十一月十一日蘇我の蝦夷大臣の子入鹿、その罪といふ事も無かりしに、聖德太子の御子孫二十三人をうしなひ奉りてき。軍を起して、いかるがの宮を圍みて攻め奉りしに、太子の御子に大兄王と申しし、けものの骨をとりて、御殿籠りし所におきて、われは逃げて生駒山に入り給へりしに、入鹿が軍火を放ちて、いかるがの宮を燒きて、灰の中を見しに、物の骨ありき。これを大兄王のなりと思ひてかへりにき。この大兄王、六日といひしに、この所に歸りきたり給ひて、香爐を捧げて誓ひ給ひしかば、煙雲にのぼりて後、仙人天人のかたち現れて、西にむかひて飛び去り給ひにき。光をはなち空に樂の聲聞えしかば、これを見聞きし人は遙に禮拜をなしき。入鹿が父の大臣これを聞きて、罪なくして太子の御後を失ひ奉れり。われら久しく世にあるべからず、と驚き歎き侍りき。三年と申しし三月に、天智天皇の中大兄王子と申しし、法興寺にて鞠をあそばし給ひし程に、御沓の鞠につきて落ちて侍りしを、鎌足のとりて奉り給へりしを、王子うれしきことにおぼして、その時より相互に、おぼす事露へだてなく聞え合せ奉り給ひて、その御

玄奘三藏—太宗貞觀七年印度に赴き同十九年京師に歸り經論の翻譯に從事せり所謂新譯これなり

ひ侍らまし。三十四年と申す六月に大雪ふりて侍りき。

○第三十六代　舒明天皇　十三年崩御 葬押坂内陵

次の御門舒明天皇と申しき。敏達天皇の御子に、彦人の大兄と申しし皇子の御子なり。御母敏達天皇の御女糠手姫なり。己丑の年正月四日位に卽き給ふ。御年四十七。世をしり給ふ事十三年なり。三年と申ししにぞ、玄奘三藏唐土より天竺へ渡り給ふ、とうけたまはり侍りし。

○第三十七代　皇極天皇　治三年

次の御門皇極天皇と申しき。敏達天皇の曾孫におはします。舒明天皇の后にておはしき。御母欽明天皇の御孫に吉備姫と申し侍りしなり。壬寅の年正月十五日位に卽き給ふ。世をしり給ふ事三年。女帝におはします。七月に世の中ひでりして、さまぐの御祈り侍りしかども、そのしるし更になし。大臣蝦夷と申ししは蘇我馬子大臣の子なり。この事を歎きて、手づから香爐をとりて祈り請ひしかども、なほ驗なかりき。八月にな

講説の竟の夜、即ち三日目の夜

あさましかりし事―喫驚すべき事

一天下―満天下

かりし事ぞかし。御門、その所に寺を建て給ひき。今の橘寺これなり。十五年と申しし五月に御門に申し給はく、「昔もち奉りし經、唐土の衡山と申す所におはします。取り寄せ奉りて、この渡れる經のひが事の侍るに見合せん、と申し給ひて、小野の妹子を、七月にもろこしへ遣しき。明くる年の四月に、妹子一巻にしたる法華經をもち來れりき。九月に、太子、斑鳩の宮の夢殿に入り給ひて、七日七夜出で給はず。八日といふ朝に、御枕上に一巻の經あり。太子のたまはく、この經なん我前の世に持し奉りし經にておはします。妹子がもて來れるは我弟子の經なり。この經に三十四のもじあり。世の中にひろまる經はこの文字なし、となん宣ひし。二十九年二月二十二日太子うせ給ひにき。御年四十九なり。御門をはじめ奉りて、一天下の人、父母を失ひたるが如くにかなしびをなしき。大かた太子の御事萬が一を申し侍るとも、事新しくも申し續くべくもなけれども、めでたき事は皆人しり給へれども、繰返し申さるゝなり。太子世に出で給はざらましかば、暗きより暗きに入りて、永く佛法の名字を聞かぬ身にてぞあらまし。天竺よりもろこしに佛法傳りて、三百年と申ししに、百濟國につたはりて、百年ありてぞこの國へ渡り給へりし。その時太子の御力にあらざりせば、守屋が邪見にぞこの國の人はしたが

り從ふべし
ひそ寺—比蘇寺、大和國吉野郡比曾村に在り
蜂岡寺—山城國葛野郡太秦村に在り廣隆寺ともいふ
はての夜—

久しくなりたるを沈水香といふ。久しからぬを淺香といふ。御門佛法を崇め給ふが故に、釋梵威德の浮べおくり給ふなるべし、と申し給ひき。御門この木にて觀音を作りて、ひそ寺になん置き奉り給ひし。時々光を放ちたまひき。六年と申しし四月に、太子よき馬を求めしめ給ひしに、甲斐の國より、黑き馬の四の足白きを奉りき。太子多くの馬の中よりこれをえらび出して、九月に、この馬に乘り給ひて、雲の中に入りて、東をさしておはしき。麻呂といふ人ひとりぞ、御馬の右の方にとりつきて雲に入りにしかば、見る人驚きあさみ侍りしほどに、三日ありて歸り給ひて、われこの馬に乘りて富士のだけに至りて、信濃の國へ傳はりて歸り來れり、と宣ひき。十一年と申しし十一月に、太子のもち給へりし佛像を、この佛誰か崇め奉るべき、とのたまひしに、秦河勝進みいでて申しうけ侍りしかば、賜せたりしを、蜂岡寺を造りてすゑ奉りき。そのはちをか寺と申すは、今の太秦なり。佛は彌勒とぞ承り侍りし。十四年と申しし七月に、御門、わが前にて勝鬘經講じ給へ、と申し給ひしかば、太子師子の座にのぼりて三日講じ給ひき。そのありさま僧の如くになんおはせし。めでたかりし事なり。翁その庭に聽聞して侍りき。はての夜とぞおぼえ侍る。蓮の花の長さ二三尺ばかりなる、空より降たりし、あさまし

沈―沈香、一名堅黒

この木云々　下一本「この木ひやゝかなるによりて」とあり

子の年十二月八日に卽き給ふ。御年三十八。世をしろしめす事三十六年。位に卽き給ひて明くる年の四月に、御門、我身は女人なり、心に物をさとらず、世の政事は聖德太子にし給へ、と申し給ひしかば、世の人喜をなしてき。太子はこの時に、太子には立ち給ひて、世の政事をし給ひしなり。そのさきは只皇子と申ししかども、今かたり申す事なれば、さき〴〵も太子とは申し侍りつるなり。御年二十二になんなり給ひし。今年四天王寺をば、難波荒陵には移し給ひしなり。もとは玉造の峯にたて給へりき。三年と申しし春、沈は、この國に始めて浪につきて來れりしなり。土佐國の南の海に夜ごとに大に光る物ありき。その聲雷の如くにして、三十日を經て、四月に淡路の島の南の岸に寄り來れり。大さ人の抱くほどにて、長さ八尺餘ばかりなん侍りし。その香しき事譬へん方なくめでたし。これを御門に奉りき。島人何とも知らず、多く薪になんしける。これを太子見給ひて、沈水香と申すものなり。この木を栴檀香といふ。南天竺の南の海の岸に生ひたり。此木のびやかなるによりて、夏になりぬれば、もろ〳〵の蛇纏ひつけり。其時に人かの所へ行き向ひて、その木に矢を射立てて、冬になりて蛇の穴にこもりて後、射たてし矢をしるしにてこれを採るなり。その實は鷄舌香、その花は丁子、その油は薫陸、

東漢駒—歸化人東漢直磐井の子

大臣のむすめ—名は河上娘

はせなどして、今日御門の宣はせつる事ゆめ〳〵ちらすな、とかたらひ給ひしを、誰かいひけん、蘇我の大臣に、御門かゝる事をなん宣ひつる、と語りければ、我身を宣ふにこそと思ひて、御門をうしなひ奉らんと謀りて、東漢駒といふ人を語らひて、十一月三日、御門をうしなひ奉りき。宮の中の人驚き騒ぎしを、蘇我の大臣、其人を捕へさせしめしかば、人々、この大臣のしわざにこそ、と知りて、とかく物言ふ人なかりき。大臣駒を賞じて、さま〴〵の物を賜はせて、我家の中に、女房などの中にも憚なく出入心に任せてさせしほどに、大臣のむすめを忍びて奸してき。大臣この事をきゝて、大にいかりて、髪をとりて木にかけて、自らこれを射き。汝おろかなる心をもちて、御門をうしなひ奉る、といひて、矢を放ちしかば、駒叫びて、我その時に大臣のみを知れりき、御門といふことを知り奉らず、といひしかば、大臣この時いよ〳〵怒りて、劍をとりて腹をさき頭を斬りてき。大臣の心あしきこと、いよ〳〵世間にひろまりしなり。

○第三十五代　推古天皇

三十六年崩御年七十三　葬磯長山田陵

次の御門推古天皇と申しき。欽明天皇の御女、御母稻目大臣の女蘇我小姉君姫なり。壬

丁未の年八月二日位に即き給ふ。御年六十七。世をしり給ふ事五年。位に即き給ひて明くる年の冬、御門聖徳太子を呼び奉りて、汝よく人を相す。われを相したまへ、と宣ひしかば、太子、めでたくおはします、但横さまに御命のあやぶみなん見えさせおはします。心しらざらん人を、宮の中へ入れさせ給ふまじきなり、と申し給ひしかば、御門、いかなる所を見て宣ふぞ、とおほせられしに、太子、赤き筋御眼をつらぬけり。これは傷害の相なり、と申し給ひしかば、御門御鏡にて見給ひしに、申し給ふ如くにおはしましかば、大に驚きおそりおはしましき。かくて太子人々に、御門の御相は前の世の御事なれば、かはるべき御事にあらず、とぞ宣ひし。三年と申しし十一月に、太子御年十九にて元服したまひき。五年と申しし二月に、御門忍びやかに太子にの給はく、蘇我の大臣、内には私をほしきまゝにし、外には詐をかざり、佛法を崇むるやうなれども、心正しからず、いかゞすべき、と宣ひしかば、太子、只この事を忍び給ふべし、と申し給ひしほどに、十月に人の猪を奉りたりしを、御門御らんじて、いつか猪の首を斬るが如くに、わがきらふ所の人をたちうしなふべき、と宣はせしかば、太子大におどろき給ひて、世の中の大事この御詞によりてぞ出でくべき、とて、俄に内宴をおこなひて、人々に祿賜

まじわざ―まじなひの術、呪詛

かたよれる―味方せる

四天王―佛法守護の神、持國天、増長天、廣目天、多聞天

赤檮―迹見首赤檮

せしかば、守屋いよ〳〵怒をなして、兵を聚め、さま〴〵のまじわざどもをしき。このこと聞えて、太子の舍人をつかはして、守屋にかたよれる人々を殺させ給ひしほどに、四月九日御門うせ給ひにき。七月になりて、太子蘇我の大臣もろともに軍を起して、守屋と戰ひたまふ。守屋が方の軍數を知らざりしかば、太子の御方の軍おぢおそれて、三度まで退きかへりき。その時に太子大誓願を起し、白膠の木をとりて四天王を刻み奉りて、頂の上におき奉りて、今放つ所の矢は四天王の放ち給ふところなり、とのたまはせて、舍人をして射させしめ給ひしかば、その矢守屋が胸にあたりて、立所に命を失ひつ。秦河勝をして、首を斬らしめたまふ。守屋が妹は蘇我の大臣の妻にて侍りしかば、その妻の謀事にて、守屋はうちとられぬるなり、とぞ、その時の人は申しあへりし。さてこの守屋を射殺して侍りし舍人をば、赤檮とぞ申し侍りし。水田一萬頃をなん賜はせし。かくて今年天王寺をば、造りはじめられしなり。

○第三十四代　崇峻天皇　五年崩御年七十二　葬大和國倉橋山岡陵

次の御門崇峻天皇と申しき。欽明天皇の第十二の御子、御母稻目大臣の女小姉君姫なり。

○第三十三代　用明天皇

二年崩御年六十九
葬二大和國磐余池上陵一

次の御門用明天皇と申しき。欽明天皇の第四の御子。御母大臣蘇我宿禰稲目の女妃堅鹽姫。乙巳の年九月五日位に即き給ふ。世をしり給ふ事二年。位に即き給ひて明くる年、聖徳太子父のみかどを相し奉りて、御命ことの外に短く見えさせ給へり。政をよくすなほにし給ふべし、と申し給ひき。かくて次の年の四月に、父御門御心ち例ならずおはせしに、太子夜晝附きそひ奉りて、聲だえもせず祈り奉り給ひき。御門大臣以下、三寶を崇め奉らん、いかゞあるべき、と仰せられあはせ給ひしに、守屋は、あるべき事にも侍らず。我國の神を背きて、いかでかこと國の神をば崇むべき、と申しき。蘇我の大臣は、只仰事に随ひて崇め奉らん、と申しき。御門蘇我の大臣のことに随ひ給ひて、法師を内裏へ召し入れられしかば、太子大に喜び給ひて、蘇我の大臣の手をとり涙をながし、三寶の妙理を人知ることなくして、みだりがはしく用ゐ奉らざるに、大臣佛法を信じ奉る、いと／＼かしこき事なり、と宣ひしを、守屋大に怒りて腹たちにき。太子人々に宣はく、守屋因果を知らずして今ほろびなんとす。悲しき事なり、と宣ひしを、人ありて守屋に告げ聞か

すなほ―正直

聲だえもせず―聲も絶えさせず

かうぎは—髪際

すきがら—鋤の柄

りて、方八尺の石をやすく投げき。この童元興寺の僧に仕へしほどに、その寺のかねつき堂に鬼ありて、夜ごとに、鐘つく人を喰ひ殺すを、この童、鬼の人を殺す事を止めてん、といひしかば、寺の僧ども悦びて、速に止むべきよしを勸めき。其夜になりて、童鐘撞堂に登りて鐘をうつ程に、例の如く鬼きたれり。童鬼の髪にとりつきぬ。鬼は外へひき出さんとし、童は内へ引き入れんとする程に、夜はたゞあけに明けなんとす。鬼爲わびて、かうぎはを放ち落して逃げ去りぬ。夜明けて血を尋ねて索めしかば、その寺の傍なる塚のもとにてなん、血とまり侍りにし。昔心あしかりし人を埋めりし所なり。その人鬼になりたりける、とぞ人々申しあひたりし。その後鬼人をころす事侍らざりき。鬼の髪は寶藏にをさまりていまだ侍るめり。この童をとこになりて、なほこの寺に侍りき。寺の田を作りて水をまかせんとせしに、人々妨げて水を入れさせざりしかば、十餘人ばかりして擔ひつべき程のすきがらを作りて、水口にたてたりしを、人々ぬきて捨てたりしかば、この男又五百人してひく石をとりて、他人の田の水口におきて、水を寺田に入れしかば、人々おぢおそれて、その水口を塞がずなりにき。かくて寺田やくることなかりしかば、寺の僧、この男法師になる事をゆるしてき。世の人道場法師とぞ申しし。

三寶―佛、法、僧

まかせん―灌ぎ入れん

し程に、空に雲なくして大に雨ふり風吹きき。御門も守屋も忽に瘡をわづらひ、天下に瘡おこりて、命をうしなふもの數を知らず。その瘡をやむ人、身を燒き切るが如くになん覺えける。佛像を燒きし罪によりて、この病おこれりしなり。六月に蘇我の大臣、病久しく癒えず。猶三寶を仰ぎ奉らん、と申しき。御門、しからば汝ひとり行ふべし、と宣はせしかば、喜びてまた堂塔をつくりき。佛法はこれよりやう〱弘り始まりしなり。かくて八月十五日に御門はうせさせ給ひにき。この御時とぞおぼえ侍る。尾張の國に田を作るものありき。夏になりて田に水まかせんとせし程に、俄に神鳴り雨降りしかば、木の下にたち入りてありし程に、その前に雷落ちにき。その形稚き子のごとし。この男鋤をもちて打たんとせしかば、いかづち、われを殺す事なかれ。必ずこの恩を報はん、といひき。をのこの曰く、何事にて恩を報ふべきぞ、といひき。いかづち答へて曰く、汝に子を設けさせて、かれにて恩をむくいん。われに楠の木の船を造りて、水を入れて竹の葉を浮べて、速に與へよ、といひしかば、此のをのこ、いかづちのいふが如くにして與へつ。雷これを得て、卽ち空へ登りにき。その後男兒を設けてき。生れしときに、蛇その首をまとひて、尾、頭、項の方にさがれりき。ちから世にすぐれたり。この年十餘にな

—見奉らん

あさみ申しき—驚嘆したり

六齋日—八日、廿三日、十四日、廿九日、十五日、三十日

元興寺—始め法興寺といひ後元興寺と改む飛鳥寺ともいふ奈良七大寺の一

しもと—笞

見給ひて、六齋日は梵天帝釋おり下り給ひて、國の政を見給ふ日なり。ものゝ命を殺す事を留めたまへ、と申し給ひしかば、やがて宣旨を下し給ひき。今年太子七歳になり給ひし。八年と申しし十月に、新羅より釋迦佛をわたし奉りしかば、御門悦び給ひて、供養し奉りき。山階寺の東金堂におはしますはこの佛なり。十二年と申しし七月に、百濟國より日羅といふ僧來れりき。太子あひ給ひて物語をし給ひしほどに、日羅身より光を放ちて、太子を拜み奉るとて、敬禮救世觀世音傳燈東方粟散王、と申しき。太子又眉間より光をはなち給ひき。かくて人々に宣ひき。我昔唐土にありし時、日羅は弟子にてありしものなり。常に日を拜み奉りしによりて、かく身より光をいだすなり。後の世に必ず天にむまるべし、とのたまひき。十三年と申しし九月に、百濟國より石にて造りたる彌勒をわたし奉りたりしを、蘇我馬子の大臣、堂を造りてすゑ奉りき。今元興寺におはします佛なり。十四年と申しし三月に、守屋の大臣御門に申さく、先帝の御時より今に至るまで世の中の病いまだおこたらず、蘇我の大臣佛法を行ふ故なるべし、と申ししかば、佛法を失ふべきよし宣旨下りにき。守屋みづから寺に行きむかひて、堂をきりたふし、佛像を破りうしなひ、火をつけて燒き、尼の着るものを剝ぎ、しもとをもちて打ち

なにがしの王—船史の祖王辰爾

いみじき事—殊勝なる事の意

衡山—所謂南嶽にして五嶽の一、湖南省洞庭湖の南に在り

見給へらん

侍る、高麗より烏の羽にものを書きて奉りたりしを、いかにして讀むべしとも覺えぬ事にて侍りしを、なにがしの王とかや申しし人の、甑の内におきて、うつしとりて讀みたりしこそ、いみじきことにて侍りしか。御門めでほめ給ひて、その王は御前近く常に候ふべきよしなど仰せられき。二年と申しし二月十五日、聖德太子東に向ひて掌を合せて、南無佛と宣ひき。今年御年二つにこそはなり給ひしか。三年三月三日父の皇子、聖德太子を愛し奉りて抱き給へりしに、いみじく香しくおはしき。その後多くの月日をすぐるまで、そのうつり香失せ給はざりしかば、宮の中の女房たち、我も我もと爭ひ抱き奉り侍りき。六年十月と申ししに、百濟國より經論又あまた渡り給へりしを、太子、これを見侍らん、と御門に申し給ひしかば、御門その故を問ひ給ふに、太子申し給はく、昔唐土の衡山に侍りしに、佛教は見侍りき。今その經論を奉りて侍るなれば、見給へらんと思ひ給ふるなり、と申し給ひしかば、御門あさましと思しめして、汝は六歳になり給ふ。いつの程に唐土にありしとは宣ふぞ、と仰事ありしかば、太子、前の世の事のおぼえ侍るを申すなり、と申し給ひし時に、御門を始め奉りて、聞く人手をうちあさみ申しき。法華經は今年わたり給へりけりとぞ承りし。七年と申しし二月に、太子よろづの經論を披き

○第三十二代　敏達天皇　十四年崩御年二十四　葬河内國磯長中尾陵

つぎの御門敏達天皇と申しき。欽明天皇の第二の御子。御母宣化天皇の御女石姫の皇后なり。欽明天皇の御世、十五年甲戌正月に東宮に立ちたまふ。壬辰の年四月三日位に即きたまふ。世をしりたまふ事十四年なり。今年正月一日ぞ聖徳太子はむまれたまひし。父の用明天皇は御門の御弟にて、いまだ皇子と申ししなり。御母、宮のうちを遊びありかせ給ひしに、厩の前にて、御心にいさゝかも覺えさせ給ふ事もなくて、俄に生れさせ給ひしなり。この月までは、十二ヶ月にぞあたらせ給ひし。人々急ぎ抱き取り奉りてき。かくて赤く黄なる光西の方よりさして、御殿の内をてらしき。御門このよしを聞し召して、行幸なりて事のありさまを問ひ申し給ふに、又ありつるやうに、宮の内光さして耀きけり。御門あさましとおぼして、たゞ人にはおはすまじき人なり、とぞ、人々には宣はせし。四月になりにしかば、物などいとよく宣ひき。今年の五月とぞおぼえ

今年正月一日云々―法王帝説には甲午歳生れ給ひし由見えたれば敏達天皇の三年なり

汝を忘るべからず、常に來て寢よ、といひしかば、その後きたりて寢侍りき。さてきつねとは申しそめしなり。その妻は、桃の花染の裳をなん着て侍りし。その產みたりし子をばきつとぞ申しし。力強くて、走ること飛ぶ鳥のごとく侍りき。

よしなき事—つまらぬ事

からうすのや—米を舂く碓のすゑられたる小屋

御母申し給はく、我身は穢はし。いかでか宿り給はん、と宣ふに、この僧、けがらはしきを厭はず、と宣ひしに、然らば、と許し奉り給ひしに隨ひて、母の御口にをどり入り給ふ、とおぼえて、驚き給ひたりしに、御喉に物ある心地し給ひて、孕み給へりしなり。八月と申ししに、腹の内にてもの宣ふ聞え侍りき。このころほひに、宇佐の宮は顯れ始めおはしましき。よしなき事に侍れども、この御時とぞおぼえ侍る、野干をきつねと申し侍りしは。事の起原は、美濃國に侍りし人、顔よき妻をもとむとて、物へまかりしに、野中に女にあひ侍りにき。この男かたらひよりて、我妻になりなんや、といひき。この女、いかにも宣はんに隨ふべし、といひしかば、相具して家に歸りて住む程に、をのこ子一人うみてき。かくて年月をすぐすに、家にある犬、十二月十五日に子をうみてき。その犬の子すこしおとなびて、この妻の女を見る度ごとに吠えしかば、彼の妻の女いみじく恐ぢて、男に、これうち殺してよ、といひしかども、夫の男聞かざりき。この妻の女、米しらぐる女どもに物食せんとて、からうすのやに入りにき。その時この犬走り來て、めの女を食はんとす。この女驚きおそれてえ堪へずして野干になりて、籬の上にのぼりてけり。男これを見て、あさましと思ひながらいはく、汝と我とが中に、子既に出來にたり。我

世の中の心ちおこりて—疫氣行はれて—もろこしより人わたりて—南梁人司馬達等來り大和坂田原にて佛を祭れり

○第三十一代　欽明天皇

三十二年崩御年八十
葬二大和國檜隈坂合陵一

次の御門欽明天皇と申しき。安閑天皇の御弟、御母皇后手白香皇女なり。癸亥の年位につき給ふ。御年四十。世をしりたまふ事三十二年。十三年と申ししに、百濟國より佛經渡り給へりき。御門喜び給ひて、これを崇め給ひしに、世の中の心ちおこりて、人おほくわづらひき。尾輿の大連といひし人、佛法を崇むる故にこの病起るなるべし、と申して、寺を燒きうしなひしかば、空に雲なくして雨ふり、內裏やけ、かの大連うせにき。この後さま〴〵の佛經猶渡りたまひき。繼體天皇の御世に、もろこしより人わたりて、佛を持したてまつりて崇め行ひしかども、その時の人、もろこしの神となづけて、佛とも知り奉らず、又世の中にも弘まり給はずなりにき。この御世よりぞ、世の人佛法といふ事は知りそめ侍りし。三十三年と申ししに、聖德太子はらまれ給ひき。御父の用明天皇は、この御門の第四の御子と申ししなり。太子の御母の御夢に、金の色したる僧の、我世を救ふ願あり、しばらく君が腹にやどらん、と宣ひしかば、御母、かく宣ふは誰にかおはする、と申し給ひき。その僧、我は救世菩薩なり、家はこれより西の方にあり、と宣ひき。

都うつり三度―初め山背筒城に、次に弟國に、次に磐余玉穂に

天台大師―名は智顗、智者大師

のありさまを申し侍りし時に、京へ入り給ひしなり。さりながらも位をうけとり給はざりしかば、大臣をはじめて、あながちに勸め奉りしかば、遂に位に卽き給ひしなり。この御時、都うつり三度ありき。

○第廿九代　安閑天皇

二年崩　御年七十　葬二河内國古市高屋丘陵一

次の御門安閑天皇と申しき。繼體天皇の御子。御母妃尾張目子媛。癸丑の年二月に位に卽き給ふ。御年六十八。世をしり給ふ事二年。位に卽き給ひて、明くる年正月に、都大和の高市郡に遷りにき。

○第三十代　宣化天皇

四年崩　御年七十三　葬二大和國身狹桃花鳥坂上陵一

次の御門宣化天皇と申しき。安閑天皇のひとつ腹の御弟におはします。乙卯の年十二月に位に卽き給ふ。御年六十九。世をしり給ふ事四年。位に卽き給ひて、三年と申ししにぞ、天台大師生れ給ひし時に侍りし、と後にうけたまはりし。

つかさ〴〵—百官群臣
あぐら—床几

○第廿八代　繼體天皇　二十五年崩御年八十二 葬攝津國三島藍野陵

次の御門繼體天皇と申しき。應神天皇第八の御子。隼總別皇子と申しき。その御子を大迹王と申しき。その御子を私斐王と申しき。又その御子に、彦主人王と申しし王の子にて、この御門はおはしまししなり。御母垂仁天皇の七世の御孫振姬なり。丁亥の年二月に位に卽き給ふ。御年五十八。世をしり給ふ事二十五年。武烈天皇うせ給ひてのち、位を繼ぎ給ふべき人なきことを、大臣をはじめて、天下の人なげきて、仲哀天皇の五代の御孫丹波國におはすと聞ゆ、かの王を迎へ奉りて位に卽け奉らん、とて、つかさ〴〵御迎に參りしを、遙に見やりて、おぢおそれ色を失ひて、山中にかくれ給ひて、その行方を知らずなりにき。かくてあくる年の正月に、越前國に、應神天皇の五代の御孫の王おはす、といふ事聞えて、又つかさ〴〵御迎に參りたりしに、この王驚く御氣色なくして、あぐらに尻をかけて、御前に候ふ人々かしこまり敬ひ奉ること、おほやけの如くなりき。この御迎にまゐりたる人々いよ〳〵畏まりて、事のよしを申しき。王この事をうたがひ給ひて、空しく二日二夜をすぐさせ給ひき。御迎の人々重ねて、大臣の迎へ奉るよし、事

かやうのあさましく心うき事云々―此等の事は百濟の末多王の事の紛れて此天皇の御事の如く傳はりしものなること古人既辯あり

月に春宮に立ち給ふ。御年三十四。戊辰の年正月五日位に卽かせ給ふ。御年四十。世をしり給ふ事十一年なり。この御門の御ありさま、顯宗天皇の御事の中にこまかに申し侍りぬ。御心ざまめでたくおはしましき。

○第廿七代　武烈天皇　八年崩御年十八　葬ニ大和國傍丘磐杯丘北陵一

次の御門武烈天皇と申しき。仁賢天皇の御子。御母皇后春日大娘なり。仁賢天皇七年正月に東宮に立ちたまふ。御年六歲。戊寅の年十二月に位に卽き給ふ。御年十歲。世をしり給ふ事八年。そのほど人を殺す事朝夕のしわざとしたまふ。孕める人の腹をさきわりてその子を見たまひ、人の爪をぬきていもをほらせ、人を木に登せて落して殺し、或時は人を水にいれて、矛にて刺し殺し、或時は女をはだかになして、板の上にすゑて、馬のゆゝしきわざするを見せさせ給ふに、そのかたに入りたる女は板をうるほすを、御門これをにくみてやがて殺し給ひき。さなきをば召して、宮づかへすべきよしの仰ありき。かやうのあさましく心うき事多かりし御世なり。御年十八にてうせ給ひにき。御子もおはせず。

き給ふべかりしを、御弟に譲り給ひしかども、あるべき事にあらず、と申し給へりき。かくて互に位につき給はざりしかば、御妹の飯豐天皇をつけ奉り給ひしほどに、その年のうちにうせ給ひにしかば、猶弟の王東宮の御すゝめに隨ひて、位に卽き給ひき。その年三月上巳の日ぞ、始めて曲水宴を行はせ給ひし。二年八月と申ししに、御門御兄の東宮に申し給はく、わが父のみこ、罪なくして雄略天皇に失はれ給へりき。うらみの心今にやむことなし。われかの御門の陵をこぼちて、その骨をくだきて捨てん、と宣ひしを、東宮申し給はく、雄略天皇は御門におはします。我父は御門の御子なりといへども、位にのぼり給はざりき。また御門淸寧天皇の御惠をかうぶり給へり。雄略天皇は淸寧天皇の御父におはせずや。今位にのぼりたまふ。いかでかその志を忘れ給はん。陵を破り給はん事あるべからず、と申し給ひしかば、その言にしたがひ給ひき。この御時、世治り民やすらかに侍りき。

曲水宴—後世三月三日と定めて御溝水に盃を浮べて文人以下詩歌を作りてこれを飮むよし公事根源などに見ゆ

○第廿六代　仁賢天皇

十一年崩御年五十
葬二河内國埴生坂本陵一

次の御門仁賢天皇と申しき。顯宗天皇のひとつ御腹の兄なり。淸寧天皇の御世、三年四

郡のつかさ—書紀に縮見屯倉首と見ゆ

おり騷ぎ—あわてゝ下座して

しに失はれ給ひしかば、その御子二人丹波國へ逃げておはしたりしに、猶世の中をおそり給ひて、弟の君、兄の君をすゝめ奉りて、播磨國へおはして、御名どもをかへて、郡のつかさに仕へ給ひき。さて年月を過し給ひしほどに、弟の君、兄の君に申し給はく、我等命を遁れて此所にて年を經にたり、今は名をあらはしてん、と宣ひしに、兄の君、然らば命を保たんこといと難かるべし、と宣ひしかば、又弟の君、我等は履中天皇の御孫なり。身を苦めて人に仕へて馬牛を飼ふ、生けるかひなし。只名を顯して命を失ひてん、いとよき事なり、と宣びて、兄弟かたみに抱きつきて泣き給ふ事かぎりなし。兄の君、さらば疾く我等が名をあらはし給ひてよ、と宣ひしかば、二人相具して、郡のつかさの家におはして、あまだりのもとに居給へりしかば、呼びいれ奉りて、竈の前にすゑて、酒のみあそびなどして、おの〳〵立ちて舞ふに、この弟の君、我御身のありさまをいひ續けて舞ひ給ふを、郡のつかさ聞き驚きて、おり騷ぎ拜し奉りて、郡のうちの民どもを起して、俄に宮づくりして、かりそめにすゑ奉りて、御門に、この二人の王を迎へ奉り給へ、と申ししかば、清寧天皇喜びて、卽ち迎へとり給ひつ。われ子なし。位を繼ぎ給ふべし、とて、兄の王を東宮に立て奉り給ひき。さて清寧天皇うせ給ひにしかば、東宮位に卽

王

飯豐天皇—此の天皇も普通には御歴代に數へ奉らず

日本紀には云々—日本紀には二皇子推讓の間政を見給ひし由を記せるまでにて本紀には立てられず

き。

○第廿四代　飯豐天皇　即位年崩御年四十五 葬㆓大和國垣内丘陵㆒

次の御門飯豐天皇と申しき。これは女帝におはします。履中天皇のみこに、押羽皇子と申して、黑媛の御腹に皇子おはしき。その御むすめなり。御母荑媛なり。甲子の年二月に位に即き給ふ。御年四十五。この御門の御弟二人、互に位を讓りて繼ぎ給はざりしほどに、御妹を位に即け奉り給へりしなり。さて程なくその年のうち十一月にうせ給ひにしかば、この御門をば系圖などにも入れ奉らぬとかやぞ承はる。されども日本紀には入れ奉りて侍るなれば、次第に申し侍るなり。

○第廿五代　顯宗天皇　三年崩御年三十八 葬㆓大和國磐杯丘陵㆒

次の御門顯宗天皇と申しき。飯豐天皇の同じ御腹の弟におはします。乙丑の年正月一日位に即き給ふ。御年三十六。世をしり給ふ事三年。御父の押羽の皇子は、安康天皇の御世三年と申ししに、安康の御弟の雄畧天皇と申しし御門の、いまだ皇子にておはしまし

浦島の子云云―俗傳の浦島太郎

履中天皇の御孫云々―天皇の皇子市邊押磐皇子その御子億計王弘計

は誰の人ぞ、と宣はせしに、その人、まづ王の名をなのり給へ。その後申さん、と申ししかば、御門なのり給ひき。その後、我は一言主神に侍り、と申して、相共に狩をして、日暮れてかへり給ひしに、この一言主神送り奉りしかば、世の中の人、たゞ人にはおはせぬか、とぞ申しあひたりし。二十三年と申しし七月に、浦島の子蓬萊へまかりにけり、といふ事侍りしなり。皆人のしり給ひたる事なれば、こまかに申すべからず。

○第廿三代　清寧天皇　五年崩御年四十一　葬二河内國坂門原陵一

次の御門清寧天皇と申しき。雄略天皇の第三の御子、御母皇大夫人葛城韓姫なり。雄略天皇の御世、二十二年戊午正月に東宮にたちたまふ。御年三十五。世をしり給ふ事五年。御門生れ給ひて御ぐし白く長かりき。さて白髮皇子とは申ししなり。民を愛し給ふ御心ありしを、父御門御子たちの中に寵じ給ひて、東宮に立て奉りしなり。庚申の年正月四日位に卽き給ふ。御年三十七。世をしり給ふ事五年なり。この御門位を繼ぐべき人なき事をなげきて、よろづの國々に使をつかはして、王孫をもとめ給ひしに、履中天皇の御孫といふ人二人を、播磨國より索め出して、兄をば東宮に立て、弟をば皇子とし給ひ

あやまち奉りて―弑し奉りて
大臣の家―葛城圓の家
四のえだ―兩手兩足
葛城山―大和國葛上郡

膝を枕にして、晝御殿ごもりたるを、傍なる太刀をとりて、眉輪王あやまち奉りて、逃げて大臣の家におはしにき。御門の御弟の大泊瀬のみこ、この事を聞きて、軍を起してかの大臣の家をかこみて、戰ひたまひき。眉輪王、もとより我位に卽かんとの心なし。只父の讐を報ふるばかりなり、といひてみづから首を斬りて死ぬ。この眉輪王、七歳になんなり給ひし。

○第廿二代　雄略天皇　二十三年崩御年九十三　葬河內國高鷲原陵

次の御門雄略天皇と申しき。允恭天皇第五のみこ、御母皇后忍坂大中姬なり。丙申の年十一月十三日位に卽き給ふ。御年七十。世をしり給ふ事二十三年なり。この御門生れ給ひし時、宮の內なん光りたりし。おとなになり給ひて後、御心たけくして多くの人を殺したまひき。世の人大惡天皇と申しき。二年と申しし七月に、御門愛せさせ給ひし女、こと男にあひにけり。御門怒り給ひて、男女二人ながら召しよせて、四のえだを木の上にはりつけて、火をつけて燒きころし給ひてき。四年二月と申ししに、御門この葛城山にて狩をし給ひしに、御門の御かたちにいさゝかも違はぬ人いで來れりき。御門、これ

御使—坂本臣祖根使主

耽る心—美しさにひかるゝ心

御いとほしみ—御寵愛

を奉り給へ、と御門仰せ事ありて、御使を遣したりしに、この御子よろこびて、身に病をうけて久しくまかりなりぬ。世に侍ること今日明日といふことを知らず。この人みなし子にて侍るを見おきがたくて、よみぢも安く罷られざるべきに、そのかたちの見にくきをも嫌ひ給はず、かゝる仰をかうぶる、かたじけなき事なり。この志をあらはし奉らん、とて御使につけて、めでたき寶を奉れるを、この御使これを見て、耽る心出來て、この寶物をかすめかくしつ。さて歸り參りて、御門に申すやう、更に奉るべからず、おなじ御子たちといふとも、我らが妹にていかでかあはせ奉るべき、と申すよしを僞り申ししかば、大にいかり給ひて、軍をつかはして殺し給ひてき。その妻をとりてわが后とし給ひ、その妹を召して、本意の如く大泊瀬の皇子にあはせ給ひつ。三年と申す八月に、御門樓にのぼり給ひて、御酒などすゝめて遊び給ひて、后宮に、何事かおぼす事はある、と申し給ひしかば、后の宮、御門の御いとほしみをかうぶれり。何事をかは思ひ侍るべき、と申したまふ。御門仰せられていはく、我身には恐るゝ事あり。このまゝ子の眉輪王おとなしくなりて、わが、その父を殺したりと知りなば、定めてあしき心を起してん、と宣ふを、この眉輪王、樓の下に遊びありきて聞き給ひてげり。さて御門の、醉ひて后の御

ひれふして―平伏して
すゑ奉り―置き奉り

替へて遣したりしに、その御使庭にひれふして、七日までつや〳〵と物を食はざりしを、御使のいふかひなく死なんことのあさましさに、おと姫うちへ參り給ひにき。御門悅び給ふこと限りなくて、時めき給ふさま雙ぶべき人なかりき。この事を姉后やすからぬことにし給ひしかば、宮を別に造りてぞすゑ奉り給へりし。四十二年おはしましゝに、御門うせ給ひにしを、新羅より年ごとの事なれば、船八十にさま〴〵の物を積みて、樂人八十人相副へて奉りたりしに、御門うせ給ひにけり、と聞きて、泣き悲む事かぎりなし。難波の津より京まで、この貢物を持て續け奉りおきてかへりにき。この後は僅に船二つなどをぞ奉りし。又おこたる年々も侍りき。

○第廿一代　安康天皇

三年崩御年五十六
葬大和國菅原伏見西陵

次の御門安康天皇と申しき。允恭天皇の第二の御子、御母皇后忍坂大中姫なり。甲午の年十月に御兄の東宮をうしなひ奉りて、十二月十四日に位には卽き給ひしなり。御年五十六。世をしり給ふ事三年なり。明くる年の二月に、御弟の雄略天皇の大泊瀬のみこと申しておはせし、御妻になし奉らんとて、御伯父の大草香の皇子と申しし人の御妹

あながちに―强ひて
つくろはさせ―療治せさせ
ひめご―娘子

へる手もひえとほりて、既に死にいり給へりしを、皇子見驚き給ひて、抱き助けて、位を繼ぐ事はきはまりなき大事なれば、今までうけとらぬことにて侍れども、かくの給ひあひたる事なれば、あながちに遁れ侍るべき事にあらず、とおほせられしかば、一天下の人よろこびをなしき。かくて位には卽き給ひしなり。三年と申しし正月に、新羅へ醫師をめしに遣したりしかば、八月に參りたりき。御門の御病をつくろはさせ給ひしに、その驗ありて、御病癒えさせおはしましにしかば、さま〴〵の祿どもなど賜はせて、かへし遣してき。七年と申しし十二月に御あそびありしに、御門琴をひき給ふを、后聞き賞で奉りて、舞ひてうち居給ひし折、あはれひめごを參らせばや、と申し給ひしを、御門、ひめごとは誰が事にか、と問ひ申させ給ひしを、御琴のめでたさに、われにもあらず申し給へりけることにや侍りけん。さりながらも申しいだし給ひぬる事なれば、隱し給ふべきならで、わが妹に侍るおと姬となん申す、色かたちなん世に又雙ぶたぐひ侍らず。衣のうへひかりとほりかゞやき侍り。世の人は、されば衣通姬とぞ申す。御門これを聞し召して、それ奉り給へ、と后を責め申させ給ひしかども、ともかくも御返事も申し給はざりしかば、御使をつかはして、七度まで召ししかども、參り給はざりしかば、又御使を

しるしの箱—神璽

御うがひ—口をそゝぐ湯水

○第二十代　允恭天皇

四十二年崩御年八十
葬河内國惠我長野北原陵

次の御門允恭天皇と申しき。仁徳天皇第四の御子、御母皇后磐之媛なり。壬子の年十二月に位に即き給ふ。御年三十九。世をしり給ふ事四十二年なり。兄の御門うせ給ひてのち、大臣をはじめて、位には此君こそ即き給ふべけれとて、しるしの箱を奉りしかども、うけとり給はずして、我身久しく病にしづめり。おほやけの位は、愚なる身にて保つべき事ならず、と宣ひしを、大臣以下猶すゝめ奉りて、帝王の御位の空しくて久しかるべきにあらず、と度々申ししかども、猶聞しめさずして、正月に兄御門うせおはしまして、明くる年の十二月まで、御門おはしまさでありしを、御乳母にておはしましし人の、水をとりて御うがひを奉り給ひしついでに、皇子はなど位に即きたまはで、年月をば過させ給ふにか侍る。大臣より始めて世の中の歎に侍るめり。人々の申すに隨ひて位に即かせ給へかし、と申し給ふを、猶きこしめさで、うち後むき給ひて、物ものたまはざりしかば、この御うがひをもちて、さりとも、とかく仰せらるゝ事もや、と待ち居侍りし程に、十二月の事にていと寒かりしに、久しくなりにしかば、御うがひも凍りて、持ち給

いとあへなく—甚だはりあひなく

むをりに、太刀を抜きて首をきり給ひてき。さて次の年位に即き給ひて後、その黒媛をば后にたて奉らせ給ひしなり。五年九月に、御門淡路の國におはして狩し給ひしに、空に風の音に似て聲するものありしほどに、俄に人走り参りて、后うせ給ひぬるよし申ししこそ、いとあへなく侍りしか。

○第十九代　反正天皇　六年崩御年六十　葬二和泉國百舌鳥耳原北陵一

次の御門反正天皇と申しき。仁徳天皇第三の御子、履中天皇の御弟なり。御母皇后磐之媛なり。履中天皇の御世、二年辛丑正月に東宮に立ちたまふ。御年五十。履中天皇の御子おはせしかども、この御門を東宮には立て奉らせ給ひしなり。丙午の年正月二日位に即き給ふ。御年五十五。世をしらせ給ふ事六年。御門御かたちめでたくおはしき。御たけ九尺二寸五分、御齒の長さ一寸二分、上下とゝのほりて玉を貫きたるやうにおはしき。生れ給ひしとき、やがて御齒ひとつ骨の如くにておひ給へりき。さてみづはの皇子とぞ申し侍りし。この御世には、雨風も時にしたがひ、世安らかに民ゆたかなりき。位に即き給ひて、次の年十月に、都河内國柴垣の宮にうつりにき。

近くつかひ給ひし人―古事記に隼人曾婆訶理書紀に近習隼人刺領巾とあり

うるはしき心―正しきよき心

の東宮を馬にかきのせ奉りて、逃げ侍りにき。皇子この事を知らずして、宮に火をつけて焼きてき。これは津の國の難波の宮なり。東宮、大和の國におはして醉さめ給ひて、これはいづれの所ぞ、と問ひ給ひしかば、大臣たち、事のありつるさまを申し給ひき。さて石上の宮におはしつきたりしに、またの御弟に、瑞齒の皇子と申しし人急ぎまゐり給へりしを、疑ひ給ひてあひ給はざりしかば、この皇子、われにおきては更におなじ心に侍らず、と申し給ひしかば、然らばかの住吉仲皇子を殺して後に來るべし、と宣はせしかば、このみづはの皇子、卽ち難波にかへりて、住吉仲皇子の近くつかひ給ひし人をかたらひて、吾がいはん事に從ひたらば、われ位をたもたん時、汝を大臣になさん、と宣ひしかば、いかにも仰に從ふべしと申ししかば、多く物どもを賜ひて、然ば汝が主を殺して、われに得さすべし、との給ふに、そのことに從ひて、主の皇子の厠におはするを、鉾をもちて刺し殺してき。みづはの皇子、その人を相具してまゐりて、此の由を申し給ふに、東宮の宣はく、この人わが爲にくらうあれども、己が主を殺しつれば、うるはしき心にあらず。されども大臣の位にのぼせ給ひて、今日大臣とさかもりせん、とのたまはせて、顔隱るゝ程の大なる盃にて、東宮まづ飲み給ふ。次にみづはの皇子飲み給ふ。次に大臣の

たひらかならん事—無事ならん事

○第十八代　履中天皇　六年崩御年六十七 葬二和泉國百舌鳥原南陵一

次の御門履中天皇と申しき。仁徳天皇第一の御子、御母皇后磐之媛なり。仁徳天皇三十一年癸卯に東宮に立ち給ふ。御年五歳。庚子の年二月一日位に即き給ふ。御年六十二。世をたもち給ふ事六年。父御門うせおはしまして後、いまだ位に即き給はざりし程に、葦田宿禰のむすめ、黒媛といひし人を后とせんとおぼして、御弟の住吉仲皇子を遣して、その日おはすべきよし仰せられしに、この皇子我名をかくして、東宮のおはするさまにもてなして、この姫君に親しきさまになんなりにける。さてもちたりつる鈴を忘れて歸りにけり。その次の夜、東宮姫君のもとへおはしたるに、居給へる傍に鈴のありければ、あやしくおぼして、姫君に問ひ奉り給ひければ、これこそはよべ持ておはしたりし鈴よ、と宣ふに、東宮、われと名のりて皇子の近づき給ひにけるにこそ、とおぼして、歸り給ひにけり。皇子、この事を東宮聞き給ひぬらん、我身たひらかならん事難かるべし、とおもほして、東宮を傾け奉らんと謀て、兵を起して宮を圍み給ひしを、大臣たち、東宮にかゝる事侍り、と告げ奉りしに、いふかひなくゑひ給ひて、驚き給はざりしかば、大臣たち、こ

御弟─菟道稚郎子

たかき屋に─實は延喜六年の日本紀竟宴の歌を誤りて御歌と傳へたるなるべし

六代の御代─神功皇后を御一代と數へたる也

月己卯の日位に卽き給ふ。御年二十四。世をしり給ふ事八十七年なり。この御門の御弟を東宮と申ししかば、すべからく位を繼ぎ給ふべかりしに、兄にゆづり申し給ひしかども、互につぎ給はずして、空しく三年を過ぐさせ給ひしかば、東宮みづから命をうしなひ給ひにき。御門この事を聞召して、かの東宮へ急ぎおはしまして、泣きかなしみ給ひしかども、かひなくて、その後位に卽かせ給ひしなり。四年と申しし二月に、高き樓に登りて四方の民のすみかを見給ひて、烟絶えさびしかりしかば、今より後三年、民をやすめ、九重の内の修理を留めさせ給ひき。さて七年と申しし四月に、又樓にのぼりて御覽ぜしに、民の住處にぎはひて御覽ぜられければ、御門よませたまひし。

　たかき屋にのぼりて見ればけぶりたつ民のかまどはにぎはひにけり

四十三年と申しし九月にぞ、鷹の鳥を捕といふことは知りそめて、狩はじめ給ひし。五十五年と申ししに、武内の大臣うせ給ひにき。年二百八十にぞなりたまひし。六代の御門の御後見をして、大臣の位にて二百四十四年ぞおはせし。六十二年と申ししに、氷すふることは出できはじめて、今にいたるまで供御にそなふるなり。この御門御かたち世にすぐれて、御心ばへめでたくおはしましき。

武内の大臣の弟―異母弟甘美内宿禰

かまへて―用心して

り。八年と申す四月に、武内の大臣を筑紫へつかはして、事をさだめまつりごたせ奉らせたまひしに、この武内の大臣の弟にておはせし人の、御門に申し給はく、武内の大臣常に王位を心にかけ侍り。筑紫にて、新羅、高麗、百濟、この三つの國を語ひて朝廷を傾け奉らんとす、と無き事を讒し申ししかば、御門人をつかはして、この武内を討たしめ給ふに、武内なげきて、我君のため二心なし。今罪なくして身を失ひてんとす。心うき事なり、とのたまふ。その時に壹岐直祖眞根子といふものありき。かたち武内の大臣に違はず相似たりき。この人大臣に申していはく、かまへて遁れて都へ參りて、罪なきよしを申したまへ、我大臣にかはり奉らんとて、進みいでてみづから死ぬ。武内密に都にかへりて、事のありさまを申し給ふに、大臣達二人を召して、重ねて問はせ給ふに、武内罪おはせぬよしおのづからあらはれにき。その後御門、この武内の大臣を寵じ給ひしなり。

○第十七代　仁德天皇　八十七年崩御年百十 葬二和泉國百舌鳥原中陵一

次の御門仁德天皇と申しき。應神天皇第四の御子、御母皇后仲姫なり。癸酉の年正

いみじき友—極めて親しき友

と又戰ひ給ひしも、うしなはれ給ひにき。さてもあさましかりし事は、この戰の間、晝も夜の如くに暗くて日數の過ぎしを、皇后大に怪み給ひて、年老いたるものどもに問ひ給ひしかば、二人を一所に葬りたる故なり、と申ししかば、尋ねさせ給ふに、小竹祝と天野祝といふもの、いみじき友にて年を經るに、この小竹祝うせにけるを、天野祝なき悲しびて、我生きて何にかはせんとて、傍に臥して同じくなくなりにけるを、ひとつ塚にこめてげり、と申ししかば、その塚を毀ちて見せさせ給ふに、誠に申すが如くなりしかば、ほかほかに埋ませさせ給ひて後、卽日の光顯れにしなり。十月に臣下たち、皇后を皇太后にあげたてまつる。この程とぞおぼえ侍る、祇園精舍を天魔燒き侍りにけりと聞き侍りし。

○第十六代　應神天皇　四十一年崩御年百十一 葬河内國惠我藻陵

次の御門應神天皇と申しき。今の八幡の宮はこの御事なり。仲哀天皇第四の御子、御母神功皇后におはします。神功皇后の御世、三年癸未に東宮に立ちたまふ。御年四歲なり。庚寅の年正月丁亥の日位に卽きたまふ。御年七十一。世をしろしめす事四十一年な

たちあふ—抗敵する
指圖—地圖
まゝ子の御子たち—麛坂王、忍熊王
軍の試に—軍の運だめしに

見て思はく、これより東に神國あり、日本といふなり。その國のつはものなるべし。吾たちあふべからず、と思ひて、かの王すゝみて、皇后の御船の前にまゐりて、今よりながく隨ひ奉りて、年ごとに貢物を奉るべし、と申しき。皇后その國へ入りたまひて、さま〴〵の寶のくらを封じ、國の指圖文書をとりたまひき。王、さま〴〵の寶を、船八十に積みてたてまつる。高麗百濟といふ二の國、この事を聞きておぢおそれて、進みてしたがひ奉りぬ。かくて筑紫にかへりたまひて、十二月に皇子をうみ奉り給ひき。これぞ八幡の宮にはおはします。神の申し給ひしによりて、これを胎中天皇と申す。あくる年皇后京へかへり給ひしを、御まゝ子の御子たち思ひ給ふやう、父みかどうせ給ひにけり。又皇后既に皇子をうみ奉り給ひてけり。これを位に卽けんとこそはかり給ふらめ。われら兄にて、いかでか弟に隨ふべき、とて、播磨の明石にて、皇后を待ち奉りて傾け奉らんとはかり給ひしを、皇后聞き給ひて、みづから皇子を抱き奉りたまひて、武内の大臣に仰せられて、南海の御船をいだし給ひしかば、おのづから紀伊國に至り給ひにき。其後御子たち謀反を起し給ひて、皇后を傾け奉らんとし給ひし程に、御子達は、軍の試に狩し給へりけるに、赤き猪出來りて、兄の御子を食ひ殺してき。その後次の御子、武內の大臣

なんたち―汝たち
乾の方―西北方
八幡―應神天皇
たゞならず云々―御姙娠の事

のめぐみをかうぶり、下にはなんたちの助を頼む、とて松浦といふ河におはして、祈りてのたまはく、もし西の國を得べきならば、釣に必ず魚をえん、とて釣し給ひしに、年魚を釣りあげ給ひにき。その後諸國に詔して、船をめし兵を集めて、海をわたり給はんとて、まづ人を出して國の有無を見せさせ給ふに、見えぬよしを申す。又人を遣して見せしめ給ふに、日數多く積りてかへり參りて、乾の方に山あり、雲かゝりてかすかに見え侍る、と申ししかば、皇后やがてその國へむかひ給はんとて、石をとりて御腰にさしはさみ給ひて、事終りて歸らん日、この國にして生み奉らん、と祈り誓ひ給ひにき。この程八幡を孕み奉らせおはしましたりしなり。仲哀天皇うせさせおはします事は二月なり。この事は十月なれば、たゞならずおはしますとも、御門は知らせ給はぬ程にもや侍りけん。さて十月辛丑の日ぞ新羅へ渡り給へりしに、海の中のさま〴〵の大なる魚ども、船どもの左右にそひて、大なる風ふきて速にいたる。船に隨ひて波あらく立ちて、新羅國の内へたゞいりに入りくる時に、かの國の王おぢおそりて、臣下をあつめて、昔よりいまだかかる事なし。海の水既に國の内に滿ちなんとす。運の盡きをはりて、國の海になりなんとするか、と歎き悲しむ程に、軍の船海にみちて鼓のこゑ山をうごかす。新羅の王これを

女帝は云々
―本書は扶桑略記皇年代略記等に據りて御一代に數へたれど普通には御歷代に數へ奉らず

みづら―髻、髮を左右に分ち額ぎはにてわがねて結ふ男子の姿

○第十五代　神功皇后

六十九年崩　御年百　葬二大和國狹城郡楯列池上陵一

次の御門神功皇后と申しき。開化天皇の五世の孫なり。仲哀天皇の后にておはせしなり。御母は葛木高額媛、辛巳の年十月二日位に卽き給ひき。女帝はこの御時始りしなり。世をたもち給ふ事六十九年。御心ばへめでたく、御かたち世に勝れ給へりき。仲哀天皇の御時八年と申ししに、筑紫にて、神この皇后につき給ひてのたまはく、種々のたから多かる國あり、新羅といふ。行きむかひ給はば、おのづから隨ひなん、とのたまひき。しかるに其事なくて止みにき。皇后今のたまはく、御門神のをしへに隨ひ給はで、世をたもち給ふこと久しからずなりぬ、いと悲しきことなり。いづれの神の祟をなし給へるぞ、と七日祈り給ひしかば、神託宣して宣はく、伊勢の國五十鈴宮に侍る神なり、とあらはれ給ひしによりて、皇后浦に出でさせ給ひて、御髮を海にうち入れさせ給ひて、この事かなふべきならば、我髮別れて二つになれ、とのたまひしに、やがて二つになりにき。卽ちみづらに結ひ給ひて、臣下にのたまはく、軍をおこす事は國の大事なり。今この事を思ひたつ。偏になんたちに任す。われ女の身にして、男の姿をかりて軍をおこす。上には神

大臣―後世の大臣とは異にて臣姓の人を統べて朝政に與るよりの名

筑紫にて―熊襲御征伐の陣中にて

次の御門成務天皇と申しき。景行天皇の第四の御子、御母皇后八坂入姫なり。景行天皇の御世、五十一年辛酉八月壬子の日東宮に立ち給ふ。辛未の年正月五日戊子位に卽き給ふ。御年四十九。世をたもち給ふ事六十一年なり。御かたちことにすぐれ、御たけ一丈ぞおはしましし。武内、この御時三年と申ししにぞ、大臣になり給へりし。大臣と申す事は、これよりぞ始れる。もとは棟梁の臣と申しき。これも只大臣同じことなり。官の名をかへ給へりしばかりなり。この御門御子おはせざりしぞ口をしくは侍りし。さて御甥のみこぞ位には卽き給へりし。

○第十四代　仲哀天皇

九年崩御年五十二
葬二河内國惠我長野西陵一

次の御門仲哀天皇と申しき。景行天皇の御子に、日本武尊と申しし第二の御子におはします。御母は入姫、垂仁天皇の御女なり。成務天皇三十八年戊申三月に東宮にたち給ふ。御年二十。壬申の年正月十一日に位に卽き給ふ。御年四十四。世をたもち給ふ事九年。筑紫にてうせ給ひにしかば、武内、御骨をばとりて、京へ歸りたまへりしなり。

二人の御子―五十瓊敷命と大足彦尊

代々の御門―景行成務仲哀應神仁德の五帝

八幡の御傍に―男山八幡宮の境內に高良神社として祭らる

皇の御世、三十年辛酉正月甲子の日東宮に立ち給ふ。御年二十一。父帝、二人の御子に申し給ふやう、各心に何をか得んと思ふ、と宣ふに、兄のみこ、われは弓矢なんほしく侍る、と申し給ふ。弟のみこ、われは皇位をなん得んと思ふ、と申し給ふ。この言にしたがひて、兄の御子には弓矢をたてまつり、弟の御子をば東宮に立て奉り給へりしなり。辛未の年七月十一日位に卽き給ふ。御年八十四。世をたもち給ふ事六十年なり。五十一年と申ししに、內宴行ひ給ひしに、成務天皇の未みこと申ししに、武內とその座に參り給はざりしかば、御門其故を尋ねさせ給ひしに、申したまはく、人々皆御あそびの間心をゆるぶべき折なり。その時若隙にうかゞふ心あるものも侍らんにと思ひて、門をかためてなん侍る、と申し給ひしかば、御門いよ〳〵雙なく寵じ給ひき。武內は孝元天皇の御孫なり。この後代々の御門の御後見として、世に久しくおはしき。今に八幡の御傍に近くいはゝれ給へるは、この人にいます。五十八年二月に、近江の穴穗宮に遷りにき。熊野の新宮はこの御時にぞはじまり給へりし。

○第十三代　成務天皇

六十一年崩御年百九
葬二大和國狹城楯列池後陵一

御弟のみこ—倭彦命
おほやけ—朝廷
後漢の明帝—皇紀七一八—七三五

まつる人々を、生きながら御墓にこめられにけり。この人々久しく死なずして、朝夕に泣き悲しぶを、御門聞しめして仰せらるゝやうは、生きたる人をもちて死ぬるに隨へんことは、古より傳れることとなれども、われこの事を見聞くに、悲しきことかぎりなし。今よりはこの事永く止むべし、とのたまひて、その後は土師の氏の人、土にて人がた、けだもののかたなどを作りてなん、人のかはりにこめ侍りし。おほやけこれを喜びて、土師といふ姓を賜はせしなり。この比大江と申す姓は、その土師の氏の末なるべし。八十二年、この程とぞ承りし、祇園精舍は荒れはてて、人もなくて九十年ばかり過ぎにけるを、忉利天王の第二の御子を下して人王となして、又造りみがかると承りき。佛などのおはしまししにも勝りて、めでたくぞ造られにける。九十三年と申ししにぞ、後漢の明帝の御夢に、金の人きたると御覽じて、その明くる年、天竺より始めて佛法もろこしへ傳りにし。

○第十二代　景行天皇　六十年崩御年百四十三 葬二大和國山邊道上陵一

次の御門景行天皇と申しき。垂仁天皇の第三の御子。御母皇后日葉酢媛命なり。垂仁天

小ぐちなは　小蛇
ゆゝしくあさましかりし事―恐しく驚くべき事
相撲は云々―當麻蹶速と野見宿禰と角力せし事
丹波國にすみたまひしみこ―丹波道主王
時めかせ給ひしに―御寵愛により て榮え給ひしに

が頸をまとふと見つ。又大なる雨后の方より降り來て、わが顏に濺ぐと見つ。いかなる事にかと仰せられしに、后え隱し果て給はで、ふるひおぢ恐れ給ひて、涙にむせびて、ありのまゝの事を申し給ふを、御門聞しめして、この事后の御咎にあらずと仰せられながら、兄の王又后をも失はせ給ひにき。ゆゝしくあさましかりし事に侍りき。七年と申ししにぞ、相撲は始まり侍りし。十五年と申ししに、丹波國にすみ給ひしみこの御女五人おはしき。御門これを皆參らすべきよし仰事ありしかば、やがて奉り給へりしに、おのおの時めかせ給ひしに、中の妹のおはせし、かたちいと醜くなんおはしければ、もとの國へかへし遣しし程に、桂川わたりて、心うしとや思しけん、車より墜ちてやがてはかなくなり給ひき。あはれに侍りし事なり。さてそれより彼處をおちくにと申ししを、この比はおとくにとぞ人は申すなる。その年の八月、星の、雨の如くに降りしをこそ見侍りしか。あさましかりし事に侍り。二十五年と申ししに、太神宮ははじめて伊勢の國におはしましゝなり。これより先に天降りおはしましたりしかども、所々におはしまして、伊勢の宮に遷おはしますことは、天てる御神の御をしへにて、この年ありしなり。二十八年と申ししに、御門の御弟の御子うせ給ひにき。その程の世のならひにて、近く仕う

大社熊野神社、伊弉諾伊弉册二神を祭る

后の兄―狹穂彦

御殿ごもり―御寝になること

○第十一代　垂仁天皇

九十九年崩 御年五十一
葬二大和國添上郡伏見東陵一

次の御門垂仁天皇と申しき。崇神天皇第二の御子。御母皇太后御間城姫なり。崇神天皇四十八年辛未四月に御夢の告ありて、東宮に立て奉り給ひき。御年二十二。壬辰の年正月三日位に卽き給ふ。御年四十三。世をしらせ給ふ事九十九年なり。四年と申しに、后の兄よきひまを窺ひて、后に申し給ふやう、兄と夫と誰をか心ざし深く思ひ給ふと申し給ふに、后何とも思さで、兄をこそは思ひまし奉れと宣ふを聞きて、この御兄ののたまはく、然らば夫は若く色衰へず盛なる程なり。世の中にかたちよく我も〳〵と思ふ人こそ多かることにて侍れ。われ位に卽きなば、この世におはせんほどは、世の中を御心に任せ奉るべし。御門をうしなひ奉りたまへとて、劍をとりて后に奉り給ひつ。后あさましく恐ろしく思せど、かく言ひかけられなん事遁るべき方もなくて、常に御衣のうちに劍をかくして、ひまを覘ひ給ふに、明くる年の十月に、御門、后の御膝を枕にして、晝御殿ごもりたりしに、后この事只今にこそと思ししに、おのづから涙下りて御門の御顏にかゝりしかば、御門は驚き給ひてのたまふやう、朕今夢に、錦の色の小ぐちなは、わ

齋宮云々―皇女豐鍬入姬命をして三種神器の鏡劍を倭の笠縫邑に祭らしめ給ひしをいふ

熊野の本宮―今の官幣

に盗やき侍りにけり。何處もく心うきは人の心なり。その後十三年ありて、六師迦王又造り給へると承りしは、この御時位に卽かせ給ひて、十年など申しし程とぞ覺え侍る。

○第十代　崇神天皇　六十八年崩御年百十九　葬二大和國山邊道上陵一

次の御門崇神天皇と申しき。開化天皇第二の御子。御母皇太后宮伊香色謎命なり。甲申の年正月十三日位に卽き給ふ。御年五十二。世をしり給ふ事六十八年なり。六年と申ししに、齋宮は始めて立ち給へりしなり。又國々の貢物かちよりもてまゐる事、民も苦み日數も經る、あしきことなりとて、諸國に船を造らせたまひき。六十二年と申ししころほひ、天竺に惡王おはして、祇園精舍を毀ちすて、人を殺す所にせんと定め給ひしかば、四天王沙竭羅龍王怒をなして、毀ちける人を、大なる石をもちて押し殺し給ひけるとぞうけたまはり侍りき。六十五年と申ししに、熊野の本宮は出でおはしまししなり。凡そこの御門は、御心めでたく、事におきて暗からずおはしましき。

ゆゝしき―一通りならぬ

龍猛菩薩―眞言宗七祖中の第三なり

り給へりける。其後五百年を經て燒けたるを、今旃育迦王は造り給ふとぞ聞えし。

○第八代　孝元天皇　五十七年崩御年百十七　葬二大和國輕劍池島上陵一

次の御門孝元天皇と申しき。孝靈天皇の御子。御母皇后宮細媛なり。孝靈天皇の御世、三十六年丙午正月東宮に立ちたまふ。御年十九。丁亥の年正月十四日に位に卽き給ふ。御年六十。世をしらせ給ふ事五十七年なり。三十九年乙丑六月に、ゆゝしき大雪の降りたりしこそあさましく侍りしか。

○第九代　開化天皇　六十年崩御年百十五　葬二大和國春日率川坂本陵一

次の御門開化天皇と申しき。孝元天皇の第二の御子。御母皇太后宮鬱色謎命なり。孝元天皇の御世、二十二年丁未正月に東宮に立ちたまふ。御年十六。癸未の年十一月十二日に位に卽き給ふ。御年五十一。世をしり給ふ事六十年。この御代の程とぞ覺え侍る、南天竺に、龍猛菩薩と申す僧いますなりと承りし。眞言を始めて弘め給ひし事はこの菩薩なり。又祇園精舍は再度まで燒けしを、旃育迦王の造り給へりけるを、百年と申しし

祇園精舍―祇陀園林須達精舍の略、精舍は寺院

天皇二十二年壬子三月戊午の日東宮に立ち給ふ。御年十八。丙寅の年正月九日位に卽き給ふ。御年三十二。世をたもたせ給ふ事八十三年なり。

○第六代　孝安天皇　百二年崩御年百三十七 葬㆓大和國玉手岳上陵㆒

次の御門孝安天皇と申しき。孝昭天皇の第二の皇子。御母世襲足姫なり。孝昭天皇の御世、六十八年正月に東宮に立ち給ひき。御年二十。己丑の年正月十三日辛卯位に卽き給ふ。御年三十六。世をたもたせ給ふ事百二年なり。

○第七代　孝靈天皇　七十六年崩御年百三十四 葬㆓大和國片岳馬坂陵㆒

次の御門孝靈天皇と申しき。孝安天皇第一の御子。御母皇太后姉押姫なり。孝安天皇の御世、七十六年庚辰正月に東宮に立ち給ふ。御年二十六。父御門うせ給ひて、次の年辛未正月二日ぞ位に卽き給ひし。御年五十三。位をたもち給ふ事七十六年なり。この御代とぞ覺え侍る、天竺の祇園精舍の燒けて後、旃育迦王の造り給ふと承り侍りしは。かの須達長者造りて佛に奉りて二百年と申ししに燒けにけるを、祇陀太子またもとのやうに造

孔子—魯襄公二十二年（皇紀一一〇）に生れ哀公十六年（一八二）卒す

○第三代　安寧天皇

三十八年十二月崩御年五十七
明年八月葬大和國御陰井上陵

次の御門安寧天皇と申しき。綏靖天皇の第二の御子。御母皇太后宮五十鈴依媛なり。綏靖天皇の御世、二十五年正月戊子の日東宮に立ち給ふ。御年十一。父御門うせ給ひて、明くる年十月二十一日ぞ位に卽き給ひし。御年二十。世をたもち給ふ事三十八年なり。

○第四代　懿德天皇

三十四年九月八日崩御年七十七
葬大和國纖砂溪上陵

次の御門懿德天皇と申しき。安寧天皇の第三の皇子。御母皇后渟名底中媛なり。安寧天皇の御世、十一年正月壬戌の日、東宮に立ち給ふ。御年十六。辛卯の年二月四日壬子位に卽かせたまふ。世をしらせ給ふ事三十四年なり。三十二年と申ししにぞ、孔子はうせ給ひにけると承りし。

○第五代　孝昭天皇

八十三年崩御年百十四
葬大和國掖上博多山上陵

次の御門孝昭天皇と申しき。懿德天皇第一の御子。御母皇太后宮天豐津媛なり。懿德

諒闇―天皇の喪にこもり給ふ間

兄の皇子―庶兄手研耳命

はて―忌明

今ひとりの兄のみこ―神八井耳命

○第二代　綏靖天皇

三十三年五月崩御年八十四十月葬二大和國桃花鳥田丘陵一

次の御門綏靖天皇と申しき。神武天皇の第三の御子なり。御母事代主命の御女鞴五十鈴姫なり。神武天皇の御世、四十二年正月甲寅の日東宮に立ちたまふ。御年十九。庚辰の年正月八日己卯日位に卽き給ふ。御年五十二。世をたもち給ふ事三十三年。父御門うせ給ひて諒闇のほど、世の政事を御兄の皇子に申しつけ給へりしを、この御兄のみこの、弟たちを亡ひ奉らんと計り給へりしを、この弟のみこ心え給ひて、御はてなど過ぎて、御門、今ひとりの御兄のみこと御心を合せて、かの兄のみこを射させ奉らせ給ふに、この兄のみこ、手をわなゝかして、え射給はずなりぬ。御門その弓をとりて射殺し給ひつ。このえ射ずなりぬる兄のみこの宣ふやう、我兄なりといへども、心弱くしてその身堪へず。汝はあしき心持ちたる兄を既にうしなへり。速に位に卽き給ふべしと申し給ひしに、互に位をゆづりて、誰も卽き給はで四年過ごし給へりしかども、つひにこの御門、兄の御勸にて位に卽き給へりしなり。

○第一代　神武天皇

七十六年三月甲辰日崩御年百卅七
九月丙寅日葬㆓大和國畝火山東北陵㆒

神武天皇と申しし御門は、鸕鷀葺不合尊の第四の御子なり。御母は海神の女玉依姫なり。又實の御母は海に入り給ひて、玉依姫は養ひ奉り給へりけるとも申しき。その世に侍りしかども、こまかに知り侍らざりき。この御門、父の御門の御世庚午の年生れたまふ。甲申の年東宮に立ちたまふ。御年十五。辛酉の年正月一日位に卽き給ふ。御年五十二。さて世をたもち給ふ事七十六年。神代より傳りて劔三あり、一は石上布留の社にます。一は熱田の社にます。一は内裏にます。また鏡三あり、一は太神宮におはします。一は日前におはします。一は内裏におはします、内侍所にこそおはしますめれ。この日本を秋津島とつけられし事は、この御時なり。事遙にしてこまかに申しがたし。位に卽かせおはしましし年ぞ、釋迦佛涅槃にいり給ひて後二百九十年に當り侍りし。されば世あがりたりと雖も、佛の在世にだにも當らざりければ、やう〳〵世の末にてこそは侍るなれ。

日前―日前神宮、紀伊國名草郡宮村に在り
内侍所―今の賢所

迦以前に出でたる七箇の佛
彌勒―彌勒菩薩
萬壽―後一條天皇の年號
世繼と申し云々―大鏡の假託の人物
かたおもむきに―一方に偏りて
嘉祥三年―仁明天皇崩御の年

るなれ。第十五の減劫に、九百九十四佛いで給ふべし。かくの如く世に隨ひて、人の命も果報もなりまかるなり。大方はさることにて、この日本國にとりても、又なか〳〵世あがりては事定らず、かへりてこの比にあひ似たる事も侍りき。佛法わたり因果辨へなどしてより、やう〳〵靜まりまかりしなごりの、また末になりて、佛法もうせ世のありさまも惡くなりまかるにこそ。有るべき理なれば、善惡を定むべからず。偏にあらぬ世になるにやなど、あざむき思ふべからず。萬壽のころほひ、世繼と申しさかしき翁侍りき。文德天皇より後つかたの事は、暗からず申し置たるよし承る。その先はいと聞耳遠ければとて、申さざりけれども、世の中をきはめ知らぬは、かたおもむきに今の世をそしる心の出でくるも、かつは罪にも侍らん。目の前の事を昔に似ずとは、世をしらぬ人の申す事なるべし。かの嘉祥三年より先の事をおろ〳〵申すべし。まづ神の世七代、その後伊勢太神宮の御世より、鸕鷀草葺不合尊まで五代、合せて十二代の事は、ことばに顯し申さんにつけて、はゞかり多く侍るべし。神武天皇より申し侍るべきなり。その帝位に卽き給ひし辛酉の年より、嘉祥三年庚午の年まで、千五百二十二年にやなりぬらん。その程御門五十四代ぞおはしましけん。まづ神武天皇よりとて、言ひつゞけ侍りし。

おちつかた—降り滅ずる頃
七佛—過去七佛とて釋

二十の中劫のほどなり。初の十九劫には地獄よりはじめて、有情皆失せぬ。この失すと申すは、何處ともなく失せぬるにはあらず、然るべくして天上へ生るゝなり。但地獄の業なほつきぬ衆生をば、異三千界の地獄へしばし遷しやるなり。かくて第二十の劫に火いできて、しも風輪とて、風吹きはりたる所の上より梵天まで、山川も何もかも無くやけ失せぬ。かくやぶれぬれば壞劫とは申すなり。次に空劫と申して、又二十の中劫のほどを、世の中に何もなくて大空の如くにて過ぐるなり、空しければ空劫とは申すなり。この成住壞空の四劫を經るほどは、八十の中劫を過しつるぞかし。これを一の大劫とは申すなり。かくて、終りては始り、始りては終りして、何時を限といふことなし。かくの如くして、水火風災などあるべし。こと長ければ申さず。この住劫と申しつるに、佛は世にいで給ふなり。その中に人の命まさりざまなるをりは、樂み奢れる心のみありて、教にかなふまじければ出で給はず。命やう〳〵おちつかたに、物の哀をもしり、教事にもかなひぬべきほどを見計ひて出で給ふなり。この住劫にとりては、はじめ八劫には佛出で給はず、第九の減劫に七佛のいで給ひしなり。釋迦のいで給ひしは、人の命百歳の時なれば、第九劫のむげに末になりたるにこそ。第十の減劫のはじめに彌勒はいで給はんず

劫―梵語にて時の極めて長き間をいふ稱
つや／＼と―絶えて少しも
有情―動物

十歳より、また百年に一年の命をそへて八萬歳になりぬ。これをも一の小劫と申す。この二の小劫を合せて、一の中劫とは申すなり。さて世の始まる時をば成劫と申して、この中劫と申しつる程を二十過すなり。その始の一劫の程は、つや／＼と世の中なくて空の如くにてありしに、山河など出來て、かく世間の出でくるなり。今十九劫には極光淨といふ天より、一人の天人生れて、大梵王となる。その後次第に、やう／＼下ざまに生れて、次に人むまれ、餓鬼畜生いできて、はてに地獄は出來るなり。かくて成劫二十劫はきはまりぬ。世間も有情も成り定るによりて、成劫とは申すなり。次に住劫と申して、又二十の中劫のほどを過すなり。但はじめの一劫は、命次第に劣りのみして增ることなし。されば住劫のはじめの人の命は、八萬歳にはあらで、無量歳にて、それより十歳までなるなり。されども程の經ることは、一の中劫の程なり。さて第二の劫より十九の劫まで、先に申しつるやうに、八萬歳より十歳になり、十歳より八萬歳になり、劫ごとにかく侍るなり。さて第二十の劫は、十歳より八萬歳まで、增ることのみありて劣る事なし。これも過ぐる程は一の中劫の間なり。これは天より地獄まで、成劫に出來とゝのほりて、有情のあるほどなり。さて住劫とは申すなり。次に壞劫と申して、この程また

に至るまで見聞きて過ぎ侍りき。よしなき事どもに侍れども、御經を承りぬる悦に、偏に目の前のこと許をのみそしる心おはして、古はかくしも無かりけんなど思す、一すぢなる心のおはする方をも申し聞かせば、一分の執心をも失ひ奉りなば、佛道にすゝみ給ふ方ともなどかならざらん。神の世より見侍りし事、おろ〳〵申し侍らん、といへば、いみじくうれしく侍るべき事なり。生年二十などまでは、男のまねかたにて世に立ちまじらひ侍りしかども、はか〴〵しく昔の事考へ見ることもなかりき。只遊びたはぶれにて、夜をあかし日を暮してのみ過ぎ侍りしに、近比の事などを人のかたり傳へ申すを聞くに、この世の中はいかにかくはなりまかるやらんと、事に觸れて哀にのみ覺えて、かゝる道に入りにたれば、一かたになべての世をそしる心もあり、罪もさだめて侍らん。いで宣はせよ、承らん、といふに、仙人のいふ、さてはこの世のありさまのみならず、内典の方なども、うとくこそはおはすらめ。端々を申さん。生死は車の輪の如くにして、始りては終り、終りては始り、いつをはじめ、いつを終といふ事あるべからず。まづ劫のありさまを申して、世のなり行くさまもかくぞかしと知らせ奉らん。人の命の八萬歳ありしが、百年といふに一年の命のつゞまり〳〵して、十歳になるを一の小劫とは申すなり。さて

執心—物欲に離れがたき心
おろ〳〵—概略
内典—佛家にて佛經を内典、佛經以外の書を外典といふ

山の北に連ろ山

あさましげに—驚くばかりに

八の巻—法華經第八巻

あさく思す—淺はかに思ふ

三界—欲界色界無色界

しき事に逢ひ侍りたりしか。常よりも心すみて、哀に覺えて經を誦し奉りしに、谷の方より人の氣色のしてまうで來しかば、いと物恐しく覺えながら、經を誦し奉りしに、九月上の十日ごろの事にて、月の入方になり侍りし程に、ほのかにその形を見れば、翁の姿したる者の、あさましげに瘠せ神さびたるが、藤の皮をあみて衣とし、竹の杖をつきたるが來れるなりけり。やう〳〵傍へ來寄りていふやう、御經のいと尊く聞えつればまうできたる、といふ。物恐しく覺え侍りしかども、鬼魅などの姿にもあらざりしかば、仙人といふものにやと思ひて、かく申すほどに、八の巻の末つかたなりしかば、又一部を誦して聞かせ侍りしかば、この仙人よろこびて、修行し給ふ人多くおはせども、まことしく佛道を心にかけ給ふやらんと、見奉るが尊く覺え侍るなり。いかなる事にて心を起しそめ給へりしぞ、と問ひしかば、先に申しつるやうに申ししを、仙人聞きて、いと畏きことなり。大かたは、今の世をはかなく見疎み給ひて、古はかくしもあらざりけんと、あさく思すまじ。すべて三界は厭ふべき事なりとぞ思すべき。この目の前の世のあり樣は、をりに隨ひてともかくもなりまかるなり。古をほめ今を譏るべきにあらず。神代より、この葛城吉野山などを住處として、時々はかたちを隱して、都のありさまも、諸國

相人―人相を見る者

岡寺―龍蓋寺の別名

世をそむく人―出家

大峯―金峯山

葛城―金剛

がにこの理は思へども、まことしくは思ひたゝぬこそおろかに侍るめれ。この尼今まで世に侍るは希有の事なり。今日明日とも知らず、今年既に七十三になんなり侍る。三十三を過ぎがたく、相人なども申しあひたりしかば、岡寺は厄を轉じ給ふと承りて、詣で初しより、つゝしみの年ごとに、二月の初午の日參りつるしるしにこそ、今まで世にはべれば、今年つゝしむべき年にて參りつる、身ながらもをかしく、今はなにの命かは惜かるべきと思ひながら、年比參りならひて侍るにあはせて、やがてこの御寺へも參らんと思ひたちてなん。今この御寺には、偏に後世たすかり侍らん善知識にあはせ給へと申に參れるに、かくいさぎよく後世おぼす人にあひ奉りぬるは、しかるべきにこそ。世をそむく人も、おのづから物いひふれ給ふ人なきは、たよりなかるべき事なり。この尼も偏に子とも思ひ奉らん。又必ず善知識となり給へ、といへば、修行者、いとうれしきことなり。今日よりはさこそ賴み申し侍らめとて、又經など讀みて、さし果てし程に、後夜うち過ぎて、我も人も眠られしかば、修行しありき給ひけん物がたりし給へ。日をもさまし侍らん。大峯葛城などには、尊き事にも、又恐しき事にも遇侍るなるは、いかなる事か侍りし、と問へば、年比は別にさる事もなかりしに、一昨年の秋、葛城にてこそあさま

水鏡

巻之上

つゝしむべき年―俗にいふ厄年

龍蓋寺―大和國高市郡に在り、義淵僧正開基

つゝしむべき年にて、過ぎにし二月の初午の日、龍蓋寺へ詣で侍りて、やがてそれより泊瀬に、たそがれの程に參り著きたりしに、年のつもりにはいたく苦しう覺えて、師のもとに暫し休み侍りしほどに、うちまどろまれにけり。初夜の鐘の聲に驚かれて、御前に參りて通夜し侍りしに、世の中うち靜まるほどに、修行者の三十四五などにやなるらんと見えしが、經をいとたふとく讀むあり。傍近く居たれば、いかなる人の何處より參り給へるぞ。御經などの承らまほしからんには、たづね奉らん、といふに、この修行者いふやう、何處と定めたる所も侍らず。少し物の心つきて後、この十餘年世のなりまかるさまの、心とゞむべくも見え侍らねば、人まねに、もし後世や助かるとて、かやうにまどひありき侍るなり、といへば、誠にかしこく思しとりたる事にこそ侍れ。誰もさす

大鏡

卷之一

卷之二

卷之三

卷之中

卷之下

水鏡目次

卷之上

文典雅流麗隨所に文學的趣味の饒かなるを觀る。著者詳ならず。
今回の覆刻に際しては、いづれも流布の木版本を以て底本とし、史籍集覽本、國史大系本を參照し、更に、水鏡は、江見清風氏の水鏡詳解を、大鏡は、萩野由之氏及び久米幹文氏の校訂本、落合小中村兩氏の大鏡詳解を、增鏡は、關根正直氏校訂本及び和田英松佐藤球兩氏の增鏡詳解を照合せり。尙ほ假名遣を一定し、句讀を施し、間、假名を漢字に改め、上欄に簡潔なる註解を加ふる等、種々閱讀の便を圖りたるは既刊の諸書に異ならず。
本書の校訂に關して齋藤惇氏を煩はしたる事多し。玆に記して謝意を表す。

大正元年十一月

校訂者　武　笠　三

緒言

本書收むる所は、古來假名歷史の聯璧と推稱せらるゝ三鏡、即ち水鏡、大鏡、增鏡の三書なり。

水鏡は、神武帝より仁明帝まで、五十四代千五百年間の記事にして、往々、官撰の歷史に見えざる異聞を傳ふ。中山忠親(建久六年薨、六十五歲)の著す所なりといふ。大鏡は、文德帝の嘉祥三年より後一條帝の萬壽三年まで、百七十六年に涉れる紀傳體の歷史にして、宮廷貴紳の隱微を剔抉して直筆諱まず、寸鐵殺人の警句に富む。著者は、藤原爲業(崇德帝頃の人)なりといふ。增鏡は、壽永二年後鳥羽帝御即位より、後醍醐帝の元弘三年に至る百五十年間の事を記す。承久の亂、南北對立の顚末等、最も詳細を極め、行

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

增大水

鏡鏡鏡

全

